

平成 25 事業年度 業務実績報告書

第 11 期（平成 25 年 4 月 1 日から平成 26 年 3 月 31 日まで）

平成 26 年 6 月

独立行政法人日本芸術文化振興会

平成 25 事業年度業務実績報告書

目 次

I	国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためとるべき措置	
1	文化芸術活動に対する援助	1
2	伝統芸能の公開及び現代舞台芸術の公演	
	伝統芸能の公開	14
	現代舞台芸術の公演	82
	快適な観劇環境の形成	127
	広報・営業活動の充実	142
	劇場施設の使用効率の向上等	159
3	伝統芸能の伝承者の養成及び現代舞台芸術の実演家その他の関係者の研修	
	伝統芸能の伝承者の養成	163
	現代舞台芸術の実演家その他の関係者の研修	186
4	伝統芸能及び現代舞台芸術に関する調査研究の実施並びに資料の収集及び活用	
	伝統芸能に関する調査研究の実施並びに資料の収集及び活用	202
	現代舞台芸術に関する調査研究の実施並びに資料の収集及び活用	225
II	業務運営の効率化に関する目標を達成するためとるべき措置	
1	業務運営の効率化	239
III	予算	264
IV	その他主務省令で定める業務運営に関する事項	269

I 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するため
とるべき措置

文化芸術活動に対する援助

文化芸術活動に対する援助	p.1
— 助成金の交付	p.7
— 助成金交付事務の効率化等	p.9
— 芸術文化振興基金の管理運用	p.11
— 資金の受入拡充	p.11
— 助成に関する情報等の収集及び提供	p.12

1 文化芸術活動に対する援助

《中期計画の概要》

(1) 助成金の交付

ア 芸術家及び芸術団体等が実施する次に掲げる活動に対する助成金の交付

イ 助成金交付事務の効率化等

- ① 審査方法等選考に関する基準の策定及び事前公表
- ② 助成の成果等に対する評価等を踏まえた客観性・透明性の高い審査
- ③ 助成対象活動の実施状況の調査
- ④ 助成対象分野の現状等の調査
- ⑤ 地方公共団体との連携協力の推進
- ⑥ 情報通信技術等を活用した申請手続き等の合理化

ウ 芸術文化振興基金の管理運用

エ 外部資金の確保

オ 新たな審査・評価の仕組みについての検証、国際芸術交流支援事業の一元化を含む芸術文化振興のための助成事業の在り方の検討

(2) 助成に関する情報等の収集及び提供

《年度計画》

I 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためとるべき措置

1 文化芸術活動に対する援助

(1) 助成金の交付

ア 芸術文化振興基金（以下「基金」という。）の運用収入等を財源とする助成金の交付に関する計画

次に掲げる活動に対して助成金を交付する。

- ① 芸術家及び芸術団体が行う芸術の創造又は普及を図るための活動
 - (a) 現代舞台芸術の公演、伝統芸能の公開その他の活動
 - (b) 美術の展示、映像芸術の普及その他の活動
 - (c) 異なる芸術の分野の芸術家又は芸術に関する団体が共同して行う活動、特定の芸術の分野に分類することが困難な活動等
- ② 地域の文化の振興を目的として行う活動
 - (a) 文化会館、美術館その他の地域の文化施設において行う公演、展示その他の活動
 - (b) 伝統的建造物群、遺跡、民俗芸能その他の文化財を保存し、又は活用する活動
- ③ 文化に関する団体が行う文化の振興又は普及を図るための活動
 - (a) アマチュア、青少年等の文化団体が行う公演、展示その他の活動
 - (b) 文化財である工芸技術又は文化財の保存技術の復元、伝承その他文化財を保存する活動

イ 文化芸術振興費補助金（以下「補助金」という。）を財源とする助成金の交付に関する計画
次に掲げる活動に対して助成金を交付する。

- ① 我が国の舞台芸術の水準を向上させる牽引力となっているトップレベルの芸術団体が国内で実施する舞台芸術の創造活動
- ② 優れた日本映画の製作活動

ウ 助成金交付事務の効率化等

- ① 審査方法等に関する基準を策定し、ホームページ等で公表する。また、舞台芸術分野については、審査基準を事前に公表する。
- ② 助成対象活動について外部有識者、プログラムディレクター及びプログラムオフィサー等による公演等調査を行うとともに、補助金を財源とする助成金の舞台芸術分野については事後評価を実施する。

- ・ 公演等調査：400 件以上
- ③ 助成対象活動の実施状況の調査のため、職員による会計調査を実施するとともに、プログラムディレクター及びプログラムオフィサーが中心となって、助成対象団体と助成対象活動等について意見交換を実施する。
 - ・ 会計調査：90 件以上
- ④ 助成対象活動の公演等調査及び助成対象団体との意見交換等も踏まえ、助成対象分野の現状等について調査分析を行う。
- ⑤ 地域の文化振興等の活動について、応募書類の受付窓口及び推薦に係る業務等について地方公共団体と連携・協力して効率的に実施する。
- ⑥ 事務手続きの合理化を図るため、助成金交付事務に係る助成業務システムについて、応募書類の電子データによる受付等について検討する。

基金及び補助金の助成事業の交付申請書受理から交付決定までの期間について 35 日以下とする。

エ 基金の管理運用については、安全性に留意するとともに、安定した収益の確保によって継続的な助成が可能となるよう、資金内容及び経済情勢の把握に努め、振興会に設置する資金管理委員会において運用方針、金融商品等の検討を行い、効率的な方法により実施する。

オ 芸術文化振興基金賛助会制度及び社会貢献信託制度の周知を図り、芸術文化振興基金の受入拡充に努める。

また、東日本大震災に伴う被災地の復興支援を目的とした芸術文化復興支援基金による助成事業について、その周知を図りつつ、助成に必要な資金の確保に努める。

(2) 助成に関する情報等の収集及び提供

ア 文化芸術活動に対する援助の中核的拠点として、広く文化芸術活動に関する情報を収集し、その情報をデータベース化するとともに、ホームページ等を通じて提供する。

- ・ ホームページ目標アクセス件数：129,000 件

イ 振興会が実施する文化芸術活動に関する助成事業を周知するため、ホームページでの情報提供を充実させるとともに、助成対象活動の事例集を作成・配布する。

ウ 助成対象活動の募集に当たっては、芸術関係誌等への広告掲載及びホームページへの情報掲載を行うとともに、地方公共団体及び全国の公立文化施設等へポスター等を配布する。

エ 芸術団体等を対象とした助成対象活動の募集説明会について、東京、大阪に加え、他地域でも開催する。

《実績》

1. 助成金の交付

(1) 25年度助成金の交付実績

①芸術文化振興基金助成金（芸術文化振興基金の運用収入等を財源）

助成対象分野	交付件数	助成金交付額
芸術創造普及活動	296件	656,700千円
映像芸術創造活動	50件	113,100千円
地域文化振興活動	212件	267,900千円
文化振興普及団体活動	128件	92,000千円
合計	686件	1,129,700千円

②文化芸術振興費補助金による助成金（文化芸術振興費補助金を財源）

助成対象分野	交付件数	助成金交付額
トップレベルの舞台芸術創造事業	318件	3,105,700千円
映画製作への支援	53件	508,000千円
合計	371件	3,613,700千円

(2) 26年度助成対象活動の募集実績

①芸術文化振興基金助成金（芸術文化振興基金の運用収入等を財源）

助成対象分野	応募件数	採択件数	助成金交付予定額
芸術創造普及活動	751件	317件	701,300千円
映像芸術創造活動	54件	32件	57,600千円
地域文化振興活動	386件	230件	304,600千円
文化振興普及団体活動	218件	126件	108,900千円
合計	1,409件	705件	1,172,400千円

注：映像芸術創造活動のうち、国内映画祭等の活動の第2回募集分は含まれていない。

②文化芸術振興費補助金による助成金（文化芸術振興費補助金を財源）

助成対象分野	応募件数	採択件数	助成金交付予定額
トップレベルの 舞台芸術創造事業	442件	305件	3,128,000千円
映画製作への支援	50件	16件	146,000千円
合計	492件	321件	3,274,000千円

注：映画製作への支援の第2回募集分は含まれていない。

2. 助成金交付事務の効率化等

(1) 選考に関する基準の策定と公表

- 審査方法等に関する基準を策定し、ホームページ等で公表した。また、文化芸術振興費補助金による助成（トップレベルの舞台芸術創造事業）に係る26年度の審査基準に加え、新たに芸術文化振興基金に係る助成（現代舞台芸術創造普及活動、伝統芸能の公開活動）に係る審査基準を公表した。
- 助成対象活動について、専門委員、プログラムディレクター及びプログラムオフィサー等による公演等調査を行うとともに、補助金を財源とする助成金の舞台芸術分野については事後評価を試行した。

(2) 助成対象活動の調査

公演等調査：965件（目標：400件以上）（調査活動件数：965件）

会計調査：93件（目標：90件以上）（調査活動件数：281件）

合計：1,058件（調査活動件数1,246件）

- プログラムディレクター及びプログラムオフィサーが助成対象団体との間で助成対象活動等について意見交換を行うとともに、それを踏まえて助成対象分野の状況把握に努めた。

(3) 地方公共団体との協力

- 都道府県担当者向けの説明会を実施するとともに、都道府県経由で応募のあった活動については、各自治体担当者からのヒアリングを実施し、状況把握に努めた。

(4) 事務手続き等の簡素化・合理化

- 交付申請書受理から交付決定までの期間：21.2日（目標：35日以下）
芸術文化振興基金助成金 25年度実績：21.8日（目標：35日以下）
文化芸術振興費補助金による助成金 25年度実績：20.5日（目標：35日以下）

(5) 芸術文化活動に対する助成制度に関する調査分析

- 24年度に文化庁委託事業として実施した「芸術文化活動に対する助成制度に関する調査分析事業」を、25年度も継続的に実施した。25年度は、24年度に実施した調査の補足調査、調査結果の分析及び今後必要な調査に関する情報収集等を行った。

3. 芸術文化振興基金の管理運用

(1) 運用益1,712,737千円（当初計画 1,398,555千円、314,182千円の増）

(2) 利回り2.59%（当初計画 2.12%）

4. 資金の受入拡充

(1) 資金の受入拡充

「社会貢献寄付信託」及び「芸術文化振興基金賛助会員制度」による寄付金受入に向け環境を整備するとともに、広く広報活動を行った。

①寄付先への感謝状の贈呈及びホームページ等での広報

原則10万円を超える寄付(出えん金収入)者(団体)については、通常の礼状に加え感謝状を贈呈したほか、承諾を得た寄付者(団体)については、寄付者(団体)名をホームページで広報するなどの顕彰により、寄付金の増額に向けて取り組んだ。

・芸術文化振興基金への寄付：25年度実績11件785,000円

②「社会貢献寄付信託」の受入に向けた取組

三井住友信託銀行の「社会貢献寄付信託」の文化芸術分野の寄付先として、受入に必要な環境を整備するとともに、寄付受入に向け関係金融機関と連携し広報活動を行った。

③「芸術文化振興基金賛助会員制度」による寄付受入

「芸術文化振興基金賛助会員制度」の周知を図るとともに、寄付金受入に向け広報活動を行った。

(2) 芸術文化復興支援基金による助成

・東日本大震災における被災地の復興支援を目的とする芸術文化活動を支援するため、引き続き支援に必要な資金確保に向けて広報活動を行った。

・寄付金付き飲料自動販売機を本館大劇場に新たに設置したほか、3月歌舞伎公演においてチャリティーサイン会等を実施するなど、寄付金増に努めた。

・芸術文化復興支援基金：25年度実績 2,071,964円

5. 助成に関する情報等の収集及び提供

(1) ホームページの利便性の向上

・助成対象活動の実施状況をホームページで紹介する等、応募方法から活動事例の紹介まで、広く情報提供に努めた。

・25年度アクセス件数：141,800件(目標129,000件)

(2) 助成事業の周知

・助成事業に関する次のポスター・チラシを作成、配布した。

・助成団体に活動時配布・掲示してもらおう広報用ポスター、チラシ

・芸術文化復興支援基金のリーフレット、ポスター、チラシ

・芸術文化振興基金賛助会員制度に関するリーフレット

・助成事業の概要を紹介したパンフレット「基金の概要」を作成、配布した。

・助成対象活動の事例集を作成・配布した。

(3) 助成対象活動の募集

・26年度助成対象活動募集の広告については、舞台公演情報サイトやチケット販売サイト、検索エンジン等のホームページにおいて、26年度助成対象活動募集のバナー広告を新たに掲載するなど、募集の周知に努めた。(9月上旬～10月下旬)

・26年度助成対象活動募集案内チラシ及びポスターを都道府県、政令指定都市、公立文化施設、大学などに送付し、広報協力を依頼した。

・「日本芸術文化振興会ニュース」及び「文化庁月報」へ、芸術文化振興基金の概要、助成対象活動の募集案内や助成制度の概要など、広く助成活動に関する情報を掲載した(毎月)。

(4) 助成対象活動の募集説明会の開催

①東京都開催

・10月3日(木)：音楽、舞踊、演劇、伝統芸能・大衆芸能、美術等主として芸術団体等対象
会場：本館小劇場、参加数：256団体、324名

・10月4日(金)：地域文化振興活動、文化振興普及団体活動等都道府県担当者対象
会場：伝統芸能情報館レクチャー室、参加数：34都道府県、38名

・10月7日(月)：映画製作団体、映画祭等主催団体対象
会場：伝統芸能情報館レクチャー室、参加数：127団体、161名

②大阪府開催

・10月1日(火)：音楽、舞踊、演劇、伝統芸能・大衆芸能、美術等主として芸術団体等対象
会場：文楽劇場、参加数：147団体、190名

③北海道開催

・10月11日(金)：地域文化振興活動、文化振興普及団体活動等団体対象

会場：北海道立道民活動センター（かでの2・7）、参加数：30団体、53名

④徳島県開催（映画製作・アニメーション映画）

- ・ 10月17日（木）：地域文化振興活動、文化振興普及団体活動等団体対象

会場：徳島県郷土文化会館（あわぎんホール）、参加数：57団体、86名

【特記事項】

- ・ 23年度から順次配置しているプログラムディレクター及びプログラムオフィサーについて、25年度からは対象分野を拡大し、基金による助成についても助成対象活動の調査・分析を行った。また、文化芸術振興費補助金による助成金に係る活動のうち舞台芸術分野について、事後評価を試行的に導入した。さらに、公演等調査を行うとともに、助成対象団体との意見交換を通じて、幅広く助言等を行った。
- ・ 芸術文化復興支援基金のロビー等での募金活動を引き続き実施した。
- ・ 北海道及び四国（徳島県）での募集説明会を初めて開催した。

《数値目標の達成状況》

【公演等調査及び会計調査の実施状況】

公演等調査：実績965件／目標400件以上（達成度241.3%）

会計調査：実績93件／目標90件以上（達成度103.3%）

【交付決定に係る期間の効率化の達成状況】 実績21.2日／目標35日以内（達成度165.1%）

【芸術文化振興基金ホームページへのアクセス件数】 実績141,800件／目標129,000件（達成度109.9%）

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 文化芸術振興費補助金による助成（トップレベルの舞台芸術創造事業）に加え、新たに芸術文化振興基金による助成に係る活動のうち舞台芸術分野について、審査方法等に関する基準を事前に公表し、申請団体から好評を得た。
- ・ 23年度より開始した年間活動支援型の導入に伴う助成システムの見直しに合わせ、入力作業等の簡素化を図るなど、事務手続きの簡素化・合理化に努めた結果、交付決定までの期間について目標日数を達成することができた。
- ・ 助成活動について、ホームページを通じた幅広い情報提供に加え、募集について新たにインターネットを活用した広報を行った。また、昨年に引き続き地方でも説明会を開催し、北海道・四国（徳島県）では初めての開催となった。
- ・ 助成対象活動の調査・分析、事後評価の導入に向けた事後評価案作成に加え、公演等調査を行うとともに助成対象団体との意見交換を通じて団体の活動等について幅広く助言等を行った。事後評価に関しては、25年度試行的に導入し、26年度の本格的な導入に向けて検討を進めた。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・ 助成対象活動への応募件数が増えるよう、引き続き、広く広報活動を行うとともに、インターネットを活用した募集説明会の開催について検討し、個別相談会を充実する。
- ・ より安定的、継続的な助成が可能となるよう、資金の確保に向けて、多様な方策を検討していきたい。

《24年度評価への対応》

【評価】

（文科省評価委員会）

- ・ 助成事業については、今後、プログラムディレクター、プログラムオフィサーの配置による効果を明らかにし、広く国民に周知していくことが必要である。(①)
- ・ プログラムディレクター及びプログラムオフィサーを配置する等、助成対象事業に係る PDCA サイクルは強化されつつあるが、助成の目的に対し想定した効果が得られたかは、資料からは判断できない。いまだ、その成果が現状をどう変えるか見えてこないことから、今後は、その効果を明らかにし、広く国民に周知していくことが必要である。(①)
- ・ 今後は、募集説明会への参加の状況や、応募者の情報入手経路を分析するなど、公平性の観点から、チラシ等の紙媒体の配布、説明会の開催にとどまらず、制度のさらなる周知を実施すべきである。(③)

（振興会評価委員会）

- ・ 今後は、より客観性と透明性を確保するために、公演調査の審査基準を明示するとともに、集積した成果を助成決定の審査に具体的に生かせる仕組みを構築することが望ましい。(②)

- ・ 今後は、各地域で行われる活動にも目配りし、東京一極集中とならぬようプログラムディレクター、プログラムオフィサーの役割を生かし、情報提供等を更に促進させてほしい。(③)
- ・ 助成事業を周知させるための広報活動については、ホームページを活用した情報提供や助成対象活動の募集説明会が東京、大阪以外の地方でも行われたことを評価する。今後も説明会の開催地や回数の拡大を期待する。(③)
- ・ 24年度の助成は、交付件数、交付額ともに減少しており、こうした事実を社会に広く理解してもらうことも必要であろう。引き続き助成事業に関する広報の充実・拡大を積極的に進め、その動きの中で、振興会の活動 PR と新たな資金の受入拡充に向けた工夫と今後の多様な方策について検討を望みたい。(③)

【対応】

①プログラムディレクター・プログラムオフィサーの配置等による効果の検証・周知

プログラムディレクター及びプログラムオフィサーに関しては、助成対象団体等からの問合せに応じるため、芸術文化振興基金のホームページにおいて、氏名や連絡先を公表し、事業の周知に努めている。

今後は、制度の充実を図りつつ、その中で効果の把握及び検証方法について検討していきたい。

②公演等調査のより効果的な仕組みの検討

従来、公演等調査は、専門委員の労力の問題や予算の面から制約があり、専門委員1人当たり3～5件程度を依頼し実施してきたが、事後評価の導入に伴い、25年度より、特に国からの補助金によるトップレベルの舞台芸術創造事業については、専門委員が全ての助成対象活動を調査できるよう調査計画を策定している。また、同一の活動を、プログラムディレクター及びプログラムオフィサーも調査することとしており、複数の視点から調査を行うことにより客観性を確保している。

調査件数が増加することへの方策としては、専門委員としての任期が終了した有識者を「専門調査員」として委嘱し調査を行うことによって、文化芸術振興費補助金による助成対象事業はすべて、芸術文化振興基金による助成対象事業についてもできるだけ多くの公演活動を調査するようにしている。

また、有識者を「文化芸術活動調査員」として委嘱し、地方の実情を踏まえた調査を行っている。

上記のような取組を通じて、文化芸術活動への支援に係るPDCAサイクル確立に向けた体制整備に取り組んでいる。

③助成事業の周知・広報活動の充実

インターネットの普及状況に鑑み、25年度は、従来専門誌へ掲載していた助成対象活動の募集広告をインターネット広告に変更し、より幅広い層への広報に取り組んだ。

また、毎年度の助成対象活動の公表に加え、個々の助成事業の周知のため、代表的な助成対象活動の内容をまとめた助成対象活動事例集を年度ごとに作成し、芸術文化振興基金のホームページで公開するとともに、冊子による配布も併せて行っている。

さらに、芸術文化振興基金の地域の文化振興等の活動に関しては、従来は都道府県を通じて広報を行ってきたが、24年度は岩手県盛岡市、25年度は北海道札幌市及び徳島県徳島市に赴き、文化芸術団体に直接説明を行った。今後もこのような機会を拡充していきたい。

<1>助成金の交付

1. 25年度助成金の交付実績

(1) 芸術文化振興基金助成金（芸術文化振興基金の運用収入等を財源）

助成対象分野		交付件数	助成金交付額
芸術創造普及活動	現代舞台芸術創造普及活動	233 件	573,100 千円
	音 楽	44 件	187,900 千円
	舞 踊	43 件	70,000 千円
	演 劇	146 件	315,200 千円
	伝統芸能の公開活動	39 件	48,200 千円
	美術の創造普及活動	8 件	15,300 千円
	多分野共同等芸術創造活動	16 件	20,100 千円
	小 計	296 件	656,700 千円
映像芸術創造活動	国内映画祭等の活動	50 件	113,100 千円
	国内映画祭	36 件	99,700 千円
	日本映画上映活動	14 件	13,400 千円
	小 計	50 件	113,100 千円
地域文化振興活動	地域文化施設公演・展示活動	183 件	249,000 千円
	文化会館公演活動	104 件	114,500 千円
	美術館展示活動	79 件	134,500 千円
	歴史的集落・町並み、文化的景観 保存活用活動	9 件	7,100 千円
	民俗文化財の保存活用活動	20 件	11,800 千円
	小 計	212 件	267,900 千円
文化振興普及団体活動	アマチュア等の文化団体活動	120 件	79,400 千円
	伝統工芸技術・文化財保存技術の 保存伝承等活動	8 件	12,600 千円
	小 計	128 件	92,000 千円
合 計		686 件	1,129,700 千円

(2) 文化芸術振興費補助金による助成金（文化芸術振興費補助金を財源）

助成対象分野		交付件数	助成金交付額
トップレベルの 舞台芸術創造事業	音 楽	120 件	1,810,900 千円
	舞 踊	35 件	411,800 千円
	演 劇	119 件	743,200 千円
	伝統芸能	31 件	52,600 千円
	大衆芸能	13 件	87,200 千円
	小 計	318 件	3,105,700 千円
映画製作への支援	劇映画	23 件	350,000 千円
	記録映画	19 件	65,000 千円
	アニメーション映画	11 件	93,000 千円
	小 計	53 件	508,000 千円
合 計		371 件	3,613,700 千円

2. 26年度助成対象活動の募集実績

(1) 芸術文化振興基金（芸術文化振興基金の運用収入等を財源）

助成対象分野		応募件数	採択件数	助成金交付予定額
芸術創造普及活動	現代舞台芸術創造普及活動	582 件	246 件	602,400 千円
	音 楽	114 件	47 件	191,800 千円

	舞 踊	96 件	41 件	72,500 千円
	演 劇	372 件	158 件	338,100 千円
	伝統芸能の公開活動	88 件	42 件	55,500 千円
	美術の創造普及活動	25 件	12 件	20,000 千円
	多分野共同等芸術創造活動	56 件	17 件	23,400 千円
	小 計	751 件	317 件	701,300 千円
映像芸術創造活動	国内映画祭等の活動	54 件	32 件	57,600 千円
	国内映画祭	35 件	22 件	47,500 千円
	日本映画上映活動	19 件	10 件	10,100 千円
	小 計	54 件	32 件	57,600 千円
地域文化振興活動	地域文化施設公演・展示活動	341 件	192 件	273,400 千円
	文化会館公演活動	211 件	121 件	123,400 千円
	美術館等展示活動	130 件	71 件	150,000 千円
	歴史的集落・町並み、文化的景観保存活用活動	16 件	12 件	10,700 千円
	民俗文化財の保存活用活動	29 件	26 件	20,500 千円
	小 計	386 件	230 件	304,600 千円
文化振興普及団体活動	アマチュア等の文化団体活動	202 件	116 件	93,100 千円
	伝統工芸技術・文化財保存技術の保存伝承等活動	16 件	10 件	15,800 千円
	小 計	218 件	126 件	108,900 千円
合 計		1,409 件	705 件	1,172,400 千円

注：映像芸術創造活動には、第2回募集分は含まれていない。

(2) 文化芸術振興費補助金による助成金（文化芸術振興費補助金を財源）

助成対象分野		応募件数	採択件数	助成金交付予定額
トップレベルの 舞台芸術創造事業	音 楽	144 件	114 件	1,777,000 千円
	舞 踊	44 件	31 件	409,000 千円
	演 劇	191 件	116 件	793,000 千円
	伝統芸能	42 件	32 件	57,000 千円
	大衆芸能	21 件	12 件	92,000 千円
	小 計	442 件	305 件	3,128,000 千円
映画製作への支援	劇映画	27 件	7 件	120,000 千円
	記録映画	17 件	6 件	21,000 千円
	アニメーション映画	6 件	3 件	5,000 千円
	小 計	50 件	16 件	146,000 千円
合 計		492 件	321 件	3,274,000 千円

注：映画製作への支援には、第2回募集分は含まれていない。

《自己点検評価》

- 良かった点・特色ある点
 - ・ 前年度に引き続き、年度開始前に助成対象活動の決定を行うことができた。
 - ・ 説明会等を開催し助成事業の概要や制度について周知するとともに、あらゆる機会を通じて助成事業に関する広報活動を行った。特に、地域文化振興活動及び文化振興普及団体活動に関しては、道県とも協力し、北海道及び徳島県において、団体向け説明会を開催した。
- 見直し又は改善を要する点
 - ・ アマチュア等の文化団体活動に関しては、助成金交付要望書等の作成に不慣れな団体が多いことから、特に採択された助成対象団体に対しては、事務手続きに関する説明会等の実施などを検討する必要がある。

＜ 2 ＞助成金交付事務の効率化等

1. 選考に関する基準の策定と公表

(1) 26年度助成対象活動の審査状況

芸術文化振興基金運営委員会及び4部会、13専門委員会において、以下のとおり審査を行った。

- ① 芸術文化振興基金運営委員会
第32回：7月16日、第33回：9月11日、第34回：1月31日、第35回：3月18日
- ② 舞台芸術等部会（1回開催・3月）
 - ・音楽専門委員会（3回開催・8月、12月、2月）
 - ・舞踊専門委員会（3回開催・8月、12月、2月）
 - ・演劇専門委員会（4回開催・8月（合同）、12月（合同）、2月（第1分科会1回、第2分科会1回））
 - ・伝統芸能・大衆芸能専門委員会（3回開催・8月、11月、2月）
 - ・美術専門委員会（2回開催・11月、2月）
 - ・多分野共同等専門委員会（2回開催・12月・2月）
- ③ 映像芸術部会（1回開催・3月）
 - ・劇映画専門委員会（2回開催・12月、2月）
 - ・記録映画専門委員会（2回開催・12月、2月）
 - ・アニメーション映画専門委員会（2回開催・12月、2月）
 - ・映画祭等専門委員会（2回開催・12月、2月）
- ④ 地域文化・文化団体活動部会（1回開催・3月）
 - ・地域文化活動専門委員会（2回開催・11月、2月）
 - ・文化団体活動専門委員会（2回開催・11月、2月）
- ⑤ 文化財部会（1回開催・3月）
 - ・文化財保存活用専門委員会（2回開催・11月、2月）

○審査経過概要

9月11日	第33回芸術文化振興基金運営委員会を開催し、25年度の助成対象活動募集案内の内容等を了承。
11月中旬～12月中旬	各専門委員会において、事前審査及び合議審査に先立ち、「専門委員会における審査の方法等について」を審議、決定。
12月下旬～2月下旬	各専門委員会による応募活動1件ごとの事前審査。
1月31日	第34回芸術文化振興基金運営委員会を開催し、応募状況についての報告及び助成金の分野別配分予算案について審議、決定。
2月上旬～3月上旬	各専門委員会において、事前審査の集計結果をもとに、合議審査により、助成金交付要望書の審査及び助成対象活動を選定。
3月上旬～3月中旬	各部会において助成対象活動の採否及び助成金交付予定額の審議。
3月18日	第35回芸術文化振興基金運営委員会を開催し、助成対象活動及び助成金交付予定額について審議、決定。

(2) 選考に関する基準の策定と公表

- ・文化芸術振興費補助金による助成（トップレベルの舞台芸術創造事業）に係る26年度の審査基準に加え、新たに芸術文化振興基金による助成（現代舞台芸術創造普及活動、伝統芸能の公開活動）に係る審査基準を公表した。
- ・26年度の芸術文化振興基金助成対象活動として内定した活動について、活動名、助成金交付予定額、審査にあたった委員の氏名、審査の方法等について公表した（26年3月27日）。

(3) 25年度助成対象活動の決定に関する公表状況

- ・第1回募集分について、芸術文化振興基金助成対象活動は25年3月27日付けで、また、文化芸術振興費補助金による助成対象活動については、予算成立後の25年5月16日付けでホームページ等において公表した。
- ・映画に関する第2回募集分については、芸術文化振興基金助成対象活動及び文化芸術振興費補助金による助成対象活動ともに25年9月19日付けでホームページ等において公表した。
- ・また、併せて助成対象活動一覧のほか審査経過等も含めホームページ等で公表した。

2. 助成対象活動の調査

(1) 助成対象活動に対する調査

区 分	実 績
公演等調査	965 件 (調査活動 965 件) (目標：400 件以上)
会計調査	93 件 (調査活動 281 件) (目標：90 件以上)
合 計	1,058 件 (調査活動 1,246 件)

(2) プログラムディレクター及びプログラムオフィサー等による審査・評価等

- ・ 当振興会が行う文化芸術活動に対する助成事業をより効果的なものとするため、23年度より順次設置したプログラムディレクター及びプログラムオフィサーにより、審査基準案の作成、助成対象活動の調査・分析、公演調査の実施及び助成対象団体との意見交換等を行った。
- ・ 25年度からは対象分野を拡大し、芸術文化振興基金による助成に係る舞台芸術分野についても専門的な知識や調査研究に基づいて助言、情報提供等を行った。
- ・ 文化芸術振興費補助金による助成金の舞台芸術分野について、事後評価を試行的に導入し、26年度の本格的な導入に向けて検討を進めた。

3. 地方公共団体との協力

都道府県担当者向けの説明会を実施するとともに、都道府県経由で応募のあった活動については、各自治体担当者からのヒアリングを実施し、状況把握に努めた。

4. 事務手続き等の簡素化・合理化

(1) 応募書類の電子データによる受付等についての検討

- ・ 事務手続きの合理化を図るため、応募書類の電子データによる受付等について検討を開始した。
- ・ 既に電子データによる受付等を実施している他団体について調査を行い、実施の可能性について検討を始めた。

(2) 助成金の交付申請書受理から交付決定までの期間の短縮

区 分	実 績	目 標
芸術文化振興基金助成金	21.8 日	35.0 日
文化芸術振興費補助金による助成金	20.5 日	35.0 日
全 体	21.2 日	35.0 日

5. 芸術文化活動に対する助成制度に関する調査分析

24年度に文化庁委託事業として実施した「芸術文化活動に対する助成制度に関する調査分析事業」を、25年度も継続的に実施した。25年度は、24年度に実施した調査の補足調査、調査結果の分析及び今後必要な調査に関する情報収集等を行った。

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 公演等調査については、プログラムディレクター及びプログラムオフィサーの参加、各専門委員会の委員の積極的な協力を得て、調査を進めることができた。その結果、ほとんどの助成活動が内容面において適正に実施されていることを確認することができた。調査内容の充実にも努めるとともに、併せて実施件数の増加を図ることができ、結果、目標件数を達成することができた。
- ・ 芸術文化振興基金運営委員会、部会及び専門委員会の委員は各分野の専門家等外部の有識者から選任しており、助成対象活動の審査にあたり、客観的・専門的な見地から広範な審査を行うことができた。

- ・ 26年度助成対象活動の審査に当たっては、プログラムディレクター及びプログラムオフィサーによる専門的見地に立った審査資料を準備することにより、より実情に即した公正な審査の実施に努めた。
 - ・ 審査手続き等に関する透明性を確保するため、前年に引き続き助成金交付要綱や審査基準等を募集案内や芸術文化振興基金ホームページ等により公表した。特に、文化芸術振興費補助金事業（トップレベルの舞台芸術創造事業）に加え、新たに芸術文化振興基金の舞台芸術分野についても、事前に審査基準を公表し、申請団体の好評を得た。
 - ・ 事後評価の試行的導入については、舞台芸術分野の各分野の専門委員2人及びプログラムオフィサー2人によるワーキンググループを組織し、事後評価の実施結果についての見直しを行った。このことにより、事後評価の実施に関する課題が明らかになり、26年度の本格的導入に向けた検討が進んだ。
- 見直し又は改善を要する点
- ・ 今後とも、効率的かつ効果的な助成事業の実施と、それに伴う業務の効率化を図る観点から、組織体制はじめ不断の見直しを行い、助成の仕組みと体制の整備を検討していくこととしたい。

< 3 > 芸術文化振興基金の管理運用

- (1) 運用益 1,712,737 千円（当初計画 1,398,555 千円、314,182 千円の増）
- (2) 利回り 2.59%（当初計画 2.12%）

基金の管理運用については、安全性を重視するとともに安定した収益の確保によって継続的な助成が可能となるよう、資金内容及び経済情勢の正確な把握に努めた。

平成20年4月に設置した資金管理委員会において、運用の基本的考え方を定めるとともに金融商品・再運用先等の検討を行うことにより、低金利下においても必要とする運用益が得られるよう、リスクとリターンを考慮しながら引き続き効率的な管理運用に努めた。

《自己点検評価》

- 良かった点・特色ある点
- ・ 外国債及び長期性預金の運用収入について、年度計画策定時に想定していた為替水準に比して円安傾向で推移したことにより年度計画予算での見積額を上回った。また、再運用に当たっては安定した収入を確保するとともに資産の安全性を重視し、少しでも有利な運用を行えるよう多くの金融機関から情報収集を行った。

< 4 > 資金の受入拡充

1. 資金の受入拡充

- (1) 寄付先への感謝状の贈呈並びにホームページ等での広報
原則10万円を超える寄付(出えん金収入)者(団体)については、通常の礼状に加え感謝状を贈呈したほか、承諾を得た寄付者(団体)については、寄付者(団体)名をホームページで広報するなどの顕彰により、寄付金の増額に向けて取り組んだ。
芸術文化振興基金への寄付：25年度実績11件785,000円
(社会貢献寄付信託2件120,000円・賛助会員3件25,000円含む)
- (2) 「社会貢献寄付信託」の受入に向けた取組
三井住友信託銀行の「社会貢献寄付信託」の文化芸術分野の寄付先として、その受入に必要な環境を整備するとともに、寄付受入に向け関係金融機関と連携し広報活動を行った。
- (3) 「芸術文化振興基金賛助会員制度」による寄付受入
「芸術文化振興基金賛助会員制度」の周知を図るとともに、寄付金受入に向け広報活動を行った。

2. 芸術文化復興支援基金による助成

- ・ 東日本大震災における被災地の復興支援を目的とする芸術文化活動の支援に必要な資金確保に向け、広報活動を行った。承諾を得た寄付者(団体)については、寄付者(団体)名をホームページで広報するなど募金活動に努めた。
- ・ 寄付金付き飲料自動販売機を本館大劇場ロビーに新たに設置したほか、3月歌舞伎公演においてチャリティーサイン会・押限チャリティーオークションによる募金活動を行うなど、寄付金増に努めた。

- ・芸術文化復興支援基金：25年度実績 2,071,964円
(寄付金付き飲料自動販売機における寄付金(6～9月分)20,510円(販売実績2,051本)を含む ※10～3月分については委託業者からの入金が26年度に行われたため26年度寄付金に計上)

《自己点検評価》

- 良かった点・特色ある点
 - ・ 芸術文化復興支援基金については、国立劇場内だけではなく、他の団体が行う公演にあわせて募金活動を行うなど、他団体の協力も得ながら、広く募金活動を実施した。
 - ・ 寄付金付き飲料自動販売機による寄付金については、継続的、安定的に寄付金が集まっている。チャリティーサイン会、押限チャリティーオークションについては、寄付金の増加につながるとともに参加者の好評を博した。
- 見直し又は改善を要する点
 - ・ より安定的、継続的な助成が可能となるよう、寄付金の増額に向けて、広報活動も含め、多様な方策を検討していきたい。
 - ・ 芸術文化復興支援基金については、引き続き、資金の確保に努めるとともに、助成の開始時期及び具体的な助成方法等について、今後検討を行う。

＜5＞助成に関する情報等の収集及び提供

1. ホームページの利便性の向上
 - ・ 25年度アクセス件数：141,800件（目標129,000件）
 - ・ ホームページの構成・内容を随時見直し、利便性の向上を図っている。
2. 助成事業の周知
 - ・ 基金助成事業に関するチラシの他、芸術文化復興支援基金及び芸術文化振興基金賛助会員制度に関するリーフレット等を作成・配布するなど、助成事業に関し幅広く広報活動を行った。
 - ①助成団体から活動時に配布してもらう広報用チラシの配布（308件、279,180枚）
 - ②芸術文化復興支援基金リーフレット、ポスター、チラシの作成・配布
 - ③芸術文化振興基金賛助会員制度に関するリーフレットの作成・配布
 - ・ 当振興会が行っている助成事業の概要を紹介したパンフレット「基金の概要」を作成・配布した。
 - ・ 助成団体に、活動時会場等に掲出してもらう広報用ポスターを作成・配付(238件、662枚)した。なお、広報用チラシ・ポスターについては25年度芸術文化振興基金助成対象活動採択団体すべてに送付し、活動実施時の広報に協力を依頼した。
 - ・ 24年度の助成対象活動の事例集（芸術文化振興基金及び文化芸術振興費補助金による助成25活動を紹介した冊子）を作成・配布した。
3. 助成対象活動の募集
 - ・ 26年度助成対象活動募集案内チラシ及びポスターを都道府県、政令指定都市、公立文化施設、大学などに送付し、広報協力を依頼した。
 - ・ 舞台公演情報サイトやチケット販売サイト、検索エンジン等のホームページにおいて、26年度助成対象活動募集のバナー広告を新たに掲載した。（9月中旬～10月下旬）
 - ・ 「日本芸術文化振興会ニュース」及び「文化庁月報」に、基金の概要、助成対象活動の募集案内や助成制度の概要など、広く助成活動に関する情報を掲載した。（毎月）
4. 助成対象活動の募集説明会の開催
 - ①東京都開催
 - ・ 10月3日(木)：音楽、舞踊、演劇、伝統芸能・大衆芸能、美術等主として芸術団体等対象
会場：本館小劇場、参加数：256団体、324名
 - ・ 10月4日(金)：地域文化振興活動、文化振興普及団体活動等 都道府県担当者対象
会場：伝統芸能情報館レクチャー室、参加数：34都道府県、38名

- ・10月7日(月)：映画製作団体、映画祭等主催団体対象
会場：伝統芸能情報館レクチャー室、参加数：127団体、161名

②大阪府開催

- ・10月1日(火)：音楽、舞踊、演劇、伝統芸能・大衆芸能、美術等主として芸術団体等対象
会場：文楽劇場、参加数：147団体、190名

③北海道開催

- ・10月11日(金)：地域文化振興活動、文化振興普及団体活動等団体対象
会場：北海道立道民活動センター（かでの2・7）、参加数：30団体、53名

④徳島県開催（映画製作・アニメーション映画）

- ・10月17日(木)：地域文化振興活動、文化振興普及団体活動等団体対象
会場：徳島県郷土文化会館（あわぎんホール）、参加数：57団体、86名

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ ホームページにおいて、助成活動募集案内や交付申請等申請用データのダウンロードのみならず、21年度から公開されている民間助成団体情報データベース、助成事例集の公開といった情報提供を積極的に進め、文化芸術に対する援助の拠点にふさわしい情報発信を促進することができた。
- ・ 26年度助成対象活動募集の広告を新たにインターネットにおいてバナー広告として掲載し、助成事業について広く周知することができた。
- ・ 助成事業の周知、助成対象活動の募集など広報面では、広報用ポスター、振興会広報誌での広報や社会教育関係誌への広告掲載等、一層の強化を図った。併せて、東京、大阪以外に北海道、徳島県で助成活動募集説明会を開催する等、現地に赴いての広報・周知にも一層努めるとともに、その分野に特化した説明会を開催するなど、広く助成対象活動の周知に努めた。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・ 助成対象活動への応募件数が増えるよう、引き続き、広く広報活動を行うとともに、インターネットを活用した募集説明会の開催について検討し、個別相談会の充実を図りたい。
- ・ より安定的、継続的な助成が可能となるよう、寄付金の増額に向けて多様な方策を検討していきたい。

I 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するため
とるべき措置

伝統芸能の公開及び現代舞台芸術の公演

伝統芸能の公開

- 伝統芸能の公開 p.14
 - 歌舞伎 p.23
 - 文楽 p.28
 - 舞踊・邦楽・雅楽・声明・民俗芸能等 p.33
 - 舞踊 p.36
 - 邦楽 p.37
 - 雅楽 p.40
 - 声明 p.41
 - 民俗芸能 p.42
 - 特別企画 p.43
 - 大衆芸能 p.47
 - 定席公演（上席・中席） p.50
 - 若手新人公演（花形演芸会） p.51
 - 新春国立名人会／国立名人会 p.52
 - 特別企画公演 p.54
 - 師走浪曲名人会／浪曲錬声会／上方演芸特選会 p.55
 - 能楽 p.57
 - 定例公演 p.59
 - 普及公演 p.60
 - 企画公演 p.61
 - 組踊等沖縄伝統芸能 p.65
 - 演目の拡充 p.72
 - 青少年等を対象とした伝統芸能の公開 p.74
 - 伝統芸能の公開に際しての留意事項等 p.78

2-(1) 伝統芸能の公開

《中期計画の概要》

(1) 伝統芸能の公開

- ア 歌舞伎公演 年間 7 公演程度
- イ 文楽公演 年間 10 公演程度
- ウ 舞踊・邦楽・雅楽・声明・民俗芸能等公演 年間 21 公演程度
- エ 大衆芸能公演 年間 64 公演程度
- オ 能楽公演 年間 51 公演程度
- カ 組踊等沖縄伝統芸能公演 年間 30 公演程度

(3) 青少年等を対象とした公演

- ア 青少年を対象とした公演を年間 6 公演程度実施、社会人や親子を対象とする入門企画の実施、各公演等の連携協力の強化

(4) 伝統芸能の公開及び現代舞台芸術の公演の実施に際しての留意事項等

- ア 適切な鑑賞者数の目標設定
- イ 外部専門家等の意見聴取、アンケート調査の実施
- ウ 伝統芸能の保存振興の中核的拠点としての公演等の実施
 - ① 国、地方公共団体、芸術団体、企業等との連携協力
 - ② 各地の文化施設等における公演等
 - ③ 国等との連携協力による公演等
- エ 国立劇場開場 50 周年記念公演等の各種記念事業の実施

《年度計画》

2 伝統芸能の公開及び現代舞台芸術の公演

(1) 伝統芸能の公開

- ア 伝統芸能の保存と振興を図るため、中期計画の方針に従い、別表 1 のとおり主催公演を実施する。
- イ 演目の拡充
 - ① 歌舞伎について、平成 17 年度に作成した「復活上演候補演目一覧」の見直しを継続するとともに、「国立劇場文芸研究会」において、上演候補台本準備稿の作成作業を進める。
また、歌舞伎の新作脚本募集について、周知及び応募受付を行う。なお、選考及び表彰は平成 26 年度に行う予定。
 - ② 文楽について、廃絶演目の復曲作業を進めるとともに、上演に向けた準備作業を行う。
 - ③ 大衆芸能の新作脚本募集について、「浪曲」の作品を募集し、選考及び表彰を行う。
 - ④ 能楽について、国立能楽堂開場 30 周年記念に当たり、上演機会が少ない大曲・秘曲の上演や新作能の委嘱制作による上演を行う。また、他の能楽堂で上演された優れた新作・復曲作品を上演する。
 - ⑤ 組踊等沖縄伝統芸能について、国立劇場おきなわ開場 10 周年記念に当たり、上演機会が少ない優れた演目の上演や、古典の様式を踏まえた新作組踊の上演を行う。

(3) 青少年等を対象とした公演

- ア 伝統芸能を次世代に伝え、新たな観客層の育成を図るため、主に青少年を対象とした公演を別表 3 のとおり実施するほか、社会人や親子を対象とした入門企画を別表 4 のとおり実施する。実施に当たっては、各公演等の連携協力を強化するなど、その充実を図る。

(4) 伝統芸能の公開及び現代舞台芸術の公演の実施に際しての留意事項

- ア 外部専門家等の意見を聴取するとともに、観客へのアンケート調査を適宜実施し、公演事業に反映させる。
- イ 我が国における伝統芸能の保存振興又は現代舞台芸術の振興普及の中核的拠点として、中期計画の方針に従い、次のとおり公演等を実施する。
 - ① 共催、受託などによる公演等を別表 5 のとおり実施する。
 - ② 各地の文化施設等における公演等を別表 6 のとおり実施する。
 - ③ 国際文化交流の進展に寄与する公演等を別表 7 のとおり実施する。

1. 公演実績

分野名	公演数 劇場	区分	回数	日数	入場者数	入場率	総席数
歌舞伎	7 公演	実績	212 回	165 日	225,019 人	(69.9%)	321,952 人
	本館大劇場	計画	213 回	168 日	223,290 人	(69.0%)	323,760 人
文楽	10 公演	実績	371 回	176 日	178,943 人	(73.5%)	243,337 人
	本館小劇場、文楽劇場	計画	371 回	176 日	169,850 人	(69.5%)	244,357 人
舞踊・邦楽・雅楽・声 明・民俗芸能等	21 公演	実績	32 回	24 日	16,575 人	(71.3%)	23,231 人
	本館大小劇場、文楽劇場	計画	32 回	24 日	18,500 人	(79.6%)	23,231 人
舞踊	5 公演	実績	9 回	6 日	4,318 人	(68.8%)	6,278 人
	本館大小劇場、文楽劇場	計画	9 回	6 日	4,460 人	(71.0%)	6,278 人
邦楽	6 公演	実績	9 回	8 日	3,356 人	(61.3%)	5,473 人
	本館小劇場、文楽劇場	計画	9 回	8 日	4,560 人	(83.3%)	5,473 人
雅楽	2 公演	実績	3 回	2 日	2,293 人	(82.2%)	2,790 人
	本館大小劇場	計画	3 回	2 日	2,550 人	(91.4%)	2,790 人
声明	2 公演	実績	3 回	2 日	2,394 人	(88.7%)	2,700 人
	本館大小劇場	計画	3 回	2 日	2,450 人	(90.7%)	2,700 人
民俗芸能	2 公演	実績	4 回	2 日	1,499 人	(63.5%)	2,360 人
	本館小劇場	計画	4 回	2 日	1,960 人	(83.1%)	2,360 人
特別企画	4 公演	実績	4 回	4 日	2,715 人	(74.8%)	3,630 人
	本館大小劇場、文楽劇場	計画	4 回	4 日	2,520 人	(69.4%)	3,630 人
大衆芸能	64 公演	実績	316 回	288 日	50,154 人	(54.8%)	91,587 人
	演芸場、文楽劇場、 文楽劇場小ホール	計画	313 回	288 日	52,370 人	(57.7%)	90,687 人
能楽	51 公演	実績	61 回	56 日	36,224 人	(94.7%)	38,247 人
	能楽堂	計画	61 回	56 日	36,143 人	(94.5%)	38,247 人
小計	153 公演	実績	992 回	709 日	506,915 人	(70.6%)	718,354 人
		計画	990 回	712 日	500,153 人	(69.4%)	720,282 人
組踊等沖縄伝統芸能	29 公演	実績	40 回	37 日	15,224 人	(67.8%)	22,454 人
	国立劇場おきなわ大小劇場	計画	43 回	39 日	15,745 人	(64.9%)	24,272 人
総合計	182 公演	実績	1,032 回	746 日	522,139 人	(70.5%)	740,808 人
		計画	1,033 回	751 日	515,898 人	(69.3%)	744,554 人

- 1) 3月歌舞伎公演「菅原伝授手習鑑―車引―」「處女翫浮名横櫛―切られお富―」は、政府主催「東日本大震災三周年追悼式」開催のため、3月10日（月）、11日（火）を休演とした。
- 2) 国立劇場おきなわの10月民俗芸能公演「道の島々から」は、台風24号接近の影響により全1回の公演を中止した。
- 3) 国立劇場おきなわ10月・11月普及公演「生徒のための組踊鑑賞教室『万歳敵討』」は、台風27号接近により全8回のうち2回を中止した。

2. 演目の拡充

(1) 復活上演候補演目の上演候補台本準備稿の作成作業

25年度新たに、上演台本の補綴・執筆を行う国立劇場文芸研究会を設置した。上演用準備台本の対象作品として、復活上演候補演目の中から3作品を選定し、26年度の台本作成に向けて補綴作業を進め、内容を検討した。また、復活上演候補作品調査検討委員会において、従来の「復活上演候補作品一覧」を、今後の上演用準備台本の対象候補作品の一覧として見直し、検討を重ねた。さらに、委員より、舞踊の候補演目における台本準備稿の進捗状況の報告や新規の候補作品に関する情報の提供を受けた。

(2) 歌舞伎の新作脚本募集

25年10月から26年3月末まで応募を受け付けた。ポスターの掲示やチラシの配布、インターネットの活用など、広報活動を見直し、募集の周知を工夫した。応募総数は166篇。なお、選考及び表彰は26年度に実施する。

(3) 文楽における復曲等の上演準備作業

- ・ 文楽公演における上演可能な演目の拡大をめざす文楽古典演目の復活準備事業の一環として、23年度に復曲され、素浄瑠璃として試演を重ねた「大塔宮囃鎧」を、本館12月文楽公演において、人形入りで121年ぶりに復活上演した。
- ・ 文楽劇場では、三味線の朱を基に「蘭奢待新田系図」の「幸内住家の段」の復曲作業を進めた。また、26年度夏休み文楽特別公演第1部「親子劇場」での上演に向けて、小佐田定雄氏に新作文楽「かみなり太鼓」の台本作成を依頼した。

(4) 大衆芸能の新作脚本募集

25年度は「浪曲」部門の脚本を8月15日より募集し、8月31日に締め切った(応募総数50篇)。1月22日に選考会を開催し、佳作2篇、財団法人清栄会による奨励賞1篇が決定した。

佳作「亀の筆跡」山田浩康、「虚無僧花筐」笹井邦平、清栄会奨励賞「ザナバル伝より馬頭琴の伝説」渡辺隆宏

(5) 能楽における上演機会が少ない大曲・秘曲、新作及び復曲の上演

- ・ 4月普及公演 能「観阿弥時代の自然居士」（古演出復元）
- ・ 4月特別企画公演 新作 スーパー能「世阿弥」（初演）
- ・ 5月特別企画公演 能「関寺小町」（国立能楽堂初演）
- ・ 6月企画公演 新演出 能「世阿弥自筆本による雲林院」（能を再発見する―業平のゆくえ―）
- ・ 9月国立能楽堂開場30周年記念公演 「翁」・狂言「庵の梅」
- ・ 10月企画公演 復曲能「鶴羽」
- ・ 10月企画公演 能「融 十三段之舞」（国立能楽堂初演）
- ・ 11月特別企画公演 能「道成寺 古式」
- ・ 12月特別企画公演 狂言「釣狐」
- ・ 12月特別企画公演 狂言「太鼓負」（国立能楽堂初演）
- ・ 1月企画公演 能「呉服」（古演出復元）・仕舞「玉水」
- ・ 2月企画公演 新演出 能「藤戸」（能を再発見する―供養の場に残る老母―）

(6) 組踊等沖縄伝統芸能における新作組踊等の上演

- ・ 7月企画公演 新作組踊「伊野波節異聞」・「平敷屋朝敏」
- ・ 8月企画公演 喜劇「ペーちゃんの恋人～モリエール『守銭奴』より～」
- ・ 1月10周年記念特別公演 歌舞劇「今日ぬ誇らしやや」

3. 青少年等を対象とした伝統芸能の公開

(1) 主に青少年を対象とした公演

公演名		劇場	期間	区分	回数	日数	入場者数	入場率	総席数	
歌舞伎	6 月鑑賞教室 解説「歌舞伎のみかた」、「新歌舞伎十八番の内 紅葉狩」	本館 大劇場	6/2(日)～ 24(月)	実績	46 回	23 日	56,549 人	(80.9%)	69,920 人	
				計画	46 回	23 日	49,820 人	(71.3%)	69,920 人	
	7 月鑑賞教室 解説「歌舞伎のみかた」、「芦屋道満大内鑑 —葛の葉—」		実績	44 回	22 日	64,108 人	(95.9%)	66,880 人		
			計画	44 回	22 日	60,980 人	(91.2%)	66,880 人		
文楽	12 月文楽鑑賞教室「団子売」、「解説 文楽の魅力」、「菅原伝授手習鑑」	本館 小劇場	12/4(水)～ 16(月)	実績	24 回	13 日	13,146 人	(99.1%)	13,272 人	
				計画	24 回	13 日	12,870 人	(97.0%)	13,272 人	
	6 月文楽鑑賞教室「日高川入相花王」、解説「文楽へようこそ」、「絵本太功記」	文楽劇場	6/7(金)～ 20(木)	実績	28 回	14 日	16,461 人	(80.4%)	20,468 人	
				計画	28 回	14 日	19,000 人	(92.8%)	20,468 人	
能楽	6 月能楽鑑賞教室 解説「能楽のたのしみ」、狂言「清水」、能「黒塚」	能楽堂	6/24(月)～ 28(金)	実績	10 回	5 日	6,123 人	(97.7%)	6,270 人	
				計画	10 回	5 日	5,900 人	(94.1%)	6,270 人	
組踊	「生徒のための組踊鑑賞教室『万歳敵討』」	国立劇場 おきなわ 大劇場	10/24(木)～ 25(金)	実績	6 回	3 日	2,008 人	(57.9%)	3,468 人	
			11/14(木)～ 15(金)	計画	8 回	4 日	3,468 人	(75.0%)	4,624 人	
鑑賞教室 合計				6 公演	実績	158 回	80 日	158,395 人	(87.9%)	180,278 人
					計画	160 回	81 日	152,038 人	(83.8%)	181,434 人

(2) 社会人や親子を対象とした入門企画・公演

(本館)

- ・ 6 月歌舞伎鑑賞教室「社会人のための歌舞伎鑑賞教室」(6 月 14 日・21 日、計 2 回)。
- ・ 7 月歌舞伎鑑賞教室「社会人のための歌舞伎鑑賞教室」(7 月 11 日・19 日、計 2 回)。
- ・ 7 月歌舞伎鑑賞教室「親子で楽しむ歌舞伎教室」(7 月 15 日、19 日～24 日、計 13 回)。
- ・ 7 月邦楽公演 邦楽へのいざない「親子で楽しむ日本の音」(7 月 20 日、1 回)。
- ・ 12 月文楽鑑賞教室「社会人のための文楽鑑賞教室」(12 月 6 日・13 日、計 2 回)。

(演芸場)

- ・ 7 月特別企画公演「親子で楽しむ演芸会」(7 月 27 日、1 回)。

(能楽堂)

- ・ 8 月企画公演「夏休み親子で楽しむ能の会」(8 月 10 日、1 回)。
- ・ 8 月企画公演「働く貴方に贈る」(8 月 22 日、1 回)。
- ・ 8 月企画公演「夏休み親子で楽しむ狂言の会」(8 月 24 日、1 回)。
- ・ 2 月企画公演「働く貴方に贈る」(2 月 28 日、1 回)。

(文楽劇場)

- ・ 6 月文楽鑑賞教室「社会人のための文楽入門」(6 月 10 日・19 日、計 2 回)。
- ・ 夏休み文楽特別公演の第 1 部を親子劇場として実施(7 月 20 日～8 月 5 日、計 17 回)。

(国立劇場おきなわ)

- ・ 国立劇場おきなわ 6 月普及公演「社会人のための組踊鑑賞教室」(6 月 16 日、1 回)。
- ・ 国立劇場おきなわ 8 月普及公演「親子のための組踊鑑賞教室」(8 月 10 日、1 回)。

(3) 各公演の連携協力

- ・ ホームページに、各館が行う親子を対象とした公演を紹介するサイトを設置し、振興会トップページのバナーから誘導することにより、対象者に狙いを絞った広報を行った。

4. 伝統芸能の公開に際しての留意事項等

(1) 外部専門家等の意見聴取、アンケート調査の実施

- ① 外部専門家等の意見聴取は、専門委員による公演ごとのレポート提出及び年2回の公演専門委員会の開催により行った。国立劇場おきなわでは、公演事業委員によるレポート提出、及び年2回の公演事業委員会の開催により行った。

② アンケート調査の実施

分野	実施回数	回答数	回収率(配布数)	概ね満足との回答 (回答数)
歌舞伎	7公演7回	4,218人	68.4%(6,166人)	76.6%(3,232人)
文楽(本館小劇場)	2公演2回	527人	62.3%(846人)	81.0%(427人)
文楽(文楽劇場)	4公演4回	1,272人	67.0%(1,899人)	94.2%(1,198人)
舞踊・邦楽等	10公演10回	3,414人	68.2%(5,003人)	85.2%(2,909人)
大衆芸能(演芸場)	12公演12回	1,068人	33.6%(3,180人)	93.1%(994人)
能楽	10公演10回	2,935人	57.9%(5,070人)	83.2%(2,443人)
小計	45公演45回	13,434人	60.6%(22,164人)	83.4%(11,203人)
組踊等沖縄伝統芸能	28公演30回	4,479人	63.2%(7,090人)	76.3%(3,418人)
合計	73公演75回	17,913人	61.2%(29,254人)	81.6%(14,621人)

(2) 共催、受託などによる公演

- ・ 国立劇場各館での平成25年度(第68回)文化庁芸術祭：主催公演6公演・協賛公演25公演

(本館)

- ・ 歌舞伎鑑賞教室等における地方自治体、教育委員会、専修学校各種学校協会、旅行社等の後援・協力
- ・ 「社会人のための鑑賞教室」公演(歌舞伎・文楽とも)における一般社団法人日本経済団体連合会、公益社団法人経済同友会、東京商工会議所、公益社団法人東京青年会議所の後援
- ・ 7月歌舞伎鑑賞教室期間中の「親子で楽しむ歌舞伎教室(親子鑑賞特別週間)」における東京都教育委員会との共催、文化庁、地方自治体、教育委員会、PTA協議会、私立学校協会等の後援
- ・ 6月民俗芸能公演「東日本大震災復興支援 東北の芸能Ⅲ 福島」における福島県、福島県教育委員会の後援
- ・ 9月特別企画公演「日本の太鼓ー祈り、千里に響くー」における宮本卯之助商店の協力
- ・ 9月声明公演「天野社の舞楽曼荼羅供」における丹生都比売神社の協力
- ・ 1月民俗芸能公演「東日本大震災復興支援 東北の芸能Ⅳ」における岩手県、岩手県教育委員会、宮城県、宮城県教育委員会、福島県、福島県教育委員会の後援
- ・ 東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)、東京発・伝統WA感動実行委員会主催の「音の息吹」(10月5日、東京文化会館大ホール)及び「邦楽への誘いー古典文学の情景ー」(11月1日、文京シビックホール)に対して制作協力を実施
- ・ 公益財団法人しまね文化振興財団・島根県主催の「文楽 日本振袖始」(3月9日、島根県民会館)への協力

(能楽堂)

- ・ 11月国立能楽堂開場30周年記念特別企画公演における古典の日推進委員会の後援

(文楽劇場)

- ・ 関西西気文化圏共催事業(文楽劇場全公演)
- ・ 文楽劇場での文楽鑑賞教室等における教育委員会、NHK大阪放送局、文楽協会の後援・協力
- ・ 5月・6月文楽劇場公演における大阪文化祭(大阪府・大阪市・公益財団法人関西・大阪21世紀協会が主催)への参加
- ・ 公益財団法人文楽協会が行う文楽地方公演等に対する、文楽人形のかしら、衣裳、小道具の貸与及び技術職員(かしら・床山・衣裳・小道具)の派遣
- ・ 関西学院大学との連携協力協定に基づく大学の授業での文楽技芸員による解説・実演や、学生団体鑑賞等の実施

(国立劇場おきなわ)

- ・ 国立劇場おきなわ10周年記念特別公演3公演を沖縄県の共催で実施

- ・ 普及公演「組踊鑑賞教室」3公演における沖縄県、沖縄県教育委員会の後援
 - ・ 沖縄県文化観光戦略推進事業助成事業として以下の特別公演を上演
 - 「守礼の心～組踊への誘い～」(7月31日～8月4日)
 - 「かりゆし・かりゆし 恋するシーサー」(3月3日～4日)
 - 組踊版「スイミー」(3月10日～11日)
 - ・ 国立劇場おきなわ全公演における九州・沖縄文化力プロジェクト参加
 - ・ 琉球舞踊「男性舞踊家の会」南城市公演(11月26日)、喜劇「ペーちゃんの恋人」宜野座村公演(3月29日)の主催
- (3) 全国各地の文化施設等における公演
- ・ 歌舞伎鑑賞教室静岡公演(共催:財団法人静岡県文化財団、静岡県、6月26日、静岡県コンベンションアーツセンター グランシップ)
 - ・ 歌舞伎鑑賞教室神奈川公演(共催:かながわ伝統芸能祭実行委員会、7月26日～27日、神奈川県立青少年センター)
 - ・ スーパー能「世阿弥」制作協力(主催:①有限会社ダンスウエスト、5月17日、大阪・フェスティバルホール、②公益財団法人赤穂市文化とみどり財団、7月7日、赤穂市文化会館ハーモニーホール、③碧南市、7月15日、碧南市文化会館、④公益財団法人新潟市芸術文化振興財団、7月28日、新潟市民芸術文化会館りゅーとぴあ能楽堂、⑤能楽座、9月7日、大淀町文化会館あらかしホール)
 - ・ 復曲能「阿古屋松」制作協力(主催:山形県能楽協会・復曲能「阿古屋松」を観る会実行委員会、7月20日、山形市民会館)
 - ・ 新作能「紅天女」受託公演(主催:CBC中部日本放送株式会社、3月2日、名古屋能楽堂)
 - ・ 国立劇場おきなわ第3回県外講演「琉球文学の視点から観る古典芸能の魅力」(9月28日、徳川美術館講堂)
 - ・ 静岡県コンベンションアーツセンターグランシップ自主公演「うたさんしん～琉球の宴～」(2月21日)制作協力
- (4) 国際文化交流公演等
- ・ 海外の芸能関係者等の来場、見学等:本館4件8人

【特記事項】

- ・ 3月歌舞伎公演において、出演者の協力により、東日本大震災復興支援チャリティーサイン会及び押限チャリティーオークションを開催した。
- ・ 11月歌舞伎公演、3月歌舞伎公演において、東京都と協力し、東日本大震災により主に都内において避難生活を余儀なくされている被災者の方々を招待した(来場者:11月歌舞伎314件767人、3月歌舞伎235件559人)。
- ・ 外国人入場者の誘致につなげるため、3月歌舞伎公演において各国駐日大使を招待した(来場者:36カ国55人)。
- ・ 1月民俗芸能公演「東日本大震災復興支援 東北の芸能IV」において、三井住友カードの協賛により、都内に避難されている被災者100人を招待した。
- ・ 理事長主導のもと、職員全員参加による「おすすめキャンペーン」を展開し、職員の意識改革と年間で合計1,506枚のチケットの販売に貢献した。
- ・ 国立能楽堂開場30周年記念公演(9月)、同特別企画公演(4・5・11・12月)。
- ・ 国立能楽堂開場30周年記念月間特集《世阿弥生誕650年I・II》(10・11月)。
- ・ 能楽堂では3月企画公演において「復興と文化」と題し、東日本大震災からの復興にちなむ公演を行った。
- ・ 能楽堂では、座席字幕装置を活用して、4月国立能楽堂開場30周年記念特別企画公演(現代語による上演)及び7月企画公演・2月企画公演(蠟燭能)を除く48公演で、日本語(詞章)・英語の2チャンネル方式で字幕表示を実施した。
- ・ 国立劇場おきなわ10周年記念特別公演(26年1月～12月)

《自己点検評価》

- 良かった点・特色ある点
(本館)

- ・ 9月文楽公演、11月歌舞伎公演において「伊賀越道中双六」を通して上演することにより、観客に文楽と歌舞伎で同一演目を比較して楽しんでもらうという国立劇場ならではの企画を実現した。12月歌

舞伎公演では、これまで上演の機会が少ない忠臣蔵物の銘々伝・外伝などの中から名作を集め、〈知られざる忠臣蔵〉と銘打ち上演した。また1月歌舞伎公演では復活通し狂言「三千両初春駒曳」を上演し、3月歌舞伎公演では「處女翫浮名横櫛 一切られお富」を通しに近付けて上演し、それぞれ好評を博した。

- ・ 12月文楽公演では、文楽公演における上演可能な演目の拡大をめざす文楽古典演目の復活準備事業の一環として、23年度野澤錦糸の手によって復曲され、素浄瑠璃として試演を重ねた「大塔宮曦鎧」を、人形入りで121年ぶりに復活し、今後の文楽のレパートリーとなりうる演目となった。

(演芸場)

- ・ 演芸場では例年通り定席公演、若手新人公演、企画公演を行った。「新春国立名人会」や、女流演芸家による「女が語る」公演などで、多くの観客の支持を得ることができた。

(能楽堂)

- ・ 国立能楽堂開場30周年記念公演(9月)での「翁」・能「住吉詣 悦之舞」・能「鶴亀 曲入」・狂言「庵の梅」や、国立能楽堂開場30周年特別企画公演(4・5・11・12月)でのスーパー能「世阿弥」初演・能「関寺小町」・能「道成寺 古式」・狂言「釣狐」・狂言「太鼓負」など、記念年ならではの大作・秘曲などの上演を行うことができた。
- ・ 10月と1月には国立能楽堂開場30周年記念月間特集《世阿弥生誕650年Ⅰ・Ⅱ》として世阿弥作の能を特集上演し、成果を上げた。

(文楽劇場)

- ・ 文楽公演については、4月公演と正月公演で、第1部、第2部の入れ替えを無しにした結果、第2部(夜の部)の入場率が前年度に比して2割以上増えた。
- ・ 文楽公演は年間を通しておおむね好調であった。特に初春文楽公演は、テレビを含むマスコミ各社に大きく取り上げられ、結果として初春公演としては記録的な入場者数となった。
- ・ 特別企画公演「田楽と猿楽」や大衆芸能各公演も好調で、舞踊公演などほとんどの短期の公演において計画を上回る入場者数となった。

(国立劇場おきなわ)

- ・ 組踊、沖縄芝居、民俗芸能等各ジャンルで大入りの公演があり、特に、1月の10周年記念特別公演以降は満席又は満席に近い公演が続いた。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・ 一部の分野で、目標入場者数を達成することができなかった。企画構成、広報宣伝等について一層の検討を行い、集客増を図っていきたい。

《24年度評価への対応》

【評価】

(文科省評価委員会)

- ・ 公演事業に関しては、概ね計画どおりに実施されたが、伝統芸能、現代舞台芸術の両分野で入場率の未達が見受けられたことから、その要因分析と対策が必要である。(①)
- ・ 復曲、復活上演に取り組み、新作にも積極的な姿勢が見られるものの、復活上演については、復活に値する演目であるか否かを検証することも必要である。(②)
- ・ 今後は、歌舞伎公演に舞踊を加えるなど、本来あるべきエンターテインメント性の実現を期待したい。(②)

(振興会評価委員会)

- ・ 歌舞伎や舞踊、能楽など、一部目標に届いていない分野もある。演目の内容や上演の質などを十分に精査した上で、更に改善を図るべきである。(①)
- ・ 各分野において、解説付き企画やプレ講座が行われた。今後もこのような活動を拡充してほしい。(③)

【対応】

①公演結果の分析と改善

目標未達成の公演や入場者の増減等の分析については、専門委員会等において意見聴取を行うとともに、役員及び関係部署で構成する観客委員会において、売上状況・見込をもとに内容や収支について分析・検討を行い、企画や営業・広報・宣伝の面で見直しを図っている。

企画面では、演目及び配役の工夫や多様な演出の提示、テーマの設定等により、観客の幅広い興味に応える魅力的で充実した企画内容に努めている。さらに、新たな観客層を開拓するため、企画及び演出の一層の工夫に努める。

営業面では、過去の類似した公演における一般・会員・出演者・団体の各区分の売上結果を分析し、より効果的な広報・宣伝・販売の方針を公演毎に設定して目標達成に努めている。各公演の集客は、演目決定時期が大きく影響するため、キャンペーンや出演者の協力による「記念撮影会」「アフタートーク」などのイベント等の企画と実施スケジュール調整等の動きを最大限スピードアップすることが重要であり、引き続き関連部署との連携を強化し、より一層の集客に努める。

また、アンケート等の実施により開演時間の設定や観客の満足度について検証し、今後の公演事業に反映させていく。

歌舞伎公演は、10月、11月、12月及び3月公演で入場者の目標に及ばなかった。10月は、「塩原多助一代記」を83年ぶりに通し狂言で上演し、内容は外部専門家や観客より高い評価を得たが、作品の魅力を事前に十分に伝えきれなかった。11月は、両花道を使った様式美あふれる演出をアピールし集客を図ったが、集客力の高い出演者の怪我による休演があり、代演の好演等で公演の質は十分に保つことができたものの、集客面で目標に及ばなかった。12月は、歌舞伎の重要なレパートリーである義太夫狂言の名作を取り上げたが、例年に比して特に一般の集客が低調となった。3月は四世鶴屋南北の隠れた傑作を25年ぶりに上演したが、国立劇場のほかにも四座で歌舞伎公演が行われた事情もあり、出演俳優の決定及び演目の発表が遅れ、十分な宣伝営業活動ができなかった。その中で清新な若手の花形俳優たちを積極的に起用したほか、出演者の協力による「記念撮影会」や「アフタートーク」などの新企画は入場者から好評を得た。引き続きこれらの分析を踏まえ、企画及び営業の両面で工夫を重ね、より一層の集客に努めたい。

本館文楽公演については、3部制で上演している2月公演が目標に達しなかった。人間国宝3名が休演するなど、これまで文楽を支えてきたベテラン陣の高齢化の影響が顕著に表れた。平日の第1部と第3部の集客が低調であり、今後は第1部と第3部の演目選定についてより一層工夫していきたい。

文楽劇場の文楽公演は、4月公演が目標に達しなかった。時代物の半通し上演と季節感にも留意した演目は外部専門家等の評価も高かったが、夜の部の集客が振るわなかった。25年4月公演は演目の昼夜入替を行わなかった結果、夜の部の入場率は例年より20%以上上昇した。演目にもよるが、この試みを十分分析し、今後の公演計画に反映させていきたい。

本館の舞踊公演は、4公演ともわずかに目標に達しなかった。事前に企画内容や見どころを分かりやすくアピールする工夫を図っていきたい。

文楽劇場の5月舞踊・邦楽公演がわずかに目標に達しなかった。25年度は、一般客に対する広報活動の重点的の一環としてマスコミに働きかけを行い、出演者のインタビュー記事が新聞等に掲載された結果、一般客が前年の3割増となった。この試みを今後の舞踊等公演の有力な広報手段として活用していきたい。

能楽堂では、目標未達の公演については、専門委員会等において意見の聴取を行うなどして要因の分析を行い、演目・配役等の公演内容や広報・宣伝に改善策を反映させるよう努めているが、引き続き、要因分析と改善策の検討に努める。

②企画内容の工夫・検証

歌舞伎公演について、25年1月の「夢市男達競」は、黙阿弥の原作に大幅にアレンジを加え、エンターテインメント性を盛り込んだ娯楽作としての復活を試み成功した。24年10月の「塩原多助一代記」で行った復活通し狂言の上演については、あらためて原作の魅力や時代性、現代における上演の意義などを検証し、今後の有意義な復活上演に繋げていきたい。

また、通し狂言を上演する場合、筋を通すことや上演時間の制約により舞踊を加えて上演するのは難しいが、25年10月公演では、「一谷嫩軍記」を「陣門・組討」から「熊谷陣屋」という半通しにして、歌舞伎舞踊の大曲「春興鏡獅子」を国立劇場大劇場としては41年ぶりに上演し好評を得た。

文楽公演については、現時点で上演可能な作品を次代に継承するとともに、上演の途絶えた作品の復曲や新作を企画し、文楽の保存、継承、普及に努めている。その内復曲では、23年度に復曲した「大塔宮囃鎧」について、東京・大阪で試演会を開催し、復曲の成果を一般にも公表することで、その目的意識の再確認を行った。さらに、24年度に文楽素浄瑠璃で公演し、25年12月文楽公演で121年ぶりに人形入りで復活上演したことにより、現代の観客の心をつかみ、新たなレパートリーにつながる感触を得た。また石川五右衛門を主人公にした「釜淵双級巴」の復曲を行い、25年3月の「あぜくらの集い」において素浄瑠璃で上演して好評を得た。今後も復曲や復活上演を引き続き継続していくとともに、文楽が庶民に親しまれた娯楽であることを留意して公演制作を行っていく。

能楽堂では復曲上演に取り組んでおり、24年4月特別企画公演では世阿弥の作品のうち上演された記録のない「阿古屋松」を、観世文庫の協力により世阿弥自筆本に基づき復曲初演して好評を得た。このような新規の復曲作業のほか、過去に他の能楽堂等で復曲上演された作品の中から優れた作品を取り上げて再演する公演を行っている。24年7月企画公演では復曲能「常陸帯」（23年10月復曲初演）を、25年10

月企画公演では復曲能「鶴羽」（3年3月復曲初演）を再演した。新作・復曲は1回限りの上演で再演されないケースが多いが、能楽堂では優れた作品は積極的に再演してレパトリー化を図っている。

③公演と連携した企画の充実

本館では、劇場外での伝統芸能講座として、22年度より開催している「国立劇場 in 丸の内」（会場：marunouchi cafe SEEK 旧称 丸の内カフェ）について、25年度は実施回数を7回に増やすとともに、講座のテーマに初めて大衆芸能を取り上げ、より多様な層にアピールできるよう内容を充実させたほか、講座会場のホームページやメールマガジン等を介して講座内容に関連する国立劇場主催公演を周知するなど、講座を契機とする新たな観客の獲得に努めている。公演と連携した企画の実施として、25年度は5月文楽・9月文楽・9月声明・12月邦楽の各公演の開催に先立ち、公演鑑賞に資するため出演者等を招いて実演や解説を聴く「あぜくらの集い」を開催し、公演鑑賞の助けとした。また、3月歌舞伎公演においては、「チャリティーサイン会」などを企画し、大変好評であった。チケット購入者を対象とした企画として、25年度は9月文楽公演において1部・2部の通し券購入者を対象に義太夫の懐中稽古本（複製）をプレゼントする企画を実施し購入意欲を促進した。11月歌舞伎公演では、9月文楽と同演目の上演であったことから、両公演ともチケットを購入した方を対象に、実際に遊べる錦絵の双六「諸芸尽し出世壽語録」をプレゼントするとともにイヤホンガイド及び公演プログラムの割引券を進呈した。今後も関係部署が連携を図り、イベントなど様々な企画を実施して集客増につなげたい。

能楽堂では、25年度10月と1月に「月間特集・世阿弥生誕650年」として世阿弥作の演目を特集上演した。これと連携して、大講義室で公開講座「観阿弥・世阿弥」を4月から9月まで、6回にわたり実施した。

文楽劇場では、展示室における年5回の資料展示は、必ず公演の内容に関連するものを「企画展示」または「常設展示」と同時開催する「企画コーナー」で企画しているが、新出資料を紹介する等、さらに工夫を加えて、自主公演への興味を深めるような展示を実施するよう努める。公演と連携した企画の実施として、25年度は5月舞踊・邦楽、9月特別企画の各公演に先立ち、出演者等を招いて実演や解説を交えた「公演関連プレ講座」を開催し、公演鑑賞の一助とした。また、チケット購入者を対象とした企画として、10月舞踊公演において出演者による「『弧の会』座談会」を開催し、大変好評であった。国立文楽劇場友の会においては、25年度は7月・10月・12月に各文楽公演に先立ち「文楽のつどい」を開催し、各公演の出演者等を招いて演目に因んだ実演や解説・講演を行い、公演鑑賞の助けとした。さらに、11月文楽公演では通し上演の演目「伊賀越道中双六」の物語を双六に作成し、夜の部来場者へのプレゼントとする旨をホームページなどで事前周知することにより、低調となりがちな夜の部の集客の一助とした。今後とも、こういった公演内容と連携した企画を工夫して実施していきたい。

国立劇場おきなわでは、自主公演と連動した企画展、講座、公演記録鑑賞会などを行っている。25年度は、民俗芸能の上演に合わせた「奄美の仮面と芸能」を紹介した企画展や10周年記念公演で上演される「能」に焦点をあてた展示を企画した。また、開場10周年記念公演のプレイベントとして24年度に「芸能づくりの1週間」と題し、開場記念公演の記録映像を上映し、10年前と現在の沖縄の伝統芸能の変化と発展を比較する機会を設けた。また、劇場内でも、5月の研究公演「村々に伝わる組踊～本部町宇瀬底～」の本部町物産展や「タイ舞踊」公演のタイ観光パネル展、3月能公演の上演には解説をつけるなど、公演と連携した企画を行い、公演内容の理解の一助とするとともに、賑やかな劇場の雰囲気を出した。

2-(1)-① 歌舞伎

《制作方針》

10月公演は、義太夫狂言屈指の名作「一谷嫩軍記」の二段目「陣門・組討」から三段目の「熊谷陣屋」を通して上演し、熊谷直実一家の悲劇をより鮮明に浮かび上がらせ、併せて新歌舞伎十八番の内の歌舞伎舞踊の大曲「春興鏡獅子」を上演する。11月公演は、近松半二の絶筆となった義太夫狂言の傑作「伊賀越道中双六」を「伊賀上野の敵討ち」の経緯を描いた場面に、歌舞伎屈指の名場面「沼津」を加えた構成で、9年ぶりに通し狂言として上演する。12月公演は、〈知られざる忠臣蔵〉と銘打ち、銘々伝にあたる新作歌舞伎の「主税と右衛門七」、外伝にあたる古典で秀山十種の内の「弥作の鎌腹」、河竹黙阿弥が「仮名手本忠臣蔵」を舞踊化した「忠臣蔵形容画合」を原作から補綴を行い上演する。平成26年の初春公演は、午年であることに因んで「馬切り」の原作『けいせい青陽●』（●は集に鳥）を取り上げ、題名を「三千両初春駒曳」に変えて台本を大幅にアレンジし、「釣天井」や「馬切り」の場面を中心に通し狂言としては約150年ぶりに復活上演する。3月公演は、義太夫狂言の代表作「菅原伝授手習鑑」より「車引」と、河竹黙阿弥の〈悪婆〉物の代表作「處女翫浮名横櫛一切られお富」を「藤ヶ谷天神境内の場」「赤間妾宅の場」を原作から新たに補綴して上演する。

入門公演では、歌舞伎鑑賞教室を実施し、6月の「紅葉狩」に引き続き、7月は「芦屋道満大内鑑 一葛の葉」を取り上げ、解説を付して歌舞伎の継承、普及を図る。

《実績》

1. 公演実績

公演名	劇場	期間	区分	回数	日数	入場者数	入場率	総席数
10月歌舞伎公演 「一谷嫩軍記―陣門・組討・熊谷陣屋―」、 「新歌舞伎十八番の内 春興鏡獅子」	本館 大劇場	10/3(木)～ 27(日)	実績	25回	25日	25,051人	(65.9%)	38,000人
			計画	25回	25日	20,000人	(52.6%)	38,000人
11月歌舞伎公演 通し狂言「伊賀越道中双六」		11/3(日)～ 26(火)	実績	24回	24日	16,288人	(45.0%)	36,192人
			計画	24回	24日	21,330人	(58.5%)	36,480人
12月歌舞伎公演 「主税と右衛門七―討入前夜―」 「いろは仮名四十七訓 秀山十種の内 弥作の鎌腹」 「忠臣蔵形容画合―忠臣蔵七段返し―」		12/3(火)～ 26(木)	実績	24回	24日	22,554人	(61.8%)	36,480人
			計画	24回	24日	22,730人	(62.3%)	36,480人
1月歌舞伎公演 通し狂言「三千両初春駒曳」		1/3(金)～ 27(月)	実績	25回	25日	24,959人	(65.7%)	38,000人
			計画	25回	25日	28,760人	(75.7%)	38,000人
3月歌舞伎公演 「菅原伝授手習鑑―車引―」 「處女翫浮名横櫛―一切られお富―」		3/3(月)～ 26(水)	実績	24回	22日	15,510人	(42.5%)	36,480人
			計画	25回	25日	19,670人	(51.8%)	38,000人
【歌舞伎 小 計】	5公演 (計画:5公演)	実績	122回	120日	104,362人	(56.4%)	185,152人	
		計画	123回	123日	112,490人	(60.2%)	186,960人	
6月歌舞伎鑑賞教室 解説「歌舞伎のみかた」 「新歌舞伎十八番の内 紅葉狩」	本館 大劇場	6/2(日)～ 24(月)	実績	46回	23日	56,549人	(80.9%)	69,920人
			計画	46回	23日	49,820人	(71.3%)	69,920人

7月歌舞伎鑑賞教室 解説「歌舞伎のみかた」「芦屋道満大内鑑 —葛の葉—」	7/3(水) ～24(水)	実績	44回	22日	64,108人	(95.9%)	66,880人
		計画	44回	22日	60,980人	(91.2%)	66,880人
【歌舞伎鑑賞教室 小計】	2公演 (計画:2公演)	実績	90回	45日	120,657人	(88.2%)	136,800人
		計画	90回	45日	110,800人	(81.0%)	136,800人
【歌舞伎合計】	7公演 (計画:7公演)	実績	212回	165日	225,019人	(69.9%)	321,952人
		計画	213回	168日	223,290人	(69.0%)	323,760人

※ 3月歌舞伎公演「菅原伝授手習鑑一車引」「處女翫浮名横櫛一切られお富」は、政府主催「東日本大震災三周年追悼式」開催のため、3月10日(月)、11日(火)を休演とした。

2. 営業・広報

- ・ マスコミ各社への記者会見及び取材依頼、テレビ出演、ポスター、チラシ、ホームページ、あぜくら会報、振興会ニュース等、また都内の比較的小規模な劇場におけるチラシ設置等により、公演情報の周知拡大を図り、一般の集客に努めた。
- ・ 各公演において出演者・関係者による記者会見等を行った。
 - ・ 6月鑑賞教室公演：中村扇雀、中村錦之助、中村隼人、中村虎之介
 - ・ 7月鑑賞教室公演：中村時蔵、中村萬太郎
 - ・ 10月公演：松本幸四郎、市川染五郎、松本金太郎、市川團子
 - ・ 11月公演：坂田藤十郎、中村翫雀、中村扇雀、中村虎之介
 - ・ 12月公演：中村吉右衛門、藤間勘十郎、織田紘二
 - ・ 1月公演：尾上菊五郎、尾上菊之助
 - ・ 3月公演：中村時蔵、坂東彌十郎、中村錦之助、中村萬太郎、中村隼人
- ・ 団体営業については、今後の新規観劇見込み団体を含む顧客情報を整備・共有することによって、業務の効率化を図るとともに、適宜複数の担当者でフォローする等、きめ細かく顧客のニーズに対応した。
- ・ 各公演で実施した「ゆかりの地キャンペーン」では、ご当地のPRを劇場ロビーにおいて行う等、公演全体を盛り上げると同時に団体観劇の誘致にも成果を上げた。
- ・ 外資系企業、企業OB会、大手企業系列の旅行代理店(インハウスエージェント)、専門学校等を主たるターゲットに設定した営業活動を展開し、それぞれの業種にねらいを絞ったダイレクトメール等を作成するなど、効果的な営業に努めた。
- ・ 外国人観光客への情報発信・営業活動では、JTB関連会社が企画・運営する外国人観光客向けホームページを通じて販売実績を伸ばした。
- ・ 英語版・中国語版(繁体字・簡体字)・韓国語版のパンフレットに加えて、新たにフランス語版を作成し、フランス語圏の外国人観光客への情報発信・公演周知活動の足掛かりとした。
- ・ 9月文楽公演と11月歌舞伎公演が同一演目であったため、9月文楽公演の観客全員に特典付チラシを配布し、11月歌舞伎公演において特典付チラシを持参するとチケット・筋書きの割引や記念グッズのサービスの特典がある「ダブル観劇キャンペーン」を実施し、購買意欲を高めた。
- ・ 11月、3月歌舞伎公演においては、舞台見学やセミナー等の特典付きのプランによって団体観劇の誘致を行うことにより、新規団体の獲得や長年利用の無かった団体の掘り起こしに繋がった。
- ・ 理事長主導のもと、職員全員参加による「おすすめキャンペーン」を展開し、職員の意識改革と年間で1,035枚(歌舞伎公演分)のチケットの販売に貢献した。

3. 外部専門家等の意見

- ・ 10月公演について、「一谷嫩軍記」は「陣門・組討」「熊谷陣屋」を通して上演することで、熊谷の苦悩が観客によく伝わり、その叙情性が客席全体に集中性をもって広がった。幸四郎の丸本時代物として、最も仁にも芸質にもかなった佳品といえる。とかく過剰になりがちだった激情の表現も抑制されている。染五郎の敦盛は、貴公子としての品格・優美さ、当代での最適任者といえる。「鏡獅子」については、染五郎は前ジテ・後ジテとも、清潔感が清新の気に通じ、独自の良さを示している。胡蝶役に金太郎と團子を起用したことは成功であり、この二人の活躍は大いに場内を沸かせた。
- ・ 11月公演について、藤十郎・翫雀・扇雀の成駒屋父子の「沼津」に、橋之助の政右衛門を中心にし

た「行家殺し」「饅頭娘」「奉書試合」に「敵討」という立て方は、事実上「沼津」でしか知られていない「伊賀越」の世界の基本型を見せるという意味では、ひとまず妥当であったと言えよう。橋之助の政右衛門が時代物役者としての風格と存在感を十分に示し、藤十郎の「沼津」に拮抗するだけの重みを見せたのもよかった。親子の俳優を役の上で入れ替えた形になった十兵衛・平作の配役には、当初少なからず当惑するものもあったが、老け役に果敢に挑んだ中村翫雀の奮闘と坂田藤十郎の若々しい役作りによって、しだいに違和感も解消されていった。

- ・ 12月公演について、「知られざる忠臣蔵」とは言いえて妙なキャッチコピーである。11月・12月と2ヶ月連続で「仮名手本忠臣蔵」を上演している歌舞伎座を向こうに回し、上演機会の少ない、一味違った「忠臣蔵」を紹介しようという企画の趣旨は評価できるものであり、興行上の戦略としても納得のいくものである。「主税と右衛門七」は、今の若者に見せたい芝居だったし、吉右衛門念願の「弥作の鎌腹」は、得意な時代物にはないこの人の面白さを見せてよかった。「忠臣蔵形容画合」は、通には通なりに、初心者には初心者なりに楽しめる、間口の広さを持った作。アレンジの仕方も程よく、これは予期せぬ拾い物と言えよう。
- ・ 初春公演について、かつては人気狂言としてしばしば上演されていた“馬切り”を、通し狂言の形で久々に上演したことは、国立劇場の企画として賞賛に値するものと思う。複雑に入り組んだ原作を補綴した国立劇場文芸研究会の仕事に敬意を表したい。歌舞伎のいつものお約束に則って、江戸幕府、三代将軍家光の周辺で起こった逸話を「太閤記」の世界で描いたとの事ですが、この「太閤記」における人物相関が今日の観客の既成概念も相俟って、かえって複雑に感じてしまう部分もありました。そこをこの芝居のストーリー展開として面白く観せていくというのが、今後の再演にあたっての課題のように思えます。
- ・ 3月公演について、狂言立ても「車引」と黙阿弥の「切られお富」という、時代物のなかで荒事をみせるもの、世話物のなかでも生世話狂言と、短い時間で歌舞伎ならではの演出様式をふんだんに楽しめる構成になっているところに製作側の意図が明確に感じられます。「處女翫浮名横櫛」（切られお富）は、日頃あまり上演されることのない「藤ヶ谷天神境内の場」と「赤間妾宅の場」の二場が付けられた。これによって話が格段に理解しやすくなった。三月の公演は以前のように小劇場の方がふさわしいのではないか。「切られお富」に限らず、大きな観客動員は期待できないが、上演に値する演目、小劇場の方が成果が上がる演目は少なくない。この点についての再検討を要望したい。
- ・ 6月歌舞伎鑑賞教室について、隼人と虎之介の解説は出色だった。19歳と15歳という、鑑賞者と同世代という効果は随所に感じられた。「紅葉狩」は、初心者にもわかりやすい物語であり、視覚的に美しく、前半・後半で変化にも富んでいるため、適切な演目と思われるが、踊りで展開していくところはやや退屈している生徒たちもいたようであった。脇役も含めて適材適所の安定した配役であり、三方掛合による演奏も、事前の解説で十分「予習」ができていたため、自然に受け入れられたようであった。
- ・ 7月歌舞伎鑑賞教室について、萬太郎による解説は、よくいえばオーソドックスで、ケレン味のないのが好感を持てるが、「くろご」クンなる（当節流行の）ユルキャラが今ひとつ効果的でなく、部分部分にはよい処もありながら、全体の構成が中途半端だった。粗筋も、やたらに繁雑なストーリーを説明するより、今日の舞台の理解に必要なポイントだけを指摘すべきだ。

鑑賞教室として「芦屋道満大内鑑 葛の葉」の上演というのは非常によい狂言のように感じました。今回上演のこの作のなかには初めてご覧になる方の為に歌舞伎の魅力を紹介するうえで実にさまざまな事象が盛り込まれているからです。たとえば、女形、早替り、引き抜き、隈取り、廻り舞台、すっぽん、ケレン、舞踊、立廻りなど、この1時間弱の上演時間のなかにそれぞれが生きた形で登場し、学生たちもそれに目を見張っている様子でした。

4. アンケート調査

全7公演で実施(7回)した。

回答数 4,218人(配布数 6,166人、回収率 68.4%)。回答者の76.6%が概ね満足と答えた(3,232人)。

【特記事項】

- ・ 平成25年度(第68回)文化庁芸術祭主催公演(10月公演)
- ・ 平成25年度(第68回)文化庁芸術祭協賛公演(11月公演)
- ・ 字幕表示装置により、演奏に合わせて詞章を表示し、鑑賞の助けとした。(6月・7月歌舞伎鑑賞教室)
- ・ 政府主催「東日本大震災三周年追悼式」開催のため、3月10日(月)、11日(火)を中止とした。(3月歌舞伎公演)

- ・ 3月歌舞伎公演において、出演者の協力により、東日本大震災復興支援チャリティーサイン会及び押限チャリティーオークションを開催した。
- ・ 11月歌舞伎公演、3月歌舞伎公演において、東京都と協力し、東日本大震災により主に都内において避難生活を余儀なくされている被災者の方々を招待した（来場者：11月歌舞伎314件767人、3月歌舞伎235件559人）。
- ・ 外国人入場者の誘致につなげるため、3月歌舞伎公演において各国駐日大使を招待した（来場者：36カ国55人）。

《数値目標の達成状況》

【目標入場者数の達成状況】

本公演：実績 104,362 人／目標 112,490 人（達成度 92.8%）
鑑賞教室：実績 120,657 人／目標 110,800 人（達成度 108.9%）
合計：実績 225,019 人／目標 223,290 人（達成度 100.8%）

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 10月公演については、「一谷嫩軍記」を「陣屋」だけでなく「陣門・組討」から通して上演することで、熊谷直実の家族に起こる悲劇の真相が格段にわかりやすくなった。幸四郎が、17年ぶりに直実を通して勤め、重厚な芝居で時代物役者としての実力を発揮し、適材適所の配役が芝居を大いに盛り上げた。「春興鏡獅子」は、難曲とされる本作において、染五郎が弥生と獅子の精を鮮やかに踊り分け、金太郎・團子の胡蝶の精が評判になった。今回の公演に当たっては、大劇場ロビーのシンボルともなっている平櫛田中作の「鏡獅子」像を大いに活用し、像を背景に記者会見を開催したほか、公演期間中には2階ロビーに平櫛田中を特集する展示コーナーを設けるなど、公演全体の盛り上げを図った。
- ・ 11月公演については、唐木政右衛門の件と「沼津」を通して上演したことで、敵を討つ側と討たれる側との運命が交錯するというこの作品の主題が鮮明になった。坂田藤十郎の十兵衛は、祖父（初代中村鴈治郎）・父（二代目中村鴈治郎）から継承した当り役であり、その和事の至芸は他の追随を許さないものであった。中村翫雀の平作や中村橋之助の政右衛門は、今後持ち役になる可能性を感じさせ、本公演は次世代へ役の継承に大きく貢献した。
- ・ 12月公演については、「主税と右衛門七」は、次世代を担う若手が主役を勤め、貴重な経験となった。「弥作の鎌腹」では、現代にも通じる人間の悲哀がよく表現され、吉右衛門の家の芸のひとつが久しぶりに上演された意義は大きい。「忠臣蔵形容画合」では、黙阿弥の隠れた名作が新しい作曲、振付によって蘇った。趣の異なる三作品がひとつの〈知られざる忠臣蔵〉の世界を構成し、観客に楽しんでもらうことが出来た。
- ・ 初春公演については、物語の背景である小田信長死後の後継者争いの対立軸を絞り、入り組んだ人物関係を大幅に整理し、小田信孝の活躍や、信孝を取り巻く人々のドラマを、わかりやすく描くことができた。「馬切り」では、従来の演出に捉われず、通し狂言の中の一場面であることを意識しつつ、菊五郎を中心とする座組ならではの工夫を凝らした立廻りが評価を得た。「釣天井」の仕掛けや、二階家を使った「田郎助内」の装置などの大道具が舞台効果を大きく高めた。
- ・ 3月公演については、「車引」で若手の萬太郎、隼人が初役で梅王丸、桜丸を勤め、今後の古典歌舞伎での活躍を期待させたのは大きな成果であった。「處女翫浮名横櫛」は、時蔵が初役のお富で、祖父・三代目時蔵からの家の芸の継承を果たし、レパートリーを上げた。原作から序幕を補綴・復活したことにより、物語の筋がわかりやすくなり、この作品本来の魅力が楽しめ、今後の上演のひとつの方向性を示した。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・ 11月及び3月公演は目標入場者数に大きく及ばなかった。11月は義太夫狂言の名作、3月は河竹黙阿弥作の世話物の傑作であり、それぞれ国立劇場の標榜する“復活通し狂言”という命題に合致する企画であるが、特に3月公演は演目決定の遅れもあり、それぞれの演目の魅力を十分に伝えることができなかった。今後も、企画内容、広報宣伝等について、制作と営業両部門が連携を密にして、入場者増のための効果的な施策について十分検討し、実行するよう努めていきたい。

《24年度評価への対応》

【評価】

(振興会評価委員会)

- ・ 観客委員会の調査、分析に加え、外部の意見も参考にしながら、より集客に向けた努力を行ってほしい。
(①)
- ・ 広報活動は、公演の意図が伝わるように、アピールポイントを絞って行う必要がある。また、3月公演での「アフタートーク」など一連の取組を評価し、今後は国立劇場の外部でも同様の工夫を期待したい。
(①)

【対応】

①より効果的な広報・営業活動の実施・検討

役員及び関係部署で構成する国立劇場営業会議・観客委員会において、売上状況・見込みをもとに内容や収支について分析・検討を行い企画や営業・宣伝の面で見直しを図っている。25年度は、団体の営業活動として、公演演目に因んだゆかりの地キャンペーンやイベントなどを実施したほか、学校に出向き公演内容などの事前講義を行った。

2-(1)-② 文 楽

《制作方針》

文楽の保存と振興のため、国立劇場本館では、名作の上演に留まらず、上演頻度が少ない演目や場面等を積極的に取り上げるように工夫する。同時に、出演者にとっては、次世代への技芸の継承やレパートリーの拡充につながる公演となるように努め、一層の活性化をめざす。

文楽劇場では名作狂言の上演だけでなく、通し狂言の上演や見取り上演をバランス良く配置、演出も考慮することにより、文楽観客層を拡げるよう演目構成を工夫する。また、夏休み文楽特別公演の第一部「親子劇場」では、親子で楽しめるよう、新作も含めた作品の上演を試みる。このことは、観客層の拡充やレパートリーの拡大に繋がり、今後の文楽の発展に必要なことと位置づけている。

《実 績》

1. 公演実績

公演名	劇場	期間	区分	回数	日数	入場者数	入場率	総席数	
公益財団法人文楽協会創立五〇周年記念 竹本義太夫三〇〇回忌 5月文楽公演「一谷嫩軍記」「曾根崎心中」/ 「寿式三番叟」「心中天網島」	本館 小劇場	5/11(土) ～27(月)	実績	34回	17日	18,472人	(97.0%)	19,040人	
			計画	34回	17日	15,810人	(83.0%)	19,040人	
竹本義太夫三〇〇回忌 9月文楽公演 通し狂言「伊賀越道中双六」		9/7(土)～ 23(月・祝)	実績	34回	17日	17,149人	(90.1%)	19,040人	
			計画	34回	17日	17,320人	(91.0%)	19,040人	
竹本義太夫三〇〇回忌 12月文楽公演 「大塔宮囃子」「恋娘昔八丈」		12/4(水) ～16(月)	実績	13回	13日	6,878人	(94.5%)	7,280人	
			計画	13回	13日	6,760人	(92.9%)	7,280人	
2月文楽公演 「七福神宝の入船」「近頃河原の達引」/ 「染模様妹背門松」/ 「御所桜堀川夜討」/ 「本朝廿四孝」		2/8(土) ～24(月)	実績	51回	17日	22,094人	(77.4%)	28,560人	
			計画	51回	17日	23,090人	(80.8%)	28,560人	
【文楽(本館)小計】 4公演 (計画:4公演)			実績	132回	64日	64,593人	(87.4%)	73,920人	
			計画	132回	64日	62,980人	(85.2%)	73,920人	
12月文楽鑑賞教室 「団子売」解説「文楽の魅力」/ 「菅原伝授手習鑑」		本館 小劇場	12/4(水) ～16(月)	実績	24回	13日	13,146人	(99.1%)	13,272人
				計画	24回	13日	12,870人	(97.0%)	13,272人
【文楽鑑賞教室(本館)小計】 1公演 (計画:1公演)			実績	24回	13日	13,146人	(99.1%)	13,272人	
			計画	24回	13日	12,870人	(97.0%)	13,272人	
【文楽(本館)合計】 5公演 (計画:5公演)			実績	156回	77日	77,739人	(89.2%)	87,192人	
			計画	156回	77日	75,850人	(87.0%)	87,192人	
公益財団法人文楽協会創立五〇周年記念 竹本義太夫三〇〇回忌 4月文楽公演 「伽羅先代萩」/ 「新版歌祭文」/ 「釣女」/ 「心中天網島」	文楽 劇場	4/6(土)～ 29(月・祝)	実績	46回	23日	20,378人	(60.6%)	33,626人	
			計画	46回	23日	17,500人	(52.0%)	33,626人	

公益財団法人文楽協会創立五〇周年記念 竹本義太夫三〇〇回忌 夏休み文楽特別公演 「金太郎の大ぐも退治」解説「ぶんらくってなあに」 「瓜子姫とあまんじゃく」/「妹背山婦女庭訓」/「夏祭浪花鑑」		7/20(土)～ 8/5(月)	実績	51回	17日	19,991人	(55.1%)	36,261人
			計画	51回	17日	20,000人	(53.6%)	37,281人
公益財団法人文楽協会創立五〇周年記念 竹本義太夫三〇〇回忌 11月文楽公演 通し狂言「伊賀越道中双六」		11/2(土)～ 24(日)	実績	44回	22日	18,197人	(56.6%)	32,164人
			計画	44回	22日	17,500人	(54.4%)	32,164人
初春文楽公演 「二人禿」/「源平布引滝」/「傾城恋飛脚」/「面売り」 「近頃河原の達引」/「壇浦兜軍記」		1/3(金) ～26(日)	実績	46回	23日	26,177人	(77.8%)	33,626人
			計画	46回	23日	20,000人	(59.5%)	33,626人
【文楽(文楽劇場)小計】 4公演 (計画:4公演)			実績	187回	85日	84,743人	(62.5%)	135,677人
			計画	187回	85日	75,000人	(54.9%)	136,697人
6月文楽鑑賞教室 「日高川入相花王」解説「文楽へようこそ」 「絵本太功記」	文楽劇場	6/7(金) ～20(木)	実績	28回	14日	16,461人	(80.4%)	20,468人
			計画	28回	14日	19,000人	(92.8%)	20,468人
【文楽鑑賞教室(文楽劇場)小計】 1公演 (計画:1公演)			実績	28回	14日	16,461人	(80.4%)	20,468人
			計画	28回	14日	19,000人	(92.8%)	20,468人
【文楽(文楽劇場)合計】 5公演 (計画:5公演)			実績	215回	99日	101,204人	(64.8%)	156,145人
			計画	215回	99日	94,000人	(59.8%)	157,165人
【文楽 総合計】 10公演 (計画:10公演)			実績	371回	176日	178,943人	(73.5%)	243,337人
			計画	371回	176日	169,850人	(69.5%)	244,357人

2. 営業・広報

(本館)

- ・ マスコミ各社への記者会見及び取材依頼、テレビ出演、ポスター、チラシ、ホームページ、あぜくら会報、振興会ニュース等、また都内の比較的小規模な劇場におけるチラシ設置等により、公演情報の周知拡大を図り、一般の集客に努めた。
- ・ 英語・中国語(繁体字・簡体字)・韓国語のパンフレットに加えて、新たにフランス語のパンフレットを作成し、フランス語圏の外国人観光客への情報発信・公演周知活動の足掛かりとした。
- ・ 理事長主導のもと、職員全員参加による「おすすめキャンペーン」を展開し、職員の意識改革と年間で471枚(文楽公演分)の販売に貢献した。
- ・ 団体の集客については、今後の新規観劇見込み団体を含む顧客情報を整備・共有することによって、営業活動の効率化を図るとともに、複数の担当者でフォローする等適宜人員を配置し、顧客のニーズに対応した。
- ・ 5月文楽公演において、第1部「一谷嫩軍記」ゆかりの地である埼玉県熊谷市の協力を得、熊谷商工会議所を中心に割引チラシ(約4,000枚)の配布を行った。
- ・ 9月公演において、吉田和生、桐竹勘十郎、吉田玉女による演目ゆかりの地である三重県伊賀市において、伊賀越資料館の訪問、記者発表及び市長表敬訪問を行った。
- ・ 9月文楽公演において、第2部の集客のため通し観劇キャンペーンを行い、第1部、第2部両方の購入者に、「沼津の段」を収録した懐中稽古本を進呈した(配布数3,676冊)。

(文楽劇場)

- ・ 地下ショッピング街(クリスタ長堀の滝の広場)や阪急百貨店うめだ本店の「祝祭広場」において、芸員もボランティアで参加する公演PRを、文楽協会と協力して行った。
- ・ 大阪市営地下鉄の協力により、文楽公演の大型ポスターや車両内中吊り広告を掲出した。
- ・ ラジオCMを実施するとともに、視聴者プレゼントを組み合わせた公演紹介の放送を在阪ラジオ局に

働きかけた。

- ・ 各公演演目のゆかりの地に関係の深い寺社や観光協会、地元企業とタイアップし、集客活動を行った。特に、11月文楽公演では国立文楽劇場友の会会員向けの「文楽のつどい」として、ゆかりの地を巡るバスツアーを実施した。このイベントには新聞各社の記者及びテレビ局が同行取材し、公演宣伝に繋がった。
- ・ 地元で行われる祭礼行事などに積極的に参加し、広く一般への普及活動を行った。
- ・ 夏休み文楽特別公演では、第1部「親子劇場」の集客のため、近隣県主要都市の教育委員会に働きかけ、各委員会が管掌する小学校へ「親子劇場」用チラシの配布を依頼し、協力を得た。

3. 外部専門家等の意見

(本館)

- ・ 5月文楽について、文楽協会創立50周年、竹本義太夫300回忌記念、近松門左衛門生誕360年記念と銘打たれた公演が大盛況であったことはまことに喜ばしい。それまでの浄瑠璃に代わり当流浄瑠璃の誕生となった『曾根崎心中』、世話物の代表作『心中天網島』という近松原作の二演目に、時代物で人口に膾炙している『一谷嫩軍記』、祝祭としての『寿式三番叟』の組み合わせは秀逸である。人間国宝総出演も記念公演を盛り立てる要素になったものと思う。1月の『寿式三番叟』、4月の『天網島』よりもそれぞれ見応えのある舞台で、大阪公演と同じ演目であっても磨きがかかった舞台が見られた。
- ・ 9月公演について、『伊賀越道中双六』の通し狂言を上演するという英断は高く評価できる。国立劇場での久しぶりの通し狂言には観客の期待も自ずと高まっていたと思う。芸員の配役も適材適所であったと思う。特に千本松原は住大夫しかなかったらと思うものであった。通し狂言は10時間に渡る異文化体験である。『伊賀越道中双六』の通しは、待ちに待った興行であることは確かではあるが、観賞後に感じるのは、敵討ちは成功したかに見えるが、究極の敵である沢井城五郎は討たれていないのではないかに始まる疑問である。今回、大序がなかったのは元を正せば志津馬がだらしなかっただけではないかという気持ちを起こさせないだけよいのかもしれない。大序から演じられる大阪公演と比べられるのも楽しみである。総じて、浄瑠璃が近世の倫理観、人生観を構築していく上での重要な役割を担っていたことを考えると、江戸の不条理の世界に身を投じて体験できるのが浄瑠璃通し狂言の魅力といえるのだということを感じさせられる。文楽興行は、伝統文化を守るだけでなく、過去の日本社会の理解に繋がると感じられた。
- ・ 12月公演について、時代物『大塔宮囃鎧』三段目の復活上演、それがどれだけ有意義なことであったのかは、いくら強調しても強調しすぎることはない。三段目は実質的には近松門左衛門の作と考えられており、義太夫節浄瑠璃の歴史の中でも、最も古い時代に属する作品である。それが素浄瑠璃公演としてではなく、文楽本公演で上演されたのだ。東京国立劇場開場以来の快挙のひとつといって過言ではないだろう。しかも、単なる骨董的な物珍しさだけが身上の作品ではない。何よりも人形浄瑠璃文楽として見ごたえのある作品であった。現行演目のひとつとして定着するよう、近い将来の再演が望まれる。今年の12月公演は、時代物と世話物のバランスという観点からも、好ましい印象を受けた。
- ・ 2月公演について、三部制の二月公演は、一日にすべてを観るのは身体的に厳しいが、一部がプロローグ、三部がエピローグとしてのよく練られた演目構成、優れたキャスティングであった。東京公演で紋寿のおしゅん、文雀の濡衣が観られたのも嬉しい。人間国宝住大夫の「堀川猿回し」、襄助の「十種香」の八重垣姫を観ておきたいという観客にも応えている。

(文楽劇場)

- ・ 4月公演は時代物・世話物・舞踊劇を並べて、変化に富んだ構成となっていた。配役も全体のバランスがよく、適材適所を心がけていた。また、昼夜入替なしの夜の部に、実力者を揃えた感じで、めりはりのある、みごとな役割り振りと思った。「新版歌祭文 野崎村の段」は、竹本源大夫の病気休演が残念だったものの、1月に復帰した竹本住大夫が、本格的な切場を務め、その健在ぶりに客席が沸いた。また、「心中天網島」での咲大夫師の1時間余りに及ぶ語りに、芸の充実を感じた。人形の配役には、核となる役柄に初挑戦する芸員が目立ち、新世代への芸の継承が強く印象づけられた。夜の部の「心中天網島」は近松生誕360年にちなんだ記念上演。今回のように昼夜の演目を固定する月を設けてみてもいいだろう。実際、今回は第2部の観客数が伸びたという。「心中天網島」という名作の持つ魅力が最大の理由だと思うが、昼夜の入替がなかったことも一つの背景ではないか。
- ・ 6月文楽鑑賞教室は、比較的短尺の「日高川入相花王」と時代物の名作「絵本太功記 尼ヶ崎の段」を組み合わせた狂言立てに、工夫が感じられる。解説「文楽へようこそ」では、笑い声や驚嘆の声も上がり、興味津々の様子。飽きさせない芸員のトークが引き込んだ。スクリーンを使った人形の仕組みの説明も、後方の席の人にもみえやすく概ね好評。人形の表情の変化がよく分かった。

- ・ 夏休み文楽特別公演は1部、2部、3部と、それぞれターゲットとする観客層に焦点を当てた演目選定が功を奏した。夏休み恒例の親子劇場の「金太郎の大ぐも退治」はビジュアル的に面白く、暗めの空間で展開するスリリングな舞台もまた面白い。また、「瓜子姫とあまんじゃく」は休演の嶋大夫の代役を務めた呂勢大夫の語り聞き取りやすく、口語体であることもあいまって、理解しやすかった。人形解説の場面では、ライブ映像がスクリーンに映し出されるようになり、より見やすくなった。終演後、人形を持った人形遣いたちがロビーで子供たちと触れ合う企画も毎年のことながら、古典に親しみを感じさせるものである。2部の「妹背山婦女庭訓」は、文楽の名作と芸の力をしっかり見せるものとなって堪能した。上演時間はまさに「たっぷり」だったが、随所にナンセンスな場面や三枚目が笑わせる場面が配されており、飽きさせない工夫がさまざまに凝らされていることを改めて認識した。3部の「夏祭浪花鑑」は、夜の部ながらなかなかの入りと見え、拍手も大きかった。今年の「曾根崎心中」に引き続き、レイトショーが社会人の観客でにぎわったのは嬉しいことである。「住吉鳥居前」「釣船三婦内」「長町裏」の上演、厳しい酷暑の中のサマーレイトショーには、このコンパクトさが向いていると言えるだろう。「大阪の夏」の味わいを強く感じさせた。
- ・ 11月公演は、大阪では21年ぶりの上演となる通し狂言「伊賀越道中双六」。昨秋の「仮名手本忠臣蔵」に比べると、一般的な知名度は低く、地味な印象は否めない。だが、先入観なしにじっくりと腰を落ち着けて全段を通して見ると、とても巧妙に構成された人間ドラマであることがわかる。ある種の謎解き、サスペンスのような展開もあって面白く、敵討ちの当事者に連なる双方の人々の運命が大きく変化していく過程がよく理解できた。大夫・三味線・人形、いずれも適材適所で、非常によく考えられた配役だったと思う。高齢の演者の体調も配慮されながら、中堅・若手を育てようという意図を強く感じた。一定の期間をおいてこうした通し狂言を上演していくことも、芸術の伝統を保存し、伝える国立劇場の大きな役割の一つだろう。「大阪では見取り狂言」という感覚は、もう古いと思う。観客動員数を伸ばさなければならない事情はあっても、大阪の文楽の観客に、通しのほうが筋がよくわかって面白いのだということを理解してもらう必要がある、観客を育てるという発想も、将来を考えると必要になる。
- ・ 初春公演は例年、正月らしい気分満ちたみどり狂言の公演となるが、今年はとりわけ文楽の音楽劇としての側面を強く感じる演目が目立った。「二人禿」や「面売り」は視覚的にも、音曲的にも楽しめた。「九郎助住家の段」はドラマチックな「物語」が耳を通してたっぷりと味わえるし、「近頃河原の達引」では、悲しいドラマに彩られながらも軽妙な演奏と共に展開する猿廻しの演技にひきつけられる。「壇浦兜軍記」は、大夫の掛合、勘十郎が遣う艶やかな阿古屋の人形、寛治、清志郎の三味線、寛太郎がしっかり演奏する三曲が、舞台上で絡み合っ一つの世界を現出させる。「新口村の段」も、名文と雪の美しさが胸にしみる屈指の名作で、全体に、文楽を初めて見る人にも、三業で成り立つ文楽の特性と魅力が伝わりやすい構成だったと思う。

4. アンケート調査

(本館)

9月公演、12月公演で実施(2回)した。

回答数 527人(配布数 846人、回収率 62.3%)。回答者の 81.0%が概ね満足と答えた(427人)。

(文楽劇場)

4月文楽公演、夏休み文楽特別公演、11月文楽公演、1月文楽公演で実施(4回)した。

回答数 1,272人(配布数 1,899人、回収率 67.0%)。回答者の 94.2%が概ね満足と答えた(1,198人)。

【特記事項】

- ・ 各公演とも字幕表示装置により、演奏に合わせて義太夫の詞章を表示し鑑賞の助けとした。
- ・ 平成25年度(第68回)文化庁芸術祭主催公演(文楽劇場 11月文楽公演)
- ・ 関西元気文化圏共催事業(文楽劇場の全公演)
- ・ 大阪文化祭参加(文楽劇場 6月文楽鑑賞教室)
- ・ 公益財団法人文楽協会 50周年記念
- ・ 竹本義太夫 300回忌

《数値目標の達成状況》

【目標入場者数の達成状況】

本公演：実績 149,336人／目標 137,980人(達成度 108.2%)

鑑賞教室：実績 29,607人／目標 31,870人(達成度 92.9%)

合計：実績 178,943人／目標 169,850人(達成度 105.4%)

《自己点検評価》

- 良かった点・特色ある点
 - ・ 本館では、現在伝わる演目を次代へと継承することは国立劇場の重要な使命であり、公演は出演者と観客が共同で芸を後世へ伝えていくための場でもあるとの観点から、9月公演において平成10年5月以来となる「伊賀越道中双六」の通し狂言を上演し、また、12月公演では「大塔宮囃鎧」を人形入りで121年ぶりに復活上演し、高い評価を受けた。
 - ・ 文楽劇場の初春公演は、正月らしく楽しめる演目が好評であり、マスコミでも多く取り上げられて観客数が著しく伸び、初春公演としては記録的な大入りとなった。
- 見直し又は改善を要する点
 - ・ 近年、人間国宝クラスの技芸員の高齢化により、特定の演目の再演が増え、演目の選定が非常に困難になっている。世代交代に備え、次代を担う技芸員が活躍できる舞台を積極的に作っていかなくてはならない。
 - ・ 文楽劇場の6月文楽鑑賞教室公演と夏休み文楽特別公演は、目標入場者数に届かなかった。自治体との連携を引き続き図っていくと共に、文楽劇場独自の営業をより積極的に働きかけていくなどの工夫が求められる。

2-(1)-③ 舞踊、邦楽、雅楽、声明、民俗芸能等

《総表》

1. 公演実績

公演名	公演数 劇場	区分	回数	日数	入場者数	入場率	総席数
【舞踊】	5 公演 本館大小劇場、文楽劇場	実績	9 回	6 日	4,318 人	(68.8%)	6,278 人
		計画	9 回	6 日	4,460 人	(71.0%)	6,278 人
【邦楽】	6 公演 本館小劇場、文楽劇場	実績	9 回	8 日	3,356 人	(61.3%)	5,473 人
		計画	9 回	8 日	4,560 人	(83.3%)	5,473 人
【雅楽】	2 公演 本館大小劇場	実績	3 回	2 日	2,293 人	(82.2%)	2,790 人
		計画	3 回	2 日	2,550 人	(91.4%)	2,790 人
【声明】	2 公演 本館大小劇場	実績	3 回	2 日	2,394 人	(88.7%)	2,700 人
		計画	3 回	2 日	2,450 人	(90.7%)	2,700 人
【民俗芸能】	2 公演 本館小劇場	実績	4 回	2 日	1,499 人	(63.5%)	2,360 人
		計画	4 回	2 日	1,960 人	(83.1%)	2,360 人
【特別企画】	4 公演 本館大小劇場、文楽劇場	実績	4 回	4 日	2,715 人	(74.8%)	3,630 人
		計画	4 回	4 日	2,520 人	(69.4%)	3,630 人
【合計】	21 公演	実績	32 回	24 日	16,575 人	(71.3%)	23,231 人
		計画	32 回	24 日	18,500 人	(79.6%)	23,231 人

2. 営業・広報

- ・ マスコミ各社への記者会見及び取材依頼、テレビ出演、ポスター、チラシ、ホームページ、あぜくら会報、国立文楽劇場友の会会報、振興会ニュース等、また都内の比較的小規模な劇場におけるチラシ設置等により、公演情報の周知拡大を図り、一般の集客に努めた。
- ・ 文楽劇場7月邦楽公演「文楽素浄瑠璃の会」では、ラジオ局に働きかけ、芸芸員も出演して公演宣伝を行った。

3. 外部専門家等の意見

(本館)

- ・ 舞踊公演について、5月「踊り、旅は道づれ…」は、昭和41年の開場以来、宝暦とか天明、道成寺物とか道行物というようにタテ軸とヨコ軸に沿って様々な企画を提供してきたなか、近年は、“絵”とか“旅”などキーワードを取り出しての新機軸を打ち出し、身近にある日本舞踊の魅力を引き出すことに成功したと思われる。8月「花形名作舞踊鑑賞会」では、常磐津「三人生酔」は三人の息のあった面白さも効果をあげ、後日NHKが同演目（別配役）を取り上げる機会となり、この演目を発掘して上演した制作者の意図は良い成果をもたらしたと言える。11月「舞の会」はいつもの通りだが、今回は番組が魅力的だった。それは一般の観客にも同じに受け止められ、切符の売れ行きに現れていたようである。魅力的に感じさせたのは、家元やベテラン勢に加え、重鎮の登場や若手の出演者や組み合わせに新鮮さを感じさせたからにはほかならないだろう。3月「素踊りの会」は、坂東寿子、尾上墨雪は老練の中の老練。特に墨雪はガラガラした個性、主張する踊りから離れ、超越した新境地に入ったと思える一つの頂点。心の底を踊るようだった。
- ・ 邦楽公演について、7月公演「親子で楽しむ日本の音」では、体験コーナーでの子供たちの楽しそうな顔を見て、実際に楽器に触れる大切さを再確認した。また、「さくらさくら」のときは桜の花を、「銀河」のときは星座など、それぞれの曲のイメージを意識した背景の使い方は好感が持てた。10月公演「浄瑠璃名曲選」はジャンルを越えた企画の公演で、河東節を目当てに来た方も、義太夫節を目当てに来た方も、普段は耳にしない別の浄瑠璃を聴けるのが素晴らしい。10月公演「文楽素浄瑠璃の会」は

大夫と三味線の演奏に集中して聴けるのが嬉しく、また素浄瑠璃ファンも育っていて、公演として良い雰囲気であった。最後の「入間詞長者気質」では上方の芸能らしい笑いの趣向が楽しく、義太夫節が庶民の人気を得ていたことの実態が生き生きと感じられた。12月公演「稀曲の会」の上演曲は、いずれも初めて聴くような曲であったが、それぞれ魅力的だった。とくに、善養寺氏の演奏が、曲の特徴をよく捉えていて面白く、また「捨扇」での古風な飾り箏の音色に風情があり、往時の地歌らしさが出ていた。1月公演「長唄の会」では趣の異なる4曲で、また出演者の組み合わせも良く、長唄の多様性が味わえた。「三曲の会」も様々な編成の曲が並び、盛りだくさんの感があったがよくなったプログラミングだった。

- ・ 雅楽・声明公演については、6月雅楽は、2時の部について、これまでにはない啓蒙的・入門的な内容で、宮丸直子氏の親しみやすい解説や伶楽舎の皆さんの手慣れたプレゼンテーション、休憩時間の雅楽器体験もあり、雅楽をより多くの人に理解していただくという所期の目的は達成されたのではないだろうか。5時の部について、〈林歌〉の聴き比べはあまり例がないので大変興味深かった。また〈団乱旋〉の再復曲は、明治選定譜の負の遺産を軽減する一つの試みとして、学術的にも音楽的にも大変貴重な仕事を聴くことが出来た。2月雅楽は、宮内庁式部職楽部のオーソドックスな演奏による公演は、劇場公演の目標である、「伝統の保存・普及」と「新たな価値の創作」という二本柱の重要な一本として行われ、今後も継続的に続けて行くべきものであろう。9月公演は、断絶した儀礼を舞台上演するという国立劇場声明公演における新たな挑戦というべきもので、その英断には感服するばかりである。11月公演は、古典的な声明を取り上げ、雅楽と茶の湯作法も同じ舞台上で同時進行するという、これまでにない上演であった。
- ・ 民俗芸能公演では、6月民俗芸能公演は、震災の被害の大きさを伝えながらも、復興を支援するという姿勢が最大限に表れ、見ていてたいへん気持ちのよい公演だった。在地における神前等での実修や公演に加え、国立劇場での公演はまさに復興支援としての意味をもつ。実現に向けて努力された関係者に敬意を表したい。また、懸田氏の解説は、東日本大震災の被災状況と現状も含めたもので、的確なものであった。1月民俗芸能公演は、バラエティに富んだ民俗芸能が選ばれており、この地域の芸能文化の厚みがよくわかった。被災地3県には民謡、舞踊、田楽、風流、神楽、獅子舞など、多種多様な民俗芸能伝承の存在が理解できるように工夫されていたのが特色であった。震災復興支援というと蕭然とした雰囲気を感じてしまいがちだが、そうならなかったのは企画の良さでもあり、なにより出演芸能の魅力によるといえよう。
- ・ 特別企画公演では、4月舞踊・邦楽公演は、若い舞踊家や演奏家たちにとって有意義な良い機会で、意気込みが感じられる楽しみな公演である。邦楽については、「真虚霊」のメリ、カリの技巧がよく、音色の変化も多彩であった。また、「問答入り勸進帳」では弁慶がおとなしかったが、丁寧な演奏で、三味線も安定していた。舞踊については、「供奴」は緊張しているのか、力んでいるのか、軽快さに欠け、弾むような躍動感が不足する。決まり決まりの見得ではこの人のキリッとした味が出た。「独楽」は新春舞踊大会より緊張感がみられた。9月「日本の太鼓」は、長く伝承されてきた伝統的な宗教儀礼や民俗芸能の中での太鼓演奏と、現代の創作太鼓演奏の組み合わせであった。「大般若祈禱太鼓」は、日本の太鼓の多様性を示すものとして多くの人の興味を惹いたのではないかと思う。

(文楽劇場)

- ・ 舞踊公演については、東西の舞踊の粋を一堂に見ることができる企画で、一つの流儀に関心のある鑑賞者による温習会とは一線を画した、国立劇場ならではの公演であり、演者や特定の流儀を習っている観客層にとって研鑽の場となるとともに、各流儀の身体的な特徴を見ることができる場でもある。
- ・ 舞踊・邦楽公演は、関西で舞踊・邦楽の若手実力派を毎年発掘するのは、なかなか難しい面がある。しかしそれなりの顔ぶれを揃えたのは結構なことである。
- ・ 邦楽公演は、聴きごたえのある魅力的な会として成功していたように感じる。文楽以上に観客が限定される素浄瑠璃の会として、一定レベルの集客に達していることは評価したい。
- ・ 特別企画公演は、民俗芸能の公演ということで、限られた観客の関心を惹くにとどまりかねないところを、観賞態度も熱心な観客をこれほど集めたことは、これまでの特別企画公演の成果として注目される。田楽と猿楽をテーマに取り上げたのは、現在に残る能の淵源という、極めて興味深い問題を真正面に出したものであり、この企画は、能や古典芸能の愛好者や研究者はもとより、広く、日本の「心」のルーツを知りたいと思う人々の関心を引き、会場は熱心な観客で埋め尽くされていた。

4. アンケート調査

舞踊公演2回、邦楽公演2回、雅楽公演1回、声明公演1回、民俗芸能公演2回、特別企画公演2回(計10回)実施した。

回答者数 3,414 人(配布数 5,003 人、回収率 68.2%)、回答者の 85.2%が概ね満足と答えた(2,909 人)。

【特記事項】

- ・ 平成 25 年度(第 68 回)文化庁芸術祭主催公演(文楽劇場 10 月舞踊公演)
- ・ 平成 25 年度(第 68 回)文化庁芸術祭協賛公演(10 月邦楽 2 公演、11 月舞踊公演、11 月声明公演)
- ・ 関西元気文化圏共催事業(文楽劇場 5 月舞踊・邦楽、7 月邦楽、9 月特別企画、10 月舞踊の各公演)
- ・ 大阪文化祭参加(文楽劇場 5 月舞踊・邦楽公演)
- ・ 上演内容に応じて、字幕表示装置により、演奏にあわせて詞章等を表示し鑑賞の助けとした。

《数値目標の達成状況》

【目標入場者数の達成状況】

実績 16,575 人／目標 18,500 人(達成度 89.6%)

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 本館では、6 月雅楽公演「雅楽を楽しむ」などの入門公演、12 月邦楽公演での稀曲を特集する企画公演、昨年度に続き 6 月・1 月民俗芸能公演での東日本大震災復興支援公演など、国立劇場ならではの公演を開催し成果を上げることができた。
- ・ 文楽劇場では、プレ講座やトークイベントを実施し、新たな観客層の掘り起こしに努めた。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・ 目標入場者数に達しない公演があった。企画立案時より内容や時期等の検討を綿密に行うとともに、観客のニーズに応えられる内容や効果的な広報ができるよう一層工夫を図りたい。また、内容、時期、媒体等、効果的な広報宣伝について担当部署と相談の上、工夫する。

舞 踊

【制作方針】

本館では、江戸・東京を中心に発展・継承されてきた歌舞伎舞踊と、上方・京阪を中心に発展・継承されてきた上方舞を両輪として、公演ごとにテーマを設けて企画する。大劇場で上演する5月公演は“旅”をキーワードに、親しみやすくも見ごたえのある公演を企図する。現在鑑賞することのできる最高水準の舞台を紹介することを根幹とし、日本舞踊界の第一線で活躍する東西の舞踊家により、国立劇場の独自性を盛り込みながら、広範な観客層への普及を図る。

文楽劇場では、日本舞踊界を代表する東西の名手たちが一堂に会する「東西名流舞踊鑑賞会」を開催し、継続性をもって舞踊の普及と振興を図る。京阪四流の地元として、各流代表者の競演に加え、舞と踊の色合いが際立つ番組構成で各々の至芸を堪能できる内容とする。

【実績】

1. 公演実績

公演名	劇場	期間	区分	回数	日数	入場者数	入場率	総席数
5月舞踊公演「踊り、旅は道づれ…」	本館 大劇場	5/25(土)	実績	1回	1日	999人	(65.7%)	1,520人
			計画	1回	1日	1,010人	(66.4%)	1,520人
8月舞踊公演「花形・名作舞踊鑑賞会」	本館 小劇場	8/10(土)	実績	2回	1日	680人	(65.1%)	1,044人
			計画	2回	1日	740人	(70.9%)	1,044人
11月舞踊公演「舞の会-京阪の座敷舞-」		11/23(土)	実績	2回	1日	1,072人	(90.8%)	1,180人
			計画	2回	1日	1,020人	(86.4%)	1,180人
3月舞踊公演「素踊りの会」		3/21(金)	実績	2回	2日	715人	(60.6%)	1,180人
		~22(土)	計画	2回	2日	900人	(76.3%)	1,180人
【舞踊(本館)小計】	4公演	(計画:4公演)	実績	7回	5日	3,466人	(70.4%)	4,924人
			計画	7回	5日	3,670人	(74.5%)	4,924人
10月舞踊公演「東西名流舞踊鑑賞会」	文楽劇場	10/12(土)	実績	2回	1日	852人	(62.9%)	1,354人
			計画	2回	1日	790人	(58.3%)	1,354人
【舞踊(文楽劇場)小計】	1公演	(計画:1公演)	実績	2回	1日	852人	(62.9%)	1,354人
			計画	2回	1日	790人	(58.3%)	1,354人
【舞踊合計】	5公演	(計画:5公演)	実績	9回	6日	4,318人	(68.8%)	6,278人
			計画	9回	6日	4,460人	(71.0%)	6,278人

2. 営業・広報

- ・ マスコミ各社への取材依頼を行い、各公演とも数社によるインタビュー記事掲載に尽力した。ポスター、チラシ、インターネット、あぜくら会会報、国立文楽劇場友の会会報、振興会ニュース等により、公演の周知を図り、一般の集客に努めた。
- ・ 文楽劇場10月舞踊公演において、公演前に新聞記事が5件掲載され、集客に繋がった。

3. 外部専門家等の意見

(本館)

- ・ 5月「踊り、旅は道づれ…」は、昭和41年の開場以来、宝暦とか天明、道成寺物とか道行物というようにタテ軸とヨコ軸に沿って様々な企画を提供してきたなか、近年は、“絵”とか“旅”などキーワードを取り出しての新機軸を打ち出し、身近にある日本舞踊の魅力を引き出すことに成功したと思われる。しかし、今回は1階席は7、8割の入場率だったが、2、3階席はやや空席が目立った。1日1回5演目、出演者16名の規模の公演でも大劇場を満席にするにはまだまだ日本舞踊の魅力を探す必要があるだろう。「駕屋」は序幕にはふさわしくないなど、演目順について課題が残った。
- ・ 8月「花形名作舞踊鑑賞会」では、常磐津「三人生酔」は三人の息のあった面白さも効果をあげ、後

日 NHK が同演目（別配役）を取り上げる機会となり、この演目を発掘して上演した制作者の意図は良い成果をもたらしたと言える。

- ・ 11 月「舞の会」はいつもの通りだが、今回は番組が魅力的だった。それは一般の観客にも同じに受け止められ、切符の売れ行きに現れていたようである。魅力的に感じさせたのは、家元やベテラン勢に加え、重鎮の登場や若手の出演者や組み合わせに新鮮さを感じさせたからにほかならないだろう。一時期、舞手と地方の人材不足が心配されていたが、早くも有望な担い手が育ってきていることを頼もしく思う。それは国立劇場の「舞の会」の力によるところが大きいだろう。ことに地方は積極的に若手を起用し、根気よく見守ってきたからである。
- ・ 3 月「素踊りの会」は、坂東寿子、尾上墨雪は老練の中の老練。特に墨雪はギラギラした個性、主張する踊りから離れ、超越した新境地に入ったと思える一つの頂点。心の底を踊るようだった。2 日目は客席が薄く、初日の演者を入れ替えるか、扇藏を 2 日目に入れて“名人芸”の日とした手立てもあったか。

（文楽劇場）

- ・ 舞踊公演は、東西の舞踊の粋を一堂に見ることができる企画で、一つの流儀に関心のある鑑賞者による温習会とは一線を画した、国立劇場ならではの公演であり、演者や特定の流儀を習っている観客層にとって研鑽の場となるとともに、各流儀の身体的な特徴を見ることができる場でもある。

4. アンケート調査

5 月公演（本館大劇場）、8 月公演（本館小劇場）で実施（2 回）した。

回答数 549 人（配布数 996 人、回収率 55.1%）、回答者の 92.2%が概ね満足と答えた（506 人）。

【特記事項】

- ・ 平成 25 年度（第 68 回）文化庁芸術祭主催公演（文楽劇場 10 月公演）
- ・ 平成 25 年度（第 68 回）文化庁芸術祭協賛公演（本館 11 月公演）
- ・ 字幕表示装置により、演奏に合わせて歌詞を表示して鑑賞の助けとした。（本館 4 公演）
- ・ 文楽劇場 10 月公演において、出演者によるトークイベントを開催した（参加人数 111 名）。
- ・ 関西元気文化圏共催事業（文楽劇場 10 月公演）

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 本館の 4 公演について、5 月公演は「旅」をテーマに掲げ、敷居を低くしてより多くの人に興味を持ってもらえるよう企画しつつ、演目は上演の稀なものなどを盛り込んだ点で、概ね好評を得た。8 月「花形・名作舞踊鑑賞会」では、上演機会の少ない「酔奴」「三人生酔」「浜松風」を織り交ぜ、演目の掘り起こしを図り、一定の成果があった。また、「酔奴」は竹本葵太夫を中心とした演奏陣でよい成果を上げた。11 月「舞の会」は、世代交代が進みつつある上方舞において、幅広い世代の舞い手が揃い、それぞれに成果を出した。入場者数も目標を上回り、演奏についても若い世代や新たな出演者を起用し、今後を見据えた企画とすることができた。3 月「素踊りの会」では、両日ともに名手が揃い、それぞれに芸の到達点の感じられる演技でおおむね好評を得て、一定の成果を上げることができた。また、若柳壽延の「吹き寄せ老松」など上演機会の稀な演目にも取り組んだ。
- ・ 文楽劇場の 10 月公演は、例年とは趣向を変えて第一部は上方四流、第二部は東西の舞踊という番組構成にしてメリハリをつけた。また古典の名作に加え、関西では上演機会の少ない実力派群舞による創作作品で締めくくすることで、日本舞踊の幅広さと今後の可能性を追求する内容となり、一般客や通し客の増加に結びついた。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・ 本館の舞踊公演において、目標入場者数に達しない公演があった。演目構成において、本年の成果も踏まえて今後一層工夫し、より多くの観客層の関心を引くよう努める。世代交代の進みつつある斯界に配慮しながら出演者を決定しているが、ベテランの起用、歌舞伎俳優の起用等について、今後も十分に考慮して制作を行っていききたい。また、広報宣伝と公演周知には今後とも一層の工夫、努力をしていきたい。外部専門家等の意見も含め、本公演の成果を踏まえながら、今後の公演制作に活かしていきたい。

邦 楽

【制作方針】

邦楽の各ジャンルの特徴や魅力、レパートリーの豊富さをふまえ、その多彩な音楽性をさまざまな視点

を活かした企画で楽しんでもらう公演の制作に取り組む。出演には、ベテランに限らず、公演の狙いや曲の性格に適した演奏家の起用を第一に考え、中堅や若手の積極的な出演を図る。

そのために、体験コーナーや実演を交えた解説付きの「邦楽へのいざない」、邦楽ファンに向けた聴き応えのある演奏会「浄瑠璃名曲選」「文楽素浄瑠璃の会」「長唄の会・三曲の会」、演奏機会の少ない曲に焦点を当て、今後の伝承を期する「稀曲の会」を制作する。

文楽劇場 7 月邦楽公演「文楽素浄瑠璃の会」は、文楽の第一線で活躍する大夫・三味線陣が、それぞれの芸風に相応しい演目で臨む本格的な素浄瑠璃の公演とする。

【実績】

1. 公演実績

公演名	劇場	期間	区分	回数	日数	入場者数	入場率	総席数
7月邦楽公演 邦楽へのいざない「親子で楽しむ日本の音」名曲で知る邦楽の世界	本館 小劇場	7/20(土)	実績	2回	1日	566人	(48.0%)	1,180人
			計画	2回	1日	950人	(80.5%)	1,180人
10月邦楽公演「浄瑠璃名曲選」		10/12(土) ~13(日)	実績	2回	2日	643人	(54.5%)	1,180人
			計画	2回	2日	820人	(69.5%)	1,180人
10月邦楽公演「文楽素浄瑠璃の会」		10/26(土)	実績	1回	1日	556人	(94.2%)	590人
			計画	1回	1日	580人	(98.3%)	590人
12月邦楽公演「稀曲の会-隠れた名曲の魅力-」		12/21(土)	実績	1回	1日	253人	(42.9%)	590人
			計画	1回	1日	510人	(86.4%)	590人
1月邦楽公演「邦楽鑑賞会-長唄の会-、-三曲の会-」		1/18(土) ~19(日)	実績	2回	2日	991人	(84.0%)	1,180人
			計画	2回	2日	1,020人	(86.4%)	1,180人
【邦楽(本館) 小計】	5公演 (計画:5公演)	実績	8回	7日	3,009人	(63.8%)	4,720人	
		計画	8回	7日	3,880人	(82.2%)	4,720人	
竹本義太夫三〇〇回忌 7月邦楽公演「文楽素浄瑠璃の会」	文楽 劇場	7/6(土)	実績	1回	1日	347人	(46.1%)	753人
			計画	1回	1日	680人	(90.3%)	753人
【邦楽(文楽劇場) 小計】	1公演 (計画:1公演)	実績	1回	1日	347人	(46.1%)	753人	
		計画	1回	1日	680人	(90.3%)	753人	
【邦楽 合計】	6公演 (計画:6公演)	実績	9回	8日	3,356人	(61.3%)	5,473人	
		計画	9回	8日	4,560人	(83.3%)	5,473人	

2. 営業・広報

- ・ マスコミ各社への取材依頼を行い、各公演とも数社によるインタビュー記事掲載に尽力した。ポスター、チラシ、インターネット、あぜくら会会報、国立文楽劇場友の会会報、振興会ニュース等により、公演の周知を図り、一般の集客に努めた。
- ・ 文楽劇場 7 月公演「文楽素浄瑠璃の会」において、新聞記事掲載が 7 件、出演者のラジオへの出演が 3 件、雑誌記事掲載が 1 件あった。

3. 外部専門家等の意見

(本館)

- ・ 7 月公演「親子で楽しむ日本の音」では、体験コーナーでの子供たちの楽しそうな顔を見て、実際に楽器に触れる大切さを再確認した。また、《さくらさくら》のときは桜の花を、《銀河》のときは星座など、それぞれの曲のイメージを意識した背景の使い方は好感が持てた。全体としては、案内役おふたりのなめらかな解説と手際よい進行、的確でセンスの良い選曲が成功していた。「名曲で知る邦楽の世界」は演奏曲のジャンルも異なり、楽器編成も異なるさまざまな曲、しかも名曲を味わうことのできる

贅沢な演奏会である。女流による「鶯娘」は華やかな演奏で楽しめた。解説における笠松氏の面白い視点や、女流による「鶯娘」の華やかな演奏などが楽しめたが、集客とご案内役の選にやや問題を感じた。

- ・ 10月公演「浄瑠璃名曲選」はジャンルを越えた企画の公演で、河東節を目当てに来た方も、義太夫節を目当てに来た方も、普段は耳にしない別の浄瑠璃を聴けるのが素晴らしい。中では近年の演奏者たちの取り組みが実を結んだといえる河東節「砧」や、清元節「かさね」での清元美寿太夫と清元美治郎による息の合った、聴き応えのある演奏が充実していた。長い曲も多かったことについては一般の方々の意見も聞いてみたいが、公演時間については検討していただきたいと思う。プログラムに三味線の弦の製造過程の文章を載せたことは、よいアイデアであった。
- ・ 10月公演「文楽素浄瑠璃の会」は大夫と三味線の演奏に集中して聴けるのが嬉しく、また素浄瑠璃ファンも育っていて、公演として良い雰囲気であった。最後の「入間詞長者気質」では上方の芸能らしい笑いの趣向が楽しく、義太夫節が庶民的人気を得ていたことの実態が生き生きと感じられた。
- ・ 12月公演「稀曲の会」の上演曲は、いずれも初めて聴くような曲であったが、それぞれ魅力的だった。とくに、善養寺氏の演奏が、曲の特徴をよく捉えていて面白く、また「捨扇」での古風な飾り箏の音色に風情があり、往時の地歌らしさが出ていた。座談ではジャンルそのものの紹介に話が傾いたが、演奏曲にももう少し焦点を当てても良かったのではないかと。国立劇場しかできない事業だと思われるので、入場者数にこだわらず行ってほしい。
- ・ 1月公演「長唄の会」では趣の異なる4曲で、また出演者の組み合わせも良く、長唄の多様性が味わえた。とくに「三曲糸の調」での箏、胡弓、三味線の雰囲気を出した息の合った三味線の掛け合いや、「問答入り勸進帳」での歌舞伎の舞台が目につかぶような演奏はさすがであった。唄方の演技力や謡の素養が求められるような演目も取り上げてほしい。「三曲の会」も様々な編成の曲が並び、盛りだくさんの感があつたがよくできたプログラミングだった。「雪」は三絃と胡弓で聴く機会が少ないが情感たっぷりでもとても良く、「寛濶一休」も富筋でしか演奏されないため、楽しめた。人間国宝とともに演奏する若い方が、さらに腕を磨いて次世代を担ってほしいと思う。

(文楽劇場)

- ・ 7月文楽劇場「文楽素浄瑠璃の会」は、聴きごたえのある魅力的な会として成功していたように感じる。文楽以上に観客が限定される素浄瑠璃の会として、一定レベルの集客に達していることは評価したい。パンフレットについては、わかりやすい内容であり、個々の演者の公演にかける意気込みなど、通常の文楽公演パンフレットとはまた違った読みごたえがあり、制作側の努力を感じた。舞台は音声がよく届くようにセットしてあり、配慮がうかがえる。人気狂言あり、稀曲ありで、全体的にはよい会であった。

4. アンケート調査

7月公演(本館小劇場)、12月公演(本館小劇場)で実施(2回)した。

回答数 340人(配布数 535人、回収率 63.6%)。回答者の 81.8%が概ね満足と答えた(278人)。

【特記事項】

- ・ 平成25年度(第68回)文化庁芸術祭協賛公演(本館10月公演2公演)
- ・ 関西元気文化圏共催事業(文楽劇場7月公演)
- ・ 竹本義太夫300回忌(文楽劇場7月公演)
- ・ 字幕表示装置により、演奏に合わせて歌詞を表示して鑑賞の助けとした。(本館全公演)

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 本館の各公演について、制作意図に沿った出演者、曲目を揃えることができた。演奏やお話・解説も高い水準の舞台が多く、充実した成果を上げることができた。とくに7月「邦楽へのいざない」における子供向けの企画と若手の起用、10月「浄瑠璃名曲選」と10月「文楽素浄瑠璃の会」、12月「稀曲の会」における中堅や重鎮による大曲・稀曲の演奏は国立劇場らしい企画といえ、今後も取り組んでいきたい。
- ・ 文楽劇場7月邦楽公演「文楽素浄瑠璃の会」について、切場語りの豊竹咲大夫と鶴澤燕三による世話物の「伊勢音頭恋寝刃」は、本公演では配役の都合上、「古市油屋」と「奥庭十人斬り」とに分割することが多くなっているものを通して演奏することに意義があった。「箱根霊験壁仇討」は諸般の事情で稀曲となっている演目で、直近で演奏した竹本源大夫の指導のもと、竹本津駒大夫と源大夫の子息鶴澤藤蔵が演奏に挑み、伝承の面で意義があった。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・ 目標入場者数が達成できなかった公演については、企画立案時において構成等の検討を綿密に行うとともに、内容、時期、媒体等、効果的な広報宣伝について担当部署と相談の上、工夫を図る。また、公演日程、開演時間については、公演ごと内容や集客について最適となるよう配慮しながら決定していく。

雅 楽

【制作方針】

6月公演は14時・17時開演の二部構成で、初心者向けの入門公演と高麗楽の管絃や唐楽の大曲を鑑賞する公演を行う。2月公演は、宮内庁式部職楽部の出演による舞楽を上演し、雅楽曲として知名度の高い4曲を取り上げる。平舞、走舞、武舞とバラエティに富んだ構成で舞楽の醍醐味を味わってもらう。

【実績】

1. 公演実績

公演名	劇場	期間	区分	回数	日数	入場者数	入場率	総席数
6月雅楽公演「雅楽を楽しむ」 -高麗楽の管絃と唐楽の大曲-	本館 小劇場	6/29(土)	実績	2回	1日	1,025人	(86.9%)	1,180人
			計画	2回	1日	1,000人	(84.7%)	1,180人
2月雅楽公演「舞楽」	本館 大劇場	2/22(土)	実績	1回	1日	1,268人	(78.8%)	1,610人
			計画	1回	1日	1,550人	(96.3%)	1,610人
【雅楽(本館) 合計】	2公演	(計画:2公演)	実績	3回	2日	2,293人	(82.2%)	2,790人
			計画	3回	2日	2,550人	(91.4%)	2,790人

2. 営業・広報

- ・ マスコミ各社への取材依頼を行い、各公演とも数社によるインタビュー記事掲載に尽力した。ポスター、チラシ、インターネット、あぜくら会報、振興会ニュース等により、公演の周知を図り、一般の集客に努めた。

3. 外部専門家等の意見

- ・ 6月雅楽は、2時の部について、これまでにはない啓蒙的・入門的な内容で、宮丸直子氏の親しみやすい解説や伶楽舎の皆さんの手慣れたプレゼンテーション、休憩時間の雅楽器体験もあり、雅楽をより多くの人に理解していただくという所期の目的は達成されたのではないだろうか。5時の部について、〈林歌〉の聴き比べはあまり例がないので大変興味深かった。また〈団乱旋〉の再復曲は、明治選定譜の負の遺産を軽減する一つの試みとして、学術的にも音楽的にも大変貴重な仕事を聴くことが出来た。
- ・ 2月雅楽は、宮内庁式部職楽部のオーソドックスな演奏による公演は、劇場公演の目標である、「伝統の保存・普及」と「新たな価値の創作」という二本柱の重要な一本として行われ、今後も継続的に続けて行くべきものであろう。一人舞と四人舞、走舞と平舞と武舞、という変化に富んだ4曲の組み合わせで、時間の経過を忘れさせた。各曲の構成内容や舞、舞具等もそれぞれ個性的であり、また音楽的にも、退吹・追吹、八多良拍子、壱越調・平調・太食調、とのように多様で、終始、聴衆の目と耳を捉える続けるものであったのではないだろうか。また、プログラムの解説についても簡潔でわかりやすく、要点を得ており把握しやすかった。

4. アンケート調査

6月公演(本館小劇場)で実施(1回)した。

回答数 437人(配布数 542人、回収率 80.6%)。回答者の 83.8%が概ね満足と答えた(366人)。

【特記事項】

- ・ 6月公演において、14時の部の休憩中に劇場ロビーにて楽器の体験コーナーを行った。

《自己点検評価》

- 良かった点・特色ある点
 - ・ 6月公演は、27年ぶりとなる教室形式の企画で、入門者向けの内容として好評だった。雅楽器の解説や演奏の体験等で雅楽の要点をわかりやすく紹介した点が奏功した。今後も新しい観客層の開拓に励みたい。
 - ・ 2月公演は、華やかな四人舞や動きのある一人舞など舞楽の多様な魅力を十分に伝えることができた。公演プログラムの舞楽概説や曲目解説、エッセイ等もわかりやすい内容だと好評を得た。
- 見直し又は改善を要する点
 - ・ 啓発や普及を目的とした公演と鑑賞に特化した公演の相関を深め、幅広い客層のニーズに応えられるよう、企画内容や広報の手段について一層工夫を図りたい。
 - ・ 目標入場者数に達しなかった公演について、演目立て等を十分に検討し、より多くの観客層に関心を持ってもらえるよう工夫する。

声 明

【制作方針】

9月公演については、文献資料等に基づき、明治以降廃れていた「天野社の舞楽曼荼羅供」を上演する。遠藤徹氏を監修に迎え、神仏習合時代に行われたこの仏教行事における声明と雅楽の関わりを舞台上で具体的に示し、儀式音楽復興の可能性を探る。

11月公演については、声明公演50回目という節目を迎えるにあたり、日本の声明の2つの大きな流れを形成する天台声明と真言声明のうち、9月公演で取り上げた真言声明に続き、天台声明を取り上げる。

【実績】

1. 公演実績

公演名	劇場	期間	区分	回数	日数	入場者数	入場率	総席数
9月声明公演「天野社の舞楽曼荼羅供」	本館 大劇場	9/14(土)	実績	1回	1日	1,252人	(82.4%)	1,520人
			計画	1回	1日	1,450人	(95.4%)	1,520人
11月声明公演「天台宗総本山比叡山延暦寺の声明」	本館 小劇場	11/9(土)	実績	2回	1日	1,142人	(96.8%)	1,180人
			計画	2回	1日	1,000人	(84.7%)	1,180人
【声明(本館)合計】 2公演 (計画:2公演)			実績	3回	2日	2,394人	(88.7%)	2,700人
			計画	3回	2日	2,450人	(90.7%)	2,700人

2. 営業・広報

- ・ マスコミ各社への取材依頼を行い、各公演とも数社によるインタビュー記事掲載に尽力した。ポスター、チラシ、インターネット、あぜくら会報、振興会ニュース等により、公演の周知を図り、一般の集客に努めた。

3. 外部専門家等の意見

- ・ 9月公演は、断絶した儀礼を舞台上演するという国立劇場声明公演における新たな挑戦というべきもので、その英断には感服するばかりである。舞楽がその華やぎを生かせるのは仏教儀礼ともいえ、その頂点に立つものが舞楽曼荼羅供という意味でも今回の公演は意義深い。僧侶と楽人が一つの堂内に会し、雅楽と声明が関わりながら奏する形態を多くの人が国立劇場で体験できたこと、また道場内での僧侶・楽人両者による行道という極めて稀な場に触れたことは、貴重であった。
- ・ 11月公演は、古典的な声明を取り上げ、雅楽と茶の湯作法も同じ舞台上で同時進行するという、これまでにない上演であった。また、天台宗参務の齊藤圓真師による大変分かり易いお話があり、慈覚大師の活躍を、身近なものに感じられる話しぶりで国立劇場の公演に先立つお話として相応しいものであった。

4. アンケート調査

11月公演(本館小劇場)で実施(1回)した。

回答数 358人(配布数 485人、回収率 73.8%)。回答者の 76.5%が概ね満足と答えた(274人)。

【特記事項】

- 9月公演において、あぜくら会会員向けに下記の催しを実施した。
「天野社の舞楽曼茶羅供について」
日時：9月5日(木)14:00、会場：伝統芸能情報館3階レクチャー室
解説：遠藤徹(東京学芸大学准教授)
内容：9月声明公演の集客を図るため、「天野社の舞楽曼茶羅供」についての成り立ちや歴史、高野山僧侶の声明や三方楽所の雅楽のことなどを、豊富なスライドの図版と映像を用い解り易く解説した。
参加者：92人(応募者 118人、当選者 117人)
アンケート実施：回答数 80人(配布数 92人、回答率 87.0%)
- 字幕表示装置により、舞台の進行に合わせて式次第と経文を表示して鑑賞の助けとした。

《自己点検評価》

- 良かった点・特色ある点
 - 9月公演は、歴史的資料に基づき考証した舞楽曼茶羅供を上演した。劇場空間という制約上、上演時間や位置関係に制限があったものの、解説書に現地の図説や法会次第を掲示するとともに、演出方法に工夫を凝らしたことで、優れた舞台効果をあげることができた。
 - 11月公演は、天台宗の重要な法会を取り上げ充実した成果を上げた。上演に際し、慈覚大師と天台声明の関わりについて解説したことで、より理解しやすい内容とすることができた。
- 見直し又は改善を要する点
 - 9月公演では、公演の趣旨を明確に伝えるためには、公演名にももう少し工夫が必要であった。舞台芸術ではない芸能を扱うため上演方法を巡り異論が生じる場合もあるが、企画立案時より演目内容等に一層吟味を重ねるとともに関係部署との連携を深め、最良な舞台を構成できるよう工夫をしたい。

民俗芸能

【制作方針】

6月公演では、福島県の芸能を特集する。国立劇場の公演でこれまで福島県の芸能を取り上げる機会が少なかったこと、また震災の影響が県全体に及んでいることから、福島県全域から様々な種類の芸能を取り上げることとした。1月公演では、これまでの3回の公演で紹介しきれなかった数多くの芸能の中から選りすぐりのものを紹介することとする。

地域の芸能を受け継ぐ人々の舞台上で躍動する姿が、地域文化復興の象徴となり、また復興を願う人々の輪がさらに広がっていくことを願っている。

【実績】

1. 公演実績

公演名	劇場	期間	区分	回数	日数	入場者数	入場率	総席数
6月民俗芸能公演「東日本大震災復興支援 東北の芸能Ⅲ 福島-伝承の技、つながる心-」	本館 小劇場	6/8(土)	実績	2回	1日	775人	(65.7%)	1,180人
			計画	2回	1日	1,060人	(89.8%)	1,180人
1月民俗芸能公演「東日本大震災復興支援 東北の芸能Ⅳ[岩手・宮城・福島3県の沿岸地域より]」		1/25(土)	実績	2回	1日	724人	(61.4%)	1,180人
			計画	2回	1日	900人	(76.3%)	1,180人
【民俗芸能(本館) 合計】	2公演 (計画:2公演)	実績	4回	2日	1,499人	(63.5%)	2,360人	
		計画	4回	2日	1,960人	(83.1%)	2,360人	

2. 営業・広報

- マスコミ各社への取材依頼を行い、各公演とも数社によるインタビュー記事掲載に尽力した。ポスター、チラシ、インターネット、あぜくら会会報、振興会ニュース等により、公演の周知を図り、一般

の集客に努めた。

3. 外部専門家等の意見

- ・ 6月民俗芸能公演は、震災の被害の大きさを伝えながらも、復興を支援するという姿勢が最大限に表れ、見ていたいへん気持ちのよい公演だった。在地における神前等での実修や公演に加え、国立劇場での公演はまさに復興支援としての意味をもつ。実現に向けて努力された関係者に敬意を表したい。また、懸田氏の解説は、東日本大震災の被災状況と現状も含めたもので、的確なものであった。
- ・ 1月民俗芸能公演は、バラエティに富んだ民俗芸能が選ばれており、この地域の芸能文化の厚みがよくわかった。被災地3県には民謡、舞踊、田楽、風流、神楽、獅子舞など、多種多様な民俗芸能伝承の存在が理解できるように工夫されていたのが特色であった。震災復興支援というと蕭然とした雰囲気を感じてしまいがちだが、そうならなかったのは企画の良さでもあり、なにより出演芸能の魅力によるといえよう。

4. アンケート調査

6月公演、1月公演で実施（2回）した。

回答数 647人（配布数 899人、回収率 72.0%）。回答者の 82.7%が概ね満足と答えた（535人）。

【特記事項】

（6月公演）

- ・ 後援：福島県、福島県教育委員会
- ・ ロビーで、出演団体の協力により「福島の芸術文化」支援募金をおこなった（義援金は、福島県内の芸術文化の支援に充てるため、財団法人福島県文化振興財団に寄附）。
- ・ ロビーで、出演3団体の市町村を含む福島県の物産展を開催した。
- ・ 懸田弘訓氏の撮影・提供により「東日本大震災 被災後に再興した福島県の民俗芸能」14団体の活動を紹介する写真パネルコーナーをロビーに設けた。
- ・ 字幕表示装置により、演奏に合わせて歌詞等を表示して鑑賞の助けとした。

（1月公演）

- ・ 16時の部において皇太子同妃両殿下の行啓が行われた。
- ・ 後援：岩手県、宮城県、福島県、岩手県教育委員会、宮城県教育委員会、福島県教育委員会
- ・ ロビーで、出演団体の協力により支援募金をおこなった（義援金は、出演3県の芸術文化の支援に充てるため、公益財団法人岩手県文化振興事業団、公益財団法人宮城県文化振興財団及び財団法人福島県文化振興財団に寄附）。
- ・ ロビーで、出演3県の物産展を開催した。
- ・ 字幕表示装置により、演奏に合わせて歌詞等を表示して鑑賞の助けとした。

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 6月公演は、震災等の影響により現地での祭礼を中断したり民俗芸能の上演を控えたりする状況下にあったものの、知名度の高い芸能や上演頻度の稀少な芸能を取り上げることができ、充実した成果を上げた。福島県内の各地より、多彩な芸能を招いたことで広範な支援に繋がった。また監修者を解説者に起用したことでより詳細な説明を提供することができた。
- ・ 1月公演は、過去3回の公演で取り上げることが出来なかった8つの芸能を上演し、東北に伝わる芸能の多彩さを印象付けることができた。また出演者が、甚大な被害を乗り越えて力強く舞台上で躍動する姿を伝えた。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・ 目標入場者数を達成することができなかった。企画立案時より構成等の検討を重ね、多様なメディアを用いて効果的な広報活動が展開できるよう工夫したい。

特別企画

【制作方針】

本館の4月「明日をになう新進の舞踊・邦楽鑑賞会」は、将来の日本舞踊界・邦楽界を担う新進気鋭の演者を起用し、主役や大曲に挑んでもらう舞踊と邦楽の合同公演。9月「日本の太鼓」は、日本全国に伝わる民俗行事や神事で打たれる太鼓から、楽器としての音楽的要素に注目した創作太鼓まで、日本の太鼓芸能を幅広く紹介する。

文楽劇場の5月「新進と花形による舞踊・邦楽鑑賞会」は、現在躍進目覚ましい舞踊家・演奏家を起用し、将来の舞踊界・邦楽界を展望する公演である。とくに関西在住の期待の新進・花形実演家を厳選する。9月特別企画公演「田楽と猿楽 ―中世芸能をひもとく―」は、中世を代表する芸能より、「田楽」と「猿楽（翁猿楽）」にスポットをあてるテーマ公演。中世の趣をよく伝えるふたつの芸能を同時に取り上げ、多岐にわたる中世芸能の世界をひもとく一機会とする。

【実績】

1. 公演実績

公演名	劇場	期間	区分	回数	日数	入場者数	入場率	総席数
4月舞踊・邦楽公演「明日をになう新進の舞踊・邦楽鑑賞会」	本館 小劇場	4/20(土)	実績	1回	1日	467人	(79.2%)	590人
			計画	1回	1日	420人	(71.2%)	590人
9月特別企画公演「日本の太鼓-祈り、千里に響く-」	本館 大劇場	9/28(土)	実績	1回	1日	1,176人	(73.0%)	1,610人
			計画	1回	1日	1,050人	(65.2%)	1,610人
【特別企画(本館) 小計】 2公演 (計画:2公演)			実績	2回	2日	1,643人	(74.7%)	2,200人
			計画	2回	2日	1,470人	(66.8%)	2,200人
5月舞踊・邦楽公演「新進と花形による舞踊・邦楽鑑賞会」	文楽 劇場	5/11(土)	実績	1回	1日	366人	(54.1%)	677人
計画			1回	1日	400人	(59.1%)	677人	
9月特別企画「田楽と猿楽-中世芸能をひもとく-」		9/23(月・祝)	実績	1回	1日	706人	(93.8%)	753人
			計画	1回	1日	650人	(86.3%)	753人
【特別企画(文楽劇場) 小計】 2公演 (計画:2公演)			実績	2回	2日	1,072人	(75.0%)	1,430人
			計画	2回	2日	1,050人	(73.4%)	1,430人
【特別企画 合計】 4公演 (計画:4公演)			実績	4回	4日	2,715人	(74.8%)	3,630人
			計画	4回	4日	2,520人	(69.4%)	3,630人

2. 営業・広報

- ・ マスコミ各社への取材依頼を行い、各公演とも数社によるインタビュー記事掲載に尽力した。ポスター、チラシ、インターネット、あぜくら会会報、国立文楽劇場友の会会報、振興会ニュース等により、公演の周知を図り、一般の集客に努めた。
- ・ 文楽劇場5月舞踊・邦楽公演は新聞記事7件、雑誌記事1件、9月特別企画公演は新聞記事3件、雑誌記事3件の掲載があった。

3. 外部専門家等の意見

(本館)

- ・ 4月舞踊・邦楽公演は、若い舞踊家や演奏家たちにとって有意義な良い機会で、意気込みが感じられる楽しみな公演である。邦楽については、「真虚霊」のメリ、カリの技巧がよく、音色の変化も多彩であった。また、「問答入り勸進帳」では弁慶がおとなしかったが、丁寧な演奏で、三味線も安定していた。舞踊については、「供奴」は緊張しているのか、力んでいるのか、軽快さに欠け、弾むような躍動感が不足する。決まり決まりの見得ではこの人のキリッとした味が出た。「独楽」は新春舞踊大会より緊張感がみられた。舞踊2番に限って言えば立役の舞踊が並んだのは、観客の立場を考えればやや惜しい気がした。近年、伝統芸能の若手の人材不足が懸念されるなか、当該公演の果たす役割はますます重要である。
- ・ 9月「日本の太鼓」は、長く伝承されてきた伝統的な宗教儀礼や民俗芸能の中での太鼓演奏と、現代の創作太鼓演奏の組み合わせであった。「大般若祈禱太鼓」は、日本の太鼓の多様性を示すものとして多くの人の興味を惹いたのではないかと思う。「浪板虎舞」は、東日本大震災の被災地であるにもかかわらず、伝承が滞ることなく力強い姿をうかがうことができた。サスケによる「虫送り」は、太鼓に鉦を交えた演奏で、習俗としての「虫送り」の雰囲気が出ていた。「東京盆太鼓」は、質の高いもので、良い意味で遊びや余裕が感じられた。ただし、今回は「祈り、千里に響く」がテーマで、前半二者についてはこれが理解されたと思うが、後者の創作太鼓でこのテーマが表現できていたかどうかは、見解が

分かれるのではなからうか。

(文楽劇場)

- ・ 文楽劇場 5 月舞踊・邦楽公演は、関西で舞踊・邦楽の若手実力派を毎年発掘するのは、なかなか難しい面がある。しかしそれなりの顔ぶれを揃えたのは結構なことである。京都にのみ伝承されている柳川三味線が国立文楽劇場に登場するのは初めてではないだろうか。それだけでも大いに意義がある。林美音子もまさに旬の演奏者で申し分がない。今回、それぞれの舞台が始まる前に、演者の抱負がアナウンスされた。それ自体は新しい試みで悪くはない。
- ・ 文楽劇場 9 月特別企画公演は、民俗芸能の公演ということで、限られた観客の関心を惹くにとどまりかねないところを、観賞態度も熱心な観客をこれほど集めたことは、これまでの特別企画公演の成果として注目される。田楽と猿楽をテーマに取り上げたのは、現在に残る能の淵源という、極めて興味深い問題を真正面に出したものであり、この企画は、能や古典芸能の愛好者や研究者はもとより、広く、日本の「心」のルーツを知りたいと思う人々の関心を引き、会場は熱心な観客で埋め尽くされていた。

4. アンケート調査

(本館)

9 月特別企画公演で実施(1 回)した。

回答数 750 人(配布数 1,028 人、回収率 73.0%)。回答者の 88.3%が概ね満足と答えた(662 人)。

(文楽劇場)

9 月特別企画公演で実施(1 回)した。

回答数 333 人(配布数 518 人、回収率 64.3%) 回答者の 86.5%が概ね満足と答えた(288 人)。

【特記事項】

- ・ 字幕表示装置により、詞章等を表示し鑑賞の助けとした。(本館 4 月舞踊・邦楽、文楽劇場 9 月特別企画公演)
- ・ 本館 9 月特別企画公演「日本の太鼓」において、株式会社浅野太鼓楽器店の協力を得た。
- ・ 関西元気文化圏共催事業(文楽劇場 5 月舞踊・邦楽公演、9 月特別企画公演)
- ・ 大阪文化祭参加(文楽劇場 5 月舞踊・邦楽公演)
- ・ 文楽劇場 5 月舞踊・邦楽公演プレ講座「もっと知りたい!三味線音楽~柳川三味線(地歌)と大和楽」を開催した(4 月 27 日、小ホール、参加人数 154 名)。
- ・ 文楽劇場 9 月特別企画公演プレ講座「民俗にみる田楽と翁猿楽—失われた田楽と能の源流—」を開催した(9 月 1 日、小ホール、参加人数 172 名)。

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

(本館)

- ・ 4 月舞踊・邦楽公演は、目標入場者数を達成することができた。舞踊については、それぞれに挑戦を試みて取り組み、今後の技芸の向上につながる舞台であった。邦楽についても、それぞれのジャンルでも屈指の名曲の上演となり、この機会に取り組むことで、今後の技芸の向上が期待されるプログラムであった。また、演奏においても一定の成果を得、公演の目的を達成できたと言える。
- ・ 9 月公演は、民俗芸能のみならず仏教儀礼や創作太鼓の演奏も取り入れ、太鼓の多様な表現方法を紹介した。現在では世界中に広がっているその魅力を、高度な技術を持つ米国人奏者等を招くことで明示できたのではないかと。集客面においては昨年よりも改善が図られた。

(文楽劇場)

- ・ 5 月舞踊・邦楽公演は、邦楽では、登場することの比較的少ない尺八の掛け合い(現代曲)と、地歌の最古の流派である柳川三味線から昭和に誕生した大和楽までバラエティに富んだ構成で、若手が大曲に挑んだ長唄舞踊や花形の安定した地歌舞など、熱気にあふれた舞台が展開され、舞踊邦楽界の将来を展望する内容となった。それぞれの上演前に、自己紹介や舞台への思いなどのコメントを場内アナウンスで流し、実演家と客席との距離感を近づける試みとした。また、尺八「アキ」の成果に対して、出演者の小林鈴純、谷保範が大阪府、大阪市及び公益財団法人関西・大阪 21 世紀協会が共同で実施している「平成 25 年度大阪文化祭賞」の奨励賞を受賞した。
- ・ 9 月特別企画公演では、那智の田楽が 24 年末にユネスコ無形文化遺産に登録決定したばかりというタイムリーな時期の開催でもあり、田楽と翁猿楽の代表格を同時に取り上げた中世芸能公演として、民俗芸能、能楽など多方面にわたる中世芸能の世界への入り口としてファンの関心をさそい大入りとなった。

○ 見直し又は改善を要する点

(本館)

- ・ 4月舞踊・邦楽公演について、演目選定に当たっては、今後とも演者の意欲等も十分考慮しつつ、主体性をもって取り組んでいきたい。
- ・ 9月公演は、公演のテーマ性と演目内容の関係について理解されづらい面があった。今後は企画立案時より構成等の検討を綿密に行うとともに、広報物や解説書等で企画の趣旨が十分伝わるような工夫を重ねたい。

(文楽劇場)

- ・ 5月舞踊・邦楽公演は、新聞記事の効果もあり例年より健闘したが、目標入場者数には今一步届かなかった。引き続き公演の周知に努める。

2-(1)-④ 大衆芸能

《総表》

【制作方針】

大衆芸能には、落語・浪曲・講談のほか、太神楽曲芸・漫才・漫談・コント・奇術・ものまね・俗曲等多様なジャンルがある。国立演芸場では、これらのジャンルを幅広く取り込むと共に、様々な出演者による多彩な公演を企画する。

「定席公演」は、落語協会、落語芸術協会の出演者を中心とし、多様なジャンルを交えて幅広い観客層に楽しんでいただく公演。「若手新人公演（花形演芸会）」は、各演芸ジャンルの新人発掘、育成のため、若手を起用した番組構成による公演。「新春国立名人会」は、各ジャンルの豪華なメンバーと寿獅子の舞で新春に相応しい公演。「国立名人会」は、落語を中心に名人上手といわれる出演者を主とし、定席で聴くチャンスの少ない演目なども取り上げる公演。「特別企画公演」は、公演ごとにテーマを設定して企画する公演とする。

文楽劇場「師走浪曲名人会」は関西を代表する浪曲師が顔を揃える恒例の浪曲公演。それぞれの得意の演目を披露する番組構成で、浪曲の魅力を引き出す公演を目指す。5月「浪曲錬声会」は次代を担う若手浪曲師の「語りを向上させる」ことを目的に、若手を中心とした番組構成で、浪曲の魅力をアピールする公演とする。「上方演芸特選会」は、上方演芸4団体(上方落語協会・浪曲親友協会・関西演芸協会・関西芸能親和会)の総力を結集し、落語・漫才・浪曲・太神楽・講談など多彩で昔懐かしい寄席の雰囲気を実現した公演とする。

【実績】

1. 公演実績

公演名	公演数 劇場	区分	回数	日数	入場者数	入場率	総席数
【定席公演】	22 公演 演芸場	実績	244 回	219 日	33,198 人	(45.4%)	73,200 人
		計画	241 回	219 日	36,000 人	(49.8%)	72,300 人
【花形演芸会】	12 公演 演芸場	実績	12 回	12 日	3,349 人	(93.0%)	3,600 人
		計画	12 回	12 日	3,300 人	(91.7%)	3,600 人
【新春国立名人会】	1 公演 演芸場	実績	8 回	6 日	2,329 人	(97.0%)	2,400 人
		計画	8 回	6 日	2,300 人	(95.8%)	2,400 人
【国立名人会】	11 公演 演芸場	実績	11 回	11 日	3,069 人	(93.0%)	3,300 人
		計画	11 回	11 日	3,080 人	(93.3%)	3,300 人
【特別企画公演】	10 公演 演芸場	実績	14 回	14 日	3,789 人	(90.2%)	4,200 人
		計画	14 回	14 日	3,850 人	(91.7%)	4,200 人
【大衆芸能(演芸場)合計】	56 公演	実績	289 回	262 日	45,734 人	(52.7%)	86,700 人
		計画	286 回	262 日	48,530 人	(56.6%)	85,800 人
【師走浪曲名人会】	1 公演 文楽劇場	実績	1 回	1 日	610 人	(81.0%)	753 人
		計画	1 回	1 日	700 人	(93.0%)	753 人
【浪曲錬声会】	1 公演 文楽劇場小ホール	実績	2 回	1 日	339 人	(106.6%)	318 人
		計画	2 回	1 日	260 人	(81.8%)	318 人
【上方演芸特選会】	6 公演 文楽劇場小ホール	実績	24 回	24 日	3,471 人	(91.0%)	3,816 人
		計画	24 回	24 日	2,880 人	(75.5%)	3,816 人

【大衆芸能(文楽劇場)合計】	8 公演	実績	27 回	26 日	4,420 人	(90.4%)	4,887 人
		計画	27 回	26 日	3,840 人	(78.6%)	4,887 人
【大衆芸能公演 総合計】	64 公演	実績	316 回	288 日	50,154 人	(54.8%)	91,587 人
		計画	313 回	288 日	52,370 人	(57.7%)	90,687 人

2. 営業・広報

- ・ 広報として、インターネット・あぜくら会会報・振興会ニュースの配布、公演ガイド等で国立演芸場に係る公演の周知に努めた。また、公共施設、学校、デパート、近隣の施設などの団体顧客にポスター・チラシを配布したほか、新聞記事、雑誌記事、新聞広告等により公演の宣伝を図った。
- ・ 文楽劇場では、広報としてチラシ・ポスター・インターネット・国立文楽劇場友の会会報・振興会ニュースの配布等で公演の周知に努めた。また、地元ラジオ局に働きかけ、演者の番組出演や番組内での視聴者プレゼントによる公演紹介を行った。12 月大衆芸能公演「師走浪曲名人会 あなたが選ぶ十八番」では、出演者 4 名が出席して記者会見を行い、出演者それぞれの演目から観客のリクエストにより 1 曲ずつ上演する企画等を PR した。

3. 外部専門家等の意見

(演芸場)

- ・ 国立演芸場では、他の寄席では見られない出演者が見られるのがよい。
- ・ 定席において真打昇進披露公演がシステムとしてできるようになったことを評価する。
- ・ 名人会の人気の高さが感じられた。
- ・ 花形演芸会は、出演者にとって最高の登竜門であることは間違いない。
- ・ 「立川流落語会」、「五代目圓楽一門会」は国立演芸場ならではの公演で、今後も続けてほしい。

(文楽劇場)

- ・ (師走浪曲名人会) 文楽劇場が関西浪曲界の発展と振興に果たしておられる役割の大きさは、計り知れないと思う。(浪曲錬声会) 将来を担う観客、演者の両方を育成できればこの会はより意義深いものになると思う。(上方演芸特選会) お客さんの入りは 8~9 割程度で、欲を言えば満席になって欲しいが、良き方だと思う。

4. アンケート調査

(演芸場)

12 公演で実施 (12 回) した。

回答数 1,068 人 (配布数 3,180 人、回収率 33.6%)。回答者の 93.1%が概ね満足と答えた (994 人)。

【特記事項】

- ・ 平成 25 年度 (第 68 回) 文化庁芸術祭主催公演 (本館の 10 月実施の 1 公演)
- ・ 平成 25 年度 (第 68 回) 文化庁芸術祭協賛公演 (本館の 10 月・11 月実施の 7 公演、文楽劇場 11 月上方演芸特選会)
- ・ 関西元気文化圏共催事業 (文楽劇場)
- ・ 大阪文化祭参加 (文楽劇場 5 月上方演芸特選会・5 月浪曲錬声会)

《数値目標の達成状況》

【目標入場者数の達成状況】

実績 50,154 人 / 目標 52,370 人 (達成度 95.8%)

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

(演芸場)

- ・ 鹿芝居や真打昇進披露公演など特色のある定席公演が人気を集めた。若手新人公演では、次代を担う人材の発掘に取り組み、コンテスト形式のため、出演者も熱演し、そのため観客の興味も惹いている。名人会は毎月すぐれた出演者で人気を集めているが、特に 10 月名人会「芸術祭寄席」は、桂歌丸を始め、人気実力のある出演者を揃えた見ごたえのある公演となった。特別企画公演はシリーズ化した公演のほか、3 年ぶりとなる「講談の会」も多くの観客の支持を得ることができた。「親子で楽しむ演芸会」は、親子連れの観客で満席となる活況を呈した。

(文楽劇場)

- ・ 「上方演芸特選会」は落語、漫才、浪曲、諸芸と特色ある顔ぶれによる文楽劇場ならではの充実した番組を構成できた。団体客を含めた集客も充実し、各公演の入場者数も安定しており、目標を上回る結果となった。

○ 見直し又は改善を要する点

(演芸場)

- ・ 公演になるべく企画性を持たせることや新規団体の開拓など、観客の拡大に努めていく必要がある。

(文楽劇場)

- ・ 大衆芸能公演全体に観客の高齢化が目立ってきた。番組構成に工夫を凝らし、新しい観客層の開拓も進めていきたい。

《24年度評価への対応》

【評価】

(文科省評価委員会)

- ・ 今後は、新人の発掘・育成、新作の募集など、将来を見据えた取組の継続的な実施が期待される。(①)

(振興会評価委員会)

- ・ 23年度は東日本大震災の影響が残っていたが、24年度は全体的に回復がみられる。定席公演も入場率51.7%と持ち直したが、震災前(22年度)にはまだ届かない。営業努力によって、定席公演の入場率を上げていくことが今後の課題である。定席にできるだけ人気者を出演させる努力を続けてほしい。(②)

【対応】

①企画内容・配役の工夫

演芸場では、若手の発掘・育成を目的として毎年「花形演芸会」を行い、表彰することで向上意欲を喚起し、成果をあげている。また新作脚本募集も毎年実施し、脚本家の発掘に努めている。

文楽劇場の「上方演芸特選会」(年6回)では、出演者を上方演芸4団体と協議して選定しているが、近年は固定化する傾向があり、集客が伸び悩む傾向にあった。25年度からは、今まで出演歴のなかった実演家の中から、将来有望と思われる若手・中堅を劇場側からも指名して、出演のための働きかけを始め、効果をあげつつある。

②定席公演の入場率向上に向けた取組

演芸場の定席公演の入場率は23年度が43.2%、24年度が51.7%とやや持ち直したが、引き続き観客増を図るため、目標未達となった公演については要因の分析に努める。営業面では、中学生・高校生、シルバー層、文化活動サークルの団体等を中心に一層の営業努力を重ね、顧客の新規開拓に努める。

定席公演（上席・中席）

【制作方針】

落語協会、落語芸術協会を中心とした出演者による落語に加え、講談、太神楽曲芸、漫才、奇術及びピコント等いわゆる色物も取り上げて多種多彩な番組構成とする。また、鹿芝居や真打昇進披露公演、ネタ出しの公演なども行う。

【実績】

1. 公演実績

公演名	劇場	期間	区分	回数	日数	入場者数	入場率	総席数
4 月上席	演芸場	4/1(月)～10(水)	実績	11回	10日	769人	(23.3%)	3,300人
			計画	11回	10日	1,000人	(30.3%)	3,300人
4 月中席		4/11(木)～20(土)	実績	11回	10日	2,612人	(79.2%)	3,300人
			計画	11回	10日	2,300人	(69.7%)	3,300人
5 月中席		5/11(土)～20(月)	実績	11回	10日	1,345人	(40.8%)	3,300人
			計画	11回	10日	1,400人	(42.4%)	3,300人
6 月上席		6/1(土)～10(月)	実績	11回	10日	1,362人	(41.3%)	3,300人
			計画	11回	10日	1,300人	(39.4%)	3,300人
6 月中席		6/11(火)～20(木)	実績	11回	10日	1,385人	(42.0%)	3,300人
			計画	11回	10日	1,400人	(42.4%)	3,300人
7 月上席		7/2(火)～10(水)	実績	13回	9日	2,547人	(65.3%)	3,900人
			計画	10回	9日	2,200人	(73.3%)	3,000人
7 月中席		7/11(木)～20(土)	実績	11回	10日	951人	(28.8%)	3,300人
			計画	11回	10日	1,300人	(39.4%)	3,300人
8 月上席		8/1(木)～10(土)	実績	11回	10日	1,379人	(41.8%)	3,300人
			計画	11回	10日	1,700人	(51.5%)	3,300人
8 月中席		8/11(日)～20(火)	実績	11回	10日	3,435人	(104.1%)	3,300人
			計画	11回	10日	3,200人	(97.0%)	3,300人
9 月上席		9/1(日)～10(火)	実績	11回	10日	627人	(19.0%)	3,300人
			計画	11回	10日	1,100人	(33.3%)	3,300人
9 月中席	9/11(水)～20(金)	実績	11回	10日	822人	(24.9%)	3,300人	
		計画	11回	10日	1,400人	(42.4%)	3,300人	
10 月上席	10/1(火)～10(木)	実績	11回	10日	1,033人	(31.3%)	3,300人	
		計画	11回	10日	1,100人	(33.3%)	3,300人	
10 月中席	10/11(金)～20(日)	実績	11回	10日	741人	(22.5%)	3,300人	
		計画	11回	10日	1,100人	(33.3%)	3,300人	
11 月上席	11/1(金)～10(日)	実績	11回	10日	2,323人	(70.4%)	3,300人	
		計画	11回	10日	2,100人	(63.6%)	3,300人	
11 月中席	11/11(月)～20(水)	実績	11回	10日	1,015人	(30.8%)	3,300人	
		計画	11回	10日	1,400人	(42.4%)	3,300人	
12 月上席	12/1(日)～10(火)	実績	11回	10日	969人	(29.4%)	3,300人	
		計画	11回	10日	1,300人	(39.4%)	3,300人	
12 月中席	12/11(水)～20(金)	実績	11回	10日	993人	(30.1%)	3,300人	
		計画	11回	10日	1,300人	(39.4%)	3,300人	
1 月中席	1/11(土)～20(月)	実績	11回	10日	2,465人	(74.7%)	3,300人	
		計画	11回	10日	2,500人	(75.8%)	3,300人	

2 月上席		2/1(土)～10(月)	実績	11 回	10 日	1,592 人	(48.2%)	3,300 人
			計画	11 回	10 日	1,300 人	(39.4%)	3,300 人
2 月中席		2/11(火・祝)～20(木)	実績	11 回	10 日	3,072 人	(93.1%)	3,300 人
			計画	11 回	10 日	3,000 人	(90.9%)	3,300 人
3 月上席		3/1(土)～10(月)	実績	11 回	10 日	746 人	(22.6%)	3,300 人
			計画	11 回	10 日	1,300 人	(39.4%)	3,300 人
3 月中席		3/11(火)～20(木)	実績	11 回	10 日	1,015 人	(30.8%)	3,300 人
			計画	11 回	10 日	1,300 人	(39.4%)	3,300 人
【定席】	22 公演	(計画:22 公演)	実績	244 回	219 日	33,198 人	(45.4%)	73,200 人
			計画	241 回	219 日	36,000 人	(49.8%)	72,300 人

※ 追加貸切公演を計 3 回実施した。(7 月上席)

2. 営業・広報

- ・ マスコミへの宣伝材料の提供及びポスター・チラシ・インターネット・あぜくら会会報・振興会ニュース、新聞広告、演芸雑誌「東京かわら版」に公演案内等を行った。
- ・ 公演日程に合わせ、学校や各種団体へ企画書を提出し、6 月には前年に引き続き「寄席の日」(6 月の第 1 月曜日)に落語協会、落語芸術協会及び都内の 4 演芸場と提携し、当日券の割引を実施した。
- ・ スタンプラリーも引き続き実施し、リピーターによる観客増につなげるよう努めた(1 回の観劇でスタンプを 1 回押し、スタンプ 5 個で粗品進呈)。また夜の公演の鑑賞者にはスタンプを 2 回押して販売促進に努めた。
- ・ 2 月上席の節分の日に入場者全員に豆を配布し、舞台からも豆撒きをして大いに喜ばれた。また、3 月上席の雛祭には入場者全員に雛あられを配布し、サービスの向上に努めた。

3. 外部専門家等の意見

- ・ 年度初めの定席は例年苦しいが、4 月中席の桂歌丸はすごい。
- ・ 真打昇進披露公演の都内寄席 5 館の合同チラシができるようになったのは大きい。

4. アンケート調査

定席公演では実施せず、若手新人公演・国立名人会・特別企画公演において実施した。

【特記事項】

- ・ 平成 25 年度(第 68 回)文化庁芸術祭協賛公演(10 月・11 月公演)

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 7 月、11 月の真打昇進襲名披露公演や桂歌丸による 4 月、8 月公演、2 月の鹿芝居など、恒例になっている企画的な公演が人気を博している。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・ 昨年度の 5 月中席「春風亭一之輔真打昇進披露」、11 月中席「十一代桂文治襲名披露」などのような話題性のある公演がなかったため、観客数が減少した。今後はできるだけ企画性のある公演を考えていく必要がある。

若手新人公演(花形演芸会)

【制作方針】

若手芸人の発掘及び育成を目的とし、幅広く多種多様な分野からの出演者で番組構成を企画する。あわせて年間を通して審査を行い、優秀な出演者には賞を授与してこれを奨励する。

【実績】

1. 公演実績

公演名	劇場	期間	区分	回数	日数	入場者数	入場率	総席数
4 月花形演芸会(第 407 回)	演芸場	4/21(日)	実績	1 回	1 日	283 人	(94.3%)	300 人
			計画	1 回	1 日	280 人	(93.3%)	300 人

5 月花形演芸会(第 408 回)	5/25(土)	実績	1 回	1 日	295 人	(98.3%)	300 人
		計画	1 回	1 日	280 人	(93.3%)	300 人
6 月花形演芸会(第 409 回)	6/29(土)	実績	1 回	1 日	296 人	(98.7%)	300 人
		計画	1 回	1 日	280 人	(93.3%)	300 人
7 月花形演芸会(第 410 回)	7/28(日)	実績	1 回	1 日	289 人	(96.3%)	300 人
		計画	1 回	1 日	280 人	(93.3%)	300 人
8 月花形演芸会(第 411 回)	8/17(土)	実績	1 回	1 日	302 人	(100.7%)	300 人
		計画	1 回	1 日	270 人	(90.0%)	300 人
9 月花形演芸会(第 412 回)	9/21(土)	実績	1 回	1 日	283 人	(94.3%)	300 人
		計画	1 回	1 日	280 人	(93.3%)	300 人
10 月花形演芸会(第 413 回)	10/19(土)	実績	1 回	1 日	295 人	(98.3%)	300 人
		計画	1 回	1 日	270 人	(90.0%)	300 人
11 月花形演芸会(第 414 回)	11/16(土)	実績	1 回	1 日	289 人	(96.3%)	300 人
		計画	1 回	1 日	270 人	(90.0%)	300 人
12 月花形演芸会(第 415 回)	12/21(土)	実績	1 回	1 日	289 人	(96.3%)	300 人
		計画	1 回	1 日	280 人	(93.3%)	300 人
1 月花形演芸会(第 416 回)	1/18(土)	実績	1 回	1 日	291 人	(97.0%)	300 人
		計画	1 回	1 日	270 人	(90.0%)	300 人
2 月花形演芸会(第 417 回)	2/8(土)	実績	1 回	1 日	235 人	(78.3%)	300 人
		計画	1 回	1 日	270 人	(90.0%)	300 人
3 月花形演芸会(第 418 回)	3/8(土)	実績	1 回	1 日	202 人	(67.3%)	300 人
		計画	1 回	1 日	270 人	(90.0%)	300 人
【花形演芸会】 12 公演 (計画:12 公演)		実績	12 回	12 日	3,349 人	(93.0%)	3,600 人
		計画	12 回	12 日	3,300 人	(91.7%)	3,600 人

2. 営業・広報

- ・ マスコミへの宣伝材料の提供、ポスター・チラシ・インターネット・あぜくら会会報・振興会ニュース、新聞広告、演芸雑誌「東京かわら版」等により公演の周知を図った。

3. 外部専門家等の意見

- ・ 2 月 8 日「花形演芸会」は大雪であったが、内容的には良かった。
- ・ 「花形」の卒業生は結構いい。やはり「花形演芸会」というのはすごいなあと感じる。

4. アンケート調査

10 月、1 月、2 月公演で実施 (3 回) した。

回答数 261 人(配布数 695 人、回収率 37.6%)。回答者の 96.9%が概ね満足と答えた(253 人)。

【特記事項】

- ・ 平成 25 年度花形演芸大賞受賞者
大賞：桂吉弥
金賞：春風亭一之輔、ポカスカジャン、U 字工事
銀賞：三遊亭萬橘、三遊亭天どん、蜷気楼龍玉

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 今年度は上方からの出演者としては久々に桂吉弥が大賞に輝いた。今後の活動にも弾みがつくと期待される。客席に若い観客層が目立ち、若手の芸人の成長を期待し、応援していこうとする雰囲気が見られた。このことも出演者の励みとなり、この公演を一層魅力的なものとしている。
- ・ 過去の大賞受賞者は柳亭市馬、春風亭昇太、立川談春、柳家喬太郎、柳家三三などで、いずれも評価の高い演者に育っており、大衆芸能の登竜門としての役割を今後も果たしていきたい。

新春国立名人会／国立名人会

【制作方針】

名人会は、各分野の実力者といわれる出演者を中心に構成し、定席では聴く機会の少ない演目等も取り

上げる公演とする。新春名人会は、落語協会、落語芸術協会、三遊亭圓楽一門や講談、浪曲、漫才、奇術等各ジャンルの豪華なメンバーが日替りで出演し、太神楽曲芸協会会員等による寿獅子を加え、新春にふさわしい華やかな公演とする。

【実績】

1. 公演実績
(新春名人会)

公演名	劇場	期間	区分	回数	日数	入場者数	入場率	総席数
新春国立名人会	演芸場	1/2(木)～7(火)	実績	8回	6日	2,329人	(97.0%)	2,400人
			計画	8回	6日	2,300人	(95.8%)	2,400人

(国立名人会) ※目標入場者数：1公演当り 280人 (93.3%)

公演名	劇場	期間	区分	回数	日数	入場者数	入場率	総席数
4月国立名人会(第362回)	演芸場	4/29(月・祝)	実績	1回	1日	297人	(99.0%)	300人
5月国立名人会(第363回)		5/26(日)	実績	1回	1日	292人	(97.3%)	300人
6月国立名人会(第364回)		6/5(水)	実績	1回	1日	295人	(98.3%)	300人
7月国立名人会(第365回)		7/21(日)	実績	1回	1日	275人	(91.7%)	300人
8月国立名人会(第366回)		8/25(日)	実績	1回	1日	291人	(97.0%)	300人
9月国立名人会(第367回)		9/22(日)	実績	1回	1日	280人	(93.3%)	300人
10月国立名人会(第368回)		10/26(土)	実績	1回	1日	261人	(87.0%)	300人
11月国立名人会(第369回)		11/30(土)	実績	1回	1日	202人	(67.3%)	300人
12月国立名人会(第370回)		12/22(日)	実績	1回	1日	294人	(98.0%)	300人
2月国立名人会(第371回)		2/23(日)	実績	1回	1日	289人	(96.3%)	300人
3月国立名人会(第372回)		3/22(土)	実績	1回	1日	293人	(97.7%)	300人
【国立名人会】 11公演 (計画:11公演)			実績	11回	11日	3,069人	(93.0%)	3,300人
			計画	11回	11日	3,080人	(93.3%)	3,300人

2. 営業・広報

- ・ マスコミへの宣伝材料の提供、ポスター・チラシ・インターネット・あぜくら会会報・振興会ニュースの配信・配布、新聞広告、演芸雑誌「東京かわら版」等により公演の周知を図り、集客に努めた。

3. 外部専門家等の意見

- ・ 番組の組み方がよい。
- ・ 10月名人会の「芸術祭寄席」は、出演者、演目とも充実した芸術祭らしい上演であった。

4. アンケート調査

5月、8月、3月で実施(3回)した。

回答数 326人(配布数 851人、回収率 38.3%)。回答者の 92.6%が概ね満足と答えた(302人)。

【特記事項】

- ・ 平成 25 年度(第 68 回) 文化庁芸術祭主催公演(10 月公演)
- ・ 平成 25 年度(第 68 回) 文化庁芸術祭協賛公演(11 月公演)
- ・ 新春国立名人会の初日(1 月 2 日)には、吉例となった鏡開きを行い、観客に樽酒を振る舞った。

《自己点検評価》

- 良かった点・特色ある点
 - ・ 名人会は安定した舞台成果を上げており、観客の支持も高い。今後も各分野の実力者による、見応え、聞き応えのある公演を制作し、提供していく。
- 見直し又は改善を要する点

- ・ 11月の名人会は目標入場者数を大幅に下回った。番組構成等について今後検討していく必要がある。

特別企画公演

【制作方針】

公演ごとにテーマを設けた企画とし、観客の興味をひく公演とする。また落語立川流一門、五代目圓楽一門による公演も行う。

【実績】

1. 公演実績

公演名	劇場	期間	区分	回数	日数	入場者数	入場率	総席数
4月特別企画 立川流落語会	演芸場	4/26(金)～ 28(日)	実績	3回	3日	897人	(99.7%)	900人
			計画	3回	3日	840人	(93.3%)	900人
6月特別企画 花形演芸会スペシャル～受賞者の会～		6/15(土)	実績	1回	1日	289人	(96.3%)	300人
			計画	1回	1日	280人	(93.3%)	300人
7月特別企画 親子で楽しむ演芸会		7/27(土)	実績	1回	1日	294人	(98.0%)	300人
			計画	1回	1日	280人	(93.3%)	300人
8月特別企画 大衆芸能脚本募集 受賞作品の会		8/24(土)	実績	1回	1日	222人	(74.0%)	300人
			計画	1回	1日	270人	(90.0%)	300人
9月特別企画 女が語る一こころの情景		9/28(土)	実績	1回	1日	294人	(98.0%)	300人
			計画	1回	1日	280人	(93.3%)	300人
10月特別企画 正蔵、正蔵を語る		10/27(日)	実績	1回	1日	276人	(92.0%)	300人
			計画	1回	1日	270人	(90.0%)	300人
11月特別企画 五代目圓楽一門会		11/22(金)～ 24(日)	実績	3回	3日	646人	(71.8%)	900人
			計画	3回	3日	800人	(88.9%)	900人
12月特別企画 円丈の「ホワイトクリスマス」を楽しむ会	12/23(月)	実績	1回	1日	285人	(95.0%)	300人	
		計画	1回	1日	280人	(93.3%)	300人	
2月特別企画 講談の会	2/22(土)	実績	1回	1日	296人	(98.7%)	300人	
		計画	1回	1日	270人	(90.0%)	300人	
3月特別企画 圓朝に挑む！	3/21(金)	実績	1回	1日	290人	(96.7%)	300人	
		計画	1回	1日	280人	(93.3%)	300人	
【特別企画公演】	10公演 (計画:10公演)	実績	14回	14日	3,789人	(90.2%)	4,200人	
		計画	14回	14日	3,850人	(91.7%)	4,200人	

2. 営業・広報

- ・ マスコミへの宣伝材料、ポスター・チラシ・インターネット・あぜくら会会報・振興会ニュースの配布・配信、新聞広告、演芸雑誌「東京かわら版」等により公演の周知及び広報に努め、集客増を図った。

3. 外部専門家等の意見

- ・ 「立川流落語会」は、真打昇進披露公演として三人の新真打が誕生し、高座も客席も活気があり楽しめた。
- ・ 「花形演芸会スペシャル」は贈賞式が楽しく、観客にも大受けであった。
- ・ 「脚本募集受賞作品の会」が復活したことは喜ばしい。

4. アンケート調査

4月、6月、7月、9月、11月、12月公演で実施(6回)した。

回答数 481人(配布数 1,634人、回収率 29.4%)。回答者の91.3%が概ね満足と答えた(439人)。

【特記事項】

- 平成 25 年度(第 68 回) 文化庁芸術祭協賛公演(10 月・11 月公演)

《自己点検評価》

- 良かった点・特色ある点
 - 立川談志一門の「落語立川流」、五代目三遊亭圓楽門下の「五代目圓楽一門会」が 3 日間ずつ公演を行った。「親子で楽しむ演芸会」は昨年に引き続き満席となり、インターネット予約一斉販売が成果を上げ、通常の演芸場と一味違った子供向けの楽しい会場作りも好評であった。
- 見直し又は改善を要する点
 - 8 月「大衆芸能脚本募集受賞者の会」、11 月「五代目圓楽一門会」が目標入場者数に達しなかった。番組構成や宣伝方法をより一層工夫する必要がある。

師走浪曲名人会／浪曲錬声会／上方演芸特選会

【制作方針】

「師走浪曲名人会」は関西を代表する浪曲師が顔を揃える恒例の浪曲公演。それぞれの得意の演目を披露する番組構成で、浪曲の魅力を引き出す公演を目指す。25 年度は「あなたが選ぶ十八番」と題して、それぞれの演者が 3 曲の得意曲を事前に発表し、当日お客様に選んでいただくリクエスト形式を取り、浪曲の魅力に加えて話題性を高めた。

「浪曲錬声会」は浪曲界の次代を担う若手を中心にした番組構成で、今後への飛躍につながる公演とする。

「上方演芸特選会」は落語、浪曲、漫才、講談、曲芸など多彩な演芸を揃えた番組構成で、温かみのある寄席づくりを目指す。

【実績】

1. 公演実績

公演名	劇場	期間	区分	回数	日数	入場者数	入場率	総席数
師走浪曲名人会 あなたが選ぶ十八番	文楽 劇場	12/1(日)	実績	1 回	1 日	610 人	(81.0%)	753 人
			計画	1 回	1 日	700 人	(93.0%)	753 人
【師走浪曲名人会 小 計】	1 公演	(計画:1 公演)	実績	1 回	1 日	610 人	(81.0%)	753 人
			計画	1 回	1 日	700 人	(93.0%)	753 人
浪曲錬声会	文楽劇場 小ホール	5/18(土)	実績	2 回	1 日	339 人	(106.6%)	318 人
			計画	2 回	1 日	260 人	(81.8%)	318 人
【浪曲錬声会 小 計】	1 公演	(計画:1 公演)	実績	2 回	1 日	339 人	(106.6%)	318 人
			計画	2 回	1 日	260 人	(81.8%)	318 人
5 月上方演芸特選会	文楽劇場 小ホール	5/22(水) ~25(土)	実績	4 回	4 日	635 人	(99.8%)	636 人
			計画	4 回	4 日	480 人	(75.5%)	636 人
7 月上方演芸特選会		7/24(水) ~27(土)	実績	4 回	4 日	563 人	(88.5%)	636 人
			計画	4 回	4 日	480 人	(75.5%)	636 人
9 月上方演芸特選会		9/25(水) ~28(土)	実績	4 回	4 日	553 人	(86.9%)	636 人
			計画	4 回	4 日	480 人	(75.5%)	636 人
11 月上方演芸特選会		11/20(水) ~23(土・祝)	実績	4 回	4 日	590 人	(92.8%)	636 人
			計画	4 回	4 日	480 人	(75.5%)	636 人
1 月上方演芸特選会		1/22(水) ~25(土)	実績	4 回	4 日	557 人	(87.6%)	636 人
			計画	4 回	4 日	480 人	(75.5%)	636 人
3 月上方演芸特選会	3/19(水) ~22(土)	実績	4 回	4 日	573 人	(90.1%)	636 人	
		計画	4 回	4 日	480 人	(75.5%)	636 人	

【上方演芸特選会 小 計】	6 公演 (計画:6 公演)	実績	24 回	24 日	3,471 人	(91.0%)	3,816 人
		計画	24 回	24 日	2,880 人	(75.5%)	3,816 人
【大衆芸能(文楽劇場) 合計】	8 公演 (計画:8 公演)	実績	27 回	26 日	4,420 人	(90.4%)	4,887 人
		計画	27 回	26 日	3,840 人	(78.6%)	4,887 人

2. 営業・広報

- ・ ポスター、チラシ、インターネット、国立文楽劇場友の会会報、振興会ニュース等により、公演の周知を図るとともに、マスコミへの記者会見や取材依頼、ラジオ番組への出演や視聴者プレゼントによる公演紹介等を行い、一層の集客に努めた。

3. 外部専門家等の意見

「師走浪曲名人会」は例年、関西の浪曲ファンが押し寄せ、関西における最も大きな浪曲大会として意義深い公演だと思う。また、文楽劇場が関西浪曲界の発展と振興に果たしておられる役割の大きさは、計り知れないと思う。今回の「あなたが選ぶ十八番」と題してリクエストで演目が決まるという試みを採用されたことは、画期的なことであった。入りについて、空席があったことは残念であった。この公演が文楽劇場主催であることなども、まだ周知できていないように感じる。もったいないことだと思うので、ぜひ、文楽劇場が関西浪曲界の振興・発展のために立派な公演を実施していることをさらにアピールしていただければと思う。

「浪曲錬声会」は、キャスティングについておそらく今の浪曲界にとっての若手会となれば、理想的なものであった。客席についても、その影響が満員で非常によかった。本来のコアな浪曲ファンと出演者のファンも双方ともに動員がなされていてよい。公演内容の全体的印象は、真山隼人にはさらなる研磨を期待したいが、ほかの3名はいずれ劣らぬ熱演を披露し、それぞれに観客を満足させていた。

観客の年齢層が高いことは自然とはいえ、せめて1割ほどは三十代以下の観客を集客し、観客と同世代である若手達の熱演を聴いてもらいたい。関西浪曲界の将来を担う観客、演者の両方を育成できればこの会はより意義深いものになると思う。

【特記事項】

- ・ 関西元気文化圏共催事業（全公演）
- ・ 大阪文化祭参加（5月上方演芸特選会、5月浪曲錬声会）
- ・ 平成25年度（第68回）文化庁芸術祭協賛公演（11月上方演芸特選会）

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 「師走浪曲名人会」の観客のリクエストで演目を決めるという趣向は、観客及び外部専門家等にも高い評価を得た。司会者の案内とともに緞帳に高輝度プロジェクターで演目を投影し、視覚的にも観客の演目選定の便宜を図った結果、場内は大いに沸き、演者も熱演でこれに応えた。
- ・ 「浪曲錬声会」は、芸歴15年以下の若手に出演者を限定したことにより、「錬声会」の本来の意義に立ち戻った公演であるといえる。今回の盛況については、久々に菊地まどかの出演など、浪曲若手オールスター出演であったことが大きいと思われる。
- ・ 5月「上方演芸特選会」においては、浪曲錬声会から間もない時期の公演であったが、盛況であった。出演者の選定や企画など工夫を重ね、この好調を維持したい。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・ 「師走浪曲名人会」は、企画及び内容については観客や外部専門家等にも高い評価を頂いたが、客席には少し空席が目立った。従来、12月の第一土曜日が公演日であったが、今年は舞台整備等の事情で日曜日の実施となったのが一因ではないかとの指摘もあった。26年度は舞台整備等の事情で師走（12月）には公演できず、2月28日（土）に「浪曲名人会」として開催するが、浪曲ファンの期待に応えるためにも、より広範囲にわかりやすい広報・宣伝を心がけたい。

2-(1)-⑤ 能 楽

《総 表》

【制作方針】

定例公演は、能・狂言の伝統的な演目を曲柄や季節、能と狂言のバランスを配慮しつつ、能一番・狂言一番により番組を構成し、初心者にも鑑賞しやすい公演とする。月2回のペースで上演し、年間を通して能・狂言の持つ多様な魅力を余すところなく明らかにする。

普及公演は、能一番・狂言一番に事前の解説をつけ、よりわかりやすく、深く鑑賞するための公演としている。能・狂言の伝統的な演目を曲柄や季節、能と狂言のバランスを配慮しつつ上演する。

企画公演は、国立能楽堂開場月である9月の「国立能楽堂開場30周年記念公演」を筆頭に、「国立能楽堂開場30周年記念特別企画公演」での大曲・秘曲および新作能の上演、テーマを持たせて能・狂言の魅力を紹介する「企画公演」を上演する。

【実績】

1. 公演実績

公演名	期間	区分	回数	日数	入場者数	入場率	総席数
【定例公演】	18 公演	実績	18 回	18 日	10,355 人	(91.8%)	11,286 人
		計画	18 回	18 日	10,674 人	(94.6%)	11,286 人
【普及公演】	9 公演	実績	9 回	9 日	5,561 人	(98.5%)	5,643 人
		計画	9 回	9 日	5,337 人	(94.6%)	5,643 人
【企画公演】	23 公演	実績	24 回	24 日	14,185 人	(94.3%)	15,048 人
		計画	24 回	24 日	14,232 人	(94.6%)	15,048 人
【鑑賞教室】	1 公演	実績	10 回	5 日	6,123 人	(97.7%)	6,270 人
		計画	10 回	5 日	5,900 人	(94.1%)	6,270 人
【能楽 合計】	51 公演	実績	61 回	56 日	36,224 人	(94.7%)	38,247 人
		計画	61 回	56 日	36,143 人	(94.5%)	38,247 人

2. 営業・広報

- ・ マスコミ各社への取材依頼、ポスター、チラシ、インターネット、あぜくら会会報、振興会ニュース等により、公演の周知を図り、一般の集客に努めた。
- ・ 月毎のポスター・チラシのほか、公演内容等に応じて適宜特別ポスター・特別チラシを作成・配布し、またホームページに公演内容等に応じて適宜トピックスを掲載して広報・宣伝に努めた。
- ・ 団体観劇への対応として、希望に応じてレクチャーを付けた。また適宜英文の特別チラシを作成し、都内の観光情報センター、ホテル、成田空港、大学の留学生センター等に配布・設置して外国人利用者の集客を図った。

3. 外部専門家等の意見

- ・ 4月スーパー能「世阿弥」。能楽堂開場30周年と世阿弥生誕650年とが重なり、常よりも注目を集めやすいこのタイミングでの新作能委嘱作品。梅原猛氏への執筆依頼という話題性、事前の試演会・記者発表を行うなど能界以外への発信など、取り組みの姿勢が評価できる。とくに現代語による脚本や通常行わない舞台装置・照明変化を用いるなど現代を視野に入れた作品作りを模索したという点でも評価に値すると思う。初心者にとっての入口としての役割はもちろん、現代を生きる伝統芸能としての能の在り方を問う問題提起にもなったのではないだろうか。また、あえて作品の上演を1本に絞ったところも、趣旨が散漫にならず、よかったと思う。さらに初演後には全国各地で再演されるなど、能・狂言をアピールしていく国立能楽堂の使命を負った作品の一つとして刺激的かつ画期的な公演であった。伝統をしっかりと守りたいいわゆる「能らしい」能がある一方で、こうした新しい取り組みも必要だ。そして、

それができる立場にある国立能楽堂には、今後もこうした活動と前向きに取り組んでいてもらいたいと願う。

- ・ 30周年記念公演を一通り観て総括すると、台風18号の影響はあったが連日ほぼ満席で、興行的には成功だったといえよう。内容も、友枝昭世の「羽衣」や山本東次郎の「三番三」など今の能界を代表する演者により、記念公演にふさわしい会となった。
- ・ 11月能「道成寺 古式」。昨年法制化された古典の日を記念する公演として、日本の様々な芸能に多大な影響を与えた能「道成寺」を取り上げたことは意義深い。とくに金剛流独自の小書「古式」は上演の機会も少なく、なかなか目に触れるチャンスがないもので、またそれを金剛流の家元自らが舞うということで、前評判、期待、ともに高かった。当日は囃子・地謡ほかも烏帽子と素袍の正式な扮装で臨み、古式ゆかしく鐘再興の華やかさを一段と盛り上げていた。眼目の乱拍子や鐘入、前後のシテの扮装など、随所に金剛流らしさが表れていた。シテの金剛永謹氏もいままさに充実期と感じさせる演技もよかった。演じる側はもちろん、観る側にとっても長丁場で集中力を要する作品だけに、狂言なしの上演でも充実感があり、むしろ集中できて満足感が高かった。終演後のロビーでも、観客の多くから「よかった」という反応の声が聞こえていた。作品数にこだわるよりも、こうした臨機応変な番組作りは、今後さらに必要になってくると思う。

4. アンケート調査

10公演にて実施（10回）した。

回答数 2,935 人（配布数 5,070 人、回収率 57.9%）。回答者の 83.2%が概ね満足と答えた（2,443 人）。

【特記事項】

- ・ 平成 25 年度（第 68 回）文化庁芸術祭主催公演（11 月開場 30 周年記念特別企画公演）
- ・ 平成 25 年度（第 68 回）文化庁芸術祭協賛公演（10 月・11 月実施の 8 公演）
- ・ 座席字幕装置を活用して、4 月国立能楽堂開場 30 周年記念特別企画公演（現代語による上演）及び 7 月企画公演と 2 月企画公演（蠟燭能）を除く 48 公演で、日本語（詞章）・英語の 2 チャンネル方式で字幕表示を実施した

《数値目標の達成状況》

【目標入場者数の達成状況】

実績 36,224 人／目標 36,143 人（達成度 100.2%）

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 9 月の開場 30 周年記念公演はじめ、開場記念として行った新作の委嘱初演など、多くの特別企画公演を行って話題の作品を上演、国立能楽堂ひいては能・狂言そのものをアピールすることができた。また、10 月と 1 月の月間特集《世阿弥生誕 650 年 I・II》では、能の巨人・世阿弥に光を当てて成果を上げることができた。また、企画公演「能を再発見する」シリーズなど、国立能楽堂独自の切り口での公演を行うことができた。また、能楽公演全体で目標入場者数を達成、94.7%という高い入場率を達成した。

定例公演

【制作方針】

定例公演は、能・狂言の伝統的な演目を曲柄や季節、能と狂言のバランスを配慮しつつ、能一番・狂言一番により番組を構成し、初心者にも鑑賞しやすい公演とする。開場記念月の9月を除き、月2回のペースで上演し、年間を通して能・狂言のもつ多様な魅力を余すところなく明らかにする。

【実績】

1. 公演実績 ※目標入場者数：1回当たり 593 人(94.6%)、劇場：能楽堂

公演名	期間	区分	回数	日数	入場者数	入場率	総席数
狂言「富士松」、能「高野物狂」	4/6(土)	実績	1回	1日	624人	(99.5%)	627人
狂言「花争」、能「隅田川彩色」	4/24(水)	実績	1回	1日	614人	(97.9%)	627人
狂言「宗八」、能「杜若」	5/17(金)	実績	1回	1日	582人	(92.8%)	627人
狂言「素袍落」、能「項羽」	5/22(水)	実績	1回	1日	527人	(84.1%)	627人
狂言「文荷」、能「藤」	6/5(水)	実績	1回	1日	559人	(89.2%)	627人
狂言「千鳥」、能「鉄輪」	6/21(金)	実績	1回	1日	618人	(98.6%)	627人
狂言「胸突」、能「加茂」	7/3(水)	実績	1回	1日	518人	(82.6%)	627人
狂言「呂蓮」、能「通小町」	7/17(水)	実績	1回	1日	615人	(98.1%)	627人
【国立能楽堂開場 30 周年記念公演】 《世阿弥生誕 650 年 I》 狂言「茫々頭」、能「白楽天長序之伝」	10/2(水)	実績	1回	1日	539人	(86.0%)	627人
【国立能楽堂開場 30 周年記念公演】 《世阿弥生誕 650 年 I》 狂言「樋の酒」、能「右近」	10/18(金)	実績	1回	1日	488人	(77.8%)	627人
狂言「箕被」、能「通盛」	11/15(金)	実績	1回	1日	521人	(83.1%)	627人
狂言「仏師」、能「盛久」	11/20(水)	実績	1回	1日	616人	(98.2%)	627人
狂言「地藏舞」、能「梅枝」	12/4(水)	実績	1回	1日	619人	(98.7%)	627人
狂言「石神」、能「春日龍神龍女之舞」	12/18(水)	実績	1回	1日	609人	(97.1%)	627人
【国立能楽堂開場 30 周年記念公演】 《世阿弥生誕 650 年 II》 素謡「翁」、狂言「寝音曲」、能「当麻」	1/7(火)	実績	1回	1日	621人	(99.0%)	627人
【国立能楽堂開場 30 周年記念公演】 《世阿弥生誕 650 年 II》 狂言「鴈磔」、能「井筒」	1/17(金)	実績	1回	1日	621人	(99.0%)	627人
狂言「法師ヶ母」、狂言「船橋」	3/5(水)	実績	1回	1日	604人	(96.3%)	627人
狂言「鈍太郎」、能「昭君」	3/19(水)	実績	1回	1日	460人	(73.4%)	627人
【定例公演 小 計】 18 公演 (計画:18 公演)	実績	18回	18日	10,355人	(91.8%)	11,286人	
	計画	18回	18日	10,674人	(94.6%)	11,286人	

2. 営業・広報

- ・ マスコミ各社への取材依頼、ポスター、チラシ、インターネット、あぜくら会会報、振興会ニュース等により、公演の周知を図り、一般の集客に努めた。
- ・ 月毎のポスター・チラシのほか、公演内容等に応じて適宜特別ポスター・特別チラシを作成・配布し、

また公演内容等に応じてホームページに適宜トピックスを掲載して、広報・宣伝に努めた。

- ・ 団体観劇への対応として、希望に応じてレクチャーを付けた。また適宜英文の特別チラシを作成し、都内の観光情報センター、ホテル、成田空港、大学の留学生センター等に配布・設置して外国人利用者の集客を図った。

3. 外部専門家等の意見

- ・ 「宗八」では野村萬斎が伸び伸びと演じていた。「杜若」は抽象的なテーマで、表現が難しい曲であるが、なんとか無難にまとめたといった舞台であった。シテの謡は明晰で聞きづらくはなく、「謡宝生」の本領発揮といったところ。
- ・ 「千鳥」のシテはセリフ、所作とも丁寧演技で、太郎冠者の苦心が伝わってくる。「鉄輪」は、よくまとまった見所の多い舞台であった。観世鍔之丞の舞台は、恐ろしいだけではない、人間の情念を表出したものとして、すぐれた舞台だったといえよう。地謡も良くとても面白かった。

4. アンケート調査

1公演で実施(1回)した。(1月17日)

回答数 357人(配布数 585人、回収率 61.0%)。回答者の 88.2%が概ね満足と答えた(315人)。

【特記事項】

- ・ 平成25年度(第68回)文化庁芸術祭協賛公演(10月・11月公演)
- ・ 座席字幕装置を活用して、全公演で、日本語(詞章)・英語の2チャンネル方式で字幕表示を実施した。

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 全体として90%を超える高い入場率を維持することができた。6月「鉄輪」・1月「井筒」など観客にとって魅力ある演目を上演できたことが成果に繋がったと思われる。今後も引き続き、高水準の入場率を保持していきたい。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・ 目標入場者数を達成できなかった公演があった。役者の世代交代の時期であるものの、内容の充実をさらに図り、集客に努めたい。

普及公演

【制作方針】

普及公演は、能一番・狂言一番に事前の解説をつけ、よりわかりやすく深く鑑賞するための公演として、能・狂言の伝統的な演目を曲柄や季節、能と狂言のバランスを配慮しつつ上演する。

【実績】

1. 公演実績 ※目標入場者数：1回当たり 593人(94.6%)、劇場：能楽堂

公演名	期間	区分	回数	日数	入場者数	入場率	総席数
解説、狂言「人を馬」、能「観阿弥時代の自然居士」	4/13(土)	実績	1回	1日	617人	(98.4%)	627人
解説、狂言「左近三郎」、能「田村替装束 長胡床」	5/11(土)	実績	1回	1日	610人	(97.3%)	627人
解説、狂言「昆布売」、能「天鼓」	6/8(土)	実績	1回	1日	623人	(99.4%)	627人
解説、狂言「子盗人」、能「半部」	7/13(土)	実績	1回	1日	622人	(99.2%)	627人
【国立能楽堂開場30周年記念公演】 《世阿弥生誕650年I》 解説、狂言「鬼瓦」、能「実盛」	10/12(土)	実績	1回	1日	604人	(96.3%)	627人

解説、狂言「太刀奪」、能「国栖」	11/9(土)	実績	1回	1日	621人	(99.0%)	627人
解説、狂言「瘦松」、能「夜討曾我大藤内」	12/14(土)	実績	1回	1日	619人	(98.7%)	627人
【国立能楽堂開場 30 周年記念公演】 《世阿弥生誕 650 年Ⅱ》 解説、狂言「鬼継子」、能「野守留之伝」	1/11(土)	実績	1回	1日	622人	(99.2%)	627人
解説、狂言「鎌腹」、能「葛城」	3/8(土)	実績	1回	1日	623人	(99.4%)	627人
【普及公演 小 計】 9 公演 (計画:9 公演)		実績	9回	9日	5,561人	(98.5%)	5,643人
		計画	9回	9日	5,337人	(94.6%)	5,643人

2. 営業・広報

- ・ マスコミ各社への取材依頼、ポスター、チラシ、インターネット、あぜくら会会報、振興会ニュース等により、公演の周知を図り、一般の集客に努めた。
- ・ 月毎のポスター・チラシのほか、公演内容等に応じて適宜特別ポスター・特別チラシを作成・配布し、またホームページに公演内容等に応じて適宜トピックスを掲載して広報・宣伝に努めた。
- ・ 団体観劇への対応は、希望に応じてレクチャーを付けた。また適宜英文の特別チラシを作成し、都内の観光情報センター、ホテル、成田空港、大学の留学生センター等に配布・設置して外国人利用者の集客を図った。

3. 外部専門家等の意見

- ・ 「人を馬」は稀曲ゆえにあつてあまり期待していなかったが、予想に反して面白く観ることができた。「自然居士」は面白かった。さすがに観阿弥のように十二三歳ばかりには見えないが、キビキビとした所作や舞は十分に青年僧を思わせ、普段と違った演出も無難にこなしていた。もう一人の功労者はワキの殿田謙吉である。いつもの柔和な表情とはちがったドスのきいた台詞と演技で、居士との遣り取りは迫力があつた。アイの又三郎も的確な受け答えて劇の流れを作るのに貢献していた。ただ、船の作り物を出すことについては、たしかに臨場感が出るが、逆にその存在を意識して動きが規制されてしまうところがあつた。

4. アンケート調査

1公演で実施(1回)した。(12月14日)

回答数 358人(配布数 577人、回収率 62.0%)。回答者の 83.0%が概ね満足と答えた(297人)。

【特記事項】

- ・ 平成 25 年度(第 68 回)文化庁芸術祭協賛公演(10月・11月公演)
- ・ 座席字幕装置を活用して、全公演で、日本語(詞章)・英語の 2 チャンネル方式で字幕表示を実施した。

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 9公演で 98.5%という高い入場率を達成した。解説では、鑑賞の際に必要な知識を事前に伝えることができた。今後も、馴染みのある演目でも従来とは異なる観点から解説したり、初心者から常連まで満足できる内容の解説を提供するなど、普及公演にふさわしい工夫を図りたい。

企画公演

【制作方針】

本年度は開場 30 周年にあたり、開場月である 9 月の「国立能楽堂開場 30 周年記念公演」を筆頭に、「国立能楽堂開場 30 周年記念特別企画公演」での大曲・秘曲および新作能の上演、テーマを持たせて能・狂言の魅力を紹介する「企画公演」を上演する。

【実績】

1. 公演実績 ※目標入場者数：1回当たり 593 人(94.6%)、劇場：能楽堂

公演名	期間	区分	回数	日数	入場者数	入場率	総席数
【国立能楽堂開場 30 周年記念特別企画公演】 スーパー能「世阿弥」	4/19(金)～ 20(土)	実績	2 回	2 日	1,211 人	(96.6%)	1,254 人
【国立能楽堂開場 30 周年記念特別企画公演】 一調「葛城」、能「関寺小町」	5/29(水)	実績	1 回	1 日	614 人	(97.9%)	627 人
【企画公演】能を再発見するⅢ－業平のゆくえ－ 対談、能「世阿弥自筆本による雲林院」	6/13(木)	実績	1 回	1 日	613 人	(97.8%)	627 人
【企画公演】蠟燭の灯りによる 狂言「瓜盗人」、能「熊坂」	7/25(木)	実績	1 回	1 日	605 人	(96.5%)	627 人
【企画公演】夏休み親子で楽しむ能の会 おはなし、能「舍利」	8/10(土)	実績	1 回	1 日	616 人	(98.2%)	627 人
【企画公演】働く貴方に贈る 対談、能「邯鄲盤渉」	8/22(木)	実績	1 回	1 日	618 人	(98.6%)	627 人
【企画公演】夏休み親子で楽しむ狂言の会 おはなし、狂言「棒縛」、狂言「釣針」	8/24(土)	実績	1 回	1 日	614 人	(97.9%)	627 人
【企画公演】狂言と落語・講談 講談「鉢木」、落語「死神」、狂言「花折」	8/29(木)	実績	1 回	1 日	573 人	(91.4%)	627 人
【国立能楽堂開場 30 周年記念公演】 「翁」、能「楊貴妃干之掛 臺留」、狂言「萩大名」、能 「土蜘蛛千筋之伝 ささがに」	9/15(日)	実績	1 回	1 日	612 人	(97.6%)	627 人
【国立能楽堂開場 30 周年記念公演】 能「住吉詣悦 之舞」、狂言「鶏聲」、能「正尊起請文」	9/16(月・祝)	実績	1 回	1 日	612 人	(97.6%)	627 人
【国立能楽堂開場 30 周年記念公演】 能「鶴亀曲入」、能「羽衣舞込」、狂言「庵の梅」、半 能「石橋大獅子」	9/17(火)	実績	1 回	1 日	609 人	(97.1%)	627 人
【国立能楽堂開場 30 周年記念公演】狂言の会 狂言「夷大黒」、狂言「通円」、狂言「八尾」、狂言「祐 善古式」、狂言「老武者」	9/20(金)	実績	1 回	1 日	609 人	(97.1%)	627 人
【国立能楽堂開場 30 周年記念公演】 《世阿弥生誕 650 年 I》 講演「日本文化と世阿弥」、復曲能「鶺鴒」	10/9(水)	実績	1 回	1 日	444 人	(70.8%)	627 人
【国立能楽堂開場 30 周年記念公演】 《世阿弥生誕 650 年 I》 実演とお話「たてはな」、能「融十三段之舞」	10/24(木)	実績	1 回	1 日	616 人	(98.2%)	627 人
【国立能楽堂開場 30 周年記念特別企画公演】 古典の日記念 仕舞「海人キリ」、能「道成寺古式」	11/1(金)	実績	1 回	1 日	605 人	(96.5%)	627 人
【国立能楽堂開場 30 周年記念特別企画公演】 狂言「釣狐」、素囃子「神舞」、狂言「太鼓負」	12/7(土)	実績	1 回	1 日	612 人	(97.6%)	627 人
【国立能楽堂開場 30 周年記念公演】 《世阿弥生誕 650 年 II》 講演、能「呉服」	1/23(木)	実績	1 回	1 日	602 人	(96.0%)	627 人
【国立能楽堂開場 30 周年記念公演】 《世阿弥生誕 650 年 II》 おはなし、仕舞「玉水」、連吟「実方」、能「西行桜杖 之舞」	1/30(木)	実績	1 回	1 日	616 人	(98.2%)	627 人

【企画公演】能を再発見するIV－供養の場に残る老母一鼎談、能「藤戸」	2/6(木)	実績	1回	1日	470人	(75.0%)	627人
【企画公演】女性能楽師による仕舞「花筐クルイ」「清経クセ」、能「巻絹出端之伝惣神楽」	2/8(土)	実績	1回	1日	514人	(82.0%)	627人
【企画公演】蠟燭の灯りによる謡講、能「二人静」	2/13(木)	実績	1回	1日	611人	(97.4%)	627人
【企画公演】働く貴方に贈る狂言「膏薬煉」、実演、能「葵上」	2/28(金)	実績	1回	1日	616人	(98.2%)	627人
【企画公演】復興と文化 講演、狂言「福部の神勤入」、能「花月」	3/13(木)	実績	1回	1日	573人	(91.4%)	627人
【企画公演 小 計】 23 公演 (計画:23 公演)		実績	24回	24日	14,185人	(94.3%)	15,048人
		計画	24回	24日	14,232人	(94.6%)	15,048人

(能楽鑑賞教室)

公演名	期間	区分	回数	日数	入場者数	入場率	総席数
6月能楽鑑賞教室 解説「能楽のたのしみ」、狂言「清水」、能「黒塚」	6/24(月)～28(金)	実績	10回	5日	6,123人	(97.7%)	6,270人
		計画	10回	5日	5,900人	(94.1%)	6,270人

2. 営業・広報

- ・ マスコミ各社への取材依頼、ポスター、チラシ、インターネット、あぜくら会会報、振興会ニュース等により、公演の周知を図り、一般の集客に努めた。
- ・ 毎月ポスター・チラシのほか、公演内容等に応じて適宜特別ポスター・特別チラシを作成・配布し、またホームページに公演内容等に応じて適宜トピックスを掲載して広報・宣伝に努めた。
- ・ 団体観劇への対応は、希望に応じてレクチャーを付けた。また適宜英文の特別チラシを作成し、都内の観光情報センター、ホテル、成田空港、大学の留学生センター等に配布・設置して外国人利用者の集客を図った。

3. 外部専門家等の意見

- ・ スーパー能「世阿弥」。能楽堂開場 30 周年と世阿弥生誕 650 年とが重なり、常よりも注目を集めやすいこのタイミングでの新作能委嘱作品。梅原猛氏への執筆依頼という話題性、事前の試演会・記者発表を行うなど能界以外への発信など、取り組みの姿勢が評価できる。とくに現代語による脚本や通常行わない舞台装置・照明変化を用いるなど現代を視野に入れた作品作りを模索したという点でも評価に値すると思う。初心者にとっての入口としての役割はもちろん、現代を生きる伝統芸能としての能の在り方を問う問題提起にもなったのではないだろうか。また、あえて作品の上演を 1 本に絞ったところも、趣旨が散漫にならず、よかったと思う。さらに初演後には全国各地で再演されるなど、能・狂言をアピールしていく国立能楽堂の使命を負った作品の一つとして刺激的かつ画期的な公演であった。伝統をしっかりと守ったいわゆる「能らしい」能がある一方で、こうした新しい取り組みも必要だ。そして、それができる立場にある国立能楽堂には、今後もこうした活動と前向きに取り組んでいてもらいたいと思う。
- ・ 「関寺小町」。この感動を言葉で表現するのは難しい。人間は必ず老いる、そして死んでいく、だから生きていく、という死生観を具現化してみせた、奇跡の舞台と言ってよかろう。周りの演者も能界の至宝である幽雪を支え、舞台を成功させようとする気に溢れていた。
- ・ 「翁」。立ち方、囃子方、地謡、すべてに気迫のこもった舞台となった。ことに三番三の山本東次郎はゆったりと構えながらも内面には気迫が充ち満ちている様子がうかがえ、76 歳とは思えぬ充実した演技であった。「萩大名」。大藏彌太郎の柄にあった暖かな舞台であった。無教養でがさつだが、なんとなく憎めない田舎大名の味がよく出ていた。
- ・ 11 月能「道成寺 古式」。昨年法制化された古典の日を記念する公演として、日本の様々な芸能に多大な影響を与えた能「道成寺」を取り上げたことは意義深い。とくに金剛流独自の小書「古式」は上演の機会も少なく、なかなか目に触れるチャンスがないもので、またそれを金剛流の家元自らが舞うと

ということで、前評判、期待、ともに高かった。当日は囃子・地謡ほかも烏帽子と素袍の正式な扮装で臨み、古式ゆかしく鐘再興の華やかさを一段と盛り上げていた。眼目の乱拍子や鐘入、前後のシテの扮装など、随所に金剛流らしさが表れていた。シテの金剛永謹氏もいままさに充実期と感じさせる演技もよかった。演じる側はもちろん、観る側にとっても長丁場で集中力を要する作品だけに、狂言なしの上演でも充実感があり、むしろ集中できて満足感が高かった。終演後のロビーでも、観客の多くから「よかった」という反応の声が聞こえていた。作品数にこだわるよりも、こうした臨機応変な番組作りは、今後さらに必要になってくると思う。

- ・ 山本東次郎 76 歳の「釣狐」、期待通りの出来であった。アドの山本則俊との遣り取りも緊張感が充滿して、見所を引きつけた。とくに前シテの体のキレの良さは素晴らしかった。
- ・ 「羽衣」。これは 30 周年の記念公演にふさわしい見事な舞台であった。「庵の梅」。萬の老女はほぼ完璧な出来映え。のどかな観梅の一時を一門で楽しく演じていた。「石橋」。三日間の記念能を締めくくりに相応しい演目である。鍔之丞の大獅子をはじめ、獅子の動きはみな豪快かつ機敏であった。豪快な獅子舞はあっという間に終わってしまったが、もうちょっと観ていたい、と思わせるところで終わるのがよい会というものであろう。
- ・ 「八尾」。この日一番の出来で、見所もわいていた。何よりも野村又三郎の閻魔大王が出色。登場の段から見所を引きつけていた。一つ一つの所作にキレがあり、最後のアドに突き飛ばされる場面は、空中で一瞬止まっているかのように見えるタメがあった。アドの罪人に井上松次郎をあてるキャストイングの妙も良い。

4. アンケート調査

8 公演にて実施（8 回）した。（4 月 20 日、6 月 13 日、8 月 10 日、8 月 22 日、8 月 24 日、9 月 16 日、12 月 7 日、2 月 6 日）

回答数 2,220 人（配布数 3,908 人、回収率 56.8%）。回答者の 82.5%が概ね満足と答えた（1,831 人）。

【特記事項】

- ・ 平成 25 年度（第 68 回）文化庁芸術祭主催公演（11 月開場 30 周年記念特別企画公演）
- ・ 平成 25 年度（第 68 回）文化庁芸術祭協賛公演（10 月・11 月企画公演）
- ・ 座席字幕装置を活用して、4 月国立能楽堂開場 30 周年記念特別企画公演（現代語による上演）及び 7 月企画公演と 2 月企画公演（蠟燭能）を除く全公演で、日本語（詞章）・英語の 2 チャンネル方式で字幕表示を実施した。

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ スーパー能「世阿弥」は哲学者梅原猛に脚本を委嘱、演出を梅若六郎玄祥に依頼し、2 年にわたる準備の末上演し、能楽界に大きな話題をもたらすことが出来た。普遍的なテーマを斬新な形で提示することで、能の新しい姿を世に問うこととなった。
- ・ 5 月の能「関寺小町」、11 月の能「道成寺 古式」及び 12 月の狂言「釣狐」「太鼓負」など開場 30 周年記念の特別企画公演で各月に話題となる作品を配して上演し、多くの成果を残すことができた。
- ・ 9 月の開場 30 周年記念公演では、現代能楽界の総力を集結した大曲・秘曲の上演で国立能楽堂の存在を強くアピールすることができた。
- ・ 10 月と 1 月に月間特集《世阿弥生誕 650 年 I・II》を設けて公演を企画、様々な観点から世阿弥に迫ることができた。
- ・ 前年度から続く「能を再発見する」シリーズとして 6 月と 2 月に公演を行った。いずれも周到な準備期間を設けての上演で、現在の能を見直す新たな視点を提示することができた。
- ・ 企画公演全体でも 90%を越える高い入場率を維持することができた。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・ 10 月企画公演などで入場者数の目標を達成できなかった。企画意図が的確に伝わるよう、番組構成や広報を工夫していきたい。

2-(1)-⑥ 組踊等沖縄伝統芸能

《制作方針》

25年度は、定期公演、企画公演、研究公演及び普及公演からなる組踊等沖縄伝統芸能の公演を30公演行う。

定期公演は、組踊公演、琉球舞踊公演、三線音楽公演、沖縄芝居公演及び民俗芸能公演から構成される。伝承された古典の原点を尊重することを基本に、現代においても理解されやすい、観客のニーズに合った多様な演目の上演に努め、観客の満足度を高める上演に取り組む。組踊公演では、開場10周年記念特別公演として「大川敵討」を上演するほか、著名な演目や復活演目を取り上げる。また、23年度から、橋懸かり、南表、北表の3カ所から出入りする御冠船踊の形式で実施してきたが、25年度からは、観やすさに配慮し、御冠船踊形式の舞台の柱を低くした舞台形式で上演する。琉球舞踊公演では、好評を得ている「男性舞踊家の会」を2回公演に増やすほか、定番となっている沖縄伝統舞踊保持者による「新春琉舞名人選」や重要無形文化財保持者の出演による「琉球舞踊特選会」等を上演する。三線音楽公演では、琉球弧の島々の民謡を一同に紹介し楽しんで頂く「琉球弧の島唄」を上演する。沖縄芝居公演では、歌劇「泊阿嘉」、史劇「謝名原の乱」を、また、民俗芸能公演では、「道の島々から」と銘打って「与論の十五夜踊」や「泡瀬の京太郎」等の演目を取り上げる。

企画公演では、開場10周年記念特別公演として能「道成寺」や歌舞劇「今日ぬ誇らしやや」を上演する。その他アジア・太平洋地域の芸能として、「タイ舞踊」を上演し、伝統文化を通じた交流を図る。他にも毎年秋に実施し、人気の定着してきた「国立劇場寄席」、「創作舞踊」などを上演する。

研究公演では、「村々に伝わる『組踊』」と題し、本部町字瀬底の「村遊び」で上演されている組踊「伏山敵討」を取り上げる。

普及公演では、社会人のための組踊鑑賞教室「万歳敵討」のほか、親子観劇に相応しい、親子のための組踊鑑賞教室「銘苺子」を取り上げる。小学生以上の学生等を対象とした生徒のための組踊鑑賞教室では、「万歳敵討」を上演する。3公演ともに、公演前に解説を行い、若年層が組踊に親しむ機会を提供する。

《実績》

1. 公演実績

公演名	劇場	期間	区分	回数	日数	入場者数	入場率	総席数
琉球舞踊「八重山舞踊～八重山の歌と踊り～」	国立劇場 おきなわ 大劇場	4/13(土)	実績	1回	1日	294人	(47.2%)	623人
			計画	1回	1日	316人	(50.0%)	632人
組踊「手水の縁」		4/28(日)	実績	1回	1日	353人	(62.0%)	569人
			計画	1回	1日	318人	(55.0%)	578人
琉球舞踊「男性舞踊家の会」		6/8(土) ～9(日)	実績	2回	2日	636人	(51.0%)	1,246人
			計画	2回	2日	696人	(55.1%)	1,264人
沖縄芝居 歌劇「泊阿嘉」		6/29(土) ～30(日)	実績	2回	2日	1,091人	(87.7%)	1,244人
			計画	2回	2日	694人	(59.9%)	1,158人
組踊「貞孝婦人」		7/13(土)	実績	1回	1日	322人	(56.6%)	569人
			計画	1回	1日	318人	(55.0%)	578人
組踊「糸納敵討」		8/25(日)	実績	1回	1日	291人	(51.1%)	569人
			計画	1回	1日	318人	(55.0%)	578人
組踊「花売の縁」		9/15(日)	実績	1回	1日	446人	(78.4%)	569人
			計画	1回	1日	318人	(55.0%)	578人
琉球舞踊 重要無形文化財保持者	9/21(土)	実績	1回	1日	549人	(88.1%)	623人	

公演「琉球舞踊特選会」		計画	1回	1日	411人	(65.0%)	632人
民俗芸能「道の島々から(与論の十五夜踊)」※1	10/13(日)	実績	—	—	—	—	—
		計画	1回	1日	474人	(75.0%)	632人
組踊「西南敵討」	10/19(土)	実績	1回	1日	366人	(64.6%)	567人
		計画	1回	1日	318人	(55.0%)	578人
沖縄芝居 史劇「謝名原の乱」	12/21(土)～22(日)	実績	2回	2日	766人	(61.5%)	1,246人
		計画	2回	2日	694人	(59.9%)	1,158人
琉球舞踊「新春琉舞名人選」	1/11(土)～12(日)	実績	2回	2日	723人	(58.0%)	1,246人
		計画	2回	2日	822人	(65.0%)	1,264人
組踊「大川敵討」(10周年記念特別公演)	2/8(土)	実績	1回	1日	472人	(83.0%)	569人
		計画	1回	1日	462人	(79.9%)	578人
民俗芸能「沖縄本島民俗芸能祭 沖縄各地の遊行芸」	2/23(日)	実績	1回	1日	559人	(89.7%)	623人
		計画	1回	1日	474人	(75.0%)	632人
組踊「護佐丸敵討」・「女物狂」	3/22(土)	実績	1回	1日	471人	(82.8%)	569人
		計画	1回	1日	318人	(55.0%)	578人
琉球舞踊「琉舞鑑賞会(うりずんの舞)」	5/11(土)	実績	1回	1日	178人	(71.5%)	249人
		計画	1回	1日	153人	(60.0%)	255人
三線音楽「琉球弧の島唄～雨降いぬちちぐとぅ～」	5/18(土)	実績	1回	1日	125人	(50.2%)	249人
		計画	1回	1日	128人	(50.2%)	255人
琉球舞踊「琉舞鑑賞会(豊稔の舞)」	9/7(土)	実績	1回	1日	224人	(90.0%)	249人
		計画	1回	1日	153人	(60.0%)	255人
琉球舞踊「琉舞鑑賞会(初春の舞)」	2/15(土)	実績	1回	1日	202人	(81.1%)	249人
		計画	1回	1日	153人	(60.0%)	255人
【定期公演 小 計】 18 公演 (計画:19 公演)		実績	22回	22日	8,068人	(68.2%)	11,828人
		計画	23回	23日	7,538人	(60.6%)	12,438人
新作組踊「伊野波節異聞」・「平敷屋朝敏～哀・愛しゃ～」	7/28(日)	実績	1回	1日	542人	(87.0%)	623人
		計画	1回	1日	316人	(50.0%)	632人
喜劇「ペーちゃんの恋人」～モリエール「守銭奴」より～	8/17(土)～18(日)	実績	2回	2日	706人	(62.1%)	1,136人
		計画	2回	2日	580人	(50.1%)	1,158人
「国立劇場寄席」	11/9(土)	実績	1回	1日	557人	(89.4%)	623人
		計画	1回	1日	506人	(80.1%)	632人
「アジア・太平洋地域の芸能～タイ舞踊～」	11/24(日)	実績	1回	1日	298人	(47.8%)	623人
		計画	1回	1日	316人	(50.0%)	632人
「創作舞踊」	12/7(土)	実績	1回	1日	200人	(32.1%)	623人
		計画	1回	1日	316人	(50.0%)	632人
歌舞劇「今日ぬ誇らしゃや」(10周年記念特別公演)	1/25(土)～26(日)	実績	2回	2日	948人	(82.7%)	1,147人
		計画	2回	2日	926人	(80.0%)	1,158人
能「道成寺赤頭」(10周年記念特別公演)	3/9(日)	実績	1回	1日	557人	(89.4%)	623人
		計画	1回	1日	506人	(80.1%)	632人

【企画公演 小 計】			7 公演 (計画:7 公演)		実績	9 回	9 日	3,808 人	(70.5%)	5,398 人
					計画	9 回	9 日	3,466 人	(63.3%)	5,476 人
「村々に伝わる『組踊』」～本部町字瀬底～	国立劇場おきなわ大劇場	5/26(日)			実績	1 回	1 日	561 人	(90.0%)	623 人
					計画	1 回	1 日	405 人	(70.1%)	578 人
【研究公演 小 計】			1 公演 (計画:1 公演)		実績	1 回	1 日	561 人	(90.0%)	623 人
					計画	1 回	1 日	405 人	(70.1%)	578 人
「社会人のための組踊鑑賞教室『万歳敵討』」	国立劇場おきなわ大劇場	6/16(日)			実績	1 回	1 日	412 人	(72.5%)	568 人
					計画	1 回	1 日	434 人	(75.1%)	578 人
「親子のための組踊鑑賞教室『銘苺子』」		8/10(土)			実績	1 回	1 日	367 人	(64.5%)	569 人
					計画	1 回	1 日	434 人	(75.1%)	578 人
「生徒のための組踊鑑賞教室『万歳敵討』」※2		10/24(木)～25(金)			実績	6 回	3 日	2,008 人	(57.9%)	3,468 人
		11/14(木)～15(金)			計画	8 回	4 日	3,468 人	(75.0%)	4,624 人
【普及公演 小 計】			3 公演 (計画:3 公演)		実績	8 回	5 日	2,787 人	(60.5%)	4,605 人
					計画	10 回	6 日	4,336 人	(75.0%)	5,780 人
【組踊等沖縄伝統芸能 合計】			29 公演 (計画:30 公演)		実績	40 回	37 日	15,224 人	(67.8%)	22,454 人
					計画	43 回	39 日	15,745 人	(64.9%)	24,272 人

※1) 10 月定期公演の民俗芸能公演「道の島々から（与論の十五夜踊）」は、台風 24 号の影響のため、公演を中止した。

※2) 10 月・11 月普及公演「生徒のための組踊鑑賞教室『万歳敵討』」は、台風 27 号接近のため、10 月 24 日の公演を中止した。

2. 営業・広報

- ・ 国立劇場おきなわ友の会会報誌等により公演の周知を図った。
- ・ 毎月、県内約 700 カ所(県、市町村、教育機関、主要企業等)に各公演のチラシを配布するとともに、近隣市町村自治会長会でのチラシの配布及び地域住民への周知依頼等を行うなど、公演の周知に努めた。また、上・下半期それぞれで県内約 440 カ所の全公民館に公演情報や劇場取組を周知し、団体客の誘致に努めた。
- ・ 高齢者が主要な観客層であることから、県内各市町村文化協会や社会福祉協議会を定期的に訪問し、公演の周知や団体客の誘客に努めた。
- ・ 各公演演目のゆかりの地の公民館や関係団体等への訪問を強化し、誘客に努めた。
- ・ 県内 9 カ所の観光施設に本劇場の専用ラックを設置し、劇場及び公演の周知を図った。
- ・ 7 月公演から、県の助成事業を活用して無料巡回バス及び無料団体送迎バスサービスを行い、一般及び団体客の誘致に努めた。また、観光客の集客のため、ホテルや旅行業等の観光業界に同サービスを PR し、連携の強化・劇場知名度の向上に努めた。
- ・ 沖縄県庁 1 階県民ホールにて、8 月 12 日～16 日にポスター展を実施した。
- ・ 商業施設（パレットくもじ）1 階エントランスホールにて、12 月 27 日～1 月 7 日にポスター展を実施した。
- ・ 1 月定期公演琉球舞踊「新春琉舞名人選」の新春公演では、公演 2 日間計 200 名に呈茶を実施し、幕間に抽選による観客へのお年玉プレゼント（カレンダー、劇場グッズなどの詰め合わせ）を行い、初春公演の雰囲気盛り上げた。

3. 外部専門家等の意見

- ・ 4 月定期公演「八重山舞踊」では、踊り手のクオリティも高く、洗練されている印象で大変素晴らしい公演だった。このような公演を是非琉球舞踊をする若い人たちにしてもらいたい。八重山の芸能の周

知という側面があるのなら、演目などはそのままにして、ナビゲーターをつけるなど工夫が必要。

「手水の縁」では、第一部では、演目も春らしく魅力的だったと思う。一方、舞台が橋懸かりのスタイルだったので、「日傘踊り」と「梅の香」は、舞台の雰囲気にならなかった。組踊公演の際には、古典舞踊しか見せないというのもつまらないが、舞台の雰囲気を考慮して、雑踊や創作を選ぶ必要があるのではないか。第二部の「手水の縁」は変わった配役で見応えがあった。特にヒロインの宮城茂雄さんは舞踊も唱えも素晴らしく深みがあるので見ていて飽きない。また地謡の顔ぶれも良く、歌も良かった。良い組み合わせだと思う。花城・神谷・玉城の歌三線3人の名前が並んでいると楽しみ。このようなチームを多く輩出していくのも国立の役目と思われる。

- ・ 5月定期公演「うりずんの舞」では、演目数や出演者など全体として良く構成されている印象だった。出演者の気合も感じられ、大変好感度の高い公演だと思う。演目も古典・雑踊・打ち組踊をバランス良く配し、飽きない工夫がされていて見やすいと思った。一方、地謡がとても残念な印象。まず、歌声の相性がとても悪く、組み合わせすべきではない人たちを並べてしまったように思う。年輩格と若手を組み合わせる時以上に注意が必要だと思った。女性舞踊家のスターがもっと発掘されると良いと思った。今日の公演は、それを達成するのに大いに役立つ公演だと思う。若手女性舞踊家の憧れの公演になってほしい。

三線音楽「琉球弧の島唄」では、照明のデザインが素晴らしかった。劇場ならではの演出法だと思う。雨具をもっての登場も趣があって良かった。セットも、モダンで見栄えがした。どの地域の歌にも似合う雰囲気だったと思う。出演者も実力派揃いで、聞き応えもあった。全体として厳かな雰囲気なので、もう少しだけた雰囲気でも良いかと思う。歌い手のトークには、各人でバラツキがあるので司会の必要性を感じた。各人の持ち時間が長いような気がする。もう少し聞きたい、くらいで終わって欲しいと思う。そして音響の大きさももう少し大きくて良いと思う。民謡には、雑然とした雰囲気が不可欠だと思うので、それには音が小さいように感じた。

- ・ 5月研究公演「村々に伝わる『組踊』～本部町字瀬底～」では、第一部の男性による女形の古典調の踊りが今なお瀬底で演じられていることが驚きである。曲に合わせての歩みにわずかな振りを加えたもので、舞踊の最も素朴な形にまとめられ、舞踊が始まった初期の頃を思いおこさせる。大変興味深い踊りである。第二部「伏山敵討」の地謡は、中央で活躍している方々とあって状況に応じた節入りや情感の表現には芸能の質の高さを感じた。立方も唱えや所作等十分に稽古した跡が伺えて、良く仕上がっている。これからも伝統を崩さずしっかり受け継いでほしい。チケットも完売で「おらが村の芸能」に愛着と誇りを持ち、応援にかけつける人の多さには驚く。国立劇場出演という目標を持ち、それに向けての共同作業をとおして、連帯感が増し、地域の活性化につながれば、それこそ国立劇場おきなわの意図する企画に値する公演になるであろう。次回の公演を楽しみにしている。
- ・ 6月定期公演「男性舞踊家の会」では、古典・雑踊、創作が混在しており雑然とした印象があった。「男性舞踊家の会」に、庶民的な娯楽性を求めているのか、様式を求めるのか。前者であれば演目は考慮した方がよいのではないか。今年の公演はその点で中途半端だったように感じる。（個人的には、お客様は、「お祭り」を期待しているのかと感じる）また、独演の形にこだわらず、若年層は、群舞での出演にしてはどうか。出演者が全員スターであればすべて独演で見たいが、そうでない場合は、力量やインパクトに差があり、公演全体のクオリティの低下につながるような気がする。「男性舞踊家の会」は、顔ぶれが命だと思う。辛口になったが、「男性舞踊家の会」に対する期待が高いということである。
- ・ 6月普及公演「社会人のための組踊鑑賞教室『万歳敵討』」の解説はいつ見てもおもしろい。今回はじめて口説にのせた道行を見た。とても良かった。真面目な顔で演奏する地謡の様子もギャップがあっておもしろい。融通がきかないイメージのする組踊だが、鑑賞教室はとても柔軟で組踊が身近になります。設定や台詞が良く考えられていて、組踊というものがさほど敷居の高いものではないと感じさせてくれる。本編の「万歳敵討」ですが、配役に華があって良かった。ただ、衣装の紅型のイミテーションが気になった。豪華な配役でいくのか、あるいは年齢やキャリアを下げて、若手中心にするのか。劇場の方針はどちらなのか。こういった場合、大御所を一人キャスティングするだけで、大分締まると思うが（御鎖の道行人）。いずれにしても、会場をあとにするお客様方の話題が、殆ど公演の内容で好意的だったので、上演の意義はあったと思われる。
- ・ 7月定期公演組踊「貞孝婦人」では、御冠船舞台の欄干が鑑賞の妨げとなっているが、無くとも良いのではないか。さすがに同門の三名でそろっていた。御冠船仕様の舞台に、むんじゅるや取納奉行などの雑踊は違和感がある。お墓のセットは、立派すぎて違和感を覚える。紅型幕がのっぺりしているので、セットが立体的だと、そこだけ別世界のようだ。平面的なセットも沖縄の文化そのものだと個人的には思う。
- ・ 7月企画公演の新作組踊「伊野波節異聞」「平敷屋朝敏～哀・愛しゃ～」では、少人数の出演だが、

最大の演出効果があった。何よりも音楽が耳に残るし、やはり作者が文学者だけあって、言葉がきれい。時のつばさにのった語り部（風の大王）は、現代的で物語全体をわかりやすくしていて、大変良かったと思う。新作だから、新しい様式があって良いのかと考えさせてくれる作品だと思う。詞章に無理がある表現が多く、居心地の悪い場面もあったが、最後には、勝連ワールドとも言うべき、音楽の心地良い余韻があった。

- ・ 8月定期公演の組踊「糸納敵討」では、劇中の玩具売りの場面は、風俗を描いた珍しいもので貴重だと思った。全体的に洗練されており、まとまりが良かった。お客が少ないのが気になった。
- ・ 8月企画公演の喜劇「ペーちゃんの恋人」～モリエール「守銭奴」より～では、一言で言うと楽しい演劇だった。又、曲調が耳に残る作品だった。舞台機構をうまく活かした転換も見せ場があり、演出と出演者が一緒になって舞台を作り上げているのが伝わってきた。沖縄芝居の若手役者を起用したことも舞台に新風を吹き込んだ。欲を言えば、沖縄芝居独特の喜劇の持つ演技の間、爆発的な笑いを誘う畳みかけるような台詞のやりとりがやや弱かった。沖縄芸能の課題を提起する展開に少し戸惑い、満腔の笑いが起こらなかったような気がする。この作品に限らず若い役者たちが芝居をする時の沖縄的な振る舞い（言葉と演技様式）が非常に乱れており、課題だと感じている。
- ・ 8月普及公演「親子のための組踊鑑賞教室『銘苺子』」では、解説もすっかり定着して洗練化されている。国立劇場が生み出した素晴らしい舞台だと思う。第二部の「銘苺子」は新鮮な配役で期待感ももてた。
- ・ 9月定期公演の琉舞鑑賞会「豊穰の舞」では、季節の舞シリーズも定着してきた印象を受ける。前回の「うりずんの舞」同様、出演者それぞれの気合いが伝わってくる舞台だった。観客動員も多く楽しい雰囲気だった。舞踊の修行を積む人々にとって目標となる公演になって欲しい。
「琉球舞踊特選会」では、出演者が高齢にもかかわらず踊っていらっしゃるのを見ると頭が下がるが、以前と変わらない同じ所作で踊っている先生と、同じ演目でも見る度に所作を変えている先生がいて、どう判断すればよいかと考えさせられた。出演者や作品をアナウンスで紹介しているのがとても分かりやすく良い雰囲気を作っていた。観客も多く関心の高さが伺え、保持者の先生方が一堂に会するというのは素晴らしいことだと思う。
- ・ 10月定期公演の組踊「西南敵討」では、第一部は、それぞれに気合いが感じられて良かった。むんじゅると「汀間とう」の衣装が同じだったのが残念。第二部は、2人の若按司がとても美しく、良い配役だった。敵の古波津大主も良かった。一方でそのほかの配役に物足りないところもあったが、長編にも関わらず台詞のつまづきもなく安心して見ることができた。人気演目になりうる作品だと思う。劇的な技法が多く、スピーディーで選曲も明るく見やすかった。
11月企画公演「国立劇場寄席」では、出囃子や羽織の脱ぎ方など独特の所作がとても面白く、また見たいと思った。ただ、三味線の音ひとつ、太鼓の音ひとつとっても聞きなれた琉球の音と違い、笑いのツボもなんとなく頭を使わないと笑えず、ウチナーンチュにはウチナーンチュの感性があるのだと再確認した。
- ・ 1月企画公演【10周年記念特別公演】歌舞劇「今日ぬ誇らしゃや」では、国立劇場おきなわ十周年の「祝賀公演」にふさわしく沖縄演劇人の顔見世のような公演であった。演出の嘉数道彦の「佳き人、良き人」振りがきわめて沖縄的で私自身好感をもてた。感動したのは舞台セット。組踊、舞踊、歌劇、芝居、独唱どちらにも対応できる、シンプルだが力強いセットだった。観客席から見ると沖縄演劇の過去、現在、未来を語り、時代と沖縄の人の心情の明暗をも表現する舞台空間だったと思うが、時間的制約もあり、効果が十分引き出されてはいなかった面もある。また、適材適所の配役かどうか疑問が残る。組み直して再演を期待したい。
- ・ 2月定期公演【10周年記念特別公演】組踊「大川敵討」では、記念公演らしい華やかな配役で、楽しく拝見した。前回の大川敵討（4年前）も華やかでしたが、更に良かったと思う。乙樽がもっと若いか、母が年長者だと、もっと良かった。組踊は様式美であり、芝居ほどリアリティを追求する必要はなく、演者の実年齢も影響しにくいかもしれません。それでも、例えば母が能鳳先生だったりすると、更に重みのある作品になり、観客の記憶にも残る記念公演になったかもしれません。ストーリーに魅力のある作品だと感じました。歌三線の組み合わせも素晴らしかった。若手の皆様の活躍を嬉しく思う。掛持ちのメンバーが多くて、稽古が大変だったろうと、指導者に脱帽する。長丁場の物語で、休憩を2回はさんだのは観客の立場から良かったと思う。前半の1時間は、音楽の心地よさも加わって、目頭が熱くなり、後半での「アーキー」には涙した。見た目の役柄で適役だった方と、この人とあの人は交代すれば良かったのにとの声も聞かれた。村原の比屋の赤児を抱き上げるシーンは、心情が伝わらず所作やセリフの表現が今一かと思った。原国兄弟のコンビネーションは絶賛に値する。「大川敵討」にチャレンジして下さった皆様に敬意を表する。

琉球舞踊「琉舞鑑賞会（初春の舞）」では、重みのある顔ぶれで、季節の舞シリーズのシメにふさわしい内容でした。各流派の創作舞踊も数題あり、若い世代のうりずんの舞よりも、流派の特色を感じることができる舞台だったと思う。ラストの「馬山川」も大変にぎやかで、意外な配役もあり、楽しかった。欲を言えば、一人舞をいくつか見たかった。

民俗芸能「沖縄本島民俗芸能祭 沖縄各地の遊行芸」では、高平良万歳に組み込まれている「京太郎」が各地方に形は違えども、民俗芸能として伝承されていることに、まず興味をもった。泡瀬の京太郎はここ数年、飛輪の会（沖縄タイムス社男性舞踊家）が直に泡瀬京太郎保存会から指導を受けて継承され、人気のある演目となっており、結構見るチャンスはあるが、高志保・名護・長浜の保存会のものは初めて見せて頂いた。それぞれに特徴があり、楽しませてもらった。

- ・ 3月定期公演 組踊「護佐丸敵討」・「女物狂」では、「満員御礼」となった今回の公演は、チラシのデザインもとても良かったので販売促進につながったのではないのでしょうか。配役も、若手だけではなく、しかるべき役には保持者の先生を配したところが、作品に深味を持たせていました。欲を言えば、「護佐丸敵討」の供3人は、体格も年齢もバラバラな3人でしたので、少し残念でした。組踊の2本立ては贅沢で良いと感じた。また企画していただきたいと思いました。
- ・ 3月企画公演【10周年記念特別公演】能「道成寺 赤頭」では、従僧の後姿が少し見える席だったが、1時間以上身じろぎもせずと同姿勢でいるのに、プロの性根を感じた。又、蛇体が小鼓・大鼓・太鼓に合わせて何度同じ所作を繰り返したであろうか。面をつけて立っているだけでも大変だろうに足捌きと音がピタッと合う呼吸は何ということであろう。最高の演技を見せてもらった。舞台空間にしても、全て計算されており、足・腰・歩巾がしっかりしていないとできる技ではない。今回の能・狂言は、組踊を志す者に素晴らしい観劇経験を与えた。

4. アンケート調査

年間 29 公演のうち、28 公演にて 30 回実施した。

年間合計で回答数 4,479 人（配布数 7,090 人、回収率 63.2%）。回答者の 76.3%が概ね満足と答えた（3,418 人）。

【特記事項】

- ・ 全公演に字幕で歌詞を表示し、鑑賞の助けとした（「国立劇場寄席」及び小劇場の「琉球弧の島唄」公演を除く）。
- ・ 平成 25 年度（第 68 回）文化庁芸術祭主催公演（11 月企画公演アジア・太平洋地域の芸能「タイ舞踊」）
- ・ 平成 25 年度（第 68 回）文化庁芸術祭協賛公演（10 月定期公演 2 公演 ※うち 1 公演中止、11 月企画公演「国立劇場寄席」、10 月・11 月普及公演）

《数値目標の達成状況》

【目標入場者数の達成状況】

実績 15,224 人／目標 15,745 人（達成度 96.7%）

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 組踊「貞孝婦人」では、宮城能鳳によって演じられてきた主役の乙樽を、愛弟子で有望な若手女形の新垣悟が初めて演じ、好評を博した。
- ・ 新作組踊「伊野波節異聞」「平敷屋朝敏～哀・愛しゃ～」では、新作二作品の同時上演という、かつてない画期的な取組が評価された。
- ・ 琉球舞踊では、季節の舞シリーズ「うりずんの舞」「豊穰の舞」「初春の舞」も定着してきた。
- ・ 国立劇場おきなわ開場 10 周年を迎え、記念特別公演の最初の 1 月歌舞劇「今日ぬ誇らしゃや」、2 月「大川敵討」、3 月能「道成寺」の各公演は集客も良く、幸先のいい 10 周年記念公演の幕開けとなった。
- ・ 記念特別公演のほか、組踊、沖縄芝居、民俗芸能等各ジャンルの公演で大入りとなり、特に、1 月からの 10 周年記念特別公演以降は満席又は満席に近い公演が続いた。
- ・ 営業面では、観光客集客のため、ホテルや旅行業等の観光業界に無料巡回バスや無料団体送迎バスサービス等劇場の取組を PR し、連携の強化・劇場知名度の向上に努めた。その結果、劇場観劇がバスツアーで実現するなど一定の成果があり、今後の発展に期待が出来るものとなった。県内団体客の集客にあた

り、無料団体送迎バスサービスは非常に好評であった。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・ アジア・太平洋地域の芸能として「タイ公演」を取り上げ、公演自体は評価をうけたが、収支のバランスを欠く課題を残した。
- ・ 同時期に沖縄県主催の普及事業が開催された影響もあり、児童・生徒向け普及公演の入場率が著しく落ち込んだ。教育関係者への周知が必要なため、25年度は下半期より各地区校長会での取組説明や教諭等の公演への招待を行っている。引き続き、教育関係者への働きかけと取組を強化する必要がある。

《24年度評価への対応》

【評価】

(文科省評価委員会)

- ・ 全体としては目標を達成したが、入場率が5割に満たない公演が29公演中6件あったことから、公演時期などの要因分析の実施が必要である。(①)

(振興会評価委員会)

- ・ 公演の中には、9月定期公演「奇縁之巻」のように著しく低い入場率のものがある。こうしたバラツキの原因を分析して、適切な営業努力を重ねていくことが望まれる。(①)
- ・ 11月の「インド伝統芸能」は、公演企画段階での打合せをしっかりと行う必要があった。(①)

【対応】

①公演結果の分析と改善

24年9月定期公演「奇縁之巻」は、実力はあっても知名度が低い若手中心の座組であったこと、同時期中堅人気出演者で揃えた別演目の組踊公演を当劇場で上演したこと等が集客に影響したと思われる。それを踏まえ、25年度は、中堅・若手のバランスの良い配役や公演スケジュールを工夫した。

また、定期公演の10月公演「巡見官」や同じく1月の「孝行竹壽之巻」のように、組踊公演は馴染みのない演目が低い入場率になる傾向であるので、チケット販売開始が月初めであることを踏まえて、公演の周知や販売のための期間を確保するため、26年度の組踊公演からは一般に馴染みの薄い演目を月末に上演する年間スケジュールを組んでいる。同様に、年度末の上演が低調となる傾向であるため、26年度は3月に集客の見込める沖縄芝居公演を組むなど、改めて公演ジャンルとその適切な開催時期を考慮した年間の上演計画を立てるようにした。

企画公演の「アジア・太平洋地域の芸能」に関しては、24年度「インド伝統芸能」公演における出演者等関係者との調整が不十分であった点を踏まえ、25年度は事前視察を含め企画段階での調整を充分に行った。入場率に関してはやや低調であったが、公演内容においては観客から高い評価を受けることができた。また、このシリーズの公演では、取り上げた国の県内関係団体への働きかけが集客に大きく作用するが、25年度の「タイ舞踊」公演は、タイ国の関係団体等が県内にいなかったため、県外の政府機関等への働きかけに留まった。26年度の韓国公演については25年度から周知活動を始めている。

2-(1)-⑦ 演目の拡充

《実績》

1. 復活上演候補演目の上演候補台本準備稿の作成作業
 - ・ 4月の文芸課改組に伴い「国立劇場文芸研究会」を設置し、復活上演候補作品調査検討会の業務であった上演用準備台本の作成を移行させた。25年8月19日開催の文芸研究会会議において、上演用準備台本の対象作品として、候補演目の中から「升鯉滝白旗」「太平記忠臣講釈」「銘作切籠曙」を選定した。26年3月31日開催の文芸研究会会議では、「太平記忠臣講釈」の補綴内容と「銘作切籠曙」の補綴方針を検討した。26年度中の台本作成を目指して、引き続き、上記作品について補綴内容の検討を進める。
 - ・ 26年3月24日開催の復活上演候補作品調査検討会において、舞踊の候補演目「命懸色の二番目」「月雪花鈍画掛額」の台本準備稿の進捗状況について報告を受けた。また、17年度作成の「復活上演候補演目一覧」について、文芸研究会が今後作成する上演用準備台本の対象候補作品一覧として見直すことを確認し、委員と共に候補作品の検討を重ねた。さらに、委員から新規の候補作品に関する情報の提供を受けた。
2. 歌舞伎の新作脚本募集
 - ・ 25年10月から26年3月末まで応募を受け付けた。過去最多の応募数を記録した前回は踏襲し、ポスター・チラシの掲示・配布の協力団体の選定やネットメディアの利用、興行会社との協力方法を検討して、募集の周知に努めた。応募総数は166篇。なお、26年度に選考及び表彰を実施する。
3. 文楽における復曲等の上演準備作業
 - ・ 文楽公演における上演可能な演目の拡大をめざす文楽古典演目の復活準備事業の一環として、23年度に復曲され、素浄瑠璃として試演を重ねた「大塔宮囃鎧」を、本館12月文楽公演において、人形入りで121年ぶりに復活上演した。
 - ・ 文楽劇場では、三味線の朱を基に「蘭奢待新田系図」の「幸内住家の段」の復曲作業を進めた。また、26年度夏休み文楽特別公演第1部「親子劇場」での上演に向けて、小佐田定雄氏に新作文楽「かみなり太鼓」の台本作成を依頼した。
4. 大衆芸能の新作脚本募集

25年度は「浪曲」部門の脚本を8月15日より募集し、8月31日に締め切った(応募総数50篇)。1月22日に選考会を開催し、佳作2篇、財団法人清栄会による奨励賞1篇が決定した。

佳作「亀の筆跡」山田浩康、「虚無僧花筐」笹井邦平、清栄会奨励賞「ザナバル伝より馬頭琴の伝説」渡辺隆宏
5. 能楽における上演機会が少ない大曲・秘曲、新作及び復曲の上演
 - ・ 4月普及公演 能「観阿弥時代の自然居士」(古演出復元)
 - ・ 4月特別企画公演 新作 スーパー能「世阿弥」(初演)
 - ・ 5月特別企画公演 能「関寺小町」(国立能楽堂初演)
 - ・ 6月企画公演 新演出 能「世阿弥自筆本による雲林院」(能を再発見する一業平のゆくえ一)
 - ・ 9月国立能楽堂開場30周年記念公演 「翁」・狂言「庵の梅」
 - ・ 10月企画公演 復曲能「鶴羽」・能「融 十三段之舞」(国立能楽堂初演)
 - ・ 11月特別企画公演 能「道成寺 古式」
 - ・ 12月特別企画公演 狂言「釣狐」・狂言「太鼓負」(国立能楽堂初演)
 - ・ 1月企画公演 能「呉服」(古演出復元)・仕舞「玉水」
 - ・ 2月企画公演 新演出 能「藤戸」(能を再発見する一供養の場に残る老母一)
6. 組踊等沖縄伝統芸能における新作組踊等の上演
 - ・ 7月企画公演 新作組踊「伊野波節異聞」「平敷屋朝敏」
 - ・ 8月企画公演 喜劇「ペーちゃんの恋人～モリエール『守銭奴』より～」
 - ・ 1月10周年記念特別公演 歌舞劇「今日ぬ誇らしやや」

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 12月文楽公演では、文楽公演における上演可能な演目の拡大をめざす文楽古典演目の復活準備事業の一環として、23年度野澤錦糸の手によって復曲され、素浄瑠璃として試演を重ねた「大塔宮曦鎧」を、人形入りで121年ぶりに復活上演し、今後の文楽のレパートリーとなりうる演目となった。

2-(1)-⑧ 青少年等を対象とした伝統芸能の公開

《制作方針》

伝統芸能を次世代に伝え、新たな観客層の育成を図るため、中高生をはじめ青少年を対象とした入門公演を実施する。また、日頃伝統芸能に触れる機会の少ない社会人等を対象とした公演や、親子を対象とした公演を実施する。

本館では、歌舞伎鑑賞教室を2公演実施し、6月は歌舞伎舞踊の大曲で新歌舞伎十八番の内「紅葉狩」、7月は葛の葉子別れで名高い義太夫狂言の「芦屋道満大内鑑」を取り上げる。いずれも初心者向けに、実演を交えた解説を付し、筋の展開が理解しやすくなるように努める。なお、日頃伝統芸能に触れる機会の少ない社会人等にも配慮し、開演時間を遅くした「社会人のための歌舞伎鑑賞教室」や、夏休み期間には割安な親子セット料金を設定した「親子で楽しむ歌舞伎教室」を実施する。

文楽鑑賞教室では、昨年に引き続き、学生だけでなく、文楽を見たことがない一般層も視野に入れた公演制作をめざし、解説の内容を充実させることで文楽入門として最適な公演とする。

演芸場では、夏休み期間中に小学生から高校生を対象とした入門レベルの「親子で楽しむ演芸会」を実施し、寄席に親しみやすい公演とする。

能楽堂では、6月には能楽鑑賞教室を実施し、わかりやすい狂言「清水」、動きに変化のある能「黒塚」に、学生が体験出演する解説を付け、学生が親しみを持てるよう配慮する。8月には、親子向けの公演「親子で楽しむ能の会」「親子で楽しむ狂言の会」を、また8月と2月には仕事帰りの社会人向けの公演「働く貴方に贈る」を実施し、初心者への啓蒙、普及の公演とする。

文楽劇場では、6月に文楽鑑賞教室を実施し、わかりやすい演目に学生・生徒が体験出演する解説を付け、親しみが持てるように配慮する。また公演中の2回を「社会人のための文楽入門」として夜公演とし、勤め帰りに気軽に文楽鑑賞を体験できるよう工夫する。7、8月の夏休み文楽特別公演の第一部「親子劇場」では、親子で楽しめるよう、新作も含めた作品の上演を試みる。

国立劇場おきなわでは、10月・11月に「生徒のための組踊鑑賞教室」を実施し、組踊の普及を目的に、第一部では「組踊の楽しみ方」で組踊体験を交えた解説、第二部では中堅・若手の伝承者の出演で組踊を上演する。

《実績》

1. 公演実績

(1) 主に青少年を対象とした公演(再掲)

公演名		劇場	期間	区分	回数	日数	入場者数	入場率	総席数	
歌舞伎	6月鑑賞教室 解説「歌舞伎のみかた」、「新歌舞伎十八番の内紅葉狩」	本館 大劇場	6/2(日) ～24(月)	実績	46回	23日	56,549人	(80.9%)	69,920人	
				計画	46回	23日	49,820人	(71.3%)	69,920人	
	7月鑑賞教室 解説「歌舞伎のみかた」、「芦屋道満大内鑑 一葛の葉一」		7/3(水) ～24(水)	実績	44回	22日	64,108人	(95.9%)	66,880人	
				計画	44回	22日	60,980人	(91.2%)	66,880人	
文楽	12月文楽鑑賞教室「団子売」、解説「文楽の魅力」、「菅原伝授手習鑑」	本館 小劇場	12/4(水) ～16(月)	実績	24回	13日	13,146人	(99.1%)	13,272人	
				計画	24回	13日	12,870人	(97.0%)	13,272人	
	6月文楽鑑賞教室「日高川入相花王」、解説「文楽へようこそ」、「絵本太功記」		文楽劇場	6/7(金) ～20(木)	実績	28回	14日	16,461人	(80.4%)	20,468人
					計画	28回	14日	19,000人	(92.8%)	20,468人
能楽	6月能楽鑑賞教室 解説「能楽のたのしみ」、狂言「清水」、能「黒塚」	能楽堂	6/24(月) ～28(金)	実績	10回	5日	6,123人	(97.7%)	6,270人	
				計画	10回	5日	5,900人	(94.1%)	6,270人	

組踊	「生徒のための組踊鑑賞教室『万歳敵討』」※	国立劇場おきなわ大劇場	10/24(木)～25(金)	実績	6回	3日	2,008人	(57.9%)	3,468人		
			11/14(木)～15(金)	計画	8回	4日	3,468人	(75.0%)	4,624人		
鑑賞教室 合計				6公演		実績	158回	80日	158,395人	(87.9%)	180,278人
						計画	160回	81日	152,038人	(83.8%)	181,434人

※ 国立劇場おきなわ「生徒のための組踊鑑賞教室『万歳敵討』」は、台風27号接近により全8回のうち2回を中止した。

(2) 社会人や親子を対象とした入門企画・公演

(本館)

- ・ 6月歌舞伎鑑賞教室「社会人のための歌舞伎鑑賞教室」(6月14日・21日、計2回)。
- ・ 7月歌舞伎鑑賞教室「社会人のための歌舞伎鑑賞教室」(7月11日・19日、計2回)。
- ・ 7月歌舞伎鑑賞教室「親子で楽しむ歌舞伎教室」(7月15日、19日～24日、計13回)。
- ・ 12月文楽鑑賞教室「社会人のための文楽鑑賞教室」(12月6日・13日、計2回)。

(演芸場)

- ・ 7月特別企画公演「親子で楽しむ演芸会」(7月27日、1回)。

(能楽堂)

- ・ 8月企画公演「夏休み親子で楽しむ能の会」(8月10日、1回)。
- ・ 8月企画公演「働く貴方に贈る」(8月22日、1回)。
- ・ 8月企画公演「夏休み親子で楽しむ狂言の会」(8月24日、1回)。
- ・ 8月企画公演「働く貴方に贈る」(2月28日、1回)。

(文楽劇場)

- ・ 6月文楽鑑賞教室「社会人のための文楽入門」(6月10日・19日、計2回)。
- ・ 夏休み文楽特別公演、第1部を親子劇場として実施(7月20日～8月5日、計17回)。

(国立劇場おきなわ)

- ・ 国立劇場おきなわ6月普及公演「社会人のための組踊鑑賞教室」(6月16日、1回)。
- ・ 国立劇場おきなわ8月普及公演「親子のための組踊鑑賞教室」(8月10日、1回)。

(3) 各公演の連携協力

- ・ ホームページに、各館が行う親子を対象とした公演を紹介するサイトを設置し、振興会トップページのバナーから誘導することにより、対象者に狙いを絞った広報を行った。

2. 営業・広報

- ・ 6月歌舞伎鑑賞教室では中村扇雀・中村錦之助・中村隼人・中村虎之介による記者会見を行った。7月歌舞伎鑑賞教室では中村時蔵・中村萬太郎による記者会見を行った。
- ・ 6月社会人のための歌舞伎鑑賞教室において、若年層を対象とした周知のため、新進のイラストレーターによるイラストを取り入れた専用チラシを作成し、都内の小規模な劇場に掲出した。
- ・ 文楽劇場では、特にこれまで利用のなかった学校の教員を対象に、鑑賞教室の内容説明を行った。また、一般観客の集客のために、大阪商工会議所の協力を得て、同所主催の「なにわなんでも大阪検定」参加者への割引チラシ配布や大阪検定メールマガジンによる観劇呼びかけを行った。また、「社会人のための文楽入門」への集客のために、大阪府教育委員会の協力を得て、同会の府立高校教職員向けポータルサイトに案内を掲載した。

3. 外部専門家等の意見

(本館)

- ・ 6月歌舞伎鑑賞教室について、隼人と虎之介の解説は出色だった。19歳と15歳という、鑑賞者と同世代という効果は随所に感じられた。「紅葉狩」は、初心者にもわかりやすい物語であり、視覚的に美しく、前半・後半で変化にも富んでいるため、適切な演目と思われるが、踊りで展開していくところはやや退屈している生徒たちもいたようであった。脇役も含めて適材適所の安定した配役であり、三方掛合による演奏も、事前の解説で十分「予習」ができていたため、自然に受け入れられたようであった。
- ・ 7月歌舞伎鑑賞教室について、萬太郎による解説は、よくいえばオーソドックスで、ケレン味のない

のが好感を持てるが、「くろご」クンなる(当節流行の)ユルキャラが今ひとつ効果的でなく、部分部分にはよい処もありながら、全体の構成が中途半端だった。粗筋も、やたらに繁雑なストーリーを説明するより、今日の舞台の理解に必要なポイントだけを指摘すべきだ。

- ・ 鑑賞教室として「芦屋道満大内鑑 葛の葉」の上演というのは非常によい狂言のように感じました。今回上演のこの作のなかには初めてご覧になる方の為に歌舞伎の魅力を紹介するうえで実にさまざまな事象が盛り込まれているからです。たとえば、女形、早替り、引き抜き、隈取り、廻り舞台、すっぽん、ケレン、舞踊、立廻りなど、この1時間弱の上演時間のなかにそれぞれが生きた形で登場し、学生たちもそれに目を見張っている様子でした。
- ・ 12月文楽鑑賞教室について、鑑賞教室の演目、「団子売」「寺入り・寺子屋」とも文楽に親しみがなくとも、わかりやすく、是非見ておいてほしいものであり、良い選定である。「団子売」は文楽がはじめてでも馴染みのある覚えやすい曲なので、人形の所作とともに楽しく鑑賞できる。「寺子屋」は本公演同様、子供が身替わりとなって殺されるとしても、江戸時代の御恩と奉公の關係に縛られた上での行動や、親子の情愛に心打たれる。若い芸員の方々の解説もいつもながら的確で、わかりやすい。

(文楽劇場)

- ・ 6月文楽鑑賞教室は、比較的短尺の「日高川入相花王」と時代物の名作「絵本太功記 尼ヶ崎の段」を組み合わせた狂言立てに、工夫が感じられる。解説「文楽へようこそ」では、笑い声や驚嘆の声も上がり、興味津々の様子。飽きさせない芸員のトークが引き込んだ。スクリーンを使った人形の仕組みの説明も、後方の席の人にもみえやすく概ね好評。人形の表情の変化がよく分かった。

4. アンケート調査

(本館)

- ・ 6月歌舞伎鑑賞教室で実施(6月13日14:30開演)した。
回答数1,028人(配布数1,434人、回収率71.7%)。回答者の62.5%が概ね満足と答えた(642人)。
- ・ 7月社会人のための歌舞伎鑑賞教室で実施(7月12日19:00開演)した。
回答数807人(配布数1,144人、回収率70.5%)。回答者の75.2%が概ね満足と答えた(607人)。

(演芸場)

- ・ 7月特別企画公演「親子で楽しむ演芸会」で実施(7月27日)した。
回答数55人(配布数279人、回収率19.7%)。回答者の96.4%が概ね満足と答えた(53人)。

(能楽堂)

- ・ 8月企画公演「働く貴方に贈る」で実施(8月22日)した。
回答数307人(配布数581人、回収率52.8%)。回答者の84.7%が概ね満足と答えた(260人)。

(国立劇場おきなわ)

- ・ 社会人のための組踊鑑賞教室で実施(6月16日)。
回答数198人(配布数250人、回収率79.2%)。回答者の84.8%が概ね満足と答えた(168人)。
- ・ 親子のための組踊鑑賞教室で実施(8月10日)。
回答数166人(配布数246人、回収率67.5%)。回答者の86.1%が概ね満足と答えた(143人)。

【特記事項】

- ・ 7月歌舞伎鑑賞教室では、国立劇場のマスコットキャラクター「くろごちゃん」が、解説「歌舞伎のみかた」に出演した。
- ・ 6月・7月歌舞伎鑑賞教室、12月文楽鑑賞教室では、字幕表示装置により上演に合わせて詞章等を表示し鑑賞の助けとした。
- ・ 能楽堂では、座席字幕装置を活用して、日本語(詞章)・英語の2チャンネル方式で字幕表示を実施した。また「夏休み親子で楽しむ能の会」「夏休み親子で楽しむ狂言の会」では子どもにも分かり易い解説を追加したほか、通常の日本語と英語チャンネルに子ども用の現代語訳チャンネルを加えた3チャンネル方式とし、観客層に合わせたきめ細かい字幕表示を実施し好評を得た。

《数値目標の達成状況》

【目標入場者数の達成状況】

実績158,395人/目標152,039人(達成度104.2%)

《自己点検評価》

- 良かった点・特色ある点

- ・ 歌舞伎鑑賞教室公演については、6月の「紅葉狩」、7月の「葛の葉」ともに変化に富んだ歌舞伎らしい演目で、それぞれ初役ながら適材適所の配役で好評価を得た。「歌舞伎のみかた」では、常磐津・竹本・長唄の“三方掛合”の実演や、国立劇場のマスコットキャラクターである“くろごちゃん”を起用するなど、歌舞伎を身近に感じてもらえるような工夫をした。
 - ・ 12月文楽鑑賞教室では、数ある文楽の演目の中でも三大名作である「菅原伝授手習鑑」の中から、上演頻度も多く人気の作品である「寺子屋の段」を上演し、古典演目のもつ魅力を伝えられた。また今回も景事を合わせて出すプログラムを踏襲し、「団子売」では曲を音楽的に楽しみ、人形の動きを楽しんでもらうことができた。今後もこのように初めて見る方にいろいろな文楽の楽しみがあるということ伝えられる演目立てとしていきたい。
 - ・ 能楽鑑賞教室の解説では生徒の代表者3～4名が舞台上がり、それぞれに謡や所作を体験し、実際の能舞台の雰囲気を感じてもらった。客席の生徒たちにとっても興味深い体験となった。狂言「清水」はではよく笑いが起きていた。能「黒塚」は短縮版にしたこともあり、スピーディーな展開となった。観客は総じてよいマナーで舞台を鑑賞していた。
 - ・ 文楽劇場では、解説「文楽へようこそ」（「社会人のための文楽入門」）において、スクリーンに浄瑠璃の詞章や人形解説の同時中継映像を拡大投影し、好評を得た。
 - ・ 昨年度実施が見送られた大阪市の貸切公演である「文楽デー」が、本年度は従来どおり実施された。
- 見直し又は改善を要する点
- ・ 文楽劇場での文楽鑑賞教室において、入場者数が前年比862人減となり、目標入場者数にも届かなかった。引き続き教育機関や自治体等との連携を強めるとともに、文楽劇場独自の広報・営業活動を積極的に働きかけていく。
 - ・ 国立劇場おきなわの「生徒のための組踊鑑賞教室」において、同時期に沖縄県主催の普及事業が開催された影響もあり、入場率が著しく落ち込んだ。教育関係者への周知が必要なため、25年度は下半期より各地区校長会での取組説明や教諭等の公演への招待を行っている。引き続き、教育関係者への働きかけと取組を強化する必要がある。

《24年度評価への対応》

【評価】

(文科省評価委員会)

- ・ 親子のための鑑賞教室・青少年のための鑑賞教室などに、より積極的に取り組むとともに、今後は、地方に向けた広報活動の更なる充実を図るなど、ひとりでも多くの子供たちに芸術文化に関心を持ってもらえる取組を期待したい。(①)
- ・ 舞踊、現代舞踊、演劇などについても、裾野を広げるために青少年等を対象とした公演の実施が望まれる。(②)

【対応】

①企画内容・実施方法の検討

本館・演芸場では、歌舞伎・文楽・演芸等について、親子向けや青少年向けの公演を継続的に実施している。また、「歌舞伎鑑賞教室」については、地方公共団体や文化庁などとの連携協力により、青少年を対象とした歌舞伎鑑賞教室の移動公演を実施しており、25年度は6月に静岡県、7月に神奈川県で実施した。今後とも各地域の要望に応じつつ、上演機会の拡充を検討する。

能楽堂では、小学生以下を対象とした「夏休み親子で楽しむ能の会」「夏休み親子で楽しむ狂言の会」、中学生・高校生を対象とした「能楽鑑賞教室」を実施して、観客層の裾野の拡大、次世代の観客の育成に努めている。

文楽劇場では、開場以来、6月に高校生等を対象とした文楽鑑賞教室公演を実施している。また、夏休み文楽特別公演では、第1部を「親子劇場」として、親子連れで楽しめる公演としている。

国立劇場おきなわでは、組踊研修修了生が青少年を対象とした組踊鑑賞教室への出演をはじめ、県内の公立中学校・高等学校において組踊の解説と実演を行い、組踊の周知に努めている。今後もこうした活動を継続し、観客層の拡大に努める。

②実施分野拡大の検討

本館において、26年度より伝統芸能を次世代に伝え新たな観客層の育成を図るため、舞踊、邦楽、雅楽、声明について、実演解説や体験コーナーも交えた、伝統芸能の魅力を気軽に楽しめる初心者向けの公演を開始する。

2-(1)-⑨ 伝統芸能の公開に際しての留意事項等

《実績》

1. 外部専門家等の意見聴取、アンケート調査の実施

- ① 外部専門家等の意見聴取は、専門委員による公演ごとのレポート提出及び年2回の公演専門委員会の開催により行った。国立劇場おきなわでは、国立劇場おきなわ公演事業委員による鑑賞後のレポート(公演鑑賞報告書)提出を依頼したほか、年2回の公演事業委員会を開催した。
- ② アンケート調査の実施

分野	実施回数	回答数	回収率(配布数)	概ね満足との回答(回答数)
歌舞伎	7公演7回	4,218人	68.4%(6,166人)	76.6%(3,232人)
文楽(本館小劇場)	2公演2回	527人	62.3%(846人)	81.0%(427人)
文楽(文楽劇場)	4公演4回	1,272人	67.0%(1,899人)	94.2%(1,198人)
舞踊・邦楽等	10公演10回	3,414人	68.2%(5,003人)	85.2%(2,909人)
大衆芸能(演芸場)	12公演12回	1,068人	33.6%(3,180人)	93.1%(994人)
能楽	10公演10回	2,935人	57.9%(5,070人)	83.2%(2,443人)
小計	45公演45回	13,434人	60.6%(22,164人)	83.4%(11,203人)
組踊等沖縄伝統芸能	28公演30回	4,479人	63.2%(7,090人)	76.3%(3,418人)
合計	73公演75回	17,913人	61.2%(29,254人)	81.6%(14,621人)

2. 共催、受託などによる公演

(1) 平成25年度(第68回)文化庁芸術祭

区分	公演名
主催公演	本館大小劇場：10月歌舞伎公演 演芸場：10月国立名人会 能楽堂：国立能楽堂開場30周年記念11月特別企画公演 文楽劇場：11月文楽公演、10月舞踊公演 国立劇場おきなわ：11月企画公演
協賛公演	本館大小劇場：11月歌舞伎公演、11月舞踊公演、10月邦楽公演(2公演)、11月声明公演(5公演) 演芸場：10月・11月定席公演、11月国立名人会 10月・11月特別企画公演(7公演) 能楽堂：10月・11月定例公演、10月・11月普及公演、10月・11月企画公演(8公演) 文楽劇場：11月大衆芸能公演(1公演) 国立劇場おきなわ：10月定期公演(2公演) ※うち1公演中止、11月企画公演、10月・11月普及公演(4公演)

(2) 国・地方公共団体等との後援・協力

ア 鑑賞教室等における地方自治体、教育委員会、専修学校各種学校協会、旅行社等の後援・協力

- ・ 歌舞伎・能楽・文楽(本館)鑑賞教室における後援・協力等
後援：文化庁、東京都、千葉県、神奈川県教育委員会、埼玉県教育委員会、全国都道府県教育委員会連合会、公益財団法人日本修学旅行協会
協力：公益社団法人東京都専修学校各種学校協会、一般社団法人神奈川県専修学校各種学校協会、関東高等学校演劇協議会、東京都高等学校演劇研究会、株式会社ジェイティービー、株式会社日本旅行、近畿日本ツーリスト株式会社、公益財団法人文楽協会(文楽のみ)、
- ・ 7月歌舞伎鑑賞教室期間中に実施する「親子で楽しむ歌舞伎教室」における共催・後援等
共催：東京都教育委員会
後援：文化庁、千葉県、埼玉県教育委員会、神奈川県教育委員会、一般社団法人東京都小学校PTA協議会、東京都公立中学校PTA協議会、東京私立初等学校協会、一般財団法人東京

私立中学高等学校協会

- ・ 文楽劇場 6 月文楽鑑賞教室における後援・協力等
後援：文化庁、大阪府教育委員会、大阪市教育委員会、京都府教育委員会、兵庫県教育委員会、奈良県教育委員会、滋賀県教育委員会、和歌山県教育委員会、NHK 大阪放送局
協力：(公財)文楽協会
- ・ 国立劇場おきなわ開場 10 周年記念特別公演における共催
共催：沖縄県
- ・ 国立劇場おきなわ普及公演「組踊鑑賞教室」3 公演における後援
後援：沖縄県、沖縄県教育委員会
- イ 鑑賞教室地方公演における共催・後援等
 - ・ 歌舞伎鑑賞教室静岡公演
共催：公益財団法人静岡県文化財団、静岡県
後援：文化庁、静岡県教育委員会、静岡市教育委員会
 - ・ 歌舞伎鑑賞教室神奈川公演
共催：かながわ伝統芸能祭実行委員会(神奈川県立青少年センター内)
後援：文化庁、神奈川県教育委員会、神奈川県 PTA 協議会、神奈川県立高等学校 PTA 連合会
- ウ 社会人のための鑑賞教室公演における後援・協力等
後援：一般社団法人日本経済団体連合会、公益社団法人経済同友会、東京商工会議所、公益社団法人東京青年会議所
- エ 関西元気文化圏共催事業
 - ・ 文楽劇場の全公演
- オ 関西学院大学との連携協力に関する協定の締結
 - ・ 関西学院大学との連携協力協定に基づく、大学の授業での文楽技芸員による解説・実演や、学生団体鑑賞等の実施
- カ 九州・沖縄から文化力プロジェクト参加
 - ・ 国立劇場おきなわの全公演
- キ その他の自主公演等における後援・協力等
(本館)
 - ・ 本館 6 月民俗芸能公演「東日本大震災復興支援 東北の芸能Ⅲ 福島」における福島県、福島県教育委員会の後援
 - ・ 本館 1 月民俗芸能公演「東日本大震災復興支援 東北の芸能Ⅳ」における岩手県、岩手県教育委員会、宮城県、宮城県教育委員会、福島県、福島県教育委員会の後援及び三井住友カード株式会社の協賛
 - ・ 本館 9 月特別企画公演「日本の太鼓」における株式会社浅野太鼓楽器店の協力
(能楽堂)
 - ・ 11 月開場 30 周年記念特別企画公演における古典の日推進委員会の後援
(文楽劇場)
 - ・ 文楽劇場公演(5・6 月開催)における大阪府・大阪市・公益財団法人関西・大阪 21 世紀協会が主催する大阪文化祭への参加
 - ・ 大阪の近隣で活動する小劇場、公共ホール、劇団等との活動連携(5~10 月むりやり堺筋線演劇祭)
- ク 外部の公演等への後援・協力等
 - ・ 公益社団法人日本俳優協会、社団法人伝統歌舞伎保存会、松竹株式会社が刊行する「ポケット版『かぶき手帖』2013 版」への協賛(4 月 1 日刊行)
 - ・ 人形浄瑠璃文楽座因講主催の「竹本義太夫 300 回忌追善・竹本義太夫墓石修復資金勸進特別公演」(4 月 5 日、文楽劇場、5 月 10 日、本館小劇場)への協賛
 - ・ 一般社団法人伝統歌舞伎保存会主催の「小学生のための歌舞伎体験教室」(7 月 7 日、13 日、8 月 6~12 日、本館大劇場、本館小劇場、本館稽古場、伝統芸能情報館)への協賛及び協力
 - ・ 文化庁・公益社団法人全国高等学校文化連盟・東京都教育委員会・東京都高等学校文化連盟主催の「第 24 回全国高等学校総合文化祭優秀校東京公演」(8 月 24 日~25 日、本館大劇場)への協賛
 - ・ チーム「鼓舞」実行委員会主催の「おが秋の芸祭 鼓舞」(9 月 1 日、旧石巻市役所 雄勝総合支所跡地)への協力
 - ・ 株式会社世界文化社刊行の「新版『歌舞伎十八番』」(9 月 13 日刊行)への協力
 - ・ 独立行政法人国際交流基金主催の「『杉本文楽 曾根崎心中』欧州公演」(9 月 27 日~28 日、マ

ドリード、10月4日～5日、ローマ、10月10日～19日、パリ)への協力

- ・ 一般社団法人江戸文化歴史検定協会主催の「第8回江戸文化歴史検定」(11月3日)への協力
- ・ よこすか市民会議(YCC)主催の「2013よこすか市民会議まちづくり文化フェア」のうち、「よこすか芸術文化フェア2013」の一環として開催された「伝統文化学習鑑賞会(文楽学習鑑賞会)」(12月11日、伝統芸能情報館レクチャー室)への協力
- ・ 文化芸術による復興推進コンソーシアム主催の「支援・受援ネットワーク会議」(10月18日、福島県郡山市民文化センター)への協力
- ・ 一般社団法人伝統歌舞伎保存会主催の「第12回伝統歌舞伎保存会研修発表会」(12月14日、本館大劇場)への協賛
- ・ 一般社団法人伝統歌舞伎保存会主催の「第13回伝統歌舞伎保存会研修発表会」(1月18日、本館大劇場)への協賛
- ・ 東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)、東京発・伝統WA感動実行委員会主催の「音の息吹」(10月5日、東京文化会館大ホール)及び「邦楽への誘いー古典文学の情景ー」(11月1日、文京シビックホール)に対して制作協力を実施
- ・ 公益財団法人しまね文化振興財団・島根県主催の「文楽 日本振袖始」(3月9日、島根県民会館)への協力
- ・ 沖縄県伝統芸能公演実行委員会(会長 沖縄県文化観光スポーツ部長)に実行委員として参画し、国立劇場おきなわ小劇場における「沖縄県伝統芸能公演」を共催(主催:沖縄県・(公財)沖縄県文化振興会)
- ・ 沖縄県文化観光戦略推進事業助成事業として以下の特別公演を上演
 - 「守礼の心～組踊への誘い～」(7月31日～8月4日)
 - 「かりゆし・かりゆし 恋するシーサー」(3月3日～4日)
 - 組踊版「スイミー」(3月10日～11日)
- ・ 琉球舞踊「男性舞踊家の会」公演(主催:南城市文化センターシュガーホール、11月26日)
- ・ 喜劇「ペーちゃんの恋人」公演(主催:宜野座村文化センターがらまんホール、3月29日)

3. 全国各地の文化施設等における公演

- ・ 歌舞伎鑑賞教室静岡公演(共催:財団法人静岡県文化財団、6月26日、2回公演、静岡県コンベンションアーツセンター グランシップ、入場者数:1,040人)
- ・ 歌舞伎鑑賞教室神奈川公演(共催:かながわ伝統芸能祭実行委員会、7月26日～27日、4回公演、神奈川県立青少年センター、入場者数:1,950人)
- ・ スーパー能「世阿弥」制作協力(主催:①有限会社ダンスウエスト、5月17日、大阪・フェスティバルホール、②公益財団法人赤穂市文化とみどり財団、7月7日、赤穂市文化会館ハーモニーホール、③碧南市、7月15日、碧南市文化会館、④公益財団法人新潟市芸術文化振興財団、7月28日、新潟市民芸術文化会館りゅーとぴあ能楽堂、⑤能楽座、9月7日、大淀町文化会館あらかしホール)
- ・ 復曲能「阿古屋松」制作協力(主催:山形県能楽協会、復曲能「阿古屋松」を観る会実行委員会、7月20日、山形市民会館)
- ・ 新作能「紅天女」受託公演(主催:CBC中部日本放送株式会社、3月2日、2回公演、名古屋能楽堂)
- ・ 国立劇場おきなわ第3回県外講演「琉球文学の視点から観る古典芸能の魅力」(9月28日、徳川美術館講堂)
- ・ 静岡県コンベンションアーツセンターグランシップ自主公演「うたさんしん～琉球の宴～」制作協力(2月21日)

4. 国際文化交流公演等

(1) 海外の芸能関係者等の来場、見学等

- ・ 本館 4件8人
主な来場者:台湾台南市文化局長、ユネスコアジア太平洋地域無形文化遺産国際情報ネットワークセンター事務総長、韓国国立国学院の施設関係者、香港文化博物館関係者

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ スーパー能「世阿弥」、復曲能「阿古屋松」及び新作能「紅天女」が各地で再演され、国立能楽堂制

作作品をより多くの人に見てもらおうことができ、また再演により作品の洗練が行われた。

《24年度評価への対応》

【評価】

(文科省評価委員会)

- ・ 地方との連携に関しては、一部に改善は見られるが、より多くの国民にナショナルセンターの芸術活動に接してもらえるよう、全国ネットワークを広く構築して、各地での事業、広報活動に積極的な取組が望まれる。(①)
- ・ 地方における上演等については、計画どおり実施されていると判断できるが、地方で享受できる公演は十分とは言えない。(①)
- ・ ナショナルシアターとして、より多くの国民に芸術活動に接してもらえるよう、国立劇場で制作した作品を地方で再演すべきである。(①)

【対応】

①地方公演拡充の方策の検討

地方公演の上演機会の拡充については、24年4月に、歌舞伎公演出演者及び関係業者等の協力を得て、25日に宮城県名取市、26日に同県多賀城市において被災者を無料招待して東日本大震災復興支援チャリティー歌舞伎公演を実施した。また、各公演当日に中学生を対象に歌舞伎俳優によるレクチャーデモンストラーションを実施した。

また、青少年を対象とした歌舞伎鑑賞教室の移動公演は、地方公共団体や文化庁などとの連携協力により、25年6月に静岡県、7月に神奈川県で実施した。今後とも各地域の要望に応じつつ、上演機会の拡充を検討する。

能楽堂では、地方公共団体等と連携協力し、地方公演の拡充及び制作作品の再演に積極的に取り組んでいる。25年4月特別企画公演で委嘱・初演した新作能「スーパー能 世阿弥」を、25年5月に大阪府大阪市、7月に兵庫県赤穂市、愛知県碧南市、新潟県新潟市、9月に奈良県吉野郡大淀町で能楽堂の制作協力により上演した。また、24年4月特別企画公演で復曲・初演した復曲能「阿古屋松」を25年7月に山形県山形市で能楽堂の制作協力により上演した。さらに、18年2月特別企画公演で制作・初演した新作能「紅天女」を26年3月に愛知県名古屋市で能楽堂が受託して上演した。

国立劇場おきなわでは、県外における沖縄の伝統芸能の普及活動の一環として、25年度に名古屋市の徳川美術館講堂において県外講演を実施した。また、25年7月企画公演で上演した新作組踊「平敷屋朝敏」が、平敷屋朝敏実行委員会主催により同年9月に浦添市でたこホールで再演された。

I 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するため
とるべき措置

伝統芸能の公開及び現代舞台芸術の公演

現代舞台芸術の公演

現代舞台芸術の公演 p.82

— オペラ p.88

— バレエ p.96

— 現代舞踊 p.102

— 演劇 p.107

— 青少年等を対象とした現代舞台芸術の公演 p.113

— 現代舞台芸術の公演の実施に際しての留意事項等 p.116

2- (2) 現代舞台芸術の公演

《中期計画の概要》

- 2 伝統芸能の公開及び現代舞台芸術の公演
- (2) 現代舞台芸術の公演
- ア オペラ公演 年間 12 公演程度
- イ バレエ公演 年間 6 公演程度
- ウ 現代舞踊公演 年間 4 公演程度
- エ 演劇公演 年間 8 公演程度
- (3) 青少年等を対象とした公演
- イ 青少年を対象とした公演を年間 3 公演程度実施、各公演の連携協力の強化
- (4) 伝統芸能の公開及び現代舞台芸術の公演の実施に際しての留意事項等
- ア 適切な鑑賞者数の目標設定
- イ 外部専門家等の意見聴取、アンケート調査の実施
- ウ 現代舞台芸術の振興普及の中核的拠点としての公演等の実施
- ① 国、地方公共団体、芸術団体、企業等との連携協力
- ② 各地の文化施設等における公演等
- ③ 国等との連携協力による公演等

《年度計画》

- 2 伝統芸能の公開及び現代舞台芸術の公演
- (2) 現代舞台芸術の公演
- 現代舞台芸術の振興と普及を図るため、中期計画の方針に従い、別表 2 のとおり主催公演を実施する。
- (3) 青少年等を対象とした公演
- イ 青少年等が現代舞台芸術に触れる機会を確保し、新たな観客層の育成と現代舞台芸術の普及を図るため、主に青少年を対象とした公演を別表 3 のとおり実施する。実施に当たっては、各公演の連携協力を強化するなど、その充実を図る。
- (4) 伝統芸能の公開及び現代舞台芸術の公演の実施に際しての留意事項等
- ア 外部専門家等の意見を聴取するとともに、観客へのアンケート調査を適宜実施し、公演事業に反映させる。
- イ 我が国における伝統芸能の保存振興又は現代舞台芸術の振興普及の中核的拠点として、中期計画の方針に従い、次のとおり公演等を実施する。
- ① 共催、受託などによる公演等を別表 5 のとおり実施する。
- ② 各地の文化施設等における公演等を別表 6 のとおり実施する。
- ③ 国際文化交流の進展に寄与する公演等を別表 7 のとおり実施する。

《実績》

1. 公演実績

公演名	公演数 劇場	区分	回数	日数	入場者数	入場率	総席数
オペラ	11 公演 オペラ劇場、中劇場	実績	56 回	56 日	76,599 人	(80.3%)	95,392 人
		計画	56 回	56 日	74,900 人	(78.5%)	95,355 人
バレエ	6 公演 オペラ劇場、中劇場	実績	30 回	29 日	36,511 人	(74.0%)	49,330 人
		計画	30 回	29 日	35,800 人	(72.6%)	49,330 人
現代舞踊	4 公演 中劇場、小劇場	実績	13 回	13 日	5,616 人	(76.1%)	7,378 人
		計画	13 回	13 日	5,550 人	(76.4%)	7,263 人
演劇	8 公演 中劇場、小劇場	実績	155 回	138 日	48,821 人	(67.1%)	72,753 人
		計画	156 回	141 日	52,800 人	(74.1%)	71,236 人
総合計	29 公演	実績	254 回	236 日	167,547 人	(74.5%)	224,853 人
		計画	255 回	239 日	169,050 人	(75.7%)	223,184 人

1) 4月演劇公演「『効率学のスズメ』」は、当初18回公演を予定していたが、4月21日（日）の公演が中止と

なったため、17回公演となった。

2. 青少年等を対象とした現代舞台芸術の公演

公演名	劇場	期間	区分	回数	日数	入場者数	入場率	総席数			
高校生のためのオペラ鑑賞教室 「愛の妙薬」	オペラ劇場	7/10(水) ～17(水)	実績	6回	6日	9,911人	(93.3%)	10,624人			
			計画	6回	6日	9,000人	(84.7%)	10,620人			
鑑賞教室 合計			1公演			実績	6回	6日	9,911人	(93.3%)	10,624人
						計画	6回	6日	9,000人	(84.7%)	10,620人

3. 現代舞台芸術の公演に際しての留意事項等

(1) 外部専門家等の意見聴取、アンケート調査の実施

① 外部専門家等の意見聴取

各部門の専門委員に各公演についてのレポートを送り、意見の聴取を行った。
また、総括レポートの提出を半期ごとに依頼し、自己点検評価の総括に生かした。

② アンケート調査の実施

分野	回答数	概ね満足との回答(回答数)
オペラ	6,435人	87.3%(5,620人)
バレエ	2,659人	95.4%(2,537人)
現代舞踊	313人	89.5%(280人)
演劇	709人	87.2%(618人)
合計	10,116人	89.5%(9,055人)

(2) 共催、受託などによる公演

① 平成25年度(第68回)文化庁芸術祭主催3公演、協賛4公演を実施した。また、受託公演として文化庁芸術祭オープニング公演を行った。

② 地域招聘公演(オペラ1公演)を実施した。

③ 東京芸術大学、国立音楽大学、昭和音楽大学との連携・協力協定に基づき、アートマネジメント講座を実施した。また、大阪音楽大学や北海道教育大学との間では、同じく連携・協力関係を活かして、各大学合唱団と新国立劇場合唱団の合同演奏会を開催した。

(3) 全国各地の文化施設等における公演

全国で公演(オペラ1公演、バレエ3公演、現代舞踊2公演、演劇3公演、新国立劇場合唱団外部出演18公演(うち1回中止)、新国立劇場研修所研修生等外部出演2公演)を実施した。

(4) 国際文化交流公演等

- ・ 芸術の殿堂(ソウル・アート・センター)との3回目となる日韓共同作品として演劇「アジア温泉」を新国立劇場(5月10日～26日)及び芸術の殿堂(6月11日～16日、韓国・ソウル)で実施した。
- ・ モスクワ国立舞踊アカデミー創立240周年記念国際バレエ学校フェスティバルに、新国立劇場バレエ研修所研修生等が出演した(11月6日・7日)。
- ・ 新国立劇場バレエ団プリンシパルの小野絢子と福岡雄大が、英国バーミンガム・ロイヤル・バレエによる「パゴダの王子」(英国初演)にゲストダンサーとして招かれた。(2月27日、3月1日)
- ・ オペラ・アメリカ、オペラ・ヨーロッパ及びアジア太平洋パフォーミング・アーツ・センター連盟(AAPPAC)の本部事務局と定期的に連絡を取り合い、機関誌の送付受領を始め情報交換に努めた。また、同事務局より加盟機関の運営状況に関する統計資料の提供依頼があったため、必要資料を提出した。
- ・ 海外の劇場との情報交換に務め、また海外より当劇場訪問の際には劇場見学、質疑応答など交流の進展をはかった。
- ・ 新国立劇場のオペラやバレエ作品制作における海外の芸術家や劇場との連携協力を広く紹介するために、上演中のホワイエにて、オペラ公演「魔笛」の出演キャラクターのマネキン人形や「コジ・ファン・トゥッテ」の関連舞台写真を展示した。また「ナブッコ」「リゴレット」において、『国際連携プロジェクト』として、ヴェルディ生誕200周年記念・新国立劇場ヴェルディ作品舞台写真展を開催した。
- ・ 文化庁「外国人芸術家・文化財専門家招へい事業」により来日した芸術家1名の受入れを行い、研修所での特別講義や研修生への指導、情報交換などを実施した。
- ・ 海外から劇場関係者など全6ヶ国7団体45名の訪問受入れを行った。
- ・ 「在日各国大使のオペラ・バレエ鑑賞プログラム」を実施した。

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ オペラでは、新制作公演として、2013年に生誕200周年を迎えたヴェルディの作品から、「ナブッコ」及び「リゴレット」を斬新な演出で上演し、大きな話題となったとともに、オペラ芸術の新たな可能性を示した。また、邦人作曲家へ新作委嘱を行った「夜叉ヶ池」、日本において舞台付き上演実績のほとんどない名作「死の都」を上演し、いずれもその成果及び意義が高く評価された。
- ・ バレエでは、「くるみ割り人形」「白鳥の湖」等の古典から「ペンギン・カフェ」「シンフォニー・イン・スリー・ムーヴメント」等の近現代の作品まで、多種多様な公演を行い、その幅広さ及びクオリティの高さに絶賛の声が集まった。特に「バレエ・リュス ストラヴィンスキー・イブニング」では上演機会の少ない演目に挑み、その質の高さと意欲性には観客のみならず数多くの舞踊評論家や研究者から熱烈な賛辞が送られた。
- ・ 現代舞踊では、平山素子、中村恩恵、首藤康之、小野寺修二という日本を代表する舞踊家により、中劇場の空間にそれぞれ全く異なる世界観が生み出され、新国立劇場現代舞踊公演の質の高さが示されたとともに、各公演とも観客・評論家等より非常に高い評判を得た。
- ・ 演劇では、宮田芸術監督が海外の劇作家と組んだ『『効率学のスズメ』』、「アジア温泉」、「つく、きえる」や、話題作の再演「象」、新訳上演の「ピグマリオン」及び「アルトナの幽閉者」など、新国立劇場ならではの意欲作が上演された。中でも若手の演出家が手掛けた「OPUS/作品」「エドワード二世」においては多くの演劇賞を受賞するなど、日本の演劇界において非常に高い評価を受けた。
- ・ 毎年恒例の「高校生のためのオペラ鑑賞教室」では、「愛の妙薬」を上演した。本事業開始以来、着実に公演回数を増やし、15回目を迎えた25年度も全6回を実施、その入場率は93.3%と極めて高かった。
- ・ 公演計画立案上の指標として大きなメリットを生み出しているシーズン制は、友の会制度、セット券販売と相俟って、大きな営業・広報戦略でもある。25年度においては、2014/2015シーズンについて、11月にオペラ、バレエ・現代舞踊部門について新芸術監督のシーズン到来を予告し、1月から3月にかけて、全ジャンルの演目発表に伴いセット券販売を行うなど、メディアの注目度を高めるとともに、鑑賞者の期待感を醸成した。
- ・ 特設サイトやブログに加え、Facebook ページ、ツイッターアカウントを各分野で開設し、以前より取り組んでいた SNS を活用した販促活動を更に充実させた。画像や動画、公演内容の詳細や解説、チケット情報等の迅速かつ継続的な発信に努め、新規観客層の開拓に資したとともに、多くの人々の期待感を醸成し、鑑賞へと結びつけた。
- ・ 劇場ホワイエ内において、公演に関する記事掲載・パネル告知や映像の配信、時には作品の世界観にあわせた装飾を行った。また関連物品・飲食物の販売、観客サービスを行い、観客の興味を喚起したとともに、休憩時間等における公演以外の楽しみとして大変好評を得た。
- ・ 昨年に引き続き、新国立劇場愛好者に対し、必要な情報を的確に周知するため、eメールにて各種情報を提供して、顧客の利便性の向上に資している。
- ・ 自己収入の確保に努めた結果、特に、オペラ「魔笛」、オペラ「カルメン」、オペラ「蝶々夫人」、バレエ「くるみ割り人形」、演劇「ピグマリオン」では100%を超える収支率、演劇「OPUS/作品」、演劇「エドワード二世」でも90%を超える収支率を達成した。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・ 演劇について、分野全体で目標入場者数を達成できなかった。いずれの作品も、娯楽作品というよりも文芸作品ととらえる事ができ、爆発的な流行を生み出すような作品ではないが、長くじっくり考えさせる、味わうといった作品である。故に、地道な上演活動こそがそれぞれの作品の周知集客活動の基礎と位置づけられ、同時にそれぞれの作品の素晴らしさを訴える方法を考えていきたい。「『効率学のスズメ』」「アジア温泉」「つく、きえる」等の新作公演については、事前の情報に乏しいため広報宣伝営業活動に困難が伴う共通点がある。しかしながら、出来上がった作品が総じて高い評価を得ている以上、情報が乏しい中でも、その作品の期待値を高める不断の努力と創作の継続が必要である。「アルトナの幽閉者」のような上演機会の少ない名作公演については、よりきめ細かい作品分析と見どころの紹介に努める必要がある。

《24年度評価結果への対応》

【評価】

(文科省評価委員会)

- ・ 公演事業に関しては、概ね計画どおりに実施されたが、伝統芸能、現代舞台芸術の両分野で入場率の未達が見受けられたことから、その要因分析と対策が必要である。(①)
- ・ 現代舞踊は非常にレベルの高い公演が並んだが、やや出演の顔ぶれが固定しつつあるので、新たなス

ターの発掘を心掛けてほしい。(②)

- ・ アンケート調査では、オペラ、バレエ、演劇で、90%を超える観客が概ね満足と回答していることは高く評価できる。今後は、回収率を上げる方策を検討し、調査結果の精度を上げてさらなる改善につなげられたい。(③)

(振興会評価委員会)

- ・ もちろん入場者数の増加は大切なことだが、一方で集客には不利であっても重要な演目について取り上げることも新国立劇場の大きな使命である。今後も引き続きその両面に適切に配慮してほしい。(②)
- ・ 「ピーター・グライムズ」「シルヴィア」「リチャード三世」が並び、「英国舞台芸術フェスティバル」と銘打った企画が立てられた。しかし時代・ジャンル・モチーフのいずれも異なる三作品だけに、芸術的な視点がもう少し明確に提示できれば良かった。(④)

【対応】

①公演結果の分析と改善

目標に達しなかった公演については、以下のとおり特に入念な要因分析と対策の検討を行った。

オペラ公演について、「オテロ」は名作ながら一般的な知名度や期待度が他作品に及ばなかったほか、シーズンセット券の販売時期（23年1月～）に東日本大震災が重なったことで、購買意欲が削がれたことも痛手となった。引き続き作品の周知に努める。「ピーター・グライムズ」は作曲家の知名度が高くなく、ドラマもシリアスな内容で、集客面での苦戦が予想されたことから、新しい広報・営業戦略として「英国舞台芸術フェスティバル」に参加することにより観客に訴求するため最大限努力したが、今後ともさらに分かりやすい説明や、作品の魅力アピールに努める。「愛の妙薬」はワーグナー生誕200周年を控えて注目された「タンホイザー」と時期が重なったことに未達の大きな要因があった。劇場施設の効率的な使用や日替わり公演を求める声を踏まえながらも、営業上効果的な上演日程を設定できるよう、今後も綿密な検討を重ねる。「ドン・ジョヴァンニ」（演奏会形式）は新年度2日目の平日、昼公演という集客には厳しい上演日程に加え、新企画であった前回と比較して目新しさに欠けた。今後同様の企画を続ける場合、より綿密な目標設定や開催意義の検討が必要になると考えている。

バレエ公演について、6公演中4公演で計画に対し未達であり、全体の達成度も97.9%とわずかに目標に届かなかった。バレエ公演においては、ビントレー芸術監督のもと、現代作品を基調とする新しい演目への挑戦、またゲストを初めとする特定のダンサー頼みではない、新国立劇場バレエ団自体の魅力の涵養を目指すという新たな方向性を打ち出している。しかし、同時にこの新しい方向性が、古典演目を好む傾向の強い日本の観客にとって受け入れにくいものだったことが、近年の入場率目標未達の本質的な要因であると考えている。この溝を埋め、新しい演目やバレエ団そのものの魅力への理解と共感を得ることが出来るよう、関係部署が一体となって、知名度の低い作品については過去の上演実績やキャスト・スタッフから収集した情報等をもとに、観客に訴求することのできる魅力を分析したほか、関係部署間で打合せを重ねて、新しい方向性にふさわしい宣伝・営業方法の検討も行っている。この新たな方向性を観客が次第に受け入れることができるよう、長期的な視点から臨むことで、バレエ芸術そのもの、そして観客を含むバレエ界全体の一層の成熟に資したい。

具体的には「マノン」はゲストダンサーの日本での知名度が低かったほか、著作権上、動画等を用いた作品紹介が困難で、一般向けの内容周知に苦戦した。いわゆる有名バレエ作品と異なり上演実績も不足していることから、まずは主役ダンサーの魅力周知やファン層拡大のため、地道な公演告知と新たな販路拡大に努めたい。「シルヴィア」は日本における上演機会、知名度ともに低く、集客面での苦戦が予想されたことから、新しい広報・営業戦略として「英国舞台芸術フェスティバル」により観客に訴求するため最大限努力したが、興味喚起と集客は困難を極めた。実績を向上させるためには根気よく上演機会を設け、内容への理解と知名度の向上を図る必要がある。新制作の「ダイナミック・ダンス！」は、現代的なバレエで知名度、期待感が他公演に及ばなかったことから、再演を重ねるとともに、他公演とのセット購入を促すため早い段階でできるだけ多く情報を発信することが重要になると考えている。「ジゼル」は主役キャスト未定でのセット券発売、会員発売直前での外国人キャスト決定、英国バーミンガム・ロイヤル・バレエの英国公演への客演による新国立劇場バレエ団トップダンサーの不在等、不利な条件が重なった。これらのキャスト決定時期は、最良のキャストを組むためのものであるが、チケット販売への影響は否めなかった。引き続き観客への周知に努めるとともに、キャスト決定時期について改善策を検討したい。

現代舞踊公演について、「DANCE to the Future 2013」は平日夜2回のみという集客の困難な公演日程であったことから、今後のスケジューリングに配慮したい。また、知名度向上、期待感醸成のため上演を重ねるとともに、他公演とのセット購入を促すため、早い段階でできるだけ多く情報を発信することが重要と考えている。

演劇公演について、「まほろば」は比較的短期間での再演となったため、アピールが難しく、また「パーマ屋スマイル」と「負傷者16人」という話題作に挟まれた影響もあった。加えて、時期的な問題で学生団体顧客の取り込みに苦戦した。今後はシンポジウムやオープンセッションを開催する等の工夫により、時期

にとらわれない団体顧客の拡充に努めたい。また、日本の観客に「再演を楽しむ」ことが根づくよう打開策を見つけたい。「長い墓標の列」では硬派な作品とキャストが一般観客の興味を喚起するに至らず、好評だった団塊世代の男性客の声の周知も十分に出来なかった。ターゲット層を絞り込んでアプローチに努めるほか、演劇研修所との連携をさらに活用して販売協力を得るなどの可能性も考えたい。

今後も会員、一般、団体の各販売区分別に集客実績の分析を行うとともに、効果的かつ多面的な公演情報発信の強化等、集客面で対策を講じたい。

②企画内容・配役の工夫

バレエ公演においては近年、ビントレー芸術監督による振付作品の複数が、新国立劇場のレパートリーに加えられた。また、26年3月には世界初演の新制作演目も上演した。今後のシーズンラインアップにも、古典作品のみならず現代作品等を取り込み、新国立劇場ならではの斬新な企画を打ち出してゆく予定である。

現在、新国立劇場バレエ団では、古典から現代創作作品まで幅広いレパートリーへの挑戦を通じ、技術力・表現力いずれにおいても著しい進境を見せる若手ダンサーが育ちつつあり、将来的にはこれらのダンサーが、現在も定評のあるコール・ド・バレエを牽引し、バレエ団の広告塔として活躍することが期待されている。また、これらのダンサーのみならず、バレエ団全体の一層の成長を促すとともに、その新たな魅力を開拓して観客に訴求する観点から、現在、興行成績が比較的安定している古典演目を中心に、外部から注目の若手ダンサーを招聘し、バレエ団ダンサーと共演させる試みを検討しているところである。さらに、現代作品等、日本の観客にとって特に馴染みが薄いと思われる演目においては、集客面における効果を期待して、世界的に定評のあるゲストダンサーを招聘する可能性についても視野に入りたい。

現代舞踊公演において、十二分に高い水準の出演者が日本に少ないことに起因する出演者の固定化は重々承知しているところではあるが、当面は企画の新鮮さや新国立劇場バレエ団との融合等、内容面の工夫に取り組むことから始めている。例えば25年度の「平山素子 フランス印象派ダンス Trip Triptych」に宝満直也が出演した際のように、外部のアーティストに混じって新国立劇場バレエ団のダンサーが出演する等、現代舞踊とバレエの融合を図る企画を実施するとともに、それに伴う観客の新たな開拓策を講じた。

なお、26年度の現代舞踊公演では、海外の著名バレエ団やダンスカンパニーに所属経験のあるダンサーを数名招き、さらに新国立劇場バレエ団ダンサーと共演する公演や、日本における洋舞の歴史を振り返る公演を企画しており、新国立劇場の主催公演に初めて登場するアーティストも数多く出演が予定されている。

演劇部門においては、レパートリー演目について、評価が高かった作品の再演を今後も積極的に企画するとともに、新作のレパートリー化及び全国公演の一層の増加に努めたいと考えている。

なお、小劇場における若手劇作家の作品紹介については、24年度も長塚圭史という人気・実力とも兼ね備えた若手劇作家・演出家に新作を委嘱し、「音のない世界で」を上演した。「大人も子供も楽しめる作品」という、劇場にとっても同氏にとっても新たな作品創りへのチャレンジともなり、同年度演劇公演中の最高入場率を記録した。また、同じく小劇場で上演した蓬莱竜太の「まほろば」も、再演とはいえ若手劇作家の作品である。優れた若手劇作家の作品を再演する試みも継続したいと考えている。

③アンケート調査結果の活用、実施方法の工夫

アンケートの結果から、観客の満足度の高さを確認することは出来たが、併せて回収率の向上を目指し、観客に極力アンケートに協力してもらうことができるよう、終演時に多数の職員がホワイエに立って声をかけをしており、その成果は少しずつ結果にも結びついている。

一方で、回答数について、演劇の公演1回あたりのアンケート回答数が他ジャンルに比べて少なく、今一步の努力が望まれていることから、25年11月公演「ピグマリオン」より実施回数を増やすこととした。

なお、オペラが演目数に比してアンケートの実施回数が特に多いのは、「高校生のためのオペラ鑑賞教室」において、6回公演全てでアンケートを実施している結果である。この公演は、高校生の団体客がほとんどを占めるといふ客層の性格上、通常の観客向けの公演に比べて多数のアンケート回答数が得られるため、他ジャンルと比較して突出してオペラの回答数が多くなっている。

④公演と連携した企画の充実

「英国舞台芸術フェスティバル」では、個別の演目に関する芸術的視点について、研究者や実演家等による様々なレクチャーや講座を設け、時代やジャンルが異なるモチーフを多角的に紹介して参加者から好評を得た。また、例えば演劇「リチャード三世」に描かれているのが薔薇戦争であることに着目して英国におけるバラと舞台芸術を紹介した「英国を彩るバラと舞台芸術展」や、英国舞台芸術の現在を紹介した「英国舞台芸術最新事情展示」等を通じて、観客に劇場に親しんでもらえるよう、フェスティバルの主眼である3演目の関連事項についても分かりやすく紹介し、多くの来場者に好評を得ることができた。今後

も可能な限り芸術的視点まで表現することができるよう、工夫を重ねたい。

2-(2)-① オペラ

《制作方針》

- ① スタンダードな作品の上演
名作と呼ばれるような代表的な作品を上演し、それをレパートリーとして蓄積し、繰り返し上演していくことで、オペラを市民生活に普及・定着させる。
- ② 上演機会の少ない優れた作品の上演
優れた作品ながら、さまざまな理由で日本では上演される機会の少なかった作品にも積極的に取り組む。
- ③ 日本の作曲家の作品の上演
欧米の名作ばかりではなく、日本の作曲家のオリジナル作品の上演にも積極的に取り組み、レパートリーとして蓄積していく。

《実績》

1. 公演実績

公演名	劇場	期間	区分	回数	日数	入場者数	入場率	総席数
「魔笛」	オペラ劇場	4/14(日) ～21(日)	実績	4回	4日	6,127人	(85.5%)	7,168人
			計画	4回	4日	5,600人	(78.1%)	7,168人
「ナブッコ」(新制作)		5/19(日) ～6/4(火)	実績	6回	6日	8,835人	(82.2%)	10,752人
			計画	6回	6日	8,500人	(79.1%)	10,752人
「コジ・ファン・トゥッテ」		6/3(月) ～15(土)	実績	5回	5日	5,035人	(56.2%)	8,960人
			計画	5回	5日	6,300人	(70.3%)	8,960人
「リゴレット」(新制作)		10/3(木) ～22(火)	実績	7回	7日	9,605人	(77.4%)	12,403人
			計画	7回	7日	10,700人	(86.7%)	12,342人
「フィガロの結婚」		10/20(日) ～29(火)	実績	4回	4日	5,564人	(77.6%)	7,168人
			計画	4回	4日	5,800人	(80.9%)	7,168人
「ホフマン物語」		11/28(木) ～12/10(火)	実績	5回	5日	6,760人	(75.4%)	8,960人
			計画	5回	5日	6,600人	(73.7%)	8,960人
「カルメン」		1/19(日) ～2/1(土)	実績	5回	5日	8,049人	(92.5%)	8,699人
			計画	5回	5日	7,300人	(83.6%)	8,727人
「蝶々夫人」	1/30(木) ～2/8(土)	実績	4回	4日	5,607人	(78.2%)	7,168人	
		計画	4回	4日	5,100人	(71.1%)	7,168人	
「死の都」(新制作)	3/12(水) ～24(月)	実績	5回	5日	7,302人	(81.5%)	8,960人	
		計画	5回	5日	6,800人	(75.9%)	8,960人	
「夜叉ヶ池」(新制作・世界初演)	中劇場	6/25(火) ～30(日)	実績	5回	5日	3,804人	(84.0%)	4,530人
			計画	5回	5日	3,200人	(70.6%)	4,530人
【小計】	10公演 (計画:10公演)		実績	50回	50日	66,688人	(78.7%)	84,768人
			計画	50回	50日	65,900人	(77.8%)	84,735人
高校生のためのオペラ鑑賞教室「愛の妙薬」	オペラ劇場	7/10(水) ～17(水)	実績	6回	6日	9,911人	(93.3%)	10,624人
			計画	6回	6日	9,000人	(84.7%)	10,620人
【小計】	1公演 (計画:1公演)		実績	6回	6日	9,911人	(93.3%)	10,624人
			計画	6回	6日	9,000人	(84.7%)	10,620人
【オペラ合計】	11公演 (計画:11公演)		実績	56回	56日	76,599人	(80.3%)	95,392人
			計画	56回	56日	74,900人	(78.5%)	95,355人

2. 営業・広報

- ・ 公演計画立案上の指標として大きなメリットを生み出していると言えるシーズン制は、友の会制度、セット券販売と相俟って、大きな営業・広報戦略でもある。25年度においては、2014/2015シーズンについて、11月に新芸術監督のシーズン到来を予告し、1月から3月にかけて演目発表からセット券販売までを行うなど、メディアの注目度を高めるとともに、鑑賞者の期待感を醸成した。

- ・ 2014/2015 シーズンは、飯守泰次郎氏が芸術監督に就任する第一シーズンであることから、演目発表に先立ち、11月よりチラシを配布し、大々的に告知した。飯守氏が日本オペラ界を代表するキャリアを持つ指揮者であり、文化功労者、日本芸術院賞に選ばれた芸術界を代表する一人であることを改めて周知し、期待感の醸成に努めた。
- ・ 1月22日「カルメン」終演後、飯守次期芸術監督による2014/2015シーズンに関する観客向け説明会をオペラ劇場客席にて行った。
- ・ 2014/2015シーズンのセット券購入に当たっては、4月からの消費税8%増税後の金額を提示しつつ、2月末日までの友の会会員先行受付期間に申し込めば5%消費税の金額にて購入が可能であることを告知した。また同時に友の会会員への入会喚起、会員への先行期間での購入喚起を行った。
- ・ 個別演目について、マスコミ各社への情報提供、取材依頼、ポスター、チラシ、インターネット、友の会会報等により公演周知を行った。
- ・ ウェブサイト、Facebookやツイッターにてきめ細かい公演周知活動を行った。画像、動画、文章を用いて、公演前には過去の公演、リハーサル風景、指揮者や出演者のインタビューを、公演開始後には舞台写真を掲載し、興味を喚起した。
- ・ 特に、「ナブッコ」「コジ・ファン・トゥッテ」「リゴレット」「死の都」については特設サイトを開設し、より強い印象を与えるデザインと内容での公演紹介を行った。
- ・ 同時に、eメールClub（メールマガジン）登録者に対してもきめ細かい情報提供を行った。発売直前に発売情報と聴きどころ観どころ等を、公演直前に舞台稽古の状況等を、公演開始後にお客様の感想等を、ウェブサイトやFacebookと連動させつつ発信し、興味喚起と勧誘に努めた。
- ・ 「リゴレット」「カルメン」「蝶々夫人」といった一般に知名度が高いと考えられる演目について、「検索キーワード連動型広告（特定のキーワードを入力すると、当該演目の広告が検索結果として上位位置や目立つ場所に表示される）」を利用した。
- ・ 一部の演目でプレイガイドホームページへの公演関連動画の掲載を行った。
- ・ 「リゴレット」「カルメン」「蝶々夫人」といった一般に知名度が高いと考えられる演目についてレクチャー付きの団体誘致を行った。
- ・ 2013/2014シーズンの開幕公演「リゴレット」にて、レッドカーペット敷設やウェルカムフラワー設置などにより、オペラハウスらしい華やかな賑わいを演出し、イメージと来場意欲の向上に努めた。
- ・ 国内外有数のオペラ団体、オーケストラ等が1年間にわたって共同プロモーションを行う「2013ヴェルディ&ワーグナー生誕200年祭」を昨年度に引き続き実施した。Facebookで情報を発信するとともに、両作曲家に関連する展示等を行い、観客の関心の醸成に努めた。
- ・ 空席がある場合の若年層向け特別優待制度、「アカデミック・プラン」（25歳以下を対象に、S,A席5,000円）、「アカデミック39」（26～39歳を対象に、S,A席11,000円（アトレ会員10,000円））、中学生以下の児童を保護者とともに特別優待する「ジュニア・アカデミックプラン」（児童S,A席5,000円、保護者定価（付き添い必須））を実施した。

3. 外部専門家等の意見

(1)公演全体について

- ・ 平成25年度前期においては、新制作1本と世界初演1作、再演のプロダクション2本のいずれにも著しい特色が感じられ、新国立劇場の独自性を強調すべく機能したと思うので、その旨を先に強調しておきたい。まず新制作の《ナブッコ》では、ヴィック演出の大胆な設定変更に関して客席からは否定的な反応も多く出たように仄聞されるが、専門家たる評者の立場からは「どの動きも、ヴェルディの激しい音楽を妨げずにあった」点をまず評価しておきたい。そして、ガッロ、コルネッティといった主役陣が歌唱演技ともに高い集中力を発揮していたことと、合唱団の緻密な合せ方（特に男声合唱）にも言及しておきたいと思う。見た目にとれほど過激であろうとも、ドラマの方向性を曲げず、音楽を損なわない演出法はその完成度に応じて評価されるべきであろう。続いて世界初演の《夜叉ヶ池》では、香月修の音楽が前半において起伏に乏しいと思われたが、それでも日本が誇る名歌手たちが、明瞭な発音のもと、ヴィヴィッドな演唱を繰り広げていたことを高く評価しておきたい。中でも、脇を固める男声陣（晴雅彦、加茂下稔）がそれぞれの見せ場で健闘し、ドラマのポイントを強く打ち出せていたことは、この総括レポートでも改めて強調しておきたい。二人とも、新国立劇場が活用してきた人材であり、彼らの積み重ねの象徴たる名場面とも思われた。また、再演2作では《魔笛》の歌唱（特にパミーナ役の砂川涼子、ザラストロ役の松位浩）が邦人歌手の最先端を示し、《コジ・ファン・トゥッテ》では、ミキエレット演出が呈示する「若者たちのピュアな心底」が今回のキャスティングでより掘り下げられていたことを特筆しておきたい。また、指揮者イヴ・アベルの指示により（恐らくは）繰り返しのパッセージでヴァリアンテが頻出した点も、日本の客席はまだまだ不慣れであるとはいえ、初演時の歌唱スタイルに沿う進め方として注目された。平成25年度後期では「プレミエの明暗」「再演ならではの再創造」の2点を強く感じた。まず、《リゴレット》において、前の2幕の表現

法の錯綜ぶりと終幕の充足感に格段の開きがあったことは指摘せざるを得ない。大詰めの段階で演出意図が明瞭になったとはいえ、前半部におけるアイデアの枯渇 — 群衆シーンの造形力の弱さ、意味薄い動作の単調なる反復 — はしごく残念に思われた。シーズンを開けるプロダクションなら再演の可能性も高いと想像されるだけに、演目との相性をいっそう睨んだ上で演出家の人選がなされるよう希望する。なお、《死の都》では、主演の2人を始めとする歌手陣と指揮者が共に実力を発揮しており、主に音楽面で傑出した成果を収めていた。一方、《フィガロの結婚》《ホフマン物語》《蝶々夫人》の再演については、いずれも歌手の実力と個性が大きく花開き、前回の上演よりもプロダクションの真価が強く伝わったことに賛辞を呈したい。特に《フィガロ》は、再演頻度が高すぎるのではと案じていたが、海外勢、邦人勢ともに歌唱&演技力の水準が高く、中でも、研修所出身の九嶋香奈枝（スザンナ）が堂々たる牽引力を発揮した点を評価したい。また、《ホフマン物語》では、アルトゥーロ・チャコン＝クルス（T）とアンジェラ・ブラウアー（Ms）の起用が成功。特に、後者の実力を我が国に紹介した功績は大きいと思う。そして《蝶々夫人》では、代役で急遽出演を果たした石上朋美（S）の安定した表現力と共演者の大林智子（Ms）と甲斐栄次郎（Br）の役柄への傾注ぶりを高く評価しつつ、今後の邦人歌手の起用に向けて、より積極的に当たって欲しいと望む次第である。

- （前期について）5月にヴェルディの《ナブッコ》、6月にモーツァルトの《コジ》と香月修の《夜叉ヶ池》を鑑賞した。「ヴェルディ・イヤー」にふさわしいびっくり仰天の《ナブッコ》であったが、複雑にからみあう世界情勢の中で、オペラという芸術を考えるきっかけになった。とりわけ若い観客は《ナブッコ》と《コジ》の舞台に違和感なく入り込めたと思う。こうした一見なんでもありに見える舞台演出を提供することで、オペラの敷居はどんどん低くなる。古色蒼然とした書き割りに代わる新しい世界に触れることは、新たな観客層を開拓する重要な方策である。同時にまたフォワイエに、これまでに上演された過去の衣装や舞台写真を展示することで、オペラ受容の歴史性が明らかになり、現在の演出との比較が容易に可能となった。（後期について）再演公演（《フィガロ》《カルメン》《ホフマン》《蝶々夫人》）に関しては、どれもがレパートリーとして成熟してきており、安心して楽しむことができた。この水準を今後も保ちつづける事を望む。毎回の事ながら、歌手の降板など直前での変更をうまく訪問者に伝える方法を考えていく必要があるだろう。
- 25年度前期ではありますが、2012～2013シーズンの終わり4公演という位置づけでもあります。このシーズンは後半2013年に入ってからにはヴェルディ、ワーグナーという巨匠の記念年にあたるということで、「タンホイザー」（1月）、「アイダ」（3月）、そして「ナブッコ」とそのことを意識した公演演目が並びました。以上を整理したうえで4月以降の公演ラインアップをみると、ヴェルディ「ナブッコ」（5月）をはさみモーツァルト「魔笛」（4月）、「コジ・ファン・トゥッテ」（6月）そして香川修作曲の「夜叉ヶ池」（6月・初演）という配置で、両巨匠にならべてモーツァルトを配するという安定感抜群ともいえる配置でした。演目としては少し冒険がないかなと思うと、そこに作曲委嘱作品の世界初演上演をいれて今日＝こんにちの日本のオペラ創作を問うという意欲的演目も入れてある。尾高忠明芸術監督念願の「ピーター・グライムズ」で幕を開け、就任早々に作曲委嘱をした「夜叉ヶ池」で幕を閉じた2012～2013シーズンは尾高忠明監督の3シーズン目の年として安定したシーズンだったと思います。平成25年度後期ということは劇場のシーズンとしては、2013～2014シーズンの前半ということになりますが、ここまでを振り返ってみれば、新制作の「リゴレット」から「フィガロの結婚」「ホフマン物語」「カルメン」「蝶々夫人」と再演が4本続き新制作「死の都」で締めくくるという、充実した流れであったと思います。併せていえば、シーズンのこの後の演目は「ヴォツェック」（4月）、「カヴァレリア・ルスティカーナ」「パリアッチ」（5月）、「アラベッラ」（5月）、「鹿鳴館」（6月）となっており、「カヴァレリア・ルスティカーナ」「パリアッチ（道化師）」が新制作されるということだが事業費の削減など厳しい現状の中でも、よく目配りのきいた演目設定であったと思います。5月に新制作上演される「カヴァレリア・ルスティカーナ」「パリアッチ」はオペラハウスとしては当然レパートリーとしてあるべき演目の一つだと思います。その意味でも楽しみにしています。
- 前期は、本公演で新制作と再演各2本ずつ、4作品が上演されたが、新制作の「ナブッコ」と委嘱新作の「夜叉ヶ池」が圧倒的な印象を残した。再演2本は集客が見込まれるモーツァルト作品で、オール日本人キャスト、大胆な読み替え演出と、それぞれ特徴を出し、丁寧に作られた公演だった。ただ目新しさという点ではレパートリー演目は、どうしても弱いので、公演水準を保ちつつ、集客を確保することが今後の課題となるだろう。高校生の鑑賞教室は、「愛の妙薬」が加わったことで、レパートリーに拡がりが出てきた。有名作品も楽しいが、喜劇で舞台そのものを高校生は楽しんでた。研修所公演「魔笛」は、研修生出演の短縮版でありながら、カロリーネ・グルーバーを演出に起用した手の込んだ舞台で成果をあげた。（後期について）新制作の《リゴレット》と《死の都》の2本に、《フィガロの結婚》や《カルメン》など、再演を重ねている人気演目がラインアップに並んだ。演劇的なアプローチの演出の《リゴレット》、フィンランド国立劇場からのプロダクション・レンタルの《死の都》は、どちらも手ごたえのある舞台で、新国立劇場としては思い切った挑戦だと思った。それに対して劇場としての方針が定まってないと批判する声も聞けるが、筆者は様々な可能性を探りながら劇場

が成長していく道をつけていると解釈しているし、一般には演出や演目に理解され難い部分もあるかもしれないが、外野からの声にぶれずに今後もこうした路線は継続してほしい。レパートリー演目は、全体に不足はないのだが、歌手・指揮者ともにやや話題性に欠いていたかもしれない。文化庁芸術祭オープニングの特別公演（ウォルトンのオラトリオ《ペルシヤザールの饗宴》ほか）のような、オペラのアリアではなく、歌曲やオラトリオ等で構成される演奏会もたまには悪くない。劇場を知ってもらうためにも、年に1回位、開催されても良いのではないか。

(2) 創作面について

- 新たな地平を切り開くという意味では、6月の《夜叉ヶ池》の舞台は充実していた。「ロマンチック・オペラ」の視点を中心に、土俗的な世界に切り込み、最後には「悲劇」へと至る大きな放物線を描いた上演となっていた。こうした新作品の場合には、今後のレパートリー化をめざし、さらに細部を調整しながら充実していく必要がある（とりわけ悲劇性と喜劇性の対立と強調）。（後期について）《死の都》のようにこれまで一度もフルバージョンとして紹介されることのなかったオペラを、日本の観客に非常にわかりやすい形で紹介したことは、今期の最大の成果である。埋もれたオペラ、上演機会のないオペラ、多くの準備を必要とするようなオペラを上演する事は、新国立劇場の重要な責務であるので、古典的な作品にのみ安住するのではなく、新たな分野にたいして果敢に挑戦して行く姿勢を望みたい。また親しみやすい曲とそのイメージで長く受容されてきた《リゴレット》は、今回斬新な姿で甦ることに成功し、数々のインパクトを現代の観客にあたえてくれた。これまでの枠にはまらない人材にチャンスにあたえ、新たな領域を切り開いていく可能性をみた。
- それぞれの公演については各々「公演レポート」で述べてまいりましたが、まず再演演目である「魔笛」と「コジ・ファン・トゥッテ」ですが、「魔笛」はミヒヤエル・ハンペというオペラ演出の大御所の演出でなんの不安もなく音楽を楽しみ、荒唐無稽なおとぎ話を楽しめるというプロダクションでした。字幕もあり、初心者でも十分楽しめる、国立劇場に欠かせない演目で、今回は出演者がすべて邦人のみの公演でした。このキャスティングは画期的なことだったと思います。日本の声楽家のレベルがとても高いものになっているということを実感させてくれました。「コジ・ファン・トゥッテ」はダミアノー・ミキエレットの演出でこちらは現代のキャンプ場に舞台を設定したものでした。男女の恋心は移ろいやすいもの、という古今東西不変のテーマで、字幕の歌詞と舞台上の見た目が違い違和感のあるところもありましたが、おおむね納得のいくものとなっていました。そして何より歌手たちが素晴らしかったと思います。一人一人の個性がきちんと演じ分けられ、高いレベルで全体がバランスの良いハーモニーを作り上げていたと思います。一方新演出の「ナブッコ」はパオロ・カリニャーニの指揮のもとオーケストラもソリスト、合唱団の出演者たちも見事な音楽を聞かせてくれました。こと音楽に関しては、やはりさすが新国立劇場と皆が納得し称賛していたと思います。しかし演出に関しては様々な問題があると感じました。「公演レポート」にも書かせていただきましたが、このような西欧の“歴史劇”のような作品は日本では原作の物語の大まかな枠組みは残しておかないと、多くの聴衆の支持を得ることは難しいと思いました。そして思い切ったアイデアの演出は最初は驚きますが種が明かされた後は飽きてしまうものです。「夜叉ヶ池」は国立オペラ劇場としての大切な企画の柱である邦人作曲家による委嘱新作オペラ上演でありました。この企画を推進し続けている新国立劇場に敬意を表します。世界的にもオペラを委嘱上演している劇場は少なくなっていると思います。オペラを書きたいと思っている作曲家は大勢おられます。作曲技法の集大成のようなオペラ作曲はまた、一般的な幅広い知識と教養がなければ書けないものと思います。作曲家にとってとても貴重な体験となり、そのような体験を経た作曲家が増えていくことは、日本の音楽界全体の未来のためにも大きな意味を持つ事業だと思えます。今回の公演の後、何回も再演をすることがとても大事なことです。再演に当たっては作曲家の方々ともお話をし、さらに良いものにしていくようにできればなおよいと思います。（後期について）欧米の歌劇場の新制作オペラは大なり小なりドラマの読み替え演出になっているようです。オペラ発祥の地では、それはある意味必然なのかもしれません。しかし日本ではオペラファンはまだまだ圧倒的に少数派です。新国立劇場にまだ来ていない人、そして今日初めて来たという人、この人々を取り込まなければオペラの、新国立劇場の明日はないと思います。そういう観点からいえば、演出の基本設定は重要で難しい課題です。意欲的にオペラを今日の舞台芸術として表現することと初心者にもわかりやすい表現をすることのバランスがとても難しいと思います。その意味で「死の都」はとても優れたプロダクションでした。あの難解なオペラを、あれほど美しく表現した演出陣と出演者にブラボーを送りたいと思います。
- グラハム・ヴィック演出「ナブッコ」は、大人数による細やかな演技と大道具・小道具・衣装まで目の届いた作りで、エネルギー溢る舞台で刺激的だった。出演者たちも演出にひけをとらず、アビガイッレ役のマリアンネ・コルネッティ、ナブッコ役のルチオ・ガッロをはじめ、日本人歌手も好調で、音楽面の充実も特筆されるだろう。香月修「夜叉ヶ池」は、新しい日本語のオペラが誕生したことを素直に喜びたい。ヴィックの演出も香月の作品も、見方によって多様な評価が下せるが、こうした様々な意見が生まれる公演が実現できたことこそ大きな成果ではないか。観客を育てること（ヴィ

ックに握手を求めたり、意外とお客さんは抵抗なく受け入れているように見受けられた)と同時に、制作側も常に発想を新しくしていかなければならないと感じた。それによって劇場自体も成熟していくと考える。全体として良質の公演が続いているが、前期もオーケストラの演奏に不満が残る公演がいくつかあった。演目や指揮者によってバラつきがないようにオーケストラにはお願いしたい。(後期について)《死の都》が素晴らしかった。現代的な手法を取り入れたエス・デヴリンの舞台美術とヴォルフガング・ゲッペルの照明の美しさが圧倒的な印象を残した。パウル役のトルステン・ケールは、高音が続く難役を見事に歌い切り、待望の演目を彼の歌唱で、高水準の舞台で鑑賞できたことに感激した。他の公演は、厳しい言い方かもしれないが、これまでのシーズンに比べると外来歌手が小粒になっているように感じた。期待をもって聴いた歌手もいたが、たまたまその日が不調だったのかもしれない。そのなかで蝶々夫人役のアレクシア・ヴルガリドゥとピンカートン役のミハイル・アガフォノフは、シンプルだが計算された演出の舞台に歌も演技もよく溶け込んでいた。日本人歌手が多くキャストイングされ、全員が一定の成果を上げていたと思う。さらに歌手の層が厚くなると水準もさらにあがるだろう。指揮者とオーケストラは、ともにもっと音楽に踏み込んだ演奏を期待したい。特にオーケストラは、もはやオペラに不慣れということを理由に出来ない段階にきていると思う。歌手と演出にまず目が向くが、肝心の音楽が舞台の質を落とすことになってはいけない。

(3) 営業、広報面について

- ・ 今期も、新演出のみならず再演のステージでも客席が賑わいを見せており、また、高校生鑑賞教室《愛の妙薬》と地域招聘公演《三文オペラ》の2ステージにおいても集客率の高さが目立っていたと思う。このように、一つの活動を長年継続して行うことで、徐々に世評を集め、結果として劇場全体の動員率の向上に繋がることは間違いないだろう。新国立劇場においては、今後も多彩な人材を登用し、演目選びの面でも斬新な視点を持つべく望みたい。また、《ナブッコ》のような異色の舞台づくりが、結果として賛否両論になるものではあっても、演目自体の表現力を紛うことなく高めている場合ならば、営業と広報の担当諸氏もそれぞれ、ステージの特色を臆せず主張し続けることで、《コジ・ファン・トゥッテ》のように高水準の再演が果たせる日を導いて欲しい。(後期について)まずは、劇場のホームページが一新され、各種の情報がより手に入れやすくなったことを評価したい。続いて、場内案内係の懇切丁寧な対応ぶりをいっそう強く感じたことと、《死の都》で特製の翻訳台本を作るといった地道な努力についてもそれぞれ触れておきたい。一つのプロダクションに寄せる観客の関心度はさまざまであり、音楽のみならず、文芸的、文化的な観点からもオペラに目を向けようとする、潜在的な客層はまだまだ掘り起こせるもののように思う。今後も、組織内部が柔軟に対応することで、新規の試みが一つでも多く出されるよう望む。
- ・ 《ナブッコ》《コジ》、《三文オペラ》短縮版《魔笛》など、今期は初心者向け、若い人向けの公演が目立った。しかもそのどれもが高い水準で、多くの新しい観客の関心を誘ったようだ。残念なのは多くの学生たちに《三文オペラ》や《魔笛》などを宣伝したのであるが、すでにチケットが完売状態であったことである。とりわけ後者に関してはアンサンブルも小編成であるので、ニーズに応じて追加公演などを実施してほしかった。そうした臨機応変の対応も今後は考えていくべきであろう。またこの作品のように興味深いオリジナルの演出は、次のシーズンでもとりあげ、楽器編成なども充実した再演を試みる必要もあるだろう。それこそが、若い歌い手にとっての励みになる筈だ。今年2013年は政府や観光局、その他のさまざまな団体の肝いりで「日本におけるイタリア年」が行われている。これはイタリア王国の誕生の節目や「ヴェルディ生誕200年」の記念すべき年を意識したイベントであろう。せっかくこうした様々な企画がオペラ世界の外で開催されている時期であるのだから、劇場側としてはこうした取り組みを積極的に取り入れ、さらに時宜にかなった方向性や関連性を打ち出してもよかったのではないだろうかと思える。とりわけ今後のコラボレーションを考える場合には、検討の余地があるのではなかろうか。その意味では《三文オペラ》客演における大津市や滋賀県、さらにびわ湖ホールのメンバーの積極的な関わり方は示唆に富む。舞台の上だけで完結していたオペラ制作の時代はすでに終わったのであるから。(後期について)このシーズンから大きく変わったのは、オペラパレス入り口部分に配置されていたスーベニアショップ(書籍部門等)の閉鎖である。早めに到着した時や、時間をもて余した時などにサイン集や写真集を手に取り、あるいは過去の上演記録を手にする事ができた身としては、大変残念な結果である。おそらくはその代償として、ホワイエでの販売を考えたのであろう。しかしこれはまったく別な性格のものである。ホワイエはつねに撤去され、毎回あらたな情報が運び込まれ発信される場所となるであろう。がこれまでの売店は、このオペラハウス全体の歴史を俯瞰できる場所であった。しかも重要なことは、それが大劇場や中劇場のチケットを持つ入館者だけでなく、総ての人々に開かれていた点である。オペラ上演が目的でなく立ち寄った訪問者、見学者、旅行者にとっては、ここがオペラ世界へ入る最初の入り口であった筈だ。むろんこれまでのような閉鎖的な形での展開は、問題があるかもしれない。しかし充実したパンフレットやリブレット、資料集などを手にできる貴重な空間の確保はぜひとも必要であろう。ホームページやインターネットの充実で可能となる情報発信は今後ともますます重要となるが、同時にこれと平行してそこ

に吸収できないアナログ的な世界を提供することは、ここを東京の名所とするためにも、ぜひとも必要である。

- ・ 音楽界全体も新国立劇場も厳しい運営を強いられる時期が長く続いていると思います。このようなときには個々の世界だけではなかなか突破口が見えないものだと思います。常に日本のトップのレベルの上演を提供し続けている新国立劇場が音頭を取り民間団体との交流を、より活発に行うことも有意義なことではないかとも思います。個々の団体のお客様に団体の枠を超えて共通のサービスをするとか、首都圏のみならず全国のオペラファンに何らかの方法でアピールし、便宜提供をする方法を考えるとか、いろいろなアイデアを持ち寄り話し合うというようなことが必要なのではと感じています。また、新国立劇場に行けばオペラに関するあらゆることが調べられる、というような資料整備も側面的に劇場の価値を高めることになろうかとも思います。これにはスペース、何より予算が必要であろうと思いますがバレエも含めて国のセンター機能をより充実させることは大事なことでないでしょうか。(後期について)どの分野でも営業の最強のツールは商品のクオリティの高さです。営業が自信を持って売り込むことができる品質を常に維持することが大切だと思います。オペラは言ってみれば嗜好品で、しかも高額のチケットですから常連客は少数です。この人たちを逃さず、新たな顧客を増やす、これを達成するためにはとにかく高品質の舞台を続けていくことが前提です。その点ここまでの公演は充分達成できていたと思います。つぎに多少軽薄と言われようが広く話題を提供していくこと、新国立劇場、オペラということが頭の隅に少しずつ残っていくようにメディア、マスコミに取り上げてもらう話題提供を常にこころがける。このあたりのことはどのようになされているのかわかりませんが、必ずしも充分ではないようにも感じられました。そして、国立らしく全国を視野に入れた営業・広報が大切だと思います。その方法としては、ここでもやはり実際の舞台や音楽のクオリティの高さを実感していただくことが何よりの広報になると思います。ということは事業開催を各地の興業元(公私含めて)へ売り込む営業が必要になります。受け身ではなく積極的に営業する体制づくりが必要ではないでしょうか。
- ・ 今年は、雑誌やインターネットサイト等で目にする機会が多く、公演の宣伝やチケット販売を積極的に行っている印象で、集客に様々なかたちで努力している様子がうかがえた。『名作オペラ 50 鑑賞入門』(世界文化社)のような書籍を積極的に刊行しているのも劇場の宣伝になろう。『戦後のオペラ』は、日本語で読める現代オペラを取り上げた貴重な1冊だが、もう少し時間をかけて作っても良かったのではないか。例えばオペラの「あらすじ」で、物語の筋をそのまま書いている作品もあれば、幕ごとに区切って書いている作品もあり、不統一であるのが残念だ。読者の利便性(幕ごとの方が読みやすい)を考えて作ってほしかった。(後期について)劇場に観客を集めることは大変だが、営業・広報の御努力もあり、多くのお客様が劇場にいらしていた。チラシ、ポスターに始まり多角的に戦略を練られていると思う。即効性からどうしてもブログやツイッターなど個人の口コミに頼りがちだが、「オペラトーク」とは異なるアプローチで、劇場主導でオペラを楽しむ講座等を開催するのも長い目でみると観客創出につながるのではないか。また会員向け情報誌『アトレ』は、チケットの発売に合わせて特集が組まれるが、「まもなく開演」といった直前情報を入れると(HPと情報は重なるかもしれないが、いつも現場と特集のタイムラグを感じるので)最後のひと押しになるのではないだろうか。

4. アンケート調査

11公演で17回実施した。

有効回答数 6,435人(配布 22,495人、回収率 28.6%)。回答者の 87.3%が概ね満足と答えた(5,620人)。

【特記事項】

- ・ 「魔笛」「コジ・ファン・トゥッテ」「フィガロの結婚」「蝶々夫人」「死の都」においてキャスト交代が生じたが、代役の手配、カバー歌手のスタンバイ体制、歌手の体調管理のサポート等、万全の制作体制で、公演を成功に導いた。

《数値目標の達成状況》

【目標入場者数の達成状況】

本公演	実績 66,688人	／目標 65,900人	(達成度 101.2%)
鑑賞教室	実績 9,911人	／目標 9,000人	(達成度 110.1%)
合計	実績 76,599人	／目標 74,900人	(達成度 102.3%)

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 25年度全体を通じて、挑戦的かつ意欲的な新制作公演、名作及び久々の再演までバランスよく配した公演を、高いクオリティで上演し、観客の期待に応えることができた。

- ・ 新制作公演としては、2013年に生誕200周年を迎えるヴェルディの作品から、「ナブッコ」及び「リゴレット」を、英国及びドイツから気鋭の演出家を招き斬新な演出で上演することにより、オペラ芸術の新たな可能性を示した。また、観客の知的好奇心を刺激し、新たな観客層を取り込むことに成功した。また、国立のオペラ劇場としての重要な使命である邦人作曲家への新作委嘱作品「夜叉ヶ池」は、日本の音楽界の未来のため大きな役割を果たした。日本において舞台付き上演実績のほとんどない埋もれた名作「死の都」を、フィンランド国立歌劇場の名プロダクションをレンタルすることにより紹介した。いずれもその成果と意義が高く評価された。
- ・ 再演公演では、「魔笛」で、日本人歌手の活躍の場を広げるべく全役に日本人歌手を配し、その実力をアピールした。「コジ・ファン・トゥッテ」「フィガロの結婚」では、演技力と歌唱力を兼ね備えたフレッシュな配役により作品に新たな光を当てた。「ホフマン物語」は適材適所の配役で8年ぶりながら高い完成度で再演を果たした。さらに「カルメン」「蝶々夫人」ではオペラ十八番ともいえる人気作品に魅力溢れるヒロインを配した。いずれも再演にとどまらない新鮮な魅力を提供したとして高い評価を得ることに成功した。
- ・ 新国立劇場合唱団は、引き続き充実した演奏と演技で、全てのオペラ公演を音楽面・演出面から大きく支え、全ての演目において高い評価を得た。特に、合唱オペラともいえる「ナブッコ」「カルメン」においては、精度の高いアンサンブルと豊かな響きで観客に鮮烈な印象を残した。
- ・ 厳しい財政状況が続く中、コスト管理の徹底と自己収入の拡大を図った結果、特に、「魔笛」「カルメン」「蝶々夫人」では100%を超える収支率を達成した。
- ・ 経験、ノウハウの蓄積により制作体制は一層充実し、企画から上演までの過程がスムーズかつ効率的となった。出演者が負担なく高いパフォーマンスを発揮することができ、結果として質の高い公演を実現することができた。また、「夜叉ヶ池」においては、作曲の過程から、作曲家、演出家、芸術監督、制作スタッフが緊密に連携することで、泉鏡花の世界を見事にオペラ化することに成功した。加えて、技術スタッフは、海外からの一流演出家等スタッフの高い要求に応え、オペラ公演全般を技術面・演出面で大きく支えた。
- ・ ウェブサイト、Facebookにツイッターを加えた公演周知活動のきめ細かさがさらに向上した。
- ・ 一般に知名度が高いと考えられる演目について、積極的に団体誘致を行った。
- ・ 空席がある場合の若年層向け特別優待制度の実施により、若年層の観客育成に努めた。

《24年度評価結果への対応》

【評価】

(文科省評価委員会)

- ・ ヴェルディ、ワーグナーの記念の年に、オテロ、アイダ、ローエングリン、タンホイザーなどゆかりの作品がラインナップされたが、新演出が1本だけにとどまっていることから、今後は、新演出をさらに増やし、海外からのレンタルや共同制作も含め、劇場全体の活性化を図ることが期待される。(①)

(振興会評価委員会)

- ・ 質の良い海外のプロダクションは、今後も積極的にレンタルして、新国立劇場全体の質を向上させる一助としてほしい。(①)
- ・ 「セビリアの理髪師」は、オペラを心から楽しめるプロダクションとして、その面白さを初心者などにもっと広く周知していき、新国立劇場の定番にしても良いのではないかと。(②)
- ・ さらに、「タンホイザー」での新国立劇場合唱団の圧倒的な迫力に満ちた演唱、「愛の妙薬」における優れた歌手陣の好演も、もっと多くの観客に味わってほしいものであり、各回の上演の見所、聴き所を更に広く周知していくべきである。(②)

【対応】

①多様な制作形態によるラインナップの充実・活性化

現代舞台芸術の創造、振興、普及を担う新国立劇場としては、新制作の重要性を開場時より認識しているところであるが、上演水準の維持向上と制作費の節減のいずれもが強く求められている今日、中期計画に定められた公演数を維持しつつ、経費の嵩む新制作本数を増加させることは決して容易ではないが、劇場独自の制作本数を増やすことを目指して今後とも努力したい。一方で、例えば24年10月公演「ピーター・グライムズ」や26年3月公演の「死の都」のように、今後繰り返して上演される機会が少なく、劇場のレパートリーとすることが難しいと思われる作品については、海外から優れたプロダクションを選定した上、レンタルにより積極的に紹介していく等の工夫を続けたい。

②レパートリーの充実のための広報・営業活動の取組

「セビリアの理髪師」に代表されるような、オペラを心から楽しめるプロダクションは、その面白さを初心者等に広く周知できるよう、事前の解説（レクチャー）付きチケット販売企画を実施することや、情

報発信への協力が見込まれるホテル、旅行会社等、外部組織との連携を充実させることに取り組みたい。

「タンホイザー」、「愛の妙薬」をはじめ、上演の見どころ・聴きどころを幅広く周知することにはこれまでも尽力してきたところであるが、更なる周知のために、会員、一般、団体の各販売区分の集客実績の分析を行うとともに、効果的かつ多面的な公演情報発信の強化を行うことで、今後も集客面での対策を講じたい。

2-(2)-② バレエ

《制作方針》

① バレエ・レパートリーの充実

多様化する観客のニーズに対応するレパートリーの充実に努めながら、海外有数の劇場と比肩する芸術的水準での舞台制作を目指す。同時に、再演の要望の高いスタンダードな演目を多彩なキャストで上演し、バレエファン層の拡大を図る。

② 国内外の振付家による創作バレエの上演

質の高い創作バレエを企画、上演して、新国立劇場オリジナル作品のレパートリー化を図る。

《実績》

1. 公演実績

公演名	劇場	期間	区分	回数	日数	入場者数	入場率	総席数	
「ペンギン・カフェ 2013」 シンフォニー・イン・C/E=mc ² (日本初演)/ペンギン・カフェ	オペラ 劇場	4/28(日)～ 5/4(土・祝)	実績	5回	5日	5,277人	(58.9%)	8,960人	
			計画	5回	5日	6,300人	(70.3%)	8,960人	
「ドン・キホーテ」		6/22(土) ～30(日)	実績	4回	4日	6,121人	(85.4%)	7,168人	
			計画	4回	4日	5,000人	(69.8%)	7,168人	
「バレエ・リュス ストラヴィンスキー・イブニング」 火の鳥/アポロ(新制作)/結婚(新制作)		11/13(水) ～17(日)	実績	4回	4日	4,671人	(65.2%)	7,168人	
			計画	4回	4日	5,000人	(69.8%)	7,168人	
「くるみ割り人形」		12/17(火) ～23(月・祝)	実績	7回	6日	10,406人	(83.0%)	12,544人	
			計画	7回	6日	10,000人	(79.7%)	12,544人	
「白鳥の湖」		2/15(土) ～23(日)	実績	5回	5日	7,774人	(86.8%)	8,960人	
			計画	5回	5日	6,300人	(70.3%)	8,960人	
「シンフォニー・イン・スリー・ムーヴメンツ」(新制作) 暗やみから解き放たれて(世界初演)/大フーガ/シンフォニー・イン・スリー・ムーヴメンツ		中劇場	3/18(火) ～23(日)	実績	5回	5日	2,262人	(49.9%)	4,530人
				計画	5回	5日	3,200人	(70.6%)	4,530人
【バレエ合計】	6公演 (計画:6公演)	実績	30回	29日	36,511人	(74.0%)	49,330人		
		計画	30回	29日	35,800人	(72.6%)	49,330人		

2. 営業・広報

- ・ 公演計画立案上の指標として大きなメリットを生み出していると言えるシーズン制は、友の会制度、セット券販売と相俟って、大きな営業・広報戦略でもあるが、25年度においては、2014/2015シーズンについて、11月に新芸術監督のシーズン到来を予告し、1月から3月にかけて演目発表からセット券販売までを行うなど、メディアの注目度を高めるとともに、鑑賞者の期待感を醸成した。
- ・ 2014/2015シーズンは、大原永子氏が芸術監督に就任する第一シーズンであることから、演目発表に先立ち11月よりチラシとウェブサイトにおいて告知し、期待感の醸成に努めた。
- ・ 2月15日「白鳥の湖」初日終演後、大原次期芸術監督自身による2014/2015シーズンに関する観客向け説明会をオペラ劇場客席にて行った。
- ・ 2014/2015シーズンのセット券購入に当たっては、4月からの消費税8%増税後の金額を提示しつつ、2月末日までの友の会会員先行受付期間に申し込めば5%消費税の金額にて購入が可能であることを告

知した。友の会会員への入会喚起、会員への先行期間での購入喚起を同時に行った。

- ・ 現代舞踊部門の公演に関して、新国立劇場バレエ団ダンサーの出演機会が増えていることから、セット券販売時から一部の現代舞踊公演についてバレエ・セット券とともに追加選択可能演目として販売してきたが、2014/2015 シーズンでは、現代舞踊全公演をその対象としバレエ・セット券とともに販売した。
- ・ 個別演目について、マスコミ各社への情報提供、取材依頼、ポスター、チラシ、インターネット、友の会会報等により公演周知を行った。
- ・ ウェブサイト、Facebook やツイッターにてきめ細かい公演周知活動を行った。画像、動画、文章を用いて、公演前には過去の公演、リハーサル風景、出演者のインタビューを、公演開始後には舞台写真を掲載し、興味を喚起した。特に、バレエ団が中心的活動を担うバレエ部門では、バレエ団ブログによる継続的な活動報告を行った。
- ・ 特に、「ペンギン・カフェ」「バレエ・リュス」「くるみ割り人形」「シンフォニー・イン・スリー・ムーヴメント」については特設サイトを開設し、より強い印象を与えるデザインとともに詳しく内容を紹介した。
- ・ 同時に、eメール Club（メールマガジン）登録者に対してもきめ細かい情報提供を行った。発売直前に発売情報と聴きどころ観どころ等を、公演直前に舞台稽古の状況等を、公演開始後にお客様の感想等を、ウェブサイトやFacebook と連動させつつ発信し、興味喚起と勧誘に努めた。
- ・ 一部の演目でプレイガイドホームページへの公演関連動画の掲載を行った。
- ・ 公演会場にて、友の会会報の記事やポスターを利用し、当該公演や今後のバレエ公演に関する読み物を掲示した。
- ・ 空席がある場合の若年層向け特別優待制度、「アカデミック・プラン」（25歳以下を対象に、原則半額）、「アカデミック 39」（26～39歳を対象に、原則半額）、中学生以下の児童を保護者とともに特別優待する「ジュニア・アカデミックプラン」（児童原則半額、保護者定価（付き添い必須））を実施した。
- ・ アカデミック・プランを展開させ、東京、埼玉、千葉、神奈川のバレエ教室の生徒を対象とした「バレエ教室キャンペーン」、渋谷区・新宿区内の小学生を対象とした「近隣小学校キャンペーン」を実施した。
- ・ ストラヴィンスキー「火の鳥」が手塚治虫のマンガ「火の鳥」のイメージとなったことをきっかけとし、手塚プロダクションとのコラボレーション企画が実現した。新国立劇場バレエ団のダンサーと手塚キャラクターをモチーフとした関連グッズの販売、公演会場への来場等を実施し、大きな話題を呼んだ。今後も企画は継続していく予定であり、関連グッズの販売促進、劇場の活性化及びバレエ団の活動の普及に大いに寄与することが期待される。

3. 外部専門家等の意見（現代舞踊と一部共通）

(1) 公演全体について

- ・ （前期について）新国立劇場バレエによる、現代的、意欲的な三作品のトリプル・ビル（『ペンギン・カフェ 2013』）と一般に人気の高い古典全幕作品（『ドン・キホーテ』）、日本人の中堅振付家と主に日本人ダンサーによるコンテンポラリーダンスの新作と、バランスのとれた公演プログラムであった。日本のダンス界が全体として、古典全幕バレエが主流であるからこそ、新国立劇場では、多様な公演プログラムでダンスの楽しさ、可能性を広げ、それを観客に伝えると同時に、ダンサー、振付家を育成する必要があるだろう。プログラムを見渡した際に、目先の成功、不成功だけではなく、長期的な育成ビジョンが見えることが評価できる。（後期について）「バレエとダンス」という二つの柱でプログラムされているが、そのバレエとダンスの中でも従来型の画一的な作品ではなく、幅広い趣向の作品を選択して、配したことがまず評価できる。まずバレエは、19世紀の古典である『くるみ割り人形』に続いて、20世紀のマスターピースであるバレエ・リュス作品をセンス良く選び、次に古典の定番『白鳥の湖』、さらに現代的なバレエへと、観客を飽きさせないようなプログラム構成である。一般のバレエ団が集客のよい19世紀古典作品に偏りやすいことに比べ、新国立劇場の公演はバランスがよい。国立の劇場として、民間の手本として、リスクを取りながらも長い目でバレエ団と観客を育成する全体プログラムとして評価したい。
- ・ （前期について）シーズン終盤で体力的に厳しい時期にもかかわらず、出演者のみなさんの気力体力の充実したパフォーマンスが印象に残りました。年間を通してコンディションを維持し、事前に配役が発表された舞台をそのとおりに務めるといえるのは、簡単なようでいて難しく、またプロフェッショナルとしての基本であると同時に目的でもあると思います。拝見した公演以外にも、近くなってきたからの残念な配役変更等も覚えがないほどで、その点、たいへんよかったです。また、小野さん、米沢さんを筆頭に、ゲストよりも団員キャストを前面に押し出して、すぐれた出来ばえの舞台が多かったと感じました。（後期について）ダンサーの水準が高く、見応えのある公演が多かったです。複数キャストで拝見したものも、日によってレベルの差を感じるようなことがほとんどなく、層の厚さを感じ

ました。バレエについては、古典名作の『くるみ割り人形』と『白鳥の湖』、およびバレエ・リュスの名作を並べた「ストラヴィンスキー・イブニング」、新作1つと大振付家であるファン・マーネンとバランシンの代表作を新たにレパートリーに加えた「シンフォニー・イン・スリー・ムーブメント」の二つのトリプル・ビルと、目配りの効いたプログラムでした。

- ・（前期について）「劇場は博物館になってはならない。19世紀バレエを大切にしながらも、20-21世紀のバレエ・ダンス作品を積極的に舞台上に乗せて紹介していきたい」と云う主旨の話を、ビントレー監督から伺ったのが数年前のこと。「トリプル・ビル」の定着とともに、才能あふれるコンテンポラリーダンスの振付家たちの作品も含め、その提案が、現実のものとして顕在化したのが、昨年秋から今年前半にかけてのシーズンだったのではないのでしょうか。「ペンギン・カフェ 2013」は、アインシュタインの「相対性理論」にインスパイアされたビントレー自身の新作も含めて、話題の公演になりました。そして、コミカルな演劇性に満ちた「ドン・キホーテ」は、米沢唯という新たなスターダンサーの誕生も含め、従来のクラシックバレエファンを満足させる豪華で楽しい公演になったと思います。（後期について）私が拝見したのは、中村恩恵×首藤康之「小さな家」「シェイクスピア『ソネット』」、「ストラヴィンスキー・イブニング～バレエ・リュス～」「DANCE to the Future～Second Steps～」「くるみ割り人形」「小野寺修二 カンパニーデラシネラ『ある女の家』」「白鳥の湖」です。クラシックバレエからコンテンポラリーダンスまで、さまざまな振付、演出、ダンサーたちによる色彩豊かな公演を堪能しました。大劇場・オペラパレスでの公演では、「ストラヴィンスキー・イブニング～バレエ・リュス～」が、文化関連のプロやメディアからも大いに注目されましたし、クリスマスの「くるみ割り人形」は子どもたちが親御さんと劇場を訪れ微笑ましい光景が見られました。また、2月公演「白鳥の湖」は雪の影響を受けましたが、『物語バレエ』の真骨頂だけに、オーケストラの上質な演奏とともに美しい舞台となりました。全体に、クラシックとコンテンポラリーのバランスもよく、大中小それぞれの劇場の特性を生かした、興味深いプログラムだったと思います。
- ・平成25年度後期に私が見せていただいたのは、『バレエ・リュス～ストラヴィンスキー・イブニング～』『ある女の家』『白鳥の湖』の3公演です。それぞれに方向性の異なる、非常に充実した公演内容で、満足度の高いものでした。先日、新シーズンから芸術監督に就任される大原永子芸術参与より、「今後のラインナップは、もう少し古典に重点を戻してゆく」「バレエの美しさや、テクニクの基本はそこにあるから」「現代ものばかり踊っていると、古典が踊れなくなってしまう」といったご説明がありました。それは、音楽の分野でも同様で、確かにおっしゃる通りだと思います。一方で、劇場にコンスタントに通い続けるお客様にとっては、1年おきに同じ演目が登場するのは、少々飽きがかかるのではないかとも思えるのです（一度見たからいいや、というふうに）。もちろん、『白鳥の湖』や、クリスマスシーズンの『くるみ割り』『シンデレラ』などは、「偉大な恒例公演」だと思います。それでも、なにかしらの新趣向（今のところは、海外からのゲストや、若手ダンサーの主演抜擢などがそれにあたるのでしょうか）を期待したいような気に、私などはなってしまうのです。中劇場、小劇場での、外部カンパニーも含めた現代ダンス公演はありますが、新国立劇場バレエ団のファンとしては、彼らの「いろいろな顔」を、古典と現代とをつなぐような演目で見てみたい。その意味で、『バレエ・リュス』公演は特筆すべきすばらしい公演だったと思います。

(2) 創作面について

- ・（前期について）新作上演はコンテンポラリーダンスのみであるが、新国立劇場が委嘱して創作する、という方法をとっていることがまず評価できる。欧米では劇場やフェスティバルが、振付家へ委嘱することで作品を創作する過程から関与し、その結果に責任を持つことが主流である。振付家、ダンサー、美術、照明、音楽等のスタッフも、そのような環境の中で育っていく。日本のプライベート・カンパニーやフリーの振付家が、委嘱を受けて創作する機会は稀であるがゆえに、新国立劇場がリスクを引き受けて先導し、結果として日本のバレエ、ダンス界を牽引する役目を果たす必要が大いにあると考える。もちろん、新作の創作であれば、すべてが高い評価を得られるとは限らず、今回の作品も100点満点ではない。しかし、既に評価を確立した海外作品のコピーを繰り返しているだけでは、本当の意味でのバレエ、ダンスの発展は望めない。時には失敗作があろうとも、個々のカンパニーや振付家、ダンサーがその創作過程を通して成長していく姿を積極的に楽しむ、あるいは生産的な批評眼で見守ることができるような、創造力を有した観客を育成する必要がある。その点で、日本人振付家によるコンテンポラリーダンス、芸術監督による近作のバレエ作品を取り上げることは評価できる。
- ・（後期について）バレエについては19世紀古典作品に相応しいワガノワ・メソッドだけでなく、20世紀のバレエ・リュス、バランシン、現代バレエにも対応できる技術と表現力を、ダンサーが習得して踊り、演じていたことを高く評価したい。海外ゲストに依存することなく、ソリストたちは卓越した踊りをみせ、またアンサンブルは非常に美しい、日本的な端正さと叙情豊かな群舞を見せた。それは、ダンサーたちが団員として雇用され、給料をもらいながら日々練習し、リハーサルを積み、出演するという環境が整っているからこそである。民間にはできない、本来あるべきバレエ団の創作環境を、今後もよりレベルアップしてほしい。海外の優れたダンサーが、ゲストではなく団員としてこの

カンパニーで踊りたい、と思うような環境、レパートリーを整えてほしい。

- ・（前期について）該当期間中に拝見した創作作品の新レパートリーは「E=mc²」1作で、運動量の多さ、スピーディーな展開や現代作品らしい尖鋭な視覚効果などが印象に残りました。出演者のみなさんには、タイトなスケジュールのなかで新しい作品を習得する集中力、あるいはスタミナ面などで、身になる経験となったのではとも感じます。また、団員の中にも振付に意欲的な方がたくさん出てきていらっしゃるようで、ワークショップ等、すぐに通常公演での上演に結びつかなくとも、創造的な風土がより豊かになっていってくれればと願っています。（後期について）上記と重なる部分もありますが、トリプル・ビルでのジェシカ・ラングの『暗やみから解き放たれて』、現代舞踊の2作品と、個性的な新作が初演されて観客の楽しみが広がりました。
- ・（前期について）さまざまな局面で保守化の進む現在の我が国に於いて、ビントレー監督の静かなる挑戦は、日本のバレエ界に大きな刺激を与えていると思います。それは大量な観客動員という即効性には繋がらなくとも、バレエダンサーのみならず、スタッフや観客の感性を磨き、好奇心を掻立て、バレエ・ダンスの表現力の可能性を、未来に向けて掘り深めてくれていると、私は確信しています。ビントレー氏の新作「E=mc²」は、被爆国にとってはデリケートな作品でしたが、彼は逃げることなく、しかし、一切の押し付けがましさを排除して、「科学方程式」というものを舞踊化しました。このような想像外のことを、さりげなく具現する才能と気迫を、ビントレー氏は持ち合わせているのです。来シーズンで監督任期は切れますが、日本のバレエファンが、新国立劇場を通じて、彼の存在を知ったこと、その作品に出会えたこと、一緒に仕事ができたことは、本当に素晴らしい経験だと思います。また、平山素子氏をはじめとして、その才能を認められ、新国立劇場で表現の場を得た若い世代の活躍にも、拍手を送り、今後を期待したいと思います。（後期について）やはり「ストラヴィンスキー・イブニング」の独創性豊かな「バレエ・リュス」の世界が、印象に残っています。集客の面ではご苦労があったかも知れませんが、上演したことの意義は大きく、また、新国立劇場バレエ団が、『近代バレエの象徴』とも云うべきロシアバレエ団の振付演目を体験し、質の高い演奏とともに演じきり、彼らのレパートリーに加えたことは、特筆に値することと思います。観客にとっても、とくに「結婚」の日本上演は画期的な試みで、さまざまな歓喜の声をロビーで耳にしました。また、クリスマスの「くるみ割り人形」は牧阿佐美振付の東京を舞台にした『夢の物語』として、新国立劇場の定番になりつつあります。ビントレー監督は「劇場を博物館にしてはいけない」と何度もおっしゃっていました。これからも、さまざまな演目を通して、新国立劇場の斬新で奥の深い舞台から刺激を受け、感性豊かに過ごしたいものです。
- ・『バレエ・リュス』公演は、新作ではないにしろ、新国立劇場バレエ団にとっては、一種の「新作初演」だったのではないかと思います。見る側にとっても、ストラヴィンスキーの音楽の多彩さと、古典的テクニックと民族舞踊的要素の結合した踊りを同時に堪能できただけでなく、元来、プロレタリアとはほど遠い「バレエ」という芸術表現を通して、「西洋バレエ」が目指してきた貴族的あるいは超人的世界とは対極にある、「すべては偉大な庶民の力で支えられている」という「共産主義的理念」を垣間みることができたという点で、稀な機会であり、貴重な公演でした。このような、「古くて新しい」公演プログラムがもっとあっていいように思います。「何でもあり」の現代社会において、舞踊の世界にもさまざまな表現があり、それをそのまま紹介したような『Dance to the Future』も毎回興味深く拝見していますが、今後の展望として、「現代」と「古典」、あるいは「バレエ」と「舞踊的身体表現」とにくっきり分断されているような今の形態に加え、その中間に位置するような作品や公演があれば、よりおもしろくなるように感じています。

(3) 営業、広報面について

- ・（前期について）バレエは日本人ダンサーのみでダブル、トリプル、クワトルのキャストを組み、複数日の公演を成功させたことに、営業、広報の努力が認められる。また、ウェブ上でのインタビュー掲載など、観客がアクセスしやすい細やかな情報発信を今後も続け、より熱心なサポーターを獲得していくことが求められるだろう。ロンドンやパリの地下鉄構内には、巨大なポスターが常に貼られており、そこからバレエ、美術展、新書などの情報を得ることができる。視覚的にインパクトのある広報活動が日本でも生まれることを願っている。また、地域の劇場との連携を増やして作品を創作、上演する機会をさらに広げ、全国規模でダンスを底上げする役目を担ってほしい。（後期について）バレエについては、海外からの有名ダンサーに依存しなくてもよいカンパニーに育てているのだが、やはり民間バレエ団のスター招聘公演に比べると、一般バレエファンへのアピールが弱いのだろうか。完売状態が続くような集客は実現できていない。しかし、ここで再び海外ゲスト頼みになるのではなく、じっくり日本のスターを育成してほしい。民間にはできないことを、長期的な視野で実現するのが、新国立劇場の役目であると考え。一方で、公演当日の観客サービスとして、多くは子供向けではあるがロビーの装飾やイベントを企画していることは高く評価できる。作品を見るだけでなく、劇場という非日常空間への憧れと喜びを高めるような高級感、プレミア感のあるイベントを続けることは、そのようなものを求める観客にアピールできるだろう。他方で、バレエやコンテンポラリーダン

スは敷居が高いと敬遠している層に対して、身近に感じてもらえるようなサービス、イベント、また、地方公演の拡大や学校・施設等へのアウトリーチなども検討対象に加えてほしい。

- ・ 公演期間中（とくに『くるみ割り人形』）は、休憩中や終演後に子供向けのイベントなどもあり賑やかでよかったです。ホームページのデザインがやや夢々しいといえますか、小さな女の子向けという印象で、「バレエは大人の鑑賞に耐えうる芸術」であることを打ち出すためにも、もう少しシックで高級感がある方がよいようにも思います。
- ・ 新国立劇場のスタート時に比べると、広報宣伝は遥かに垢抜けて明るくなり、すっきりとシャープになりました。また、決して堅苦しくならず、微笑みを忘れないカジュアルな雰囲気、劇場ロビーでも感じられるようになりました。役所的にならず、閉鎖的にならず、オープンマインドでありながら、常に前衛的であり、本物志向であり、質の高い世界に通用する舞台を制作し上演する。これは、云うは易く、行うは実に難しい課題ではありますが、文化関係のビジネスの基本でもあります。世界中のオペラハウスが目指す理想を、新国立劇場も高く掲げて、例えば、6年後のオリンピックイヤーをひとつの目標に、「世界的オペラハウス」として懸命に走り続けてください。
- ・ いつから出来たのか気付かなかったのですが、アカデミックプランの各割引サービスはとてもいいアイデアですね。サイトでは目立つように記載がありますが、プログラムや会場などでも、より大々的にアピールしてはいかがでしょうか？『白鳥の湖』の今年のプログラムを読んで初めて知りましたが、「牧阿佐美改訂版」は、新国立劇場のオリジナル版だとか。この版の特徴だという、オデットが白鳥に変えられるプロローグや、2部構成によるスピーディな展開などは、現代の感覚により即した、とても効果的なアレンジだと思います。外来のものをそのままありがたがって踏襲するのではなく、私たちに合う、よりよいものに作り替えてゆくのは、日本人の優れた能力です。そうしたクリエイティブな部分を、もっと積極的にアピールすべきではないでしょうか？（前回この公演を見た時-2012年5月-の公演プログラムには記載されていませんでした）。それは、前述した「偉大な恒例公演」の活性化や、リピーターを増やすことにもつながるのではないかと思います。サイトリニューアルで、舞台では聞くことの出来ない、ダンサーの方々の生の声がたくさん動画で発表されているのは、多くのファンにとって興味深いことだと思います。ただ、長めのインタビューが多く、全部に目を通すことがなかなかできないので、『白鳥の湖』のプログラムに掲載されたコール・ド・バレエのダンサーのお話のように、その演目で重要なパートに関する要点が、その場で（プログラムで）読めるのはありがたく思いました。

4. アンケート調査

6公演で9回実施した。

有効回答数 2,659人（配布数 11,756人、回収率 22.6%）。回答者の 95.4%が概ね満足と答えた（2,537人）。

【特記事項】

- ・ 新国立劇場バレエ団プリンシパルの八幡頭光が第33回ニムラ舞踊賞を受賞した。
- ・ 新国立劇場バレエ団ソリストの奥村康祐が、第45回舞踊批評家協会新人賞を受賞した。（「ドン・キホーテ」小林紀子バレエ・シアター公演「マノン」ほかの成果に対して）
- ・ 新国立劇場バレエ団プリンシパルの小野絢子が第30回服部智恵子賞を受賞した。（「コンチェルト・パロッコ」「イン・ジ・アッパー・ルーム」「ドン・キホーテ」「火の鳥」「アポロ」「くるみ割り人形」「ペンギン・カフェ」ほかの成果に対して）。
- ・ 新国立劇場バレエ団プリンシパルの米沢唯が中川鋭之助賞を受賞した。

《数値目標の達成状況》

【目標入場者数の達成状況】

実績 36,511人／目標 35,800人（達成度 102.0%）

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ バレエの新制作公演においては、ビントレー芸術監督自らの振付作品を含む、近現代の作品を中心とした意欲作が揃った。「ペンギン・カフェ 2013」では原爆投下を表現した“マンハッタン計画”を含む作品『E=mc²』を被爆国日本において初めて上演し、そのメッセージ性が高い評判を得た。「バレエ・リュス ストラヴィンスキー・イブニング」では、上演機会の少ない演目『アポロ』『結婚』に挑み、その質の高さには数多くの舞踊評論家や研究者から熱烈な賛辞が送られた。「シンフォニー・イン・スリー・ムーヴメント」は古典から現代まで多様な時代の作品を取り上げ、その幅広さ及びクオリティの高さに絶賛の声が集まった。
- ・ 再演公演においては、「ペンギン・カフェ 2013」の、ダンサーの身体表現の美しさが際立った『シ

ンフォニー・イン・C』、踊る動物たちの愛らしさと現代への風刺が話題となった傑作『ペンギン・カフェ』、前回の公演よりバレエ団の成長を強く印象付けた「ドン・キホーテ」及び「バレエ・リュス ストラヴィンスキー・イブニング」の『火の鳥』、新国立劇場のレパートリーの中でも幅広い客層から絶大な人気を誇る、クリスマスの風物詩「くるみ割り人形」とバレエの代名詞ともいえる名作「白鳥の湖」を上演した。いずれの公演も、主役ダンサーの表現力やコール・ド・バレエの比類なき美しさなど、新国立劇場バレエ団の高い技術力と芸術性、ダンサーの層の厚さを改めてアピールすることができた。

- ・ 厳しい財政状況の中、高い公演水準の維持に努めつつも予算のスリム化が徹底された。
 - ・ 新国立劇場バレエ団は、古典から現代バレエまでを網羅する幅広いレパートリーをさらに広げ、バレエ団として芸術性の一層の向上が成されたとともに、個人としても5名ものダンサーが芸術賞を受賞し、その高い芸術性が改めて示された。また、2月にはプリンシパルの小野絢子と福岡雄大が、英国バーミンガム・ロイヤル・バレエで上演される「パゴダの王子」にゲストダンサーとして招かれて好演、現地の観客から大きな喝采を浴びた。
 - ・ 公演ごとに開設する特設サイトについてはコンテンツの一層の充実をはかったとともに、新しく開設したFacebook ページやツイッターを活用し、迅速かつ継続的に情報を発信したことは、売上の向上及び観客層の新規開拓の一助となった。
 - ・ 新国立劇場バレエ団について、公式ブログにて稽古の様子やダンサーのメッセージなどを引き続き配信したことに加え、今年度はプロモーションビデオの作成と放映、握手会の開催、手塚プロダクションとバレエ団のコラボレーショングッズの販売等を実施し、ファン層の拡大に努めた。
 - ・ 新国立劇場で制作したバレエ公演を静岡県、神奈川県、兵庫県、和歌山県、新潟県で上演し、地域文化振興に資したと共に、全国的な新国立劇場の認知度向上及び普及に寄与した。
- 見直し又は改善を要する点
- ・ 知名度の高いクラシック・バレエ作品である「くるみ割り人形」「白鳥の湖」が入場者数、収支率ともに目標を大きく上回ったのに対し、その他の現代バレエ作品に於いては、観客の満足度や評論家等の評価が極めて高かったにも関わらず、集客に苦戦した。現代バレエ作品は事前の情報に乏しいという共通点があり、特に世界初演となると、正にリハーサルの過程で作品が生まれるに等しい。出来上がった作品が総じて高い評価を得ている以上、情報が乏しい中でも、その作品の期待値を高める不断の努力と創作の継続が必要である。
 - ・ 人気のクラシック作品と現代作品のバランスをとりつつ上演することにより、レパートリー及びバレエ団の芸術性をさらに広げる作品に積極的に挑むことが重要である。また、バレエ芸術の表現力の大きさ、広さが多くの人に認められ、それが満足度ばかりでなく集客としても顕在化するよう継続的努力が必要である。

《24年度評価結果への対応》

【評価】

(振興会評価委員会)

- ・ 「シルヴィア」について) 入場者数ではやや苦戦したが、再演を繰り返すことで、日本の観客に愛されるレパートリーになるのではないかと。(①)

【対応】

①レパートリーの充実に向けての方策

24年10・11月のバレエ「シルヴィア」について、この演目の上演に取り組んだことや充実した舞台成果を収めたことが高い評価を得ることができた。一方で、このプロダクションはセット等を海外からレンタルする必要があり、上演コストが一般的な再演演目以上に膨らんでしまうことや、コンパクトなキャスト構成ゆえに、せつかくの新国立劇場バレエ団の層の厚さが十分に活かされないという面もあることから、今後の上演の可能性については他の演目とのバランスにも注意しながらレパートリー化する演目を考慮していきたい。

2-(2)-③ 現代舞踊

《制作方針》

特徴あるスタイルを持つ振付家による新国立劇場ならではの斬新な企画で、ダンスが持つ自由な発想や身体表現の可能性を追求するとともに、バレエ団内から振付者を輩出する企画を通じて、現代舞踊の裾野を広げる。

《実績》

1. 公演実績

公演名	劇場	期間	区分	回数	日数	入場者数	入場率	総席数
平山素子～フランス印象派ダンス～ Trip Triptych	中劇場	6/7(金) ～9(日)	実績	3回	3日	1,723人	(90.1%)	1,912人
			計画	3回	3日	1,400人	(77.6%)	1,803人
10/4(金)～10 (木)		実績	4回	4日	1,702人	(70.8%)	2,404人	
		計画	4回	4日	1,800人	(74.9%)	2,404人	
1/23(木) ～26(日)		実績	4回	4日	1,662人	(69.1%)	2,404人	
		計画	4回	4日	1,800人	(74.9%)	2,404人	
DANCE to the Future ～Second Steps～	小劇場	12/7(土) ～8(日)	実績	2回	2日	529人	(80.4%)	658人
			計画	2回	2日	550人	(84.4%)	652人
【現代舞踊 合計】	4公演 (計画:4公演)		実績	13回	13日	5,616人	(76.1%)	7,378人
			計画	13回	13日	5,550人	(76.4%)	7,263人

2. 営業・広報

- ・ 公演計画立案上の指標として大きなメリットを生み出していると言えるシーズン制は、現代舞踊部門にとっては、他に類例を見ないことであるが、他ジャンルと共に発表することにより、メディアの注目度を高め、業界内ではかなり早い宣伝活動の開始により、公演情報の周知徹底が図られる結果となっている。
- ・ 特に、2012/2013 シーズン、2013/2014 シーズンには、新国立劇場バレエ団ダンサーやバレエ・ダンサーの現代舞踊公演への出演機会が増えたことから、バレエ・セット券とともに一部の公演を付随して販売する手法を採ってきたが、2014/2015 シーズンには、現代舞踊の全公演をバレエ・セット券とともに同時販売することとした。
- ・ 25年度においては、2014/2015 シーズンについて、11月に第一演目を発表し、1月から3月にかけて演目発表からバレエ・セット券と同時にダンス・セット券の販売を行い、バレエ、ダンスを同時購入すると更に割引で購入できる「ダブル割」を行った。
- ・ 2014/2015 シーズンのセット券購入に当たっては、4月からの消費税8%増税後の金額を提示しつつ、2月末日までの友の会会員先行受付期間に申し込めば5%消費税の金額にて購入が可能であることを告知した。また友の会会員への入会喚起、会員への先行期間での購入喚起を同時に行った。
- ・ 個別演目について、マスコミ各社への情報提供、取材依頼、ポスター、チラシ、インターネット、友の会会報等により公演周知を行った。
- ・ ウェブサイト、Facebook やツイッターにてきめ細かい公演周知活動を行った。画像、動画、文章を用いて、公演前には過去の公演、リハーサル風景、出演者のインタビューを、公演開始後には舞台写真を掲載し、興味を喚起した。
- ・ 同時に、eメールClub(メールマガジン)登録者に対してもきめ細かい情報提供を行った。発売直前に発売情報と聴きどころ観どころ等を、公演直前に舞台稽古の状況等を、公演開始後にお客様の感想等を、ウェブサイトやFacebookと連動させつつ発信し、興味喚起と勧誘に努めた。
- ・ 一部の演目でプレイガイドホームページへの公演関連動画の掲載を行った。
- ・ 公演会場にて、友の会会報の記事やポスターを利用し、当該公演や今後のバレエ・現代舞踊公演に関する読み物を掲示した。
- ・ 空席がある場合の若年層向け特別優待制度、「アカデミック・プラン」(25歳以下を対象に、原則半額)、「アカデミック39」(26～39歳を対象に、原則半額)を実施した。

3. 外部専門家等の意見（バレエと一部共通）

(1) 公演全体について

- （前期について）新国立劇場バレエによる、現代的、意欲的な三作品のトリプル・ビル（『ペンギン・カフェ 2013』）と一般に人気の高い古典全幕作品（『ドン・キホーテ』）、日本人の中堅振付家と主に日本人ダンサーによるコンテンポラリーダンスの新作と、バランスのとれた公演プログラムであった。日本のダンス界が全体として、古典全幕バレエが主流であるからこそ、新国立劇場では、多様な公演プログラムでダンスの楽しさ、可能性を広げ、それを観客に伝えると同時に、ダンサー、振付家を育成する必要があるだろう。プログラムを見渡した際に、目先の成功、不成功だけではなく、長期的な育成ビジョンが見えることが評価できる。（後期について）「バレエとダンス」という二つの柱でプログラムされているが、そのバレエとダンスの中でも従来型の画一的な作品ではなく、幅広い趣向の作品を選択して、配したことがまず評価できる。若手ダンサーが振付する企画が、第一回の昨年から拡大して催されたことは、高く評価したい。バレエ団の今を楽しむだけでなく、日本バレエの未来をけん引するダンサー、振付家を輩出するために継続されることを強く望むものである。コンテンポラリーダンスに関しても、抽象的、構築的な中村恩恵＋首藤康之作品から、演劇性のあるポエティックな小野寺修二作品までを配しており、多様な楽しみ方を提供したことが高く評価できる。一般のバレエ団が集客のよい19世紀古典作品に偏りやすいことに比べ、新国立劇場の公演はバランスがよい。国立の劇場として、民間の手本として、リスクを取りながらも長い目でバレエ団と観客を育成する全体プログラムとして評価したい。
- （前期について）シーズン終盤で体力的に厳しい時期にもかかわらず、出演者のみなさんの気力体力の充実したパフォーマンスが印象に残りました。年間を通してコンディションを維持し、事前に配役が発表された舞台をそのとおりに務めるとするのは、簡単なようでいて難しく、またプロフェッショナルとしての基本であると同時に目的でもあると思います。拝見した公演以外にも、近くなってからの残念な配役変更等も覚えがないほどで、その点、たいへんよかったです。また、小野さん、米沢さんを筆頭に、ゲストよりも団員キャストを前面に押し出して、すぐれた出来ばえの舞台が多かったと感じました。（後期について）ダンサーの水準が高く、見応えのある公演が多かったです。複数キャストで拝見したものも、日によってレベルの差を感じるようなことがほとんどなく、層の厚さを感じました。現代舞踊については、中村恩恵×首藤康之、小野寺修二と実力のある振付家／踊り手が力が入った新作で見応えがあり、御劇場の公演が日本のダンス・シーンを牽引している印象を強くしました。団員による創作のDance to the Futureも、たいへん興味深く、また期待以上に水準が高かったです。
- （前期について）「劇場は博物館になってはならない。19世紀バレエを大切にしながらも、20-21世紀のバレエ・ダンス作品を積極的に舞台に乗せて紹介していきたい」と云う主旨の話を、ビントレー監督から伺ったのが数年前のこと。「トリプル・ビル」の定着とともに、才能あふれるコンテンポラリーダンスの振付家たちの作品も含め、その提案が、現実のものとして顕在化したのが、昨年秋から今年前半にかけてのシーズンだったのではないのでしょうか。平山素子振付「Trip・Triptych～フランス印象派ダンス」は、中劇場の空間を上手く演出した、刺激的で美しいコンテンポラリーダンス公演になったと思います。（後期について）私が拝見したのは、中村恩恵×首藤康之「小さな家」「シェイクスピア『ソネット』」、「ストラヴィンスキー・イブニング～バレエ・リュス～」「DANCE to the Future～Second Steps～」「くるみ割り人形」「小野寺修二 カンパニーデラシネラ『ある女の家』」「白鳥の湖」です。クラシックバレエからコンテンポラリーダンスまで、さまざまな振付、演出、ダンサーたちによる色彩豊かな公演を堪能しました。中劇場では、中村恩恵×首藤康之「小さな家」世界初演と、「シェイクスピア『ソネット』」の再演、そして「小野寺修二 カンパニーデラシネラ『ある女の家』」が上演され、斬新なアイデアと質の高い演出、そして優れた表現力によって、コンテンポラリーダンスのファン層が広がりを見せていることを実感する公演となりました。小劇場で上演された「DANCE to the Future～Second Steps～」はタイトルどおり、新国立劇場バレエ団メンバーによる振付公演としては、二度目の挑戦になる試みでしたが、三段跳びの『ホップ・ステップ・ジャンプ』の如く、ハイジャンプに繋がる実りある舞台となりました。この舞台にはダンス関係者も多く駆けつけ熱気漲る客席となりました。全体に、クラシックとコンテンポラリーのバランスもよく、大中小それぞれの劇場の特性を生かした、興味深いプログラムだったと思います。

(2) 創作面について

- （前期について）新作上演はコンテンポラリーダンスのみであるが、新国立劇場が委嘱して創作する、という方法をとっていることがまず評価できる。欧米では劇場やフェスティバルが、振付家へ委嘱することで作品を創作する過程から関与し、その結果に責任を持つことが主流である。振付家、ダンサー、美術、照明、音楽等のスタッフも、そのような環境の中で育っていく。日本のプライベート・カンパニーやフリーの振付家が、委嘱を受けて創作する機会は稀であるがゆえに、新国立劇場がリス

クを引き受けて先導し、結果として日本のバレエ、ダンス界を牽引する役目を果たす必要が大いにあると考える。もちろん、新作の創作であれば、すべてが高い評価を得られるとは限らず、今回の作品も100点満点ではない。しかし、既に評価を確立した海外作品のコピーを繰り返しているだけでは、本当の意味でのバレエ、ダンスの発展は望めない。時には失敗作があろうとも、個々のカンパニーや振付家、ダンサーがその創作過程を通して成長していく姿を積極的に楽しむ、あるいは生産的な批評眼で見守ることができるような、創造力を有した観客を育成する必要がある。その点で、日本人振付家によるコンテンポラリーダンス、芸術監督による近作のバレエ作品を取り上げることは評価できる。

(後期について) コンテンポラリーダンスについても、市井のカンパニーの自主公演とは異なり、練習場所、時間ほか諸々の環境が整えられているからこそ、優れた作品を生み出すことができた。中村・首藤の「ソネット」、小野寺の「ある女の家」は、是非今後も再演し、新国立劇場が発信するオリジナル作品として大切に育ててほしい。集客力のあるダンサー、振付家の作品と、地味でも才能の片鱗を感じさせるような振付家を育成する公演を、バランスよく継続してほしい。

- ・ (前期について) 団員の中にも振付に意欲的な方がたくさん出てきていらっしゃるようで、ワークショップ等、すぐに通常公演での上演に結びつかなくとも、想像的な風土がより豊かになっていくと願っています。(後期について) 中村さんは、中劇場のための創作も回を重ね、この空間の個性や使い方にたいへん知悉していらした印象。すでに、観客の意識の中では、中村×首藤の二人は、新国のレジデント・アーティストのような存在といえるかもしれません。Dance to the Future では、貝川鐵夫さん、宝満直也さん、福田圭吾さんに、センスのよさと明確な個性を感じました。創作は、続けているうちにアイデアがアイデアを呼び、手法もより大胆に、洗練されてくるものだと思います。今回の成功体験によってより自信を深め、どんどんチャレンジしてほしいものです。振付家の育成は、ダンサーのそれとは違い体系化されておらず、レベルアップの目に見える階段(ダンサーにおける、コール・ドから数人の踊りになり、ソロを受け持ち、小品の主演、全幕の主演というような)もないですが、バレエ団内に進取の気鋭があること、様々な刺激を歓迎すること、チャレンジを楽しみ真摯な取り組みの結果であれば失敗に対しても寛容であること等は、間違いなく才能の開花に影響する要素だと思います。特に、「ダンサー同士、仲間うちで楽しく試行錯誤してみる」経験が若い振付家にとっては大きいのではと、限られた見聞からではありますが、海外の最近の振付家等を見ていて感じます。近い将来、団内から出た振付家の作品が堂々とカンパニーの本公演を飾ることになるよう、期待しています。
- ・ (前期について) さまざまな局面で保守化の進む現在の我が国に於いて、ビントレー監督の静かなる挑戦は、日本のバレエ界に大きな刺激を与えていると思います。それは大量な観客動員という即効性には繋がらなくとも、バレエダンサーのみならず、スタッフや観客の感性を磨き、好奇心を掻立て、バレエ・ダンスの表現力の可能性を、未来に向けて掘り深めてくれていると、私は確信しています。来シーズンで監督任期は切れますが、日本のバレエファンが、新国立劇場を通じて、彼の存在を知ったこと、その作品に出会えたこと、一緒に仕事できたことは、本当に素晴らしい経験だと思います。また、平山素子氏をはじめとして、その才能を認められ、新国立劇場で表現の場を得た若い世代の活躍にも、拍手を送り、今後を期待したいと思います。(後期について) コンテンポラリー・ダンスは、才能あるダンス界のリーダーたちにチャンスを提供することで、観客だけでなく、劇場側も刺激を受けて活性化する良い機会になっていると思います。ビントレー監督は「劇場を博物館にはしてはいけない」と何度もおっしゃっていました。これからも、さまざまな演目を通して、新国立劇場の斬新で奥の深い舞台から刺激を受け、感性豊かに過ごしたいものです。
- ・ 「何でもあり」の現代社会において、舞踊の世界にもさまざまな表現があり、それをそのまま紹介したような『Dance to the Future』も毎回興味深く拝見していますが、今後の展望として、「現代」と「古典」、あるいは「バレエ」と「舞踊の身体表現」とにくっきり分断されているような今の形態に加え、その中間に位置するような作品や公演があれば、よりおもしろくなるように感じています。

(3) 営業、広報面について

- ・ (前期について) バレエは日本人ダンサーのみでダブル、トリプル、クワトルのキャストを組み、複数日の公演を成功させたことに、営業、広報の努力が認められる。また、ウェブ上でのインタビュー掲載など、観客がアクセスしやすい細やかな情報発信を今後も続け、より熱心なサポーターを獲得していくことが求められるだろう。ロンドンやパリの地下鉄構内には、巨大なポスターが常に貼られており、そこからバレエ、美術展、新書などの情報を得ることができる。視覚的にインパクトのある広報活動が日本でも生まれることを願っている。また、地域の劇場との連携を増やして作品を創作、上演する機会をさらに広げ、全国規模でダンスを底上げする役目を担ってほしい。(後期について) 公演当日の観客サービスとして、多くは子供向けではあるがロビーの装飾やイベントを企画していることは高く評価できる。作品を見るだけでなく、劇場という非日常空間への憧れと喜びを高めるような高級感、プレミア感のあるイベントを続けることは、そのようなものを求める観客にアピールできるだろう。他方で、バレエやコンテンポラリーダンスは敷居が高いと思って敬遠している層に対して、

身近に感じてもらえるようなサービス、イベント、また、地方公演の拡大や学校・施設等へのアウトリーチなども検討対象に加えてほしい。

- ・（前期について）特に「Trip・Triptych」のチラシのデザインが魅力的であったと思います。新作の場合、内容が固まる前の広報宣伝については、苦勞するところと思いますが、宗教的な『三連画』のイメージと、躍動感溢れるコンテンポラリーダンスのイメージが上手く表現され、人々の好奇心を誘ったのではないのでしょうか。客席の雰囲気も、以前に感じられた『現代舞踊の関係者』だけでなく、ダンスファンの若者や、従来のクラシックバレエファンにまで広がりを持ちはじめたような、変化を感じました。（後期について）新国立劇場のスタート時に比べると、広報宣伝は遥かに垢抜けて明るくなり、すっきりとシャープになりました。また、決して堅苦しくならず、微笑みを忘れないカジュアルな雰囲気が、劇場ロビーでも感じられるようになりました。役所的にならず、閉鎖的にならず、オープンマインドでありながら、常に前衛的であり、本物志向であり、質の高い世界に通用する舞台を制作し上演する。これは、云うは易く、行うは実に難しい課題であります。文化関係のビジネスの基本でもあります。世界中のオペラハウスが目指す理想を、新国立劇場も高く掲げて、例えば、6年後のオリンピックイヤーをひとつの目標に、「世界的オペラハウス」として懸命に走り続けてください。
- ・いつから出来たのか気付かなかったのですが、アカデミックプランの各割引サービスはとてもいいアイデアですね。サイトでは目立つように記載がありますが、プログラムや会場などでも、より大々的にアピールしてはいかがでしょうか？

4. アンケート調査

4公演で4回実施した。

有効回答数 313 人（配布数 1,712 人、回収率 18.3%）。回答者の 89.5%が概ね満足と答えた（280 人）。

《数値目標の達成状況》

【目標入場者数の達成状況】

実績 5,616 人／目標 5,550 人（達成度 101.2%）

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・「平山素子～フランス印象派ダンス～Trip Triptych」は、平山を中心としたダンサーの、質の高く変化に富んだダンスがフランス印象派の音楽にのせて次々と繰り広げられ、高い満足度と評価を得るとともに、入場者数も目標を大きく上回った。
- ・中村恩恵と首藤康之のコラボレーションは、再演と新制作のダブル・ビルであり、同じ中劇場の空間に全く異なる世界観を生み出した。新国立劇場現代舞踊公演の質の高さをアピールする好機となり、観客・評論家等より深い感動の声が多く寄せられた。
- ・「DANCE to the Future2013」は、新国立劇場バレエ団ダンサーに振付作品発表の場を与え、振付家の育成及びダンサーの現代舞踊分野での成長を促す長期的プロジェクトの一環として上演された。各作品におけるダンサーの創造力、表現力が絶賛されたとともに、日本のバレエ界の将来に繋がる公演の意義を評価する声が多く寄せられた。
- ・「ある女の家」は、中劇場ならではの広い空間を生かした魅力的な舞台美術と、そこで繰り広げられる舞踊の域に留まらないパフォーマンスに、演劇ファンを含む幅広い客層から非常に高い評判を得た。
- ・厳しい財政状況の中、高い公演水準の維持に努めつつも、予算のスリム化を徹底し、制作費の節約を図った。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・現代舞踊公演については、事前の情報に乏しいため広報宣伝営業活動に困難が伴う共通点がある。しかしながら、出来上がった作品が総じて高い評価を得ている以上、情報が乏しい中でも、その作品の期待値を高める不断の努力と創作の継続が必要である。

《24年度評価結果への対応》

【評価】

（振興会評価委員会）

- ・現代舞踊の分野で、子どもや社会人のための鑑賞教室の企画を新規に行うことは確かに難しい面があるだろう。しかし、観客を育てるためにも、新国立劇場には、この困難であるが必要な企画に是非取り組んでほしい。（①）

【対応】

①現代舞踊の鑑賞教室、入門講座の実施の検討

子どもや社会人のための鑑賞教室の企画を新規に行うことは、公演収支の観点から困難な取組であるが、27年度の現代舞踊公演では、大人のみならず子供も存分に楽しめる企画として、NHK 教育番組等にも出演している森山開次による、サーカスをテーマにした作品の上演を企画しており、現代舞踊公演の新たな観客の獲得を目指している。

2-(2)-④ 演劇

《制作方針》

① 新作の上演

現代舞台芸術とは常に時代と向き合うという視点から、独自の新作上演を積極的に企画し、発信する。

② 海外の才能との積極的な交流

広く才能のある海外の演劇人や集団との共同作業により、現代演劇として意義のある優れた作品を企画し、上演する。

③ 全国公演の積極的な展開

《実績》

1. 公演実績

公演名	劇場	期間	区分	回数	日数	入場者数	入場率	総席数
Withつながる演劇・ウェールズ編－ 『効率学のスズメ』(新作)	小劇場	4/9(火) ～28(日)	実績	17回	17日	2,780人	(49.9%)	5,576人
			計画	18回	18日	4,200人	(72.9%)	5,760人
Withつながる演劇・ドイツ編－ 「つく、きえる」(新作)		6/4(火) ～23(日)	実績	20回	18日	3,884人	(60.5%)	6,418人
			計画	20回	18日	4,800人	(75.0%)	6,400人
「象」(再演)		7/2(火) ～21(日)	実績	18回	18日	3,925人	(66.9%)	5,868人
			計画	18回	18日	4,200人	(72.9%)	5,760人
Try・Angle－三人の演出家の視点－ Vol.1 「OPUS／作品」(日本初演)		9/10(火) ～29(日)	実績	20回	18日	6,371人	(80.2%)	7,948人
			計画	20回	18日	4,800人	(75.0%)	6,400人
Try・Angle－三人の演出家の視点－ Vol.2 「エドワード二世」(新訳上演)		10/8(火) ～27(日)	実績	20回	18日	4,957人	(76.0%)	6,523人
			計画	20回	18日	4,800人	(75.0%)	6,400人
Try・Angle－三人の演出家の視点－ Vol.3 「アルトナの幽閉者」(新訳上演)		2/19(水) ～3/9(日)	実績	20回	17日	4,667人	(71.6%)	6,520人
			計画	20回	19日	4,800人	(75.0%)	6,400人
Withつながる演劇・韓国編－ 「アジア温泉」(新作)	中劇場	5/10(金) ～26(日)	実績	18回	15日	5,816人	(41.6%)	13,968人
			計画	18回	15日	10,400人	(73.3%)	14,184人
[JAPAN MEETS・・・現代劇の系譜を ひもとく]Ⅷ 「ピグマリオン」(新訳上演)		11/13(水) ～12/1(日)	実績	22回	17日	16,421人	(82.4%)	19,932人
			計画	22回	17日	14,800人	(74.3%)	19,932人
【演劇合計】	8公演 (計画:8公演)	実績	155回	138日	48,821人	(67.1%)	72,753人	
		計画	156回	141日	52,800人	(74.1%)	71,236人	

1) 4月演劇公演『効率学のスズメ』は、当初18回公演を予定していたが、4月21日(日)の公演が中止となったため、17回公演となった。

2. 営業・広報

- ・ 演劇部門では、シーズン発表に連動したセット券の販売は行わず、公演までの期間を短く取り、テーマや期間毎に3,4公演をまとめた通し券を設定し、販売効果が高まりつつある。
- ・ 2012/2013シーズンについて、「シリーズ『With つながる演劇-』」通し券を販売した。また、2013/2014シーズンについて、前年度1月から3月にかけて演目発表を行った後、5月から「四つのドラマと出会う・・・秋から冬-Try・Angle & JAPAN MEETS-」通し券を販売、6月から個別演目を販売し、1月に「世界を観る・・・春から夏」通し券の販売を行った。さらに、2014/2015シーズンについて、1月に演目発表を行った。

○2012/2013シーズン「シリーズ『With つながる演劇-』」

(4月『効率学のスズメ』、5月「アジア温泉」、6月「つく、きえる」の3公演)

○2013/2014シーズン「四つのドラマと出会う・・・秋から冬-Try・Angle & JAPAN MEETS-」

(9月「OPUS／作品」、10月「エドワード二世」、11月「ピグマリオン」、2014年2月「アルトナの幽閉者」の4公演)

○2013/2014 シーズン「世界を観る・・・春から夏」

(4月「マニラ瑞穂記」、5月「テンペスト」、6月「十九歳のジェイコブ」、7月「永遠の一瞬」の4公演)

- ・ 個別演目について、マスコミ各社への情報提供、取材依頼、ポスター、チラシ、インターネット、友の会会報等により公演周知を行った。
- ・ 公開舞台稽古及びフォトコール、囲み取材を実施し、マスコミへのアピールを行った。また、「ピグマリオン」において、テレビ局との共催により、コマーシャル映像及び音声を作成し、テレビ・ラジオ・インターネットで放送するなど、大規模かつ広範なプロモーションを行った。
- ・ 演劇鑑賞団体やカード会社、生活協同組合などに対して団体販売を行った。また、公演ごとに、出演者のファンクラブや旅行代理店、企業等に対しても積極的に営業活動を行った。
- ・ 「With 一つながる演劇」の3公演において、英国・ウェールズ、韓国、ドイツと連携するシリーズの意図のもと、各国語学系、各国文化系学科のある大学等学校団体を対象とし、優待販売の案内を実施した。また、その他の公演においても、演劇系学科、音楽系学科等も含め、学校団体に対し同様の営業活動を行った。
- ・ 「国立劇場・新国立劇場ダブル観劇キャンペーン」として、該当する国立劇場歌舞伎・文楽公演チケットの提示により、指定の新国立劇場主催公演チケットを割引価格で購入できるキャンペーンを実施した。また、そのために、国立劇場の協力を得て、各公演会場にキャンペーン告知ポスター及びチラシを設置した。
- ・ プレイガイド各社の公演直前等販売促進策を実施した。
- ・ ウェブサイト、Facebook やツイッターにてきめ細かい公演周知活動を行った。画像、動画、文章を用いて、公演前には過去の公演、リハーサル風景、出演者のインタビューを、公演開始後には舞台写真を掲載し、興味を喚起した。特に、演劇部門では、公演ごとに特設サイトを開設し、より強い印象を与えるデザインとともに詳しく内容を紹介し、スタッフブログにおいてきめ細かい公演情報を提供した。
- ・ 同時に、eメール Club (メールマガジン) 登録者及び演劇 DM 登録者に対してもきめ細かい情報提供を行った。先行発売情報、発売直前に発売情報と観どころ等、公演直前に舞台稽古の状況等、公演開始後にお客様の感想等、またトークなどのイベント情報を、ウェブサイトや Facebook と連動させつつ発信し、興味喚起と勧誘に努めた。
- ・ 一部の演目でプレイガイドホームページへの公演関連動画の掲載を行った。
- ・ 新国立劇場主催公演や他劇場・他劇団の各種公演会場において継続的にチラシの折込・配布を行った。
- ・ 公演会場にて、友の会会報の記事やポスターを利用し、当該公演や今後の演劇公演に関する読み物を掲示した。
- ・ 空席がある場合の若年層向け特別優待制度、「アカデミック・プラン」(25歳以下を対象に、原則半額)、「アカデミック 39」(26~39歳を対象に、原則半額)、外部の演劇俳優養成所等に所属する研究生を対象とした「ユース・アクターズ・プラン」(原則半額)を実施した。
- ・ 公演会場にて、関連書籍、物品、飲食物等の販売を行い、顧客満足度の向上を図った。特に「アジア温泉」「ピグマリオン」については、作品の世界観にあわせ、温泉街や広場を模したハワイエの設営をし、観客サービスを行った。

3. 外部専門家等の意見

(1) 公演全体について

- ・ (前期について)「With一つながる演劇」シリーズにあらためて「世界」の最新の劇表現の多面性を教えられた。とくに劇内容を解説した視覚重視の演出がめざましかった。このことは「象」(新国再演の)にもいえることだと思われる。(後期について)「エドワード二世」から「OPUS／作品」まで、つまり新旧の科白劇(それぞれの時代を鏡にした)が見えてくる。当初はこれらのレパトリイからは思ってもみなかったような課題が見えてきたように思われる。とくに新訳が劇世界を更新することが説明されたシーズンになった。
- ・ (前期について)日本の演劇制作の問題点は、新作の依頼をしたとき、出てきた戯曲が期待以下のものであっても、それを演出やキャストの力によって公演として成立させようとする点にある。イギリスのロイヤル・コート劇場のシアターアップステアーズのように、ワークショップ等を通して長い時間をかけて作家に新作を書き直す期間を与え、試演期間を経た上でよい成果が出れば本公演にかけるといった、丹精込めた新作づくりをせず、作家の名前だけでいわば先物買いをし、その結果については現場に任せて、厳しい公演スケジュール優先で結果を出していかなければならないという現

状を、新国立劇場が率先して打破しなければならない。日本の演劇界をリードする鑑となる演劇作りを行い、多くの人が「良い芝居を見なければ新国立劇場へ行けばよい」と思うような場を提供することが新国立劇場の使命であるとするならば、今回の「With—つながる演劇」のシリーズのあり方は大きな反省材料としなければならない。『効率学のスズメ』も、『つく、きえる』もわざわざ海外の作家に執筆依頼して書いてもらう価値のある内容の戯曲ではなかった。『アジア温泉』も鄭義信の特徴は出たが、インパクトに欠けた。25年度後期は、芸術監督の宮田慶子演出によるG・B・ショーの『ピグマリオン』のほか、宮田の企画による「Try-Angle ——三人の演出家の視点」として、今最も旬な若手演出家三人に好きな作品を演出させたが、これが大当たりだった。小川絵梨子はきっちりした演出でマイケル・ホリンガー作『OPUS/作品』を洒落た作品として仕上げた。上村聡史はサルトル作『アルトナの幽閉者』を岡本健一や美波の演技のおもしろさを引き出しながら、これも見応えのある作品に仕上げた。最も成功したのは森新太郎が演出したクリストファー・マーロー作『エドワード二世』であり、この作品は読売演劇大賞最優秀作品賞に輝き、森はこの作品と「汚れた手」で読売演劇大賞と同最優秀演出家賞及び、芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞した。これは、新国立劇場にとっては、2008年の『焼肉ドラゴン』、2009年の『ヘンリー六世』に次ぐ快挙である。こうした成績を残せたことは、宮田監督のもとで新国立劇場がきわめて魅力的な展開をしていることの証左である。

- ・ (前期について) 公演として書き下ろし2本と既作品2本、客観的に見て再演が繰り返されるもの、その完成度は演出方法を変更しても作品は安定している、「象」等は長い時代を総てまさに今尚タイムリーである、「アジア温泉」も作家自身が演出すればもっと共感を得られる作品のはずだ(狭義の日本人の立場として観た場合)、「効率学のスズメ」は現代社会を強く風刺、何処で上演されても理解される、よく書き込まれており、内容的に企業を題材にしており難しいものだが楽しく見られ全体よくまとまり効率よく仕上がっていた、「つく、きえる」は題材は演劇性の強いものであるがちょっと切り口を間違った感があった。いずれにしても今期は内外作家の創作劇を中心に進めた意欲は評価される、但し評価とは観客として受け入れやすい作品と違和感のある作品に分類できる作業も得た事も含めてである。(後期について) 今シーズン「try・Angle—三人の演出家の視点」を含めて斬新で面白い企画の揃ったシーズンだと感じた、客観的に見て色んな受け取り方の出来る幅広い作品が揃った、全体から見て営業面との兼ね合いも考慮しなければならないが新国立ならではと云う「企画」がある程度打ち出されて充実したシーズンであると感じた。
- ・ 平成25年度前期の評価出来る公演は『象』だった。深津演出、池田美術の、現実空間のリアリティーにこだわらない、まるで作者の脳を割って見せたような空間に助けられて、まったく新しい『象』を造形した。初演を上回った成果をあげたところに、再演の意義があったというべきだろう。それに引きかえ、with シリーズの三作は、手放して評価するとはいえない、微妙なものを残した。平成25年度後期演劇公演の最大の話は、Try Angle シリーズの成果だろう。「3」という数字にどれほど意味があるかわからないが、新国立劇場での活躍を期待される次世代の演出家3人に、チャンスを与えようという企画である。それぞれの提案した作品の方向がうまく散ってくれたためか、後期を通してみるとレパートリーの流れにある種のバランス感覚が働いている。欲を言えば、小川演出の『OPUS/作品』を、森演出の『エドワード二世』、上村演出の『アルトナの幽閉者』の後で見たかったが、多忙な皆さんのスケジュールもあることなので、贅沢は言えない。この3演出家に共通するのは、俳優との関係の作り方だ。自分のイメージするミザンスツェーナを押し付けた痕跡がない。イメージは実現しているのだろうが、俳優が押し付けられたと思わないで済んでいるということなのだろう。関係についてだけ注意を喚起していけば、あとは俳優が仕上げてくれる。そういう幸せな稽古場が見えるようだ。そういう信頼の持てる配役を実現できたということでもあるのだろう。ともすれば演出家が語りすぎる日本の演劇風土のなかで、こうした舞台を実現することに、新国立劇場が場を提供したことの意義は大きい。このほか、『マイ・フェア・レディー』の人気を利用しながら、バーナード・ショーの再発見をなした『ピグマリオン』についても触れておきたい。これは、宮田演出の職人芸が光っていたというべきだろう。『ピグマリオン』もそうだったが、この劇場の新翻訳に対する取り組みは今期も評価すべきだろう。俳優が生き生きと動き出す衝動を翻訳が作り出している。新翻訳にこだわった芸術監督の功だろう。以上、25年度後期は、企画において成果あったというべきだろう。

(2) 創作面について

- ・ (前期について) 描きおろし3作品のシリーズは、「十分に」問題作がならんだ。しかし3作品とも、いわば「希望」の光を未来にみつけながら、しかしやはり劇〈の色調(トーン)〉は、暗くなってしまった。「象」も、しかし。劇は時代の鏡とはいうのだが。(後期について) 翻訳劇(西洋劇)に学ぶところは少なくないのだが。しかし築地小劇場(つまり90年前)以来の翻訳劇に学ぶことが現代演劇のすべてではないと考えなおすことも大事。戦後の現代演劇(日本人のつくった劇)に、未上演のもの作家・作品を発掘すべき。
- ・ (前期について) 日本の新作依頼の方法では「ハズレ」が出てしまうことがあり、今回はそれに対

処する方策もないままに、「ハズレ」を出し続けたところに問題がある。これでは、出演者の顔ぶれだけで集客を図る他のプロデュース公演と何の代わりもない。新国立劇場でやっているものは（どんな出演者であろうと）質のよい作品だという安心感を観客に与える劇づくりをするべきであろう。今シーズン、再演の『象』は特に成功し、新作も公演としては質の良いものに仕上がってはいるのだが、新作戯曲が足をひっぱったことは否めない。25年度後期に新作はなかったが、代わりに新訳を用いて西洋戯曲のおもしろさを再発見する試みがなされ、全般に成功したのではないかと思う。これもまた宮田芸術監督の企画の成功である。今後ともこうした企画を積極的に続けてほしい。

- ・（前期について）なんとなく作品の中身ではなく全体としてコンパクトなシリーズに思えた、決して大作、長時間なものが良い事ではないとは言うまでもない、一本一本それぞれインパクトはあったがトータルとして半期を見ると印象が薄い。作品は二つに分かれた、観る側の立ち位置から生活している現実の世界の視点とそれを外から客観的に見た違和感の違いがあった、前者が「象」であり「効率学のスズメ」で後者が「つく、きえる」「アジア温泉」である。（後期について）演目自体、難解な「アルトナの幽閉者」のような作品（サルトルを考慮しても最も上手く仕上がった作品になったと感じた）や中々取り上げられない「ピグマリオン」や「エドワード二世」等違った視点で既成戯曲と比較して見られたのは良かったし観客から見て色々な受け取り方が出来るのが演劇の面白さだと云うのがより鮮明に出た作品群であったように思う。近年、中・小劇場の貸し館が増加しており営業的にはメリットはあるだろうが中劇場の利用も含めて新国内での実験的創作に（幅広い演劇啓蒙的な？）使う比率を伸ばす事も考慮できれば。また海外招聘作品も年一公演ぐらい企画に乗せてほしい。
- ・（前期について）withシリーズは国際的視野で企画された創作シリーズであるが、三作をまとめて評価するのは難しい。しいて言えば、海外の作家や演出家と、どう問題を共有したか、ということだろうが、企画の意図は十分に評価するが、成果をあげたというには、いずれも微妙なものが残る。『効率学のスズメ』は大切なテーマを描きながら、俳優・演出家・美術家の間に微妙な感性のズレがあって、統一感を作りきれていなかった。『つく、消える』は俳優の方法が作者のイメージに追いついていない上に、そこを埋めるには演出家に、「語り」のイメージが不足していたように思われる。『アジア温泉』は、作者のイメージと演出家のイメージの間にずれがあって、とりあえず演出家のマダン劇的発想で統一されたのだが、その発想に乗れた俳優と乗れなかった俳優がいて、不統一という印象が残った。いずれもテーマの共有性については問題ないのだが、方法の共有性に問題が残ったということだろう。リアルの概念すら演出家任せの日本で、ここに足を踏み入れるのは容易ではないが。ここに足を踏み入れてこそ、withになるのではないか。

(3) 営業、広報面について

- ・（前期について）マンスリー・プロジェクトやアフタートーク、公演内容に関連するさまざまなイベントは、企画力が問われると思う。新国の事業の一環として定着し、内外に確実にアピールしてきている。公演プログラムの充実していることをあげておく。公演のビデオ化、販売は、むずかしいのだろうか。（後期について）固定の観客はいる（と思う）のだが。公演ごとに教室でチラシを配り、劇の解説をしているのだが。営業・広報面については十分内外に発信していると思います。トークセッション、シアター・トーク、講座の推進などにさらに充実を、そして広報を。
- ・（前期について）『アジア温泉』でフロアを温泉街に演出するなど工夫がある。当日学生割引はどのくらい利用されているのだろうか？割引率を上げたり、学生への周知をさらに図ってはどうか。（後期について）ホームページはかなり魅力的かつ、わかりやすくなったのではないかと思う。「チケットについて」のページで割引の案内が明確になってよい。公演については動画を増やすなど、ますます工夫を加えてほしい。公演のほかにマンスリー・プロジェクト（演出家たちが壇上にあがって話すなどのトークセッション等）も効果的だったのではないか。
- ・（前期について）舞台芸術に於いて営業、広報がその作品内容に参加するのは難しい、そのうえで営業、広報と云う現実作業をやらなければならない、客観的に見ての感じはもっと積極的に真摯に制作と予算施行部門の窓口を密接にして、現実を更なる改善へ訴えていく作業を積み重ねられたい。もうひとつは昨年度の「長い墓標の列」に見られたような優秀な研究生をどんどんキャストイングして単にコストパフォーマンスだけではない処も取り入れては。（後期について）演劇部門の収支バランスを見ると年々助成予算が減少する中で観客動員がここの所、割とスムーズに行われ観客数、入場収入も目標値を上回る作品が多くなり（設定値が高いか低いかは見えないが）好結果が覗える。
- ・（前期について）withの三作は、日本の観客にとっては無名の作品なのだから、もっと作品の内容が観客に伝わった方がいい。先入観を与えすぎるのも困りものだが、せめて期待をそそる情報をあたえてほしい。（後期について）Try Angleの3作品で感じたことだが、チラシなどの宣材を早めを作ることにこだわるあまり、稽古のプロセスが反映されていない広報になっているのではないか。演出家としては新人であるだけに、どんな舞台が作られようとしているのか、リアルタイムで伝わってくれば、もう少し観客動員に影響が出てくるのではないだろうか。

4. アンケート調査

8公演で10回実施した。

有効回答数709人（配布数3,782人、回収率18.7%）。回答者の87.2%が概ね満足と答えた（618人）。

【特記事項】

「OPUS／作品」において以下の賞を受賞した。

- ・ 演出の小川絵梨子が第48回紀伊國屋演劇賞 個人賞を受賞した。（本作及び「THE PILLOWMAN ピロロマン」の演出に対して）
- ・ 演出の小川絵梨子が第55回毎日芸術賞 第16回千田是也賞を受賞した。（本作及び「THE PILLOWMAN ピロロマン」、「帰郷-The Homecoming-」の演出に対して）
- ・ 美術の二村周作が第48回紀伊國屋演劇賞 個人賞を受賞した。（本作及び「今ひとたびの修羅」、「クリプトグラム」の美術に対して）

「エドワード二世」において以下の賞を受賞した。

- ・ 第21回読売演劇大賞 最優秀作品賞
- ・ 演出の森新太郎が第21回読売演劇大賞・最優秀演出家賞を受賞した。（本作及び「汚れた手」の演出に対して）
- ・ 演出の森新太郎が平成25年度（第64回）芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞した。（本作及びほかの演出に対して）

《数値目標の達成状況》

【目標入場者数の達成状況】

実績48,821人／目標52,800人（達成度92.5%）

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 25年度は、宮田芸術監督が海外の劇作家、演出家と組み、書き下ろしの新作を上演する「With—つながる演劇—」シリーズ、30代の若手演出家に焦点を当てた「Try・Angle—三人の演出家の視点—」シリーズにより主に構成され、新国立劇場ならではの切り口から挑んだ意欲作が生み出された。特に「Try・Angle—三人の演出家の視点—」シリーズにおいては多くの演劇賞を受賞するなど、日本の演劇界において非常に高い評価を受けた。
- ・ 「『効率学のスズメ』」は、「With—つながる演劇—」シリーズの第一弾として、製薬会社の研究室を舞台に人間や現代社会の本質に迫った作品であり、主催公演で初めて本格的なアリーナステージを使用し、床や四方の壁に映像を投影するなどの斬新な手法で演出した。
- ・ 芸術の殿堂（ソウル・アート・センター）との3回目となる日韓共同作品である「アジア温泉」は、架空の島で起こった事件を描いた作品であり、様々なジャンルの音楽と中劇場の広い空間を生かした壮大な祝祭劇として上演され、観客からは高い評判を得た。
- ・ 「つく、きえる」は、東日本大震災について、海外の劇作家の視点から描かれた意欲作であり、津波や原発事故が、若いカップルと3組の夫婦から発せられる抽象的な台詞の端々で表現された。宮田芸術監督自身の演出により上演され、大変意義深い公演となった。
- ・ 「象」は、独特な世界観が大きな反響を呼んだ話題作の再演であった。広島原爆という、震災後より現代に通じるものとなった普遍的なテーマを扱った作品に、初演時から一部変更となった俳優陣が挑んだ。その熱演は深津篤史の演出と共に高く評価された。
- ・ 日本初演となる「OPUS／作品」は、弦楽カルテットのメンバーの音楽への献身、織り成す人間関係、そこから生まれるドラマをコミカルに描きつつも、時に冷酷に人間の表裏を浮き彫りにした作品であった。配役や演出が注目を集めたことで目標入場者数を大きく上回る観客が来場し、大変好評を得た。
- ・ 新シーズンに入り、「エドワード二世」は、日本での上演が約半世紀ぶりとなるクリストファー・マーロウの歴史劇である。現代風の衣装で身を包み、斬新な舞台装置の上で多数の登場人物を演じ分けた重厚な俳優陣の熱演が、森新太郎の演出とともに大きな話題となった。
- ・ 「ピグマリオン」は、映画「マイ・フェア・レディ」の原作となったバーナード・ショーの作品である。映画と違う幕引きとそこに至る物語の深みを、小田島恒志による新訳、宮田芸術監督の演出で上演した。中劇場ならではの大掛かりな舞台機構、魅力的なキャスト陣が見事に表現し、人気の演目となった。
- ・ 「アルトナの幽閉者」は、上演される機会の少ないジャン＝ポール・サルトルの作品である。人類の普遍且つ永遠のテーマである戦争、それに影響された個人と家族の重厚な物語は、気鋭の演出家上村聡史の演出と俳優陣の熱意ある演技によって、完成度の高い舞台となった。
- ・ 厳しい財政状況の中、高い公演水準の維持に努めつつも予算のスリム化が徹底され、過半数の公演

で計画時より制作費が削減された。また、収入の確保に努めた結果、特に「ピグマリオン」では100%を超える収支率、「OPUS／作品」、「エドワード二世」では90%を超える収支率を達成した。

- ・ 芸術監督が企画するテーマに沿った演目をセットで組み合わせ、特別割引通し券として販売することで、作品へのより深い興味と理解を観客に提案し、販売の促進と売上の向上につなげることができた。また、公式ツイッター及びFacebookといったSNSを活用し、迅速かつ継続的に情報を発信したことは、売上の向上及び観客層の新規開拓の一助となった。
- ・ 新国立劇場で制作した演劇公演を山形県、茨城県、兵庫県で上演した。地域文化振興に資したと共に、全国的な新国立劇場の認知度向上及び普及に寄与した。
- ・ 各種団体やプレイガイド各社等、様々な販売ルートを駆使して細かい集客を積み上げることに一定の成果を得た。
- ・ 「OPUS／作品」のように、作品内容を伝えやすく、学校の教師の好感や学生の共感を得やすい内容を持つ作品に対し、多くの専門学校系の団体利用や学生割引販売を促進できた。
- ・ 「ピグマリオン」では、有名作品（映画「マイ・フェア・レディ」の原作）、有名俳優の出演、11月という時期、中劇場というキャパシティという学校団体を誘致しやすい諸条件が揃った点を上手く活かし、多くの学校団体の利用を獲得した。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・ 「『効率学のススメ』」、「アジア温泉」、「つく、きえる」、「象」、「アルトナの幽閉者」について、いずれも一定の評判を得ながらも入場者数、入場料収入とも目標を下回った。いずれも今後の集客と発展のための最大の営業宣伝広報は、作品を継続的に上演することである。いずれの作品も、娯楽作品というよりも文芸作品ととらえる事ができ、爆発的な流行を生み出すような作品ではないが、長くじっくり考えさせる、味わうといった作品である。故に、地道な上演活動こそがそれぞれの作品の周知集客活動の基礎と位置づけられ、同時にそれぞれの作品の素晴らしさを訴えていきたい。

個々の作品についてのポイントは以下のとおりと考える。

海外劇作家に新作を委嘱し上演した『『効率学のススメ』』については、事前に発信した情報と開幕後の評判で一定の期待感を醸成し券売につなげた部分はあったが、残念ながら2,780名にとどまり、目標4,200名に達することはできなかった。しかしながら、「アッセンブリー」の実施や専門家の意見にもあるように、国内の演劇には見られない斬新さを感じさせた作品であった。今回、その魅力をいかに伝えていくかで苦労したが、このような経験を積み上げていくことで、我々もその魅力の伝え方を学び、その斬新さに対して興味を持つ観客が増えるよう上演機会を設け、世界の演劇の潮流を見つめつつ、我が国の演劇の発展につなげていく必要がある。なお、4月21日（日）公演については、出演者が開演時間になっても劇場に現れず、連絡も取れなかったため、やむを得ず中止とした。起こってはならない事態であり、今後キャスト、スタッフの状況把握をさらに強化して、注意を喚起していく。

「アジア温泉」については、これまでに数多くの共同制作を行ってきた韓国演劇関係者との新作であるが、入念な打ち合わせを繰り返したことにより制作が遅れ、集客の不足に結びついたと言える。5,816名という入場者数は目標10,400名に及ばなかったものの、今回目指した祝祭性が十分に実現されていれば目標は達成可能であったと考える。日韓国交正常化50周年を迎える今だからこそ、日韓共同制作の火を絶やさないことが大切である。

「つく、きえる」についても、海外劇作家に新作を委嘱したものだが、日本人にはまだまだ距離をとりづらい、震災・原発災害が題材であったことが集客の難しさに現れ、目標4,800名に対し、3,884名の実績にとどまったものと考えられる。観客から聞こえてきた「良い作品であってもまだまだ生々しくて」といった声があることを物語っていたかもしれない。また、一方で「この作品がドイツで上演されたならば、ドイツの観客に震災の痛みを伝えることになるかも」という声も聞かれた。重いテーマを持った作品であるが、改めて上演機会を設けていくことで、徐々に作品が受け入れられるよう努める。

「象」については、山形、兵庫公演が好評であったものの、目標4,200名に対し、実績は3,925名で目標には達しなかった。初演時の、有名俳優が出演したことによる不条理劇では考えられないような集客には及ばなかったが、専門家や観客の意見からは、再演により更に評価が高まったことが伺えた。今後も優れた演目の再演を重ねるとともに、より多くの観客に上演の意義を伝えられる広報活動が必要である。

「アルトナの幽閉者」については、専門家に「新国立劇場でなければ上演できない作品」と評されるほど上演が困難と目される作品であり、目標4,800名にわずかに及ばなかった。観客アンケートでは高い満足率を得ているだけに、広報活動に今一步の努力が必要であった。

今後もきめ細かい広報宣伝営業活動を欠かすことなく、作品の魅力や制作意図を伝える地道な広報・宣伝・営業活動を心がける。

2-(2)-⑤ 青少年等を対象とした現代舞台芸術の公演

《制作方針》

青少年を対象とした鑑賞教室を実施し、新たな観客層の育成を図るとともに、現代舞台芸術の普及と理解を図る。

《実績》

1. 公演実績（再掲）

公演名	劇場	期間	区分	回数	日数	入場者数	入場率	総席数
高校生のためのオペラ鑑賞教室 「愛の妙薬」	オペラ 劇場	7/10(水) ～17(水)	実績	6回	6日	9,911人	(93.3%)	10,624人
			計画	6回	6日	9,000人	(84.7%)	10,620人
鑑賞教室 合計			1公演					
			実績	6回	6日	9,911人	(93.3%)	10,624人
			計画	6回	6日	9,000人	(84.7%)	10,620人

2. 営業・広報

- ・ マスコミ各社への取材依頼、ポスター、チラシ、DM、インターネット、ジ・アトレ会報等により、公演の周知を図り、集客に努めた。
- ・ 前年度の9月に首都圏全域（東京、神奈川、埼玉、千葉の高等学校、茨城・群馬・山梨の一部の高等学校、および特別支援学校）約1,300校に募集要項を送付し、学校単位の受付を行った。

3. 外部専門家等の意見

- ・ （高校生が）最後まで集中して鑑賞できるか心配したが、幕明けの紗幕映像に惹きつけられ、カラフルで鮮やかな色彩に目を奪われ、大型本やアルファベットが動く舞台装置に驚き、大いに喜んでいた。洗練された喜劇に仕立てられた演出が無理なく受け入れられたようである。
- ・ 内容としてよく纏まり、高校生たちの鑑賞態度にも進歩が観られた一日。開演前の客席案内係たちのゼスチャー入りの案内も効果を発揮したと思う。この種の努力の積み重ねによって、この鑑賞教室が、教育の場としてより有効に機能するものと確信する。

4. アンケート調査

全1公演で6回実施した。

有効回答数3,960人（配布数9,911人、回収率40.0%）。回答者の88.1%が概ね満足と答えた（3,488人）。

【特記事項】

新国立劇場で開催する公演のほか、学校など現地や地方に出向いての現代舞台芸術の公演で、青少年等を対象としたものとしては、下記の公演を実施した。

(1) オペラ

○高校生のためのオペラ鑑賞教室・関西公演「夕鶴」

芸術監督＝尾高忠明

作＝木下順二

作曲＝團伊玖磨

指揮＝石坂宏

演出＝栗山民也

出演＝石橋栄実／針生美智子、望月哲也／大槻孝志、吉川健一／榎貴志、久保和範／北川辰彦

児童合唱＝百合学院小学校

管弦楽＝大阪フィルハーモニー交響楽団

日時：10月30日(水)14:00・31日(木)13:00 開演 2回公演

会場：尼崎市総合文化センター あましんアルカイックホール

入場者数：1,711人（入場率 50.3%）

主催：尼崎市／公益財団法人尼崎市総合文化センター／公益財団法人新国立劇場運営財団
助成：公益財団法人ロームミュージックファンデーション
協賛：ローム株式会社
協力：公益財団法人日本教育公務員弘済会 兵庫支部

(2) 新国立劇場合唱団外部出演公演

○松本市中学校・音楽鑑賞会

合唱：新国立劇場合唱団

日時：5月21日（火）～24日（金） 全12回公演

会場：松本市音楽文化ホール（ザ・ハーモニーホール）

主催：松本市教育委員会

○川崎市立南菅小学校 音楽鑑賞教室

合唱：新国立劇場合唱団

日時：6月11日（火）11:00 開演

会場：川崎市立南菅小学校 体育館

主催：川崎市立南菅小学校

○文化庁平成25年度次代を担う子どもの文化芸術体験事業

合唱：新国立劇場合唱団

日程/会場：9月10日（火）／徳島県 徳島市不動小学校

9月11日（水）／徳島県 小松島市南小松島小学校

9月12日（木）／徳島県 徳島市昭和小学校

9月13日（金）／徳島県 石井町高原小学校

9月17日（火）／徳島県 南あわじ市立市小学校

9月18日（水）／兵庫県 宝塚市立西谷小学校

9月19日（木）／兵庫県 姫路市立上菅小学校

○文化庁平成25年度次代を担う子どもの文化芸術体験事業

合唱：新国立劇場合唱団

日程/会場：10月30日（水）／香川県 高松市立円座小学校

10月31日（木）／香川県 観音寺市立常磐小学校

11月1日（金）／高知県 本山町立嶺北中学校

11月5日（火）／高知県 四万十市立中村小学校

11月6日（水）／愛媛県 八幡浜市立真穴中学校

11月7日（木）／愛媛県 西条市立玉津小学校

11月8日（金）／愛媛県 西条市立庄内小学校

○平成25年度 土浦第五中学校芸術鑑賞会

合唱：新国立劇場合唱団

日時：11月12日（火）13:00 開演

会場：土浦市民会館大ホール

主催：土浦市立土浦第五中学校

《数値目標の達成状況》

【目標入場者数の達成状況】

実績 9,911 人／目標 9,000 人（達成度 110.1%）

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 「高校生のためのオペラ鑑賞教室」は、平成10年度の事業開始以来毎年開催されており、25年度も全6回を実施、その入場率は93.3%と極めて高かった。
- ・ 今年度に「高校生のためのオペラ鑑賞教室」として取り上げた「愛の妙薬」は2012/2013シーズン中3回目の上演であったこともあり、非常にスムーズに制作が進行し、音楽面・演出面の両面で優れた公演となった。公演日程を定期試験後の夏休み前の時期に設定していたため、東京、埼玉、神奈川を中心に多くの学校から応募があった。カラフルな舞台美術や親近感の湧くストーリーが高校生に大変好評であった。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・ 「高校生のためのオペラ鑑賞教室」は、本物のオペラを体験してほしいという普及目的のもと、他の主催公演と同じ規模のプロダクションを上演しているため、低廉な入場料金を支えるための協賛企業等の支援が不可欠となっている。今後も引き続き公演意義に賛同する団体等からの支援を仰ぎ、事

業を継続していきたい。

《24年度評価結果への対応》

【評価】

(文科省評価委員会)

- ・ 親子のための鑑賞教室・青少年のための鑑賞教室などに、より積極的に取り組むとともに、今後は、地方に向けた広報活動の更なる充実を図るなど、ひとりでも多くの子供たちに芸術文化に関心を持ってもらえる取組を期待したい。(①)
- ・ (現代舞台芸術について) 今後は、青少年向けとはいえレベルを落とさず、できるだけ本公演に近いものを提供することも検討すべきである。(①)
- ・ 舞踊、現代舞踊、演劇などについても、裾野を広げるために青少年等を対象とした公演の実施が望まれる。(②)
- ・ 高校生のためのオペラ鑑賞教室、こどものためのバレエ劇場は好評を博しているが、よりレベルの高い公演が望まれる。(①)
- ・ 今後は、オペラ鑑賞教室についての演目の吟味、公演前の説明、ダイジェスト版の検討、バレエ劇場の全国展開など、より一層の充実が期待される。(①)

【対応】

①企画内容・実施方法の検討

新国立劇場では、青少年等を対象とした公演の重要性を踏まえ、通常の主催公演以上に大きな収支差による費用負担があるものの、これまで親子のための企画として「こどものためのオペラ劇場」、「こどものためのバレエ劇場」を、青少年のための鑑賞教室として「高校生のためのオペラ鑑賞教室」、「中学生のためのバレエ」を実施するとともに、全国展開に努め、数多くの子供たちに芸術文化に関心を持ってもらう機会を提供してきた。特に「高校生のためのオペラ鑑賞教室」は東京公演に加え、地方公共団体等との共催により関西公演も主催公演として実施しており、東京・関西両公演とも、毎年学校関係者から高い評価を得て定着している。25年度は7月に東京公演として「愛の妙薬」を、10月に関西公演として「夕鶴」を上演した。なお、26年度は「こどものためのバレエ劇場『しらゆき姫』」を7月に新国立劇場で、8～9月には全国5会場で上演する予定であることに加え、7月には「高校生のためのオペラ鑑賞教室」(東京公演)として「蝶々夫人」を、10月には同関西公演として「夕鶴」の上演を予定するとともに、広報準備も進めている。

新国立劇場では、青少年向けの公演においても、オペラ・バレエとも常に本公演と同等レベルの内容を提供している。「高校生のためのオペラ鑑賞教室」は、「一般公演と同じプロダクションを一般のお客様と同じスタイルでご覧いただく」趣旨で、本公演そのままを上演することを方針としており、出演者も日本を代表する歌手によって構成されている。演目選択については常に吟味を重ね、本公演の演目の中から著名な作曲家の代表作を取り上げている。また、高校生のオペラ観劇をどう捉えるかについては、試行錯誤を重ねた結果、特別扱いすることなく、一般観客と同じように通常のオペラ公演をそのまま体験することによってこそ、本物のオペラに触れる貴重な機会を十全に活かすとともに、劇場でのマナーを身につけることが可能であると考えた。このため、開演前の解説・レクチャーや、ダイジェスト版による上演は取敢えず行わず、適宜、学校へ出向いて事前に説明する等の工夫を行っている。

また、「こどものためのバレエ」においても出演者はバレエ団のプリンシパルを含むソリスト級のダンサーを中心に構成されており、レベルの高い舞台を提供している。

②実施分野拡大の検討

新国立劇場では、演劇部門では24年度に念願の「大人も子どもも楽しめる作品」として新作「音のない世界で」を上演し、好評を博したところだが、2014/2015 シーズン(27年度)には、ふたたび長塚圭史の作・演出により企画第2弾となる新作の上演を予定している。現代舞踊部門でも2014/2015 シーズン(27年度)に、大人のみならず子どもも存分に楽しめる企画として、NHK 教育番組等にも出演する森山開次による、サーカスをテーマにした作品の上演を企画し、新たな観客の獲得を目指している。このことにより、27年度までには新国立劇場の全ジャンルで青少年等の観客層を対象とした公演の実施に着手できる予定である。

2-(2)-⑥ 現代舞台芸術の公演の実施に際しての留意事項等

《実績》

1. 外部専門家等の意見聴取、アンケート調査の実施

① 外部専門家等の意見聴取

各部門の専門委員に各公演についてのレポート提出を依頼し、意見の聴取を行った。
また、総括レポートの提出を半期ごとに依頼し、自己点検評価の総括に生かした。

② アンケート調査の実施

分野	有効回答数	概ね満足との回答(回答数)
オペラ	6,435人	87.3%(5,620人)
バレエ	2,659人	95.4%(2,537人)
現代舞踊	313人	89.5%(280人)
演劇	709人	87.2%(618人)
合計	10,116人	89.5%(9,055人)

2. 共催、受託などによる公演

(1) 平成25年度(第68回)文化庁芸術祭

区分	公演名
主催 公演	オペラ劇場：オペラ「リゴレット」、バレエ「バレエ・リュス ストラヴィンスキー・イブニング」 小劇場：演劇「エドワード二世」
協賛 公演	オペラ劇場：オペラ「フィガロの結婚」、「ホフマン物語」 中劇場：現代舞踊「中村恩恵×首藤康之」、演劇「ピグマリオン」

- ・平成25年度(第68回)文化庁芸術祭オープニング 国際音楽の日記念
尾高忠明指揮 新国立劇場合唱団が歌う「ベルシャザールの饗宴」(受託公演)
日時：10月1日(火)19:00開演 1回
主催：文化庁芸術祭執行委員会
制作：公益財団法人新国立劇場運営財団
入場者数：914名(入場率51.0%)

(2) 国・地方公共団体等との後援・協力

(オペラ)

・地域招聘公演

びわ湖ホール「三文オペラ」

日時：7月12日(金)18:30/14日(日)14:00開演 2回公演

会場：新国立劇場中劇場

入場者数：1,169名(入場率66.6%)

主催：滋賀県、公益財団法人びわ湖ホール、公益財団法人新国立劇場運営財団(共催)

(3) 大学との連携・協力

東京芸術大学、国立音楽大学、昭和音楽大学との連携・協力協定に基づきアートマネジメント講座を実施した。具体的には、新国立劇場におけるバックステージツアーや職員による専門講座、各大学に財団職員が講師として出向いての事前講義など、多方面から立体的に劇場を知ることのできる密度の濃い内容とした。また、大阪音楽大学や北海道教育大学との間では、同じく連携・協力関係を活かして、新国立劇場合唱団と各大学合唱団及び有志メンバーとの合同演奏会を開催し、関係者はもちろん、地域住民にも鑑賞の機会を提供した。

3. 全国各地の文化施設等における公演

(1) オペラ

① 高校生のためのオペラ鑑賞教室・関西公演「夕鶴」

芸術監督＝尾高忠明

作＝木下順二

作曲＝團伊玖磨

指揮＝石坂宏

演出＝栗山民也

出演＝石橋栄実／針生美智子、望月哲也／大槻孝志、吉川健一／榎貴志、久保和範／北川辰彦

児童合唱＝百合学院小学校

管弦楽＝大阪フィルハーモニー交響楽団

日時：10月30日(水)14:00・31日(木)13:00 開演 2回公演

会場：尼崎市総合文化センター あましんアルカイックホール

入場者数：1,711人（入場率 50.3%）

主催：尼崎市／公益財団法人尼崎市総合文化センター／新国立劇場

助成：公益財団法人ロームミュージックファンデーション

協賛：ローム株式会社

協力：公益財団法人日本教育公務員弘済会 兵庫支部

(2) バレエ

① 「ペンギン・カフェ／シンフォニー・イン・C」全国公演

芸術監督＝デヴィッド・ビントレー

音楽＝サイモン・ジェフス／ジョルジュ・ビゼー

振付＝デヴィッド・ビントレー／ジョージ・バランシン

出演＝新国立劇場バレエ団

1) 日時：5月8日(水)19:00 開演 1回公演

会場：静岡県コンベンションアーツセンター グランシップ 中ホール・大地

入場者数：804人（入場率92.8%）

主催：公益財団法人静岡県文化財団／静岡県

2) 日時：5月11日(土)14:00 開演 1回公演

会場：御殿場市民会館

入場者数：510人（入場率45.7%）

主催：御殿場市／御殿場市民会館

② 「新国立劇場バレエ団 クラシック・バレエ ハイライト 2014」全国公演

芸術監督＝デヴィッド・ビントレー

出演＝新国立劇場バレエ団

1) 日時：1月23日(木)19:00 開演 1回公演

会場：厚木市文化会館 大ホール

入場者数：436人（入場率31.9%）

主催：公益財団法人厚木市文化振興財団

2) 日時：1月26日(日)13:30 開演 1回公演

会場：姫路市文化センター 大ホール

入場者数：1,272人（入場率80.8%）

主催：公益財団法人姫路市文化国際交流財団

3) 日時：1月28日(火)19:00 開演 1回公演

会場：和歌山県民文化会館

入場者数：900人（入場率46.4%）

主催：和歌山県／一般財団法人和歌山県文化振興財団

③ 「白鳥の湖」全国公演

芸術監督＝デヴィッド・ビントレー

音楽＝ピョートル・チャイコフスキー

振付＝マリウス・プティパ／レフ・イワーノフ

演出・改訂振付＝牧阿佐美

出演：新国立劇場バレエ団

日時：3月2日(日)14:00 1回

会場：柏崎市文化会館アルフォーレ 大ホール

入場者数：932人（入場率91.9%）

主催：新潟県／新潟県舞踊芸術普及育成事業実行委員会／柏崎市文化会館アルフォーレ

(3) 現代舞踊

① 「～フランス印象派ダンス～Trip Triptych」全国公演

アーティスティック・コンサルタント＝デヴィッド・ビントレー

音楽＝M. ラヴェル/C. ドビュッシー/E. サティ

演出・振付＝平山素子

出演＝平山素子、高原伸子、西山友貴、福谷葉子、青木尚哉、A. シルヴェストリン、小尻健太、
原田みのる、平岡慎太郎、鈴木竜、宝満直也

日時：6月15日(土) 15:30 開演 1回公演

会場：穂の国とよはし芸術劇場

入場者数：702人(入場率93.6%)

主催：公益財団法人豊橋文化振興財団／豊橋市

② 「Shakespeare THE SONNETS」全国公演

アーティスティック・コンサルタント＝デヴィッド・ビントレー

音楽＝ディック・P・ハウブリッヒ

構成・演出・出演＝中村恩恵／首藤康之

振付＝中村恩恵

1) 日時：10月20日(日) 14:00 開演 1回公演

会場：北九州市芸術劇場 中劇場

入場者数：427人(入場率71.9%)

主催：北九州市／公益財団法人北九州市芸術文化振興財団

2) 日時：10月23日(水) 19:00 開演 1回公演

会場：大分 iichiko 総合文化センター iichiko 音の泉ホール

入場者数：562人(入場率79.8%)

主催：大分県／公益財団法人大分県芸術文化スポーツ振興財団

3) 日時：2月1日(土) 17:00 開演 1回公演

会場：りゅーとぴあ新潟市民芸術文化会館

入場者数：388人(入場率50.9%)

主催：新潟県／公益財団法人新潟市芸術文化振興財団／新潟県舞踊芸術普及育成事業実行委員会

(4) 演劇

① 「象」全国公演

芸術監督＝宮田慶子

作＝別役実

演出＝深津篤史

出演＝大杉漣、木村了、奥菜恵、羽場裕一、山西惇、神野三鈴ほか

1) 日時：7月30日(火) 18:30 開演 1回公演

会場：山形シベールアリーナ

入場者数：320人(入場率72.6%)

主催：山形県／公益財団法人弦地域文化支援財団

2) 日時：8月3日(土) 13:00 開演 1回公演

会場：兵庫県立芸術文化センター 阪急 中ホール

入場者数：749人(入場率95.8%)

主催：兵庫県／兵庫県立芸術文化センター

② リーディング「葵の上」こころで聴く三島由紀夫Ⅱ

芸術監督＝宮田慶子

作＝三島由紀夫

演出＝宮田慶子

出演＝橋本淳、河合杏南、山崎薫、北澤小枝子

日時：7月7日(日) 13:00 開演 1回公演

会場：山名湖村公民館

入場者数：約200人

主催：三島由紀夫文学館／山名湖村教育委員会／山名湖村

③ 「OPUS／作品」全国公演

芸術監督＝宮田慶子

作＝マイケル・ホリンガー

翻訳＝平川大作

演出＝小川絵梨子

出演＝段田安則、相島一之、加藤虎ノ介、伊勢佳世、近藤芳正

日時：10月5日(土) 14:00 開演、6日(日)15:00 開演 2回公演

会場：水戸芸術館 ACM 劇場

入場者数：665人(入場率73.2%)

主催：水戸市／公益財団法人水戸市芸術振興財団

(5) 連携・協力大学との合同演奏会

① 北の大地にひびく合唱の饗宴

指揮＝富平恭平

合唱＝新国立劇場合唱団

日時：8月3日(土) 14:30 開演 1回公演

会場：北海道教育大学岩見沢校 i-HALL

主催：北海道教育大学／公益財団法人新国立劇場運営財団

② ザ・カレッジ・オペラハウス合唱団と新国立劇場合唱団

合同演奏会とオペラ合唱ワークショップ

指揮＝三澤洋史

合唱＝新国立劇場合唱団(20名出演)

日時：3月28日(金) 18:30 開演

会場：大阪音楽大学ザ・カレッジ・オペラハウス

主催：文化庁／大阪音楽大学

(6) 新国立劇場合唱団外部出演公演

① NHK交響楽団 定期演奏会 ヴェルディ「レクイエム」

指揮＝セミョン・ビシュコフ

管弦楽＝NHK交響楽団

合唱＝新国立劇場合唱団(150名出演)

日時：4月19日(金)19:00／20日(土) 15:00 開演 2回公演

会場：NHKホール

主催：公益財団法人NHK交響楽団

② 松本市中学校 音楽鑑賞会

指揮＝河原哲也

合唱＝新国立劇場合唱団(22名出演)

日時：5月21日(火)／22日(水)／23日(木)／24日(金)

各日共3回公演／計12回

会場：松本市音楽文化ホール

主催：松本市教育委員会

③ 川崎市立南菅小学校 音楽鑑賞教室

合唱＝新国立劇場合唱団(4名出演)

日時：6月11日(火) 11:00 開演

会場：川崎市立南菅小学校 体育館

主催：川崎市立南菅小学校

④ 東京フィルハーモニー交響楽団 定期演奏会 シベリウス「フィンランディア」

指揮＝飯守泰次郎

管弦楽＝東京フィルハーモニー交響楽団

合唱＝新国立劇場合唱団(60名出演)

日時：7月12日(金)19:00 開演 1回公演

会場：東京オペラシティコンサートホール

主催：公益財団法人東京フィルハーモニー交響楽団

⑤ オーケストラハモン 定期演奏会 ホルスト「組曲『惑星』」

指揮＝富平恭平

管弦楽＝オーケストラハモン

合唱＝新国立劇場合唱団(6名出演)

日時：7月15日(月・祝)14:00 開演 1回公演

会場：すみだトリフォニーホール

主催：オーケストラハモン

⑥ 紀尾井シンフォニエッタ東京 定期演奏会 ロッシーニ「スターバト・マーテル」

指揮＝パオロ・カリニャーニ

- 管弦楽＝紀尾井シンフォニエッタ東京
 合唱＝新国立劇場合唱団（48名出演）
 日時：7月26日（金）19:00／27日（土）14:00 開演 2回公演
 会場：紀尾井ホール
 主催：公益財団法人新日鉄住金文化財団
- ⑦ 読売日本交響楽団 定期演奏会 ストラヴィンスキー「詩篇交響曲」
 指揮＝シルヴァン・カンブルラン
 管弦楽＝読売日本交響楽団
 合唱＝新国立劇場合唱団（80名出演）
 日時：9月3日（火）19:00 開演 1回公演
 会場：サントリーホール
 主催：公益財団法人読売日本交響楽団
- ⑧ 平成25年度文化庁次代を担う子どもの文化芸術体験事業
 指揮＝富平恭平
 合唱＝新国立劇場合唱団（30名出演）
 日時/会場：9月10日（火）/徳島県徳島市不動小学校
 11日（水）/小松島市南小松島小学校
 12日（木）/徳島市昭和小学校
 13日（金）/石井町高原小学校
 17日（火）/兵庫県南あわじ市立市小学校
 18日（水）/宝塚市西谷小学校
 19日（木）/姫路市上菅小学校
 主催：文化庁
- ⑨ 東京交響楽団 マクミラン「十字架上のキリストの最後の7つの言葉」
 指揮：大友直人
 管弦楽：東京交響楽団
 合唱＝新国立劇場合唱団（8名出演）
 日時/会場：9月28日（土）18:00 開演 1回公演 /サントリーホール
 9月29日（日）14:00 開演 1回公演 /ミューザ川崎シンフォニーホール
 主催：公益財団法人東京交響楽団
- ⑩ 新城市芸術鑑賞教室「新国立劇場合唱団コンサート in 新城」〈公演中止〉
 合唱＝新国立劇場合唱団
 日時/会場：10月16日（水）13:30 開演 1回公演 /新城市文化会館大ホール
 主催：新城市/新城市教育委員会
- ⑪ フランシス・プーランクのタペ プーランク「スターバト・マーテル」
 指揮＝鈴木雅明
 管弦楽＝東京フィルハーモニー交響楽団
 合唱＝新国立劇場合唱団（59名出演）
 日時：10月23日（水）19:00 開演 1回公演
 会場：東京オペラシティコンサートホール
 主催：公益財団法人東京オペラシティ文化財団
- ⑫ 平成25年度文化庁次代を担う子どもの文化芸術体験事業
 指揮＝富平恭平
 合唱＝新国立劇場合唱団（30名出演）
 日時/会場：10月30日（水）/香川県高松市立円座小学校
 31日（木）/観音寺市立常磐小学校
 11月 1日（金）/高知県本山町立嶺北中学校
 5日（火）/四万十市立中村小学校
 6日（水）/愛媛県八幡浜市立真穴中学校
 7日（木）/西条市立玉津小学校
 8日（金）/西条市立庄内小学校
 主催：文化庁
- ⑬ 平成25年度 土浦第五中学校芸術鑑賞会
 合唱＝新国立劇場合唱団（8名出演）
 日時：11月12日（火）13:00 開演
 会場：土浦市民会館大ホール

主催：土浦市立土浦第五中学校

⑭ 東京フィルハーモニー交響楽団 定期演奏会

ワーグナー「楽劇－トリスタンとイゾルデ」

指揮：チョン・ミョンフン

管弦楽：東京フィルハーモニー交響楽団

合唱＝新国立劇場合唱団（40名出演）

日時/会場：11月17日(日)13:00 開演 1回公演 /富山オーバードホール

11月20日(水)17:00 開演 1回公演 /アクロス福岡

11月23日(土・祝)15:00 1回公演 /オーチャードホール

主催：公益財団法人東京フィルハーモニー交響楽団ほか

⑮ トリノ王立歌劇場 特別コンサート ヴェルディ「レクイエム」

指揮＝ジャンンドレア・ノセダ

管弦楽＝トリノ王立歌劇場管弦楽団

合唱＝新国立劇場合唱団（35名出演）

日時：11月30日(土)14:00 開演 1回公演

会場：サントリーホール

主催：テレビ東京／朝日新聞社／ローソンHBMVエンタテイメント／ジャパン・アーツ

⑯ NHK 交響楽団 定期演奏会 プーランク「グロリア」・ベルリオズ「テ・デウム」

指揮＝シャルル・デュトワ

管弦楽＝NHK 交響楽団

合唱＝新国立劇場合唱団（100名出演）

日時：12月6日(金)19:00／7日(土)15:00 開演 2回公演

会場：NHK ホール

主催：NHK/公益財団法人NHK 交響楽団

⑰ 読売日本交響楽団 ベートーヴェン「交響曲第9番 合唱付」

指揮：デニス・ラッセル・デイヴィス

管弦楽：読売日本交響楽団

合唱＝新国立劇場合唱団（80名出演）

日時/会場：12月18日(水)19:00・19日(木)19:00 開演 2回公演 /サントリーホール

12月20日(金)18:00・21日(土)14:00 開演 2回公演 /東京芸術劇場

12月23日(月・祝)14:00 開演/横浜みなとみらいホール

12月25日(水)18:30 開演/東京オペラシティコンサートホール

主催：公益財団法人読売日本交響楽団ほか

⑱ 第57回NHKニューイヤーオペラコンサート

指揮：下野竜也

管弦楽：東京フィルハーモニー交響楽団

合唱＝新国立劇場合唱団（26名出演）

日時：1月3日(金)19:00 開演

会場：NHK ホール

主催：NHK/NHK プロモーション

(7) 新国立劇場研修所研修生等外部出演公演

① トウキョウ・モーツァルト・プレーヤーズ オペラ・プロジェクト第5弾「魔弾の射手」(演奏会形式)

日時：10月6日(日)15:00 開演

会場：三鷹市芸術文化センター風のホール

指揮：沼尻竜典

管弦楽：トウキョウ・モーツァルト・プレーヤーズ

出演：研修生5名、修了生1名

入場者数：598名

主催：公益財団法人三鷹市芸術文化振興財団/有限会社ミュージック・マスターズ

② 静岡国際オペラコンクールセミナー「オペラおもしろ講座 オペラって何だろう?～誕生から現在まで～」

出演：研修生15名

1)日時：12月8日(日)14:00 開演 1回公演

会場：静岡文化芸術大学講堂

入場者数：477名

2)日時：12月15日(日)14:00開演 1回公演

会場：しずぎんホール ユーフォニア

入場者数：377名

3)日時：12月22日(日)14:00開演 1回公演

会場：沼津市民文化センター小ホール

入場者数：360名

主催：静岡県／浜松市／静岡文化芸術大学／静岡国際オペラコンクール実行委員会

4. 国際文化交流公演等

(1) 国際交流公演等

(国際交流公演)

① 演劇 「アジア温泉」

芸術監督＝宮田慶子

作＝鄭 義信

演出＝ソン・ジンチュク

翻訳＝パク・ヒョンスク

出演＝勝村政信、成河、千葉哲也、キム・ジンテ、梅沢昌代、酒向芳、森下能幸、谷川昭一朗、ちすん、山中崇、チョン・テファ、ソ・サンウォン、キム・ムンシク、キム・ジョンヨン、カン・ハクス、イ・ボンリョン、チョン・ジュンテ、チョン・エヒョン、キム・ユリ、朴勝哲、江部北斗、キム・シユル

日時：6月11日(火)19:30、12日(水)19:30、13日(木)19:30、14日(金)19:30、15日(土)14:00/18:30、16日(日)15:00開演 7回公演

会場：芸術の殿堂 CJ 土月劇場 (大韓民国 ソウル)

入場者数：3,225人

主催：芸術の殿堂

共催：公益財団法人新国立劇場運営財団／国際交流基金

後援：在大韓民国 日本国大使館公報文化院

制作：芸術の殿堂／公益財団法人新国立劇場運営財団

(新国立劇場研修所研修生等出演公演)

① モスクワ国立バレエアカデミー創立240周年記念国際バレエ学校フェスティバル

『トリプティーク～青春三章～』

バレエ研修所長＝牧 阿佐美

振付＝牧 阿佐美

音楽＝芥川也寸志

出演＝新国立劇場バレエ研修所研修生及び予科生から選抜された者及び賛助出演者

第9期生 足立真里亜、関 晶帆、吉田早織、佐野和輝、吉岡慈夢

第10期生 木村優里、清水理那、森田理紗、山本達史

予科生 中島瑞生、赤井綾乃、横山柊子

賛助 阿部裕恵、栗原ゆう、高橋万由梨、中西夏未、清瀧千晴、中家正博

出演日時：11月6日(水)19:00、7日(木)19:00開演 2回公演

会場：クレムリン大会宮殿 (ロシア連邦 モスクワ)

主催：モスクワ国立舞踊アカデミー・国立クレムリン宮殿

後援：ロシア連邦文化省

支援：在ロシア連邦日本大使館 (日本の秋2013参加)

(新国立劇場バレエ団出演公演)

① バーミンガム・ロイヤル・バレエ「パゴダの王子」

出演＝小野絢子、福岡雄大

出演日時：2月27日(木)19:30、3月1日(土)19:30開演

会場：英国バーミンガム・ヒポドローム

主催：バーミンガム・ロイヤル・バレエ

(2) 海外劇場等との交流

- ・ オペラ・アメリカ及びオペラ・ヨーロッパ、アジア太平洋パフォーミング・アーツ・センター連盟(AAPPAC)の本部事務局と定期的に連絡を取り合い機関誌等の送付・受領を始め情報交換に努めた。また、新国立劇場の運営状況に関する統計資料の提供依頼に応じて、必要資料を提出した。
- ・ 通信による海外の劇場との情報交換に務め、また海外より当劇場訪問の際には劇場見学、質疑応答など交流の進展をはかった。

- ・ 新国立劇場のオペラやバレエ作品制作における海外の芸術家や劇場との連携協力を広く紹介するために、上演中のホワイエにて、オペラ公演「魔笛」の出演キャラクターのマネキン人形や「コジ・ファン・トゥッテ」の関連舞台写真を展示した。また「ナブッコ」「リゴレット」において、『国際連携プロジェクト』として、ヴェルディ生誕 200 周年記念・新国立劇場ヴェルディ作品舞台写真展を開催した。
- (3) 海外からの講師・研修生の受入れ
 - ・ 文化庁「外国人芸術家・文化財専門家招へい事業」により来日した芸術家 1 名の受入れを行い、バレエ研修所での講義や研修生への指導、情報交換などを実施した。
- (4) 海外からの訪問受け入れ
 - ・ 海外から劇場関係者など 6 カ国 7 団体 45 名の訪問受入れを行った。主な来訪者は以下のとおり。韓国からソウル・アーツ・センター（芸術の殿堂）のスタッフ、台湾から国立劇場スタッフ、ベトナム政府および国立劇場関係者、スウェーデン・ストックホルム市立劇場 CEO、アメリカ大使館関係者、カナダ大使館関係者。
- (5) 在日各国大使のオペラ・バレエ鑑賞プログラム
 - ・ 「在日各国大使のオペラ・バレエ鑑賞プログラム」を実施し、新国立劇場が、内外で高い評価を受けるオペラ専門劇場を有しており、質の高いオペラ・バレエを制作し、上演していることを国際的に発信した。また、芸術・文化面における新たな観点からの日本に対する理解の増進を図り、国際交流の振興に寄与した。実施公演と大使（公使等による代理出席含む）、文化機関の参加国等は以下のとおり。（公務により別日程でのご観劇を含む）
 - ①オペラ「ナブッコ」 5月19日（日）14：00開演 （10カ国 文化機関 3）
（大使）ベルギー、フランス、ドイツ、アイルランド、ポルトガル、ベネズエラ、オーストラリア、中国、韓国、シンガポール
（文化機関）イタリア、イギリス、スペイン
 - ②オペラ「リゴレット」 10月3日（木）19：00開演 （8カ国 文化機関 5）
（大使）国連大学、ベルギー、ドイツ、アイルランド、ラトビア、ノルウェー、ベネズエラ、バーレーン
（文化機関）イタリア、アメリカ、中国、イギリス、スペイン
 - ③バレエ「バレエ・リュス ストラヴィンスキー・イブニング」 11月13日（水）19：00開演
（13カ国 文化機関 4）
（大使）国連大学、ベルギー、EU、フィンランド、アイルランド、ラトビア、ノルウェー、スペイン、トルコ、イギリス、ベネズエラ、バーレーン、中国
（文化機関）イギリス、ドイツ、スペイン、中国
 - ④オペラ「死の都」 3月12日（水）19：00開演 （6カ国 文化機関 4）
（大使）国連大学、オーストリア、EU、フィンランド、アイスランド、ラトビア、スペイン、バーレーン
（文化機関）オーストリア、ドイツ、スペイン、イギリス
（※国名は欧州／北・中南米／オセアニア／アジアの、それぞれ英文国名アルファベット順）

【特記事項】

- ・ 文化庁芸術祭オープニング「尾高忠明指揮 新国立劇場が歌う バルシャザールの饗宴」に皇太子同妃両殿下の行啓があった。
- ・ バレエ「ペンギン・カフェ／シンフォニー・イン・C」静岡、御殿場公演については、公演の約 3 週間前に、新国立劇場バレエ団ダンサーによるワークショップを実施した。また、静岡公演主催者発行の機関紙が、ビントレー芸術監督及び静岡県出身の出演者（中田実里）にインタビューを行い、事前の告知を行った。
- ・ バレエ「新国立劇場バレエ団 クラシック・バレエ ハイライト 2014」は、姫路、和歌山公演において、大阪出身の出演者（長田佳世、福岡雄大）インタビューにより、朝日新聞大阪版にて公演の事前告知を行った。
- ・ 「白鳥の湖」新潟公演は、新潟市で行われた「Shakespeare THE SONNETS」と合わせて、新潟県が「新潟県舞踊芸術普及育成事業実行委員会」として主催し、助成金を得ての実現になった。
- ・ 「～フランス印象派ダンス～Trip Triptych」豊橋公演は、平成 25 年 4 月に開館した劇場のオープニング事業の一環として実施された。東海地方で発行されているエンターテインメント系フリーペーパーにインタビュー及び稽古場レポートを掲載し、事前告知の強化を図った。
- ・ 「Shakespeare THE SONNETS」北九州、大分公演については、福岡地方発行のエンターテインメント系フリーペーパー、及び大分公演主催者発行の機関紙にて、出演者インタビュー及び稽古場取材を行い、事前告知の強化を図った。

- ・ 演劇「象」兵庫公演については、読売新聞、朝日新聞のそれぞれ大阪版に関連コラムが掲載され、チケット販売強化につながった。また、アフタートークを実施し、多くの参加者を得た。
- ・ リーディング「『葵の上』ここで聴く三島由紀夫Ⅱ」は演劇研修所修了生を3名キャスティングして、三島由紀夫文学館のために制作、上演した。また、前日にワークショップ、終演後にアフタートークを実施した。
- ・ 演劇「OPUS／作品」水戸公演は、新国立劇場と同様に、舞台を四方から囲む客席スタイルでの上演となった。また、アフタートークを実施し、多くの参加者を得た。
- ・ 新国立劇場合唱団出演公演の⑩新城市芸術鑑賞教室については、台風の影響により公演中止となった。

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ ほぼ全演目でアンケート調査を実施した。入場時にキャスト表と共にアンケート用紙を配布し、終演後に粗品と引換に回収する「特別アンケート」を行う体制を整えた。また、通常、公演回数が10回以上となる演劇公演については、「ピグマリオン」以降の公演で特別アンケートを2回実施した。
- ・ 25年度（第68回）文化庁芸術祭の関連公演については、いずれも芸術監督が意欲的に取り組んだ作品で、観客の評価が高く、上演の成果が表れる舞台となった。
- ・ 大学との連携・協力によるアートマネジメント講座については、国内唯一のオペラ劇場である新国立劇場の職員が講師を務めることにより、現場を身近に知ることのできる講義として大変好評を得ることができた。また、財団職員にとっても、これまでの経験をまとめる良い機会となった。北海道教育大学、東京芸術大学、国立音楽大学においては講師を派遣しての講義を行うことができた。また、大阪音楽大学や北海道教育大学との間では、新国立劇場合唱団メンバーと学生合唱団による合同コンサートを地元で開催し、地域の方々にも喜んでいただくことが出来た。
- ・ 地域招聘公演においては、新国立劇場のオペラ部門として初めて公益財団法人びわ湖ホールと共催で公演を行うことができ、交流の観点から非常に意義があった。内容面でも、普段東京では聴く機会の少ないびわ湖ホールアンサンブルのメンバーを中心とした歌手たちによる舞台に対し、各方面から高い関心や支持が寄せられた。記者発表やプレトークのサポート等、びわ湖ホールとしっかりした協力体制を取ることができ、取組が券売に繋がったのも大きな成果である。
- ・ 全国公演については、文化庁「地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ」事業や音楽大学等との連携・協力協定の効果もあり、各ジャンルにおいて精力的な展開を実現することができた。各会場とも、主催者、観客から公演内容について高い評価を得ており、地方における芸術の鑑賞機会の提供に資することが出来た。また各主催者より、引き続き新国立劇場制作の質の高い舞台を提供してほしいとの要望があった。
- ・ 今年度も「高校生のためのオペラ鑑賞教室『夕鶴』」を尼崎市総合文化センターとの共催で上演した。多くの高校生がオペラを鑑賞し、関西においてもオペラの普及に資することができた。
- ・ 「ペンギン・カフェ／シンフォニー・イン・C」静岡、御殿場公演については、新国立劇場バレエ団ダンサーによるワークショップの実施や、ロビーにおけるバレエ衣裳の展示、キャストによる観客のお見送りなどを実施し、新国立劇場及びバレエ団に親しんでいただけるよう尽力した。
- ・ バレエ「新国立劇場バレエ団 クラシック・バレエ ハイライト 2014」は、地元出身者の出演を各媒体でアピールしたほか、苦戦の予想される平日の公演のチケット代を安価に設定し集客をはかるなど、主催者や地元と連携した販売促進活動を実施できた。
- ・ 「白鳥の湖」新潟公演はチケットがほぼ完売の上、主催者及び観客から高い評判を得、新国立劇場バレエ団の芸術性の高さをアピールできる好機となった。
- ・ 「～フランス印象派ダンス～Trip Triptych」豊橋公演は、主催者の企画として、出演者によるワークショップ等を事前に行うなど、関連企画の充実が図られた。
- ・ 「Shakespeare THE SONNETS」北九州、大分、新潟公演の3公演全てにおいてアフタートークの開催が実現し、各公演とも多くの参加者を得た。
- ・ 演劇「象」兵庫公演については、チケットは完売となった。山形公演については、苦戦の予想される平日の公演であったにも関わらず、入場率7割まで達成することが出来た。一義的にこれは主催者の営業力によるが、前年度から三作品目となり、新国立劇場の存在が地方においても徐々に浸透してきていることも一因として挙げられる。
- ・ リーディング「『葵の上』ここで聴く三島由紀夫Ⅱ」は、出演者4名のうち3名が演劇研修所修了生であり、演劇研修所の存在を広く知らしめる希少な機会となった。
- ・ 演劇「OPUS／作品」水戸公演は2回公演となったが、アフタートークを設定した回の入場率がより高く、上演に付帯する関連イベントの需要の高さが示された。
- ・ 新国立劇場合唱団出演公演関係では、昨年に引き続き、NHK交響楽団や東京フィルハーモニー交響

楽団、東京交響楽団、読売日本交響楽団などの著名オーケストラや、世界的に活躍する指揮者との共演による各種演奏会など積極的に外部へ出演した。また、文化庁の平成 25 年度「次代を担う子どもの文化芸術体験事業」を受託し、兵庫県、四国四県の小中学校等計 14 校を巡回し、多くの子供たちに生の歌声に触れる機会を提供するなど、多彩な活動を展開した。

- ・ 次年度以降も国際交流公演や全国公演、全国各地との共同制作公演、地域招聘公演等の事業を推進し、全国にオペラ、バレエ、現代舞踊、演劇の魅力を伝えるとともに、全国地域で上演されている優れた現代舞台芸術のプロダクションを紹介し、新国立劇場の存在意義を示す一助としたい。
 - ・ 演劇「アジア温泉」(韓国公演)においては、内容が観客にとってもよく届いているのが実感された。東京公演中に熟成され整理された舞台は、この韓国公演において、作品本来の、のびやかな魅力を発揮した。また、これまで日韓交流を続けてきた成果が実を結んで、国際交流基金及び芸術の殿堂の助力を得、より多くの方に観ていただくことができた。
 - ・ 新国立劇場バレエ研修所研修生等が出演したモスクワ国立バレエアカデミー創立 240 周年記念国際バレエ学校フェスティバルにおいては、世界の一流のバレエ学校と直接交流を持つことにより、バレエ研修所の研修生が、これらの学校・生徒から、今後の研鑽のために有用な多くの技術的、精神的な知識・経験を得ることができた。また、新国立劇場バレエ研修所がバレエの聖地であるロシアで日本の文化芸術の素晴らしさを披露することで、新国立劇場バレエ研修所の存在及びその研修内容の高さを国内外に広く知らしめる機会ともなった。出演者は、日本の若手ダンサーの代表としてロシアのステージに立つことをそれぞれが自覚し、ロシアでの滞在期間中、技術の向上とともに精神的な強さも得ることができた。また日本人による音楽や振付を世界に発表する機会ともなり、多くの反響を得ることができた。
 - ・ 国際連携協力室では新国立劇場が加盟するオペラ・ヨーロッパやオペラ・アメリカ、アジア太平洋パフォーミング・アーツ・センター連盟等との情報交換や、その他の海外の劇場との情報交換によって得られた雑誌や広報媒体を情報センター閲覧室にて一般にも情報提供している。また、海外から多くの芸術家やその他劇場関係者等の訪問を受入れ、情報交換を行うとともに、研修生育成にも寄与し、新国立劇場の海外での存在感を高めることができた。今後とも諸外国及び各国の劇場との国際文化交流の一層の発展を図り、引き続き推進していくこととしている。一方、ヴェルディ生誕 200 周年記念展示では、過去の貴重な舞台写真を展示することにより、アーカイブの効果的な利用と成果を得ることができた。
 - ・ 「在日各国大使のオペラ・バレエ鑑賞プログラム」については、参加した各国大使が本プログラムの実施の意義を高く評価しており、自身のブログやツイッターで新国立劇場公演の質の高さを称賛するなど、プログラムの目的に叶う成果が上がっている。
- 見直し又は改善を要する点
- ・ 文化庁芸術祭オープニングの受託公演については、毎年 5 月から 6 月にかけて決定されるため宣伝期間が短く集客が難しいが、可能な限り様々な広報宣伝活動を展開する必要がある。
 - ・ 全国公演では、平日公演での集客力が休日に比して低いことが近年の課題となっているが、今後も主催者や地元新聞社と提携した積極的な広報活動や協力をはかっていくとともに、地域の文化振興に資するアウトリーチ活動等を更に充実させ、集客へと結びつけていきたい。

《24年度評価結果への対応》

【評価】

(文科省評価委員会)

- ・ 地方との連携に関しては、一部に改善は見られるが、より多くの国民にナショナルセンターの芸術活動に接してもらえるよう、全国ネットワークを広く構築して、各地での事業、広報活動に積極的な取組が望まれる。(①)
- ・ オペラでは鑑賞教室は地方でも行われているが、まだ地方での本格的な公演は少ない。装置を簡略化するなどして、積極的に地方公演の機会を増やす努力をしてほしい。(①)
- ・ 演劇の「まほろば」の地方公演など一部に成果は見られたが、ナショナルシアターとしての使命から見ると十分ではない。(①)
- ・ バレエは、いかにも子供向けなのは疑問である。数少ない地方公演なのだから、真にレベルの高い作品を持っていくべきである。(①)
- ・ 7 大学との間で連携・協力に関する協定が締結されている。今後は、本協定を実のあるものにすべく、取り組まれない。(②)

(振興会評価委員会)

- ・ 新国立劇場の質の高い公演を東京以外の地にどのように広げていくべきかが今後の課題であろう。長期的には、ツアーに出ることを前提にしたキャストや演目、簡素な舞台美術を準備して地方公演を行うことでファンの裾野を広げ、地方からファンが東京公演に押し寄せるような状況を作ることも、望まし

いのではないか。(①)

【対応】

①地方公演拡充の方策の検討

新国立劇場では、より広い範囲の国民にナショナルセンターとしての芸術活動に接してもらえるよう、全国公演の展開に精力的に取り組んでおり、特に近年は文化庁「地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ」事業の効果もあって、23年度は8会場のところ、24年度は13会場に伸びており、一層の拡充が進んでいる。24年度は、例えば演劇では、「まほろば」のほか、国際社会が抱える問題に正面から向き合う内容の海外同時代作品を翻訳上演した「負傷者16人」、子どもと大人が一緒に観て楽しめる演劇を目指して企画された作品「音のいない世界で」も合わせ計3演目を、東日本大震災の被災地である東北地方の3会場を含む全国の延べ7会場で上演、25年度も「象」、「OPUS/作品」の2演目を延べ3会場で上演した。引き続き、他のジャンルでもナショナルシアターとしての使命にふさわしい、活発かつ充実した全国展開に取り組みたい。

オペラ公演に関して、新国立劇場での上演と同等規模のオペラのプロダクションを全国の劇場に紹介していくことは技術的にも難しい課題であり、装置の簡略化だけでなく、例えば演奏会形式での上演を検討する等、工夫を重ねて機会拡充を図っていきたい。今後もツアーを考慮に入れた制作活動を心がけるとともに、全国の会館と緊密に連絡を取り合い、ネットワークを広げて行く所存である。

バレエ公演の内容に関して、24年度は「こどものためのバレエ劇場」の各地域での上演を中心に行ったが、青少年向けの公演においても常に本公演と同等レベルの内容を目指しており、出演者はバレエ団のプリンシパルを含むソリスト級のダンサーを中心に構成されている等、レベルの高い舞台を提供している。また、青少年向けの公演に加えて、全幕ものの作品や古典作品から見どころを抜き出したバレエ・コンサート、さらには現代作品の上演にも取り組んでおり、25年1月の「シンデレラ」新潟公演や25年5月の「ペンギン・カフェ」静岡・御殿場公演、26年1月の「新国立劇場バレエ団 クラシックバレエ ハイライト 2014」厚木・姫路・和歌山公演、26年3月の「白鳥の湖」新潟公演などを行っている。

なお、上演地域の地方公共団体等が主催する全国公演の上演内容については、国立の劇場として上演地域に貢献するべく、主催者からの要望に応じた内容や演目に対応していくことを第一に考えている。

②大学との連携協力の推進

大学との連携協力に基づく活動としては、東京藝術大学、国立音楽大学、昭和音楽大学、大阪音楽大学、北海道教育大学と新国立劇場との間で、劇場の職員による「アートマネジメント講座」やワークショップを行なっているほか、25年11月に東京藝術大学が新国立劇場オペラパレスにおいて藝大オペラ特別公演「秘密の結婚」を上演した際の広報面・施設利用条件面での協力、25年8月には北海道教育大学との共催による同大学でのコンサート「北の大地にひびく合唱の饗宴」開催等、連携協力関係を活かし双方にとって意義のある多様な取組を行っている。引き続き種々の取組を実施したい。

I 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するため
とるべき措置

伝統芸能の公開及び現代舞台芸術の公演

快適な観劇環境の形成

快適な観劇環境の形成 p.127

- 快適で安全な観劇環境の提供、外国人利用者への対応 p.132
- 多様な購入方法の提供によるチケット販売の促進 p.137
- 解説書等の作成、音声同時解説・字幕表示の活用、公演説明会・施設見学等の実施 p.138
- 意見・要望等の把握と対応 p.140

広報・営業活動の充実

広報・営業活動の充実 p.142

- 効果的な広報・営業活動の展開 p.150
- 会員組織の運営、会員向けサービスの充実 p.155

劇場施設の使用効率の向上等

劇場施設の使用効率の向上等 p.159

2- (3) 快適な観劇環境の形成

《中期計画の概要》

(5) 快適な観劇環境の形成

観客本位の快適な環境の形成のため、次のとおりサービスの向上に努め、観客の満足度の向上を図る。

- ア 高齢者、身体障害者、外国人等の利用にも配慮した快適で安全な劇場施設の整備、各種サービスの充実
- イ 入場券販売において、利用者にとって利便性の高い多様な購入方法を提供
- ウ 解説書等の作成、音声同時解説や字幕表示、公演内容の説明会等などのサービスの提供
- エ アンケート調査や劇場モニターの活用等

《年度計画》

2 伝統芸能の公開及び現代舞台芸術の公演

(5) 快適な観劇環境の形成

- ア 観客の要望等を踏まえ、ロビー内等の案内表示の整備を行うとともに、売店・レストラン等におけるサービスの充実や観劇時のマナーの呼びかけを行い、観客にとって安全で快適な環境を提供する。
また、外国人の観客に対し、英文等パンフレットの配布など各種情報の提供に努める。
- イ 入場券販売において、インターネットや電話など、観客の利用形態に応じた多様な購入方法を提供し、販売の促進を図る。
- ウ 公演内容等の理解を促進するため、次のサービス等を提供する。
 - ① 解説書等を作成し、その内容の充実に努める。
 - ② 公演内容に応じて音声同時解説や字幕表示を行う。
 - ③ 鑑賞団体等に対し、公演内容の事前説明会や施設見学を行う。
- エ ホームページ、ご意見箱等を通じて寄せられる意見の受付や、観客へのアンケート調査や劇場モニターの活用等により、観客等の要望、利用実態等を把握し、サービスの向上に活用する。寄せられた意見・要望については、迅速な対応を図るとともに、対応状況の把握・管理、職員への周知を行い、サービスの向上に努める。

《実績》

1. 快適で安全な観劇環境の提供、外国人利用者への対応

(本館)

- ・ 大劇場内トイレの洋式トイレの数を増やし快適性を高めた。
- ・ 大劇場 3 階上手ロビーに、芸術文化復興支援基金への寄付金付き飲料自動販売機を設置し、利便性を高めた。
- ・ 地震等緊急時に備え避難訓練等を実施した。
- ・ 観客の観劇マナー向上のため、チラシ・ポスターやホームページ、アナウンス等により呼びかけを行った。
- ・ 国立劇場のマスコットキャラクター「くろごちゃん」の着ぐるみを利用し、観劇マナーの呼びかけや、劇場ロビーでの観客との記念撮影を行い、親しみやすい国立劇場のイメージを発信した。
- ・ 外国人利用者のために、劇場ロビー等の英語による案内表示類について統一感をもたせ、分かりやすくした。
- ・ 外国人観光客への情報発信・公演周知活動をさらに強化するため、英語版、中国語版（繁体字・簡体字）、韓国語版に加えて、新たにフランス語版のコンパクトガイド（歌舞伎・文楽の紹介リーフレット）を作成し、都内のツーリストインフォメーションセンター等に掲出を依頼した。
- ・ 大劇場ロビーにおいてインフォメーションディスプレイを活用し、次回公演の案内や観劇マナー、緊急時の避難導線等を映し出し、観客の注目を集めた。
- ・ 7 月歌舞伎鑑賞教室公演で、大劇場前庭に冷却ミスト機を設置し、来場者の熱中症対策を行った。
- ・ 演芸場の 2 階掲示板の更新及び補修を行い、美観を向上させた。

(能楽堂)

- ・ 地震時等における客席天井脱落防止対策の改修工事を行い、建物の耐震性を高めた。
- ・ 館内に監視・防犯カメラを設置し、来場者及び施設の安全性を高めた。
- ・ ロビーに車椅子の方や子供でも使用できるバリア・フリー型ウォータークーラーを設置し、利便性を高めた。
- ・ 客席内（GB席）通路の段差部分に表示を付け、観客の注意を喚起して安全確保に努めた。
- ・ 英文による演目解説リーフレット、年間公演予定表、施設紹介パンフレットの作成・配布、英語による案内表示、場内アナウンスなどのサービスを提供し、引き続き外国人の利用環境の充実を図った。
- ・ 座席字幕装置を活用して、4月国立能楽堂開場30周年記念特別企画公演（現代語による上演）及び7月・2月企画公演（蠟燭能）を除く48公演で日本語（詞章）・英語の2チャンネル方式で字幕表示を実施した。また、「能楽鑑賞教室」では中・高校生向けチャンネルを、「夏休み親子で楽しむ能の会」「夏休み親子で楽しむ狂言の会」では子ども向けチャンネルを追加し、分かりやすい解説を表示して、観客層に合わせたきめ細かい字幕表示を実施し好評を得た。

(文楽劇場)

- ・ 地震時等における客席天井脱落防止対策の改修工事を行い、建物の耐震性を高めた。
- ・ 文楽劇場の文楽公演では、引き続き英語に加え、中国語（簡体字）、韓国語の解説リーフレットを作成・配布した。

(国立劇場おきなわ)

- ・ レファレンスルームに単独のクーラーを設置したことで、資料の適切な保存環境の整備と利用者の快適性を高めた。
- ・ 共通ロビーのカフェで、調理にガスが使用できるようにして、快適な劇場環境の提供に努めた。
- ・ 共通ロビー及び楽屋口に担架を配置し、緊急時に備えた。
- ・ 共通ロビーの照明器具の一部をLED照明器具に取り替えて、照度の高さと省エネに努めた。

(新国立劇場)

- ・ 劇場設備等の環境整備として、オペラ劇場及び中劇場の客席椅子や、歩道面の石張りの補修等を行った。
- ・ 避難訓練を徹底し、地震等緊急時に備えた。
- ・ オペラ劇場の公演時に劇場内で人数限定のブッフェ「パレスサロン」を行ったほか、各上演作品の雰囲気に合わせて飲食物やオリジナルメニューを提供した。
- ・ 公演中の劇場ホワイエにて、公演関連情報の掲示や関連資料の展示、関連映像の上映を行い、観客の理解促進や興味喚起に役立てた。また、上演演目に合わせて、ホワイエ全体の装飾、クリスマスイベント、キャラクターグッズの販売等を企画し、来場者へのサービスを提供した。
- ・ 2012/2013シーズンオペラ・バレエのシーズンシート又はシーズンセット券購入者を対象に、出演者との懇親をはかるイベントとして、「シーズンエンディングパーティー」を行った。
- ・ 平成25年10月～26年3月にかけて「ご来場者累計300万人達成ありがとうキャンペーン」を実施した。

2. 多様な購入方法の提供によるチケット販売の促進

(国立劇場)

- ・ インターネット・チケット販売システムにおける座席選択機能について、25年度から全公演でサービスの提供を開始した。
- ・ インターネット販売においてスマートフォンでの販売サービスを25年4月23日から開始した。
- ・ 親子を対象とする公演のインターネット販売では、本館・演芸場・能楽堂の各公演は、会員及び一般発売に先行して発売した。文楽劇場の公演は一般発売に先行して会員発売日と同日に発売した。
- ・ チケットセンターホームページに各館の親子企画を紹介するサイトを設置し、さらに、振興会トップページのバナーから誘導した。

(新国立劇場)

- ・ 新国立劇場では、新国立劇場のホームページでインターネット・チケット販売の入り口を、見やすく分かりやすいデザインに更新した。

3. 解説書等の作成、字幕表示・音声同時解説の活用、公演説明会・施設見学等の実施

- ・ 全ての自主公演に公演内容に応じて公演解説書(プログラム)を作成した。

- ・ 各公演の内容にあわせて字幕表示を活用し、公演内容への一層の理解を促した。

(本館)

- ・ 本館では聴覚障害者向けに小型モニターを利用した字幕表示の試験的運用を行った。(7月歌舞伎鑑賞教室)
- ・ 歌舞伎公演・文楽公演については、イヤホンガイドによる音声同時解説を実施した。
- ・ 22年度より開催している社会人向け講座シリーズ「国立劇場 in 丸の内ー日本の伝統芸能を知るー」の第10回～第16回を実施した(会場:marunouchi cafe SEEK)。これまで取り上げてきた歌舞伎、文楽、能楽に加え、第16回講座で初めて大衆芸能をテーマに取り上げ、講座内容の充実を図った。
- ・ ホテルコンシェルジュを対象に施設見学・公演鑑賞会を実施した。

(能楽堂)

- ・ 能楽堂では、公演内容等の理解を促進するため解説書「国立能楽堂」(月刊・年12回)を作成し、全自主公演の解説を施した。また、公演内容に応じて、「能楽鑑賞教室」「夏休み親子で楽しむ能の会」「夏休み親子で楽しむ狂言の会」ではイラスト入りの分かりやすいパンフレットを作成し、無料で配布した。
- ・ 4月国立能楽堂開場30周年記念特別企画公演の新作能「世阿弥」上演に際しては、横尾忠則デザインによる特別ポスター・特別チラシを作成し、別冊プログラムを作成・販売した。

(国立劇場おきなわ)

- ・ 公演解説書ステージガイド「華風」(月刊)を作成し、寄席や三線音楽公演を除いたすべての公演に字幕表示を実施した。

(新国立劇場)

- ・ 新国立劇場では、オペラ公演11公演(高校生のためのオペラ鑑賞教室を含む)で字幕表示を行った。
- ・ オペラ、バレエ公演にて、英文によるキャスト表、あらすじを用意し、配布した。
- ・ オペラ、バレエ公演の終演後に、劇場内で次期芸術監督による、2014/2015シーズンの演目に関する説明会を行った。
- ・ 8月に東京オペラシティと共催した「アーツシャワー」にて、子供を対象としたバックステージツアーとオペラ研修所修了生によるコンサート「キッズステージウォーキング&ミニコンサート」を開催し、好評を得た。

4. 意見・要望等の把握と対応

- ・ 振興会ホームページや劇場内のご意見箱に寄せられた意見・要望・苦情等に対しては、25年4月に新設した総務課お客様相談室において一元的に把握し、関係部署と連携し迅速に対応した。また、これらの対応に関しては、役員へ報告の上、社内LANを使用して全職員に周知するとともに、要望・苦情等を踏まえた業務改善及びサービス向上に努めた。

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

(本館)

- ・ 大劇場内トイレの洋式トイレの数を増やし快適性を高めることができた。
- ・ 総務課お客様相談室が総括することにより、法人全体として意見・要望等に対する回答の迅速化が図られ、意見・要望等を踏まえて適切に観客サービスや劇場内設備の改善等に反映させた。

(能楽堂)

- ・ 能楽堂では、座席字幕装置を活用して、4月国立能楽堂開場30周年記念特別企画公演(現代語による上演)及び7月・2月企画公演(蠟燭能)を除く48公演において日本語(詞章)・英語の2チャンネル方式で字幕表示を実施した。また、「能楽鑑賞教室」では中・高校生向けチャンネルを、「夏休み親子で楽しむ能の会」「夏休み親子で楽しむ狂言の会」では子ども向けチャンネルを追加し、分かりやすい解説を表示して、観客層に合わせたきめ細かい字幕表示を実施し、好評を得た。

(国立劇場おきなわ)

- ・ 国立劇場おきなわでは、各地の観光協会等との協力により、公演や演目に因んだ物産品等をロビーで販売したところ、公演の賑わいとなって来場者にも好評であった。

(新国立劇場)

- ・ 新国立劇場では、劇場支配人を公演会場に配置し、劇場要員が相互に綿密なコミュニケーションをとる

ことにより、観客の視点に立ったサービスの提供を心掛けた。

- ・ 公演説明会、施設見学等は、普段できない体験ができる機会として参加者に好評であった。また、参加者の舞台に対する興味・関心を高め、団体観劇をはじめとする集客に寄与する側面も大きいことから、今後とも積極的に実施し、来場者の増加と普及に努めていきたい。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・ 地震等緊急時の安全確保のため、さらに施設・備品類について見直しを図る。

《24年度評価への対応》

【評価】

(文科省評価委員会)

- ・ 公演事業における職員のホスピタリティ、助成事業における手続きの簡素化など、お客さま視点での業務の見直しに、引き続き、努力してほしい。(①)
- ・ 劇場内のアナウンスについては、観客が芸術を楽しめるよう、(携帯電話だけでなく、音の鳴る他の機器の使用についても注意喚起するなど ※文化庁に確認の上、振興会にて補足) 状況に応じてより適切な対応に努められたい。(①)
- ・ 今後、バレエ公演における字幕表示の活用の検討が望まれる。(②)

(振興会評価委員会)

- ・ 国立劇場の公演は、各分野とも長時間の公演が多い。東京などでは、近郊から劇場を訪れる人たちの帰宅時間の問題はあるが、ゆっくり食事ができる休憩時間の設定など、今後も観客の側に立った工夫を重ねてほしい。(①)
- ・ 託児サービスは、劇場のイメージを向上させる働きもあり、その定着を評価する。将来的には、既に一部の劇場にあるような防音のガラス張りの客席や「親子観劇ブース」などを設けることも考慮できないか。(①)
- ・ 今後も施設のバリア・フリー化を進める上で、様々なところに目配りし、改善策を検討する必要がある。(①)
- ・ 各劇場の整備が効果を上げつつあり、能楽堂の座席に設置した字幕も活用されている。新しい歌舞伎座でも同様の字幕装置が始まったが、その効果等を検証し、大劇場での歌舞伎公演などでの導入の可否を検討できないか。(②)

【対応】

①観劇環境・サービスの改善に向けての取組

(伝統芸能各館)

国立劇場各館において、利用者にとって安全で快適な環境となるよう、ロビーに設置したご意見箱などを通して観客の意見を聴取し、その意見を踏まえてトイレの改修など必要な施設設備の整備を行っている。また、チケット購入における利便性の向上を図るため、25年4月からスマートフォンでの購入サービスを開始した。また、インターネット販売における座席選択機能は、25年度の公演から、国立劇場各館のほぼ全ての公演で発売初日から座席選択を利用できるようになった。

劇場内のアナウンスについては、各館とも、携帯電話や時計のアラーム等、音の出る機器について電源を切る旨アナウンスにてお願いをしている。また、本館では、周囲の観客に迷惑がかかる可能性のある行為について、案内係が個別に口頭で注意しているが、今後は開演前の客席において口頭で観劇マナーに関する注意喚起を行うことを検討する。

公演時間・休憩時間の設定について、本館では、歌舞伎公演において、2回公演や終演時間がかなり遅い公演を除き、ゆっくり食事をしていただけるように、23年度からは35分休憩にしている。文楽公演での食事時間の休憩についても、上演時間に留意しながら、引き続き可能な限り30分とするよう努める。能楽堂では、休憩時間・食事時間の設定について、開演時間の1時間前から開場することで、観劇前にゆっくり食事ができるよう配慮し、公演中は20分休憩を1回設定することとしている。

親子観劇用の設備として、本館では、今後予定している本館施設の改修時に設置の是非を検討する。国立劇場おきなわでは、子ども連れ観劇者には2階の防音効果のある親子観覧室を案内している。

国立劇場おきなわでは、観客からの要望が多かったウォーターサーバーの設置を開始したほか、公演に関連した特大パネルの設置や物産展の開催にも努めている。また、案内スタッフの制服にかりゆしウェアを採用し、沖縄らしい心遣いを常に自覚するよう心掛けている。

(新国立劇場)

劇場内のアナウンスは演目内容が損なわれないよう十分に注意することが重要であることから、内容を吟味して、現在では音の鳴る機器の電源を落とすこと、写真・録音の禁止、座席の乗り出しに注意を喚起する内容を放送している。さらに中劇場、小劇場では直接場内を回っての声がけをしている。

施設のバリア・フリー化については、今後とも観客の要望等を把握し、一層の改善策を検討したい。なお、新国立劇場の最寄り駅である初台駅を管轄する京王電鉄株式会社により、同駅中央口から、従来階段を経由する必要のあった甲州街道北側の渋谷区道までエレベーターが26年度中に新設される予定となっておりバリア・フリー化の推進に資することが期待されている。

②字幕表示導入の拡大の検討

歌舞伎公演の字幕について、6月と7月の青少年を対象とした「歌舞伎鑑賞教室」においては、舞台両端に電光掲示板を設置し、義太夫の詞章等を表示している。今後は、他劇場での利用状況も参考にしつつ、字幕装置の導入について様々な環境条件を考慮し、より効果的な方式を検討したい。

(新国立劇場)

場内の字幕による内容説明や注意喚起に関しては、一方で観劇の雰囲気損なわれるという理由から不快感を抱く観客もあり、現在、そのような観客の希望や演出効果への影響に鑑みて上演中の対訳表示以外には使用していない。

なお、公演内容への理解を助けるため、新国立劇場では充実した内容の公演プログラムを販売するばかりでなく、希望する全ての観客が手に取ることのできる無料の配布物やロビー内掲示等を活用することによって、公演内容理解の助けとしているところである。

<1>快適で安全な観劇環境の提供、外国人利用者への対応

1. 設備等の環境整備

(本館)

- ・ 大劇場内トイレの洋式トイレの数を増やし快適性を高めた。
- ・ 大劇場ロビーにおいてインフォメーションディスプレイを活用し、次回公演の案内や観劇マナー、緊急時の避難導線等を映し出し観客の注目を集めた。
- ・ 7月歌舞伎鑑賞教室公演で、大劇場前庭に冷却ミスト機を設置し、来場者の熱中症対策を行った。
- ・ 大・小劇場の客席については、安全性に留意し、破損部の補修・交換等、随時保守を行った。
- ・ 大劇場3階上手ロビーに、芸術文化復興支援基金への寄付金付き飲料自動販売機を設置し利便性を高めた。
- ・ 大劇場エスカレーター入口へロープパーティションを配置し、混雑時の導線確保による安全対策を図った。
- ・ 外国人利用者のために、劇場ロビー等の英語による案内表示類について統一感をもたせ、分かりやすくした。
- ・ 演芸場の2階掲示板の更新及び補修を行い、美観を向上させた。

(能楽堂)

- ・ 地震時等における客席天井脱落防止対策の改修工事を行い、建物の耐震性を高めた。
- ・ ロビーに車椅子の方や子供でも使用できるバリア・フリー型ウォータークーラーを設置し、利便性を高めた。
- ・ 客席内（GB席）通路の段差部分に表示を付け、観客の注意を喚起して安全確保に努めた。
- ・ 能楽堂の建物は能楽の幽玄な世界にふさわしい建築であり、観能の興趣をさらに醸成するよう、引き続き夜間のガーデンライトアップや庭園管理に努めて景観を保持した。

(文楽劇場)

- ・ 地震時等における客席天井脱落防止対策の改修工事を行い、建物の耐震性を高めた。
- ・ 1階エントランスロビーと3階図書閲覧室のトイレについて、便座の洋式化と温水洗浄便座の設置を進め、快適性を高めた。

(国立劇場おきなわ)

- ・ レファレンスルームに単独のクーラーを設置したことで、資料の適切な保存環境の整備と利用者の快適性を高めた。
- ・ 共通ロビーの照明器具の一部をLED照明器具に取り替えて、照度の高上と省エネに努めた。

(新国立劇場)

- ・ オペラ劇場及び中劇場の客席椅子について、観劇環境の向上及び予防保全の観点から補修を行った。
- ・ 劇場の外構は、建物周囲の地盤沈下による塀・車路の亀裂や歩道面に段差が生じたため、歩道面の石張り補修等を行った。

2. 観客サービスの充実

①売店、レストランにおけるサービスの向上

(本館)

- ・ 毎月の連絡会議において売店・食堂を運営する業者と意見を交わしながら営業方法の工夫に努めた。
- ・ 食堂に対して、各歌舞伎の公演内容に合わせたお弁当の考案を求め、魅力的なメニューの提供に努めた。
- ・ 大劇場2階食堂では、壁面に季節に合わせた装飾を行い、華やかな雰囲気の創出に努めた。
- ・ 文楽公演では、終演後、次の部を引き続き観劇する観客のため、2階・3階の食堂・喫茶を継続して営業し対応した。
- ・ 公演内容にちなんで、各地の観光協会等の協力により、劇場ロビー内に特設会場を設けて物産品等を販売した。

岡山県井原市物産展 10/3～10/27（10月歌舞伎公演「春興鏡獅子」にちなんで）

静岡県沼津市物産展 11/3～11/26（11月歌舞伎公演「伊賀越道中双六」にちなんで）

- ・ 特別メニュー・商品類の販売、物産展の開催、掲出については、場内看板やホームページで周知し、利用者の関心が得られるよう工夫した。
- ・ マスコットキャラクター「くろごちゃん」のぬいぐるみ、ぼち袋を国立劇場オリジナルグッズとして作成し、劇場内売店や外部のイベント時において販売した。

(能楽堂)

- ・ 国立能楽堂収蔵の能面・能装束等をデザイン化したオリジナルグッズ（絵はがき、クリアファイル、一筆箋、等）の販売を能楽堂内売店及び国立劇場売店で継続した。
- ・ 食堂、売店に関するアンケート調査を10月と3月に実施して利用者の要望等を収集し、調査結果について関係部署、食堂・売店業者間で意見交換を行って、一層のサービス向上に努めるよう指導した。
- ・ レストランは公演状況に応じて開場前及び終演後も営業を行い、また売店は、公演中は一般の来場者でも買物ができるようにして、利用者の利便を図った。また、開場30周年記念の特製弁当を限定販売した。

(文楽劇場)

- ・ 食堂について、運営業者と意見を交わしながら一層のサービス向上に努めた。
- ・ ホームページに食堂のお勧めメニューを掲載して、利用者の利便性向上を図った。
- ・ 売店についても、新商品の開発を進めるなど、観劇の記念となる商品の拡充を進めた。

(国立劇場おきなわ)

- ・ 自主公演や貸劇場公演における集客情報等を、カフェ・ビュッフェを運営している業者に提供し、サービス向上に努めた。
- ・ 共通ロビーのカフェで、調理にガスが使用できるようにして、飲食サービスの向上に努めた。

(新国立劇場)

- ・ オペラ劇場での公演時に、劇場内で人数限定のbuffet「パレスサロン」を行った。
- ・ 劇場内のbuffetにて、「くるみ割り人形」での「あまおうのカクテル」、「夜叉ヶ池」での「わらび餅」など各上演作品の雰囲気に合わせて飲食物やオリジナルメニューを提供した。

②その他の観客サービスの向上

- ・ 一年の幕開けを寿ぎ、各館で正月のイベントを実施した。
 - 本館：鏡開き（1月3日）、曲芸・囃子（1月3日）、獅子舞（1月3日～7日）、手拭いまき（1月3日～27日）。また、ロビーには繭玉をあしらった口上看板や大凧、劇場正面には積樽を飾り、初春の晴れやかな雰囲気を演出した。
 - 演芸場：鏡開き（1月2日）、獅子舞（1月2日～7日）、手拭いまき（1月2日～7日）。また、階段に啓翁桜を飾り（1月3日～7日）、ロビーには繭玉をあしらった。また、正面入口には積樽を飾り、舞台上に松竹梅のセットを配置し（1月2日～7日）、初春の晴れやかな雰囲気を演出した。
 - 能楽堂：12月18日定例公演で、番組終了後に観客が若手出演者とともに能「猩々」の一節を誦い一年を締めくくる年末特別企画「みんなで謡おう」を実施した。
1月7日定例公演で、番組終了後に観客が若手出演者とともに能「高砂」の一節を誦い新年を寿ぐ新春特別企画「みんなで謡おう」を実施した。
1月30日まで舞台に注連をはり、お正月の雰囲気を楽しみいただいた。
 - 文楽劇場：黒門市場からの「にらみ鯛」授与式及び鏡開き（1月3日）、手拭いまき（1月3日～10日）、十日戎の宝恵駕行列への参加及び福娘からのロビーでの福笹授与式（1月10日）。正面入口に装飾看板、ロビーには繭玉、客席天井には「にらみ鯛」と干支の絵の大凧を飾り、初芝居の雰囲気を盛り上げた。
 - 国立劇場おきなわ：1月琉球舞踊公演「新春琉舞名人選」において、来場者計200名に呈茶を実施し、幕間に抽選による観客へのお年玉プレゼント（カレンダー、劇場グッズなどの詰め合わせ）を行った。

(本館)

- ・ 国立劇場により親んでもらうため、「国立劇場さくらまつり」を開催した（25年3月29日～4月3日、26年3月28日～4月6日）。また、一般社団法人千代田区観光協会主催の千代田のさくら写真コンクールに協賛し、コンクール受賞者を6月歌舞伎鑑賞教室公演に招待するなど、さくらまつりを通して地域との連携を図った。

- ・ 国立劇場オリジナルキャラクターの着ぐるみ「くろごちゃん」を活用し、歌舞伎公演・特別イベント時を中心に、初日や中日等にロビーにて公演案内等のチラシの配布や土産品等の紹介をしたほか、観客と共に記念写真を撮る等、観客を和ませ好評を得た。また、演目ゆかりの地のマスコットキャラクターを招待し、「くろごちゃん」とともに観客サービスを行った。
- ・ 観客の観劇マナー向上のため、チラシ・ポスターやホームページ、アナウンス、「くろごちゃん」の着ぐるみの利用等により、観劇マナーの呼びかけを行った。
- ・ 7月の親子のための歌舞伎教室時に、「くろごちゃん」を解説「歌舞伎のみかた」において出演者として舞台上に登場させ、親しみやすい国立劇場をアピールした。また、劇場ロビーにたちいりハルコデザインによる葛の葉のイラストを使った撮影コーナーや、くろごちゃんのイラストを使ったぬりえコンテストを実施するなど観客サービスに努めた。
- ・ 10月歌舞伎公演では「春興鏡獅子」を上演することから、国立劇場のシンボルである「鏡獅子」像の制作者にゆかりある小平市平櫛田中彫刻美術館の協力を得て、「鏡獅子」像の制作過程のパネルや作品を展示したミニ彫刻美術館を開催した。また美術館長の解説によるミニ美術館鑑賞ツアーを実施した。(参加人数30名)
- ・ 歌舞伎・文楽において託児サービスを行い、観客の利便を図った。また声明・邦楽等静寂を必要とする短期の公演でも実施した。(250回開室、利用者数287名)。
- ・ 休憩時のトイレの混雑を避けるため、状況に応じて大・小劇場のトイレを相互に融通し、混雑を軽減させる対策をとった。
- ・ 歌舞伎公演休憩時に、大劇場ロビーからチケット売り場のドアを開放し、利用者の利便性向上とチケット販売促進を図った。
- ・ 観客相互が気持ちよく観劇できるよう観劇マナーの向上について協議・検討し、チラシ(和・英)・解説書・あぜくら会報・劇場ニュース等の印刷物や、教室公演の字幕・アナウンス・イヤホンガイド・ホームページ等、様々な媒体を通じて周知に努めた。

(演芸場)

- ・ 特別企画公演「親子で楽しむ演芸会」(7月27日)において、ロビーを風船やバルーン人形などで装飾し、子供たちが演芸に親しめるよう工夫した。また親子連れの観客に夏休みの絵日記等で使えるクレヨンをお土産として手渡しした。

(文楽劇場)

- ・ 上方演芸特選会の公演においては、寄席の雰囲気を作るために1階ロビー外でも寄席囃子を流し、演芸気分を盛り上げた。

(国立劇場おきなわ)

- ・ 沖縄県の助成事業を活用して、7月から期間限定で那覇市内主要モノレール駅と劇場間で無料巡回バスを運行させ、観客の利便性向上を図った。好評につき期間を延長した。
- ・ 観客から要望の多かった冷水器の設置に対応して、自主公演限定で劇場内にウォーターサーバーを設置した。
- ・ 12月自主公演の開演前に共通ロビーにおいて、沖縄に伝わる伝統的なお茶「ブクブク茶」の呈茶サービスを行った。

(新国立劇場)

- ・ 公演関連情報の掲示、関連映像の上映を公演時に劇場ホワイエにて行い、観客の興味の喚起に役立った。
 - ・ 温泉街の装飾を施し、手湯やマッサージ、出店のサービスの提供(演劇「アジア温泉」)
 - ・ 実際に使われる小道具の展示(演劇「OPUS/作品」)
 - ・ ロンドン風の装飾を施し、カフェや露店の出店(演劇「ピグマリオン」)
 - ・ 英国王室年譜とエドワード人物関連図の掲出(演劇「エドワード二世」)
 - ・ ヴェルディ・ワーグナー生誕200年にあたる平成25年中、オペラ劇場プロムナードにてヴェルディ・ワーグナー年表パネルを設置、他劇場の同作曲家公演も紹介
 - ・ 現代的な演出に対する演出家の意図を掲示(オペラ「ナブッコ」)
 - ・ 舞台仕込みの様子を記録した映像を放映(オペラ「リゴレット」)
 - ・ 上演作品「結婚」の歌詞を掲出(バレエ「バレエ・リュス ストラヴィンスキー・イブニング」)
 - ・ オペラ劇場ホワイエ内をクリスマスオーナメントで装飾し、ネイルアートやサンタクロースとの撮

影会などクリスマスイベントを開催（バレエ「くるみ割り人形」）

- ・ バレエ「白鳥の湖」にて手塚プロダクションと新国立劇場バレエ団のコラボレーション企画を実施した。バレエダンサーをキャラクター化したグッズを販売するとともに、マスコットが場内で宣伝を行った。
- ・ 2012/2013 シーズンオペラ・バレエのシーズンシート又はシーズンセット券購入者を対象に、出演者との懇親をはかるイベントとして、「シーズンエンディングパーティー」を行った。（オペラ：5/25（土）オペラ「ナブッコ」終演後、72名参加（申込77名）、バレエ：6/30（土）バレエ「ドン・キホーテ」終演後、70名参加（申込73名）
- ・ 2013/2014 シーズンのオープニングにあたり、草月流家元の勅使河原茜氏による生け花をメインエントランスに飾り、オペラ劇場プロムナードに赤絨毯を敷いて、雰囲気盛り上げた。
- ・ 25年10月～26年3月にかけて「ご来場者累計300万人達成ありがとうキャンペーン」を実施した。カード形式で劇場施設、各種サービスの案内、当該公演の話題やシアターエチケットを周知・啓蒙に努めたほか、ご意見、ご提案の収集、観劇の素敵な思い出の募集をし、劇場内及びウェブサイト上での掲出を行った。

3. 安全な観劇環境の確保

（本館）

- ・ 場内案内担当業者は継続して定期的なスキルアップ研修を行っているほか、売店・食堂業者も含めて大震災を想定した訓練を2回（9月・1月）実施した。
- ・ 職員、委託業者など全職域が参加する自衛消防訓練（地震火災総合訓練）を9月に実施した。
- ・ 別館の託児室を耐震性の高い新事務棟1階に移設し、利用者の安全を図った。

（能楽堂）

- ・ 館内に監視・防犯カメラを設置し、来場者及び施設の安全性を高めた。
- ・ 場内案内担当業者が避難訓練を含む研修を随時行い、緊急時の誘導等についてスキルアップに努めた。
- ・ 職員、委託業者など全職域が参加する自衛消防訓練を年2回実施した。避難誘導、消火器の取扱い等についての実地訓練（10月）、消防・防災関係のDVDの視聴及び渋谷消防署予防課長、原宿出張所長によるお話し（3月）を実施して職員等の防災意識を高めることができた。
- ・ 職員、委託業者など全職域が参加して、火災・地震等の緊急時の対応について確認・検討する能楽堂舞台運営安全会議を7月に実施した。

（文楽劇場）

- ・ 文楽劇場では、6月と2月に消防訓練を行った。6月に団体観劇の高校生と先生方（計197名）の協力を得て、避難誘導訓練を実施した。2月には、職員及び委託業者社員が消防本部制作のビデオを鑑賞しビル火災について学んだあと、避難誘導訓練を実施した。
- ・ 劇場の安全性向上のため、受配電設備及び自家発電装置の更新工事を初めて行った。また、客席等の避難誘導灯を更新した。

（国立劇場おきなわ）

- ・ 職員、委託業者など全職域が参加する自衛消防訓練を年2回（6月、12月）実施して、避難誘導、消火器の取扱い等についての実地訓練を行った。
- ・ 共通ロビー及び楽屋口に担架を配置し、緊急時に備えた。

（新国立劇場）

- ・ 大規模災害時における公共施設としての社会的責任を果たすため、観劇者を含めた帰宅困難者のための飲料水を備蓄した。渋谷区とは「災害時における帰宅困難者支援に関する協定書」を締結し、帰宅困難者対応に備えた。
- ・ 東日本大震災を踏まえ、詳細なマニュアルを整備し、非常時の観客避難誘導対策を再度確認した上で、公演本番時には常に緊張感を持った対応に努めた。
- ・ 職員、委託業者など全職域が参加する新国立劇場消防総合訓練を11月に実施した。

4. 外国人利用者への対応

- ・ ホームページにおいて、英語での施設案内・公演案内・劇場周辺地図等を掲出し、外国人利用者の利便の向上を図っている。

（本館）

- ・ 外国人観光客への情報発信・公演周知活動をさらに強化するため、英語版、中国語版（繁体字・簡体字）、韓国語版に加えて、新たにフランス語版のコンパクトガイド（歌舞伎・文楽の紹介リーフレット）を作成し、都内のツーリストインフォメーションセンター等に掲出を依頼した。
- ・ 歌舞伎公演・文楽公演では、公演解説書に英文の演目解説を併載した。
- ・ 歌舞伎鑑賞教室・文楽鑑賞教室・舞踊・邦楽等公演では、演目解説の英文リーフレットを作成し配布した。
- ・ 引き続き英語版の観客マナー及び緊急時の避難経路・チケットの購入方法等を記載したチラシを作成し、ロビー等に設置した。
- ・ 場内放送において英語アナウンスを実施した。
- ・ 英語のイヤホンガイドを継続して実施した。

（能楽堂）

- ・ 英文による演目解説リーフレット、年間公演予定表、施設紹介パンフレットの作成・配布、英語による案内表示、場内アナウンスなどのサービスを提供し、引き続き外国人の利用環境の充実を図った。
- ・ 座席字幕装置を活用して、4月国立能楽堂開場30周年記念特別企画公演（現代語による上演）及び7月・2月企画公演（蠟燭能）を除く48公演で日本語（詞章）・英語の2チャンネル方式で字幕表示を実施した。
- ・ 座席字幕装置完備を明記した英文チラシを作成し、ホテル・観光情報センター・空港等に配布して海外からの観光客への周知・集客に努めた。

（文楽劇場）

- ・ 文楽を紹介するリーフレットを英語・中国語（簡体字）・韓国語で配布し、外国からの観客に文楽の理解を深めてもらうために活用した。
- ・ 関西国際空港の関西観光情報センター（到着ロビー内）に英語・中国語（簡体字）・韓国語の文楽紹介パンフレットを設置したほか、デジタルサイネージ広告にて毎公演のポスターを掲出した。
- ・ 短い時間で文楽を楽しめる「幕見席」について、ホームページに利用案内を掲載し、近隣ホテルのコンシェルジュ等へ説明を行うなど、外国人観光客の勧誘とサービス向上に努めた。また、各文楽公演について演目を英語で紹介する簡易チラシを作成し、近隣ホテルや宿泊所に提供した。
- ・ 文楽公演・文楽鑑賞教室では、英文解説リーフレットを作成・配布した。文楽公演では英語に加え中国語（簡体字）・韓国語の解説リーフレットを作成・配布するとともに、英語版イヤホンガイドなどのサービスを提供した。
- ・ 英語での対応ができる劇場案内スタッフを配置して、サービスの向上を図った。
- ・ 外国人利用者に対応した案内表示の整備をすすめ、英語による場内アナウンスを実施した。

（新国立劇場）

- ・ 公演プログラムに英文による物語解説を掲載した。
- ・ オペラ、バレエ公演にて、英文によるキャスト表、あらすじを用意し、配布した。
- ・ 館内の案内表示に、英文を併記するとともに、ピクトグラムも活用した。
- ・ 英語での対応ができる劇場案内スタッフを配置した。
- ・ シーズンガイドや劇場案内パンフレットの英語版を作成し、公演の周知、劇場の活動に対する理解を深めてもらうため等に活用した。
- ・ 火災等の非常放送は、英語放送を用意しており、消防総合訓練でも英語放送を入れて訓練を実施し、非常時の対応に備えた。

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 本館大・小劇場ロビー内のソファ・床机・テーブルの配置を検証し、環境整備を常に心がけ、観客に対してロビー周りの快適性を高めることができた。
- ・ 各館とも避難訓練を徹底し、地震等緊急時に備えた。
- ・ 新国立劇場では、劇場支配人を公演会場に配置し、劇場要員が相互に綿密なコミュニケーションをとることにより、観客の視点に立ったサービスの提供を心掛けた。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・ 高齢者等の観客に留意し、バリア・フリー化等、引き続き劇場施設の改善を検討していく。
- ・ 英語圏以外の方を含めた外国人の観客に対し、周知、勧誘、利便の向上を図るべく、引き続き検討して

いく。

- ・ サービスの質の維持・向上について、引き続き検証・改善に努めていく。

＜2＞多様な購入方法の提供によるチケット販売の促進

- ・ インターネット・チケット販売システムにおける座席選択機能について、25年度から全公演でサービスの提供を開始した。
- ・ 25年4月23日より、インターネット販売においてスマートフォンでの販売サービスを開始した。
25年度インターネット予約内訳
パソコン：87,642枚（88.0%）、スマートフォン：10,925枚（11.0%）、英語版：974枚（1.0%）
- ・ 親子を対象とする公演のインターネット販売では、本館・演芸場・能楽堂の各公演は、会員及び一般発売に先行して発売した。文楽劇場の公演は一般発売に先行して会員発売日と同日に発売した。
- ・ チケットセンターホームページに各館の親子企画を紹介するサイトを設置し、さらに、振興会トップページのバナーから誘導した。
 - ・ 「親子で楽しむ歌舞伎教室」（7月15日（月・祝）・19日（金）～24日（水））
インターネット販売は5月26日（日）に開始、電話予約は翌27日（月）に開始
予約結果：インターネット予約 2,487件（7,936枚）、電話予約1,225件（3,849枚）
 - ・ 「親子で楽しむ日本の音」（7月20日（土））
インターネット・電話予約販売は共に4月28日（日）に開始
予約結果：インターネット予約 11件（41枚）、電話予約2件（5枚）
 - ・ 「親子で楽しむ演芸会」（7月27日（土））
インターネット販売は5月28日（火）に開始、電話予約は翌29日（水）に開始
予約結果：インターネット予約49件（152枚）、電話予約36件（111枚）
 - ・ 「夏休み親子のための能の会」（8月10日（土））及び「夏休み親子のための狂言の会」（8月24日（土））
インターネット販売は5月28日（火）に開始、電話予約は翌29日（水）に開始
予約結果：「夏休み親子のための能の会」インターネット予約76件（210枚）、電話予約22件（54枚）、「夏休み親子のための狂言の会」インターネット予約120件（333枚）、電話予約61件（166枚）
 - ・ 「文楽親子劇場」（7月20日（土）～8月5日（月））
インターネット販売は6月2日（日）に開始、電話予約は翌3日（月）に開始
予約結果：インターネット予約41件（128枚）、電話予約19件（61枚）
- ・ 国立劇場おきなわでは、24年度から引き続き自主公演のインターネット・チケット販売サービスを行っており、遠方のチケット購入希望者へのサービス向上に努めている。また、チケット購入時の利便性向上のため、コンビニエンスストア等でチケット代金の支払いができるサービスも引き続き行っている。
- ・ 新国立劇場では、新国立劇場ホームページのインターネット・チケット販売の入り口を見やすく分かりやすいデザインに更新した。

《自己点検評価》

○良かった点・特色ある点

- ・ インターネット・チケット販売システムにおける座席選択機能の導入について、25年度から全公演でサービスを適用し、インターネット販売の利用促進を図ることができた。
- ・ インターネット販売において、スマートフォンを利用してチケット購入ができる機能を追加することでチケット購入が更に容易になり、利便性を向上させることができた。
- ・ 振興会の「親子企画」として、販売に先立ちインターネット販売システムに専用ページを設け、本館・演芸場・能楽堂・文楽劇場の4館が合同でインターネットを活用した販売キャンペーンを行ったことにより、多くの親子がこの企画を利用し、「親子を対象とした伝統芸能の公開」という振興会の事業を推進することができた。
- ・ あぜくら会員においても、インターネットでのチケット購入が浸透し、近年インターネットでの購入者数が電話での購入者数を上回っているため、会員のチケット購入拡大に繋がっている。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・ 情報技術の発展に鑑み、今後も利便性の向上に努める。

＜3＞解説書等の作成、音声同時解説・字幕表示の活用、公演説明会・施設見学等の実施

1. 解説書等の作成

- 本館大劇場及び小劇場での全ての自主公演について公演解説書（プログラム）を作成した。
- 演芸場では、毎月「国立演芸場ガイド」を作成し、全自主公演の出演者・演目情報を掲載した。
- 能楽堂では、公演内容等の理解を促進するため公演解説書（プログラム）「国立能楽堂」（月刊・年12回）を作成し、全自主公演の解説を施した。また、公演内容に応じて、「能楽鑑賞教室」「夏休み親子で楽しむ能の会」「夏休み親子で楽しむ狂言の会」ではイラスト入りの分かりやすいパンフレットを作成し無料配布した。
- 4月国立能楽堂開場30周年記念特別企画公演の新作能「世阿弥」上演に際しては、横尾忠則デザインによる特別ポスター・特別チラシを作成し、別冊プログラムを作成・販売した。
- 文楽劇場では、「上方演芸特選会」を除く全ての自主公演について公演解説書（プログラム）を作成した。文楽公演のプログラムに掲載する文楽技芸員の顔写真を新たに撮り直し、更新した。
- 国立劇場おきなわでは、ステージガイド「華風」（月刊・年12回）を作成し、全自主公演の解説をはじめ、新作公演では公演制作レポートや対談を掲載した。
- 新国立劇場では、すべての自主公演について公演解説書（プログラム）を作成した。
- 既存の日本語訳が未出版のオペラ「死の都」について、リブレット対訳を上演に合わせて新たに作成した。

2. 音声同時解説・字幕表示の活用

(1) イヤホンガイドサービスの実施

- 歌舞伎・文楽の全公演で、日本語と英語によるイヤホンガイドサービスを実施した（文楽鑑賞教室は日本語版のみ）。
- イヤホンガイドの放送では、次回公演の案内を加えて宣伝に努めた。
- 7月歌舞伎鑑賞教室において、聴覚障害者向けに小型モニターを利用した字幕表示の提供を試験的に行った。

(2) 字幕表示の実施

ジャンル	実施公演数	内 訳
歌舞伎公演（鑑賞教室含む）	2公演	6月鑑賞教室、7月鑑賞教室
文楽公演（鑑賞教室含む）	10公演	全公演
舞踊・邦楽・声明・民俗芸能・特別企画公演	15公演	5月舞踊公演、8月舞踊公演、11月舞踊公演、3月舞踊公演
		7月邦楽公演、10月邦楽公演（2公演）、12月邦楽公演、1月邦楽公演
		9月声明公演、11月声明公演
		6月民俗芸能公演、1月民俗芸能公演
能楽公演（鑑賞教室含む）	48公演	4月国立能楽堂開場30周年記念特別企画公演（現代語による上演）及び7月・2月企画公演（蠟燭能）を除く全公演
組踊等沖縄伝統芸能公演（鑑賞教室含む）	27公演	5月定期公演「琉球弧の島唄」、11月企画公演「国立劇場寄席」及び台風による中止公演を除く全公演
オペラ公演（鑑賞教室含む）	11公演	オペラ10公演、高校生のためのオペラ鑑賞教室1公演
演劇公演	1公演	5月公演「アジア温泉」（日本語及び韓国語による上演）

3. 公演説明会・施設見学等の実施

各館において、団体観劇に伴う公演説明会、施設見学の受入れ、バックステージツアーを実施し、上演演目への理解や劇場施設への親近感の醸成に努めた。

(1) 公演説明会の実施

区 分	件 数	参加人数
本館・演芸場	165件	7,286人
能楽堂	12件	407人

文楽劇場	88件	3,528人
新国立劇場	9件	2,575人
合計	274件	13,796人

(2) 施設見学の実施

区分	件数	参加人数
本館・演芸場	9件	139人
能楽堂	4件	73人
文楽劇場	1件	33人
国立劇場おきなわ	37件	845人
新国立劇場	13件	311人
合計	64件	1,401人

(3) バックステージツアーの実施

区分	件数	参加人数
本館・演芸場	124件	5,756人
能楽堂	1件	38人
文楽劇場	11件	291人
国立劇場おきなわ	5件	189人
新国立劇場	15件	440人
合計	156件	6,714人

【特記事項】

- ・ 本館では、ホテルコンシェルジュ向けに施設見学・公演鑑賞会を実施した。
- ・ 上記施設見学のほか、新国立劇場では6件45名の外国からの見学者受入れを行った。
- ・ 次期芸術監督による2014/2015シーズンの演目に関する説明会を劇場内で行った。(オペラ：1/22(水) オペラ「カルメン」終演後、約170名参加、バレエ：2/15(土) バレエ「白鳥の湖」終演後、約260名参加)
- ・ 8月に東京オペラシティと共催した「アーツシャワー」にて、子供を対象としたバックステージツアーとオペラ研修所修了生によるコンサート「キッズステージウォーキング&ミニコンサート」を開催し、好評を得た。

(4) 劇場外での伝統芸能講座の実施

- ① 22年度より開催している社会人向け講座シリーズ「国立劇場 in 丸の内ー日本の伝統芸能を知るー」の第10回～第16回を実施した(会場：marunouchi cafe SEEK)。これまで取り上げてきた歌舞伎、文楽、能楽に加え、第16回講座で初めて大衆芸能をテーマに取り上げ、講座内容の充実を図った。
- ・ 「国立劇場 in 丸の内 Vol. 10 日本の伝統芸能を知る 文楽の魅力 - 大夫・語りの世界 -」
日時：5月16日(木) 19:00～20:30
講師：豊竹英大夫(文楽大夫)
モデレーター：廣瀬哲也(国立劇場制作部伝統芸能課長)
参加者数：41名
 - ・ 「国立劇場 in 丸の内 Vol. 11 日本の伝統芸能を知る 浮世絵から紐解く歌舞伎 その1」
日時：6月13日(木) 19:00～20:30
講師：中村扇雀(歌舞伎役者)、石橋健一郎(国立劇場調査養成部主席芸能調査役)
参加者数：52名
 - ・ 「国立劇場 in 丸の内 Vol. 12 日本の伝統芸能を知る 浮世絵から紐解く歌舞伎 その2 - 舞台を楽しむ -」
日時：7月4日(木) 19:00～20:30
講師：新藤茂(国際浮世絵学会常任理事)
モデレーター：石橋健一郎(国立劇場調査養成部主席芸能調査役)

参加者数：52名

- ・ 「国立劇場 in 丸の内 Vol. 13 日本の伝統芸能を知る 文楽の三味線」
日時：12月6日（金）19:00～20:30
講師：豊澤富助（文楽三味線弾き）
モデレーター：廣瀬哲也（国立劇場制作部伝統芸能課長）
参加者数：42名
- ・ 「国立劇場 in 丸の内 Vol. 14 日本の伝統芸能を知る 小道具が魅せる歌舞伎」
日時：1月23日（木）19:00～20:30
講師：大木晃弘（国立劇場制作部歌舞伎課長）
参加者数：48名
- ・ 「国立劇場 in 丸の内 Vol. 15 日本の伝統芸能を知る 能の世界～能面を楽しむ～」
日時：2月5日（水）19:00～20:30
講師：川口晃平（能楽 観世流シテ方）
モデレーター：猪又宏治（国立能楽堂部企画制作課長）
参加者数：53名
- ・ 「国立劇場 in 丸の内 Vol. 16 日本の伝統芸能を知る 噺家の世界 - 落語の楽しみ方 -」
日時：3月12日（金）19:00～20:30
講師：太田博（演劇・演芸評論家）、春風亭昇吉（落語家）
参加者数：40名

② 国立劇場おきなわの組踊研修修了生を構成員とする「子の会」が、沖縄県立球陽高等学校（10月16日）、沖縄県立与勝高等学校（12月17日）、沖縄県立那覇西高等学校（12月19日）の「芸術鑑賞会」に出演し、文化普及活動への参画に努めた。

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 本館の公演説明会、施設見学等は、普段できない体験ができる機会として参加者に好評であった。また、参加者の舞台に対する興味・関心を高め、団体観劇をはじめとする集客に寄与する側面も大きいことから、今後とも積極的に実施し、来場者の増加と普及に努めていきたい。
- ・ 能楽堂では、座席字幕装置を活用して、4月国立能楽堂開場30周年記念特別企画公演（現代語による上演）及び7月・2月企画公演（蛸燭能）を除く48公演において日本語（詞章）・英語の2チャンネル方式で字幕表示を実施した。また、「能楽鑑賞教室」では中・高校生向けチャンネルを、「夏休み親子で楽しむ能の会」「夏休み親子で楽しむ狂言の会」では子供向けチャンネルを追加し、分かりやすい解説を表示して、観客層に合わせたきめ細かい字幕表示を実施し好評を得た。

なお、貸劇場公演においても座席字幕装置の利用が2件あった。

- ・ 国立劇場おきなわでは、国立劇場寄席と三線音楽2公演及び台風による中止公演を除く27公演で常設の字幕表示装置を使用して、地元でも理解されにくくなっている組踊や舞踊の詞章の現代語訳を表示し、公演内容の理解に役立てた。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・ 新国立劇場では、外国人来場者のため、外国語の字幕表示の実施について、引き続き検討を行う必要がある。

<4>意見・要望等の把握と対応

1. 意見・要望等への対応体制

- ・ 25年度より、総務企画部総務課に「お客様相談室」を設置し、意見・要望等に対する回答の流れを整備した。
- ・ 意見・要望等を積極的に収集するため、各劇場ロビーのご意見箱を更新し、観客の目に付きやすいデザインに改めた。

ご意見箱への投書311件（本館157件、演芸場17件、能楽堂33件、文楽劇場90件、国立劇場おきなわ14件）

ホームページの「ご意見欄」への投書400件（振興会ホームページ162件、国立劇場おきなわホームページ22件、新国立劇場ホームページ216件）

2. 意見・要望等への対応状況

- ・ 振興会ホームページや劇場内のご意見箱に寄せられた要望・苦情等に対しては、総務課お客様相談室において一元的に把握し、関係部署と連携し迅速に対応した。また、これらの対応に関しては、役員へ報告の上、社内 LAN を使用して全職員に周知するとともに、要望・苦情等を踏まえた業務改善及びサービス向上に努めた。

(主な改善例)

- ・ ホームページにあぜくら会及び国立文楽劇場友の会の各種手続き書類請求フォームを開設
- ・ ロビー内のゴミ箱に分別表示シールを貼付 (本館)
- ・ 子供用クッションの貸出について案内表示を掲出 (本館)
- ・ バリア・フリー型ウォータークーラーの設置 (能楽堂)
- ・ GB席の段差部分に注意喚起の目印を取付 (能楽堂)
- ・ 劇場内にウォーターサーバーを設置 (国立劇場おきなわ)

(新国立劇場)

- ・ 引き続き、ほぼ全演目でアンケート調査日を設定し、入場時にキャスト表と共にアンケート用紙を配布、終演後に粗品と引換に回収する形で実施した。アンケート調査日以外においても、劇場各所にアンケート用紙を設置し、自由に意見を寄せられる態勢を整えている。
- ・ アンケート結果については、公演制作の参考にすべく関係部署間で内容を共有した。また掲載を許可されたコメントについて、ホームページに掲出した。
- ・ 頂いた意見・要望については必要な対応を行い、提供するサービスの質の向上に努めた。劇場及びボックスオフィスにて聴取した意見については、委託業者と共に行う月例のミーティングにて検討し、対応した。アンケートやホームページのご意見箱等を通じて寄せられた意見については、即応を要する意見に優先的に対応する一方、それ以外については傾向別にとりまとめて検証の上、対応した。
- ・ 主催公演において、公演会場に職員が劇場支配人として立ち会い、委託業者とともに観客と直接コミュニケーションを取りながら、不測の事態にも常に備えた。貸劇場公演においても、職員が主催者の意向を尊重しつつ、全ての公演会場に立ち会い、観客対応から舞台サイドの要望まで、様々な事項に迅速かつ確実に応える体制を整えた。

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 総務課お客様相談室が総括することにより、法人全体として意見・要望等に対する回答の迅速化が図られた。
- ・ 意見・要望等を踏まえた業務改善を着実に実施した。
- ・ 観客からの意見を基に、食堂、売店、イヤホンガイド等のサービス向上について関係業者と議論を深めることができた。

(新国立劇場)

- ・ 劇場支配人が主催公演会場に常に立ち会い、率先して観客対応を行うことにより、担当職員、委託業者とともに高いおもてなしの精神をもって観客対応を行うことができた。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・ 本館では、一部の要望・苦情等について、返信に時間を要したものがあり、こうした事案の発生を最小限に抑えるよう努めていく。
- ・ 新国立劇場では、様々な価値観を持つ多数の観客に対応するため、サービス全般について緊張感を持ちつつ常に検証・改善するとともに、観客の劇場体験の満足度向上に資するよう努めていく。

2-(4) 広報・営業活動の充実

《中期計画の概要》

(6) 広報・営業活動の充実

より多くの人々が幅広い分野の公演を鑑賞することを目標として、次の取組により一層効果的な広報・営業活動を展開する。

- ア 公演内容に応じた効果的な宣伝活動
- イ 観客の需要を的確に捉えた営業活動
- ウ 会員に向けた各種サービスの提供による会員の観劇機会の増加

《年度計画》

(6) 広報・営業活動の充実

ア 効果的な広報・営業活動の展開

- ① 公演内容に応じて、記者会見・取材等によるマスメディアを通じた広報や、インターネット広告等の多様な媒体を活用して、広報活動を効果的に実施する。

国立能楽堂開場 30 周年記念公演については、特別ポスター・チラシを作成し、ホームページに特設ページを掲載する。また、国立劇場開場 50 周年に向けた広報等について検討を開始する。

- ② 振興会各種事業に関する広報の充実に努め、ホームページ等を活用して随時最新の情報を提供する。ホームページにおいては、公演情報、イベント情報、トピックス記事等の早期掲載及び内容の充実に努めるとともに、アクセス動向等を分析して利用状況を把握する。また、英語版ホームページの記事内容等を見直し、外国人に対する情報発信を強化する。

メールマガジンにより、公演等の情報を随時配信する。

- ・ 日本芸術文化振興会ホームページ目標アクセス件数：2,000,000 件
- ・ 国立劇場おきなわホームページ目標アクセス件数：216,000 件
- ・ 新国立劇場ホームページ目標アクセス件数：2,500,000 件

- ③ 振興会各種事業に関する広報誌を次のとおり発行する。

- ・ 日本芸術文化振興会ニュース（毎月発行）
- ・ 国立劇場おきなわ情報誌「華風」（毎月発行）
- ・ 新国立劇場情報誌「ジ・アトレ」（毎月発行）

- ④ 観客の需要を踏まえ、シーズンシートやセット券を企画し、販売を推進する。

- ⑤ 旅行代理店・ホテル等との連携強化等により団体観劇を促進する。また、26 年度に導入予定の「法人会員サービス」についての周知及び会員の募集を行う。

- ⑥ 全職員が集客に対する意識を高め、知人や関係するコミュニティー等に対して積極的に団体観劇を勧誘する「おすすめキャンペーン」を引き続き実施する。

イ 会員組織の会員に対し、会報による情報提供を定期的に行うとともに、入場券の会員先行販売や会員向けイベント等の各種サービスを提供して、会員の観劇意欲を促進する。また、アンケート調査を適宜実施するとともに、劇場モニターの意見内容について検討し、会員向けサービスの一層の充実を図る。

新規会員について、会員向けサービスの周知により、引き続き増加に努める。

- ① あぜくら会（本館・演芸場・能楽堂）

- ・ 会報「あぜくら」（毎月発行）
- ・ 会員向けイベント：年 8 回程度
- ・ 目標会員数：18,000 人

- ② 文楽劇場友の会

- ・ 「文楽劇場友の会会報」（年 6 回発行）
- ・ 会員向けイベント：年 6 回程度
- ・ 目標会員数：7,450 人

- ③ 国立劇場おきなわ友の会

- ・ 「国立劇場おきなわ友の会会報」（年 4 回発行）

- ・ 会員向けイベント：年3回程度
 - ・ 目標会員数：1,700人
- ④ クラブ・ジ・アトレ（新国立劇場）
- ・ 会報「ジ・アトレ」（毎月発行）
 - ・ 会員向けイベント：年11回程度
 - ・ 目標会員数：9,600人

《実績》

1. 効果的な広報・営業活動の展開

(1) 公演内容に応じた効果的な広報活動

(本館)

- ・ 各公演ともマスコミ各社への記者会見及び取材依頼、テレビ出演、ポスター、チラシ、インターネット、あぜくら会報、振興会ニュース等により、公演情報の周知範囲拡大を図り、一般の集客に努めた。
- ・ 9月文楽公演「通し観劇キャンペーン」、11月歌舞伎公演「ダブル観劇キャンペーン」、各公演ゆかりの地向けのキャンペーンなど、公演の特色に合わせたキャンペーンを展開することにより集客を図った。
- ・ マスコットキャラクター「くろごちゃん」を活用し、外部イベントに積極的に参加することにより、普段は劇場に足を運ばない方々への国立劇場及び公演の周知を図った。
- ・ 「親子で楽しむ歌舞伎教室」において、東京都教育委員会や埼玉県教育委員会等の協力により、学校を通じて東京都及び埼玉県内の小学校高学年及び中学生に公演チラシを配布した。
- ・ 京都市、京都商工会議所、公益社団法人京都市観光協会、京都創生推進フォーラム主催の京あるき in 東京 2014（2月4日～29日）と連携し、2月文楽公演への来場者増加を図った。
- ・ 外国人入場者の誘致につなげるため、26年3月歌舞伎公演において各国駐日大使の招待会を実施し、36カ国55人の参加があった。

(能楽堂)

- ・ チラシ、ポスター、ホームページ、広報誌等による通常の広報とともに、公演によっては企画性を周知するため、特別パンフレットを販売及び特別チラシを配布するほか、ホームページにトピックス等を掲載した。

(文楽劇場)

- ・ チラシ、ポスター、広報誌等による通常の広報とともに、ホームページに公演トピックス等を掲載した。
- ・ 演目ゆかりの地宣伝キャンペーンや友の会会員向けイベント「文楽のつどい」の開催を積極的に行って報道関係者を招き、マスコミへの情報提供に努めた。また、文楽技芸員の積極的なテレビ・ラジオ出演、視聴者プレゼントによる公演紹介、ラジオCM、デジタルサイネージによる公演広告等、多様な宣伝活動を展開した。
- ・ 26年度の開場30周年記念公演を控え、26年3月27日に「国立文楽劇場開場30周年記念のつどい」を開催した（参加者570名、放送3件、新聞報道7件）。

(国立劇場おきなわ)

- ・ 開場10周年記念特別公演のラインアップと記念式典について11月12日に劇場ホワイエで記者発表を行った。テレビ取材も入り公演の宣伝を盛り上げた。また、協賛による新聞広告を掲載した。
- ・ 新聞、雑誌、テレビ、ラジオ等における広告及び県内自治体、学校等へのチラシ配布、ホームページでの告知を継続的に行いながら、沖縄県庁や那覇市内デパートでのポスター展等により幅広い広報宣伝を行った。

(新国立劇場)

- ・ 演目の制作発表やフォトコール（報道写真撮影会）を行い、より一層の情報提供に努めた。
- ・ 演目別の広報については、プレスリリース、個別インタビュー、稽古場取材の実施など、きめ細かいマスコミ対応により、記事掲載の促進を行った。
- ・ オペラ（ツイッター、Facebook）、バレエ団（オフィシャルブログ、ツイッター、Facebook）、演劇（ツイッター）のそれぞれでSNSを運用し、公演への関心を喚起するとともにファンづくりに努めた。
- ・ 観劇団体に対し、レクチャー付き観劇プランを提案、実施した。

(2) ホームページにおける情報の内容の充実、メールマガジンの配信

(国立劇場)

- ・ 日本芸術文化振興会ホームページの年間アクセス件数：2,623,429件（目標：2,000,000件）
（内、45,052件が携帯電話からのアクセス）
- ・ メールマガジン登録者数：45,394人（26年3月末）
- ・ 能楽堂の公演情報として、26年1月に26年度の全自主公演の番組を掲載し、団体観劇の受付を開始して、集客を図った。
- ・ 能楽堂開場30周年に当たり、振興会ホームページに「国立能楽堂開場30周年記念特設サイト」を開設し、記念公演や能楽堂の事業の30年の歩みなど各種情報を発信した。（9月～1月）
- ・ 文楽劇場では、主に関西在住の作家・アーティスト等に文楽を観劇してもらい、エッセイ（29件）をホームページ「文楽かんげき日誌」に掲載した。（アクセス数36,164件）

(国立劇場おきなわ)

- ・ ホームページの年間アクセス件数：374,989件（目標216,000件）
- ・ メールマガジン登録件数：505人（26年3月末）

(新国立劇場)

- ・ ホームページの年間アクセス件数：4,604,571件（目標2,500,000件）
- ・ ホームページの利便性を高めるために、情報項目の整理を行い、大幅なデザイン改修を行った。
- ・ メールマガジン登録件数：9,890人（26年3月末）

(3) 広報誌の発行

一般向け広報誌として、日本芸術文化振興会ニュース、国立劇場おきなわ情報誌「華風」、新国立劇場情報誌「ジ・アトレ」を毎月発行したほか、会員組織の会員に対し会報による情報提供を行った。

(4) シーズンシートやセット券等の販売

- ・ 歌舞伎公演の各三日目の入場券をセットにした「三日目の会」の販売を行った。（10月～1月の4公演分2,176枚）
- ・ 公演形態に合わせてセット割引や通し割引を実施した。歌舞伎4公演特別セット券の販売を限定ステージで行った（10月～1月の4公演分216枚）。また、舞踊・邦楽等の短期の公演でも内容の異なる2回公演の場合は、同時に購入すると割引となるセット割引を行った（8月舞踊14枚、10月舞踊94枚（文楽劇場）、11月舞踊72枚、3月舞踊8枚、10月邦楽12枚）。
- ・ 親子を対象とする公演において、親子セットの割引料金を設定して好評を得た。
- ・ 文楽劇場では、通し狂言（11月文楽）では通し割引（1,226枚）、10月舞踊公演においてはセット割引（94枚）を行った。
- ・ 国立劇場おきなわでは、友の会会員限定で10周年記念特別公演のセット券を50セット販売し、好評であった。
- ・ 新国立劇場では、オペラ、バレエ、現代舞踊の2013/2014シーズンセット券の販売を平成25年1月20日より継続して行い、2014/2015シーズンセット券の販売を平成26年1月20日より行った。
- ・ 演劇においても、芸術監督が企画するテーマに沿った演目をセットにし、特別割引通し券として販売した。
- ・ 現代舞踊「中村恩恵×首藤康之」においては、A、Bプログラムの通し券やペアチケットの販売を行った。

(5) 旅行代理店・ホテル等との連携強化による団体観劇の促進、「法人会員サービス」についての検討

(本館)

- ・ 旅行代理店と連携を行い、団体観劇を企画商品として広く周知し、団体観劇の誘致を行った。
- ・ ホテルとの連携により宿泊客への公演の周知及びチケットの販売を行った。また26年度運用開始予定の「法人会員サービス」でより簡便に利用できる旨、周知を行った。
- ・ 26年度より運用開始予定の法人会員サービスの具体的な運用について検討を行った。また利用を見込まれる団体に対して周知を行った。
- ・ 外部の旅行代理店（JTB）の外国人旅行者向けホームページにて、歌舞伎公演の告知及びチケットのインターネット受付をし、年間で合計74枚の販売実績となった。

(国立劇場おきなわ)

- ・ 県の助成事業を活用した無料巡回バス及び無料団体バスサービスをホテルや旅行業者にPRし、連携の

強化に努めた。その結果、劇場観劇がバスツアーで実現するなどの成果があった。

(新国立劇場)

- ・ 都内ホテルとの連携によるオペラ公演に関する観劇プランを提案した。

(6) おすすめキャンペーンの実施

- ・ 全役職員が個々に知人や関連コミュニティ等に対して積極的に観劇を勧誘する「おすすめキャンペーン」を行い、208件1,506人の実績を得た。

2. 会員組織の運営、会員向けサービスの充実

(本館)

- ・ あぜくら会会員数 17,935人
- ・ 振興会ホームページ上に会員向けページを公開し、会報で対応できない最新の公演情報や会員特典の催物のレポート等を掲載した。
- ・ あぜくら会員を対象とするイベントを実施し、主催公演の内容に連動した「あぜくらの集い」や「会員特別バックステージツアー」など、8回開催した。

(文楽劇場)

- ・ 国立文楽劇場友の会会員数 7,842人
- ・ 主催公演に関連して、会員を対象にした「文楽のつどい」を4回開催した。その際、積極的に報道関係者も招き、公演宣伝に繋げるとともに友の会の存在や活動もPRすることに努めた。
- ・ 「友の会入会キャンペーン」を継続して実施したほか、友の会会員向けに年間の文楽公演の「観劇ラリー」(4回の本公演を全て観劇した会員に記念品を進呈)を実施し、会員の鑑賞機会の拡大と友の会の一般への周知を図った。
- ・ 国立文楽劇場友の会会報に、他機関実施の文楽イベントなどの情報を掲載し、文楽の普及に努めた。

(国立劇場おきなわ)

- ・ 国立劇場おきなわ友の会会員数 2,073人
- ・ 会員を対象にしたイベントを4回(1日バスツアー2回、半日バスツアー&組踊鑑賞1回、新春講演会1回)開催した。
- ・ 友の会会員限定で10周年記念特別公演のセット券を50セット販売し、好評であった。また、ポイントをためて割引券等が貰えるポイントサービスも実施している。

(新国立劇場)

- ・ クラブ・ジ・アトレ会員数 9,470人
- ・ 会員に対する情報提供の場として「クラブ・ジ・アトレWebサイト」を運営した。
- ・ ポイントアップサービスとして、購入実績に応じてポイントを付与し、点数に応じて、商品やサービスを提供した。
- ・ 会員増加のため、三井住友カードとの提携による入会促進キャンペーン、シーズン先出しチラシの作成、セット券販売時の入会キャンペーンを行った。さらに演劇、舞踊のDM会員に向けて限定入会特典付きの入会申込書を4,376通発送した。

【特記事項】

- ・ 本館では、26年度より運用を開始する、学校を対象とする観劇会員制度「キャンパスメンバーズ」の募集活動を行い、6校の加入を得た。

《数値目標の達成状況》

【ホームページへのアクセス状況】

日本芸術文化振興会ホームページの年間アクセス件数：2,623,429件／目標2,000,000件(達成度131.2%)

国立劇場おきなわホームページの年間アクセス件数：374,989件／目標216,000件(達成度173.6%)

新国立劇場ホームページの年間アクセス件数：4,604,571件／目標2,500,000件(達成度184.2%)

【会員数】

あぜくら会：17,935人／目標18,000人(達成度99.6%)

国立文楽劇場友の会：7,842人／目標7,450人(達成度105.3%)

国立劇場おきなわ友の会：2,073人／目標1,700人(達成度121.9%)

クラブ・ジ・アトレ：9,470人／目標9,600人（達成度98.6%）

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

（本館）

- ・ 9月文楽公演と11月歌舞伎公演が、同じ演目「伊賀越道中双六」となったことを営業面でも大いに活用し、相乗効果を狙った「ダブル観劇キャンペーン」など、さまざまな集客に向けた働きかけを展開した。
- ・ 11月及び3月歌舞伎公演で、利用者にとってお得感があり、また観劇の楽しさを広げる「筋書付き観劇プラン」、「セミナー付き観劇プラン」及び「舞台見学付き観劇プラン」を販売した結果、従来から利用実績のある団体の利用に加えて、新規団体や長年利用が途絶えていた団体を掘り起こすことができた。
- ・ 11月及び3月歌舞伎公演で、歌舞伎鑑賞教室公演の利用実績のある学校向けに、本格的な歌舞伎の魅力を紹介し、団体観劇を勧める「ステップアップキャンペーン」を実施し、大きな成果を得た。
- ・ 国立劇場のマスコットキャラクター「くろごちゃん」を活用し、劇場内にとどまらず外部のイベントにも積極的に参加することにより、広く国立劇場をアピールするとともに伝統芸能に対する親近感を醸成することができた。
- ・ あぜくら会入会等の資料請求をホームページでも受け付けるように改善した結果、資料請求の要望者が前年度より524件増え、入会者の増加に繋がった。
- ・ 会員モニター等において、あぜくら会員より多くの希望が寄せられていた「バックステージツアー」を実施し、非常に好評であった。今回の実績を踏まえ、26年度も実施を予定している。

（文楽劇場）

- ・ 文楽劇場では、演目ゆかりの地宣伝キャンペーンや友の会会員向けイベント「文楽のつどい」を積極的に行った。開催にあたっては、報道関係者を招き、公演宣伝に繋げるとともに友の会の存在や活動もPRすることに努めた。
- ・ 「国立文楽劇場開場30周年記念のつどい」の取材に対応し、開場30周年と4月文楽公演を広報することができた。（放送3件、新聞報道7件）

（新国立劇場）

- ・ ITを活用した情報発信について、ホームページのデザイン改修、Facebookの導入、ブログでの情報提供、動画の活用など様々な面で発展させ、きめ細かく情報を発信できた。既存の観客に好評を博するとともに、新規観客開拓効果もあったと思われる。
- ・ 2014/2015シーズンセット券の販売状況は、26年3月末時点で昨シーズンの販売状況よりも良好に推移している。オペラ、舞踊部門について新たな芸術監督が就任し新風を吹き込むことに対する期待感を、うまく販売に結びつけることができつつある。
- ・ 演劇「ピグマリオン」、「アジア温泉」、「OPUS／作品」、バレエ「くるみ割り人形」、オペラ「リゴレット」などで多くの学校団体の観劇があった。学校が鑑賞行事として選びやすい演目、時期、キャパシティを準備できれば大きな集客に結びつけることができることが示唆された。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・ あぜくら会員の新規入会者数は昨年度より増加したが、一方で高齢による退会者等もあり会員数の目標を達成できなかった。引き続き、幅広い世代に向けて周知を図り、新規会員の獲得に努めたい。
- ・ 今後もジャンルや演目の特性を見据え、きめ細かな広報宣伝営業活動を続けていく。
- ・ 販売方法や営業先についても、演目や時期を見据え、効果的な結果に結びつける取組を継続していく。
- ・ 国立劇場おきなわでは、24年度の特設企画公演「聞得大君誕生」の上演の影響で大幅に会員数が増加したが、今年度はその反動があり減少傾向がみられた（23年度1,657人、24年度2,193人、25年度2,073人）。しかし「聞得大君誕生」の再演決定や開場10周年記念キャンペーンなどの効果もあり、急増した24年度の会員数をほぼ維持することができた。引き続き、今後も新規会員獲得と既存会員の定着のため、会員サービスや広報活動の充実を図る。
- ・ 新国立劇場クラブ・ジ・アトレでは、6月から12月にかけて7ヶ月間入会者を退会者が上回る純減状態が続き、5月末時点の9,462名から12月末時点には9,307名まで155名減少した。退会主要因は「ナブッコ」「リゴレット」と斬新な演出が続いたことによる反発とみられた。一方、11月末から飯守新芸術監督による新シーズン到来を強く予告し、1月に演目発表、セット券販売に加え、アトレ先行予約受付等が加わり、監督及びラインアップが聴衆の期待感に応える結果となり、1月から3月の3ヶ月間で9,470名まで急回復

した。引き続き会員の増加を図るとともに、既存会員の方には固定客として定着いただけるよう、今後も公演の充実、サービスの検証と改善に努めたい。

《24年度評価への対応》

【評価】

(振興会評価委員会)

- ・ あぜくら会やジ・アトレなどの会員数の増大はもちろん、初めての観客を呼び込む工夫と、また見てみたいというモチベーションにつながる活動を展開してほしい。趣味嗜好の多様化の中、観客の高齢化に歯止めをかけるため、次世代の観客を育成する計画を具体的に作るべきだろう。(①)
- ・ 各劇場での英語サインの充実や、歌舞伎・文楽を紹介する韓国語・中国語のコンパクトガイドを作成し、都内のツーリストインフォメーション等に設置したことは、外国人観光客の誘引のために、優れた施策である。今後も、空港や新幹線のターミナル駅などの案内所にポスターを貼ったり、各劇場の月刊総合公演案内を日本語版・外国語版で置いたりするなど、なお一層の工夫を望みたい。(②)
- ・ 各会員組織は順調に会員数を伸ばしている。あぜくら会会員によるモニター調査が実施されたことを評価する。入会することによって一般の人が古典芸能やオペラ、バレエなどに近づく手がかりや道筋が得られることを考えれば、会員登録を促すことは非常に大事である。今後も手綱を緩めることなく会員の獲得に努めてほしい。(③)

【対応】

①新たな観客の獲得・定着のための取組の検討

(伝統芸能各館)

本館では、観劇団体獲得のために観劇前のレクチャーや終演後の舞台見学を可能な限り実施した。青少年の観客層の拡大を図るため、学校などの大きな観劇団体に対して、現地に出向き歌舞伎の魅力や公演内容など事前講義を行った。

25年度は、これまで鑑賞教室公演の利用実績のある学校等に対し、本格的な歌舞伎公演の鑑賞を勧誘する「ステップアップキャンペーン」を企画し、11月歌舞伎公演「伊賀越道中双六」において、約300名の利用があった。また、新たな観客層の開拓のため、大学生を対象として、学校単位で加入するとチケット料金について学割以上の割引を得られるなど様々な特典のある「国立劇場キャンパスメンバーズ」制度を設け、26年度よりサービスの提供を開始する。また、6月社会人のための歌舞伎鑑賞教室「紅葉狩」では漫画家のイラストを使用した公演チラシを作成し、現代演劇を主に行うような小劇場で配布した。

あぜくら会では、以前実施したモニター調査で最も希望が多かったバックステージツアーを25年7月に実施した。会員からは好評であり、応募数が募集人数(200名)の3倍以上あったことから、26年度も実施する予定である。また、25年度は国立能楽堂が開場30周年の記念の年に当たり、12月に会員限定観劇会として、野村万作・野村萬斎・野村裕基による親子三代による狂言の会を会員特別料金で実施し、発売開始即日で完売となった。今後も公演に関連したイベントの実施やモニター調査における意見や要望への対応に努め、会員の獲得及び定着を図る。

能楽堂では、小学生以下を対象とした「夏休み親子で楽しむ能の会」「夏休み親子で楽しむ狂言の会」、中学生・高校生を対象とした「能楽鑑賞教室」を実施して次世代の観客を育成するよう努めている。また、社会人を対象とした「働く貴方に贈る」公演を実施して、能楽鑑賞未体験の観客を呼び込む工夫に努めている。

文楽劇場では、今後とも、新たな観客獲得のため関係団体と協力し、初めての観客を呼び込む宣伝キャンペーンやイベントを実施、また体験コーナーの企画等を通して文楽への興味を高め、次世代の観客獲得に向けた取組に努める。

国立劇場おきなわでは、24年度より、10名以上の団体観客を対象とした無料バスチャーターサービスや那覇市内からの巡回バスサービスを実施している。また、25年度は、観光客の誘客を図るために、団体バスの無料チャーターサービスを旅行社が企画するツアーにも適用して、集客の効果を検証した。さらに、県外客のアクセス件数の多い、沖縄コンベンションビューローのホームページ内に夏季の1ヶ月程度バナー広告を掲載し、県外の観光客への周知に努めた。次世代の観客を育成するため、多くの児童・生徒が普及公演を観劇できるよう、25年度より沖縄県内各地区の校長会や教頭会に出向き、国立劇場おきなわの取組の説明や、教員を対象とする公演見学会を行った。また上演作品に因んだ取組として、25年6月の沖縄芝居公演「泊阿嘉」では、上演1ヶ

月前から劇場内カフェで上演作品にちなんだ限定メニュー「泊阿嘉スイーツセット」を販売したほか、公演当日には、担当した演出家が店長を務める「カフェーダイヤ」を開店するなど、新規の観客獲得に向けての話題づくりに努めた。

(新国立劇場)

次世代の観客育成のため、児童や高校生を対象とした公演を実施しているほか、アカデミック・プラン、アカデミック39等を通じて、若年青年層が舞台芸術に対して親しみを持てるよう取り組んでいる。また、若年層のスマートフォン保有率の高さ等、社会的傾向を踏まえて、それらの機器利用者にとって高い利便性を発揮するツイッターやFacebookでの展開等を引き続き実施し、より充実した情報発信に努めたい。加えて、25年秋に新国立劇場ホームページの全面改良を行い、内容をさらに充実させるとともに見やすさや操作性を向上させた。また、観客の高齢化に対する多面的な歯止め策の実施に今後も努めたい。

②外国人利用者増加のための工夫

25年度は、日本政府観光局との連携により同観光局ホームページに国立劇場の情報を掲載したほか、海外事務所にて歌舞伎公演及び文楽公演の英語版パンフレット、振興会ニュース等を送付し、諸外国においても国立劇場の情報が得られるよう努めた。

国内では、スマートフォン用の英語版観光情報アプリケーション「TOKYO ENJOY NAVI」に国立劇場の情報を掲載したほか、外国人向け旅行案内所等に設置している「歌舞伎のコンパクトガイド」「文楽のコンパクトガイド」について、日本語版・英語版に加え、24年度には中国語版(簡体字・繁体字)・韓国語版、25年度には仏語版を作成した。また、JTBの海外向けサイト内においてイヤホンガイド付きのチケット販売を行い、着実に成果を挙げている。

能楽堂では、英語の座席字幕装置完備を明記した英文チラシを作成し、ホテル、観光情報センター、空港等に配布して外国人客への周知・集客に努めている。

文楽劇場の文楽公演では、公演ごとに外国人観光客のための英語、中国語、韓国語によるあらすじパンフレットを作成し、無料で配布している。また、関西国際空港や各所の観光案内所、主要ホテルなどへの文楽PRパンフレット、英文のあらすじチラシの設置やポスターの掲出を行い、外国人利用者増への対応を行っている。

国立劇場おきなわでは、沖縄観光コンベンションビューローが設置している他言語コールセンターのリーフレットを用意し、交通手段、観光等について外国人観光客等にスムーズに対応できるようにしている。また、26年度には組踊公演に英文であらすじを記したリーフレットを無料配布するほか、「国立劇場おきなわ開場10周年記念特別公演」の英文チラシの作成や、ホームページの英文紹介ページの追加などを計画し、外国人利用者増加に努める。

新国立劇場の劇場紹介パンフレット、シーズン・ガイドブックを既に英語版で作成しているが、さらに多言語対応のため、新国立劇場ウェブサイトにて「グーグル翻訳」を実装し、英語をはじめ多くの言語で、新国立劇場についての情報が迅速かつ簡便に入手できるようにした。

その他、オペラやバレエの新作公演で実施している大使鑑賞プログラムでは、現在主要各国の大使、政務官、文化担当官等が多く列席しており、各大使館、駐日各国関係者等を通じて駐日外国人社会への認知度を向上させ、広く諸外国からの誘客に努めているところである。今後もより一層の外国人利用者増に努めたい。

③新規会員獲得に向けた取組

あぜくら会では、新規会員獲得の方策として、25年度に新たなデザインの会員募集のポスターとチラシを作成し、観客への周知を行った。また、ホームページの構成を見直し、利用しやすいものとするとともに、これまで電話と郵便だけで受け付けていた「あぜくら会入会申込書」等の資料請求を、利用者の要望も踏まえて、新たにインターネットでの受付も開始し、資料の請求件数増に繋がった。国立能楽堂開場30周年を記念し、25年度国立能楽堂公演を3回以上観劇した会員に、能装束のデザインを施したチケットケースをプレゼントすることで会員の購入意欲を刺激するとともに、新規会員の獲得に努めた。

文楽劇場では、文楽友の会会員を随時募集し、サービスとして会員入会特典(公演プログラムの進呈(1回)等)のほか、観劇ラリー、文楽のつどい、ゆかりの地めぐり等の企画を適宜実施し、会員の拡大へ向けた取組を続けている。今後とも会員の増加に努めたい。

国立劇場おきなわでは、従来からのチケットカウンターおよびインターネット販売並びに会員特典(割引購入、会報誌送付、会員対象のバスツアーや講演会、ポイントカード)を継続する。

新国立劇場のクラブ・ジ・アトレでは、会員組織に関する継続的なアピールを行うとともに、現在、来場者

を中心に展開している様々な入会促進策を継続し、さらに会員の増加を図りたい。

< 1 > 効果的な広報・営業活動の展開

1. 公演内容に応じた効果的な広報活動

(本館)

- 9月文楽公演において、チケット昼夜通し券の購入者を対象に「懐中稽古本」(沼津の段)を進呈する「通し観劇キャンペーン」により、夜公演の販売を強化した(引渡数:3,676冊)。
- 10月、11月、3月歌舞伎公演及び5月文楽公演では演目にゆかりのある地域での割引チラシ配布により公演の周知及び集客に努めた。
- 11月歌舞伎公演では、同じ演目を上演した9月文楽公演入場者に対し、さまざまな特典を受けられるチラシを配布することにより、公演を周知するとともに、文楽の観客の歌舞伎へ誘導する「ダブル観劇キャンペーン」を実施して、集客に努めた。
- 11月、3月歌舞伎公演では筋書、セミナー、舞台見学いずれかの特典が受けられる観劇プランの販売により、従来の団体のみならず、新規団体や長年利用が途絶えていた団体を掘り起こすことができた。
- 11月、3月歌舞伎公演では鑑賞教室公演を利用した学校向けに「ステップアップキャンペーン」を実施した。
- 11月に西武船橋店にて開催されたマスコットキャラクターイベント及び「ゆるキャラ®サミット in 羽生」(11月23日~24日、来場者約45万人)に「くろごちゃん」が参加することにより、普段は劇場へ足を運ばない方々に国立劇場及び公演の周知を図った。
- 「親子で楽しむ歌舞伎教室」において、東京都教育委員会や埼玉県教育委員会等の協力により、学校を通じて東京都及び埼玉県内の小学校高学年及び中学生に公演チラシを配布した。

(能楽堂)

- チラシ、ポスター、ホームページ、広報誌等による通常の広報とともに、公演によっては企画性を周知するため、特別チラシや特別パンフレットを作成するほか、ホームページにトピックス等を掲載した。
- 「能楽鑑賞教室」「夏休み親子で楽しむ能の会」「夏休み親子で楽しむ狂言の会」ではイラスト入りの分かりやすいパンフレットを作成し無料配布した。
- 開場30周年記念4月特別企画公演の新作能「世阿弥」上演に際しては、横尾忠則デザインによる特別ポスター・特別チラシを作成し、別冊プログラムを作成・販売した。
- 開場30周年に当たり、振興会ホームページに「国立能楽堂開場30周年記念特設サイト」を開設し、記念公演や能楽堂の事業の30年の歩みなど各種情報を発信した。(9月~1月)

(文楽劇場)

- チラシ、ポスター、広報誌等による通常の広報とともに、ホームページに公演トピックス等を掲載した。
- 演目ゆかりの地宣伝キャンペーンや友の会会員向けイベント「文楽のつどい」の開催を積極的に行って報道関係者を招き、マスコミへの情報提供に努めた。また、文楽技芸員の積極的なテレビ・ラジオ出演、視聴者プレゼントによる公演紹介、ラジオCM、デジタルサイネージによる公演広告等、多様な宣伝活動を展開した。
- 26年度の開場30周年記念公演を控え、26年3月27日に「国立文楽劇場開場30周年記念のつどい」を開催した(参加者570名、放送3件、新聞報道7件)。
- 文楽劇場では、公演宣伝キャンペーンを積極的に行い、マスコミへの情報提供等多様な広報活動を展開した。

7月12日 夏休み文楽特別公演「妹背山婦女庭訓」(地下ショッピング街「クリスタ長堀」)、報道3社取材。

7月17日 夏休み文楽特別公演「夏祭浪花鑑」(高津神社)、報道4社取材。

7月25日 夏休み文楽特別公演(天神祭船渡御「文楽船」)、報道3社取材。

8月26日 11月文楽公演「伊賀越道中双六」(三重県伊賀市)、報道5社取材。

※本館9月文楽公演と合同

10月16日 11月文楽公演「伊賀越道中双六」(三重県伊賀市)、報道4社取材。

※国立文楽劇場友の会会員向けのイベント「文楽のつどい」ゆかりの地バスツアー

3月16日 4月文楽公演「菅原伝授手習鑑」(阪急百貨店うめだ本店「祝祭広場」)、報道2社取材。

(国立劇場おきなわ)

- 開場10周年記念特別公演のラインアップと記念式典について11月12日に劇場ホワイエで記者発表を行っ

た。テレビ取材も入り公演の宣伝を盛り上げた。また、協賛による新聞広告を掲載した。

- ・ 新聞、雑誌等における広告及び県内自治体、学校等へのチラシ配布を継続的に行いながら、沖縄県庁（8月11日～8月16日）や那覇市内デパートでのポスター展（12月27～1月7日）により幅広い広報宣伝を行った。
- ・ 1月10周年記念特別公演「今日ぬ誇らしや」出演者による記者発表を行うなど、広報宣伝活動に務めた。
- ・ 21年5月から行っているラジオ番組の生コマースを継続して行い、自主公演出演者の協力による公演の宣伝に取り組んだ。
- ・ ホームページによる公演の見どころ紹介や、公演トピックスの掲載を昨年度に続き実施した。
- ・ 6月沖縄芝居公演「泊阿嘉」、5月研究公演「村々に伝わる組踊」及び11月企画公演「タイ舞踊」では、公演に因んだ地元の物産を販売する物産展やパネル展示などを行い、地元の賑わいの雰囲気演出し、公演を盛り上げた。

（新国立劇場）

- ・ 演目の制作発表やフォトコール（報道写真撮影会）を行い、より一層の情報提供に努めた。
 - 地域招聘公演 オペラ「三文オペラ」記者会見（4/16）
 - オペラ「夜叉ヶ池」記者会見（5/28）
 - 演劇「つく、きえる」フォトコール（6/3）
 - 演劇「アジア温泉」フォトコール（於：ソウル 6/10）
 - 演劇「ピグマリオン」制作発表（9/26）
 - 演劇「ピグマリオン」フォトコール（11/11）
 - 2014/2015 シーズンラインアップ発表会（1/17）
- ・ 演目別の広報については、プレスリリース、個別インタビュー、稽古場取材の実施など、きめ細かいマスコミ対応により、記事掲載の促進を行った。
- ・ オペラ（ツイッター、Facebook）、バレエ団（オフィシャルブログ、ツイッター、Facebook）、演劇（ツイッター）のそれぞれでSNSを運用し、公演への関心を喚起するとともにファンづくりに努めた。
- ・ 演劇部門で収集するDMリストに対し他ジャンルの情報を提供した。
- ・ 観劇団体に対し、レクチャー付き観劇プランを提案、実施した。
- ・ 演劇「アジア温泉」「ピグマリオン」において、それぞれ韓国語、英米文化を教える学校等に情報提供を行い、勧誘した。
- ・ カード会社、生協等へのチケット販売依頼を行った。
- ・ TBSとの共催を推進し、テレビCM、ラジオ放送、インターネット配信を展開した。

2. ホームページにおける情報の内容の充実、メールマガジンの配信

（1）ホームページアクセス件数

日本芸術文化振興会ホームページの年間アクセス件数：2,623,429件／目標2,000,000件（達成度131.2%）
（内、45,052件が携帯電話からのアクセス）

国立劇場おきなわホームページの年間アクセス件数：374,989件／目標216,000件（達成度173.6%）

新国立劇場ホームページの年間アクセス件数：4,604,571件／目標2,500,000件（達成度184.2%）

（2）ホームページの内容の充実

- ・ 振興会ホームページについては、公演情報をはじめとし、トピックス情報などより広範な情報の追加・更新等を柔軟かつ迅速に行い、新鮮な情報を多数提供することで、利用者にとって利便性の高いホームページを目指すと共に、リピーターによるアクセス数の増大を図った。
- ・ 振興会ホームページについては、公演のタイムテーブルや休演者情報の掲載等、柔軟かつ迅速に実施した。特に、電話での問合せが集中する荒天時の公演実施情報については、全館で統一的に掲載することとした。
- ・ ホームページ上でアピール効果の高いプロモーションエリアを積極的に活用することにより、利用者にとって見やすく、探しやすい情報提供に努めた。
- ・ 能楽堂開場30周年に際し特設サイトを開設した。記念公演案内の他、能楽堂の概要や養成研修事業について、特別展示の案内などを提供し好評であった。（9月～12月）
- ・ 能楽堂の公演情報として、早期（25年1月）に30周年記念公演の番組を掲載し、団体観劇の受付を開始

して、集客を図った。

- ・ 文楽劇場では、公演直前や公演中ホームページに公演トピックス（69件）を掲載し、集客を図った。
- ・ 文楽劇場では、主に関西在住の作家・アーティスト等に文楽を観劇してもらい、エッセイ（29件）をホームページ「文楽かんげき日誌」に掲載した。（アクセス数 36,164件）

(国立劇場おきなわ)

- ・ 公演の見どころやトピックス情報を随時掲載し、利用者の利便性を高めた。

(新国立劇場)

- ・ ホームページの利便性を高めるために、情報項目の整理を行い、大幅なデザイン改修を行い、会員向けページとともに内容を充実させた。情報の迅速な公開に努め、新国立劇場の活動に対する理解向上を図った。
- ・ 演目ごとの特設サイトを作成し、詳細な公演情報の提供や動画等のコンテンツの充実に努めた。演劇公演では演目ごとに公演ブログを開設し、チケット情報、稽古の様子、公演準備の様子、公演の背景に関する専門家による解説や考察などを掲載した。
- ・ 23年度に開始したバレエ団ブログ、24年度に開始した演劇ツイッター、オペラ Facebook に加え、25年度にはオペラツイッター、バレエ団ツイッターおよび Facebook を開始した。稽古や公演準備の様子、チケット情報などを迅速かつ継続的に発信し、公演へのより一層の関心を喚起するとともに、ファンづくりに努めた。
- ・ 研修所ページへのアクセスをより分かりやすく工夫するとともに、研修風景の動画や最新の修了生の活躍状況など、より一層の情報提供に努めた。また、昨年度に引き続きオペラ研修所ブログ、演劇研修所 Facebook などの情報発信手段を用いて、研修や研修公演準備の様子などを継続的に発信し、研修所の活動に対してより一層の理解促進を図った。
- ・ 動画中継システム (Ustream) を用いて、トークイベントなどの一般観客向け企画をインターネット上で生中継した。これにより新国立劇場の活動のより一層の周知を図った。
- ・ ニュースリリースをホームページに掲載し、より一層の情報公開に努めた。

(3) メールマガジンの配信

- ・ 国立劇場のメールマガジンの配信（月2回）を行い、公演情報、公演に関するイベント、その他事業等の広範な情報を掲載するなど内容の充実に努め、タイムリーな広報を行った。メールマガジン登録者数は、前年度から 8,508人増加し3月末で 45,394人となった。
- ・ 国立劇場おきなわメールマガジン会員数は、505人（26年3月末）
- ・ 新国立劇場では eメール Club 会員（平成 26年3末日現在、9,890名）を対象に、発売告知、公演直前告知、公演関連情報周知、公演初日後の評判、イベント情報、キャスト交代のお知らせなどを随時配信した。

3. 広報誌の発行

一般向け広報誌として、日本芸術文化振興会ニュース、国立劇場おきなわ情報誌「華風」、新国立劇場情報誌「ジ・アトレ」を毎月発行した。また、会員組織の会員に対し会報による情報提供を行った。

また、以下の概要等を作成した。

- ・ 「独立行政法人日本芸術文化振興会概要（日本語）」（25年6月作成）
- ・ 「独立行政法人日本芸術文化振興会要覧」（25年8月作成）
- ・ 「独立行政法人日本芸術文化振興会年報 平成 24年度」（25年11月作成）
- ・ 「公益財団法人国立劇場おきなわ運営財団要覧」（25年7月作成）
- ・ 「新国立劇場 2013/2014 シーズンガイド」（25年6月作成）
- ・ 「新国立劇場 平成 24年度年報」（25年9月作成）

4. シーズンシートやセット券等の販売

- ・ あぜくら会会員向けに、10月から1月の歌舞伎公演の各三日目の入場券（座席位置は4公演同一）をセットにした「三日目の会」の販売を行っている。4公演の入場券を一度に購入できる利便性を一般にも適用するため、24年度に引き続き、25年度も販売の対象を一般にも拡大した。加えて、3月歌舞伎公演においても「三日目の会」に準じた販売方法を行い、あぜくら会員のチケット確保の一助とした。（10月～1月の4公演分 2,176枚）

- ・ 公演形態に合わせてセット割引や通し割引を実施した。歌舞伎 4 公演特別セット券の販売を限定ステージで行った（10 月～1 月の 4 公演分 216 枚）。また、舞踊・邦楽等の短期の公演でも内容の異なる 2 回公演の場合は、同時に購入すると割引となるセット割引を行った（8 月舞踊 14 枚、10 月舞踊 94 枚（文楽劇場）、11 月舞踊 72 枚、3 月舞踊 8 枚、10 月邦楽 12 枚）。
- ・ 親子を対象とする公演において、親子セットの割引料金を設定して好評を得た。
- ・ 文楽劇場では、一演目だけを鑑賞する幕見席の販売を引き続き行い、好評を得た。また、通し狂言（11 月文楽）では通し割引（1,226 枚）、10 月舞踊公演においてはセット割引（94 枚）を行った。
- ・ 国立劇場おきなわでは友の会会員向けに 10 周年記念特別公演の 1～3 月公演セット券を限定 50 セット販売し、好評であった。

（新国立劇場）

- ・ 新国立劇場では、オペラ、バレエ、現代舞踊の 2013/2014 シーズンセット券の販売を平成 25 年 1 月 20 日より継続して行い、2014/2015 シーズンセット券の販売を平成 26 年 1 月 20 日より行った。
- ・ 演劇においても、芸術監督が企画するテーマに沿った演目をセットにし「with 一つながる演劇」（「『効率学のスズメ』」、「アジア温泉」、「つく、きえる」の 3 公演）、「四つのドラマと出会う・・・秋から冬」（「OPUS/作品」、「エドワード二世」、「ピグマリオン」、「アルトナの幽閉者」4 公演）と題し、特別割引通し券として販売した。
- ・ 現代舞踊「中村恩恵×首藤康之」においては、A、B プログラムの通し券やペアチケットの販売を行った。

5. 旅行代理店・ホテル等との連携強化による団体観劇の促進、「法人会員サービス」についての検討

- ・ 旅行代理店と連携を行い、団体観劇を企画商品として広く周知し、団体観劇の誘致を行った。
- ・ ホテルとの連携により宿泊客への公演の周知及びチケットの販売を行った。また 26 年度運用開始予定の「法人会員サービス」でより簡便に利用できる旨、周知を行った。
- ・ 26 年度より運用開始予定の「法人会員サービス」の具体的な運用について検討を行った。また利用を見込まれる団体に対して周知を行った。
- ・ 外部の旅行代理店（JTB）の外国人旅行者向けホームページにて、歌舞伎公演の告知及びチケットのインターネット受付をし、合計 74 枚の販売実績となった。
- ・ 国立劇場おきなわでは、ホテルや旅行業等の観光業界に無料巡回バスや無料団体送迎バスサービス等の取組を PR し、連携の強化・劇場知名度の向上に努めた。その結果、劇場観劇がバスツアーで実現するなどの成果があった。

（新国立劇場）

- ・ 都内ホテルとの連携によるオペラ公演に関する観劇プランを実施した。
- ・ 若年層の観客を開拓するための登録制の特別優待制度「アカデミックプラン」を継続して提案した。

6. おすすめキャンペーンの実施

- ・ 全役職員が個々に知人や関連コミュニティー等に対して積極的に観劇を勧誘する「おすすめキャンペーン」を行った。
 - ・ 5 月文楽公演 23 件 91 枚
 - ・ 6 月歌舞伎鑑賞教室 14 件 76 枚
 - ・ 7 月歌舞伎鑑賞教室 11 件 120 枚
 - ・ 9 月文楽公演 33 件 143 枚
 - ・ 10 月歌舞伎公演 18 件 283 枚
 - ・ 11 月歌舞伎公演 8 件 92 枚
 - ・ 12 月歌舞伎公演 10 件 48 枚
 - ・ 12 月文楽公演 12 件 52 枚
 - ・ 12 月文楽鑑賞教室 9 件 10 枚
 - ・ 1 月歌舞伎公演 23 件 207 枚
 - ・ 2 月文楽公演 20 件 175 枚
 - ・ 3 月歌舞伎公演 27 件 209 枚
- 累計：208 件 1,506 枚

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 振興会ニュースの配布先を拡大することにより、より積極的な振興会の公演情報提供に努めた。
- ・ ホームページに、公演情報だけではなく関連するイベント、特設サイト等を掲載することにより、利用者が公演に一層の興味関心を抱くよう誘導するほか、プロモーションエリアの積極的な活用により、観客層に必要な情報の提供に努めた。
- ・ 定期的に発行する広報誌と合わせて、速報性の高い情報についてはホームページやメールマガジンを活用し、インターネット媒体と紙媒体の双方の特性を活かした広報活動を行った。
- ・ 9月文楽公演と11月歌舞伎公演が、同じ演目「伊賀越道中双六」となったことを営業面でも大いに活用し、相乗効果を狙った「ダブル観劇キャンペーン」など、さまざまな集客に向けた働きかけを展開した。
- ・ 11月及び3月歌舞伎公演で、利用者にとってお得感があり、また観劇の楽しさを広げる「筋書付き観劇プラン」、「セミナー付き観劇プラン」及び「舞台見学付き観劇プラン」を販売した結果、従来から利用実績のある団体の利用に加えて、新規団体や長年利用が途絶えていた団体を掘り起こすことができた。
- ・ 11月及び3月歌舞伎公演で、歌舞伎鑑賞教室公演の利用実績のある学校向けに、本格的な歌舞伎の魅力を紹介し、団体観劇を勧める「ステップアップキャンペーン」を実施し、大きな成果を得た。(11月9件306枚、3月6件104枚)
- ・ 「親子で楽しむ歌舞伎教室」において、東京都教育委員会や埼玉県教育委員会等の協力により、学校を通じて東京都及び埼玉県内の小学校高学年及び中学生に公演チラシを配布した結果、「親子で楽しむ歌舞伎教室」は全日程ほぼ売切れとなった。また「社会人のための歌舞伎鑑賞教室」も多くの入場者を得るなど相乗効果があった。
- ・ 国立劇場のマスコットキャラクター「くろごちゃん」を活用し、劇場内にとどまらず外部のイベントにも積極的に参加することにより、広く国立劇場をアピールするとともに伝統芸能に対する親しみの増加を図ることができた。
- ・ 文楽劇場の11月文楽公演「伊賀越道中双六」にちなんで、「文楽のつどい」で演目ゆかりの地を巡るバスツアーを実施した。その際に報道関係各社も招き、国立文楽劇場友の会会員向けのイベントを公演宣伝に繋げることができた。

(国立劇場おきなわ)

- ・ 7月より県の助成事業を利用した無料巡回バス及び無料団体送迎バスサービスを行い、一般客及び団体客の誘致に努め、出演団体の地元客や旅行会社による観劇バスツアーが実現するなどの成果を上げた。

(新国立劇場)

- ・ 新国立劇場では、シーズンラインアップ記者発表を皮切りに、ジャンルや演目の特性に合わせてそれぞれきめ細かい広報活動を行った。演目の特性に合わせた話題を提供することで、公演紹介記事の掲載や放送につなげ、メディアと観客の期待感を醸成した。
- ・ ITを活用した情報発信について、ホームページのデザイン改修、Facebookの導入、ブログでの情報提供、動画の活用など様々な面で発展させ、きめ細かく情報を発信できた。既存の観客に好評を博するとともに、新規観客開拓効果もあった。
- ・ 演劇公演のDM会員にも他ジャンルの公演情報を提供することにより、一定の成果を得た。
- ・ 2014/2015シーズンセット券の販売状況は、3月末時点で昨シーズンの販売状況よりも良好に推移している。オペラ、舞踊部門について新たな芸術監督が就任し新風を吹き込むことに対する期待感をうまく販売に結びつけることができつつある。
- ・ 演劇部門では、芸術監督が企画するテーマに沿った演目を特別割引通し券としてセットしたことにより、作品へのより深い興味と理解を観客に提案でき、全体的な売上向上につながった。
- ・ 演劇「ピグマリオン」(7,326枚)、「アジア温泉」(1,910枚)、「OPUS/作品」(1,669枚)、バレエ「くるみ割り人形」(2,468枚)、オペラ「リゴレット」(2,450枚)などで、学校を中心とした多くの団体観劇があった。学校が鑑賞行事として選びやすい演目、時期、キャパシティを準備できれば大きな集客に結びつけることができることが示唆された。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・ 今後もジャンルや演目の特性を見据え、きめ細かな広報宣伝営業活動を続けていく。

<2> 会員組織の運営、会員向けサービスの充実

1. あぜくら会

(1) 会員向けサービスの充実

- ・ あぜくら会では、イベントに参加できなかった会員のために、振興会ホームページ上の会員向けページにイベントレポートを掲載し、併せてパソコンを持っていない会員のために、会報にもレポートを掲載した。
- ・ 9月より、あぜくら会員募集のためのポスター・チラシのデザインを一新し、会員増加を計った。
また、11月にあぜくら会ホームページを見やすくリニューアルしたほか、7月にはインターネットでの資料請求を可能とするなど、今後の会員になるであろう観客に対するサービスの努めた。
- ・ 24年度に行ったあぜくら会員モニター調査においてもっとも希望の多かったバックステージツアーを7月26日に実施した。200人の定員に対し588人もの応募があり、抽選にもれた会員の希望が多いことから、26年度は回数を増やし、合計400人で再度実施することとした。
- ・ あぜくら会員限定で「国立能楽堂開場30周年記念『あぜくらの夕べ』」を有料公演として実施した(12月17日、出演：野村万作、野村萬斎、野村裕基)ところ、大変好評で、チケット発売開始40分で売切れとなった。また、能楽堂公演を3回以上観劇した会員にチケットケースをプレゼントするなど、会員の購買意欲を高めた。
- ・ あぜくら会員の要望を踏まえ、26年3月号の会報より、文楽劇場で実施する文楽公演の配役表を新たに掲載するなど、会報の内容の充実を図った。

(2) 会報の発行(計画：毎月発行)

「あぜくら」を毎月25日に発行した(計12回)。

(3) 会員向けイベント(計画：8回程度実施)

1. 「鶴澤清介を迎えて」

5月1日(水)14:00、伝統芸能情報館レクチャー室、参加者141人(応募者373人、当選者165人)

出演＝鶴澤清介、葛西聖司

アンケートの実施：回答数118人(配布数141人、回答率83.7%)

2. 「あぜくら会会員特別バックステージツアー」

7月26日(金)14:00、本館大劇場、参加者192人(応募者588人、当選者210人)

アンケートの実施：回答数176人(配布数192人、回答率91.6%)

3. 「豊竹英大夫を迎えて」

8月27日(火)14:00、伝統芸能情報館レクチャー室、参加者131人(応募者276人、当選者160人)

出演＝豊竹英大夫、葛西聖司

アンケートの実施：回答数118人(配布数131人、回答率90.0%)

4. 「天野社の舞楽曼茶羅供について」

9月5日(木)14:00、伝統芸能情報館レクチャー室、参加者92人(応募者118人、当選者117人)

出演＝遠藤徹(東京学芸大学准教授)

アンケートの実施：回答数80人(配布数92人、回答率87.0%)

5. 「歌舞伎へのいざない」－11月歌舞伎公演『通し狂言伊賀越道中双六』にちなんで－

10月7日(月)18:00、本館小劇場、参加者280人(応募者311人、当選者308人)

出演＝一龍斎貞水、上村以和於、ペリー荻野

アンケートの実施：回答数255人(配布数280人、回答率91.1%)

※あぜくら会員のほか、一般にも参加者を公募した。一般の参加者数223人。

6. 「尺八の魅力」－稀曲の会－にちなんで

12月3日(火)14:00、伝統芸能情報館レクチャー室、参加者134人(応募者131人、当選者164人(同伴者含む))

出演＝善養寺恵介、田中隆文(邦楽ジャーナル編集長)

アンケートの実施：回答数83人(配布数134人、回答率61.9%)

7. 国立能楽堂開場30周年記念「あぜくらの夕べ」

12月17日(火)18:30、国立能楽堂、有料、指定席、参加者600人(購入者401人)

出演＝野村万作、野村萬斎、野村裕基ほか

アンケートの実施：回答数 429 人（配布数 600 人、回答率 71.5%）

8. 「桐竹勘十郎を迎えて」

2月4日(火)14:00、伝統芸能情報館レクチャー室、参加者 140 人（応募者 636 人、当選者 167 人）

出演＝桐竹勘十郎、小玉祥子(毎日新聞学芸部編集委員)

アンケートの実施：回答数 123 人（配布数 140 人、回答率 87.9%）

(4) アンケート調査

- ・ 「あぜくらの集い」について毎回アンケート調査を行った。（配布数 1,710 枚、回答数 1,382 枚）
- ・ アンケート結果として、「あぜくらの集い」は好評で継続を望む声が多く、開催数・開催内容・多人数が参加できる会場での開催を希望する意見もあった。また、今年度実施したバックステージツアーに関しては、継続実施の希望が多く、26 年度は回数を 2 回に増やし、定員を 200 人から合計 400 人に拡大して実施する。

(5) 会員数

在籍者数（対前年度）	目標会員数	利用枚数
17,935 人（+306 人）	18,000 人	93,172 枚

2. 国立文楽劇場友の会（文楽劇場）

(1) 会員向けサービスの充実

- ・ 好評の「観劇ラリー」を今年度も実施し、年間 4 回の文楽公演の入場券を購入した会員に記念品を進呈した（達成者 1,042 名）。
- ・ 引き続き、夏休み文楽公演において会員が引率する子ども料金を設定し、販売した。
- ・ 会員数増のための対策として、入会申込書のリニューアルや申込書設置場所の増設、会員特典の告知のほかに、申込時のプレゼント見本（解説書 1 冊・お食事割引券 1 枚進呈）の掲示を行った。また、「文楽のつどい」のスナップ写真等をホームページに掲載し、友の会の魅力を強調した。

(2) 会報の発行（計画：年 6 回発行）

- ・ 「国立文楽劇場友の会会報」を 4、5、7、9、11、2 月に発行した（計 6 回）。

(3) 会員向けイベント（計画：6 回程度実施）

「文楽のつどい」を 4 回開催し、参加者は 461 人となった。

1. 「夏休み文楽公演にちなんで」

7月10日(水)18:30、文楽劇場小ホール、参加者 152 人（応募者 238 人、当選者 190 人）

内容：夏休み文楽特別公演「夏祭浪速鑑」にちなみ、澤井浩一（大阪歴史博物館学芸員）の講演及び公演記録映像の上映、広瀬依子（雑誌「上方芸能」編集長）を聞き手に迎えて、吉田玉女（文楽人形遣い）のお話と実演。

2. 「11 月文楽公演にちなんで」

10月16日(水)9:30～17:10、参加者数 41 人（応募者 95 人、当選者 48 人）

内容：「文楽のつどい」ゆかりの地バスツアーとして三重県伊賀市を訪問。文楽技芸員（鶴澤燕三・吉田和生・吉田玉女）もバスに同乗して、お話を聞きながら演目ゆかりの地へ旅行。途中、吉丸雄哉（三重大学准教授）の講演、技芸員とともに史跡等を散策。

3. 「初春文楽公演にちなんで」

12月18日(水)14:00、文楽劇場小ホール、参加者数 135 人（応募者 190 人、当選者 180 人）

内容：初春文楽公演「壇浦兜軍記」の見どころ・聞きどころを、久堀裕朗（大阪市立大学准教授）が講演。その後、桐竹勘十郎（文楽人形遣い）と久堀氏の対談。

4. 「4 月文楽公演にちなんで」

3月4日(木)18:00、文楽劇場小ホール、参加者数 133 人（応募者 307 人、当選者 170 人）

内容：4 月文楽公演「菅原伝授手習鑑」にちなみ、高島幸次（大阪大学招聘教授）の講演。旭堂南陵（講師）の講談。

(4) 会員数

在籍者数（対前年度）	目標会員数	利用枚数
7,842 人（+191 人）	7,450 人	23,510 枚

3. 国立劇場おきなわ友の会

(1) 会員向けサービスの充実

前年度に引き続き、チケット購入時に押されるスタンプをためて割引券などがもらえるポイントカード制度や、会員対象の講演会・バスツアーを実施した。また、国立劇場おきなわ開場10周年記念として、開場10周年記念公演のセット券の限定50セット販売、及び組踊公演について友の会ポイントを2倍付与するキャンペーンを行った。

(2) 会報の発行（計画：年4回発行）

「国立劇場おきなわ友の会会報」を6、9、1、3月に発行した（計4回）。

(3) 会員向けイベント（計画：3回程度実施）

年4回実施し、参加者数はのべ247人であった。

1. 「友の会バスツアー 『歌碑巡り 本島中部西コース』

（11月16日・11月23日 参加者数…11月16日：40人 11月23日：39人）

垣花武信氏を講師に、貸切バスにて沖縄中部西側の歌碑（丘の一本松の碑・吉屋チル琉歌碑・さとうきび畑の碑・特牛節の碑・谷茶前節の碑・踊り子の碑・恩納ナベ琉歌碑・屋嘉節の碑）を回った。

2. 「友の会半日バスツアー&公演鑑賞」（10月19日、参加者34人）

NP0法人うらおそい歴史ガイドの仲間孝藏氏をガイドに、末吉公園（玉城朝薫生誕300周年記念碑）・玉城朝薫の墓・浦添ようどれ館を見学後、劇場に戻り自主公演「組踊 西南敵討」を鑑賞した。

3. 「友の会新春講演会」（国立劇場おきなわ小劇場、2月8日、参加者134名）

芸術監督の嘉数道彦が、組踊・琉舞の楽しみ方等を解説した。第3期組踊研修生の上原信次と仲尾勝成が助手（実演）を務めた。

(4) アンケート調査

- ・ 「友の会バスツアー 『歌碑巡り 本島中部西コース』」（配布数79枚、回答数73枚）
回答者73人中、72人（98.6%）の参加者が満足・概ね満足と回答した。
- ・ 「友の会半日バスツアー&公演鑑賞」（配布数34枚、回答数27枚）
回答者27人中、27人（100%）の参加者が満足・概ね満足と回答した。
- ・ 「友の会新春講演会」（配布数134枚、回答数82枚）
回答者82人中、69人（84.1%）の参加者が満足・概ね満足と回答した。

(5) 会員数

在籍者数（対前年度）	目標会員数	利用枚数
2,073人（△120人）	1,700人	3,367枚

4. 新国立劇場クラブ・ジ・アトレ

(1) 会員向けサービスの充実

- ・ 郵送申込、先行予約、割引販売
一般発売に先駆けクラブ・ジ・アトレ会員に対し10%割引価格にて先行販売を行った。郵送申込と電話、窓口およびインターネット申込の2つの期間を会員サービスとして実施した。一般発売後は5%割引を実施した。
- ・ ポイントアップサービス
新国立劇場の会員であることの優遇感を高めるとともに、サービス向上を図るため、購入実績に応じてポイントを付与し、点数に応じて、プログラム引換券、ブッフエクーポン、ショップクーポン、チケットエクステンジ（同公演別日程でのチケット交換）、アドバンストリザーブ（会員先行よりさらに早い電話予約）、ゲネプロ見学、公演招待、「マエストロ」アフターシアターディナー券などを提供した。
- ・ 会員向けWebサイトの運営
会員がクラブ・ジ・アトレのサービスや手続きについて、詳細を容易に把握するための総合的な情報提供の場として「チケットとクラブ・ジ・アトレ Web サイト」を運営した。シーズンラインアップ及びセット券の詳細情報提供と申込受付を同サイトでを行った。
- ・ 会員募集
三井住友カードとの提携による入会促進キャンペーン（9～11月実施、抽選ゲネプロ招待、書籍贈呈等）、シーズン先出しチラシに伴う入会促進（11～1月実施、抽選ゲネプロ招待）及び、セット券販売

時の入会キャンペーンを行った。さらに演劇、舞踊のDM会員に向けて、限定入会特典とともに入会申込書同封のDMを4,376通発送した。

(2) 会報の発行（計画：毎月発行）

新国立劇場月刊会報誌「ジ・アトレ」を毎月発行した。（計12回）

(3) 会員向けイベント（計画：11回程度実施）

新制作オペラ、レパートリー作品のバレエにおいて、会員から希望を募り、抽選でゲネプロに招待する見学会を9回開催した（オペラ4演目・招待数140名、バレエ5演目・招待数150名）。

シーズンシート購入者及びシーズンセット券購入者を対象に、5月25日（土）に2012/2013シーズンオペラ・エンディング・パーティ、6月30日（日）に2012/2013シーズンバレエ・エンディング・パーティを、いずれもレストラン・マエストロにて開催した。出演者・ダンサーとの懇談、写真撮影を行った。

(4) アンケート調査

会員の興味・関心等を把握するべく、アンケート調査を実施している。その分析結果は今後の運営に役立てていく。

(5) 会員数

在籍者数（対前年度）	目標会員数	利用枚数
9,470人（+104人）	9,600人	60,652枚

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ あぜくら会入会申込書等の資料請求をホームページでも受け付けるように改善した結果、資料請求の要望者が前年度より524件増加した。
- ・ 20年度から始めた国立文楽劇場友の会の「観劇ラリー」が引き続き好評であった。
- ・ 会員モニター等において、あぜくら会員より多くの希望が寄せられていた「バックステージツアー」を実施し、非常に好評であった。今回の実績を踏まえ、26年度も実施を予定している。
- ・ 年4回実施した国立劇場おきなわ友の会バスツアーが非常に好評で、のべ247名の参加を得た。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・ あぜくら会員の新規入会者数は昨年度より増加したが、一方で高齢による退会者等もあり会員数の目標を達成できなかった。引き続き、幅広い世代に向けて周知を図り、新規会員の獲得に努めたい。
- ・ 国立劇場おきなわでは、24年度の特典企画公演「聞得大君誕生」の上演の影響で大幅に会員数が増加したが、今年度はその反動があり減少傾向がみられた（23年度1,657人、24年度2,193人、25年度2,073人）。しかし「聞得大君誕生」の再演決定や開場10周年記念キャンペーンなどの効果もあり、急増した24年度の会員数をほぼ維持することができた。引き続き、今後も新規会員獲得と既存会員の定着のため、会員サービスや広報活動の充実を図る。
- ・ 新国立劇場のクラブ・ジ・アトレは、引き続き会員の増加を図り、また、既存会員の方には新国立劇場の大切な固定客として定着いただけるよう、今後も日常的に業務の質の検証と改善に努めたい。

2-(5) 劇場施設の使用効率の向上等

《中期計画の概要》

(7) 劇場施設の使用効率の向上等

ア 各種事業について効率良く日程を組むなど、劇場施設の使用効率の向上を図る。

伝統芸能の保存振興又は現代舞台芸術の振興普及等を目的とする事業に対し、劇場施設を積極的に貸与する。

イ 利用者の利便性を高めるため、利用方法、空き日情報等をホームページ等により提供する。

また、利用者に対して提供するサービスの向上に努め、一層の利用促進を図る。

《年度計画》

2 伝統芸能の公開及び現代舞台芸術の公演

(7) 劇場施設の使用効率の向上等

ア 中期計画の方針に従い、劇場施設の使用効率の向上を図るとともに、伝統芸能の保存振興又は現代舞台芸術の振興普及等を目的とする事業に対し、劇場施設を次のとおり貸与する。

区分	貸与日数	使用効率
本館大劇場	75日	80%
本館小劇場	152日	77%
演芸場	103日	87%
能楽堂本舞台	180日	70%
文楽劇場	107日	68%
文楽劇場小ホール	99日	54%
国立劇場おきなわ大劇場	77日	43%
国立劇場おきなわ小劇場	77日	41%
新国立劇場オペラ劇場	50日	38%
新国立劇場中劇場	161日	65%
新国立劇場小劇場	115日	71%
(合計)	1,196日	64%

※ 使用効率は、使用可能日数のうち鑑賞機会の提供（主催公演、主催公演関連企画、貸し劇場公演）を行った日数の割合。

イ 各施設の利用促進を図るため、次の取組を行う。

- ① 各施設の設定等の概要、貸与手続き及び空き日等の情報をホームページへ掲載する。
- ② パンフレットやダイレクトメールにより広報を行う。
- ③ 利用希望者に対し適宜説明・見学等の機会を設け、劇場利用者の増加に取り組む。
- ④ 利用者に対しアンケート調査を実施し、その調査結果を踏まえ、サービスの充実を図る。
- ⑤ 他の劇場施設等の調査を引き続き行い、利用方法、利用料金等の検討を行う。

《実績》

1. 劇場施設の貸与、使用効率の向上

劇場	貸与日数		使用効率		(参考) 劇場稼働率
	実績	目標	実績	目標	
本館大劇場	91日	75日	82.0%	80%	95.4%
本館小劇場	149日	152日	75.6%	77%	90.7%
演芸場	96日	103日	88.2%	87%	95.2%
能楽堂	187日	180日	68.0%	70%	88.2%
文楽劇場	111日	107日	69.6%	68%	84.6%
文楽劇場小ホール	110日	99日	59.1%	54%	76.1%
小計	744日	716日	74.3%	73%	88.8%
国立劇場おきなわ大劇場	74日	77日	43.5%	43%	86.2%

国立劇場おきなわ小劇場	141日	77日	71.1%	41%	80.3%
小計	215日	154日	56.1%	42%	83.5%
新国立劇場オペラ劇場	51日	50日	47.3%	38%	98.6%
新国立劇場中劇場	144日	161日	68.9%	65%	95.7%
新国立劇場小劇場	115日	115日	74.7%	71%	99.1%
小計	310日	326日	64.0%	58%	97.8%
合計	1,269日	1,196日	68.7%	64%	90.5%

2. 劇場施設の利用促進を図るための取組

① ホームページ、パンフレット等による広報、説明会等の実施

(本館・演芸場)

- 施設、設備等の概要及び利用手続き方法、空き日情報、貸劇場公演情報等を振興会ホームページに掲載した。
- 劇場利用パンフレットを作成して過去の利用者・利用団体・関係団体等に配布・送付した。
- 施設申込受付期間の案内を、過去の劇場利用者へのダイレクトメールや、舞踊・邦楽関係の専門誌にも掲載して広報を行った。
- 施設申込受付期間や申込方法を、楽屋・稽古場等に掲示して周知を図った。
- 小劇場利用希望者に対し、申込受付開始前に、申込手続きについての説明及び施設・設備の見学会を開催し、劇場利用者の増加に努めた。
- 大劇場・小劇場とも、初めての利用者や利用を検討している方からの希望に応じて、随時劇場見学等の案内を行った。
- 舞台の保守点検日や整備期間の設定について、関係部署と調整しながら貸与希望者の使用希望日に沿うように調整した。

(文楽劇場)

- 劇場利用パンフレットを新たに作成し、より実態に即して分かりやすく、魅力的なものになるよう工夫した。
- 27年度以降の劇場利用に関して、申し込み開始時期を本館と同様に早期化し、楽屋内に掲示して周知を図った。
- 劇場利用者用として、コインバンダー付きのコピー機を楽屋入口に設置し、利便性を向上させた。

(国立劇場おきなわ)

- 保守点検日や整備期間の設定について、関係部署と調整しながら劇場利用希望者の使用希望日に沿うように調整した。
- 国立劇場おきなわでは、ホームページや施設利用パンフレットによる広報に加えて、国立劇場おきなわ友の会会報誌等に貸劇場利用に関する情報を掲載し、広報宣伝を行った。

(新国立劇場)

- 25年度を対象とする予約申込について、関係団体(約200団体)に郵送及びホームページにより通知し、上半期分は平成24年5月1日～5月14日の間に、下半期分は同年11月7日～11月20日の間に応募受付を行った。
- 劇場施設の使用の方法及び手続きについて分かりやすくホームページに掲載した。また、利用団体の公演情報について、新国立劇場ホームページへの掲載をより充実させた。

② アンケート調査の実施

施設利用者への一層のサービス向上を図るため、各館の劇場利用者に対しアンケート調査を実施した。

(本館・演芸場) 配布数190件、回答数23件(回収率12.1%)

- 施設利用者の全体的な感想については、良い91%・普通4%・悪い0%(無記入1件5%)であり、全般に好評の回答を得た。その他の意見として、劇場案内スタッフや施設利用係の対応が細やかで気持ちよく使用できたなど好評の回答を得た。

(能楽堂) 配布数120件、回答数33件(回収率27.5%)

- 全体の満足度は93.9%で概ね好評の回答を得た。その他の意見として、使用日決定の早期化希望、使用時間区分の時間帯延長等があった。

(文楽劇場)配布数 137 件、回答数 51 件 (回収率 37.2%)

- ・ 全体の満足度は 87.8%であった。

(国立劇場おきなわ) 配布数 100 件、回答数 33 件 (回収率 33%)

- ・ 全体の満足度は 93%であった。

満足度内訳:①舞台設備について 97% ②楽屋について 94% ③ロビー・客席について 94% ④舞台・楽屋職員の対応について 80% ⑤事業課貸付係職員の対応について 100% ⑥案内スタッフ職員の対応について 97% ⑦使用料金について 97%

(新国立劇場)

- ・ 施設利用者への一層のサービス向上を図るため、施設利用についてのヒアリング形式によるアンケート調査を実施した。

③ 利用方法、利用料金等の検討

- ・ 他劇場の施設見学・貸館事務手続き、舞台設備使用料 (音響機材料金) 等について調査し、料金改定等について検討を行った。

《数値目標の達成状況》

【劇場施設の貸与状況】

実績68.7%/目標64% (達成度107.3%)

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 本館では、27年度の施設使用の申込みを25年12月に受付けた。前年度(26年度使用分)より受付期間を従来の2ヶ月間より1ヶ月間に短縮し、25年度はその2年目となるが、利用者にも周知され混乱なく受け付けられた。
- ・ 本館では、「27年度小劇場申込抽選会」で、会場に施設利用システム搭載のパソコン等を設置し、受付から抽選、施設使用申込書や内定通知書発行までを短時間で処理することができた。
- ・ 演芸場の施設使用の申込みについては、前年度(26年度使用分)より申込み受付開始を早期化しているが、27年度使用分の受付においても、受付案内の館内での設置や利用実績のある顧客へのダイレクトメール送付など周知に努め、貸与日数の増加に努めた。
- ・ 文楽劇場の施設使用の申込みについて、27年度以降の使用分より、申込み受付開始を本館と同じく前々年度(25年12月～)に早期化し、貸与日数の増加に努めた。
- ・ 国立劇場おきなわでは、使用効率において大劇場・小劇場とも年度計画目標を達成することができた。特に小劇場は41%の目標に対し実績は70%を超え、効率的に劇場を運用することができた。
- ・ 国立劇場おきなわでは、稽古室利用者の要望に応え、7月1日から稽古室の利用時間を午後11時30分まで延長し、利用者の使いやすい施設利用環境を整えた。
- ・ 新国立劇場の各劇場とも、高い稼働率を維持し、効率的なスケジュールに基づいて使用することができた。特にオペラ劇場は、安全確保のため不可欠な日数以外を可能な限り圧縮し、貸与可能日を捻出した。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・ 本館小劇場が目標に届かなかったことから、劇場利用について一層の周知に努め、利用者の獲得を図りたい。

《24年度評価への対応》

【評価】

(文科省評価委員会)

- ・ おきなわ大劇場は、目標を大きく上回った小劇場に比べ、昨年度よりもさらに使用効率・稼働率が悪化していることから、その要因分析が必要である。(①)

(振興会評価委員会)

- ・ 新国立劇場については、毎年徐々に改善されているとはいえ、オペラ劇場の貸与実績及び使用効率が相変わらず低いことは憂慮すべきことである。25年度計画で掲げた50日の貸与目標が達成されることを要望する。(①)

【対応】

①貸与日数・使用効率の改善に向けた取組

国立劇場おきなわ大劇場の使用効率・劇場稼働率が悪化した要因としては、次のものが考えられる。24年の秋に国立劇場おきなわの大口顧客であった沖縄タイムス社が自前のホールを建築したことで、当劇場の利用が大幅減となった(対前年度比11日減)。また、個人で複数日数借りていた使用者が資金不足等を理由として利用を控えた(対前年度比6日減)。その他、会社の周年記念公演や、定期的に使っていた団体が使用希望日に空きがなかったことなどにより申込みを行わなかった。また、組踊公演の使用申込みが、組踊が22年にユネスコにより「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に記載された効果により、23年度は24日であったが、24年度は9日になり、15日減となった。大劇場から小劇場への借り換えや組踊を行う団体の減少などが要因として考えられる。

使用効率の改善対策として、貸劇場の利用申込みが少ない夏場の利用を狙った営業に力を注ぐとともに、秋口に集中する申込みの分散化を検討することが有効であると思われる。また、劇場利用の案内方法の工夫として、稽古室利用者や実演家の来場の機会を捉え、劇場を利用してもらうために積極的な営業を行っている。その際には、沖縄の他劇場等では一般的ではない、施設利用の基本サービスに舞台技術スタッフによる技術協力が組み込まれているなどの国立劇場おきなわの特色や、複数日利用の割引制度の案内を行っている。

新国立劇場オペラ劇場の貸与目標数は段階的に引き上げており、25年度については、適正な保守点検日や稽古日の設定に努め、舞台の安全と公演の質に留意しつつ、可能な範囲で貸与可能日を確保し、年間の貸与目標を50日に設定した。他団体等への劇場貸与と並行して、芸術大学・音楽大学との連携の一環として劇場貸与をおこなうなど、教育的・学究的見地からの劇場の有効活用についても模索した結果、25年度は50日の目標を達成することができた。引き続き、劇場施設の使用効率の向上に努めたい。

- I 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するため
とるべき措置

伝統芸能の伝承者の養成

伝統芸能の伝承者の養成 p.163

- 歌舞伎（俳優・音楽） p.172
- 大衆芸能（太神楽・寄席囃子） p.174
- 能楽（三役） p.176
- 文楽（三業） p.177
- 組踊（立方・地方） p.179
- 既成者研修 p.180
- 実施に当たっての留意事項 p.183

現代舞台芸術の実演家その他の関係者の研修

現代舞台芸術の実演家その他の関係者の研修 p.186

- オペラ p.192
- バレエ p.194
- 演劇 p.197
- 実施に当たっての留意事項 p.200

3- (1) 伝統芸能の伝承者の養成

《中期計画の概要》

(1) 伝統芸能の伝承者の養成

伝統芸能を長期的な視点に立って保存振興し、各分野の伝承者を安定的に確保するため、伝承者の養成を次のとおり実施する。

ア 国としての支援が必要となる分野に限定し、外部専門家等から、我が国の伝統芸能を保持するために引き続き伝承者を養成する必要があるとの意見が示された、歌舞伎、大衆芸能、能楽、文楽、組踊の各分野について実施するものとする。

実施に当たっては、各分野の充足状況等を把握するとともに、研修修了後の就業機会確保のための関係団体等との協議、外部専門家等からの伝統芸能の伝承状況等の意見等を踏まえ、養成すべき分野、人数、研修期間等を定めた上で計画的に実施する。

また、毎年度実施する際は、研修修了生の動向把握等により成果の検証を行い、伝承者の充実のため、対象とする分野、人数等について不断の見直しを行う。

イ 伝統芸能の各分野の伝承者について、重要無形文化財保持者等を講師として、実技研修・研修発表会等を中心とする実践的・体系的なカリキュラムにより、中期目標の期間中に次の人数の研修修了を目途とした養成研修を実施する。

- ① 歌舞伎俳優、音楽伝承者養成：18人程度（研修期間2年間又は3年間）
- ② 大衆芸能伝承者養成：8人程度（研修期間2年間又は3年間）
- ③ 能楽伝承者養成：基礎課程5人程度（研修期間：基礎課程3年間、専門課程3年間）
- ④ 文楽伝承者養成：6人程度（研修期間2年間）
- ⑤ 組踊伝承者養成：18人程度（研修期間3年間）

ウ 研修修了生を中心に伝承者の技芸の向上を図るため、次のとおり既成者研修を実施する。

- ① 既成者研修発表会
 - ・ 歌舞伎俳優既成者研修発表会（年2回程度）
 - ・ 歌舞伎音楽既成者研修発表会（年1回程度）
 - ・ 能楽既成者研修発表会（年3回程度）
 - ・ 文楽既成者研修発表会（年3回程度）
 - ・ 組踊既成者研修発表会（年1回程度）

② 能楽研究課程（1年間）

(3) 実施に当たっての留意事項

ア 養成研修事業についての国民の関心を喚起するため、研修修了者の活動状況を分かりやすく示すなど、広報活動を充実する。

イ 研修生等が実演経験を積む機会の充実及び学校等との連携による波及効果の拡大を図るため、児童・生徒等の体験学習や劇場外における様々な文化普及活動へ参画する。

ウ 伝統芸能の担い手を確保するための効果的かつ効率的な取組について検討する。

エ 幅広い分野で養成研修事業を実施している振興会の特長を活かし、合同講義の実施等、伝統芸能分野と現代舞台芸術分野の相互交流を実施する。

オ 国の文化振興施策との連携に留意しつつ、国立劇場、新国立劇場等の人材や施設を活用し、公演制作者や舞台技術者等の実地研修等の受入れ、協力を努める。

《年度計画》

3 伝統芸能の伝承者の養成及び現代舞台芸術の実演家等その他の関係者の研修

(1) 伝統芸能の伝承者の養成

ア 中期計画の方針に従い、次のとおり養成研修を実施する。

- ① 歌舞伎俳優・音楽
（歌舞伎俳優：研修期間2年）

- (a) 第21期生（10名程度）の1年目の養成を行う。
- (歌舞伎音楽)
- (b) 竹本第21期生（研修期間2年、4名程度）の1年目の養成を行う。
- (c) 鳴物第15期生の募集について検討を行い、実施する予定。
- (d) 長唄第6期生（研修期間3年、2名程度）の1年目の養成を行う。
- ② 大衆芸能
- (a) 太神楽第7期生（研修期間3年、2名）の3年目の養成を行い、修了を予定。
- (b) 寄席囃子第13期生の募集について検討を行い、実施する予定。
- ③ 能楽（ワキ・囃子・狂言：研修期間6年）
- (a) 第8期生（1名）の6年目の養成を行い、修了を予定。
- (b) 第9期生の募集について検討を行い、実施する予定。
- ④ 文楽（大夫、三味線、人形：研修期間2年）
- (a) 第26期生（5名程度）の1年目養成を行う。
- ⑤ 組踊（立方・地方：研修期間3年）
- (a) 第3期生（9名）の3年目の養成を行い、修了を予定。
- (b) 組踊第4期生の募集について検討を行い、実施する予定。
- イ 研修修了生を中心に伝承者の技芸の向上を図るため、次のとおり既成者研修を実施する。
- ① 既成者研修発表会を次のとおり実施する。
- (a) 歌舞伎俳優既成者研修発表会（2公演実施）
- ・ 歌舞伎会・稚魚の会合同公演（本館小劇場）8月17日～20日、8回
 - ・ 上方歌舞伎会（文楽劇場）8月24日～25日、4回
- (b) 歌舞伎音楽既成者研修発表会（1公演実施）
- ・ 音の会（本館小劇場）8月3日～4日、2回
- (c) 能楽既成者研修発表会（3公演実施）
- ・ 若手能（京都：観世会館）7月27日、1回
 - ・ 若手能（大阪：大槻能楽堂）1月18日、1回
 - ・ 若手能（東京：能楽堂）2月1日、1回
- (d) 文楽既成者研修発表会（3公演実施）
- ・ 文楽若手会（文楽劇場）6月22日～23日、2回
 - ・ 若手素浄瑠璃の会（文楽劇場小ホール）8月30日、1回
 - ・ 若手素浄瑠璃の会（文楽劇場小ホール）3月7日、1回
- (e) 組踊既成者研修発表会（1公演実施）
- ・ 子の会（国立劇場おきなわ大劇場）11月30日、1回
- ② 能楽について、研究課程を開講し、研修機会の拡大と伝承者間の交流を促進する。
- ウ 実施に当たっては、各分野の充足状況等を把握するとともに、研修修了後の就業機会確保のための関係団体等との協議、外部専門家等からの伝統芸能の伝承状況等の意見等を踏まえ、養成すべき分野、人数、研修期間等を定めた上で計画的に実施する。
- また、研修修了生の動向把握等により成果の検証を行い、伝承者の充実のため、対象とする分野、人数等について不断の見直しを行う。
- (3) 伝統芸能の伝承者の養成及び現代舞台芸術の実演家その他の関係者の研修の実施に当たっての留意事項
- ア 養成研修事業についての国民の関心を喚起するため、研修修了者の活動状況等をホームページ等で紹介するなど、事業の周知に努める。
- また、研修生募集について、ホームページでの告知、研修紹介DVDの活用、研修見学会の実施等により周知し、応募者の増加を図る。
- イ 研修生等が実演経験を積む機会の充実を図るとともに、伝統芸能及び現代舞台芸術の振興・普及のため、研修生及び研修修了生によるワークショップ等を全国の文化施設、学校等と協力して実施する。
- また、外部公演への出演依頼に積極的に応じて、文化普及活動への参画に努める。
- ウ 伝統芸能・現代舞台芸術双方の研修生を対象とした特別合同講義を実施して、両分野の相互交流を図る。

エ 国の文化振興施策との連携に留意しつつ、国立劇場、新国立劇場等の人材や施設を活用し、公演制作者や舞台技術者等の実地研修等の受入れ、協力に努める。

《実績》

1. 養成研修の実施

(1) 養成研修の実施

区分	研修期間	研修実績	うち 修了者	年度計画	中期計画(25～29年度)		
					修了者累計	目標	
歌舞伎 俳優・音楽	俳優 21期(1年次)	2年	7名	—	10名程度	—	18名 程度
	竹本 21期(1年次)	2年	2名	—	4名程度	—	
	鳴物(休止)	—	—	—	—	—	
	長唄 6期(1年次)	3年	1名	—	2名程度	—	
大衆芸能	太神楽 7期(3年次)	3年	2名	2名	2名	2名	2名 程度
	寄席囃子(休止)	—	—	—	—	—	
能楽	8期(6年次)	基礎課程3年 専門課程3年	1名	1名	1名	1名	基礎課程 5名程度
文楽	26期(1年次)	2年	3名	—	5名程度	—	6名 程度
組踊	3期(3年次)	3年	9名	9名	9名	9名	18名 程度

(2) 研修発表会等の実施

- ・ 新人研修発表会(3月13日、本館小劇場)
太神楽第7期生の修了発表会、歌舞伎俳優第21期生、竹本第21期生、長唄第6期生の研修発表会を合同で実施。
- ・ 青翔会3回(6月10日・10月21日・3月10日、国立能楽堂)、東西合同研究発表会1回(8月27日、京都観世会館)
- ・ 第26期文楽研修生発表会(1月28日、文楽劇場小ホール)
- ・ 第3期組踊研修生第5回発表会(10月3日、国立劇場おきなわ大劇場)、第3期組踊研修修了発表会(3月5日、国立劇場おきなわ大劇場)

(3) 適性審査の実施

- ・ 歌舞伎俳優 第21期生:9月18日に適性審査を実施(受験者7名、合格者7名)。
- ・ 歌舞伎音楽(竹本)第21期生:9月26日に適性審査を実施(受験者4名、合格者2名)。
- ・ 歌舞伎音楽(長唄)第6期生:9月27日に適性審査を実施(受験者1名、合格者1名)。
- ・ 文楽第26期生:10月29日に適性審査を実施(受験者5名、合格者3名)。

(4) 募集・選考の状況

歌舞伎音楽(鳴物)、大衆芸能(寄席囃子)、能楽(三役)、組踊(立方・地方)計4コースの研修生募集を実施した。

コース	選考日	応募者数	受験者数	合格者数
歌舞伎音楽(鳴物)※	—	1名	—	—
大衆芸能(寄席囃子)	2月26日(水)	27名	26名	6名
能楽(三役)	2月25日(火)	7名	7名	5名
組踊(立方・地方)	11月9日(土)・ 10日(日)	20名	20名	10名

※ 歌舞伎音楽(鳴物)研修については、応募者が1名であったので、関係団体と協議のうえ、26年度は開講を見合わせ、再度募集と選考を実施することとした。

2. 既成者研修の実施

(1) 既成者研修発表会の実施

区分	実績	年度計画	公演名
歌舞伎俳優既成者研修発表会	2公演	2公演	「稚魚の会・歌舞伎会合同公演」「上方歌舞伎会」

歌舞伎音楽既成者研修発表会	1公演	1公演	「音の会」
能楽既成者研修発表会	3公演	3公演	「若手能」(京都公演・大阪公演・東京公演)
文楽既成者研修発表会	3公演	3公演	「文楽若手会」「若手素浄瑠璃の会(8月、3月)」
組踊既成者研修発表会	1公演	1公演	「若手伝承者発表会」

(2) 能楽研究課程の開講

能楽の既成者研修として引き続き、研修修了生と能楽師子弟を対象に研究課程を開講した。(受講者40名)

3. 伝承者の充実のための、対象とする分野・人数・研修内容等についての見直しに関する取組

- 本館で実施している歌舞伎、大衆芸能研修については、伝承者の活動状況の実態を調査し、研修修了生の動向の把握に努め、研修生・修了生の現状分析を行うとともに、引き続き、次年度の実施内容・募集内容について検討を行った。特に、大衆芸能に関しては、休止していた寄席囃子研修の次年度開講に向け、募集・選考試験の内容、養成人数、講師構成、研修カリキュラム、次期以降の養成計画等の諸項目について関係団体と協議し検討を行った。

また、募集を実施したが、応募者が1名であったため26年度の開講に至らなかった歌舞伎音楽(鳴物)研修について、関係団体等と協議し、27年度開講に向け、26年度に再度研修生の募集を行うこととした。

- 能楽研修については、引き続き全国の能楽公演の実施状況や研修修了生の活動状況について調査するとともに、昨年度、能楽(三役)の各流儀に対して実施した後継者養成に関するアンケートを基に、募集する役方・流儀、研修内容を検討し、見直しを行った。
- 文楽研修については、文楽協会と協議の上、伝承者の人数、年齢構成、公演の実施状況等を調査し、将来にわたる中長期的予測・展望の下に、外部専門家等の意見を踏まえながら、実施内容の見直しを行っている。
- 組踊研修については、組踊研修講師会議を4回開催し、研修生の発表会やカリキュラムの内容等について進捗状況を共有し、技芸の習得状況を踏まえた指導に努めている。また、研修修了生の動向の把握に努め、現状把握を行っている。さらに、外部専門家等の意見を踏まえ、26年度に開講する第4期についても従来どおりの人数・研修規模で養成を行うこととし、組踊研修生選考委員会を開催し、募集や研修内容等に関する検討を行ったうえで選考試験を実施した。

4. 実施に当たっての留意事項

(1) 広報活動の充実、応募者増加のための活動

(本館)

- 本館では、23年度に作成した全5コースを総覧したDVD(歌舞伎俳優・竹本・鳴物・長唄・太神楽の研修内容・実技指導の様子を映像・音声で紹介)を活用し、8月の既成者発表会2公演や3月の研修発表会のロビーで映写したほか、研修見学への対応時や研修説明会等でも活用し、養成事業内容の周知を図った。また、DVDの内容の充実化を図るため、一般に馴染みの少ない歌舞伎音楽について、素材映像の収録等の準備を行った。
- 研修説明会は、歌舞伎音楽(鳴物)研修の応募希望者を対象に、12月14日(土)、1月19日(日)の2回実施し、応募希望者のみならず、古典芸能に関心のある人々を含めた参加を得て、一般にも広く養成事業を周知するよう努めた。

(能楽堂)

- 能楽堂では、第9期生募集の広報活動として、DVD(ワキ方・囃子方のうち笛方と太鼓方・狂言方の研修風景)を作成し、能楽堂自主公演・研修発表会・既成者研修発表会の開催時にロビーで映写したほか、研修見学会(2回)等で活用した。
- 第9期能楽(三役)研修の募集コース(ワキ方・笛方・太鼓方・狂言方)の応募希望者を対象に、研修見学会を11月19日(火)、12月16日(月)の2回実施した。各コースの修了生が自らの体験や苦勞、能楽に対する思いを語り、参加者からも多くの質問が寄せられた。
- 開場30周年を記念しホームページ上に特設サイトを開設した。養成事業のページにおいて第9期生の募集広報、第1期から第8期までの研修修了生の紹介、ワークショップなどの普及・振興事業について掲載し、能楽(三役)研修の周知に努めた。

(文楽劇場)

- ・ 文楽劇場では、文楽研修の養成事業の周知を図るため、研修内容を紹介する広報用 DVD を作成するための素材映像の収録を行った。
- ・ 11 月から 2 月にかけて、文楽養成事業に関する新聞社の取材依頼に応じ、毎日新聞、日本経済新聞社、読売新聞社等に大きく取り上げられた。

(国立劇場おきなわ)

- ・ ホームページに「組踊伝承者養成」のページを設け、研修概要、研修修了生の活動状況等を掲載している。また、組踊研修概要リーフレットを更新して、研修生募集活動に活用するとともに、県内の芸能団体や学校等に配布して研修事業の広報に努めた。さらに、テレビ・ラジオ・新聞の取材を可能な限り受け入れ、その中で研修制度や募集について広く宣伝周知を行った。

(2) 研修生の実演機会の充実及び伝統芸能の振興・普及のための活動

- ・ 日本体育大学体操部主催第 45 回演技発表会（12 月 15 日（日）、於：国立代々木競技場第 2 体育館）に、歌舞伎俳優研修生 7 名が出演し、歌舞伎の立廻り・とんぼ等の演技を披露した。また、同発表会プログラムへの研修生募集告知の掲載や会場でのチラシ配布などの協力を得て、養成事業の普及と周知活動を行うことができた。
- ・ 能楽堂では、引き続き普及・振興事業として、全国の小・中学校等において「届けます。体験教室」（29 校）、文化施設等において「楽しもう！能と狂言」（7 件）を実施し、小学生たちが能楽に親しみを持つ機会を作るとともに、国立能楽堂研修能舞台において実施した「楽しもう！能の世界」（5 件）では、初心者から上級者まで満足度の高いワークショップを行った。また、24～25 年度に実施した普及・振興事業（56 件）をまとめ、報告書を作成した。
- ・ 国立劇場おきなわでは、「生徒のための組踊鑑賞教室『万歳敵討』」公演（10 月 25 日、11 月 15・16 日）に研修修了生を起用した。また、開場 10 周年記念式典祝賀公演「執心鐘入」（1 月 18 日）では全ての立方と主な地方に研修修了生を起用し、上演した。劇場外でも沖縄県立球陽高等学校（10 月 16 日）、沖縄県立与勝高等学校（12 月 17 日）、沖縄県立那覇西高等学校（12 月 19 日）の「芸術鑑賞会」に研修修了生が出演し、文化普及活動への参画に努めた。

(3) 伝統芸能分野と現代舞台芸術分野の相互交流

- ・ 五館合同特別講義、研修生交流会
12 月 12 日（木）11：25～13：45
講義：伝統芸能情報館レクチャー室（3 階）、交流会：第一会議室（事務棟 3 階）
講師：鳥羽屋里長（歌舞伎音楽長唄立唄演奏者、歌舞伎音楽（長唄）研修主任講師）
講義内容：「良き舞台人になるために」
参加者：研修生 46 名及び受講生 1 名（歌舞伎俳優 7 名、竹本 2 名、長唄 1 名、太神楽 2 名、太神楽受講生 1 名、能楽 1 名、文楽 3 名、組踊 9 名、オペラ 5 名、バレエ 6 名、演劇 10 名）

(4) 公演制作者・舞台技術者等の研修の受入れ、協力

歌舞伎鑑賞教室の地方公演、他団体の文楽公演において、職員の派遣を行い、現地の技術者等へ協力等を行った。

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 養成事業委員会において、今後の養成事業に反映を図るため、通例の事業実施状況・事業計画に加えて、年度評価結果報告並びに中期目標期間に係る評価結果報告についても議事を含め、数年来の養成事業の状況を提示するとともに、養成事業への評価の要点を説明し、中期的な計画の観点からも外部専門家から意見聴取ができた。
- ・ 21 年度から研修生へ提供している振興会宿舎については、現在千葉地区で 5 名（歌舞伎俳優研修生 4 名、長唄研修生 1 名）、大阪地区で文楽研修生 1 名が利用している。通常に比べ軽い家賃負担で利用できるため、研修期間中の生活費の軽減の助けとなっている。25 年度に実施した研修生選考試験合格者においても入居希望があり、地方出身者の応募や受入れを促進する要因となっている。

(本館)

- ・ 本館では、養成研修事業の周知を図るため、研修内容を紹介した広報用 DVD を既成者研修発表会等で映写したほか、見学対応や研修説明会等において活用し、動画映像によって、研修内容をより具体的に理解してもらうことができた。特に歌舞伎音楽（鳴物）研修生の募集に際して実施した研修説明会では、鳴物という芸能やその研修内容について、参加者から理解を得るための大きな一助となっていた。
- ・ 大衆芸能（寄席囃子）研修は、10年ぶりの募集のため、募集を待っていた応募者が集まったほか、ホームページやチラシ・ポスター、新聞・専門誌等、多方面に募集情報を周知した効果がみられ、広域から多くの応募者が受験し、三味線の素養を持つ人材を選考することができた。

(能楽堂)

- ・ 能楽（三役）研修では、25年度から研修発表会を有料とし、名称も「能楽研鑽会」から「青翔会」に改めた。養成研修としては初めての試みであったが、入場率は第1回 93.1%、第2回 84.2%、第3回 99.7%に達し、大きな成果を上げた。
- ・ 能楽堂では、第9期生募集にあたり、通常見ることができない講師対研修生1対1の研修の様子を撮影した DVD を、自主公演開催時や年4回の養成研修発表会等実施時にロビーで映写したほか、研修見学会や応募希望者への説明に利用するなど広く活用した。映像によって研修内容への理解を広めることができた。
- ・ 20年度から実施している能楽堂の普及・振興事業は6年目となり、今年度は新たに、長野（2校）・島根（5校）において「体験教室」等を行うとともに、音大生を対象とした能楽の体験教室を初めて実施した。また、20～23年度に実施した普及・振興事業をまとめた報告書に続き、24～25年度分をまとめた報告書を作成した。

(国立劇場おきなわ)

- ・ 23年度より開始した組踊既成者研修発表会は、3回目ということもあり順調な集客効果を上げた。組踊研修修了生が既成者研修をはじめ、自主公演や高等学校の芸術鑑賞会へ出演し、普及活動を充実させた。また、後に続く第3期研修生や第4期研修予定者にとっても、具体的な将来像を提示することになり、良い刺激となった。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・ 歌舞伎音楽（鳴物）研修生募集を実施したが、26年度の開講に至らなかった。関係団体等と協議し、27年度開講に向けて26年度に再度研修生の募集を行うこととした。今後、関係団体と連携を図り、募集方法等の工夫を検討していきたい。
- ・ 能楽堂では、研修生募集が6年ぶりということもあり、研修事業の周知に課題が残った。今後の募集広報についてはマスメディアの活用、振興会ホームページの充実、地方の能楽堂との連携等、充分検討を重ねていきたい。
- ・ 組踊研修では、研修修了生で構成する「子の会」の公演活動が盛んになるに伴い、上演に必要な組踊衣裳、道具等の貸出など、「子の会」公演に対する協力について一層の充実を図っていきたい。
- ・ 組踊伝承者の養成事業の更なる充実を図るため、中長期的な視野のもと、専門的観点から検討を行う養成事業委員会（仮称）の26年度設置に向けた取組を進める。

《24年度評価への対応》

【評価】

(文科省評価委員会)

- ・ 伝統芸能の伝承者の養成は意義のある事業であるが、国費を投入しているナショナルセンターとしては、養成すべき分野について不断の見直しが必要である。(①)
- ・ 研修修了生の定着率は76%であり、修了生の4分の1が転業している実態については、検証する必要がある。(①)
- ・ 伝承者に占める研修修了生の割合が極めて低い能楽（6.8%）、組踊（5.5%）については、その要因を検証する必要がある。(①)
- ・ 時代の変化に応じて、養成対象分野について見直しを行う必要がある。(①)

(振興会評価委員会)

- ・ 研修制度によって自国の舞台芸術を支える人材を輩出していることを、国民にもっと知ってもらう必

要がある。研修成果の発表会、全国での公開実演や講座などを継続的に実施することにより、才能のある若者たちに道を開き、職業選択の指針を示すことになるだろう。DVDの活用や公演会場での広報、ワークショップなども継続してほしい。(2)

- ・ 力をつけた研修修了生が将来の夢を持てるような環境整備、活躍できる場の用意など、研修の本来の意味が発揮できる方途を、これからも各分野で模索、検討する必要がある。(3)
- ・ 各研修生に合った研修の内容が工夫されることを今後も期待したい。また、継続的に研修の内容を見直すことで効率を高めることができる。引き続き講師の意見も積極的に取り入れて、より良いものにするための不断の努力を続けてほしい。(1)
- ・ 能楽の研修修了生が学校公演を行っていることを評価する。その際、他の伝統芸能も併せて紹介する工夫はないだろうか。また、各分野で地方での「ワークショップ」や「体験教室」を更に拡充してほしい。(4)

【対応】

①養成対象分野・研修内容等の不断の見直し

本館では、各分野に必要な伝承者について、充足している場合は事業を休止し、不足している場合は事業を再開するなどの方針の下、各講師並びに関係団体との連絡・協議による実情把握を図りながら不断の見直しを行っている。その中で、歌舞伎俳優数の現状に鑑み、且つ、出来るだけ若い時期に歌舞伎界に入った方が有効との観点から、研修期間を25年度より3年から2年とした。また、大衆芸能では、寄席囃子実演家が高齢化により激減している近年の実情から、関係団体と協議し、充足しつつある太神楽の研修を休止し、17年度以来休止していた寄席囃子研修を26年度より再開する。伝統芸能は、若年者にとって就業先としては特殊な世界であるが、貴重な伝承者を絶やさないため事業の継続に努め、今後も全研修分野に関して、研修内容を検討し続けていきたい。なお、研修修了生の定着率76%という数字は死亡者なども含んでいるため、そのまま4分の1が転業しているということではないが、その世界や入門先に合わず離れた者はおり、募集並びに研修過程で、情報提供、意志・志望の把握を継続し、一層工夫していきたい。

能楽堂で伝承者に占める研修修了生の割合が極めて低いのは、歌舞伎俳優・文楽に比べ研修事業の開始時期が遅いこと、研修期間が6年間のため平成25年度でまだ第8期を修了したところであること、養成対象の分野が多岐にわたっていることが理由として挙げられる。養成対象は、伝承者が充足しているシテ方を除いた三役(ワキ方・囃子方・狂言方)だが、囃子方には笛・小鼓・大鼓・太鼓の4分野があるので、実質的にはワキ・狂言と併せて6分野となる。各分野の充足状況の把握を図り、関係団体・講師等関係者と協議し、例えば囃子方の第8期生募集では小鼓を、第9期生募集では笛・太鼓を採用するなど、養成分野について每期見直しを行っている。研修内容についても講師等関係者の意見を踏まえ見直しを行っている。引き続き、中長期的な視野のもと、不断の見直しを行いながら実施していきたい。

文楽劇場における文楽研修の場合、関係団体とも協議して、分野(大夫・三味線・人形)、人員等を常に見直し、適切な構成となるよう配慮している。研修内容についても、講師等関係者の意見も踏まえながら、より効果的なカリキュラムの策定に努めている。

国立劇場おきなわでは、研修修了生の定着率は100%であるが、伝承者に占める研修修了生の割合が極めて低いのは、組踊の場合、養成を開始してから未だ10年であることが理由として挙げられる。養成対象は立方と歌三線が主であるが、第3期生募集では太鼓を、第4期生募集では笛を採用し、養成分野について每期見直しを図っている。なお、研修内容については、定期、臨機のきめ細かい講師会議を開催し、柔軟に見直しを継続して行っている。引き続き、中長期的な視野のもと、専門的観点から養成分野の見直しやカリキュラムの検討を行いたい。

②研修事業・成果の周知、より意欲の高い研修希望者獲得のための取組

本館では、研修成果の発表の場として、現役研修生の発表会を3月に、歌舞伎俳優並びに音楽の修了生による既成者公演2公演を8月に実施している。研修生、修了生の修練の場とするだけでなく、養成事業を広く周知する公演としても活用し、継続して行いたい。会場にて、募集チラシ・事業パンフレットの配布とともに、研修内容や実習授業を収録・編集したDVD映像を流しているが、今後も内容を充実させより関心を集めるよう図りたい。

また、DVDは、芸能や実習授業の内容を直接映像で理解するのに非常に効果が高いため、さらに内容の充実を図るべく素材映像の収録を継続したい。また、研修説明会や研修希望者からの問合わせ対応等にお

いて、研修時や就業後の環境や状況、伝統芸能の世界で舞台人として就業していく厳しさについても理解を促していきたい。

研修生募集については、全国の学校・教育関係、新聞・雑誌・テレビ・ラジオ等の媒体にも積極的に周知を図り、紹介してもらうことが出来た。NHK等メディアでの紹介は反響が多いので、今後も協力を要請していくとともに、ホームページも活用して、募集だけでなく研修事業とその意義の周知に努めたい。なお、研修説明会は研修希望者だけでなく、一般からの関心も高いので、関係者・講師の協力を得て充実させていきたい。

能楽堂では、能楽の振興と地方への普及を目的として、若手能楽師が地方へ赴き実技体験等のワークショップを行う「届けます！体験教室」（小・中・高校生対象）及び「楽しもう！能と狂言」（地方のホール等と連携、社会人対象）を実施している。これらのワークショップには研修修了生を積極的に起用して、養成研修事業・成果の周知に努めている。また、25年度は開場30周年にあたり、2月「東京若手能」公演で研修修了生を中心に大曲「道成寺」を上演して、開場翌年から実施してきた養成研修事業の成果を発表した。さらに、振興会ホームページの能楽堂開場30周年記念特設ページに研修修了生の氏名・写真等を掲載して、修了生が舞台上で活躍していることを紹介した。DVDの活用については、第9期能楽（三役）研修生募集にあたり、稽古の様子を収録したDVDを作成して、ワークショップ会場や自主公演の際は国立能楽堂ロビーで上映して活用している。

文楽伝承者の研修事業の広報活動や研修生や研修修了生が参加する公演・ワークショップ等を通じて、事業の意義や研修修了生が後継者の育成に大きな成果を挙げていることを周知し、国民に一層理解されるよう努める。研修希望者獲得のための取組としては、募集年次に限らず、優秀な人材の応募をより広く呼びかけるためにも、体験学習的なワークショップを実施することにより、実際に芸能に触れて興味を抱いてもらい、研修内容の理解をより深める工夫を行う。

国立劇場おきなわでは、ホームページに「組踊伝承者養成」のページを設け、研修概要、研修修了生の活動状況等を掲載している。また、組踊研修概要リーフレットを更新して、研修生募集活動に活用するとともに、県内の芸能団体や学校等に配布して研修事業の広報に努めている。研修成果を広く周知する取組として、研修生の発表会を年2回、研修修了生の発表会を年1回それぞれ開催している。さらに、県内のテレビ・ラジオ・新聞の取材を可能な限り受け入れ、その中で研修制度や募集について広く宣伝周知を行っている。また、研修発表会等の助演者等には、研修生募集に応募する可能性のある10代から20代前半の若手を起用し、研修制度への理解と事前に実体験できる機会を提供している。

③研修修了生支援の実施・方策の検討

本館では、研修修了生の就業受け入れ、環境整備等について、各関係団体等と引き続き緊密な関係を維持し、協議を進めていくとともに、修了生の現況の把握に努めたい。特に、既成者研修公演は、普段の公演では担えない役を演じることによって修了生の演技向上に寄与するのみならず、演目立てや配役等の企画準備段階から参画することにより、舞台人としての修練の機会となっており、意義あるものなので今後も継続したい。歌舞伎俳優は20期生までを輩出し、修了生が増えている現状から、より効果的な既成者公演の実施に向けて、出演・参加の在り方等を検討したい。また、大衆芸能・太神楽においては、修了生の一層の技芸向上のため週1回程度の既成者研修を実施しており、修了後の実態を踏まえて、今後も講師、修了生及び関係団体と協議しながら支援を継続していきたい。

能楽堂では、自主公演、各種ワークショップ、イベント等に研修修了生を積極的に起用して、活躍の場を提供するよう努めている。

文楽劇場においては、昭和52年から既成者研修発表会「文楽若手会」を年に1回開催し、既成者を含めた文楽研修修了生が活躍する場を設けており、さらに26年度は、文楽劇場に加えて本館小劇場において「文楽若手会東京公演」を実施する予定としている。また、大夫・三味線陣の育成を目的とする素浄瑠璃公演として、「若手素浄瑠璃の会」を年に2回開催している。

国立劇場おきなわでは、研修修了生が継続して組踊の技芸の向上を図ることを目的として、23年度から毎年度、既成者研修発表会を実施している。また、教育機関等に研修修了生で構成する「子（しー）の会」のパンフレットを配布し、ホームページには学校公演活動を紹介する活動を実施している。さらには、学校の芸術鑑賞会、県の企画公演等に研修修了生が活用されるよう積極的に働きかけを行っている。また、研修修了生には国立劇場おきなわ自主公演への出演ばかりではなく、大役への抜擢、バックステージツアーをはじめとする起用など幅広い活躍の場を提供している。

④文化普及活動等への参加機会の拡充

歌舞伎については、芸能の性格や出演契約の実態から修了生や研修生だけで地方に出向いてのイベント実施が困難であるが、例年、日本体育大学の演技発表会において、俳優研修生が立廻りを披露している。今後も研修生や修了生の活動に支障のない範囲で対応していきたい。

能楽堂では、能楽の振興と地方への普及を目的として若手能楽師が地方へ赴き実技体験等のワークショップを行う「届けます！体験教室」（小・中・高校生対象）及び「楽しもう！能と狂言」（地方のホール等と連携、社会人対象）を実施しているが、これらのワークショップには研修修了生を積極的に起用している。引き続き参加機会の拡充と、これら事業による養成事業の周知に努める。

文楽劇場で行っている文楽研修の場合、修了生は速やかに文楽技芸員として活動を開始する。その中で地方公演における広報活動のほか、各種普及活動にも積極的に取り組んでいる。

国立劇場おきなわでは、自主公演や劇場主催のイベント（親子劇場探検ツアー、開場10周年記念式典祝賀公演等）に研修修了生を積極的に起用するほか、県の企画公演等の出演依頼等に研修修了生で構成する「子（しー）の会」を紹介するなど、広く活動の場を提供している。「子（しー）の会」では、学校等を対象に実演や体験を交えた組踊ワークショップを開催するなどの活動を行っている。

3-(1)-① 歌舞伎（俳優・音楽）

《方 針》

国立劇場及びその他の劇場等において開催される伝統芸能の公演に歌舞伎俳優等実演者として出演し、伝統芸能の保存及び振興に寄与する若く優秀な技芸者を育成する。歌舞伎俳優研修、歌舞伎音楽（竹本）研修においては、1年目に基礎研修、2年目に専門研修と並行して、実践の場においてすぐに役立つような実技研修を実施する。歌舞伎音楽（長唄）研修においては、1年目に基礎研修、2年目に専門研修を行い、3年目に実践の場においてすぐに役立つような実技研修を行う。

《実 績》

1. 研修の実施

歌舞伎俳優（研修期間2年）：第21期生7名の1年目の研修を実施。

歌舞伎音楽・竹本（研修期間2年）：第21期生2名の1年目の研修を実施。

歌舞伎音楽・長唄（研修期間3年）：第6期生1名の1年目の研修を実施。

2. 主な授業及び回数、主な講師

区分	授業内容	主な講師	回数	
歌舞伎俳優	歌舞伎実技	澤村田之助、中村時蔵、市川團蔵、中村吉三郎、中村芝喜松、中村歌女之丞、中村京妙	232回	
	実技計585回	立廻り・とんぼ	尾上松太郎、坂東橘太郎、坂東玉雪、荒木達雄	91回
		日本舞踊	花柳寿楽、花柳錦吾、花柳典幸 藤間勘祖、藤間勘十郎、藤間弘	104回
		義太夫	竹本葵太夫、竹本朝輝	69回
		長唄	杵屋喜三郎、杵屋寒玉、杵屋吉之丞、杵屋勘五郎	57回
		鳴物	田中佐太郎、望月太左衛門、望月太左寛	32回
	その他計124回	作法・講義	鳥羽屋里長、中村歌女之丞、岩田宗富、山崎宗英、安藤宗美、近藤瑞男、影山なお子	30回
		体操	天森悦子	25回
		公演・稽古見学		20回
		衣裳・化粧・かつら	松本錦吾、海老沢孝裕	35回
		部外研修	尾上松太郎、坂東橘太郎、坂東玉雪 (日本体育大学体操部演技発表会に参加)	1回
	その他(発表会等)		13回	
合 計			709回	
竹本	実技計346回	義太夫(竹本)	竹本葵太夫、竹本谷太夫、竹本東太夫 鶴澤寿治郎、野澤松也、鶴澤泰二郎、鶴澤燕太郎、鶴澤宏太郎	258回
		義太夫	竹本駒之助、竹本朝輝、鶴澤津賀寿、鶴澤寛也	83回
		箏曲	川瀬露秋、高橋翠秋	5回
	その他計179回	作法・講義	鳥羽屋里長、景山正隆、倉田喜弘、近藤瑞男、影山なお子、岩田宗富	95回
		体操	天森悦子	23回
		公演・稽古見学		49回
	その他(発表会等)		12回	
合 計			525回	
長唄	実技計381回	長唄	鳥羽屋里長、鳥羽屋三右衛門、杵屋浄貢、杵屋巳太郎、杵屋五七郎、杵屋栄十郎、杵屋十三郎、杵屋長四郎、	363回

		和歌山富之、鳥羽屋里夕、杵屋巳津也、杵屋巳丞、杵屋正園、杵屋巳織	
	鳴物	田中佐太郎、望月太左衛門	18回
その他 計108回	講義	鳥羽屋里長、近藤瑞男、影山なお子	26回
	体操	天森悦子	32回
	公演見学		35回
	舞台稽古見学等	国立劇場公演	6回
	作法・着付	岩田宗富、山崎宗英、安藤宗美、中村歌女之丞	4回
	その他（発表会等）		5回
合 計			489回

3. 発表会

- 第7期大衆芸能（太神楽）研修修了発表会、第21期歌舞伎俳優研修生・第21期歌舞伎音楽（竹本）研修生・第6期歌舞伎音楽（長唄）研修生発表会を合同で実施した。

日時：3月13日（木）12：00開演、1回公演、会場：本館小劇場

入場料：無料、入場者数：430人

歌舞伎俳優研修生：歌舞伎「絵本太功記」、日本舞踊「雨の五郎」、立廻り「基本の型」、
長唄「五郎時致」

竹本研修生：義太夫「京鹿子娘道成寺」

長唄研修生：長唄「楠公 上の巻」、長唄「楠公 下の巻」

4. 適性審査の実施

- 歌舞伎俳優第21期生：9月18日に適性審査を実施（受験者7名、合格者7名）。
- 歌舞伎音楽（竹本）第21期生：9月26日に適性審査を実施（受験者4名、合格者2名）。
- 歌舞伎音楽（長唄）第6期生：9月27日に適性審査を実施（受験者1名、合格者1名）。

5. 募集・選考の状況、今後の募集に向けた取組・検討

歌舞伎音楽（鳴物）の研修生募集を実施した。

コース	選考日	応募者数	受験者数	合格者数
歌舞伎音楽（鳴物）	—	1名	—	—

- 歌舞伎音楽（鳴物）研修については、研修生募集を実施したが26年度の開講に至らなかった。問い合わせや、説明会への参加があったものの、1名の応募となり、選考試験の実施までには至らなかった。関係団体等と協議・検討のうえ、27年度開講に向けて26年度に再度研修生の募集を行うこととし、関係団体等に対しては改めて一層の協力を要請した。

【特記事項】

- 歌舞伎俳優研修は、名題下の高齢化や人員不足等の状況に対応するため、関係団体と協議し、25年度開講の第21期生より、研修期間を3年から2年に短縮することとした。
- 研修の一環として、講師及び関係者を前にした発表会（「あげざらい」）を実施した（一般非公開）。
○第21期歌舞伎俳優研修生 あげざらい
日時：11月19日（火）10：00～10：45
会場：本館大稽古場
内容：歌舞伎「壽曾我対面」工藤祐経の場（中村時蔵＝指導、市川團蔵＝指導）
出演：第21期歌舞伎俳優研修生7名

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- 予定された研修カリキュラムを順調に進め、歌舞伎俳優7名・竹本2名・長唄1名について初年度の研修を実施することができた。

- ・ 本館の研修発表会では、研修期間1年目に、研修生にとっては難役が課せられる歌舞伎演目「絵本太功記」を採り上げ、竹本研修生は義太夫の「京鹿子娘道成寺」の三味線を、長唄研修生は長唄と三味線の両方で「楠公」の上の巻、下の巻を演奏し、最初の修練と自覚を促す舞台となった。
 - ・ 歌舞伎俳優研修1年目に、「あげざらい」（試演会）を実施し、これまでの研修による各人の技芸習得状況を、講師以外の関係者へも公開し研修成果を把握してもらった。また研修生各人も技芸習得ができ、有意義な「あげざらい」となった。
 - ・ 研修内容を紹介する広報用DVDを新人研修発表会の開場時や幕間にロビーにて放映したところ、多くの来場者から高い関心を得た。また、募集に際して開催した研修説明会においても有効活用し、参加者の研修内容への理解を促進できた。
- 見直し又は改善を要する点
- ・ 研修生募集を実施したが26年度の開講に至らなかった歌舞伎音楽（鳴物）研修について、関係団体等と協議のうえ、27年度開講に向けて26年度に再度研修生を募集することとした。引き続き関係団体と連携をとり、募集方法等の工夫を検討していきたい。
 - ・ 適性審査前に研修辞退者が4名（歌舞伎俳優3名、長唄1名）あった。引き続き、環境の変化による不安や悩みなど、担当の職員が研修生と積極的にコミュニケーションをとることで各々人の状況について把握し、問題を取り除くよう努める。また、辞退者が出た際は、その原因について確認を行い、今後の対策の一助とする。

3-(1)-② 大衆芸能（太神楽・寄席囃子）

《方針》

国立演芸場及びその他の演芸場において開催される伝統芸能の公演に太神楽の実演者として出演し、伝統芸能の保存、普及及び振興に寄与する優秀な技芸者を養成する。太神楽研修においては、1年目に基礎研修を行い、2年目に上演頻度の高い演目を確実に習得できるよう重点的に研修を行う。3年目には一層高度な技の習得及び太神楽に必要な技芸である祭囃子等に取り組む。また、実演家の高齢化や減少により再開講を検討していた寄席囃子研修について、次年度の研修実施に向け、研修生の募集と開講準備を行う。

《実績》

1. 研修の実施

太神楽（研修期間3年）：第7期生2名の3年目の研修を実施。

2. 主な授業及び回数、主な講師

区分	授業内容	主な講師	回数
実技 計492回	投げもの	翁家和楽、翁家小楽、鏡味仙三郎、鏡味勇二郎、鏡味繁二郎	172回
	立てもの	翁家和楽、翁家小楽、鏡味仙三郎、鏡味勇二郎、鏡味繁二郎	150回
	獅子舞	鏡味仙三郎、鏡味仙三	16回
	日本舞踊	藤間理衣	44回
	囃子（太鼓・笛等）	望月太左衛、望月太左博巳、望月鏡子、望月美沙輔、鏡味仙志郎、鏡味味千代	89回
	寄席囃子	小口けい	21回
その他 計91回	作法・講義	鳥羽屋里長、倉田喜弘、翁家和助、柳家おじさん、山遊亭くま八、髭山なお子、鏡味味千代	18回
	体操	天森悦子	23回
	公演・稽古見学		35回
	舞台・楽屋実習		11回
	部外研修		1回

その他(発表会等)		3回
合 計		583回

3. 発表会

- 新人研修発表会

第7期大衆芸能(太神楽)研修修了発表会、第21期歌舞伎俳優研修生、第21期歌舞伎音楽(竹本)研修生、第6期歌舞伎音楽(長唄)研修生発表会を合同で実施した。

日時:3月13日(木)12:00開演、1回公演、会場:本館小劇場

入場料:無料、入場者数:430人

太神楽研修生:太神楽「傘・五階茶碗・曲椀」、囃子「祭囃子・寄席囃子」

4. 募集・選考の状況、今後の募集に向けた取組・検討

大衆芸能(寄席囃子)の研修生募集・選考を実施した。

コース	選考日	応募者数	受験者数	合格者数
大衆芸能(寄席囃子)	2月26日(水)	27名	26名	6名

- 大衆芸能(寄席囃子)研修生募集・選考に際し、実演者の現状や動向、それを踏まえた募集等の方向性などについて各関係団体担当者、講師と意見交換をするとともに、振興会の養成事業を取り巻く現状を把握してもらった。
- 大衆芸能分野において、関係団体である落語協会、落語芸術協会、太神楽曲芸協会と、寄席囃子研修の再開、太神楽研修の休止について引き続き協議をした。特に、寄席囃子については、関係団体の考え方や現状と今後の動向についてヒアリングを行い、研修再開の必要性を確認した。
- 寄席囃子実演家の現状に即して、応募資格等の募集内容、募集方法を協議・検討し、研修生の募集と選考試験を実施した。併せて、講師選定・カリキュラム等の構築についても、引き続き関係団体との連携・協力体制を維持し、次年度に寄席囃子研修を再開講する。
- 太神楽研修については、関係団体との協議の結果、第7期生の修了をもって当面休止とすることとした。

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- 研修カリキュラムでは、第7期太神楽研修生が研修期間修了年に当たり、より実践的な実習を充実させるよう配慮した。
- 大衆芸能(寄席囃子)研修は、10年ぶりの募集のため、募集を待っていた応募者が集まったほか、ホームページやチラシ・ポスター、新聞・専門誌等、多方面に募集情報を周知した効果がみられ、広域から多くの応募者が受験し、三味線の素養を持つ人材を選考することができた。
- 第7期太神楽研修生は、着実に実力をつけ、研修を修了することができた。次年度から実演家として就業する予定である。
- 研修発表会では、授業カリキュラムにおいて実技実習を行ってきた成果が出て、華やかな舞台であった。
- 太神楽研修において、関係団体の要請を受け、第7期の研修期間(3年間)の2年目から、受講生1名を受け入れたが、講師の協力・カリキュラムでの対応、研修生との協調が円滑に進んだことにより、2年間で順調に技芸・知識の習得が進み、26年4月から第7期研修修了生2名とともに、実演家として就業する予定である。

○ 見直し又は改善を要する点

- 研修生・講師・職員相互の円滑な意思疎通を図り、引き続き研修生の生活環境の改善に努めたい。
- 次年度において、休止していた寄席囃子研修を10年振りに実施することとなったので、関係団体と連携を密にして、その協力のもと開講準備を進め、研修体制を構築していきたい。

3-(1)-③ 能楽（三役）

《方針》

国立能楽堂ほか各能楽堂に出演する三役（ワキ方・囃子方・狂言方）の実演家を育成するため、第8期生に専門課程（3年間）の3年次の研修を行う。専門課程3年目（通算6年目）のカリキュラムでは、「小鼓」の専攻実技の確実な習得を目指すとともに、修了年次として「大曲」も履修する。楽屋実習、舞台実習など実践の場での研修による技能の習得も目指す。

《実績》

1. 研修の実施

能楽（三役）研修（基礎課程3年、専門課程3年）第8期生1名（小鼓方1名）の6年目の研修を実施。専攻実技と、副科（シテ謡・笛・大鼓・太鼓）の研修も実施し、成果を青翔会（3回）において発表した。

2. 主な授業及び回数、主な講師

区分	授業内容	主な講師	回数
実技 計 318 回	小鼓	観世豊純、観世新九郎	172 回
	シテ謡	観世清河寿、木月孚行	62 回
	笛	一噌庸二、藤田次郎	23 回
	大鼓	安福建雄、國川純、安福光雄、柿原弘和	40 回
	太鼓	観世元信、観世元伯	21 回
その他 計 192 回	講義 (五館合同特別講義)	鳥羽屋里長	1 回
	楽屋・舞台実習	観世新九郎	139 回
	公演・稽古見学等		45 回
	その他（発表会等）		7 回
合 計			510 回

3. 発表会

(1) 能楽研修発表会（3回実施）

・「第1回青翔会」

6月10日（月）16:00 開演、国立能楽堂能舞台

狂言「隠狸」、舞囃子「融」小鼓、能「胡蝶」ワキ

入場料金：正面 1,500 円・脇正面 1,000 円（学生 700 円）・中正面 700 円（学生 500 円）、障害者 2 割引

入場者数：584 人（入場率 93.1%）

・「第2回青翔会」

10月21日（月）16:00 開演、国立能楽堂能舞台

狂言「末広かり」、能「乱」ワキ・小鼓

入場料金：正面 1,500 円・脇正面 1,000 円（学生 700 円）・中正面 700 円（学生 500 円）、障害者 2 割引

入場者数：528 人（入場率 84.2%）

・「第3回青翔会-第8期能楽（三役）研修修了発表会-」

3月10日（月）16:00 開演、国立能楽堂能舞台

能「小鍛冶」ワキ、狂言「水汲」、半能「石橋」小鼓

入場料金：正面 1,500 円・脇正面 1,000 円（学生 700 円）・中正面 700 円（学生 500 円）、障害者 2 割引

入場者数：625 人（入場率 99.7%）

(2) 「東西合同研究発表会」（1回実施）

- ・「第44回東西合同研究発表会」（主催：京都能楽養成会 共催：大阪能楽養成会・国立能楽堂）

8月27日(火) 11:00 開演、京都観世会館
舞囃子「舟弁慶」「邯鄲」小鼓 入場者数：341人(入場率71.9%)

4. 募集・選考の状況、今後の募集に向けた取組・検討

能楽(三役)研修生の募集・選考を実施した。

コース	選考日	応募者数	受験者数	合格者数
能楽(三役)	2月25日(火)	7名	7名	5名

- ・第9期能楽(三役)研修生募集の広報として、ワキ方・笛方・太鼓方・狂言方の研修風景を撮影したDVDを作成し、自主公演開催時・研修発表会等開催時にロビーで映写した。また、「研修見学会」等にも活用した。

【特記事項】

- ・研修の一環として、講師及び関係者を前にした発表会を実施した(一般非公開、3回実施)。
 - ・「第17回稽古会」
日時：4月22日(月) 16:00開演、1回公演、会場：国立能楽堂研修能舞台
狂言「隠狸」、舞囃子「弓八幡」「融」小鼓、能「胡蝶」ワキ
 - ・「第18回稽古会」
日時：7月22日(月) 16:00開演、1回公演、会場：国立能楽堂研修能舞台
狂言「附子」、舞囃子「放下僧」小鼓、能「屋島」ワキ・アイ
 - ・「第19回稽古会」
日時：2月10日(月) 16:00開演、1回公演、会場：国立能楽堂研修能舞台
狂言「水汲」、半能「石橋 大獅子」小鼓

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・能楽(三役)研修では、25年度から研修発表会を有料とし、名称も「能楽研鑽会」から「青翔会」に改めた。養成研修としては初めての試みだったが、第8期生の修了年度のため、研修発表会の曲目としては異例の「大曲」で構成したことも要因となり、入場者(入場率)は第1回584名(93.1%)、第2回528名(84.2%)、第3回625名(99.7%)に達し、大きな成果を上げた。
- ・東西合同研究発表会には、京都・大阪の各養成会研修生等と研修生、東京の若手能楽師が参加し、交流を深めるとともに大きな刺激となった。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・第9期研修生合格者5名のうち1名が開講式前に辞退した。地方在住のため、研修期間中の経済的な不安が辞退した理由である。今後は、研修生宿舎制度を活用するとともに、募集時における説明を充実させるなどの方策を検討したい。

3-(1)-④ 文楽(三業)

《方針》

国立劇場、国立文楽劇場等で開催する文楽公演における大夫・三味線・人形の後継者を育成するため、2年間の基礎的研修を行う。1年目は、実技及び伝統芸能に関する全般的な知識の習得のための講義等、バランスのとれたカリキュラムで基礎的な実力を養う。

《実績》

1. 研修の実施

第26期生5名の1年目の研修を実施。

2. 主な授業及び回数、主な講師

区分	授業内容	主な講師	回数
実技 計 300 回	義太夫	豊竹咲大夫、豊竹英大夫、竹本千歳大夫、 竹本文字久大夫、豊竹呂勢大夫	51 回
	義太夫・三味線	豊竹嶋大夫、豊竹咲大夫、豊竹英大夫、竹本千歳大夫、 鶴澤清介	57 回
	三味線	豊澤富助、鶴澤清友、鶴澤清介、野澤錦糸、鶴澤燕三、 竹澤宗助	93 回
	人形実技	吉田和生、桐竹勘十郎、吉田玉女、吉田玉也、 豊松清十郎	99 回
その他 計 273 回	琴・胡弓	菊津木昭	14 回
	日本舞踊	山村若	7 回
	狂言・謡	茂山正邦、赤松禎英	10 回
	体操	天森悦子	6 回
	講義	鶴澤寛治、鳥羽屋里長、阪口弘之、高木浩志、倉田喜 弘、荻田清	56 回
	実習（舞台実習含 む）		92 回
	公演・稽古見学		75 回
	部外研修		6 回
	その他（発表会 等）		7 回
合 計			573 回

3. 発表会

- ・ 「第 26 期文楽研修生発表会」（1 月 28 日（火）14:00 開演、文楽劇場小ホール、入場者 154 名）
「二人三番叟」（人形専攻）
素浄瑠璃「菅原伝授手習鑑」寺入りの段（大夫専攻）

4. 適性審査の実施

- ・ 文楽第 26 期生：10 月 29 日に適性審査を実施（受験者 5 名、合格者 3 名）。
（専攻内訳：大夫専攻 1 名、人形専攻 2 名）

5. 募集・選考の状況、今後の募集に向けた取組・検討

- ・ 文楽養成事業を PR するためのポスターを作成した。また、次期募集に向けてリーフレット「文楽研修のご案内」を増刷した。
- ・ 文楽研修については、文楽協会と協議の上、伝承者の人数、年齢構成、公演の実施状況等を調査し、将来にわたる中長期的予測・展望の下に、外部専門家等の意見を踏まえながら、実施内容の見直しを行っている。

《自己点検評価》

- 良かった点・特色ある点
 - ・ 通常の講義に加え、三味線糸の製造工場見学や、公演の演目にゆかりの地を訪ねて講師の話を書く部外研修も積極的に行い、芸能に対する理解を深めることができた。
- 見直し又は改善を要する点
 - ・ 講義のカリキュラムを組むにあたっては、講師の多くが文楽の技芸員であることから、時間の制約を受けることが非常に多くなっている。引き続き講師陣とのコミュニケーションを深め、効率的なカリキュラム作りに努める。

3-(1)-⑤ 組踊（立方・地方）

《方針》

国立劇場おきなわ等において、組踊の保存振興に寄与することを目的とし、将来にわたって継続的に組踊を支える、質の高い優れた立方・地方を養成するため、組踊伝承者養成研修を実施する。3年目は、組踊実技を中心にして、琉球舞踊・笛等の副実技、発声訓練等の基礎実技、琉球音楽論等の講義等バランスのとれたカリキュラムで基礎的な実力を養う。

《実績》

1. 研修の実施

第3期生9名の3年目の研修を実施。

2. 主な授業及び回数、主な講師

区分	授業内容	主な講師	回数
実技 計 449 回	組踊実技	宮城能鳳、城間徳太郎、比嘉聡	300 回
	副実技	玉城節子、大湾清之、新城清弘、比嘉聡	41 回
	基礎実技	宮里京子、川畑三矢、小波則夫、幸地貞子	108 回
その他 計 47 回	講義	鳥羽屋里長、田中英機、金城厚、大城學、三隅治雄	33 回
	鑑賞・見学研修等		10 回
	その他 (発表会等)		4 回
合 計			496 回

3. 発表会（2回実施）

- 第3期組踊研修生第5回発表会（10月3日（木）19:00開演、国立劇場おきなわ大劇場、入場者506名）
発表演目：組踊「女物狂」、独唱「二揚下出し仲風節」、「二揚下出し述懐節」、「二揚仲風節」、「二揚述懐節」
- 第3期組踊研修修了発表会（3月5日（水）19:00開演、国立劇場おきなわ大劇場、入場者508名）
発表演目：組踊「花売の縁」

4. 募集・選考の状況、今後の募集に向けた取組・検討

組踊研修生の募集・選考を実施した。

コース	選考日	応募者数	受験者数	合格者数
組踊	11月9日（土）・ 10日（日）	20名	20名	10名 (立方5名、地方5名)

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- 研修修了生の活発な活動状況を周知した効果もあり、第4期組踊研修生の応募者数が前回（第3期）の11名から20名に増加した。また、選考委員名簿なども含め、選考試験結果を国立劇場おきなわホームページに掲載し、研修事業の情報の公開性、透明性を高めた。

○ 見直し又は改善を要する点

- 合格した第4期生予定者の中には高校生が2名いるので、今後は保護者とも連携し、円滑な研修が進められるよう、対応を図っていきたい。

3-(1)-⑥ 既成者研修

《方針》

研修修了生の技芸の一層の向上を図るとともに、就業者としての意識の向上を促すため、既成者研修発表会等の公演を行う。さらに、既成者の技芸の向上のため、必要に応じて各種研修を適宜実施する。

1. 発表会

引き続き既成者研修発表会を実施する。

歌舞伎俳優 2 公演・歌舞伎音楽 1 公演・能楽 3 公演・文楽 3 公演・組踊 1 公演

2. 能楽の研究課程の開講

能楽の既成者研修として、引き続き、研修修了生と能楽師子弟を対象に研究課程を開講する。

《実績》

1. 既成者研修発表会の実施

(1) 歌舞伎俳優既成者研修発表会（実績 2 公演・目標 2 公演）

第 19 回稚魚の会・歌舞伎会合同公演	期間	日数・回数	会場
	8/16(金)～20(火)	5 日 6 回	本館小劇場

内容：「雛鶴三番叟」（花柳寿楽＝振付）、「修禅寺物語」（松本幸四郎＝監修、中村魁春・松本錦吾＝監修・指導）、「団子売」（坂東三津五郎＝監修）、「俄獅子」（藤間勘祖＝振付）「双蝶々曲輪日記」八幡の里引窓の場(中村梅玉・中村芝雀＝監修・指導)

開演時間：13:00（17 日のみ 11:00/16:30）

入場料金：4,000 円(学生 2,800 円)、障害者 2 割引

入場者数：2,699 人（入場率 86.2%）

第 23 回上方歌舞伎会	期間	日数・回数	会場
	8/24(土)～25(日)	2 日 4 回	文楽劇場

内容：「菅原伝授手習鑑」車引の場（片岡我當・片岡秀太郎＝指導）、

「伊勢音頭恋寝刃」野道追駈けの場、野原地蔵前の場、伊勢二見ヶ浦の場、古市油屋店先の場、同奥庭の場（片岡仁左衛門・片岡秀太郎＝指導）

開演時間：11:00/16:00

入場料金：4,000 円（学生 2,800 円）、障害者 2 割引

入場者数：2,453 人（入場率 90.6%）

(2) 歌舞伎音楽既成者研修発表会（実績 1 公演・目標 1 公演）

第 15 回音の会	期間	日数・回数	会場
	8/3(土)～4(日)	2 日 2 回	本館小劇場

内容：舞踊「蝶の道行」（藤間勘祖＝振付）、歌舞伎「傾城反魂香」土佐将監閑居の場（中村吉右衛門・中村芝雀・中村又五郎＝監修・指導）

開演時間：18:00

入場料金：2,500 円(学生 1,750 円)、障害者 2 割引

入場者数：852 人（入場率 81.6%）

(3) 能楽既成者研修発表会（実績 3 公演・目標 3 公演）

第 23 回能楽若手研究会：「若手能」京都公演	期間	日数・回数	会場
	7/27(土)	1 日 1 回	京都観世会館

内容：能「籠」、舞囃子「百萬」「富士太鼓 現之楽」「熊坂」、狂言「魚説経」、能「巻絹 神楽留」

開演時間：11:00

入場料金：3,000 円（当日）2,500 円（前売・一般）1,500 円（学生）

入場者数：494 人（入場率 104.2%）

第 23 回能楽若手研究会：「若手能」大阪公演	期間	日数・回数	会場
	1/18(土)	1 日 1 回	大阪大槻能楽堂

内容：能「羽衣 和合之舞」、狂言「蝸牛」、能「邯鄲」

開演時間：13:00

入場料金：3,000 円（当日）2,700 円（前売・一般）1,500 円（学生）

入場者数：520 人（入場率 103.6%）

第 23 回能楽若手研究会：「若手能」東京公演	期間	日数・回数	会場
	2/1(土)	1 日 1 回	国立能楽堂

国立能楽堂開場 30 周年記念

内容：狂言「石神」、能「道成寺」

開演時間：13:00

入場料金：正面 6,000 円・脇正面 4,500 円（学生 3,200 円）・中正面 3,600 円（学生 2,500 円）、障害者 2 割引

入場者数：624 人（入場率 99.5%）

(4) 文楽既成者研修発表会（実績 3 公演・目標 3 公演）

第 13 回文楽若手会	期間	日数・回数	会場
	6/22(土)～23(日)	2 日 2 回	文楽劇場

内容：「二人禿」、「絵本太功記」夕顔棚の段、尼ヶ崎の段、「新版歌祭文」野崎村の段

開演時間：13:00

入場料金：2,000 円（学生 1,400 円）、障害者 2 割引

入場者数：1,247 人（入場率 85.3%）

若手素浄瑠璃の会	期間	日数・回数	会場
	8/30(金)	1 日 1 回	文楽劇場 小ホール

内容：「義経千本桜」渡海屋の段（幽霊）（豊竹咲寿大夫、豊澤龍爾）、

「信州川中島合戦」輝虎配膳の段（豊竹靖大夫、野澤喜一朗、琴 鶴澤燕二郎）

開演時間：19:00

入場料金：1,000 円（学生 700 円）、障害者 2 割引

入場者数：153 名（入場率 96.2%）

若手素浄瑠璃の会	期間	日数・回数	会場
	3/7(金)	1 日 1 回	文楽劇場 小ホール

内容：「壺坂観音霊験記」沢市内より山の段（豊竹希大夫、鶴澤清公、ツレ 鶴澤清允）、

「御所桜堀川夜討」弁慶上使の段（竹本津駒大夫（賛助出演）、鶴澤寛太郎）

開演時間：18:30

入場料金：1,000 円（学生 700 円）、障害者 2 割引

入場者数：155 名（入場率 97.5%）

(5) 組踊既成者研修発表会（実績 1 公演・目標 1 公演）

第 3 回若手伝承者発表会 「子の会」	期間	日数・回数	会場
	11 月 30 日(土)	1 日 1 回	国立劇場おき なわ大劇場

内容：組踊「雪払い」、琉球舞踊「かぎやで風」「坂本節」「八重瀬の万歳」、斉唱「永良部節」「中作田節」

開演時間：14:00

入場料金：2,000 円（学生 1,000 円）、障害者・友の会等 2 割引

入場者数：392 名（入場率 67.8%）

2. 能楽研究課程の開講

研究生 40 名が受講した（実施回数：402 回）。本課程では、若手能楽師が専攻以外の副科（シテ謡・笛・小鼓・大鼓・太鼓）を受講し、他役・他流との交流を経験し研鑽を積んだ。

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 「若手能」東京公演では、能楽堂開場 30 周年を記念し、初めて「道成寺」をワキ方・笛方・小鼓方・太鼓方の研修修了生により開催した。講師陣の助演も得て、多くの観客を動員するとともに、修了生の技芸の著しい成長が高く評価された。狂言「石神」にも第 1 期生の狂言方や第 5 期生、第 6 期生の囃子方が出演し、能楽（三役）研修 30 年の成果を示すことができた。
- ・ 第 13 回文楽若手会の「絵本太功記」出演者一同が、その舞台成果により大阪府、大阪市及び公益財団法人関西・大阪 21 世紀協会が主催する「平成 25 年度大阪文化祭賞」のグランプリを受賞した。

3-(1)-⑦ 実施に当たっての留意事項

《実績》

1. 広報活動の充実、応募者増加のための活動

(本館)

- ・ 本館では、既に作成した研修事業を写真・映像で紹介した媒体(冊子、DVD)を活用して、広報活動に役立てた。DVDについては、8月の既成者研修発表会2公演、3月の研修発表会のロビーで映写したほか、見学対応や研修説明会等において活用し、映像によって、研修内容をより具体的に理解してもらうことができた。特に歌舞伎音楽(鳴物)研修生の募集に際して実施した研修説明会では、鳴物という芸能やその研修内容について、参加者から理解を得るための大きな一助となっていた。
- ・ 23年度に作成したDVD(本館実施の研修全5コースを総覧)の内容を更に充実させるため、歌舞伎音楽研修について素材映像の収録を行った。
- ・ 研修説明会は25年度募集した歌舞伎音楽(鳴物)のコース応募希望者を対象に、12月14日(土)、1月19日(日)の2回実施し、応募希望者のみならず、古典芸能に関心のある人々を含めた参加を得て、養成事業の広報に努めた。
- ・ 応募期間中に、ホームページでの周知に加え、新聞に6回、雑誌等に5回にわたって募集広告を掲載した結果、大衆芸能(寄席囃子)研修生の募集において、広域からの応募者増につながった。

(能楽堂)

- ・ 能楽堂では、第9期生募集の広報として通常見ることができない講師対研修生1対1の研修の様子を撮影したDVDを作成し、自主公演開催時や年4回の養成研修発表会等実施時にロビーで映写した。足を止めて映像を見る観客も多く、ワキ方・笛方・太鼓方・狂言方の研修内容を具体的に周知することができた。研修見学会や応募希望者への説明にも利用し、広く活用した。
- ・ 開場30周年を記念しホームページ上に特設サイトを開設し、養成事業のページに第9期生の募集広報、第1期から第8期までの研修修了生の紹介、ワークショップなどの普及・振興事業について掲載し、能楽(三役)研修の周知に努めた。
- ・ 研修見学会を第9期能楽(三役)研修の応募希望者を対象に11月19日(火)、12月16日(月)の2回開催した。説明者に各コースの研修修了生を迎え、実際の研修の話や能楽への思いなど、体験談を交えて具体的に説明した。

(文楽劇場)

- ・ 文楽劇場では、文楽研修の養成事業の周知を図るため、研修内容を紹介する広報用DVDを作成するための素材映像の収録を行った。
- ・ 11月から2月にかけて、文楽養成事業に関する新聞社の取材依頼に応じ、毎日新聞、日本経済新聞社、読売新聞社等に大きく取り上げられた。

(国立劇場おきなわ)

- ・ 国立劇場おきなわでは、今年度も引き続き沖縄県や教育機関に組踊研修修了生「子の会」(しーのかい)のパンフレット配布や、ホームページで研修修了生の学校公演活動を紹介する広報を行った。ホームページには「組踊伝承者養成」のページを設け、研修概要、研修修了生の活動状況等を掲載している。
- ・ 組踊研修概要リーフレットを更新して、研修生募集活動に活用するとともに、県内の芸能団体や学校等に配布して研修事業の広報に努めた。
- ・ テレビ・ラジオ・新聞の取材を可能な限り受け入れ、その中で研修制度や募集について広く宣伝周知を行った。

2. 研修生の実演機会の充実及び伝統芸能の振興・普及のための活動

(本館)

- ・ 日本体育大学体操部主催第45回演技発表会(12月15日(日)、於:国立代々木競技場第2体育館)に、歌舞伎俳優研修生7名が出演し、歌舞伎の立廻り・とんぼ等の演技を披露した。また、同発表会プログラムへの研修生募集告知の掲載や会場でのチラシ配布などの協力を得て、養成事業の普及と周

知活動を行うことができた。

(能楽堂)

- ・ 研修生及び研修修了生を講師として以下の講座・ワークショップを実施し、能楽の普及振興を図った。
 - 研修能舞台にて実施する「楽しもう！能の世界」（体験+舞台鑑賞）（5月「舞の世界」応募者48名、10月「狂言」応募者20名、12月「ワキ謡」応募者42名、2月「シテ謡」応募者20名、3月「囃子」応募者19名）を継続して実施した。「ワキ謡」の講座は能楽界でも初めての企画であるが、応募者も多く盛況で、修了生が勤めた講師も好評であった。
 - 学校における「届けます。体験教室」（東京3校、地方26校で実施、体験参加者1,439名、鑑賞会形式参加者2,215名）を継続して実施した。
 - 地方の能楽堂・文化会館等と連携した「楽しもう！能と狂言」（新潟51名、帯広80名、札幌60名、防府30名）も継続して実施した。

(国立劇場おきなわ)

- ・ 国立劇場おきなわでは、組踊の普及を図り、組踊研修修了生が実演経験を積む機会づくりを促進するため、「生徒のための組踊鑑賞教室『万歳敵討』」公演（10月25日、11月15・16日）に研修修了生を起用した。
- ・ 劇場外の沖縄県立球陽高等学校（10月16日）、沖縄県立与勝高等学校（12月17日）、沖縄県立那覇西高等学校（12月19日）の「芸術鑑賞会」にも研修修了生が出演し、文化普及活動への参画に努めた。
- ・ 開場10周年記念式典の祝賀公演「執心鐘入」（1月18日）の全ての立方と主な地方に研修修了生を起用し、上演した。

3. 伝統芸能分野と現代舞台芸術分野の相互交流

幅広い分野で養成・研修事業を実施している振興会の特長を活かし、各分野の研修生が一堂に会して一流の舞台芸術家から舞台に対する心構えを学ぶとともに、伝統芸能分野と現代舞台芸術分野の相互交流を図った。

- ・ 五館合同特別講義、研修生交流会
12月12日（木）11：25～13：45
講義：伝統芸能情報館レクチャー室（3階）、交流会：第一会議室（事務棟3階）
講師：鳥羽屋里長（歌舞伎音楽長唄立唄演奏者、歌舞伎音楽長唄研修主任講師）
講義内容：「良き舞台人になるために」
参加者：研修生46名及び受講生1名（歌舞伎俳優7名、竹本2名、長唄1名、太神楽2名、太神楽受講生1名、能楽1名、文楽3名、組踊9名、オペラ5名、バレエ6名、演劇10名）

4. 公演制作者・舞台技術者等の研修の受入れ、協力

- ・ 歌舞伎鑑賞教室の地方公演、文楽の地方公演において、職員の派遣を行い、現地の技術者等へ協力等を行った。

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 本館では、歌舞伎関連コースと大衆芸能について、研修生の募集情報とともに、多様な方面に養成事業の意義をアピールし、伝統芸能の継承者の必要性も含め、広く周知することができた。今後も、多角的に内容を充実させつつ広報活動に努めていきたい。
- ・ 能楽堂では、地域の拠点となる文化施設と連携して「ワークショップ」を行うと同時に、近隣の学校を選び「体験教室」を実施するなど、効率的に普及・振興事業を行っている。今後も引き続き開催地や内容を検討し、一層の充実を図りつつ継続していきたい。
- ・ 組踊研修の広報活動について、沖縄県や教育機関等へ働きかけを行ったほか、第3期生や既成者の研修発表会の新聞取材を可能な限り受け入れ、発表会の告知と組踊研修事業を広く周知した。
- ・ 公演以外にも研修自体を題材とした、BS朝日の全国放送されたドキュメンタリー番組制作に協力し、組踊研修事業について広く周知することができた。

番組名：BS 朝日「踊る、オキナワ～受け継がれる琉球の魂～」

放映日：平成 26 年 1 月 19 日 21:00～21:54

- ・ さらに、国立劇場おきなわホームページには、研修修了生による学校公演等や研修生の活動等の写真を掲載し、充実した広報ができた。
- ・ 五館合同特別研修講義は 6 回目の実施となり、伝統芸能分野と現代舞台芸術分野の研修生の相互交流が一層深まり、振興会役員との質疑応答など、大変意義のある時間となった。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・ 本館では、引き続き研修内容・研修方法を見直し、研修生・講師・職員相互の円滑な意思疎通を図り、研修生の生活環境の改善に努めていきたい。
- ・ 能楽堂では、研修生募集が 6 年ぶりということもあり、能楽（三役）研修の周知に課題が残った。大学の能狂言サークルの衰退、ポスター・チラシなど紙媒体による広報の限界、話題性の欠如などの理由が挙げられるが、今後の募集広報についてはマスメディアの活用、振興会ホームページの充実、地方の能楽堂との連携等々、充分検討を重ねていきたい。

3- (2) 現代舞台芸術の実演家その他の関係者の研修

《中期計画の概要》

(2) 現代舞台芸術の実演家その他の関係者の研修

高い技術と豊かな芸術性を備えた実演家等を育成するため、実演家等の研修を次のとおり実施する。

ア 実演家等の研修実施に当たっては、民間団体の役割を踏まえつつ、グローバルな視点に立った体系的なカリキュラム等により、安定的、継続的に実演家の育成を行うよう留意する。

また、実施する際は、外部専門家等の意見を聴取し、成果の検証を行い、成果が不十分なものについては廃止を含め、長期的視点を踏まえて対象とする分野、人数などについて不断の見直しを行う。

イ オペラ研修及びバレエ研修については、国際的な活躍が期待できる水準の実演家を育成することを目標とし、演劇研修については、確かな演技力等を備えた次代の演劇を担う実演家を育成することを目標として、第一線で活躍する各分野の専門家等を講師として、実践的・体系的なカリキュラムにより、中期目標の期間中に次の人数の研修修了を目途とした研修を実施する。

- ① オペラ研修：25人程度（研修期間3年間）
- ② バレエ研修：30人程度（研修期間2年間）
- ③ 演劇研修：60人程度（研修期間3年間）

(3) 実施に当たっての留意事項

ア 養成研修事業についての国民の関心を喚起するため、研修修了者の活動状況を分かりやすく示すなど、広報活動を充実する。

イ 研修生等が実演経験を積む機会の充実及び学校等との連携による波及効果の拡大を図るため、児童・生徒等の体験学習や劇場外における様々な文化普及活動へ参画する。

エ 幅広い分野で養成研修事業を実施している振興会の特長を活かし、合同講義の実施等、伝統芸能分野と現代舞台芸術分野の相互交流を実施する。

オ 国の文化振興施策との連携に留意しつつ、国立劇場、新国立劇場等の人材や施設を活用し、公演制作者や舞台技術者等の実地研修等の受入れ、協力に努める。

《年度計画》

(2) 現代舞台芸術の実演家その他の関係者の研修

ア 中期計画の方針に従い、次のとおり研修を実施する。

① オペラ研修（研修期間3年）

- (a) 第14期生（5名）の3年目の研修を行い、修了を予定。
- (b) 第15期生（5名）の2年目の研修を行う。
- (c) 第16期生（5名）の1年目の研修を行う。
- (d) 第17期生（5名程度）の募集を行う。
- (e) 研修発表会等（3公演実施）
 - ・ 研修所公演（新国立劇場中劇場）2月28日～3月2日、3回
 - ・ 試演会 オペラ試演会（新国立劇場小劇場）7月27日～28日、2回
 - ・ 歌唱コンサート（新国立劇場中劇場を予定）秋季、1回
- (f) 修了後の国際的なキャリア形成を目標とし、9月に海外研修を行う。

② バレエ研修（研修期間2年）

- (a) 第9期生（6名）の2年目の研修を行い、修了を予定。
- (b) 第10期生（6名）の1年目の研修を行う。
- (c) 第11期生（6名程度）の募集を行う。
- (d) バレエ予科生について、次のとおり研修及び募集を行う。
 - ・ 第4期生（3名）の2年目の研修を行う。
 - ・ 第5期生（3名）の1年目の研修を行う。
 - ・ 第6期生（若干名）の募集を行う。
- (e) 研修発表会等（3公演実施）
 - ・ 発表公演（新国立劇場中劇場）10月14日、1回
 - ・ 修了公演（新国立劇場中劇場）3月8日～9日、2回

- ・ 「バレエ・アステラス★2013」(新国立劇場オペラ劇場)7月21日、1回
- (f) 国際的な舞台経験を積むため、「ポリショイ劇場バレエ学校240周年記念ガラ公演」に出演する。11月15日～19日、3回。

③ 演劇研修(研修期間3年)

- (a) 第7期生(12名)の3年目の研修を行い、修了を予定。
- (b) 第8期生(12名)の2年目の研修を行う。
- (c) 第9期生(12名)の1年目の研修を行う。
- (d) 第10期生(12名程度)の募集を行う。
- (e) 研修発表会等(4公演実施)
 - ・ 修了公演(新国立劇場小劇場)3月14～16日、4回(予定)
 - ・ 朗読劇「少年口伝隊一九四五」(新国立劇場小劇場)8月1～3日、3回
 - ・ 第7期生試演会①(新国立劇場小劇場)5月17～19日、4回(予定)
 - ・ 第7期生試演会②(新国立劇場小劇場)12月21～23日、4回(予定)

イ 実施に当たっては、民間団体の役割を踏まえつつ、グローバルな視点に立った体系的なカリキュラム等により、安定的、継続的に実演家の育成を行うよう留意する。

また、外部専門家等の意見を聴取し、成果の検証を行い、成果が不十分なものについては廃止を含め、長期的視点を踏まえて対象とする分野、人数などについて不断の見直しを行う。

- (3) 伝統芸能の伝承者の養成及び現代舞台芸術の実演家その他の関係者の研修の実施に当たっての留意事項
ア 養成研修事業についての国民の関心を喚起するため、研修修了者の活動状況等をホームページ等で紹介するなど、事業の周知に努める。

また、研修生募集について、ホームページでの告知、研修紹介DVDの活用、研修見学会の実施等により周知し、応募者の増加を図る。

イ 研修生等が実演経験を積む機会の充実を図るとともに、伝統芸能及び現代舞台芸術の振興・普及のため、研修生及び研修修了生によるワークショップ等を全国の文化施設、学校等と協力して実施する。

また、外部公演への出演依頼に積極的に応じて、文化普及活動への参画に努める。

ウ 伝統芸能・現代舞台芸術双方の研修生を対象とした特別合同講義を実施して、両分野の相互交流を図る。

エ 国の文化振興施策との連携に留意しつつ、国立劇場、新国立劇場等の人材や施設を活用し、公演制作者や舞台技術者等の実地研修等の受入れ、協力に努める。

《実績》

1. 研修の実施

(1) 研修の実施状況

区分	研修期間	研修実績	うち修了者	年度計画	中期計画(25～29年度)	
					修了者累計	目標
オペラ	14期(3年次)	3年	5名	5名	5名	25名程度
	15期(2年次)	3年	5名	—		
	16期(1年次)	3年	5名	—		
バレエ	9期(2年次)	2年	6名	6名	6名	30名程度
	10期(1年次)	2年	6名	—		
バレエ 予科	4期(2年次)	2年	2名	2名	2名	—
	5期(1年次)	2年	3名	—		
演劇	7期(3年次)	3年	11名	11名	11名	60名程度
	8期(2年次)	3年	9名	—		
	9期(1年次)	3年	9名	—		

(2) 研修発表会等の実施

オペラ:3回(7月試演会、公開マスタークラスとオペラ・コンサート、2～3月研修所公演)、その他2回(トウキョウ・モーツァルト・プレイヤーズ オペラ・プロジェクト第5弾「魔弾の射手」他)

バレエ:3回(第9期生・第10期生発表公演、3月修了公演、バレエ・アステラス★2013)、国際交流公演(モスクワ国立舞踊アカデミー創立240周年記念国際バレエ学校フェスティバル)、その他1回(子どもたちのレッスン見学会)

演劇:4回(第7期生試演会①、朗読劇公演、第7期生試演会②、第7期生修了公演)

(3) 募集・選考の状況

コース	選考日	応募者数	受験者数	合格者数
オペラ	10月28日(月)～10月31日(木)	79名	73名	5名
バレエ	2月9日(日)～2月24日(月)	42名	41名	5名
バレエ予科	1月26日(日)～2月2日(日)	27名	26名	3名
演劇	1月11日(土)～1月19日(日)	137名	129名	12名

2. 長期的視点を踏まえた対象とする分野・人数・研修内容等についての見直しに関する取組
外部専門家の意見を聴取し、成果の検証や今後の方向性の検討を行うため、研修事業委員会を設置した。
委員には授業・公演の視察、レポートの提出を依頼するとともに、所長等との意見交換等を行った。

3. 実施に当たっての留意事項

(1) 広報活動の充実

- ・ 研修の実施状況、研修公演の稽古、公演の様子などをホームページへ掲載し、また、Facebook、ツイッターなどを利用して日々のニュースを告知した。演劇研修の様子については、バレエ研修に続き、ホームページにて動画を公開した。
- ・ 修了生の活動状況を定期的に把握し、その成果をホームページに掲載するとともに研修公演会場におけるパネル展示等で紹介した。
- ・ 外部への公演出演を通して研修事業の意義を周知した。バレエ研修所のモスクワ公演においては、現地ロシアをはじめ欧州各国のマスコミ向けに、研修所の概要をリリースにて紹介した。
- ・ 研修所の存在及び研修内容を広く周知し、将来的に優秀な研修生の確保に資することを目的として、バレエ研修所ではレッスン体験ワークショップ（6月9日 場所：新国立劇場バレエ・リハーサル室 参加人数：39名）を、演劇研修所では授業見学会（11月27、30日 場所：新国立劇場Cリハーサル室 参加人数：計41名）を開催した。

(2) 研修生の実演機会の充実及び現代舞台芸術の振興・普及のための活動

オペラ研修生が、公益財団法人三鷹市芸術文化振興財団主催のコンサートや静岡国際オペラコンクール主催の講座に出演した。

バレエ研修生が、モスクワ国立舞踊アカデミー創立240周年記念国際バレエ学校フェスティバル及び、J.P.モルガン企画のバレエ研修所レッスン見学会に出演した。

(3) 伝統芸能分野と現代舞台芸術分野の相互交流

- ・ 五館合同特別講義、研修生交流会

12月12日(木) 11:25～13:45

講義：伝統芸能情報館レクチャー室（3階）、交流会：第一会議室（事務棟3階）

講師：鳥羽屋里長（歌舞伎音楽長唄立唄演奏者、歌舞伎音楽（長唄）研修主任講師）

講義内容：「良き舞台人になるために」

参加者：研修生46名及び受講生1名（歌舞伎俳優7名、竹本2名、長唄1名、太神楽2名、太神楽受講生1名、能楽1名、文楽3名、組踊9名、オペラ5名、バレエ6名、演劇10名）

(4) 公演制作者・舞台技術者等の研修の受入れ、協力

舞台技術者、インターン等33名の受入れを行うとともに、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会や公益社団法人全国公立文化施設協会等と連携してフォーラムを開催したほか、地域の公立文化施設で開催された技術職員研修会等への講師の派遣、提携大学の学生に向けた講義等、新国立劇場の人材及び施設を活用した取組を行った。

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 一層の充実が図られた第一線で活躍する講師陣のもと、実践的・体系的なカリキュラムによって研修を実施し、当初の目的を充分達成することができた。またその成果は、発表会、試演会、研修公演等で広く示され、観客及び専門家からも高い評価を得ることができた。
- ・ 各研修所において定期的に開催する講師会や修了生の動向把握を通じた研修事業の成果の検証に加え、新たに研修事業委員会を立ち上げたことにより、外部専門家の意見を聴取し、今後の方向性の検討を行うための取組を開始することができた。
- ・ 研修の実施状況等について、Facebookや動画等を活用した多様な広報活動により広く関心を喚起するとともに、修了生については、最新の活動状況のホームページ掲載、研修公演会場におけるパネル展示

等により、その成果の周知を図ることができた。

- ・ オペラ研修及びバレエ研修において、他団体が主催する公演等に積極的に参加し、文化普及活動の幅を広げることができた。特に、バレエ研修においては、ロシアで開催された「モスクワ国立舞踊アカデミー創立 240 周年記念国際バレエ学校フェスティバル」に参加することにより、国際的な舞台経験を積むとともに、新国立劇場バレエ研修所の成果を広く世界にアピールすることができた。
 - ・ 五館合同特別講義、研修生交流会等を通じ、伝統芸能分野との相互交流を進めることができた。
- 見直し又は改善を要する点
- ・ 研修事業への各方面からの大きな期待に応えるべく、講師会、新たに設置された研修事業委員会により、研修のあり方、カリキュラム等内容面について検討を重ね、研修施設等についても研修事業の一層の充実を図るため、その確保に向けた検討に引き続き取り組む必要がある。

《24年度評価結果への対応》

【評価】

(文科省評価委員会)

- ・ オペラ研修において、実際の舞台に立つ機会を増やしたり、バレエ研修において海外研修を実施するなどして、国際的な水準に達する人材の育成を目指してほしい。(①)

(振興会評価委員会)

- ・ 研修制度によって自国の舞台芸術を支える人材を輩出していることを、国民にもっと知ってもらう必要がある。研修成果の発表会、全国での公開実演や講座などを継続的に実施することにより、才能のある若者たちに道を開き、職業選択の指針を示すことになるだろう。DVD の活用や公演会場での広報、ワークショップなども継続してほしい。(②)
- ・ 力をつけた研修修了生が将来の夢を持てるような環境整備、活躍できる場の用意など、研修の本来の意味が発揮できる方途を、これからも各分野で模索、検討する必要がある。(③)
- ・ 応募者数から見ても、オペラ研修所の門が狭すぎるのではないか。また、併せて、選考結果についての報告を充実することも望まれる。個人の資質能力についての総合的な審査なので自ずから限界があるとしても、例えば選考委員や各次の試験の合格者数を事後的に明らかにすることはできないだろうか。(④)
- ・ 演劇研修の分野では研修修了生の受皿になる劇団がないため、修了後は個人の責任に任されている。「長い墓標の列」に研修修了生が多数起用され実力を発揮したが、こうした企画が今後も続けられることを期待したい。(⑤)

【対応】

①研修内容の不断の見直し

限られた予算のなかで、各研修所とも最良の研修内容を提供すべく不断の見直しを行っている。オペラ研修所においては、研修生が実際の舞台に立つ機会を増やすため、24年度に歌唱コンサート「NNTT Young Opera Singers Tomorrow」を開始した。25年度には2回目も開催し、コンサートに加えソプラノ歌手のノルマ・ファンティーニを講師に迎えた公開マスタークラスも行った。また、浜松市文化振興財団主催の静岡国際オペラコンクールセミナー「オペラおもしろ講座」や、三鷹市文化振興財団主催のTMP オペラ・プロジェクト「コジ・ファン・トゥッテ」「魔弾の射手」等、外部公演への出演も精力的に重ねている。講師やカリキュラムについても、引き続き優秀な講師を海外から招くのはもちろんのこと、研修内容の密度を濃くするためのアンサンブル稽古の充実や、新規授業の設置を予定している。海外研修の派遣先についても、より充実した研修ができるよう調整を続けているところである。

バレエ研修所においては、数週間単位の海外研修よりも、むしろ世界のバレエ学校との相互交流によって全体のレベルアップを図っている。24年度、25年度と「バレエ・アステラス」に海外バレエ学校をそれぞれ1校ずつ招聘した。さらに25年度には世界6カ国7校のバレエ学校の中の1校として「モスクワ国立舞踊アカデミー（ポリショイ・バレエ学校）創立240周年記念 国際バレエ学校フェスティバル」に招かれ、国立クレムリン宮殿においてガラ公演への出演を果たした。引き続きこのような公演には積極的に参加していきたい。

②研修事業・成果の周知、より意欲の高い研修希望者獲得のための取組

新国立劇場の各研修所の修了生は、国内外の公演への出演をはじめとしてその活躍が年々充実してきており、新国立劇場の主催公演に関わる修了生の数も増えている。また、研修所と外部の主催者との協力による新たな活躍の場も増えている。これら実際の舞台での活躍を通じて、研修事業の必要性や成果を広く一般に周知しているのに加え、修了生の活動状況を随時新国立劇場のホームページやソーシャル・ネットワークワーキング・サービスなど多様な方法で紹介し、さらに多くの国民から研修授業に対する理解を得られる

よう取り組んでいる。

また、各研修所単位でも多彩で工夫に富んだ広報活動を行っている。オペラ研修所では、出演者及びアンダースタディとして主催公演に関わる修了生が増えてきた。さらに、24年度には従来実施していた夏期の試演会及び年度末の研修公演に加えて、「NNTT Young Opera Singers Tomorrow」と銘打ったコンサートを開始した。25年度にはこれに続く2年目の企画として、ソプラノ歌手ノルマ・ファンティエニを講師に迎え、公開マスタークラスとコンサートを開催した。この他にも浜松市文化振興財団主催の静岡国際オペラコンクールセミナー「オペラおもしろ講座」（25年12月）や、三鷹市文化振興財団主催のTMPオペラ・プロジェクト「コジ・ファン・トゥッテ」（24年12月）、同「魔弾の射手」（25年10月）等、外部の公演等に研修生・修了生が出演することで、劇場内外において周知の機会を増やしている。

バレエ研修所については、2012/2013シーズン時点で新国立劇場バレエ団に所属している契約ダンサー68人のうち22人が研修所出身であることから明らかなように、バレエ研修所修了生がすでに新国立劇場バレエ公演の要となっている。外部公演への出演や広報に関しては、25年11月にロシアの「国際バレエ学校フェスティバル」に招待されて参加し、夏期には入所希望者を対象にワークショップも開催した。また、日頃の研修の様子を15分程度にまとめた紹介動画をホームページにて公開している。

演劇研修所では、研修所出身者を中心に配役された演劇主催公演「長い墓標の列」が25年3月に上演され、研修所の成果を大きくアピールすることに成功し、高い評価を受けた。この企画では、引き続き26年4月に「マニラ瑞穂記」の上演が決定している。その他、主催公演においては、主要な役を含む多くの役での出演及び演出スタッフ（プロンプター）としての参加等、修了生が活躍している。また、バレエ研修所同様、25年11月より順次、動画によって研修の様子をホームページ上で公開しているほか、研修所の日々の出来事をFacebook等のソーシャル・ネットワーキング・サービスで配信している。加えて、次年度入所希望者を対象に、25年11月には研修見学会も開催した。今後も様々な手段で情報の公開を続け、研修事業実施の必要性と成果を広く周知していく。

③研修修了生支援の実施・方策の検討

新国立劇場の各研修所では、研修所修了生を支援するため、オーディションや留学選考試験への応募の際に使用する必要情報の提供、公演記録映像の利用等への協力のほか、例えば演劇研修所では、「NNTアクトーズ」として、25年度に8名を登録し、オーディション情報の告知等、外部での活動支援、研修所の授業・公演への登用、スタジオの無料貸出しによる技術向上のための支援を行っている。

また、近年では新国立劇場の主催公演においても、研修所修了生の活躍が目立つようになっている。新国立劇場バレエ団の2012/2013シーズン契約ダンサー68名のうち、プリンシパルを含む22人がバレエ研修所修了生であり、研修所修了生が公演の要となっている。設立から10年に満たない演劇研修所の修了生についても、25年度の主催公演のうち4公演に9人が出演者として、同じく4公演に4人がプロンプターとして参加する等、主催公演への出演、演出スタッフとしての参加の機会が増えている。特に、24年度には研修所修了生とベテラン俳優が共演する企画として演劇主催公演「長い墓標の列」を上演し、修了生の活躍が高い評価を受けた。26年4月には第2弾として「マニラ瑞穂記」の上演を予定している。また、研修所公演にも修了生の出演等を依頼することがあり、25年度はオペラ研修所1人、バレエ研修所3公演20人、演劇研修所2公演2人（演出助手）が参加した。引き続き、それぞれのジャンルの現状を踏まえつつ、業界団体等とも協力して、研修所修了生の支援を続けていく。

④オペラ研修の規模の検討、審査の透明性の確保

オペラ研修について、新国立劇場内の研修場所及び予算的な制限を考慮すると、現状では研修生の数を拡大することは困難であるが、バレエ研修所、演劇研修所も含めて今後の検討課題としたい。

また、選考結果に関する報告の充実についても、25年度から選考試験終了後に選考の過程および選考委員についてホームページに情報を公開し、一層の透明性向上に努めている。

⑤演劇研修生支援の実施・方策の検討

演劇研修所では、修了後の支援のために、NNTアクトーズとして、25年度は8名を登録し、オーディション情報の告知等、外部での活動支援、研修所の授業・公演への登用、スタジオの無料貸出しによる技術向上のための支援を行っている。また、担当部署間の連携により主催公演への出演、演出スタッフとしての参加の機会を増やしている。特に、研修所修了生とベテラン俳優が共演する企画として、24年度に演劇主催公演「長い墓標の列」を上演、26年4月に第二弾として栗山民也演出で「マニラ瑞穂記」の上演を控えており、今後も継続する予定である。また、24年度は「サロメ」、「リチャード三世」、「るつぼ」といった作品においても、研修所修了生を積極的にキャストし、特に「リチャード三世」、「るつぼ」においては主要な役に修了生を配役した。25年度も4公演において9人が出演、同じく4公演において4人がプロンプターとして参加した。このほか、修了生の自主公演企画に研修所を稽古場として提供し、衣裳・小

道具等の貸出も行っている。今後さらに積極的な協力体制をつくり、支援を続けていきたい。近年、修了生の実力が徐々に認められるようになってきており、中規模以上の外部の公演への出演や演出スタッフとしての参加を依頼される機会も増えてきている。引き続き、マネジメント事務所や外部の公演主催者へのアプローチを強化し、出演の支援もより一層強化していきたい。

3-(2)-① オペラ研修

《方針》

プロのオペラ歌手としての舞台活動を目指している人のために、国際的なレベルの研修を行うことを目的として、5名を募集し、3年制の研修を行う。各種音楽レッスンをを行う他、語学、演技、発声法等、オペラ歌手として必要な技能を総合的に研修する。また、コンサート、試演会、研修所公演等聴衆を意識した演奏や舞台経験を積み、新国立劇場主催公演への出演をはじめ、海外歌劇場の舞台に立てる人材育成を目指す。

《実績》

1. 研修の実施

第14期生(5名、3年目)、第15期生(5名、2年目)、第16期生(5名、1年目)の研修を行い、第14期生が修了した。

2. 主な授業及び回数、主な講師

	区分	授業内容	主な講師・内容	回数
第14期	実技 計955回	オペラ実習	木村俊光、大藤玲子、谷池重紬子 他	704回
		身体表現	三浦安浩、伊藤明子、伊藤範子、橋本佳子 他	251回
	座学 計236回	特別講義 (サロン)	小宮正安、北山禎介	3回
		語学	英語、イタリア語、ドイツ語、フランス語	233回
	その他 計27回	舞台実習他	試演会、研修所公演 他	27回
合計				1,218回
第15期	実技 計874回	オペラ実習	木村俊光、大藤玲子、谷池重紬子 他	645回
		身体表現	三浦安浩、伊藤明子、伊藤範子、橋本佳子 他	229回
	座学 計219回	特別講義 (サロン)	小宮正安、北山禎介	3回
		語学	英語、イタリア語、ドイツ語、フランス語	216回
	その他 計27回	舞台実習他	試演会、研修所公演 他	27回
合計				1,120回
第16期	実技 計946回	オペラ実習	木村俊光、大藤玲子、谷池重紬子 他	697回
		身体表現	三浦安浩、伊藤明子、伊藤範子、橋本佳子 他	249回
	座学 計245回	特別講義 (サロン)	小宮正安、北山禎介、五館合同特別講義	4回
		語学	英語、イタリア語、ドイツ語、フランス語	241回
	その他 計28回	舞台実習他	試演会、研修所公演、劇場見学 他	28回
合計				1,219回

- ・ 主に、午前中は研修生全員に対する基礎演技指導および語学研修、午後は声楽の個人レッスンとし、個人レッスンは各研修生が1日1回以上受講した。
- ・ 年間を通じてのべ5名の海外講師を招聘し、ネイティブの指導者による声楽指導、マスタークラスを行った。
- ・ 基礎演技研修として、主任講師によるオペラのシーンスタディを行い、前期・後期で各1回ずつの発表の機会を設けた。
- ・ 語学研修は引き続き特に英語に力を入れ、2年次の秋に実施される海外研修(於オランダ、主に英語による)に備えた。
- ・ 実演研修の機会としては、年2回の研修公演の他、24年度より行っている「Young Opera Singers Tomorrow」を開催した。今回は特に、イタリア人声楽家のノルマ・ファンティーニ氏の来日機会を捉え、16期生5名を対象に公開マスタークラスを行った。
- ・ 実演研修の機会を増やすものとして、外部主催団体からの依頼出演を積極的に行った。25年度は、三鷹市芸術文化振興財団(三鷹市芸術文化センター風のホール)による「魔弾の射手」(沼尻竜典指揮)、

静岡国際オペラコンクール主催の「オペラおもしろ講座 ～オペラって何だろう～」(静岡市、浜松市、沼津市)などへの出演依頼があった。

- ・ 2年次の海外研修では、引き続きアムステルダムオペラスタジオ・ネザーランドに派遣し、3週間の研修プログラムの最後には、ゴッホ美術館でのミニ・コンサートも行われた。
- ・ 研修状況を確認する講師会を原則週1回開催し、日々の研修に反映させた。

3. 発表会等

(1) 研修公演

- ① 研修所公演「ナクソス島のアリアドネ」R・シュトラウス作曲
(2月28日～3月2日、3回、中劇場)
入場料：4,200円・1,500円(Z席)、入場者数：1,767名
出演：研修生全員・修了生1名・賛助出演3名
- ② 試演会「魔笛」～短縮版～W. A. モーツァルト作曲
(7月27・28日、2回、小劇場)
入場料：2,000円、入場者数：482名
出演：研修生全員・賛助出演1名
- ③ 公開マスタークラスとオペラ・コンサート「NNTT Young Opera Singers Tomorrow2013」
(12月4日、1回、JTアートホール アフィニス)
入場料：2,000円、入場者数：191人
出演：15期生5名(コンサート)・16期生5名(マスタークラス)

(2) その他出演

- ・ トウキョウ・モーツァルト・プレイヤーズ オペラ・プロジェクト第5弾「魔弾の射手」(演奏会形式)(10月6日、1回、三鷹市芸術文化センター 風のホール)
主催：公益財団法人三鷹市芸術文化振興財団／有限会社ミュージック・マスターズ
入場者数：598名、出演：14期生3名・16期生2名・修了生1名
- ・ 静岡国際オペラコンクールセミナー「オペラおもしろ講座 ～オペラって何だろう～」
(12月8日、1回、静岡文化芸術大学講堂(浜松)／12月15日、1回、しずぎんホール ユーフォニア(静岡)／12月22日、1回、沼津市民文化センター小ホール(沼津))
主催：静岡国際オペラコンクール実行委員会
入場者数：477名(浜松)、377名(静岡)、360名(沼津)、
出演：14期生4名・15期生3名・16期生1名(浜松)、14期生2名・15期生4名・16期生2名(静岡)、14期生2名・15期生2名・16期生4名(沼津)

(3) 海外研修

- ・ オペラ研修所第15期生が海外研修を実施した(9月14日～10月5日、アムステルダム)。3週間の研修プログラムの最後には、ゴッホ美術館において、ミニ・コンサートも行われた。

4. 募集・選考の状況、今後の募集に向けた取組・検討

- ・ 大学卒業以上、声楽について極めて優れた実力を有する者で、入所時年齢が30歳以下の者を対象に、第17期生の募集を行い、79名の応募があった。10月28日から10月31日まで、3次にわたる選考を経て、5名(ソプラノ2名、メゾソプラノ1名、テノール1名、バリトン1名)が合格した。なお、研修修了後の国際コンクールなどへの参加条件を検討した結果、今年度より受験資格を「35歳以下」から「30歳以下」に引き下げた。

5. 外部専門家等の意見聴取、成果の検証、対象分野・人数等の不断の見直し

- ・ 外部専門家の意見を聴取し、成果の検証や今後の方向性の検討を行うため、研修事業委員会を設置した。委員には授業・公演の視察、レポートの提出を依頼するとともに、所長との意見交換等を行った。

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 研修生が長期的かつ継続的な活動に対応できるオペラ歌手として、自身の体や声を自己管理できる能力を醸成するため、引き続き午前中に基礎演技と座学、午後に声楽レッスンというサイクルで研修を行った。
- ・ 海外研修での経験は、研修生の技術的側面のみならず、オペラ芸術に対する意識を向上させる良いきっかけとなった。これを2年次に行うことにより、研修生に早期に世界の舞台を意識させ、将来の目標を持たせることにつながった。

- ・ 今年度の「NNTT Young Opera Singers Tomorrow」では、新たな試みとして、第一線で活躍するイタリア人歌手ノルマ・ファンティーニ氏を講師に迎え、16期生5名に対し、公開マスタークラスを実施した。これは研修生、聴衆双方から極めて好評で、研修生には今後のキャリアを展望する上で非常に良い刺激になった。
 - ・ 研修公演では、7月の「魔笛～短縮版」及び2・3月の「ナクソス島のアリアドネ」のそれぞれの上演において、研修生は平素からの研修成果をいかんなく発揮した。特に3月公演は、R・シュトラウス生誕150周年の年にもあたり、研修生の集中力ある演奏により、聴衆及び専門家から高評価を得た。
 - ・ 第14期生5名は全員優秀な成績で研修を修了した。修了者のうち1名が平成26年度文化庁新進芸術家海外留学制度（音楽部門）によって、海外留学することが決定している。
 - ・ 第17期生の選考試験では、前年並みの競争率（約19倍）を経て、各パートのバランスも良く、良い人材を確保することができた。
- 見直し又は改善を要する点
- ・ 語学研修において、一定のレベル達成のため英語の履修に重点を置いた分、ドイツ語、イタリア語、フランス語の履修時間が少なくなっているため、来年度においては、履修時間のバランスを再考したい。
 - ・ 身体系の実技クラスでは、基礎演技を中心としたシーンスタディに加え、かつて行われていた「バレエ」「日本舞踊」を復活し、舞踊の基礎的所作という観点を重視したい。

3-(2)-② バレエ研修

《方針》

プロのダンサーを目指す者のために、ダンサーとして必要な技能の研鑽、知識と教養の付与及び舞台実習を行うことを目的として、入所時年齢17歳から19歳までの者を対象に、毎年募集6名、2年制の研修を行う。なお、21年度より、現在の研修生よりさらに年齢の低い15歳から16歳の者を対象とした「予科生」を募集し、資質や将来性ある若年層に、心身の柔軟な時期に古典バレエの基礎的技術を徹底して習得する機会を提供する。

《実績》

1. 研修の実施

第9期生6名および予科4期生2名が、2年目の研修を行い修了した。第10期生6名及び予科生5期生3名が1年目の研修を行った。

2. 主な授業及び回数、主な講師

区分	授業内容	主な講師・内容	回数	
第9期	実技 計556回	クラシカル・バレエ	新井咲子、坂西麻美、西川貴子、岸辺光代、佐藤勇次、鈴木和子 他	430回
		キャラクター、コンテ ンポラリー・ダンス	ゲンナーディ・イリイン、木賀真佐子、キミホ・ハルバート 他	110回
		身体表現	三輪えり花、松井工	16回
	座学 計74回	講義	福田一雄、芳賀直子、中西麻澄、鳥取二三子、新谷佳冬 他	43回
		特別講義 (サロン)	福地茂雄、坂東玉三郎、北山禎介	3回
		語学	東京外国語センター（英語）	28回
	その他 計37回	舞台実習	新国立劇場バレエ団公演、バレエ研修所発表会、修了公演 他	13回
		舞台鑑賞 他	主催オペラ・バレエ・現代舞踊・演劇公演 他	24回
	合計			667回
第10期	実技 計550回	クラシカル・バレエ	新井咲子、坂西麻美、西川貴子、岸辺光代、佐藤勇次、鈴木和子 他	425回
		キャラクター、コンテ ンポラリー・ダンス	ゲンナーディ・イリイン、木賀真佐子、キミホ・ハルバート 他	109回
		身体表現	三輪えり花、松井工	16回

	座学 計 72 回	講義	福田一雄、芳賀直子、中西麻澄、鳥取二三子、新谷佳冬 他	39 回	
		特別講義 (サロン)	福地茂雄、坂東玉三郎、北山禎介、五館合同特別講義	4 回	
		語学	東京外国語センター (英語)	29 回	
	その他 計 39 回	舞台実習	新国立劇場バレエ団公演、 バレエ研修所発表会、修了公演 他	13 回	
		舞台鑑賞他	主催オペラ・バレエ・現代舞踊・演劇公演、 劇場見学 他	26 回	
合 計				661 回	
予科 4 期	実技 計 545 回	クラシカル・バレエ	新井咲子、坂西麻美、西川貴子、岸辺光代、 佐藤勇次、鈴木和子 他	465 回	
		キャラクター、コンテ ンポラリー・ダンス	キミホ・ハルバート 他	64 回	
		身体表現	三輪えり花、松井工	16 回	
	座学 計 56 回	講義	福田一雄、芳賀直子、中西麻澄、鳥取二三子 他	24 回	
		特別講義 (サロン)	福地茂雄、坂東玉三郎、北山禎介	3 回	
		語学	東京外国語センター (英語)	29 回	
	その他 計 34 回	舞台実習	バレエ研修所 10 月研修発表会、修了公演 他	8 回	
		舞台鑑賞他	主催オペラ・バレエ・現代舞踊・演劇公演 他	26 回	
	合 計				635 回
	予科 5 期	実技 計 542 回	クラシカル・バレエ	新井咲子、坂西麻美、西川貴子、岸辺光代、 佐藤勇次、鈴木和子 他	462 回
キャラクター、コンテ ンポラリー・ダンス			キミホ・ハルバート 他	64 回	
身体表現			三輪えり花、松井工	16 回	
座学 計 57 回		講義	福田一雄、芳賀直子、中西麻澄、鳥取二三子 他	25 回	
		特別講義 (サロン)	福地茂雄、坂東玉三郎、北山禎介	3 回	
		語学	東京外国語センター (英語)	29 回	
その他 計 35 回		舞台実習	バレエ研修所 10 月研修発表会、修了公演 他	8 回	
		舞台鑑賞 他	主催オペラ・バレエ・現代舞踊・演劇公演、 劇場見学 他	27 回	
合 計				634 回	

- ・ ロシア・ボリショイバレエ団の元プリンシパル・ダンサーであったアンドレイ・ウヴァーロフ講師による特別レッスンを 3 週間にわたり実施した。
- ・ 月 1 回、バレエ研修所長を始めとするバレエ研修所の主要講師の参加により、講師会議を開催している。日々の研修および研修公演等の実施についての検討と決定を行っている。

3. 発表会等

(1) 研修公演

① 第 9 期生・第 10 期生発表公演 (10 月 13・14 日、2 回、中劇場)

入場料：2,000 円、入場者数：1,051 人

出演：第 9 期研修生・第 10 期研修生・予科生

賛助出演：中西夏未

プログラム：クラシカル・バレエ

『トリプティーク～青春三章～』

『パ・ド・フィアンセ』

『カルメン』

『ラ・バヤデー』より第二幕パ・ダクション

② 研修公演「エトワールへの道程 2014 新国立劇場バレエ研修所の成果」(3 月 8・9 日、2 回、中

劇場)

入場料：3,000 円、入場者数：1,192 人

出演：第9期研修生・第10期研修生・予科生

ゲスト出演：今井智也

賛助出演：宝満直也、宇賀大将、小野寺雄、横山 翼、島田沙羅、鈴木 舞、鈴木 優、中西夏未

指揮：アレクセイ・バクラン 管弦楽：東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団

プログラム：クラシカル・バレエ

『ラ・シルフィード』第2幕より

『ヴァリエーション for4』

『ドン・キホーテ』第1幕、第3幕より

③ 平成25年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業「バレエ・アステラス★2013」(7月21日、1回、オペラ劇場)

入場料：5,000 円 (S 席)、3,000 円 (A 席)、2,000 円 (B 席)、1,500 円 (Z 席)

入場者数：1,006 人

出演：海老原由佳、小笠原由紀 with クラウディオ・カンジアローシ

オニール八菜 with フロロン・メラック

唐沢秀子 with ケンドル・ブリト

佐久間奈緒 with ツアオ・チー

高橋絵里奈 with アリオネル・ヴァーガス

寺田 翠+大川航矢

寺田亜沙子+奥村康祐

堀口 純 with 貝川鐵夫

カザフスタン・アルマティ舞踊学校

新国立劇場バレエ研修所修了生・研修生ほか

指揮：デヴィッド・ガルフォース

演奏：新国立劇場アンサンブル ※一部録音音源による上演あり。

(2) 国際交流公演

モスクワ国立舞踊アカデミー創立240周年記念国際バレエ学校フェスティバル

(11月6日、7日、2回、国立クレムリン宮殿劇場)

参加校＝アメリカン・バレエ・シアター附属ジャクリン・ケネディ・オナシス・スクール(米国)、カルメン・アマヤ舞踊学院(スペイン)、新国立劇場バレエ研修所(日本)、ハンブルク・バレエ学校(ドイツ)、ミラノ・スカラ座アカデミー・バレエ学校(イタリア)、ローマ歌劇場舞踊学校(イタリア)、ワガノワ記念ロシア・バレエ・アカデミー(ロシア)、[主催校]モスクワ国立舞踊アカデミー(ロシア)

新国立劇場バレエ研修所出演者：新国立劇場バレエ研修所研修生及び予科生から選抜された者及び賛助出演者

新国立劇場上演作品：『トリプティック～青春三章～』

(3) その他出演

- ・ 子どもたちのレッスン見学会(12月21日、1回、バレエリハーサル室) 参加人数約37名

(4) 舞台実習

- ① 舞台実習 新国立劇場公演「ドン・キホーテ」(6月、4回、オペラ劇場)
- ② 舞台実習 新国立劇場公演「くるみ割り人形」(12月、7回、オペラ劇場)

4. 募集・選考の状況、今後の募集に向けた取組・検討

- ・ バレエ研修第11期生6名の募集に対し42名(女性40名、男性2名)の応募があった。書類選考、3次に及ぶ実技及び面接の結果、5名(女性4名、男性1名)が合格した。
- ・ 予科生若干名の募集に対し27名(女性27名)の応募があった。書類選考、3次に亘る実技及び面接の結果、3名(女性3名)が合格した。

5. 外部専門家等の意見聴取、成果の検証、対象分野・人数等の不断の見直し

- ・ 外部専門家の意見を聴取し、成果の検証や今後の方向性の検討を行うため、研修事業委員会を設置し

た。委員には授業・公演の視察、レポートの提出を依頼するとともに、所長との意見交換等を行った。

【特記事項】

- ・ 新国立劇場バレエ研修所の存在及び研修内容を広く周知し、将来的に優秀な研修生の確保に資することを目的として、レッスン体験ワークショップを開催した（6月9日 場所：新国立劇場バレエ・リハーサル室 参加人数：39名）。
- ・ 予科4期生のうち1名が24年度をもって早期修了し、25年度より第10期生として研修を受けている。

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ これまで、常勤のバレエ講師は主任講師、副主任講師の2名体制であったが、新国立劇場バレエ団でファースト・ソリストとして活躍してきた西川貴子氏が主任講師補となり、体制が格段に強化され、より密度の濃い指導を行えるようになった。
- ・ 「バレエ・アステラス」公演が、平成25年度の文化庁次代の文化を創造する新進芸術家育成事業に採択され、文化庁主催のもと実施できた。今回はカザフスタンからアルマティ舞踊学校を招き、目標を同じくする同年代の海外の研修生との交流も果たすことができた。
- ・ 3月に「エトワールへの道程 2014 新国立劇場バレエ研修所の成果」公演を、同じく文化庁主催のもとで実施した。海外から指揮者を招き、オーケストラ演奏による本格的な公演となった。
- ・ 文化庁外国人芸術家招聘事業に基づき、「エトワールへの道程 2014 新国立劇場 バレエ研修所の成果」の公演直前に3週間にわたり、ロシア・ボリショイ劇場の名プリンシパルであったアンドレイ・ウヴァーロフを招き、基本のレッスンに加え、公演リハーサル指導も行った。研修生にとっては本場ロシアのクラシカル・バレエに触れる良い機会となった。
- ・ ロシアで開催された「モスクワ国立舞踊アカデミー創立240周年記念国際バレエ学校フェスティバル」に、日本の若手の代表として参加することにより、日本の文化芸術の水準の高さを海外に披露することができた。出演者はそれぞれ、日本の若手の代表としてロシアのステージに立つことを自覚し、ロシアでの滞在期間中は、リハーサルスケジュールの度重なる変更の中で、技術の向上と精神的な強さを得ることができた。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・ 研修生2学年に加え予科生も合同で研修を行っているが、稽古場が手狭で一つしかないため、年次別の研修スケジュールを組むことが大変難しい。特に、研修公演については効率的にリハーサルを行うことが極めて困難である。稽古場の充実が大きな課題である。
- ・ より優秀なバレエダンサーを育成するため、研修の実績及び成果の周知を一層図る等、才能ある人材を確保する手段を講じる必要がある。

3-(2)-③ 演劇研修

《方針》

演劇研修所は、明晰な日本語を使いこなし、柔軟で強度のある精神と身体を備えた次世代の演劇界を担える人材の育成を目指す。18歳～30歳の者を対象に毎年募集を行い、長期少人数制を採用して研修を行う。開所から9年目にあたる25年度は、7期生が修了する年度にあたり、3年間の研修の仕上げとして、2回の試演会と研修公演、修了公演の制作を行う。修了する研修生の卒業後の進路指導、修了生の活動支援を行う。またこれまでの実績を踏まえて、研修内容の一層の充実を図るべく研修内容の再検討を行う。

《実績》

1. 研修の実施

第7期生（11名3年次）、第8期生（9名、2年次）、第9期生（9名、1年次）の研修を行い、第7期生が修了した。

2. 主な授業及び回数、主な講師

区分	授業内容	主な講師・内容	回数
第7期	実技 計109回	演劇実習 試演会①、朗読劇、修了公演稽古、試演会②、 修了公演	105回

		演技講習	高泉淳子	4回
	座学 計1回	講義	河合祥一郎	1回
		合 計		110回
第8期	実技 計263回	声	池内美奈子	42回
		演技/シーンス タディ	ローナ・マーシャル、藤野節子、島守辰明、 高泉淳子、小林七緒、古城十忍、田中麻衣子、 豊田めぐみ、木村早智、保科耕一	138回
		歌唱	伊藤和美	35回
		ダンス	河野有紀子	11回
		アクション	渥美博、亀山ゆうみ	20回
		ボディ・コンデ ショニング	橋本佳子	6回
		アレクサン ダー・テクニーク	鍛田かおる	11回
	座学 計20回	講義	垣ヶ原美枝、河合祥一郎、田中麻衣子、ジョン・E・マ グラー、ソン・ジンチュク、鄭義信、別役実、 扇田昭彦、小川絵梨子、森新太郎、上村聡史 他	20回
	その他 計32回	観劇とディス カッション	新国立劇場主催公演 他	26回
		特別講義 (サロン)	アラン・ハリス、坂東玉三郎、北山禎介、修了生、三崎 力	5回
		見学	新国立劇場	1回
		合 計		315回
第9期	実技 計280回	声	池内美奈子、飯原道代	60回
		演技/シーンス タディ	ローナ・マーシャル、藤野節子、高泉淳子、木村早智、 鐘下辰男	65回
		日本舞踊	花柳千代、花柳千慶	22回
		所作	樋田慶子	16回
		歌唱	伊藤和美	23回
		ダンス	河野有紀子	18回
		和楽器	杵屋巳織	12回
		狂言	万作の会	13回
		アクション	渥美博、亀山ゆうみ	23回
		ボディ・コンデ ショニング	橋本佳子	14回
		アレクサン ダー・テクニーク	鍛田かおる	14回
	座学 計64回	講義	西川信廣、田中麻衣子、小田島恒志、豊田めぐみ、保科 耕一、垣ヶ原美枝、河合祥一郎、田中伸幸、 ジョン・E・マグラー、ソン・ジンチュク、鄭義信、別 役実、扇田昭彦、小川絵梨子、森新太郎、 上村聡史 他	64回
	その他 計36回	観劇とディス カッション	新国立劇場主催公演 他	26回
		特別講義 (サロン)	アラン・ハリス、坂東玉三郎、北山禎介、西川信廣、福 地茂雄、修了生、鐘下辰男・亀山ゆうみ、五館合同特別 講義	8回
見学等		新国立劇場 江戸深川資料館	2回	
		合 計		380回

- ・ 第一線で活躍する国内外の一流の講師陣のもと、高度なカリキュラムによる研修を実施した。2年次は、昨年度に引き続き、シーンスタディ（演技実習）を中心とするカリキュラムとし、1年次で学んだ基礎授業を応用し、より実践的な環境での授業を行った。
- ・ 研修の進捗状況の確認、授業の見直しなどを検討するため、所長、副所長、主任講師、アソシエイト・ディレクター等により、カリキュラム会議を毎月開催した。

3. 発表会等

(1) 研修公演

- ① 第7期生 試演会①「ぼくの国、パパの国」(5月17～19日、4回、小劇場)
入場料：A席2,500円 B席1,500円 学生料金1,000円、入場者数：801人
- ② 研修公演 朗読劇「少年口伝隊一九四五」(8月1～3日、3回、小劇場)
入場料：A席2,000円 B席1,500円 学生は半額 入場者数：591人
- ③ 第7期生 試演会②「華々しき一族」(12月20～23日、6回、小劇場)
入場料：A席3,000円、B席2,500円、Z席1,500円、学生料金1,000円、入場者数：818人
- ④ 修了公演「9階の42号室—邪魔しないで下さい」(3月15～18日、5回、小劇場)
入場料：A席3,000円、B席2,500円、Z席1,500円、学生料金1,000円、入場者数：792人

4. 募集・選考の状況、今後の募集に向けた取組・検討

演劇研修第10期生12名の募集に対し、137名(女性73名、男性64名)の応募があった。3次にわたる選考の結果、12名(女性6名、男性6名)が合格した。選考委員は、講師の他、演出家、俳優等に依頼した。

5. 外部専門家等の意見聴取、成果の検証、対象分野・人数等の不断の見直し

- ・ 外部専門家の意見を聴取し、成果の検証や今後の方向性の検討を行うため、研修事業委員会を設置した。委員には授業・公演の視察、レポートの提出を依頼するとともに、所長、副所長との意見交換等を行った。
- ・ 専門家の意見を広く傾聴するために、演劇研修所スタジオ・サポート委員会(委員3名：大笹吉雄、河合祥一郎、宮田慶子 *12月より河合祥一郎、宮田慶子の2名)を組織し、栗山民也所長、西川信廣副所長らとともに委員会を2回開催し、研修所の運営・方向性について議論を重ねた。

【特記事項】

- ・ 新国立劇場演劇研修所の存在及び研修内容を広く周知し、将来的に優秀な研修生の確保に資することを目的として、授業見学会を開催した(11月27、30日 場所：新国立劇場Cリハーサル室 参加人数：計41名)。

《自己点検評価》

- 良かった点・特色ある点
 - ・ 昨年度からの第一線で活躍する現役の演出家・スタッフ・俳優や国外の一流の講師の協力体制が軌道に乗り、一層高度なカリキュラムを実現することができた。2年次は、昨年度に引き続き、シーンスタディ(演技実習)を中心とするカリキュラムとし、1年次で学んだ基礎授業を応用し、演劇の舞台制作により近い環境での授業を行うことができた。
 - ・ 修了生が活動の場を広げており、新国立劇場の主催公演をはじめ、多くの公演に出演するようになってきたことは、個人の実力に加え、研修所での研修が活かされているものと考えられる。特に25年度には、新国立劇場の演劇主催公演において演劇研修所修了生が多数起用されている。
- 見直し又は改善を要する点
 - ・ 研修施設の充実を図るため、現在使用している芸能花伝舎の改修だけではなく、他の施設での実施も検討していきたい。
 - ・ 退所者が複数名あったことについては、所長、副所長、ヘッドコーチによる一層定期的な面談実施をはじめ、研修生の生活面にも指導を徹底する等、具体策を講じていきたい。また、入所式での奨学金授与式を実施して、研修生の自覚を高めたいと考えている。

3-(2)-④ 実施に当たっての留意事項

《実績》

1. 広報活動の充実

- ・ 研修の実施状況、特に研修公演の稽古、公演の様子などをホームページへ掲載し、また、Facebook、ツイッターなどを利用して日々のニュースを告知した。演劇研修の様子については、バレエ研修に続き、ホームページにて動画を公開した。
- ・ 修了生の活動状況を定期的に把握し、その成果をホームページに掲載するとともに研修公演会場におけるパネル展示等で紹介した。
- ・ 外部への公演出演を通して研修事業の意義を周知した。バレエ研修所のモスクワ公演においては、現地ロシアをはじめ欧州各国のマスコミ向けに、研修所の概要をリリースにて紹介した。
- ・ 研修所の存在及び研修内容を広く周知し、将来的に優秀な研修生の確保に資することを目的として、バレエ研修所ではレッスン体験ワークショップ（6月9日 場所：新国立劇場バレエ・リハーサル室 参加人数：39名）を、演劇研修所では授業見学会（11月27、30日 場所：新国立劇場Cリハーサル室 参加人数：計41名）を開催した。

2. 研修生の実演機会の充実及び現代舞台芸術の振興・普及のための活動

(オペラ研修)

- ・ トウキョウ・モーツァルト・プレイヤーズ オペラ・プロジェクト第5弾「魔弾の射手」（演奏会形式）（10月6日、1回、三鷹市芸術文化センター 風のホール）
主催：公益財団法人三鷹市芸術文化振興財団／有限会社ミュージック・マスターズ
入場者数：598名
出演：14期生3名・16期生2名・修了生1名
- ・ 静岡国際オペラコンクール主催「オペラおもしろ講座～オペラって何だろう～」(12月8日、1回、静岡文化芸術大学講堂(浜松)／12月15日、1回、しずぎんホール ユーフォニア(静岡)／12月22日、1回、沼津市民文化センター小ホール(沼津))
主催：静岡国際オペラコンクール実行委員会
入場者数：477名(浜松)、377名(静岡)、360名(沼津)
出演：14期生4名・15期生3名・16期生1名(浜松)、14期生2名・15期生4名・16期生2名(静岡)、14期生2名・15期生2名・16期生4名(沼津)

(バレエ研修)

- ・ モスクワ国立舞踊アカデミー創立240周年記念国際バレエ学校フェスティバル(11月6・7日、2回、国立クレムリン宮殿劇場)
参加校＝アメリカン・バレエ・シアター付属ジャクリン・ケネディ・オナシス・スクール(米国)、カルメン・アマヤ舞踊学院(スペイン)、新国立劇場バレエ研修所(日本)、ハンブルク・バレエ学校(ドイツ)、ミラノ・スカラ座アカデミー・バレエ学校(イタリア)、ローマ歌劇場舞踊学校(イタリア)、ワガノワ記念ロシア・バレエ・アカデミー(ロシア)、
[主催校]モスクワ国立舞踊アカデミー(ロシア)
新国立劇場バレエ研修所出演者：新国立劇場バレエ研修所研修生及び予科生から選抜された者及び賛助出演者
新国立劇場上演作品：『トリプティーク～青春三章～』
- ・ 子どもたちのレッスン見学会(12月21日、1回、バレエリハーサル室) 参加人数：37人
- ・ 舞台実習
 - ① 舞台実習 新国立劇場公演「ドン・キホーテ」(6月、4回、オペラ劇場)
 - ② 舞台実習 新国立劇場公演「くるみ割り人形」(12月、7回、オペラ劇場)

3. 伝統芸能分野と現代舞台芸術分野の相互交流

幅広い分野で養成・研修事業を実施している振興会の特長を活かし、各分野の研修生が一堂に会して一流の舞台芸術家から舞台に対する心構えを学ぶとともに、伝統芸能分野と現代舞台芸術分野の相互交流を図った。

- ・ 五館合同特別講義、研修生交流会
12月12日(木) 11:25～13:45

講義：伝統芸能情報館レクチャー室（3階）、交流会：第一会議室（事務棟3階）

講師：鳥羽屋里長（歌舞伎音楽長唄立唄演奏者、歌舞伎音楽（長唄）研修主任講師）

講義内容：「良き舞台人になるために」

参加者：研修生46名及び受講生1名（歌舞伎俳優7名、竹本2名、長唄1名、太神楽2名、太神楽受講生1名、能楽1名、文楽3名、組踊9名、オペラ5名、バレエ6名、演劇10名）

4. 公演制作者・舞台技術者等の研修の受入れ、協力

舞台技術者、インターン等33名の受入れを行うとともに、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会や公益社団法人全国公立文化施設協会等と連携してフォーラムを開催したほか、地域の公立文化施設で開催された技術職員研修会等への講師の派遣、提携大学の学生に向けた講義等、新国立劇場の人材及び施設を活用した取組を行った。

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 研修の実施状況、研修公演の稽古、公演の様子、修了生の活動状況などをホームページへ掲載し、また、Facebook、ツイッターなどを利用して日々のニュースを告知するなど、継続的に情報を発信し、研修所の活動に対してより一層の理解促進を図った。
- ・ 研修生や修了生が外部公演に参加するなど、積極的に文化普及活動への参画に努めることにより、実演経験を積む機会の拡充を図ることができた。
- ・ 舞台技術者、インターン等の受入れを行うとともに、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会や公益社団法人全国公立文化施設協会等と連携してフォーラムを開催したほか、地域の公立文化施設で開催された技術職員研修会等への講師の派遣、提携大学の学生に向けた講義等、新国立劇場の人材及び施設を活用することができた。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・ 修了生の活動状況について、ホームページを活用して一層の周知を図る必要がある。
- ・ 実演経験を積む機会の一層の充実を図るため、外部公演へ参加する機会の増加に努める必要がある。

I 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するため
とるべき措置

伝統芸能に関する調査研究の実施並びに資料の収集及び活用

伝統芸能に関する調査研究の実施並びに資料の収集及び活用 p.202

- 調査研究・資料の収集及び活用
 - 上演資料集の刊行 p.209
 - 「近代歌舞伎年表」「義太夫年表」「沖縄芸能史年表」の刊行 p.210
 - 古文献の復刻等 p.211
 - 資料の収集・公開 p.211
 - 収集資料の活用 p.212
 - 文化デジタルライブラリー等の整備と公開 p.213
 - 展示公開 p.214
- 公演記録の作成・活用、普及活動の実施
 - 公演記録の作成 p.219
 - 公演記録映像の活用 p.219
 - 公開講座等、普及活動の実施 p.220

現代舞台芸術に関する調査研究の実施並びに資料の収集及び活用

現代舞台芸術に関する調査研究の実施並びに資料の収集及び活用 p.225

- 調査研究・資料の収集及び活用 p.230
 - 海外戯曲の翻訳に関する調査研究・活用 p.230
 - 新訳戯曲等出版物の刊行 p.231
 - 海外の主要劇場等の情報収集・活用 p.231
 - 公演記録の整理・保存 p.232
 - 資料の収集と公開 p.232
 - 展示公開 p.233
- 公演記録の作成・活用、普及活動の実施 p.235
 - 公演記録映像の作成・活用 p.235
 - 公開講座等、普及活動の実施 p.237

4- (1) 伝統芸能に関する調査研究の実施並びに資料の収集及び活用

《中期計画の概要》

4 伝統芸能及び現代舞台芸術に関する調査研究の実施並びに資料の収集及び活用

(1) 伝統芸能に関する調査研究の実施並びに資料の収集及び活用

ア 伝統芸能に関する調査研究を次のとおり実施する。

- ① 上演資料集の作成
- ② 日本各地の歌舞伎・文楽を主とした演劇興行に関する記録の調査研究、組踊等沖縄伝統芸能の上演に関する記録の調査研究
- ③ 伝統芸能に関する古文献等についての調査研究、復刻・刊行等

イ 伝統芸能に関する資料の収集及び活用を次のとおり実施する。

- ① 伝統芸能関係図書、歌舞伎錦絵等博物資料等の収集及び分類整理、閲覧、図録等の作成、博物館施設等への貸与等
- ② 収集した資料のデータベース化、デジタルコンテンツの充実

ウ 収集した資料等の展示公開

- ・ 伝統芸能情報館資料展示室 年3企画程度
- ・ 演芸資料館資料展示室 年3企画程度
- ・ 能楽堂資料展示室 年4企画程度
- ・ 文楽劇場資料展示室 年4企画程度
- ・ 国立劇場おきなわ資料展示室 年4企画程度

(3) 公演記録の作成・活用、普及活動の実施

- ア 演技・演出等の記録の作成・保存、閲覧・視聴
 イ 公演記録映像の鑑賞会等の開催による有効活用
 ウ 講座、展示等の実施

《年度計画》

4 伝統芸能及び現代舞台芸術に関する調査研究の実施並びに資料の収集及び活用

(1) 伝統芸能に関する調査研究の実施並びに資料の収集及び活用

ア 中期計画の方針に従い、伝統芸能に関する調査研究を次のとおり実施する。

- ① 歌舞伎、文楽及び組踊等沖縄伝統芸能公演の実施に当たり、過去の公演記録、演出等を調査した上演資料集を作成し、上演内容の理解促進に活用する。
- ② 日本各地の歌舞伎・文楽を主とした演劇興行に関する記録及び組踊等沖縄伝統芸能の上演に関する記録の調査研究を次のとおり行う。
 - (a) 「近代歌舞伎年表」名古屋篇第八巻の刊行及び第九巻の刊行準備
 - (b) 「義太夫年表 昭和篇」第二巻の刊行及び第三巻の刊行準備
 - (c) 「沖縄芸能史年表」第十集の作成
- ③ 伝統芸能に関する古文献等について調査研究を行い、次のとおり復刻・刊行等を行う。
 - (a) 歌舞伎資料選書・12「芝居見たまま 明治篇」第二巻の刊行
 - (b) 未翻刻戯曲集第二十巻の刊行
 - (c) 正本写合巻集(2冊)の刊行
 - (d) 演芸資料選書・11の刊行準備
 - (e) 「国立能楽堂調査研究」(8)の刊行

イ 中期計画の方針に従い、伝統芸能に関する資料の収集及び活用を次のとおり実施する。

- ① 伝統芸能関係図書、歌舞伎錦絵等博物資料等の収集及び分類整理を行い、閲覧に供する。
 各館においては、伝統芸能全般に関する図書・資料のほか、主として各館で公開する分野に関する図書・資料を収集する。
 図書については、開架図書を充実させるとともに、ホームページで蔵書検索サービスを提供し、一般の利用の促進に努める。
- ② 収集した資料等を活用し、次のとおり刊行を行う。また、博物館施設等に対し、収集した資料を貸与する。

- (a) 特別展示図録の刊行（能楽堂）
- (b) 英文演目解説「The Guide to Noh of National Noh Theatre」(3)(4)の刊行（能楽堂）
- ③ 収集した資料のデータベース化やデジタルコンテンツの充実を図り、インターネットにより公開する。
 - (a) 図書、資料及び公演記録等について、引き続き次の情報のデータベース化を行う。
 - ・ 図書（本館筋書）
 - ・ ブロマイド
 - ・ 公演記録情報（上演情報、公演記録写真、扮装図鑑）
 - (b) デジタルコンテンツを次のとおり作成する。
 - ・ 文化デジタルライブラリー
 - 舞台芸術教材「雅楽編」
 - 舞台芸術教材「文楽編」
 - ・ 伝統芸能情報館展示
 - 映像コンテンツ「能楽鑑賞入門」
 - (c) 文化デジタルライブラリーホームページ目標アクセス件数：400,000件
- ウ 収集した資料等を別表8のとおり展示公開する。実施に当たっては、来場者の利便性の向上と広報活動の強化を図る。
- (3) 伝統芸能及び現代舞台芸術に関する公演記録の作成・活用、普及活動の実施
 - ア 主催公演を中心に演技・演出等の記録を録音・録画・写真等により適切に作成・保存し、閲覧・視聴に供する。
 - イ 公演記録映像については、鑑賞会等を開催するとともに、講座・レクチャー等で活用する。また、必要な著作権処理を行った上で、外部制作会社等と連携して、DVDを作成する等の有効活用を図る。
 - ウ 公開講座等、普及活動の実施
 - ① 伝統芸能及び現代舞台芸術に関する公開講座等を別表9のとおり実施する。実施に当たっては、広報活動を十分に行うとともに、参加者に適宜アンケート調査を実施し、回答者の80%以上から有意義であったと回答されるよう内容等の充実に努める。
 - ② 公演の実施にあわせた関連講座、展示等を適宜実施し、内容に応じてホームページ等で公開する。
 - ③ 教職員の伝統芸能への理解を深め、教育を受ける児童・生徒に対して伝統芸能の普及促進を図る観点から、教員免許更新制における免許状更新講習を、文部科学大臣の認定を受けて実施する。
 - ④ 組踊への理解を促進し、より一層の普及を図るため、組踊解説DVD及び組踊紹介展示パネル等の貸出しを行う。

《実 績》

1. 調査研究・資料の収集及び活用

事 項	実 績
上演資料集	歌舞伎7冊、文楽5冊、組踊3冊 合 計 15 冊
近代歌舞伎年表 義太夫年表 沖縄芸能史年表	刊 行：「近代歌舞伎年表 名古屋篇」第八巻（26年3月） 「義太夫年表 昭和篇」第二巻（25年10月） 「沖縄芸能史年表」第十集（26年3月） 刊行準備：「近代歌舞伎年表 名古屋篇」第九巻のデータ集積、一部原稿作成 「義太夫年表 昭和篇」第三巻の刊行準備 調査作業：「近代歌舞伎年表 名古屋篇」第十巻以降の資料調査 「義太夫年表 昭和篇」第三巻以降の資料調査
古文書の復刻等	刊 行：「芝居見たまま 明治篇」第二巻<歌舞伎資料選書・12>（26年2月） 「隅田川対高賀紋」<未翻刻戯曲集・20>（26年3月） 「裏表忠臣蔵」<正本写合巻集・12>（26年2月） 「春服対佳賀紋」<正本写合巻集・13>（26年3月） 「国立能楽堂調査研究8」（26年3月） 刊行準備：「芝居見たまま 明治篇」第三巻<歌舞伎資料選書・12>の文献調査 「未翻刻戯曲集・21」の古文書調査

	「正本写合巻集」2冊の古文献調査及び原稿準備											
資料の収集と公開	伝統芸能情報館：収集図書4,472冊、収集資料1,714点 能楽堂：収集図書738冊、収集資料19,151点 文楽劇場：収集図書1,836冊、収集資料249点 国立劇場おきなわ：収集図書635冊、収集資料897点											
	伝統芸能情報館：閲覧室利用者4,144人（開室254日）、写真複製使用355件、博物資料閲覧1件、視聴利用991件 能楽堂：閲覧室利用者数4,102人（開室248日）、写真複製使用77件、博物資料閲覧7件、視聴利用2,260件 文楽劇場：閲覧室利用者1,362人（開室244日）、写真複製使用30件、博物資料閲覧1件、視聴利用679件 国立劇場おきなわ：閲覧室利用者1,713人（開室167日）、写真複製使用15件、視聴利用995件											
収集資料の活用	・企画展示「世も盡きじー三井家の能・暁斎の狸々」作品目録（25年4月） ・国立能楽堂開場30周年記念特別展示「能を彩る文化財—名品能面能装束展」展示図録（25年9月） ・英文演目解説「The Guide to Noh of the National Noh Theatre —3」（26年3月） ・「国立能楽堂調査研究8」（26年3月）											
文化デジタルライブラリー等の整備と公開	データベース化	<table border="1"> <tr> <td>図書</td> <td>8,000件</td> </tr> <tr> <td>資料</td> <td>プロマイド257点</td> </tr> <tr> <td>上演情報</td> <td>154公演</td> </tr> <tr> <td>公演記録写真</td> <td>21,398枚</td> </tr> <tr> <td>扮装図鑑</td> <td>2公演</td> </tr> </table>	図書	8,000件	資料	プロマイド257点	上演情報	154公演	公演記録写真	21,398枚	扮装図鑑	2公演
	図書	8,000件										
資料	プロマイド257点											
上演情報	154公演											
公演記録写真	21,398枚											
扮装図鑑	2公演											
デジタルコンテンツの作成： 文化デジタルライブラリー舞台芸術教材「雅楽」・「文楽編作品解説 仮名手本忠臣蔵」 伝統芸能情報館映像展示用コンテンツ「能鑑賞入門 清経」 文化デジタルライブラリーホームページへのアクセス件数583,969件（計画：400,000件）												
展示公開	伝統芸能情報館資料展示室	実施4回、来場者数47,195人（計画：4回43,300人）										
	演芸場資料展示室	実施3回、来場者数38,216人（計画：3回33,100人）										
	能楽堂資料展示室	実施4回、来場者数29,563人（計画：4回26,160人）										
	文楽劇場資料展示室	実施5回、来場者数81,041人（計画：5回63,690人）										
	国立劇場おきなわ資料展示室	実施4回、来場者数9,997人（計画：4回12,000人）										

2. 公演記録の作成・活用、普及活動の実施

(1) 公演記録の作成

(本館・演芸場)

- ・自主公演等65公演について、映像・写真等による記録を作成した。
- ・歌舞伎公演（鑑賞教室を含む）では、鬘・衣裳・小道具等の写真による記録を作成（扮装図鑑）し、下座の附帳等を保存した。また、文楽公演（鑑賞教室を含む）では、人形・大道具・小道具等の写真による記録を作成した。

(能楽堂)

- ・自主公演51公演について、映像・写真等による記録を作成した。

(文楽劇場)

- ・自主公演15公演について、映像・写真等による記録を作成した。

(国立劇場おきなわ)

- ・自主公演29公演、研修修了発表会1公演について、映像・写真等による記録を作成した。

(2) 公演記録映像の活用

- ・視聴室において出演者及び一般来場者の視聴に供するとともに、出演者からの要望に応じて複製

物を提供した。また、出版社・放送局の依頼に応じて複製物を提供した。

- ・ 文楽「夏祭浪花鑑」のDVD（全2枚）を外部の制作会社と協力して作製した。（25年6月21日発売）
- ・ 文楽「新版歌祭文」のDVD（全2枚）を外部の制作会社と協力して作製した。（25年9月27日発売）
- ・ 能楽堂では、公開講座において講演と併せて公演記録映像を活用した。
- ・ 文楽劇場では、「国立文楽劇場開場30周年記念のつどい」において、公演記録映像を活用した「映像で振り返る国立文楽劇場の30年」を上映した。
- ・ 国立劇場おきなわでは、公演記録映像等を利用した「公演記録鑑賞会」を4回（6, 9, 12, 2月）実施した。そのうち、6月の公演記録鑑賞会では、平成25年5月に寄贈されたドキュメンタリー映画「イザイホウ」（1966年撮影）と、当劇場で上演された公演記録「南城市の民俗芸能 豊作への祈り」を併せて上映した。

(3) 公開講座、普及活動の実施

- ・ 伝統芸能情報館のレクチャー室において「公演記録鑑賞会」を12回（各月1回）、「伝統芸能サロン」を6回（5, 7, 10, 11, 2, 3月）開催した。
- ・ 能楽堂では、公開講座を12回（各月1回）、展示と連携した特別講座を2回（11, 3月）開催した。
- ・ 文楽劇場では、「公演記録鑑賞会」を12回（各月1回）、「公演関連プレ講座」を2回（4, 9月）、「伝統芸能講座」を1回（1月）開催した。
- ・ 国立劇場おきなわでは、公演記録映像等を利用した「公演記録鑑賞会」を4回（6, 9, 12, 2月）実施した。また、伝統芸能に関わる研究や実演、資料の公開などを取り上げる「沖縄伝統芸能公開講座」を4回（6, 8, 1, 2月）開催した。そのうち、8月の講座では「夏休み子ども三板教室」と題して、沖縄の伝統楽器・三板と、伝統舞踊であるカチャーシーのワークショップを行った。

3. 外部専門家等からの意見聴取

3月18日に調査事業委員会を実施し、外部専門家から意見を聴取した。

- ・ 年間の目標アクセス件数を決めてそれを達成できるように頑張っているのは素晴らしいことだとの意見があった。
- ・ 文化デジタルライブラリーのコンテンツがかなり充実してきたとの意見があった。
- ・ 展示・公開講座の入場者の年齢層など、どういった方々が参加されているか知りたいとの意見があった。
- ・ 展示・公演記録鑑賞会・講座の来場者が目標値をほとんど越えていることは、今の時代大変なことだという意見があった。
- ・ 展示に関しては、伝統芸能情報館が位置的に一番不利な状況にあるので、集客には一層の工夫が必要との意見があった。
- ・ 「芝居見たまま」は『演芸画報』に連載されたものをまとめており、明治期の演劇研究に役立っている。今後も継続して刊行してほしいとの意見があった。

【特記事項】

（本館）

- ・ 3月11日に大劇場で「東日本大震災三周年追悼式」が実施されたため、視聴室・図書閲覧室・資料展示室を閉室した。
- ・ テレビ朝日の「若大将のゆうゆう散歩」（1月7日放送）で、伝統芸能情報館の展示「歌舞伎十八番の内 勸進帳の世界」と本館の収蔵庫（錦絵・文楽首）が紹介された。

（能楽堂）

- ・ 公開講座「能楽鑑賞講座」において、開場30周年を記念し、前半は能の大成者観阿弥・世阿弥の業績について全6回、後半は能が後世の文化に与えた影響について全6回取り上げた。
- ・ 能楽特別講座では、国立能楽堂開場30周年記念特別展示「能を彩る文化財一名品能面能装束展」と関連して、国立能楽堂開場30周年記念特別展示列品講座「桃山時代の能装束に見る刺繍」を開催した。また、収蔵資料展後期「能面と能装束」に関連して、「能面と面袋一面袋から探る能面の伝来」と題してシンポジウム形式の講座を開催した。

(国立劇場おきなわ)

- ・ 国立劇場おきなわでは、開場 10 周年を記念して行われた特別公演「能「道成寺」」に連動して、第 4 回企画展「能と組踊」を開催した。また、県外講演では「能と組踊」のレクチャーを行い、公演記録鑑賞会では「歌舞伎舞踊・京鹿子娘道成寺」(昭和 60 年 3 月国立劇場/主演:尾上菊五郎)を上映した。

《数値目標の達成状況》

【文化デジタルライブラリーホームページへのアクセス状況】

年間アクセス件数：583,969件／目標400,000件（達成度146.0%）

【展示公開の実施状況】実績20回／計画20回（達成度100.0%）

【展示公開の参加者数】実績206,012人／計画178,250人（達成度115.6%）

【講座等の実施状況】実績54回／計画54回（達成度100.0%）

【講座等の参加者数】実績6,708人／計画5,956人（達成度112.6%）

【講座等の満足度】実績87.6%／計画80%（達成度109.5%）

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

(本館)

- ・ 文化デジタルライブラリーホームページへの年間アクセス件数が目標数を大幅に上回った。
- ・ 文化デジタルライブラリーの「舞台芸術教材」に初めてのジャンル「雅楽」を加えることができた。また、今年度作成した「舞台芸術教材」2 点の早わかりに英文表記を行い、外国人向け対応を実施した。
- ・ テレビ朝日の「若大将のゆうゆう散歩」では、普通は見ることができない本館の収蔵庫内にテレビカメラが入り、博物資料の一部が紹介され、国立劇場の調査事業について一般に広く周知することができた。

(能楽堂)

- ・ 能楽鑑賞講座において、本年度上半期は、能楽研究の第一人者竹本幹夫が、観阿弥・世阿弥の業績を最新の研究を交えて紹介した。下半期は、能が近世の浄瑠璃・歌舞伎・俳諧・文学・教育など、さまざまなジャンルに与えた影響を、それぞれの研究者の視点から紹介した。能の本質の変容と影響の大きさをともに紹介できた。
- ・ 特別講座「能面と面袋一面袋から探る能面の伝来」では、能面の入れものである面袋に関する調査報告と能面の伝来について紹介し、新たな試みとして好評を得た。

(文楽劇場)

- ・ 文楽劇場では、「義太夫年表 昭和篇」第二巻を計画通りに刊行できた。
- ・ 文楽劇場の企画展示「竹本義太夫と近松門左衛門」で、四天王寺の石塔に納められていた豊竹筑前少掾（豊竹座を創始した豊竹越前少掾の高弟）自筆の経文を展示し、新聞等にも大きく取り上げられた。

(国立劇場おきなわ)

- ・ 展示、講座、公演記録鑑賞会のテーマなどを自主公演と関連付けることで、伝統芸能の理解を深められるよう企画した。

《24年度評価結果への対応》

【評価】

(文科省評価委員会)

- ・ 目標は達成しており、これまでの継続性と蓄積は評価できるが、ルーティーン化している感がある。

(①)

(振興会評価委員会)

- ・ 「ぶんらくの本」「のう・きょうげんの本」は、寄贈先の小学校等で活用されていることを評価する。そのほかの高度な研究資料や制作映像も含め、今後とも配布効果や実際に役立っていることについての追跡調査を継続してほしい。それが普及活動のヒントになるはずである。(②)
- ・ ワークショップで伝統芸能を実際に体験してもらうような試みも、もっと広範に行いたい。教員の理解を得られれば、学校単位での児童生徒鑑賞につながるので、伝統芸能の様々なジャンルを扱っている

教員免許状更新講習を、その普及の一助に活用してはどうだろうか。(③)

【対応】

①事業の一層の充実に向けた調査研究内容・実施体制等の検討

「近代歌舞伎年表」は昭和61年3月31日に「大阪篇」第一巻を刊行して以来、「京都篇」を経て現在は「名古屋篇」を刊行中である。

研究書籍は再版されることがきわめて稀で、刊行後相当年数が経過した「大阪篇」及び「京都篇」は入手困難な状況になっているため、「近代歌舞伎年表」の刊行を行っている八木書店と協力のうえ、「大阪篇」及び「京都篇」の「オンデマンド出版（注文に応じてデータファイルに蓄積しておいた書籍情報をプリントアウトし出版する受注生産）」を実施する。これにより、遅滞なく「近代歌舞伎年表」を研究機関等に頒布することができ、利用者を拡充していくこととなる。今後は、「近代歌舞伎年表」刊行事業の実施にあたり、「オンデマンド出版」のほか、電子書籍化等も含め、一層の普及・拡大のための方策を検討していく。

また、24年度には、振興会に蓄積されてきた資料・情報等を元に、「芝居見たまま 明治篇」（歌舞伎資料選書・12）について研究成果を踏まえて刊行したほか、「演芸資料選書」では、初めて軽演劇の分野を採り上げた「エノケン喜劇のドラマツルギー - 榎本健一と菊谷栄が見た夢 -」を刊行する等、新たな視点に立った選書類の刊行についても、引き続き実施していくこととする。

能楽堂では、従来の事業を地道に継続して成果を蓄積していくと同時に、新規の調査研究の開発に努め、事業の一層の充実を図る。

文楽劇場では、所蔵のSPレコード音源のデジタル化を進めてきており、その成果を公開する場として24年度から「伝統芸能講座」を始め、「義太夫節SPレコードを聴く会」を実施した。25年度にはその第2回を実施した。今後も調査研究の充実を図り、その成果を「伝統芸能講座」等で公開していきたい。

国立劇場おきなわでは、「上演資料集」に掲載する論文には、これまで本土と沖縄の芸能とを比較した内容の研究が少ないことから、24年度自主公演の組踊「姉妹敵討」上演資料集では、組踊と本土の各地域における芸能と関連した論考を掲載した。本土の芸能研究者との交流によるもので、組踊研究の広がりとその可能性を検討することができた。

②成果物の活用状況の調査・分析

本館で作成した「かぶきの本」「ぶんらくの本」は、学校単位での購入希望が寄せられており、引き続き教材として活用されていることがうかがえる。また、大阪府立中央図書館こども資料室では、こどもが調べたいテーマ別に「こども向け調査ガイド」を作成して参考図書を紹介しており、文楽をテーマにした調査ガイドには、「ぶんらくの本」が内容の説明文とともに採り上げられている。埼玉県立久喜図書館では、館内で定期的に資料展を開催しており、資料展「歌舞伎の世界へようこそ」では、児童向け書籍として「かぶきの本」が紹介されている。なお、以上の事例は各図書館のホームページにも掲載されている。

また、上演資料集は、本館での歌舞伎公演及び文楽公演ごとに刊行しており、内容が上演演目に関連した上演年表、芸談、評論等であることから、学校の観劇行事の予習教材として、また観劇団体の事前レクチャー資料として利用されている。また刊行の都度、大学、図書館、関係者、関係団体等に配付しており、添付したアンケートには、演劇研究論文等の基礎資料のみならず、興行会社の演劇制作現場における舞台制作資料として活用しているという意見も寄せられている。

能楽堂では、研究資料制作映像については、配布効果の調査を継続して普及活動に役立てるよう努める。

文楽劇場で編集・刊行している「義太夫年表 昭和篇」については、関係機関や研究者への配布に際してアンケート調査を実施し、内容に対する意見を求めている。その結果、高い評価を得たため、25年度刊行の第2巻以降も基本的に第1巻の編集方針を踏襲することとした。

国立劇場おきなわでは、年間3演目3巻について上演資料集を刊行しており、県内外の研究者及び研究機関より問い合わせがあるが、今のところ増刷する状況にはないため、配布先を随時見直し、同資料集をより活用していただける研究者等に配布していきたい。大道具帳は、特に沖縄芝居の背景幕に関する情報が豊富なことから、県内各市町村の図書館などに配付され、県民への沖縄芝居の理解、周知に役立っている。

③教員免許状更新講習の普及への活用

教員免許状更新講習については、受講者が伝統芸能への良き理解者となるよう、26年度より外部専門家や実演家を新たに講師として起用し、講座内容の一層の充実を図るとともに、受講者に対し振興会が実施している学校向けの普及・振興事業等を積極的に周知するなどして、受講者による児童生徒に対する普及活動への具体的な取組を促したい。

1. 調査研究・資料の収集及び活用

(1) 上演資料集の刊行

<方針>

自主公演の上演にあたり、過去の上演情報、演技・演出等の情報を調査し、出演者及び公演スタッフの参考に供し、あわせて一般の鑑賞・研究の一助とするため、上演資料集を刊行する。

本館においては、歌舞伎公演・歌舞伎鑑賞教室公演及び文楽公演・文楽鑑賞教室公演に際して刊行する。

国立劇場おきなわでは、組踊等沖縄伝統公演の実施にあたり、上演内容の理解促進等に利用できるよう過去の公演記録、演出等を調査した上演資料集を刊行する。

<実績>

1. 刊行実績

区 分	内 容
歌舞伎 刊行 7 冊	6 月鑑賞教室「新歌舞伎十八番の内 紅葉狩」(No. 570) 7 月鑑賞教室「芦屋道満大内鑑一葛の葉一」(No. 571) 10 月公演「一谷嫩軍記一陣門・組討・熊谷陣屋一・新歌舞伎十八番の内 春興鏡獅子」(No. 573) 11 月公演「伊賀越道中双六」(No. 574) 12 月公演「主税と右衛門七・弥作の鎌腹・忠臣蔵形容画合」(No. 575) 1 月公演「三千両初春駒曳」(No. 578) 3 月公演「菅原伝授手習鑑一車引一・處女翫浮名横櫛一切られお富一」(No. 580)
文楽 刊行 5 冊	5 月公演「一谷嫩軍記・曾根崎心中・寿式三番叟・心中天網島」(No. 569) 9 月公演「伊賀越道中双六」(No. 572) 12 月鑑賞教室「団子売・菅原伝授手習鑑」(No. 576) 12 月公演「大塔宮囃鏝・恋娘昔八丈」(No. 577) 2 月公演「七福神宝の入船・近頃河原の達引・染模様妹背門松・御所桜堀川夜討・本朝廿四孝」(No. 579)
組踊 刊行 3 冊	8 月定期公演 組踊「糸納敵討」(No. 30) 10 月定期公演 組踊「西南敵討」(No. 31) 3 月定期公演 組踊「女物狂」(No. 32)

2. 配付実績

(1) 歌舞伎・文楽

出演者及び公演スタッフ 150 件、研究者等 70 件、研究機関等 50 件

(2) 組踊

出演者及び公演スタッフ 85 件、研究者等 15 件、研究機関等 80 件

3. 外部専門家等の意見及びアンケート調査

(1) 外部専門家等の意見

- ・ 個々の演目に関する調査を継続しており、研究の資料、また観劇の参考資料としても大変意義がある。今後も継続して出版してほしい。

(2) アンケート調査

研究者・関係機関等に対し、刊行物発送時にアンケート用紙を添付して調査を行った。

- ・ 歌舞伎 No. 574 : 回答者数 50 人 (配布数 101 人、回答率 49.5%)
96.0%の回答者から満足との回答を得た (48 人)。
- ・ 文楽 No. 576～577 : 回答者数 50 人 (配布数 92 人、回答率 54.3%)
96.0%の回答者から満足との回答を得た (48 人)。
- ・ 組踊 No. 32 : 回答者数 22 人 (配布数 55 人、回収率 40.0%)

72.7%の回答者から概ね満足との回答を得た（16人）。

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 各演目について十分に調査し、現在では見ることの困難な文献や資料図版を掲載することができた。
- ・ 国立劇場おきなわの上演資料集第31集では、組踊台本『西南敵討』の翻刻を行った。本書は戦争で焼失したとされていたが、個人の尽力によって記録され名護市宮里区に残されていたことが判明したため、当劇場が翻刻し、地方色豊かな組踊の保存普及に協力することができた。
- ・ 国立劇場おきなわでは、資料集のアンケート回収率の低さを改善するため、他館の実状を調査してアンケート実施時期の変更を行い、回収率を大幅に改善することができた。

(2) 「近代歌舞伎年表」「義太夫年表」「沖縄芸能史年表」の刊行

<方針>

- ・ 日本各地の歌舞伎を中心とした演劇興行についての年表・資料である「近代歌舞伎年表」を作成する。すでに刊行した「大阪篇」全九巻十冊、「京都篇」全十巻十一冊に続き、25年度は「名古屋篇」第八巻の刊行及び第九巻刊行に向けての基礎調査、原稿準備を行う。
- ・ 「義太夫年表」第二巻の刊行を行い、併せて第三巻の刊行に向けた準備、資料収集を行う。
- ・ 24年度の第九巻に引き続き、1983年から1985年までの3年間の県内4紙の新聞記事から沖縄の伝統芸能に関連する新聞記事を調査・収集・整理して「沖縄芸能史年表 第十巻」を刊行する。

<実績>

1. 刊行：「近代歌舞伎年表 名古屋篇」第八巻（26年3月）
「義太夫年表 昭和篇」第二巻（25年10月）
「琉球・沖縄芸能史年表 第10集（戦後篇5）」（1983年1月1日～1985年12月31日）
刊行準備：「近代歌舞伎年表 名古屋篇」第九巻 資料の収集、データ整理、原稿の一部作成
「義太夫年表 昭和篇」第三巻の刊行に向けた準備、資料収集
調査作業：「近代歌舞伎年表 名古屋篇」第十巻以降の資料調査
「義太夫年表 昭和篇」第三巻以降の資料調査
2. 外部専門家等の意見及びアンケート調査
 - (1) 外部専門家等の意見
 - ・ 「近代歌舞伎年表」の膨大な資料の蓄積は基礎的文献として研究に非常に役だっている。
 - ・ （「義太夫年表 昭和篇」第二巻について）これほど広い視野で精緻な内容にまとめられる御苦勞を拝察します。
 - (2) アンケート調査
 - ・ 「近代歌舞伎年表」第八巻：回答者数47人（配布数101人、回答率46.5%）、97.9%の回答者から満足との回答を得た（46人）。
 - ・ 「義太夫年表 昭和篇」第二巻：回答者数45件（配布数66件、回答率68.2%）。回答者数の93.3%が概ね満足と答えた（42件）。

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 「近代歌舞伎年表名古屋篇」については、東京と京阪の中間にあり興行上でも特異な位置を占める名古屋における歌舞伎の状況を明らかにし、歌舞伎史の不詳部分に光をあてることができた。
- ・ 文楽劇場では、「義太夫年表 昭和篇」第二巻を計画通りに刊行できた。
- ・ 「沖縄芸能史年表」については、これまで収集した1978年から1985年までの4社の新聞記事データの整理を行い、エクセルでの検索機能を付けた。新聞記事に掲載された過去8年間の上演記録の検索が可能になり、今後、上演資料集の作成などに活用することができる。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・ 沖縄芸能史年表は、現代以降を新聞記事の抜粋で構成しており、25年度に1985年までの年表が作成され、本事業は1990年までの年表を目標にしている。沖縄の各新聞社も記事のデータベース化を進めており、特に大手二紙は現在1997年までのデータを公開しているため、新聞社の動向に注目していきたい。

(3) 古文献の復刻等

<方針>

伝統芸能に関する古文献についての調査研究を行い、解題を付した復刻、翻刻として公開する。また過去の刊行物等について増補・改訂等を行い、改訂版の刊行に向けた準備作業を行う。

<実績>

- 刊行：「芝居見たまま 明治篇」第二巻〈歌舞伎資料選書・12〉(26年2月)
 「隅田川対高賀紋」〈未翻刻戯曲集・20〉(26年3月)
 「裏表忠臣蔵」〈正本写合巻集・12〉(26年2月)
 「春服対佳賀紋」〈正本写合巻集・13〉(26年3月)
- 刊行準備：「芝居見たまま 明治篇」第三巻〈歌舞伎資料選書・12〉の文献調査
 「未翻刻戯曲集・21」の古文献調査
 「正本写合巻集」2冊の古文献調査及び原稿準備

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- 雑誌『演芸画報』に連載された「芝居見たまま」は、「型」の記録に留まらず衣裳・小道具に至るまで当時の舞台を詳細に記述した記録である。第二巻では、小芝居の代表格である宮戸座とその主演俳優四世澤村源之助の活躍や、明治後期に庶民から大きな支持を得ていた新派劇の多彩な魅力を紹介できた。
- 歌舞伎関係の古文献の影印・翻刻として『裏表忠臣蔵』〔正本写合巻集・12〕、『春服対佳賀紋』〔正本写合巻集・13〕を、また初演系台本の翻刻として『隅田川対高賀紋』〔未翻刻戯曲集・20〕を、解題・参考資料(上演時の番付・錦絵等の図版)を添えた充実した形で刊行した。『春服対佳賀紋』は『隅田川対高賀紋』を挿絵入り小説体に直したもので、両者は資料として相補い合う関係にある。『裏表忠臣蔵』も含め、いずれも著名な演目であり、復活上演の候補にも挙がっているが、これまで全編の活字化がなされていなかったもので、将来の作品研究、作者研究、及び歌舞伎レパートリーの拡充等に寄与できると期待される。

(4) 資料の収集・公開

<方針>

伝統芸能全般に関する基本的な新旧の図書、雑誌、博物資料の収集を主軸とする。歌舞伎については、錦絵・番付・プロマイド写真・上演台本を、大衆芸能については、落語・講談の速記本、見世物・曲芸の絵画資料と映像・音声資料(ビデオ・CD)等の収集を行う。また、図書のデータベース化をすすめ、研究者及び一般の利用に供する。

能楽堂では主として能楽に関する研究書、実演資料、図録、一般図書等の芸能図書及び能楽の普及・伝承・研究の上で、特に意義があると認められる装束、面、楽器、文献、絵画等の特別資料の収集を行う。

文楽劇場では、特に人形浄瑠璃・義太夫節に関する新旧の一般書・研究書を中心に、人形浄瑠璃興行関連資料(番付等)、演者関連資料、義太夫丸本、義太夫段物集、舞台関係絵画資料(錦絵・絵番付を含む)等の収集を行う。

国立劇場おきなわでは、組踊等沖縄伝統芸能を主とし、伝統芸能全般に関する図書・資料、博物資料等の収集及び分類整理を行い、閲覧に供する。

<実績>

1. 実績

区分		収集	閲覧
図書の収集・公開	伝統芸能情報館	収集図書：4,472冊 単行本997冊、逐次刊行物1,592冊、 筋書等1,883冊	閲覧室利用者数：4,144人 図書閲覧者数：524人(3,678冊) 開室日数：254日
	能楽堂	収集図書：738冊 単行本等131冊、逐次刊行物386冊 番組等221冊	閲覧室利用者数：4,102人 図書閲覧者数：583人(3,825冊) 開室日数：248日

	文楽劇場	収集図書：1,836冊 単行本1,421冊、逐次刊行物103冊、 筋書等312冊	閲覧室利用者数：1,362人 普及コーナー利用者数：13,858人 図書閲覧者数：622人(3,453冊) 開室日数：244日
	国立劇場 おきなわ	収集図書：635冊 単行本175冊、逐次刊行物342冊、 筋書等118冊	レファレンスルーム利用者数：1,713人 図書閲覧者数：1,287人(343冊) 開室日数：167日
資料の 収集・公開	伝統芸能 情報館	収集資料：1,714点 レコード・CD18点、公演記録等資料874 点、その他822点	博物資料閲覧件数：1件(1点) 博物資料貸出件数：10件(157点) 映像音声資料閲覧件数：991件(2,225時間) 写真複製使用件数：355件(1,683点)
	能楽堂	収集資料：19,151点 公演記録資料(ビデオ等425点、写真 18,669点)、その他57点	博物資料閲覧件数：7件(668点) 博物資料貸出件数：3件(24点) 映像資料閲覧件数：2,260件(4,013時間) 写真複製使用件数：77件(230点)
	文楽劇場	収集資料：249点 公演記録等資料32点、視聴覚資料141 点、その他76点	映像音声資料閲覧件数：679件(227時間) 写真複製使用件数30件(84点)
	国立劇場 おきなわ	収集資料：897点 公演記録等資料363点 視聴覚資料534点	映像音声資料閲覧件数：995件(1,005時間) 写真複製使用件数：15件(33点)

2. 外部専門家等の意見及びアンケート調査

(1) 外部専門家等の意見

なし

(2) アンケート調査

- ・ 伝統芸能資料館図書閲覧室において、2月14日～3月20日に実施。
回答者数85人(満足69、やや満足11、普通4、無回答1)。回答者の94.1%が概ね満足と答えた(80人)。
- ・ 能楽堂図書閲覧室において、10月1日～10月23日に実施。
回答数94人(配布数100人、回収率94.0%)回答者の92.6%が概ね満足、と答えた(87人)。
- ・ 文楽劇場図書閲覧室において9月2日～12月27日に実施。
回答者数12人(配布数40人、回収率30.0%)、回答者の91.7%が概ね満足と答えた(11人)。
- ・ 国立劇場おきなわレファレンスルームにおいて、アンケート用紙を設置。
回答者数149人、回答者の78.5%が概ね満足と答えた(117人)。

【特記事項】

- ・ 伝統芸能情報館の図書閲覧室及び本館視聴室は、引き続き、第2日曜日の開室と第3水曜日に開室時間の延長(20:00まで)を行った。
- ・ 3月11日は本館大劇場で「東日本大震災三周年追悼式」が行われたため、伝統芸能情報館の図書閲覧室及び本館視聴室を休室した。

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 国立劇場おきなわでは、1966年に撮影された貴重なドキュメンタリー映画作品「イザイホウ」の寄贈を受け、公演記録鑑賞会で上映し、大きな反響を呼んだ。

(5) 収集資料の活用

<方針>

収集した資料等を活用し、刊行等を行うとともに、博物館等施設の求めに応じ、収集した資料を貸与し、

伝統芸能に対する理解の促進に努める。

能楽堂では、能楽堂展示室での展示のための調査結果をもとに図録を刊行し、研究者及び研究機関等へ配布し一般に販売する。

文楽劇場では、博物館施設等の求めがあれば収集した資料を貸与し、文楽をはじめとする伝統芸能に対する理解の促進に努める。

図書については、開架図書を充実させるとともに、ホームページで蔵書検索サービスを提供し、一般の利用の促進に努める。また、博物館施設等に対し、収集した資料を貸与する。

<実績>

- ・ 本館では、外部の制作会社と協力して、収蔵する錦絵のジグソーパズル2点（「歌舞伎十八番勸進帳」「相續榮三升」）を作製した。（25年11月）
- ・ 能楽堂では、以下の図録等を刊行した。
 - ・ 企画展示「世も盡きじー三井家の能・暁斎の猩々」作品目録（25年4月）（無料配布）
 - ・ 国立能楽堂開場30周年記念特別展示「能を彩る文化財一名品能面能装束展」展示図録（25年9月）
 - ・ 英文演目解説「The Guide to Noh of the National Noh Theatre —3」（26年3月）
 - ・ 「国立能楽堂調査研究8」（26年3月）
- ・ 文楽劇場では、独立行政法人国立文化財機構アジア太平洋無形文化遺産研究センター（堺市博物館内）の求めに応じ、「無形文化遺産保護条約採択10周年記念シンポジウム」（8月3日）に展示用文楽人形を貸し出し、展示した。

《自己点検評価》

- 良かった点・特色ある点
 - ・ 博物資料（錦絵）を使用したジグソーパズルについては、26年3月より本館の売店で、4月より文楽劇場の売店で販売を行っている。
 - ・ 国立能楽堂開場30周年記念特別展示「能を彩る文化財一名品能面能装束展」展示図録において、能楽四流の本面等、重要文化財の主だった能面を掲載できたことは意義深いことであった。
 - ・ 「国立能楽堂調査研究8」では、能楽堂所蔵資料の調査結果を発表し、収集資料の活用ができた。
- 見直し又は改善を要する点
 - ・ 高温多湿な沖縄では、レファレンスルームの湿度調整が難しい。25年度はクーラーを入れ替え、除湿機も導入して改善に努めた。今後とも適切な保存環境に留意していく必要がある。

(6) 文化デジタルライブラリー等の整備と公開

<方針>

収集した資料のデータベース化やデジタルコンテンツの作成など、文化デジタルライブラリー等の整備を行い、インターネットにより公開する。図書については、書誌データをサーバーに登録し、「国立劇場図書検索」により一般の利用（検索）に供する。収蔵資料については、画像をデジタルデータ化し、併せて情報のデータベース化を進め、伝統芸能情報館及びインターネットにおいて一般の利用（検索・閲覧）に供する。

自主公演に関する情報（場割、配役、上演時間、出演者等）のデータベース化を進め、伝統芸能情報館及びインターネットにおいて一般の利用（検索・閲覧）に供する。

公演記録写真については、画像をデジタルデータ化した上で文化デジタルライブラリーに登録し、伝統芸能情報館（情報展示室、図書閲覧室）や能楽堂（図書閲覧室）での一般の利用（検索・閲覧）に供する。

歌舞伎公演に係る扮装（鬘、衣裳、小道具等）や文楽公演に係る人形、小道具の写真と情報を、文化デジタルライブラリーに登録し、伝統芸能情報館（情報展示室、図書閲覧室）や能楽堂（図書閲覧室）での一般の利用（検索・閲覧）に供する。

収集した図書資料等を活用し、デジタル技術により教育普及を目的としたコンテンツを作成するとともに、インターネットにより小・中学校等教育機関及び一般に提供する。

<実績>

1. 実績

(1) データベース化

事 項	実 施 内 容
図 書	逐次刊行物等 8,000 件 本館所蔵の他劇場の公演筋書 8,000 件を、図書管理システム及び国立情報学研究所のデータベースに登録した。
資 料	ブロマイド 257 点 新たに考証・整理が終了したブロマイド写真（戦前の歌舞伎俳優）257 点を、文化デジタルライブラリーに追加登録した。
上演情報	154 公演 歌舞伎 9 公演、文楽 15 公演、舞踊・邦楽 13 公演、雅楽・声明 4 公演、民俗芸能 3 公演、特別企画 1 公演、能・狂言 55 公演、大衆芸能 54 公演の公演情報を、文化デジタルライブラリーに登録した。
公演記録写真	21,398 点 国立劇場で 24 年 11 月から 25 年 10 月までに撮影した全ジャンルの公演記録写真 20,799 点、国立劇場で 20 年 6 月、21 年 2 月に撮影した雅楽公演の公演記録写真 151 点、文楽劇場で 24 年 11 月に撮影した文楽公演の公演記録写真 448 点を文化デジタルライブラリーに登録した。
扮装図鑑	2 公演 国立劇場で 23 年 11 月に上演された歌舞伎公演 1 公演と、24 年 12 月に上演された文楽鑑賞教室公演 1 公演の「扮装図鑑」を、文化デジタルライブラリーに登録した。

(2) デジタルコンテンツの作成

- ・ 収集した図書・資料等の活用として、デジタル技術により、教育・普及を目的とした舞台芸術教材コンテンツを次のとおり作成し、26 年 4 月より文化デジタルライブラリーで配信した。
 - ・ 舞台芸術教材「雅楽」
 - ・ 舞台芸術教材「文楽編 作品解説 仮名手本忠臣蔵」
- ・ 伝統芸能情報館における上映用コンテンツを計画的に作成し、公開した。
 - ・ 映像コンテンツ「能鑑賞入門 清経」

(3) 文化デジタルライブラリーホームページへのアクセス件数

583,969 件（計画：400,000 件）

2. 外部専門家等の意見

3 月 18 日に調査事業委員会を実施し、外部専門家から意見を聴取した。

- ・ 文化デジタルライブラリーのコンテンツがかなり充実している。
- ・ かつて図書として出版していた「劇場訓蒙図彙」をデジタル化して、文化デジタルライブラリーで閲覧できようになっている。ルーティン化することなく、形を変えて公開することもしており評価している。

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 舞台芸術教材「雅楽」では、伝統と歴史、音楽性、楽器編成、装束、雅楽から生まれた慣用句などを紹介したほか、全国各地に残る雅楽の伝播や、演じられる空間の多様性などを映像で紹介した。なお、コンテンツ作成のために鶴岡八幡宮「御鎮座記念祭」及び春日大社「おん祭」を現地で撮影した。
- ・ 舞台芸術教材「文楽編 作品解説（仮名手本忠臣蔵）」では、古文書を豊富に用いて、史実と戯曲との相違や、作品の成り立ち、見どころ、聴きどころを詳細に解説した。
- ・ 伝統芸能情報館内の上映用コンテンツ「能鑑賞入門 清経」は、国立能楽堂の舞台を使用して、コンテンツ作成のために「清経」を新たに上演し、客席内に 4 台の特設カメラを設置して撮影した。

(7) 展示公開

<方針>

収集した資料を、各劇場施設の目的に沿って一般に展示公開するとともに、目録を作成する。

伝統芸能情報館の情報展示室は、収集した資料に歌舞伎衣裳や研修用教材を併用した展示を行う。また、演芸場資料室は収集した資料やピラ等を展示する。

能楽堂では資料収集及び外部の能楽資料の調査とその成果を展示公開し、図録の刊行を行い能楽の理解と普及を図る。

文楽劇場の「文楽入門」では、文楽の資料・解説パネル等により、文楽の基本的内容を紹介する。また、「企画展示」は、主に演目にちなむ資料等により公演への興味と理解を深めることを目的として開催する。

国立劇場おきなわの展示は、収集した沖縄伝統芸能に関する資料や、テーマに合わせて博物館等から借用した資料等を、一般に公開する。

<実績>

1. 展示公開の実績（実施20回・計画20回）

展示室	企画内容	期間	開催 日数	来場者数	
				実績	目標
伝統 芸能 情報館 資料 展示室	企画展示「長谷川昇「歌舞伎絵・文楽人形絵」・「黙阿弥の仕事」	4/1～5/26	56 日間	5,783 人	4,500 人
	企画展示「歌舞伎入門－歌舞伎の四季－」	6/2～9/23	113 日間	16,919 人	17,800 人
	企画展示「歌舞伎十八番の内 勸進帳の世界」	10/3～1/27	112 日間	16,836 人	13,500 人
	企画展示「錦絵にみる江戸から明治の芝居小屋の賑い」	2/8～3/31	51 日間	7,657 人	7,500 人
	合 計	4 回	332 日間	47,195 人	43,300 人
演芸場 資料 展示室	演芸資料展「寄席の色物 糸操り「ニューマリオネット」の人形展」	4/1～7/21	95 日間	13,158 人	10,800 人
	演芸資料展「思い出の噺家たち」	8/1～11/24	94 日間	13,635 人	12,200 人
	演芸資料展「収蔵資料展」	12/1～3/22	84 日間	11,423 人	10,100 人
	合 計	3 回	273 日間	38,216 人	33,100 人
能楽堂 資料 展示室	企画展示「世も盡きじー三井家の能・暁斎の猩々」	4/19～6/13	49 日間	7,313 人	6,240 人
	能楽入門展示 前期「能面入門」・後期「作りもの入門」 (7/26～8/9 は除く)	6/21～8/24	45 日間	6,387 人	4,950 人
	開場 30 周年記念特別展示「能を彩る文化財－名品能面能装束展」	9/15～11/20	58 日間	10,510 人	8,700 人
	収蔵資料展示 前期「狂言の世界」・後期「能面と能装束」	1/7～3/13	57 日間	5,353 人	6,270 人
	合 計	4 回	209 日間	29,563 人	26,160 人
文楽 劇場 資料 展示室	企画展示「竹本義太夫と近松門左衛門」、同時開催「文楽入門」	4/6～5/19	44 日間	15,162 人	11,720 人
	常設展示「文楽入門」、企画コーナー「親子劇場にちなむ妖怪たち」	6/7～8/25	79 日間	26,698 人	18,070 人
	企画展示「伊賀越道中双六」、同時開催「文楽入門」	9/20～12/1	73 日間	16,317 人	15,500 人
	常設展示「文楽入門」、企画コーナー「文楽と入江泰吉」	1/3～2/23	52 日間	21,981 人	17,900 人
	国立文楽劇場開場 30 周年記念特別展示「文楽の魅力」	3/27～3/31	5 日間	883 人	500 人
	合 計	5 回	253 日間	81,041 人	63,690 人
国立 劇場	企画展「組踊舞踊の魅力」	4/13～6/23	72 日間	2,510 人	3,096 人
	企画展 組踊「花売の縁」	7/13～9/22	72 日間	2,511 人	3,096 人

おきな わ 資料 展示室	企画展「奄美の仮面と芸能」	10/5～12/15	72 日間	2,250 人	3,096 人
	企画展「能と組踊」	1/11～3/16	65 日間	2,726 人	2,712 人
	合 計	4 回	281 日間	9,997 人	12,000 人
総 計		20 回（計画 20 回）		206,012 人	178,250 人

（伝統芸能情報館）

- 「歌舞伎入門—歌舞伎の四季—」は、5 つの展示ケースを「春夏秋冬」と「初春」に区分し、それぞれの季節に因んだ演目を紹介した。その演目に使用する衣裳・小道具などを展示することで、季節とともにある歌舞伎の舞台を楽しめる展示とした。
- 「歌舞伎十八番の内 勸進帳の世界」は、七代目市川團十郎が制定した演目のうち、最も上演回数が多く、人気を博している「勸進帳」を取り上げ、錦絵、衣裳（弁慶・義経）と小道具、文楽人形の弁慶などを展示し、上演の歴史も紹介した。
- 「錦絵にみる江戸から明治の芝居小屋の賑い」は、当時の劇場（芝居小屋）の内外が描かれた民衆が歌舞伎に熱狂する様子が伝わる錦絵 50 点を展示した。

（演芸場）

- 「寄席の色物 糸操り「ニューマリオネット」の人形展」では、伊原寛・千寿子夫妻の「ニューマリオネット」が舞台で使用した、自身の手作りの人形（「寿獅子」「安来節」「会津磐梯山」「カルメン」など）を、動きを彷彿とさせる形で展示し、併せて演芸場公演出演時の公演記録映像も上映して、その魅力を紹介した。
- 「思い出の噺家たち」では、昭和から平成にかけて東京の落語界を支えた噺家（六代目三遊亭圓生・林家三平・八代目林家正蔵（彦六）・五代目柳家小さんなど）と、戦後の四天王と称された噺家を、演芸場公演に出演した際の舞台写真と収蔵資料で紹介した。
- 「収蔵資料展」では、江戸時代から明治時代にかけて、錦絵に描かれたさまざまな演芸（「佛蘭西曲馬」「佛蘭西スリユ軽業大曲馬」「早竹虎吉阿んどん渡り」など）や番付（「当今落語一覽 明治 24 年版」「東京浪花節組合真打一覽表」）などを紹介し、当時の繁栄が思い浮かぶような展示とした。

（能楽堂）

- 企画展示「世も盡きじ」は三井記念美術館・河鍋暁斎記念美術館の協力により、三井家の能道具を中心に名品 18 面（重文）を出陳した。三井家では初代梅若実（実）に師事し、三井家と梅若家の能装束には同様意匠の作品が伝来するため、三井家・梅若家双方の作品を紹介した。さらに、30 年間の展示の実績から、三井家の大名物黒楽茶碗「俊寛」（重文）と赤楽茶碗「鶴」も出品された。河鍋暁斎記念美術館からは、周年行事の祝言に相応しく「猩々」を描いた作品を集めて紹介した。
- 入門展示は前後期の 2 期に区分した。前期「能面入門」では、根来寺の紀州徳川家寄進能面の中から 22 面（県指定文化財）を借用し、能楽堂所蔵面と合わせて全 55 面による能面の分類展示を行った。後期は舞台で使用している「作りもの」を展示紹介した。「作りもの」は演出に直結するため、流派や家によりその伝承が異なるが、今回は家を超えての展示となった。
- 開場 30 周年記念特別展示「能を彩る文化財」では、能楽各宗家の本面及び各社寺に伝わる国指定重要文化財の能面と能装束を能面 2 期・装束 3 期に分けて紹介した。全 57 件の大半が南北朝から江戸時代初期までの名品による展示であり、初めての試みであった。
- 収蔵資料展示は前後期の 2 期によりテーマを分けた。前期「狂言の世界」では、狂言面 35 面、狂言装束 8 点、文献絵画資料 4 件 17 点を出陳した。後期「能面と能装束」では、ポスターチラシのデザインソースとなった能装束 6 領と、能面 39 面を出陳した。うち 12 件は伝来を示す面袋とともに展示し、さらに、面袋調査の報告を兼ねたシンポジウムを開催した。

（文楽劇場）

- 企画展示「竹本義太夫と近松門左衛門」では、竹本義太夫 300 回忌を記念し、義太夫節を創始した竹本義太夫と、竹本座の座付作者として数々の名作を生み出した近松門左衛門にちなむ資料を展示した。併せて、四天王寺の石塔に納められていた豊竹筑前少掾（豊竹座を創始した豊竹越前少掾の高弟）自筆の経文を展示した。
- 「文楽入門」6 月～8 月では、企画コーナー「親子劇場にちなむ妖怪たち」で絵巻・神楽面・屏風絵

に表された妖怪の展示を行った。

- ・ 企画展示「伊賀越道中双六」では、上演にちなみ、舞台への興味と理解を深めるために、演目ゆかりの資料を展示した。
- ・ 「文楽入門」1月～2月では、企画コーナー「文楽と入江泰吉」で、10月に刊行した「義太夫年表昭和篇」第二巻と同時期（戦中・戦中）に文楽の写真を撮影した入江泰吉の作品や愛用のカメラ等の遺品を展示した。
- ・ 国立文楽劇場開場30周年特別展示「文楽の魅力」では、文楽劇場が収集した資料を中心に、文楽の魅力伝える資料展を実施した（26年5月まで継続）。

（国立劇場おきなわ）

- ・ 企画展「組踊『花売の縁』」では、組踊「花売の縁」と能狂言との関連をテーマとし、能「芦刈」や狂言「鞍猿」の衣裳や小道具、写真等を比較展示した。
- ・ 企画展「奄美の仮面と芸能」では、奄美大島や与論島に伝承される仮面劇を中心に、沖縄の民俗芸能との違いを紹介した。
- ・ 「能と組踊」では、能「道成寺」と組踊「執心鐘入」、能「羽衣」と組踊「銘苅子」の比較展示を行った。国立能楽堂から能装束や能面、小道具等を借用するとともに、金武町屋嘉区からも町指定文化財の民俗芸能衣裳を借用して展示した。

2. 目録等刊行物の実績

（伝統芸能情報館）展示目録「長谷川昇「歌舞伎絵・文楽人形絵」・「黙阿弥の仕事」

「歌舞伎入門—歌舞伎の四季—」

「歌舞伎十八番の内 勸進帳の世界」

「錦絵にみる江戸から明治の芝居小屋の賑い」

（演芸場）展示目録「寄席の色物 糸操り「ニューマリオネット」の人形展」

「思い出の嘶家たち」

「収蔵資料展」

（能楽堂）企画展示「世も盡きじ—三井家の能・暁斎の狸々」作品目録（25年4月）（無料配布）

特別展示「能を彩る文化財—名品能面能装束展」展示図録（25年9月）

（国立劇場おきなわ）国立劇場おきなわ10年誌

3. 外部専門家等の意見及びアンケート調査

(1) 外部専門家等の意見

- ・ 展示、講座の入場者の年齢層など、どういふ方々が参加されているか知りたいとの意見があった。
- ・ 展示、鑑賞会、講座の来場者が目標値をほとんど越えている。それは今の時代大変なことだと思う、との意見があった。
- ・ 伝統芸能情報館の展示については、目標数を下回ったものがあった。本館とは別棟で立地としては不利なので、集客については工夫が必要との意見があった。

(2) アンケート調査

（伝統芸能情報館）

- ・ 「長谷川昇「歌舞伎絵・文楽人形絵」・「黙阿弥の仕事」」（4/1～5/26）期間中に実施。回答数70人。回答者の97.1%が概ね満足と答えた（68人）。
- ・ 「歌舞伎入門—歌舞伎の四季—」（6/2～9/23）期間中に実施。回答数150人。回答者の92.0%が概ね満足と答えた（138人）。
- ・ 「歌舞伎十八番の内 勸進帳の世界」（10/3～1/27）期間中に実施。回答数88人。回答者の92.0%が概ね満足と答えた（81人）。
- ・ 「錦絵にみる江戸から明治の芝居小屋の賑い」（2/8～3/31）期間中に実施。回答数61人。回答者の93.4%が満足と答えた（57人）。

（能楽堂）

- ・ 開場30周年記念特別展示「能を彩る文化財—名品能面能装束展」（9/15～11/20）期間中に実施。回答数146人。回答者の93.1%が概ね満足と答えた（136人）。

（文楽劇場）

- ・ 常設展示「文楽入門」開催期間中の1月19日に実施。回答者数173人。回答者の90.2%が概ね満足と答えた(156人)。
(国立劇場おきなわ)
- ・ 全展示期間中に実施。回答数149人。回答数の78.5%が概ね満足と答えた(117人)。

【特記事項】

(伝統芸能情報館)

- ・ 芦屋市谷崎潤一郎記念館で開催された企画展「狐と谷崎、そして歌舞伎」展(9月14日～12月8日)に、振興会所蔵の博物資料(錦絵・押絵羽子板など)11点を貸し出し、展示の充実に寄与した。
- ・ 清州市はるひ美術館で開催された企画展「歌舞伎 | 変身」(10月3日～12月1日)に、振興会所蔵の博物資料(錦絵「芝居きやうげんの図」「芝居大繁昌之図」、「御狂言楽屋本説」など)57点を貸し出し、展示の充実に寄与した。
- ・ 千葉市美術館で開催された企画展「江戸の面影―浮世絵は何を描いてきたのか」(1月25日～3月2日)に、振興会所蔵の錦絵5点を貸し出し、展示の充実に寄与した。
- ・ 3月11日は大劇場で「東日本大震災三周年追悼式」が行われたため、伝統芸能情報館の展示を休館とした。

(演芸場)

- ・ 演芸場で展示した「ニューマリオネット」の人形10体と製作部品及び道具が、展示終了後遺族より寄贈された。

(能楽堂)

- ・ 国立能楽堂開場30周年記念特別展示「能を彩る文化財―名品能面能装束展」では、展示と関連して国立能楽堂開場30周年記念特別展示列品講座「桃山時代の能装束に見る刺繍」を開催した。
- ・ 収蔵資料展後期「能面と能装束」では、展示と関連した特別講座として、「能面と面袋―面袋から探る能面の伝来」と題してシンポジウム形式で実施した。

(文楽劇場)

- ・ 文楽劇場資料展示室において、平成13年発足のボランティア団体「文楽応援団」(25年度団員数55人)が、文楽公演期間中、文楽全般についての解説を行った。25年度は、1日平均13人の解説員が、412人の観客に対し解説を行った。

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

(伝統芸能情報館・演芸場)

- ・ 「長谷川昇「歌舞伎絵・文楽人形絵」の来場者数が目標を大幅に上回った。これは公演の観客以外にも、作者に興味を持ち、展示目的の来場者が多かったためと思われる。
- ・ 「寄席の色物 糸操り「ニューマリオネット」の人形展」開催期間中の5月18日、「ニューマリオネット」の伊原千寿子自身の観覧があった。
- ・ 「寄席の色物 糸操り「ニューマリオネット」の人形展」で展示した人形が、展示終了後日本芸術文化振興会に寄贈された。また、講談師四代目小金井芦州、新派床山宇佐美豊次の資料も寄贈され、今後の伝統芸能情報館や演芸場の展示の充実に繋がる資料となった。

(能楽堂)

- ・ 企画展示「世も盡きじ」は三井記念美術館・河鍋暁斎記念美術館の協力で開催した。30年間の展示の実績から、三井家の大名物黒楽茶碗「俊寛」(重文)と赤楽茶碗「鶴」が出品された。暁斎記念美術館からは、周年行事の祝言に相応しく「猩々」を描いた作品を集めて紹介することができ、彫刻、工芸、染織、絵画とバランスの良い作品内容となった。
- ・ 入門展示前期「能面入門」では、根来寺の紀州徳川家寄進能面22面(県指定文化財)と能楽堂所蔵面を合わせて全55面による能面の分類展示を行うことができた。これほどの数の能面を系統立てて展示紹介する展示は例がなく、大変好評を博した。後期「作りもの入門」では、流派や家によりその伝承が異なるところ、今回は、観世流の若い能楽師の協力を得ることができ、彼らも家を超えて、互いの伝承を学習する機会となった。
- ・ 開場30周年記念特別展示「能を彩る文化財」で紹介した全57件の大半が南北朝から江戸時代初期までの名品であり、作品の魅力を余すところなく紹介できた。

- ・ 収蔵資料展示前期「狂言の世界」では狂言の世界の絶妙な意匠感覚を紹介し、後期「能面と能装束」では能装束・能面とともに伝来を示す面袋を展示し、さらに、面袋調査の報告を兼ねたシンポジウムを開催することで、能に接する楽しみの広がりを紹介できた。

(文楽劇場)

- ・ 文楽劇場の企画展示「竹本義太夫と近松門左衛門」で、四天王寺の石塔に納められていた豊竹筑前少掾（豊竹座を創始した豊竹越前少掾の高弟）自筆の経文を展示し、新聞等にも大きく取り上げられた。

(国立劇場おきなわ)

- ・ 第2回～4回の展示は、いずれも自主公演に関連して企画された展示で、9月15日組踊公演「花売の縁」、10月13日民俗芸能公演「与論の十五夜踊」、3月9日開場10周年記念公演「能「道成寺」」に因んで開催した。「与論の十五夜踊」は台風のため公演中止となったが、観客にとっては、演目や芸能の理解が深まり、また公演への集客効果もあって相乗効果のある企画であった。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・ 調査事業委員から展示、講座の参加者の年齢層が知りたいとの意見が出た。どちらもアンケートを実施しているので、今後の資料には年齢についても表記することを検討する。
- ・ 国立劇場おきなわでは、自主公演と展示内容をリンクさせ相乗効果でより多くの来場者を見込んだが、台風で公演自体が中止になるマイナス面の影響もあった。自主公演鑑賞のための一助となるよう、展示開催においては、広報や周知の仕方を改善していく必要がある。

2. 公演記録の作成・活用、普及活動の実施

(1) 公演記録の作成

<方針>

自主公演について、映像、写真等による記録を作成し、今後の伝統芸能の振興・普及に活用する。

<実績>

1. 収録実績

区分	記録件数・内容
本館・演芸場	映像・音声・写真 65 公演、扮装図鑑 7 公演、文楽人形等 5 公演
能楽堂	映像・音声・写真 51 公演
文楽劇場	映像・音声・写真 15 公演、文楽人形等 5 公演
国立劇場おきなわ	映像・音声・写真 29 公演、小道具写真 5 公演

(本館)

- ・ 自主公演等 65 公演について、映像・写真等による記録を作成した。
- ・ 歌舞伎公演（鑑賞教室を含む）では、鬘・衣裳・小道具等の写真による記録を作成（扮装図鑑）し、下座の附帳等を保存した。また、文楽公演（鑑賞教室を含む）では、人形・大道具・小道具等の写真による記録を作成した。

(能楽堂)

- ・ 自主公演 51 公演について映像・写真等による記録を作成した。
- ・ 過去の公演記録映像マスターテープのうち、現在製造が中止された方式のデータ保存方法を検討した。視聴用記録映像の DVCAM 方式が製造中止されているため、DVD 方式への媒体変換作業を継続して行った。

(文楽劇場)

- ・ 自主公演 15 公演について、映像・写真等による記録を作成した。

(国立劇場おきなわ)

- ・ 自主公演 29 公演について、映像・写真等による記録を作成した。

(2) 公演記録映像の活用

<方針>

自主公演の記録を出演者、演出家、研究者及び一般の利用に供することにより、芸能文化の振興・普及

に努める。

<実績>

1. 公演記録映像・音声の活用

- 複製依頼のあった出演者・演出家等に、公演記録映像・音声を提供した。また、依頼に応じて、出版社・放送局等に複製物を提供した。
- 文楽「夏祭浪花鑑」のDVD(全2枚)を外部の制作会社と共同で作製し25年6月21日に発売した。
- 文楽「新版歌祭文」のDVD(全2枚)を外部の制作会社と共同で作製し25年9月27日に発売した。
- 能楽堂では、公開講座において、講演と併せて公演記録映像を活用した。
- 「人形浄瑠璃文楽 名場面選集—国立文楽劇場の30年—」のDVD(全2枚)を外部制作会社と共同で作製し26年3月に発売した。
- 国立劇場おきなわでは、自主公演の記録映像をレファレンスルームにおいて一般の視聴に供している。また、出演者や文芸関係者等からの複製依頼を受けて、複製物を提供した。

2. 活用実績

(1) 視聴(映像資料及び音声資料) 利用数総計: 4,925件(7,471時間)

区分	一般	関係者(出演者等)	合計
本館	662件(1,781時間)	329件(444時間)	991件(2,225時間)
能楽堂	1,681件(3,244時間)	579件(769時間)	2,260件(4,013時間)
文楽劇場	26件(47時間)	653件(181時間)	679件(227時間)
国立劇場おきなわ	321件(283時間)	674件(722時間)	995件(1,005時間)

(2) 複製(映像資料及び音声資料)

区分	関係者(出演者等)
本館	297件(697時間)
能楽堂	212件(224時間)
文楽劇場	143件(333時間)
国立劇場おきなわ	23件(52時間)

※ 複製は出演者等に対してのみ実施。

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- 文楽DVDは、24年度に作成した世話物「冥途の飛脚」に引き続き、「夏祭浪花鑑」と「新版歌祭文」を制作・発売することができた。今後も引き続き文楽作品のDVD制作を検討する。
- 文楽劇場が担当したDVD「人形浄瑠璃文楽 名場面選集—国立文楽劇場の30年—」(全2枚)は、全ての舞台映像(335分)を文楽劇場で収録した公演記録によって構成した。また「特典映像」として新たに制作された「映像で振り返る国立文楽劇場の30年」(約15分)は、国立文楽劇場開場30周年記念のつどい(3月27日)でも上映された。
- 国立劇場おきなわでは、公開講座「能と組踊」で組踊の舞台写真を多用することで、受講者にとって視覚的に分かりやすい内容になった。

(3) 公開講座等、普及活動の実施

<方針>

伝統芸能に関する理解の促進と普及を図るため、公演記録鑑賞会や入門的講座のほか、公演に合わせた関連講座等を適宜実施する。また、教員免許状更新講習も昨年に引き続き実施する。公演記録鑑賞会は、過去の貴重な映像を選択する工夫をし、鑑賞者の増加に努める。

<実績>

(1) 伝統芸能に関する理解の促進と普及を図るための講座等

会場	名称	区分	回数	参加者数	アンケートによる 有意義回答の割合
伝統芸能 情報館	伝統芸能サロン	実績	6回	866人	87.2%
		計画	6回	540人	
	公演記録鑑賞会	実績	12回	1,301人	95.3%
		計画	12回	1,080人	
能楽堂	能楽鑑賞講座	実績	12回	1,801人	80.0%
		計画	12回	1,800人	
	能楽特別講座	実績	2回	190人	76.1%
		計画	2回	200人	
文楽劇場	公演記録鑑賞会	実績	12回	1,773人	91.1%
		計画	12回	1,440人	
	伝統芸能講座	実績	1回	68人	91.5%
		計画	1回	50人	
国立劇場 おきなわ	公演記録鑑賞会	実績	4回	382人	85.4%
		計画	4回	600人	
	沖縄伝統芸能公開講座	実績	4回	185人	82.3%
		計画	4回	116人	
	国立劇場おきなわ県外講演	実績	1回	142人	84.5%
		計画	1回	130人	
合計		実績	54回	6,708人	87.6%
		計画	54回	5,956人	80%以上

(伝統芸能情報館)

- ・ 4月と7月の公演記録鑑賞会は、生誕360年にあたる近松門左衛門の作品から、文楽の時代物と世話物を取り上げ、「信州川中島合戦」と「女殺油地獄」を上映した。
- ・ 5月の公演記録鑑賞会は、三回忌を迎えた中村富十郎を偲び、歌舞伎「盲長屋梅加賀鳶」を上演した。
- ・ 6月の公演記録鑑賞会は、24年12月に亡くなった中村勘三郎を偲び、歌舞伎「梅雨小袖昔八丈」を上演した。
- ・ 8月の公演記録鑑賞会は恒例の納涼公演として演芸の浪曲と講談を取り上げ、廣澤虎造、玉川勝太郎、一龍齋貞水、寶井馬琴の4人の芸を堪能する会とした。
- ・ 9月の公演記録鑑賞会は邦楽公演のシリーズ「江戸三味線音楽の歴史」の最終回で、「増補 江戸三味線音楽の歴史 明治期」を上映した。
- ・ 10月の公演記録鑑賞会は、情報館の展示「歌舞伎十八番の内 勸進帳の世界」に因み、邦楽と舞踊の「勸進帳」を上映した。
- ・ 11月の公演記録鑑賞会は、没後30年を迎えた二代目中村鴈治郎が出演の歌舞伎「心中天網島」を取り上げた。
- ・ 12月の公演記録鑑賞会は舞踊を取り上げ、国立劇場での今は亡き名人たちの至芸を楽しめる会とした。
- ・ 1月の公演記録鑑賞会は文楽を取り上げ、東京では公演のない1月の文楽劇場の公演から、文楽「七福神宝の入船」「寿連理の松」を上演した。
- ・ 2月の公演記録鑑賞会は、25年2月に亡くなった十二代目市川團十郎を偲び、歌舞伎「ひらかな盛衰記」を上演した。
- ・ 3月の公演記録鑑賞会は東北地方の復興支援として、福島県の民俗芸能「駒形じゃんがら念仏踊り」と岩手県の民俗芸能「鬼剣舞」「岳神楽」を上映した。
- ・ 第40回の伝統芸能サロン(5月11日開催)は、「日本の文化を見直そう「今に生きている江戸文化と講談」の題で、一龍齋貞心(講師)が、普段何気なく使っている言葉や習慣が、歌舞伎や落語から受け継がれているものがあることを解説した。
- ・ 第41回の伝統芸能サロン(7月13日開催)は、「寄席紙切りとその世界」の題で、林家今丸(紙切り師)が、紙切りの歴史と、自身の入門から紙切りの現状を話し、最後に実演した。

- ・ 第42回の伝統芸能サロン（10月12日開催）は、伝統芸能情報館の展示「歌舞伎十八番の内 勸進帳の世界」に因み、「～謎解き～ 歌舞伎十八番」の題で、法月敏彦（玉川大学教授）がスライドを活用し、歌舞伎十八番にまつわる話を興味深く解説した。
- ・ 第43回の伝統芸能サロン（11月9日開催）は、「浮世絵随談 役者絵の魅力」の題で、新藤茂（浮世絵研究家）が、現代ではブロマイドに例えられ、ポスターや写真誌のように情報が溢れるほど盛り込まれている「役者絵」の魅力をも、スライドを使用して楽しく解説した。
- ・ 第44回の伝統芸能サロン（2月1日開催）は、「忘れられた民画：大津絵 江戸の笑いのパロディ」の題で、クリストフ・マルケ（日仏会館フランス事務所所長）が、江戸時代に土産品として売られていた大津絵の滑稽的な要素、風姿的な見立てを紹介した。
- ・ 第45回の伝統芸能サロン（3月8日開催）は、「組踊の楽しみ」の題で、宮城茂雄（琉球舞踊家 組踊立方）と仲村渠達也（琉球古典音楽 歌・三線）により約束事が多いといわれる「組踊」を、動画や実演を交えて解説した。

(能楽堂)

- ・ 能楽鑑賞講座において、開場30周年を記念し、能の大成者観阿弥・世阿弥の業績について全6回、後半は能が後世の文化に与えた影響について全6回取り上げた。
- ・ 国立能楽堂開場30周年記念特別展示「能を彩る文化財一名品能面能装束展」と関連して、国立能楽堂開場30周年記念特別展示列品講座「桃山時代の能装束に見る刺繍」を開催した。
- ・ 収蔵資料展後期「能面と能装束」と関連した特別講座として、「能面と面袋一面袋から探る能面の伝来」と題してシンポジウム形式で実施した。

(文楽劇場)

- ・ 引き続き、「公演記録鑑賞会」を年12回開催した。

(国立劇場おきなわ)

- ・ 国立劇場おきなわでは、国立劇場収録の記録映像や寄贈された映像記録も活用して公演記録鑑賞会、沖縄伝統芸能公開講座を各4回開催した。

(2) 公演内容に対する理解の促進を図るための講座等

名 称	回数	参加者数
あぜくらの集い（伝統芸能情報館レクチャー室）鶴澤清介を迎えて（5/1）	1回	141人
あぜくらの集い（伝統芸能情報館レクチャー室）豊竹英大夫を迎えて（8/27）	1回	131人
あぜくらの集い（伝統芸能情報館レクチャー室）天野社の舞楽曼荼羅供について（9/5）	1回	92人
あぜくらの集い（本館小劇場）歌舞伎へのいざない～11月歌舞伎公演「伊賀越道中双六」にちなんで～（10/7）	1回	503人
あぜくらの集い（伝統芸能情報館レクチャー室）尺八の魅力～「稀曲の会」にちなんで～（12/3）	1回	131人
あぜくらの集い（能楽堂）国立能楽堂開場30周年記念「あぜくらの夕べ」（12/17）	1回	600人
あぜくらの集い（伝統芸能情報館レクチャー室）桐竹勘十郎を迎えて（2/4）	1回	140人
5月舞踊・邦楽公演関連プレ講座「もっと知りたい！三味線音楽～柳川三味線（地歌）と大和楽」（文楽劇場小ホール）（4/27）	1回	154人
9月特別企画公演関連プレ講座「民俗に見る田楽と翁猿楽－失われた田楽と能の源流」（文楽劇場小ホール）（9/1）	1回	172人
10月舞踊公演関連企画「弧の会」座談会（文楽劇場小ホール）（10/12）	1回	111人
「文楽のつどい」（文楽劇場小ホール）「夏祭浪花鏡」にちなんで お話「大阪の夏祭り」と公演記録映像鑑賞及び対談（7/10）	1回	152人
「文楽のつどい」「伊賀越道中双六」（三重県伊賀市）ゆかりの地バスツアー お話と史跡見学（10/16）	1回	41人
「文楽のつどい」（文楽劇場小ホール）「壇浦兜軍記」にちなんで お話と対談（12/18）	1回	135人
「文楽のつどい」（文楽劇場小ホール）「菅原伝授手習鑑」にちなんで お話と演奏「天神さんと梅・松・桜」と講談「道明寺天満宮の由来」二段目にちなんで（3/4）	1回	133人

(3) 教員免許状更新講習

学校教育の現場における伝統芸能普及の裾野を広げることを目的に、文部科学省の認定を受けて「教員免許状更新講習」を実施した（国立劇場本館、7月21日～24日）。体系的に伝統芸能の知識を身につけることができるよう、全19時間の講習を、各種芸能に関する講義・公演見学（歌舞伎鑑賞教室）・舞台見学・邦楽（義太夫節）の実演体験等で構成し、現職教員77名が受講した（定員80名に対し応募80名。うち3名が受講辞退）。

(4) 組踊普及のためのDVD及び展示パネル等の活用

<方針>

教育関係機関からの要望に応じ、組踊等の理解と普及を推進する資料としてDVDや展示パネル等の貸出を行う。

<実績>

組踊への理解と普及を図るため、沖縄県立図書館の展示に協力し、当劇場が発行する書籍や組踊普及映像「組踊の世界へようこそ」と「組踊鑑賞の手引き」、展示パネルなどの貸出を行った。

また、静岡県における制作協力公演にあわせて、ロビーで琉球舞踊の衣裳や写真パネル等の展示を行った。（「うたさんしん〜琉球の宴〜」2月21日（金）19:00、静岡県コンベンションアーツセンター・グランシップ6階 交流ホール）

【特記事項】

- ・ 文楽劇場では、中学生の校外学習の受け入れを行った（7月9日～10日）。3名の中学生に劇場業務や文楽についての研修、見学を実施し、若年層への文楽の普及に努めた。

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

（本館）

- ・ 伝統芸能サロン「組踊の楽しみ」（3月8日）では、講師の宮城茂雄が解説しながら動きも見せる工夫として、レクチャー室に所作台2枚を用意し、その上で演技を行った。
- ・ 公演記録鑑賞会、伝統芸能サロンとも全体では目標入場者数を超え、好評を得た。

（能楽堂）

- ・ 能楽鑑賞講座において、上半期は、能楽研究の第一人者竹本幹夫が、観阿弥・世阿弥の治績を最新の研究を交えて紹介した。下半期は、能が近世の浄瑠璃・歌舞伎・俳諧・文学・教育など、さまざまなジャンルに与えた影響をそれぞれの研究者の視点から紹介した。能の本質の変容と影響の大きさをともに紹介できた。
- ・ 特別講座「能面と面袋一面袋から探る能面の伝来」では、能面の入れものである面袋に関する調査報告と能面の伝来について紹介し、新たな試みとして好評を得た。

（国立劇場おきなわ）

- ・ 沖縄県立図書館の展示スペースで国立劇場おきなわ開場10周年を記念した展示を共催し、広く組踊や劇場の周知活動を行い、アピールすることができた。
- ・ 国立劇場おきなわでは、1966年に撮影された貴重なドキュメンタリー映画作品「イザイハウ」の寄贈を受け、公演記録鑑賞会で上映し、大きな反響を呼んだ。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・ 伝統芸能サロンの2月「忘れられた民画：大津絵 江戸の笑いのパロディ」、3月「組踊の楽しみ」は、目標入場者数を超えて立ち見が出た。今後は、参加者が目標数を超えた場合の対応について検討する必要がある。
- ・ 2月14日の本館公演記録鑑賞会は、歌舞伎の上演であったが、雪の影響もあり、参加者は振るわなかった。
- ・ 国立劇場おきなわの公演記録鑑賞会参加者数は目標に達しなかった。本土の芸能に寄せる関心が沖縄芸能と比べると低かったことが原因と思われるが、沖縄で観る機会が少ない本土の芸能の上映は有意義

であるので、関連公演や関連団体とも協同した広報の仕方や取り上げる内容に工夫を加え、多くの参加者が見込める企画を行っていく。

4- (2) 現代舞台芸術に関する調査研究の実施並びに資料の収集及び活用

《中期計画の概要》

(2) 現代舞台芸術に関する調査研究の実施並びに資料の収集及び活用

- ア 上演作品等についての資料調査
- イ 図書、資料等の収集及び分類整理、閲覧、貸与
- ウ 収集した資料等の展示公開
 - ・ 新国立劇場内 年2企画程度
 - ・ 舞台美術センター資料館 年1企画程度
- (3) 公演記録の作成・活用、普及活動の実施
 - ア 演技・演出等の記録の作成・保存、閲覧・視聴
 - イ 公演記録映像の鑑賞会等を開催による有効活用
 - ウ 講座、展示等の実施

《年度計画》

4 伝統芸能及び現代舞台芸術に関する調査研究の実施並びに資料の収集及び活用

(2) 現代舞台芸術に関する調査研究の実施並びに資料の収集及び活用

- ア 中期計画の方針に従い、新国立劇場で上演する現代舞台芸術の主催公演等に関し、上演作品等についての資料調査を実施する。
 - ① 海外戯曲の翻訳に関する調査を行い、新国立劇場での上演に活用するとともに、調査結果を活用して講演会やリーディング公演を実施する。
 - ② 主催公演の実施に当たり、上演内容の理解促進のため、民間出版社と連携して新訳戯曲を刊行する。
 - ③ 海外の主要劇場等の情報を引き続き収集して、公演の充実等に活用するとともに、情報センターにおいて一般に向けて公開する。
また、各国主要劇場の概要を公演プログラムに記載するとともに、ホームページで公開する。
 - ④ 主催公演の公演記録映像、写真、舞台演出・美術資料などについて、引き続き、整理・保存を行う。
- イ 現代舞台芸術に関する図書、資料等の収集及び分類整理を行い、閲覧に供するとともに、インターネットでの検索を可能とする。また、図書、資料等の他の劇場施設等への貸与を行う。
 - ① 情報センターについて、開架図書を充実させるとともに、資料等のインターネット検索機能の充実及び利用環境の向上に努める。
 - ② 図書資料管理システムについて、引き続き図書等の情報のデータベース化を行う。
 - ③ 所蔵品管理システムについて、引き続き過去の寄贈資料の情報のデータベース化を行う。
- ウ 収集した資料等を、別表8のとおり展示公開する。実施に当たっては、来場者の利便性の向上と広報活動の強化を図る。

(3) 伝統芸能及び現代舞台芸術に関する公演記録の作成・活用、普及活動の実施

- ア 主催公演を中心に演技・演出等の記録を録音・録画・写真等により適切に作成・保存し、閲覧・視聴に供する。
- イ 公演記録映像については、鑑賞会等を開催するとともに、講座・レクチャー等で活用する。また、必要な著作権処理を行った上で、外部制作会社等と連携して、DVDを作成する等の有効活用を図る。
- ウ 公開講座等、普及活動の実施
 - ① 伝統芸能及び現代舞台芸術に関する公開講座等を別表9のとおり実施する。実施に当たっては、広報活動を十分に行うとともに、参加者に適宜アンケート調査を実施し、回答者の80%以上から有意義であったと回答されるよう内容等の充実を努める。
 - ② 公演の実施にあわせた関連講座、展示等を適宜実施し、内容に応じてホームページ等で公開する。

- ⑤ オンラインコンテンツ「現代舞台芸術入門オンラインツアー」を、引き続き新国立劇場ホームページで公開し、現代舞台芸術の魅力をより多面的に、幅広い層に向けて発信する。

《実績》

1. 調査研究・資料の収集及び活用

事 項	実 績
海外戯曲の翻訳に関する調査研究・活用	<ul style="list-style-type: none"> 宮田慶子演劇芸術監督及び3名の企画サポート委員による「企画サポート会議」を定期的開催し、その成果として、「マンスリー・プロジェクト」を実施した。また、その記録内容をホームページにて公開した。(全12講座17回)
新訳戯曲等出版物の刊行	<ul style="list-style-type: none"> 民間出版社と連携して下記戯曲を刊行した。 <ul style="list-style-type: none"> 2012/2013 シーズン演劇公演 『『効率学のススメ』』 2013/2014 シーズン演劇公演 「エドワード二世」 2013/2014 シーズン演劇公演 「ピグマリオン」 現代舞台芸術に関する調査研究の成果を活かし、下記普及出版物を刊行した。 <ul style="list-style-type: none"> 「バロック・オペラーその時代と作品」 「チャイコフスキー～三大バレエ～初演から現在に至る上演の変遷」 「世界のバレエ学校－誕生から300年の歴史」 「死の都 リブレット対訳」 「バレエ名作物語 Vol.6 ジゼル 新国立劇場バレエ団オフィシャルDVD BOOKS」(世界文化社から刊行) 現代舞台芸術に関する調査研究の成果を記事として掲載する下記公演プログラムを作成した。 <ul style="list-style-type: none"> オペラ 10冊 バレエ 6冊 演劇 8冊
海外の主要劇場等の情報収集・活用	<ul style="list-style-type: none"> 国内外の劇場の運営主体、組織図、勤務者数、公演入場率等について、劇場のホームページや年報等の情報を基に調査・比較を行った。 24年度に引き続き、ナショナル・シアター(国立劇場)を中心に、世界7カ国・都市の劇場の概要をプログラムやホームページにおいてシリーズで発信した。(通算27回)
公演記録の整理・保存	<ul style="list-style-type: none"> ポスター、衣裳などの主催公演資料を管理する所蔵品管理システムのデータを、新システムへ移行した。 <ul style="list-style-type: none"> オペラ：156公演 バレエ：92公演 ダンス：65公演 演劇：139公演
資料の収集・公開	<ul style="list-style-type: none"> ①収集：図書4,119冊、視聴覚資料76点 ②公開：情報センター閲覧室利用者30,786人 <ul style="list-style-type: none"> うちビデオブース利用者2,178人 ビデオシアター利用者2,939人 図書貸出515件 舞台美術センター利用者845人 <ul style="list-style-type: none"> うちAVコーナー利用者175人 舞台美術センター資料館が、銚子市報・映像、読売新聞、大衆日報、銚子駅前銚子観光案内板、銚子観光ガイド、ぐるっと千葉等のパンフレットなどで紹介され、地域自治会、老人ホーム、コミュニティセンター等に告知をすることができた。 以下の図書資料を新たに登録し、ホームページで公開した。

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 図書：1,250 件 ・ その他資料：35 件 ・ 他団体のプログラム等：2,864 件 	
展示公開	舞台美術センター展示	4 回（計画：4 回）、 来場者 845 人（計画：900 人）
	新国立劇場内企画展	3 回 来場者 43,823 人

2. 公演記録の作成・活用、普及活動の実施

(1) 公演記録の作成・活用

- ・ 主催公演を中心に 28 公演について、録音・録画・写真等による記録を作成した。
- ・ 主催公演の公演記録映像のデータベース化を 17 件行った。
- ・ 主催公演の公演記録映像 17 件を情報センター閲覧室にて追加公開し、閲覧・視聴に供した。
- ・ 新国立劇場ホームページ上に「舞台写真・公演記録」ページを設け、平成 9 年の開場以降ほぼ全ての公演に関して、公演記録写真及び公演情報等を一般の閲覧に供した。
- ・ DVD 現代舞台芸術鑑賞会を舞台美術センター資料館で 12 回、新国立劇場情報センターで 13 回実施した。
- ・ 公演記録映像を利用して、団体観劇者・学校・劇場見学者を対象に、公演観劇前のレクチャーや劇場見学研修を情報センター ビデオシアターで実施した。（16 件 376 名）。
- ・ 外部制作会社等との連携により、新国立劇場バレエ公演の映像等を収録した DVD・書籍がセットになったシリーズ 6 作目「バレエ名作物語 Vol.1.6 ジゼル 新国立劇場バレエ団オフィシャル DVD BOOK」が世界文化社から刊行された。

(2) 公開講座等、普及活動の実施

- ・ 新国立劇場において現代舞台芸術入門講座として「マンスリー・プロジェクト」を実施した。（17 回）
- ・ 新国立劇場情報センターにおいて DVD 現代舞台芸術鑑賞会を実施した。（13 回）
- ・ 舞台美術センター資料館において DVD 現代舞台芸術鑑賞会を実施した。（12 回）
- ・ 舞台美術センター資料館（千葉県銚子市豊里台）において現代舞台芸術入門講座として舞台美術センター コンサート「銚子!?!のいい仲間たち」を実施した。（1 回）
- ・ 公演内容に対する理解の促進を図るため、上演に合わせてオペラトーク、シアタートーク等を適宜実施した。（13 講座）
- ・ オンラインコンテンツ「オペラのつくりかた」「バレエのつくりかた」「演劇のつくりかた」を引き続き新国立劇場のホームページで公開した。

【特記事項】

- ・ 音楽大学との連携・協力に関する協定に基づいて、武蔵野音楽大学の職員が研修員として派遣され、資料関係業務に従事した。
- ・ 展示公開事業においては新国立劇場内及び舞台美術センター資料館のみならず、外部の各種文化施設における展示のための資料の貸出も行った。（4 企画 5 会場）

《数値目標の達成状況》

- 【展示公開の実施状況】 実績 7 回／計画 4 回（達成度 175.0%）
- 【展示公開の参加者数】 実績 845 人／計画 900 人（達成度 93.9%）
- 【講座等の実施状況】 実績 43 回／計画 42 回（達成度 102.4%）
- 【講座等の参加者数】 実績 3,239 人／計画 1,700 人（達成度 190.5%）
- 【講座等の満足度】 実績 98.5%／計画 80%（達成度 123.1%）

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 海外戯曲の翻訳に関する調査の成果発表の場として、また現代舞台芸術入門講座として実施している「マンスリー・プロジェクト」だが、第 1 回で取り上げたヨン・フォッセがノーベル文学賞の有力候補

となり、その先見性に光が当たった。

- ・ 宮田慶子演劇芸術監督の企画によるマンスリー・プロジェクトの内容が、2012/2013 シーズンの「With 一つながる演劇―」3 作品連続上演に続き、2013/2014 シーズン演劇「マニラ瑞穂記」や、2014/2015 シーズンに予定しているシリーズ企画「二人芝居―対話するカー」3 作品連続上演につながり、調査研究・資料収集活用の活動を次年度以降の公演内容の充実結びつけることができた。
 - ・ 出版物は、平易な手引書になるものをという考え方に沿って企画編集しており、新聞や雑誌記事での紹介や大学の教科書としての採用、各方面からの評価の声等を通じて、その成果が認められつつある。
 - ・ 25 年度に企画編集・発行した刊行物は、専門書として一般の書店・ネット等での取扱いも開始された。
 - ・ 公演プログラムや特設サイト、公演ブログの内容にも特に力を入れ、作品の歴史背景、作曲家の生涯、舞台となった国や都市等についての調査研究に基づく記事を掲載した。作品理解を深める一助として、また調査研究や資料収集の成果をまとめる場として高い評価を得た。
 - ・ 所蔵資料を劇場内外での展示企画やメディアに貸出すほか、直近の公演関係資料を閲覧室に展示することにより、積極的な資料の利用を促進することができた。
 - ・ 公演記録映像資料等は適切な保存・管理を行いながらデジタル化で情報を付加し、公開・活用を推進した。
 - ・ ハイビジョン化以降の公演記録映像を充実させ、オペラ・バレエ愛好家の方々に大好評をいただいた。
 - ・ バレエの DVD は、世界文化社の協力を得て第 6 巻まで継続的に刊行することができた。映像のみならず観賞の手引となる解説 BOOK を付し、全国的に名作バレエの普及に資した。
 - ・ DVD 現代舞台芸術鑑賞会（新国立劇場情報センター）の参加者数は目標を大きく上回り、全体で 96.6% と高い入場率となった。ビデオブース・ビデオシアターでの映像視聴サービスは普段からフルに利用され、鑑賞会来場者を含め 5,117 人が利用し、好評を博した。
 - ・ DVD 現代舞台芸術鑑賞会（舞台美術センター）は、立地条件上、地域の人たちとのつながりを保つことにも鑑賞会の実施の大きな意義があり、地元との連携を密にして実施した。
 - ・ 現代舞台芸術入門講座（舞台美術センター）も、プログラムや演出を工夫して大好評を博した。また、26 年度には地元各団体から拡充の要請を受け、2 日間のコンサートを計画している。
- 見直し又は改善を要する点
- ・ 所蔵品管理システムのホームページでの公開資料件数の充実について検討する必要がある。
 - ・ 舞台美術センター資料館での企画展・公演記録鑑賞会の来場者数について、目標未達となった。舞台美術センターでの展示や講座は、地域の人たち、豊里台自治会、銚子市、銚子市教育委員会、地元紙などからの要望が大きいため、今後企画の実施方法等の方向性について検討する必要がある。
 - ・ いずれの活動も職員が企画立案から会場設営、展示準備まで一切を行っているのが現状であるため、職員の負担に考慮しつつ、限られた予算の中で効果的な活動内容となるよう引き続き検討していきたい。

《24 年度評価への対応》

【評価】

(文科省評価委員会)

- ・ バレエの出版物「三人のパブロワ」は、内容が現代の観客の関心に応えるものでもなく、鑑賞を深めるのに役立つとも思えないため、限られた研究的観点に偏らないよう留意されたい。(①)
- ・ 調査研究は着実に実施されており、民間出版社と連携した取組がなされているが、その内容について学問的・専門的知見が希薄である。(①)
- ・ DVD 現代舞台芸術鑑賞会の入場者は、1 回当たり、舞台美術センター資料館では平均 15.5 人、新国立劇場情報センターでは平均 26.2 人となっており、十分集客できているとは言えない。今後は、実施方法、広報等を見直し、集客に努められたい。(②)

(振興会評価委員会)

- ・ 上演資料の収集に関してはまだ規模が小さく、日本全体にまで及んでいない。パフォーマンス・アーツは結果が後に形として残らないものなので、それを記録した映像、画像、批評等の文献を残す手立てを常に考えておかないと、歴史を残せない。日本で上演されたものに関しては、外来のものを含めて記録を残す必要があり、早急な対応が必要である。(①)
- ・ DVD 現代舞台芸術鑑賞会は、入場者が多いとはいえない。安定した集客ができるよう、もう少し積極的な宣伝や企画を行いたい。(②)

【対応】

①事業の一層の充実に向けた調査研究内容・実施体制等の検討

24年度は「戦後のオペラ 1945～2013」、「日本のバレエ 三人のパヴロワ」、「ピーター・グライムズ リブレット対訳」を新たに作成、刊行したことに加え、外部出版社により「新国立劇場名作オペラ 50」が刊行された。

24年1月に刊行した「〈要点〉日本演劇史～古代から1945年まで～」が大学の教科書として採用される等、これまでの刊行物も着実に成果を上げている。

民間出版社との連携による出版物についても、その内容の充実に努めており、翻訳家が公演プログラム及びマンスリー・プロジェクトの講座等で学問的・専門的な戯曲解説を行う等の工夫もしている。25年度には演劇公演「エドワード二世」の戯曲が「悲劇喜劇」10月号に掲載され、訳者の河合祥一郎による戯曲解説を含むあとがきが収められたのに続き、演劇公演「ピグマリオン」の戯曲も光文社古典新訳文庫から刊行され、解説のほか訳者の小田島恒志によるあとがき、作者バーナード・ショーの年譜が掲載される等、学問的・専門的知見を活かした内容の面でも充実を見せることができた。

今後は、引き続き調査研究を着実に実施するとともに、民間出版社との連携の取組も継続するなど、これまでの調査研究活動の蓄積も含めた全体の成果が高まるように努めていく。

②DVD 現代舞台芸術鑑賞会の事業方法・広報等の見直し

DVD 現代舞台芸術鑑賞会の実施にあたっては、新国立劇場での鑑賞会場である情報センタービデオシアターのキャパシティが、補助席を除けば27席であることを考えると、14回の講座開催で参加者367人という数値は、決して低いものではないと考えている。なお、情報センターのビデオブース・ビデオシアターでの映像視聴サービスは普段から頻繁に利用されており、24年度は鑑賞会来場者を含め、情報センター単独で約6,000人の利用者数を記録した。

一方、千葉県銚子市に所在する舞台美術センター資料館は、人口減少が著しい銚子市のなかでも銚子駅から車で約30分、最寄りは無入駅・下総豊里という立地条件であり、地域の人たちとのつながりを保つことにも鑑賞会実施の大きな意義があると考えている。各種催し物は市役所、市教育委員会、銚子第七中学校、豊里台自治会、地元紙との連携を密にして実施しており、現代舞台芸術入門講座（舞台美術センターコンサート）も毎年大好評を博している。また、26年度には銚子市、市教育委員会、豊里小学校、「広報ちょうし」や「銚子を元気にする大衆日報」の要請を受け、新たに小学校の課外授業を追加し、2日間のコンサートを計画している。なお、24年度資料館利用者は1,197人（内、ビデオ・鑑賞会等、利用者は456名）であったが、これは当該地域人口の半数近くにあたる数字である。引き続き告知も十分に行うとともに、利用者の声を大切にした企画をしていきたい。

1. 調査研究・資料の収集及び活用

(1) 海外戯曲の翻訳に関する調査研究・活用

<方針>

海外戯曲の翻訳に関する調査を行い、新国立劇場での上演に活用するとともに、調査結果を活用して講演会やリーディング公演を実施する。

<実績>

1. 海外戯曲に関する調査研究

宮田慶子演劇芸術監督及び3名の企画サポート委員による「企画サポート会議」を定期的に行い、その成果として、毎月直近の演劇公演に多角的にアプローチするイベント「マンスリー・プロジェクト」を開催した。下表のとおり、出演者・研修生によるリーディング公演、大学教授による各種講座、劇作家・翻訳家・演出家・俳優によるトークショー、俳優・演出家によるワークショップなど多彩なプログラムを実施するとともに、その記録内容をホームページにて公開した。

実施年月日	内容	講師等	参加者数
4月11日(木)	トークセッション 「With-つながる演劇・ウエールズ編」	出席者：ジョン・E・マグラ 宮田慶子	145人
5月11日(土)	トークセッション 「With-つながる演劇・韓国編」	出演：ソン・ジンチュク 鄭義信、宮田慶子	151人
6月16日(日) 6月18日(火)	リーディング公演 ローラント・シンメル プフェニヒ作「アラビアの夜」	出演：佐藤 誓、高島レイ、 西村壮悟、形桐レイメ イ、池田朋子 翻訳：大塚 直 演出：宮田慶子	243人 218人
7月10日(水)	トークセッション「別役実の世界」	出席者：別役 実、扇田昭彦	257人
8月24日(土) 8月25日(日)	ワークショップ 夏休み特別企画 「子どもと親のコミュニケーション・ワ ークショップ」	講師：西垣耕造	11人 10人
9月15日(日)	トークセッション 「Try・Angle-三人の演出家の視点-」	出席者：小川絵梨子、森 新太 郎、上村聡史 聞き手：宮田慶子	140人
10月14日(月・祝)	演劇講座「エリザベス朝演劇」	講師：河合祥一郎	223人
11月22日(金) 11月24日(日)	リーディング公演 ジェローム・キルティ作「ディア・ライ アー」より	出演：春風ひとみ、水野龍司 演出：宮田慶子	167人 191人
12月13日(金) 12月14日(土)	演劇講座 シリーズ「世界の演劇の今」 VI-フランス	講師：佐藤 康	69人 61人
1月17日(金) 1月18日(土)	演劇講座「演劇人サルトル」	講師：山縣 熙	93人 94人
2月23日(日)	トークセッション「戯曲翻訳の現在」II	出席者：平川大作、河合祥一郎、 小田島恒志、岩切正一郎 聞き手：鈴木理映子	268人
3月1日(土)	トークセッション 「Try・Angle-三人の演出家の視点-」 をふりかえって	出席者：小川絵梨子、森 新太郎、 上村聡史 聞き手：鈴木理映子	188人

	12 講座	計	2,529 人
--	-------	---	---------

(2) 新訳戯曲等出版物の刊行

<方針>

主催公演の実施にあたり、観客の作品内容への理解を促進するため、外部出版社と連携して新訳戯曲等を刊行する。

<実績>

1. 外部出版社と連携した新訳戯曲等の刊行

主催公演の実施にあたり、観客の作品内容への理解を促進するため、外部出版社と連携して下記の新訳戯曲等を刊行した。

- ・2012/2013 シーズン演劇公演 『効率学のススメ』（『悲劇喜劇』2013年4月号）
- ・2013/2014 シーズン演劇公演 「エドワード二世」（『悲劇喜劇』2013年10月号）
- ・2013/2014 シーズン演劇公演 「ピグマリオン」（光文社古典新訳文庫）

なお、外部出版社との連携による出版物についても、その内容の充実に努めており、「エドワード二世」の戯曲が『悲劇喜劇』に掲載された際に、訳者の河合祥一郎による戯曲解説を含むあとがきが収められた。また、「ピグマリオン」の戯曲が光文社古典新訳文庫から刊行された際には、解説や訳者の小田島恒志によるあとがきに加え、作者バーナード・ショーの年譜が掲載された。

2. 現代舞台芸術に関する調査研究の成果を活かした普及出版物の刊行

現代舞台芸術に関する調査研究の成果を活かし、現代舞台芸術全般に対する理解を促進するため、下記のとおり普及出版物を刊行した。

- ・「バロック・オペラ―その時代と作品」（26年3月）
バロック・オペラ 41 作品を概説とあらすじで詳しく紹介したガイド小冊子。
- ・「チャイコフスキー～三大バレエ～初演から現在に至る上演の変遷」（26年3月）
三大バレエの誕生の歴史に始まり、上演の足跡をたどりながら、名作の魅力に迫る小冊子。
- ・「世界のバレエ学校―誕生から 300 年の歴史」（26年3月）
300 年の間に世界のバレエ学校がどのように広がり、バレエ史を作ってきたかを明らかにする小冊子。
- ・「死の都 リブレット対訳」（25年10月）
25年度のオペラ主催公演上演演目のうち、まだ日本語訳が出版されていない作品の台本翻訳を上演に先駆けて作成したもの。
- ・「バレエ名作物語 Vol. 6 ジゼル 新国立劇場バレエ団オフィシャル DVD BOOKS」（25年7月）
※世界文化社から刊行
新国立劇場バレエ公演から選りすぐりの名作・名舞台の映像に加え、メイキング映像やバックステージ・ツアー、特別インタビュー等、オリジナル映像を収録した DVD と書籍がセットになった人気シリーズの6本目。

3. 公演プログラムの作成

下記のとおり、現代舞台芸術に関する調査研究の成果を記事として掲載する公演プログラムを作成した。

- ・オペラ 10 冊
- ・バレエ 6 冊
- ・演劇 8 冊

(3) 海外の主要劇場等の情報収集・活用

<方針>

海外劇場の調査・研究にあたっては、23年度に提携が実現した学校法人東成学園（昭和音楽大学）から学術資料やデータ等の提供を受けつつ、引き続き公演の充実等に活用するとともに、情報センターにおいて公開する。

また、海外の主要劇場から収集した情報の概要を公演プログラムに記載し、ホームページで広く公開する。

<実績>

国内外の劇場の運営主体、組織図、勤務者数、公演入場率等について、劇場のホームページや年報等の情報を基に調査・比較を行った。

新国立劇場通信「世界の劇場」では、ナショナル・シアター(国立劇場)を中心に、世界7カ国・都市(ベルギー、オーストリア・ウィーン、ルーマニア、イタリア、中国・北京、フィリピン、中国・上海)の劇場の概要をプログラムやホームページにおいてシリーズで発信した。平成22年9月から数えて新国立劇場通信「世界の劇場」上海編は27回目にあたる。

(4) 公演記録の整理・保存

<方針>

主催公演の公演記録映像、写真、演出・美術資料などについて、引き続き、整理・保存を行い、活用を図る。

<実績>

ポスター、衣裳などの主催公演資料を管理する所蔵品管理システムのデータを、新システムへ移行した。

- ・オペラ： 156 公演
- ・バレエ： 92 公演
- ・ダンス： 65 公演
- ・演劇： 139 公演

(5) 資料の収集と公開

<方針>

1. 現代舞台芸術に関する図書、文献資料、視聴覚資料、主催公演の上演情報等を収集、分類整理して公演の実施に活用し、閲覧に供する。
 - ・ 開架図書、インターネット検索機能の充実等、資料およびその利用環境の向上に努める。
 - ・ 図書資料管理システムのデータベースを充実させ、公演の実施に活用するとともに、非出版資料については著作権者の許諾を得た上で閲覧に供し、ホームページで公開する。
2. 寄贈資料の文字データ、画像、写真データ等の所蔵品管理システムへの登録を行い、公開点数を増やすとともに、新たに資料やポスター類についてもインターネットで検索可能となるよう、データベース化を進める。

<実績>

1. 収集・閲覧等

区 分		収 集	閲 覧
図書・資料の収集・閲覧	新国立劇場情報センター	収集図書：4,119冊 単行本1,012冊 逐次刊行物221冊 プログラム2,864冊 公演・演出台本22冊 収集視聴覚資料：76件 主催公演記録映像58件 その他受贈等17件 作製1件	閲覧室利用者数：30,786人 うち、ビデオブース利用者数：2,178人 ビデオシアター利用者数：2,939人 図書貸出件数：515件(956冊) 開室日数：289日
	舞台美術センター資料館	—	資料館利用者数：845人 うち、AVコーナー利用者数：175人 開室日数：283日

- ・ 新国立劇場主催公演に関する上演資料のほか、我が国の現代舞台芸術に関する資料を収集した。
- ・ 図書については、新国立劇場情報センター閲覧室で閲覧に供した。映像は、情報センター内ビデオブース、ビデオシアター及び舞台美術センター資料館(千葉県銚子市豊里台)内AVコーナーで視聴に供した。
- ・ 舞台美術センター資料館保管の公演記録映像マスターテープ1,343本(平成9年～平成23年7月まで、ハイビジョン以前の60分・90分・120分テープ)のダメージチェック、テープ上の汚れ、カビ等のクリ

ーニングを実施した。適切な保存・管理を行いながらデジタル化で情報を付加することで公開・活用を推進している。

- ・ 新国立劇場 WEB サイトでの掲載情報について、著作権等の調査を実施し、記述内容を更新した。
 - ・ オペラ： 14 件
 - ・ バレエ： 1 件
 - ・ ダンス： 1 件
 - ・ 演劇： 1 件
- ・ 日本近代の洋舞上演に関する資料を新国立劇場 WEB サイトで公開した。

2. 情報センター等の利用促進

- ・ 主催公演の期間中に、その公演のプログラムや、関連する各種の参考書籍を開架にて閲覧できるようにするとともに、閲覧室内に展示スペースを設けて作品関連の資料展示を行うなど、利用者の利便性を向上するための工夫に力を注いだ。
- ・ 図書資料管理システム及び所蔵品管理システムを一般の利用者に公開した。公開に当たっては、外部の公演及び主催公演を通じて収集した図書・視聴覚資料に加え、ポスター、展示衣裳、小道具、装置模型、貴重品、その他各種寄贈資料についても、一般の利用者がインターネット上及び閲覧室内で検索可能な態勢を整えたほか、一部の資料についてはシステム画面上での閲覧にも供するなど、利用環境の向上に努めた。
- ・ 舞台美術センター資料館が、銚子市報・映像、読売新聞、大衆日報、銚子駅前銚子観光案内板、銚子観光ガイド、ぐるっと千葉等のパンフレットなどで紹介され、地域自治会、老人ホーム、コミュニティセンター等に告知をすることができた。

3. 図書資料管理システムのデータベースの充実

以下の図書資料を新たに登録し、公演の充実に資するとともに、収蔵情報をホームページで公開した。

- ・ 図書：1,250 件
- ・ その他資料：35 件
- ・ 他団体のプログラム等：2,864 件

4. 所蔵品管理システムへの登録

プログラム、ポスター、台本、衣裳などの主催公演資料、寄贈書、貴重書などを管理する所蔵品管理システムのデータを、新システムへ移行した。

また、インターネット上及び閲覧室内で所蔵品管理システムを一般の利用者に公開し、登録資料を検索可能な態勢を整えたほか、一部の資料については閲覧にも供した。

(6) 展示公開

<方針>

収集した図書、衣裳、舞台装置等の資料を適切に保管し、展示公開する。また、展示目録等を作成し、来場者の利便性の向上を図る。

<実績>

現代舞台芸術に対する理解を促進するため、主催公演に関する衣裳・舞台装置などの舞台美術等及び関係資料を、新国立劇場内と舞台美術センター資料館（千葉県銚子市豊里台）で展示公開するとともに、外部の各種文化施設における展示のため貸し出しを行った。

(1) 舞台美術センターにおける展示 ※目標来場者数：900 人

舞台美術センターでは、常設展のほか企画展として「ベンジャミン・ブリテン」展及び「ヴェルディ&ワーグナー生誕 200 年」展を実施した。

区分	期 間	内 容	来場者数
常設展	通年	常設展「オペラハウスの感動」(10 月に展示替えを実施)	845 人
	4/1~10/28	「現代演劇ポスター展 2011」(24 年度より継続)	

	10/30～3/31	「現代演劇ポスター展 2012」(26年度まで継続)	
企画展	4/1～10/28	企画展「ベンジャミン・ブリテン」(24年度より継続)	
	10/30～3/31	企画展「ヴェルディ&ワーグナー生誕 200年」(26年度まで継続)	

(2) 新国立劇場内における展示

- ・ 常設展のほか主催公演に連動する形で来場者を対象に資料の展示を行った。オペラ劇場ホワイエでは、「2013 ヴェルディ&ワーグナー生誕 200年祭」期間中にイベント企画展を開催した。ヴェルディ及びワーグナーの年譜や主な日本初演記録、新国立劇場上演のヴェルディ作品舞台写真展・衣裳展を実施した。
- ・ 中劇場ホワイエでは、演劇公演「ピグマリオン」の舞台美術原画展を実施した。
- ・ 情報センター閲覧室では、シェイクスピア「ファースト・フォリオ」(戯曲全集初版の復刻版)をはじめ、シェイクスピア劇の銅版画、作品肖像画集、シェイクスピア生誕地の写真画像等を展示公開する、シェイクスピア生誕 450年記念展を開催している。
- ・ また、情報センター閲覧室においては、夏休み期間に子ども向けのバレエ、オペラの絵本展示を実施するなど、常時情報センター所蔵品の展示公開を行った。

区分	期間	内容	来場者数
常設展	通年	舞台衣裳展示	-
	通年	公演記録写真展示	-
企画展	4/1～10/22	2013 ヴェルディ&ワーグナー 生誕 200年祭 (24年度より継続)	18,440人
	11/13～12/1	「ピグマリオン」舞台美術原画展	16,421人
	1/7～3/31	2014 シェイクスピア生誕 450年記念展 (26年度まで継続)	8,962人

※ 来場者数は、公演の来場者数。

【特記事項】

- ・ 展示公開事業においては、新国立劇場内や舞台美術センター資料館(千葉県銚子市豊里台)の他、外部の各種文化施設における展示のための資料貸出も行った。
 - ・ バレエ「ペンギン・カフェ/シンフォニー・イン・C」全国公演会場における衣裳展(静岡県コンベンションアーツセンター グランシップ(5月8日)、御殿場市民会館(5月11日))
バレエ全国公演の静岡グランシップ、御殿場市民会館のホワイエで、バレエ衣裳展を実施した。
 - ・ 東京オペラシティアートギャラリー「五線譜に描いた夢ー日本近代音楽の150年」(10月11日～12月23日)
新国立劇場のオペラ公演を映像で紹介した。
- ・ イタリア・ローマ演劇記念館 ベケット展覧会「ベケットの劇世界と現代世界展」ー1990年代以降の世界のベケット上演の事例を検証ー(11月6日～2月2日)
日本を代表し、新国立劇場 2011年4月公演『ゴドーを待ちながら』が展示紹介され、森新太郎演出ノート・演出家取材記事・上演舞台写真・上演資料等の展示を実施した。大変好評で会期が1週間延長されたことに加え、イタリア各地から展覧会の招きがあり、26年3月末のフィレンツェを最初にイタリア各地で展覧会が予定されている。また、早稲田大学演劇博物館ではベケットの演劇を捉え直す「サミュエル・ベケット展」の開催を26年4月26日～8月3日に予定している。新国立劇場ではイタリア各地への同展の持ち回り、早稲田大学演劇博物館への協力を行っている。
- ・ 神奈川県民ホールギャラリー「日常・オフレコ展」舞台写真資料(1月11日～1月30日)
- ・ 音楽大学との連携・協力に関する協定に基づいて、武蔵野音楽大学の職員が研修員として派遣され、資料関係業務に従事した。

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 宮田慶子演劇芸術監督の企画によるマンスリー・プロジェクトの内容が、2012/2013 シーズンの「Withつながる演劇ー」3 作品上演に続き、2013/2014 シーズン演劇「マニラ瑞穂記」や、2014/2015 シーズンに予定しているシリーズ企画「二人芝居ー対話するカー」3 作品上演につながり、調査研究・資料収集活用の活動を次年度以降の公演内容の充実に結びつけることができた。
- ・ 出版物は、平易な手引書になるものをという考え方に沿って企画編集しており、新聞や雑誌記事での紹介や大学の教科書としての採用、各方面からの評価の声等を通じて、その成果が認められつつある。
- ・ 25 年度に企画編集・発行した刊行物 3 冊は、専門書として一般の書店・ネット等での取扱いも開始された。
- ・ 公演プログラムや特設サイト、公演ブログの内容にも特に力を入れ、作品の歴史背景、作曲家の生涯、舞台となった国や都市等についての調査研究に基づく記事を掲載した。作品理解を深める一助として、また調査研究や資料収集の成果をまとめる場として高い評価を得た。
- ・ 所蔵品システムのインターネット上及び閲覧室での公開を行うとともに、資料を順次登録することで、内容も少しずつ充実してきた。
- ・ 所蔵資料を劇場内外での展示企画やメディアに貸出すほか、直近の公演関係資料を閲覧室に展示することにより、積極的な資料の利用を促進することができた。
- ・ 公演記録映像資料等について、適切な保存・管理を行いながらデジタル化で情報を付加し、公開・活用を推進した。
- ・ ハイビジョン化以降の公演記録映像を充実させ、オペラ・バレエ愛好家の方々に大好評をいただいた。
- ・ ビデオブース・ビデオシアターでの映像視聴サービスは連日多数の利用に供し、利用者から好評を得た。
- ・ バレエの DVD は世界文化社の協力を得て第 6 巻まで継続して刊行することができた。映像のみならず鑑賞の手引となる解説 BOOK を付し、全国的に名作バレエの普及に資した。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・ 所蔵品管理システムのホームページでの公開資料件数の充実について検討する必要がある。

2. 公演記録の作成・活用、普及活動の実施

(1) 公演記録映像の作成・活用

<方針>

1. 主催公演を中心に、録音・録画・写真等による記録を作成し、閲覧・視聴に供する。また、過去の上演作品および関連情報について、著作権処理や違法コピー対策等を行った上で、常時来場者に向けて公開する。
2. 公演記録映像について、鑑賞会を開催するとともに、企業・学校等の団体鑑賞及びオペラ・バレエ鑑賞教室における事前レクチャーでの利用、各国の劇場関係者及び学校等の施設見学や舞台技術研修での上映、DVD の作成など、現代舞台芸術の普及のために活用を図る。

<実績>

現代舞台芸術に関する理解の促進と普及を図るため、以下のとおり、公演記録映像の作成を行うとともに、講座、映像の公開・鑑賞会を実施した。

1. 公演記録映像の作成

主催公演を中心に 40 公演について、録音・録画・写真等による記録を作成した。
主催公演の公演記録映像のデータベース化を 17 件行った。

2. 公演記録の活用

(1) 公演記録映像の公開

- ・ 以下の主催公演の公演記録映像を情報センター閲覧室にて追加公開した (17 件)。
 - ・ オペラ (14 件) : 「ナブッコ」(2001)、「ドン・ジョヴァンニ」、「ローエンングリン」、「ピーター・グライムズ」、「セビリアの理髪師」、「愛の妙薬」、「タンホイザー」、

「トスカ」、「アイーダ」、「ナブッコ」、「コジ・ファン・トゥッテ」、「魔笛」、
 高校生のためのオペラ鑑賞教室「ラ・ボエーム」「愛の妙薬」

- ・ バレエ(1件)： 「パゴダの王子」
- ・ ダンス(1件)： 「Memorandum」
- ・ 演劇(1件)： 「天守物語」
- ・ 新国立劇場ホームページ上に「舞台写真・公演記録」ページを設け、平成9年の開場以降ほぼ全ての公演に関して、公演記録写真及び公演情報等を一般の閲覧に供している。同ページ上にはジャンル、シーズン等によって目的の公演を検索できる機能が備えられており、利便性を高めている。

(2) DVD 現代舞台芸術鑑賞会

一般への現代舞台芸術の理解の促進と普及を図るために主催公演記録映像の鑑賞会を実施した。

ア. 舞台美術センター資料館(千葉県銚子市)2階視聴覚室にて実施(12回)。

実施年月日	内 容	参加者数
4月14日(日)	オペラ「ばらの騎士」(2011年4月公演)	8人
5月12日(日)	オペラ「ルサルカ」(2011年11月公演)	10人
6月9日(日)	小劇場オペラ「ねじの回転」(2002年9月公演)	8人
7月14日(日)	オペラ「ピーター・グライムズ」(2012年10月公演)	3人
8月4日(日)	バレエ「パゴダの王子」(2011年11月公演)	4人
9月8日(日)	オペラ「サロメ」(2011年10月公演)	5人
10月13日(日)	オペラ「ホフマン物語」(2005年11月公演)	5人
11月10日(日)	演劇「雨」(2011年6月公演)	1人
12月8日(日)	バレエ「くるみ割り人形」(2009年12月公演)	14人
1月12日(日)	オペラ「カルメン」(2010年6月公演)	8人
2月9日(日)	バレエ「白鳥の湖」(2012年5月公演)	10人
3月9日(日)	オペラ「ラインの黄金」(2009年3月公演)	7人
	計	83人

イ. 新国立劇場情報センター ビデオシアターにて実施(13回)。

- ・ 23年度からのハイビジョン映像による鑑賞会は好評を得ている。毎月実施した。
- ・ 夏休みは、こども向け公演の記録映像を上映した。

実施年月日	内 容	参加者数
4月21日(日)	オペラ「ナブッコ」(2001年11月公演)	46人
5月12日(日)	オペラ「ルサルカ」(2011年11月公演)	30人
6月16日(日)	演劇「天守物語」(2011年11月公演)	27人
7月21日(日)	バレエ「パゴダの王子」(2011年11月公演)	34人
8月3日(土)	こどもバレエ「シンデレラ」(2012年7月公演) こどもオペラ「パルジファルとふしぎな聖杯」(2011年7月公演)	4人
8月4日(日)	こどもバレエ「シンデレラ」(2012年7月公演) こどもオペラ「パルジファルとふしぎな聖杯」(2011年7月公演)	3人
9月15日(日)	オペラ「リゴレット」(2008年10月公演)	23人
10月13日(日)	オペラ「フィガロの結婚」(2010年10月公演)	32人
11月10日(月)	演劇「雨」(2011年6月公演)	35人
12月15日(日)	バレエ「くるみ割り人形」(2009年12月公演)	30人
1月12日(日)	オペラ「カルメン」(2010年6月公演)	34人
2月9日(日)	バレエ「白鳥の湖」(2012年5月公演)	18人
3月9日(日)	演劇「サロメ」(2012年6月公演)	23人
	計	339人

ウ. レクチャー等

団体観劇者・学校・劇場見学者を対象に、公演観劇前のレクチャーや劇場見学研修を情報センター ビデオシアターにて実施した。(16件 376名)。

(3) 外部制作会社等との連携による DVD の作成等

「バレエ名作物語 Vol.6 ジゼル 新国立劇場バレエ団オフィシャル DVD BOOK」が世界文化社から刊行された。

これは新国立劇場バレエ公演から選りすぐりの名作・名舞台の映像に加え、メイキング映像やバックステージ・ツアー、特別インタビュー等、オリジナル映像を収録した DVD と書籍がセットになった人気シリーズであり、本作は6本目にあたる。

(2) 公開講座等、普及活動の実施

<方針>

現代舞台芸術に関する理解の促進と普及を図るための講座等を実施するとともに、公演内容に対する理解の促進を図るため、上演に合わせてオペラトーク、シアタートーク等を適宜実施した。

<実績>

(1) 現代舞台芸術に関する理解の促進と普及を図るための講座等

名称 (会場)	回数	参加者数	アンケートによる 有意義回答の割合
DVD 現代舞台芸術鑑賞会 (舞台美術センター) *詳細は既出	12回	83人	
DVD 現代舞台芸術鑑賞会 (新国立劇場) *詳細は既出	13回	339人	95.9%
現代舞台芸術入門講座 (新国立劇場) *マンスリー・プロジェクトとして既出	17回	2,529人	99.1%
現代舞台芸術入門講座 (舞台美術センター)	1回	288人	100.0%
合計	43回	3,239人	98.5%
計画・目標	42回	1,700人	80%

・ 現代舞台芸術入門講座 (舞台美術センター資料館)

現代舞台芸術の理解の促進と普及を図るという観点から、現代舞台芸術の展示・公開に加えて、舞台美術センター資料館の入館券の購入者 (高校生以下、65歳以上及び心身障害者は無料) を対象にコンサートを実施した。

舞台美術センター コンサート「銚子!?!のいい仲間たち」

日程：10月28日(月) 11:00(一般) / 14:00(銚子第七中学校貸切)

出演：新国立劇場合唱団員

直野容子(ソプラノ)、立川かずさ(アルト)、大木太郎(テノール)、秋本 健(バス)、
江上菜々子(ピアノ)

曲目：“フィガロの結婚”より「恋とはどんなものかしら」、「トゥーランドット」より「氷のような姫君の心も」、「リゴレット」より「美しい恋の乙女よ」、歌曲「猫の二重唱」、「魔王」、「宵待草」、「ニューオリンズの美女」より「ビー・マイ・ラブ」、「校歌」、「花は咲く」、ワークショップ ほか

場所：新国立劇場舞台美術センター資料館 1F展示ホール

入場者数：288人

(2) 公演内容に対する理解の促進を図るための講座等

内容	名称	回数	参加者数
オペラ関連	地域招聘公演「三文オペラ」プレトーク、2014/2015 シーズ	3回	435名

	ンオペラ演目説明会、オペラトーク「死の都」		
バレエ・ 現代舞踊関連	2014/2015 シーズンバレエ&ダンス演目説明会	1 回	260 名
演劇関連	シアタートーク(「効率学のススメ」「アジア温泉」「つく、きえる」「象」「OPUS」「エドワード二世」「ピグマリオン」「アルトナの幽閉者」) 「効率学のススメ」アッセンブリー	9 回	2,490 名

(3) 現代舞台芸術の普及のための公演関連映像の公開等

映像でわかりやすく伝えるオンラインコンテンツ「オペラのつくりかた」「バレエのつくりかた」「演劇のつくりかた」を引き続き新国立劇場のホームページで公開し、現代舞台芸術の魅力をより多面的に、幅広い層に向けて発信した。

《自己点検評価》

- 良かった点・特色ある点
 - ・ DVD 現代舞台芸術鑑賞会（新国立劇場情報センター）の参加者数は、27 席（補助席を除く）のキャパシティに比して入場率 96.6%と高い数値を示した。ビデオブース・ビデオシアターでの映像視聴サービスは普段からフルに利用され、鑑賞会来場者を含め 5,117 人が利用者し、好評を得た。
 - ・ DVD 現代舞台芸術鑑賞会（舞台美術センター）は、立地条件上、高齢の地域の人たち、減り続ける子どもたちとのつながりを保つことにも鑑賞会の実施の大きな意義があり、地元との連携を密にして実施した。
 - ・ 現代舞台芸術入門講座（舞台美術センター）も、プログラムや演出を工夫して大好評を博した。また、26 年度には地元各団体から拡充の要請を受け、2 日間のコンサートを計画している。
 - ・ オペラ部門においては、上演機会の少ないコルンゴルト作品「死の都」についてのトークイベントを開催した。様々な観点から作品を紹介するなど、作品の理解増進に大いに貢献した。
 - ・ オペラ、舞踊部門において、2014/2015 シーズン・ラインアップ発表直後の公演会場において次期芸術監督による演目説明会を開催し、周知に努めた。
 - ・ 演劇部門においては、恒例となった演出家や出演者によるトークイベントを「シアタートーク」として実施し、観客から好評を博した。
 - ・ NHK 及び WOWOW によるテレビ放映、ラジオ放送は、新国立劇場主催公演の認知・普及の機会であり、観客層の新規開拓の一助となっている。
- 見直し又は改善を要する点
 - ・ 舞台美術センター資料館での企画展・公演記録鑑賞会の来場者数について、目標未達となった。舞台美術センターでの展示や講座は、地域の人たち、豊里台自治会、銚子市、銚子市教育委員会、地元紙などからの要望が大きいため、今後企画の実施方法等の方向性について検討する必要がある。
 - ・ いずれの活動も職員が企画立案から会場設営、展示準備まで一切を行っているのが現状であるため、職員の負担に考慮しつつ、限られた予算の中で効率的な活動内容となるよう引き続き検討していきたい。

Ⅱ 業務運営の効率化に関する目標を達成するためとるべき措置

業務運営の効率化

業務運営の効率化 p.239

- 効率化に関する取組 p.245
 - 情報システムの活用 p.245
 - 事務手続きの簡素化 p.245
 - 契約の適正化 p.246
 - 省エネルギー、リサイクルの推進 p.247
- 給与水準の適正化 p.249
- 組織機構の在り方の検討 p.250
- 保有資産の有効活用 p.255
- 内部統制の充実・強化 p.256
 - 自己点検評価の実施、外部専門家等からの意見聴取 p.256
 - 外部評価委員会における検討・評価、評価結果の公表・事業への反映 p.256
 - 内部統制の充実・強化 p.257
 - 情報開示の推進 p.261
- 効率化に関する目標の達成状況 p.262

II-1 業務運営の効率化

《中期計画の概要》

II 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

- 1 劇場利用者等へのサービスその他の業務の質の向上を考慮しつつ、次の取組を行い、事務及び事業の改善を図る。
 - (1) 一般管理費等の削減

運営費交付金を充当して行う業務について、平成24年度予算を基準として中期目標期間中に、退職手当、特殊要因経費を除き、一般管理費などの事務的経費については15%以上、事業費についても毎事業年度につき1%以上の効率化を図る。
 - (2) 効率化に関する取組
 - ア 効率的な情報システムの整備による各事業の効果的・効率的な運営の支援
 - イ 手続きの簡素化等による業務運営の効率化及び利用者の利便性の向上
 - ウ 国立劇場等の管理運営業務について、外部委託の範囲拡大による経費削減
 - エ 省エネルギー、廃棄物減量化、リサイクル、ペーパーレス化等の推進
 - (3) 給与水準の適正化等

役職員の給与について、法人の業務や運営のあり方等その性格に鑑み、法人の自律的・自主的な労使関係の中で、国家公務員の給与見直しの動向を見つつ、必要な措置を講ずる。給与水準については、適正化に関する検証結果や取組状況について公表する。
 - (4) 契約の適正化

契約については、原則として一般競争入札等によることとし、次の取組により、契約の適正化を推進する。

また、その実施に当たっては、監事による監査を受けるとともに、財務諸表等に関する監査の中で会計監査人によるチェックを要請する。

 - ア 「随意契約見直し計画」に基づく取組を着実に実施するとともに、その取組状況を公表する。
 - イ 一般競争入札等により契約を行う場合であっても、特に企画競争や公募を行う場合には、競争性、透明性が十分確保される方法により実施する。
 - (5) 組織機構の在り方の検討

業務運営の効率化等の進捗状況を踏まえ、組織機構の在り方について検討を行い、必要な措置を講ずる。
 - (6) 保有資産の有効利用

保有する劇場施設等の資産については、利用実態を把握し、保有の目的・必要性に鑑み、一層の有効利用に資するための方策を検討・実施する。

また、金融資産については、経済状況を踏まえつつ、適切な管理・運用に努める。
 - (7) 内部統制の充実・強化
 - ア 外部の有識者、各分野の専門家等で構成する評価委員会において、組織、運営、事業などについて評価、評価結果の公表と組織の改善、事業の見直し、事務の改善等に反映
 - イ 人員・劇場等施設及び運営費交付金等を有効に活用し、理事長のマネジメントの強化や監査機能の充実について検討、検討結果の逐次活用
 - ウ 国民の理解が得られるよう、分かりやすく説明する意識を徹底するとともに、国民が最新の情報を円滑に得られるよう、ホームページにおける情報アクセスを容易にするなど、情報開示を推進

また、保有する情報については、法令等に基づき適切に情報の開示を行うとともに、政府の方針を踏まえた適切な情報セキュリティ対策を推進

《年度計画》

II 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

1 業務運営の効率化を進めるため、次の措置を講ずる。

- (1) 効率化に関する取組
 - ア 情報システムの活用
 - ① 文書管理システム、人事・給与システム及び会計システム等、業務システムの安定稼働を引き続き図ることにより、各業務の効率的な運用を行う。
 - ② チケット販売関係システムの最適化を図るため、総合チケットシステムの開発を引き続き実施する。
 - ③ システムの脆弱性への対応を着実に進めるとともに、不正アクセスへの監視及び対応を行い情報セキュリティ

ティの強化を図る。

④ 情報システムの効率的・安定的な稼働、セキュリティの強化のため、老朽化した情報通信基盤構成機器の整備に着手する。

⑤ 増加するデータ情報を適正に管理・運用していくためにファイルサーバーの整理・活用方法を検討する。

イ 事務手続きの簡素化

館内LANの活用、各種マニュアルの整備等により事務手続きの効率化を図るとともに、内部統制の強化を図りつつ決裁事務の簡素化を進める。

ウ 契約の適正化

① 引き続き「随意契約等見直し計画」に基づき契約の適正化を図り、原則として一般競争入札によることとする。また、その取組状況をホームページで公表する。

② 契約監視委員会を引き続き設置して、定期的に契約の点検・見直しを行い、その結果を踏まえた契約方式を実施する。

③ 入札事務の効率化と競争参加者の利便性向上のため、電子入札を一部の案件で導入する。

エ 省エネルギー、リサイクルの推進

① 特定地球温暖化対策事業所として、地球温暖化対策中長期計画書等を作成し二酸化炭素(CO2)の削減を推進する。

② 夏季軽装等の推進による、事務所部分を中心とした光熱水量の節減を図る。

③ 廃棄物の減量化を図るため、両面コピー及び分別収集を徹底する。

④ 情報システムの利用促進により、ペーパーレス化を進める。

⑤ グリーン購入法に基づく環境配慮物品等の調達を行い省エネルギー、リサイクルを促進する。

(2) 給与水準の適正化

役職員の給与について、国家公務員の給与見直しの動向を見つつ、必要な措置を講ずる。給与水準については、適正化に関する検証結果や取組状況について公表する。

(3) 組織機構の在り方の検討

業務運営の効率化等の進捗状況を踏まえ、人員配置など組織機構の在り方について検討し、必要な措置を講ずる。

(4) 保有資産の有効利用

施設の有効利用のため、引き続き適切な管理・運用に努めるとともに、各劇場施設の使用効率の向上及び利用者の増加に努める。

また、金融資産については、経済状況を踏まえつつ、適切な管理・運用に努める。

(5) 内部統制の充実・強化

ア 平成24年度の事業の実施結果について、担当各部が自己点検評価を行うとともに、各分野の外部専門家からの意見聴取を行う。

イ 上記の自己点検評価をもとに、外部の有識者、各分野の専門家等で構成する評価委員会において、業務の実績に関する評価を行う。評価結果については、公表するとともに、組織の改善、事業の見直し、事務の改善等に反映させる。

ウ 理事長がリーダーシップを発揮できる環境を整備するとともに、監事監査及び内部監査を実施して内部統制の充実・強化を図る。

エ 国民が最新の情報を円滑に得られるよう、ホームページにおける情報アクセスを容易にし、情報開示を推進する。情報開示に当たっては、国民の理解が得られるよう、分かりやすく説明する意識を徹底する。

また、保有する情報については、法令等に基づき適切に情報の開示を行うとともに、情報セキュリティ対策についての意識の向上を図るため、各職員の自己点検の実施に加え、専門家による情報セキュリティ研修を実施する。

《実績》

1. 効率化に関する取組

(1) 情報システムの活用

- ・ チケット販売関係システムの最適化を図るため、総合チケットシステムの開発を引き続き行い、26年3月31日に全機能の運用を開始した。
- ・ 財務会計等システムを改修し、26年4月1日からの消費税率の変更に対応した。
- ・ 業務用及びチケットシステム用クライアントパソコンを更新し、業務の効率化を図った。
- ・ 標的型攻撃による不正プログラムの侵入及び感染拡大を防止するため、証跡の収集・管理機能を強化した。

- ・ Java・PHP等のプログラム言語のバージョンアップを行い、脆弱性対策を施した。
 - ・ 各職員のセキュリティ自己点検に加え、専門家による情報セキュリティ研修を実施し、情報セキュリティ対策についての意識の向上を図った。
- (2) 事務手続きの簡素化
- 引き続き決裁事務の簡素化の徹底と、館内 LAN を介してのグループウェアや内部ホームページ等の活用により、事務手続きの効率的な実施と事業の速やかな実施に努めた。
- (3) 契約の適正化
- ・ 「随意契約等見直し計画」に基づく一般競争入札の取組状況に関し、昨年度に引き続き、「日本芸術文化振興会契約監視委員会」（第9回、第10回）を開催し、改善点などの検討を行った。
 - ・ 入札参加の機会の拡大を図るため、ホームページ上の「調達情報」に仕様書のほか、セキュリティ面において公開することに問題があると判断されるものを除き、その他すべての資料を掲載した。また、工事及び設計・コンサルティング業務について、文部科学省文教施設企画部施設企画課契約情報室ホームページへ入札情報を掲載するとともに、電子入札を導入している。
 - ・ 一者応札・応募事案の事後点検体制として、仕様書を取り寄せる等調達に関心を示した業者に対し、応札を行わなかった理由を聴き取るなど要因分析を行い、一者応札・応募の改善を図った。
- (4) 省エネルギー、リサイクルの推進
- ・ 光熱水量の削減について、引き続き各館において、観劇環境や業務に支障のない範囲で節電対策を行った。
 - ・ 廃棄物について、引き続き減量化を図るとともに種別分別の徹底をすすめた。
 - ・ ペーパーレス化促進について、両面コピー、印刷物裏面の再利用、グループウェアの活用等に努めた。

事 項	区 分	使用量・処理量・枚数	対前年度増減
光熱水量	電気使用量	7,761,082kwh	△2.3%
	ガス使用量	414,169 m ³	2.6%
	水道使用量	59,253 m ³	△2.5%
廃棄物	一般廃棄物	88,254kg	14.6%
	再利用廃棄物	71,601kg	△50.5%
	産業廃棄物	15,044kg	△80.9%
ペーパーレス化	コピー枚数	2,848,998 枚	14.8%
	用紙購入枚数	3,675,000 枚	0.7%

2. 給与水準の適正化

- ・ 引き続き、ホームページに「独立行政法人日本芸術文化振興会の役職員の報酬・給与等について」を掲載し、給与水準に係る適正化に関する検証結果及び取組状況を公表するとともに、国からの財政支出の割合が77.8%（24年度予算ベース）であることを踏まえ、その適正性について検証を行った。
- ・ 国家公務員の給与見直しに準じ、24年4月1日から26年3月31日までの間、臨時特例により役職員の給与を減額して支給する措置を実施した。
- ・ 民間における退職給付の実情に鑑み、退職手当の引き下げを行うことを内容とする国家公務員の退職手当制度の改正に準じて、必要な措置を実施した。

3. 組織機構の在り方の検討

- ・ 業務の質の向上と一層の効率化のための事業実施体制整備について組織改正の検討を進め、25年4月に総務企画部総務課にお客様相談室を設置したほか、国立劇場芸能部及び国立劇場営業部を改組した。また、26年4月に国立劇場等大規模改修推進本部及び国立劇場営業部販売計画課会員サービス室を設置することとした。
- ・ 引き続き新人職員に対して公演業務に関する研修を実施するなど、専門性の確保に努めた。
- ・ 文楽技術室においては、複数年にわたる採用プログラムを作成し、技術を確実に継承できるように努めている。

4. 保有資産の有効活用

保有資産につき、処分等することとされた実物資産はないが、引き続き有効活用を図っている。

5. 内部統制の充実・強化

(1) 自己点検評価の実施、外部専門家等からの意見聴取

- ・ 24年度の業務実績に関する自己点検評価を実施した。実施に当たっては、各公演専門委員会、事業委員会において事業に対する外部専門家からの意見を聴取した。

(2) 外部評価委員会における検討・評価、評価結果の公表・事業への反映

- ・ 第31回(6/27)、第32回(9/19)、第33回(10/17)、第34回(3/28)評議員会を開催し、24年度評価の実施、25年度計画実施状況の報告、26年度計画についての審議等を行った。
- ・ 24年度第2回(4/26)、第3回(6/14)、第4回(6/21)、25年度第1回(10/31)評価委員会を開催し、24年度の実績に対する評価等を行った。
- ・ 各分野において公演専門委員会を開催し、25年度公演状況の報告、26年度公演計画の説明等を行った。
- ・ 養成事業及び調査事業について事業委員会を開催し、25年度の事業実施状況、26年度事業計画、24年度及び中期目標期間に係る業務実績に関する評価等についての意見聴取を行った。
- ・ 芸術文化振興基金運営委員会を4回開催し、25年度助成活動の決定、改善意見についての審議等を行った。

(3) 内部統制の充実・強化

以下のとおり監事監査及び内部監査を実施した。

①監事監査(定期監査)

○監事監査計画を理事長に提出(4月25日 ※写しを文部科学大臣に提出)

○全部署を監査対象とする(部単位で監査)

○監査期間(5月～6月 実地監査8日間)

- ・ 各部資料提出
- ・ 資料精査
- ・ 各部ヒアリング
- ・ 別途、補助監査による監査。報告を受ける。

会計監査人の監査報告聴取

「監事監査報告書」作成 → 財務諸表に添付 → 文部科学大臣へ

○「監事監査における検討希望事項」を理事長に提出(11月18日)

<指摘事項(7項目)>

- ・ 入札・契約について
- ・ スペシャリストの育成の方策と課題について
- ・ 労務管理について
- ・ 新規事業の実施状況(内容及び成果)について
- ・ 基金部の状況(助成)について
- ・ 集客について
- ・ 内部統制の見直しと強化

②内部監査

○法人内に内部監査計画を通知(11月27日 ※同日、監事へ通知)

○全部署を監査対象とする(部単位で監査)

<監査項目>

- ・ 勤務時間の管理状況
- ・ 旅行命令、旅費の状況
- ・ 法人文書の管理状況
- ・ 物品・役務等、調達手続きの状況
- ・ 物品の管理状況
- ・ 切手、はがきの管理状況
- ・ その他必要な事項

○監査期間(1月27日から2月19日間の9日間)

- ・ 書類、帳簿等の実査
- ・ 必要に応じて担当者からヒアリング

○監査報告書を理事長に提出(3月17日)

○法人内「事務処理の適正化及び改善を要する事項について」を通知(3月17日)

<指摘事項>

- ・ 調達手続きの適正化、物品管理の適正化 等

(4) 情報開示の推進

- ・ 振興会の実施する事務事業に対する国民の理解が得られるよう、役員会等において、職員が国民に対し懇切丁寧に分かりやすく説明する意識の徹底を図った。

① 分かりやすく説明する意識の徹底

独立行政法人に対して国民の厳しい視線が向けられている現状に対応して、振興会の実施する事務事業に対する国民の理解が得られるよう、役員会等において、職員が国民に対し丁寧に分かりやすく説明する意識を引き続き持つよう徹底を図った。

② 情報提供の迅速化

ホームページ利用者に速やかに正確な情報を提供することは、振興会の実施する事業の成否にも関わることから、役員会等重要会議で繰り返し検討し、業務改善に努めている。特に迅速さを求められる公演情報については、担当者の直接入力と責任者の認証機能を備えた公演情報管理システムを活用し、利用者へ速やかかつ正確に情報提供を行っている。また、内部ホームページにマニュアルを掲載して職員に周知を図り、情報の誤謬等が生じないよう体制の整備を図っている。

③ 情報公開への対応

「独立行政法人等の保有する情報の公開に関する法律」に基づき、情報公開の対応を行った（開示請求は 0 件）。

6. 効率化に関する目標の達成状況

- ・ 25 年度も引き続き適切な執行に努めた結果、一般管理費については基準額である 24 年度運営費交付金予算額（1,050 百万円）に対し 15%の効率化を達成し、事業費についても対前年度 6%の効率化を達成した。

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 26 年 3 月 31 日に総合チケットシステムの全機能の運用を開始したことにより、利用者の利便性の向上と業務の効率化が図られた。
- ・ 標的型攻撃対策やプログラム言語等の脆弱性対策を実施することにより、セキュリティの強化を図った。
- ・ 入札事務の効率化と競争参加者の利便性向上のため、工事及び設計・コンサルティング業務について、文部科学省文教施設企画部施設企画課契約情報室ホームページへ入札情報の掲載を行うとともに、電子入札の運用を引き続き実施した。
- ・ 給与水準について、国家公務員との給与水準（年額）の比較指標は 104.1 であるが、職員の学歴や振興会の地域性を踏まえ検証し、適切な水準にあることを確認した。
- ・ 事業の実施状況について、担当各部が月次又は四半期ごとに取りまとめることにより、効率的に年間の自己点検評価を行うことができた。文部科学省独立行政法人評価委員会、振興会評価委員会等において行われる評価の結果については、公表するとともに、可能な限り事業内容の改善等に反映させた。また、公演専門委員会等において各分野の専門家から意見聴取を行い、今後の事業への反映を図った。
- ・ 養成事業委員会において、今後の養成事業に反映を図るため、通例議題の事業実施状況・事業計画に加えて、年度評価結果報告並びに中期目標期間に係る評価結果報告についても議事を含め、数年来の養成事業の状況を提示するとともに、養成事業に関して受けた評価の要点を説明し、中期的な計画の観点からも外部識者から意見聴取ができた。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・ 多様化、複雑化したシステムを維持することが課題となっており、外部サービスの利用も含めて業務及び全システムの見直しを進める。
- ・ 今後とも適切な給与水準を維持し、組織機構の在り方について検討を行い、必要な措置を講じる。
- ・ 情報公開担当窓口における開示・不開示の判断には、最新の答申や判例の活用を行い、担当者は関連する講習会等にも積極的に参加するなど、情報公開の適切な実施に向けてより一層努める。

《24 年度評価への対応》

【評価】

（文科省評価委員会）

- ・ 組織改正については、その改正理由も妥当であり、特段の問題はないと判断できるが、その効果が現時点では不明である。(①)

- ・ 競争入札の推進に伴う価格面での効果は数値として示されているが、今後、サービスなどの質的な面での効果や問題点を検証することが望まれる。(②)
- ・ 今後は、一者応札・応募の条件等の見直し、契約情報提供の充実、事後点検体制を強化することにより、契約の競争性・透明性の確保に努められたい。(②)

(振興会評価委員会)

- ・ 今後は、改正後の組織がより良く機能するために、振興会職員全員の意識を高める努力が不可欠である。(①)
- ・ 振興会全体の事業評価に関して、外部の専門家の意見を十分に取り入れ、公正化が図られていることを評価する。今後に向けて、業界全体の動向についても更に調査検討が必要ではないだろうか。(③)

【対応】

①組織改正の効果の検証

組織改正に当たっては、改正後の組織の業務が円滑に進められるよう、役員会等を通じて組織改正の目的について周知徹底を図った。今後も改正の効果を確認しつつ、振興会の使命達成のためにより効果的・効率的な業務実施体制について検討を行い、必要な組織機構の整備を進める。

②契約の適正化の継続的検討

一般競争入札の推進に伴う価格競争の一つの側面として、履行における質の確保の問題があるが、その対策として、仕様書で求める要件をより明確にするなどの工夫に努めている。今後は、競争入札の価格面と質的な面での効果や問題点も検証していきたい。

一者応札・応募となった案件については、引き続き、参加資格・仕様内容・公示期間等を見直すとともに、業者に対するヒアリングなど事後点検を行うことにより、応札者・応募者の増加を図り、より競争性の確保に努めたい。また、工事及び設計・コンサルティング業務について、24年度から電子入札を導入しているが、今後は業界紙にも入札情報を掲載して、更に広く周知を図り、応札者の増加につなげたい。

③業界全体の動向の調査検討

振興会では、事業全体についての評価を行う評価委員会のほか、実施状況・計画について外部専門家の意見を聴取する委員会を各事業について設置している。各委員会においては、各業界の動向についても聴取・検討し、必要に応じて事業に反映させている。今後も外部専門家や関係団体等と連携し、業界全体の動向の踏まえて柔軟に対応していきたい。

< 1 > 効率化に関する取組

(1) 情報システムの活用

①総合チケットシステムの開発、導入

- ・ 25年4月23日からスマートフォンでのチケット販売サービスを開始した。また、26年3月31日から全機能の運用を開始し、利用者の利便性の向上と業務の効率化を図った。

②入退システムサーバーの運用開始

- ・ 更新した入退システム管理用サーバーの運用を開始し、入退管理の安定化を図った。

③業務システムの改修

- ・ 消費税率変更に伴い、財務会計等システムの改修を実施した。
- ・ 総合チケットシステムの運用開始に合わせて、財務会計等システムの連携機能の改修を実施した。

④パーソナルコンピュータの更新

- ・ 基金部、新国立劇場・おきなわ部、国立文楽劇場部舞台技術課の業務用及びチケット販売用クライアントパソコンを更新し、OSのバージョンアップ・処理速度の向上・データ容量の増加等により、各職員の業務の効率化を図った。

⑤内部LANの見直し

- ・ 文化デジタルライブラリーシステムバックアップ処理ルートを独立し、当該処理による振興会ネットワーク全体への負荷を低減した。

⑥標的型攻撃対策

- ・ 標的型攻撃による不正プログラムの侵入及び感染拡大を防止するため、証拠の収集・管理機能を強化した。

⑦プログラム脆弱性対策

- ・ 文化デジタルライブラリーシステムで使用しているプログラム言語 Java のバージョンアップを行った。
- ・ WEBサーバーで使用している言語 PHP のバージョンアップを行った。
- ・ ウイルス対策ソフトのバージョンアップを行った。

⑧情報セキュリティへの対応

- ・ 「情報セキュリティポリシー対策実施基準」に従い、基金部を対象に、助成業務システムの情報セキュリティの対応状況について監査を実施し、指摘事項に対する対応計画を策定した。
- ・ 情報セキュリティ対策についての意識の向上を図るため、自己点検の実施に加え、専門家を招いて情報セキュリティ研修を行った。

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 26年3月31日に総合チケットシステムの全機能の稼働を開始したことにより、インターネット販売・電話予約・窓口販売・団体販売における座席管理が一元化され、利用者の利便性の向上及び業務の効率化が図られた。
- ・ 入退システムにおいて管理用サーバーを更新したことにより、システムの安定性及び安全性を向上させた。
- ・ 基金部、新国立劇場・おきなわ部、国立文楽劇場部舞台技術課の業務用及びチケット販売用クライアントパソコンを更新したことにより、OS等情報基盤の標準化が完了した。
- ・ 標的型攻撃対策の実施により、不正プログラムの侵入及び感染拡大を防止等のセキュリティ対策が強化された。
- ・ プログラム言語等のバージョンアップにより脆弱性が解消し、セキュリティを向上させた。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・ 多様化、複雑化したシステムを維持することが課題となっており、外部サービスの利用も含めて業務及び全システムの見直しを進める。

(2) 事務手続きの簡素化

引き続き決裁事務の簡素化の徹底と、館内LANを介してのグループウェアや内部ホームページ等の活用により、事務手続きの効率的な実施と事業の速やかな実施に努めた。グループウェアについては課長補佐以上の職員に自宅のPC及びスマートフォンからアクセスできる権限を与え、より緊密に情報共有できるよう体制を整えた。

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 公演の終演時刻や荒天時の公演実施情報等、観客等からの問合せが多い事項については予め振興会ホームページに情報を掲載した。また、会員組織への入会申込み等の資料請求に対してはホームページに資料請求フォームを設けることとした。これらの施策により、観客サービスの向上、手続きの簡素化、電話対応業務の負荷軽減等が図られた。

(3) 契約の適正化

1. 契約監視委員会の開催、「随意契約等見直し計画」に関する取組

- ・ 外部有識者を含めた委員による「日本芸術文化振興会契約監視委員会」（第9回、第10回）において、定期的な契約の点検を実施し、報告書を理事長に提出した。
- ・ 8月6日に第9回契約監視委員会を開催し、競争性のない随意契約、多数回入札となった案件を中心に点検審議を行い、高落札率の改善について検討した。また、「競争性のない随意契約とする場合の基本的な考え方」について提案し、委員会です承を得た。提案の要点は以下のとおり。

該当要件：①既設のコンピューター制御システムに関連する改修、修繕、保守等の契約

②既設の舞台機構設備に関連する改修、修繕、保守等の契約

適用の理由：ア：著作権等の排他的権利に基づくものである場合

イ：契約の内容が既設のコンピューター制御システムまたは舞台機構設備と密接不可分の関係にあるが、当該システム開発者または設備施工者が企業秘密に係る等の理由から関連情報を一般開示しない場合

- ・ 1月23日に第10回契約監視委員会を開催し、24・25年度連続一者応札・応募等事案について点検を行い、一者応札・応募の改善等について検討した。
- ・ より競争性、透明性の高い入札・契約事務を実施することを目的として、20年度契約を基準として策定した「随意契約等見直し計画」のフォローアップを行い、公表した。

2. 契約内容及び入札方法の見直し等外部委託の推進

案件ごとに業務内容を精査し、以下のとおり契約方法を見直して、より効率的な外部委託を推進した。

(25年度契約からの移行業務)

- ・ 国立劇場本館及び演芸資料館における公演記録映像収録等の業務に係る要員の派遣（本館・能楽堂を一括した契約へ移行）
- ・ 平成25年度国立劇場映像設備のうちカラーカメラにかかる保守業務（随意契約から一般競争入札へ移行）
- ・ 「平成25年度国立文楽劇場構内で使用する電気の調達」（不落随意契約から一般競争入札に移行）

業務の質的な面での特殊性を検証した上で適正な契約方法を検討し、以下のように実施した。

(25年度契約からの移行業務)

- ・ 「平成25年度国立劇場大劇場舞台機構保守点検業務」（一般競争入札から随意契約へ移行）
- ・ 「平成25年度国立劇場小劇場及び国立演芸場舞台機構の保守点検業務」（一般競争入札から随意契約へ移行）
- ・ 「平成25年度国立劇場大劇場、小劇場及び国立演芸場照明設備保守業務」（一般競争入札から随意契約へ移行）
- ・ 「平成25年度国立文楽劇場舞台機構（常駐及び定期）保守点検業務」（一般競争入札から随意契約へ移行）

(26年度契約からの移行準備を行った業務)

- ・ 「平成26年度「国立文楽劇場友の会会報」の製造及び発送業務」（随意契約から一般競争入札に移行）
- ・ 「平成26年度国立文楽劇場構内で使用するガス」（一般競争入札から随意契約に移行）
- ・ 「平成26年度国立文楽劇場構内清掃業務」（複数年契約から単年度契約に変更し、本館及び能楽堂と27年度から調達時期を合わせ、調達事務の効率化を図ることとした。）

3. 入札機会の拡大

(1) 一者応札・応募をリストアップし、以下の見直しを行った。

① 仕様書の内容の見直し

- ・ 特定の業者しか参加することができない条件を見直す。

② 公告期間の見直し

- ・ 一般競争入札について、10日以上としている公告期間を10営業日以上確保する。
- ・ 公募については、20日以上としている公告期間を20営業日以上確保する。

③ 入札参加要件の緩和

- ・ 過去の納入実績、請負実績等の条件を緩和する。

(2) 契約情報提供の充実

- ・ 入札公告などを劇場敷地内に掲示するとともに、入札機会の拡大を図るため、ホームページ上の「調達情報」に仕様書のほか、セキュリティ面において公開することに問題があると判断されるものを除き、その他すべての資料を掲載した。
- ・ 工事及び設計・コンサルティング業務について、文部科学省文教施設企画部施設企画課契約情報室ホームページへ入札情報を掲載するとともに、電子入札を導入している。

(3) 一者応札・応募事案の事後点検体制

仕様書を取り寄せる等調達に関心を示したが、応札を行わなかった業者に対してその理由を聴き取るなど、一者応札・応募となった要因分析を行い、一者応札・応募の改善を図った。

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 「随意契約等見直し計画」に基づき、引き続き競争性のある契約への移行を推進した。その一方で、明らかに競争性のない特殊な案件については、契約監視委員会に説明し、意見を聴取した上で随意契約へ変更できることとしていたが、「競争性のない随意契約とする場合の基本的な考え方」をまとめた上で契約監視委員会の了承を得、契約方法の適正化を図った。
- ・ 入札情報入手の利便性向上を図るため、ホームページ（調達情報）に掲載する情報を公示だけではなく、仕様書等も掲載することなどにより、一層充実させることができた。新規参入も含めた入札参加者の増加を図るため、工事及び設計コンサルティング業務について、文部科学省文教施設企画部施設企画課契約情報室ホームページへ入札情報の掲載を行っている（平成23年12月6日公告から）。
- ・ 入札事務の効率化を図るほか、入札参加者の利便性向上のため、工事及び設計・コンサルティング業務について電子入札を導入している。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・ 業務効率の向上、事務作業の軽減、経費の削減効果を得られることが見込まれる契約については、一本化や複数年での契約締結について継続的に検討していく。
- ・ 入札辞退の理由について確認する体制に関し、仕様書・入札説明書等情報を入手後又は入札参加申請書提出後に参加を辞退する場合、辞退届の提出を求める等、できる限り理由を調査することを継続して行い、更に広く参加者を募るための参考とする。

(4) 省エネルギー、リサイクルの推進

1. 光熱水量の節減 ※ 光熱水量は、食堂・売店等テナントの使用量を除く。

事 項	区 分	使用量	対前年度増減
電 気	本館・演芸場	4,964,763kwh	△1.2%
	能楽堂	827,486kwh	6.0%
	文楽劇場	1,968,833kwh	△8.0%
	合 計	7,761,082kwh	△2.3%
ガ ス	本館・演芸場	189,379 m ³	1.9%
	能楽堂	87,638 m ³	8.4%
	文楽劇場	137,152 m ³	0.2%
	合 計	414,169 m ³	2.6%
水 道	本館・演芸場	35,986 m ³	△1.4%
	能楽堂	6,985 m ³	2.7%
	文楽劇場	16,282 m ³	△6.8%
	合 計	59,253 m ³	△2.5%

①引き続き各館において、観劇環境や業務に支障のない範囲で下記の節電対策を行った。

- ・ 執務室、会議室、通路等の照明を業務に支障のない範囲で間引き・減灯した。
- ・ 提灯やロビーで使用している白熱灯のLED電球への交換や、通路の照明に人感センサー式スイッチを併設し通行時のみ自動点灯する等の対策を実施した。
- ・ 施設課執務室で電力や空調の運転状況をリアルタイムで把握できる端末機を設置し、よりきめ細かな空調等の運転を指示できる体制とした。
- ・ 蓄熱槽を活用して客席の室温を適正に保ちつつ、使用最大電力（KW）と電力使用量（KWH）を削減し省エネルギーを図った。
- ・ 事務所部分を中心に夏季の軽装を奨励するとともに、冷暖房の抑制（夏季ピーク時の制限、設定温度の制限）を実施した。
- ・ 自動販売機において、ディスプレイの照明を消し、夏季ピーク時の冷却時間を制限して節電を行った。
- ・ 伝統芸能情報館地下の収蔵庫及び書庫の空調を、24時間稼働から就業時間内（9：30～18：15）稼働に改めた。
- ・ 演芸場2階のトイレを改修し、節水便器を導入した。
- ・ 文楽劇場では、事務所のトイレの照明に人感センサーを設置した。

②国立劇場が東京都の「特定地球温暖化対策事業所」に指定され、CO₂の排出量を平成22～26年の5年間で1,145t（年平均229t）削減する義務が課せられたため、この対応策の一環として暖房・給湯用ボイラー燃焼方式を23年度に重油からガスに変更する等、引き続き抑制に努めた。

2. 廃棄物の減量化

事 項	区 分	処理量	対前年度増減
一般廃棄物	本館・演芸場	53,629kg	65.0%
	能楽堂	6,585kg	△41.2%
	文楽劇場	28,040kg	△15.8%
	合 計	88,254kg	14.6%
再利用廃棄物	本館・演芸場	53,864kg	△57.0%
	能楽堂	5,847kg	△40.7%
	文楽劇場	11,890kg	24.2%
	合 計	71,601kg	△50.5%
産業廃棄物	本館・演芸場	7,024kg	△89.8%
	能楽堂	3,290kg	△47.1%
	文楽劇場	4,730kg	42.0%
	合 計	15,044kg	△80.9%

- ・ 廃棄物の減量化を図るため、種別分別を徹底したほか、自動販売機設置業者が事務所部分敷地内にペットボトル・缶等用のごみ箱を設置し、自主回収している。
- ・ 本館・能楽堂では、委託業者の変更に伴い、計量方法の適正化を図った。
- ・ 文楽劇場では、大阪市の分別回収の強化に伴い、観客用も含め分別用ゴミ箱を増設するなど、適正な廃棄物の処理を促進した。また、機材等の整理を進め、不要と判断される物の廃棄に努めたため、産業廃棄物が増加した。

3. ペーパーレス化

事 項	区 分	使用量	対前年度増減
コピー枚数	本館・演芸場	896,356枚	25.2%
	事務棟	1,243,596枚	16.7%
	伝統芸能情報館	231,986枚	1.0%
	能楽堂	200,455枚	△12.8%
	文楽劇場	276,605枚	15.2%
	合 計	2,848,998枚	14.8%

	うち管理部門	921,012 枚	10.1%
コピー用紙 購入枚数	本館・演芸場・事務棟・伝統芸能情報館	2,900,500 枚	1.7%
	能楽堂	323,500 枚	△10.1%
	文楽劇場	451,000 枚	2.9%
	合計	3,675,000 枚	0.7%

- ・ ペーパーレス化促進について、両面コピー、グループウェアの活用等に努めた。

4. グリーン購入法に基づく調達

事務用消耗品を中心に、環境物品等の調達の推進を図るための方針に基づいた物品購入及び複合機の賃貸借を行い、可能な限り環境への負荷の少ない物品等の調達に努めた。

《自己点検評価》

- 良かった点・特色ある点
 - ・ 光熱水量について、概ね前年度程度の実績に抑制することができた。
- 見直し又は改善を要する点
 - ・ コピー枚数について、複合機台数の増加及び各部における会議資料の印刷等により増加した。引き続きコピー枚数及び使用枚数の節減に努め、ペーパーレス化の推進を図る。

<2>給与水準の適正化

1. 給与水準に係る適正化に関する検証結果・取組状況の公表

引き続き給与構造改革を踏まえた給与改定を実施し、国家公務員との給与の比較を行い、ホームページに「独立行政法人日本芸術文化振興会の役職員の報酬・給与等について」を掲載し、給与水準に係る適正化に関する検証結果及び取組状況を公表した（24年度ベース）。

<一般職俸給表適用者との比較（24年度ベース）>

項目	国の一般職俸給表適用者	振興会一般職俸給表適用者
平均年齢	42.8 歳	47.4 歳
学歴（大学卒の割合）	53.4%	81.9%

<他の独立行政法人との比較（24年度ベース）>

項目	全独立行政法人	日本芸術文化振興会
給与総額	6,460 千円	6,662 千円
平均年齢	43.6 歳	47.4 歳
ラスパイレス指数※	106.5	104.1

※ 国の一般職俸給表適用者の給与を 100 としたときの給与水準の指数。

<国からの財政支出>

支出予算の総額に占める国からの財政支出の割合 77.8%

（国からの財政支出額 16,101 百万円／支出予算の総額 20,698 百万円（24年度予算））

2. 効率的な事業遂行のための職員配置及び採用

人員配置については、各部長から要望を広く聞き、適切な人事異動を行うとともに、58 歳以上を対象とした高齢者雇用等、人件費の抑制を踏まえた採用を実施した。

3. 人事・給与制度の検討

(1) 国家公務員の給与見直しに準じた役職員の給与減額改定

国の厳しい財政状況及び東日本大震災に対処する必要性に鑑み、「国家公務員の給与の改定及び国家公務員の給与の臨時特例に関する法律」（平成 24 年法律第 2 号）が成立した。

これに関して、「国家公務員の給与減額支給措置について」（平成23年6月3日閣議決定）及び「公務員の給与改定に関する取扱いについて」（平成23年10月28日閣議決定）において、独立行政法人の役職員の給与については、国家公務員の給与見直しの動向を見つつ、必要な措置を講ずるよう要請された。

振興会においてもこの要請に基づき、平成24年4月1日から平成26年3月31日までの間、臨時特例により役職員の給与を減額して支給する措置を実施している。なお、国家公務員においてこの措置を終了したことを踏まえ、振興会においても、当初の予定通り、平成26年3月31日をもって終了とした。

①臨時特例による役員給与の減額支給（△9.77%）

・減ずる額

本給 …………… 本給月額×9.77%

特別手当（賞与）… 支給額×9.77%

地域手当 …………… 本給月額×地域率〔東京：18% 大阪：15%〕×9.77%

②臨時特例による職員給与の減額支給（平成24年4月から平成26年3月まで）

役職	減額率		
	本給	管理職手当	賞与
課長以上（5-7級）	△9.77%	△10%	△9.77%
課長補佐・係長（3-4級）	△7.77%		
係員（1-2級）	△4.77%		

その他の手当のうち、地域手当、超過勤務手当、制作・演出手当についても支給減額率を乗じて得た額を減額する。

(2) 国家公務員の退職手当見直しに準じた役職員の退職手当減額改定

国家公務員の退職手当の支給水準を引き下げ官民較差の解消等を図るため、国家公務員退職手当法等の一部を改正する法律（平成24年法律第96号）が成立した。

これに関して、「国家公務員の退職手当の支給水準引下げ等について」（平成24年8月7日閣議決定）において、独立行政法人の役職員の退職手当については、国家公務員の退職手当の見直しの動向に応じて、今般の国家公務員の退職手当制度の改正に準じて必要な措置を講ずるよう要請された。

振興会においてもこの要請に基づき、役員については平成25年1月1日適用、職員については平成25年4月1日適用として、国家公務員に準じた改正を実施した。

国		振興会 役員		振興会 職員	
期間	調整率	期間	調整率	期間	調整率
改正前	104/100	改正前	無し(100/100)	改正前	無し(100/100)
H25. 1. 1 ～H25. 9. 30	98/100	H25. 1. 1 ～H25. 9. 30	98/100	H25. 4. 1 ～H26. 3. 31	98/100
H25. 10. 1 ～H26. 6. 30	92/100	H25. 10. 1 ～H26. 6. 30	92/100	H26. 4. 1 ～H27. 3. 31	92/100
H26. 7. 1 以降	87/100	H26. 7. 1 以降	87/100	H27. 4. 1 以降	87/100

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 東京、大阪の大都市に事務所があることや大学卒以上の職員の比率が高いことから、地域と学歴を勘案した対国家公務員比較指数は91.6となっており、比較指標（104.1）は適切な水準にあるといえる。

< 3 > 組織機構の在り方の検討

1. 人員配置の検討、組織機構の在り方の検討

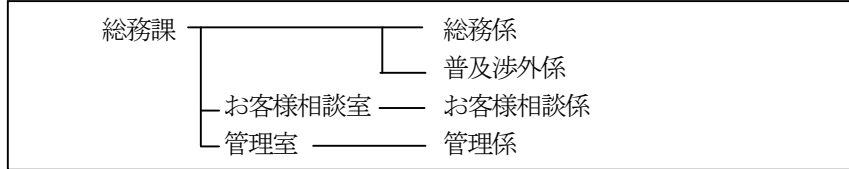
- (1) 業務の質の向上と一層の効率化のための事業実施体制整備について、組織改正の検討を進め、25年4月に以下の組織改正を実施した。

①総務企画部総務課お客様相談室の設置

【改正前】



【改正後】

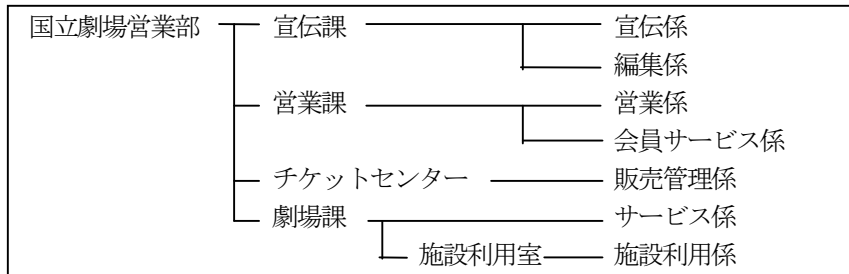
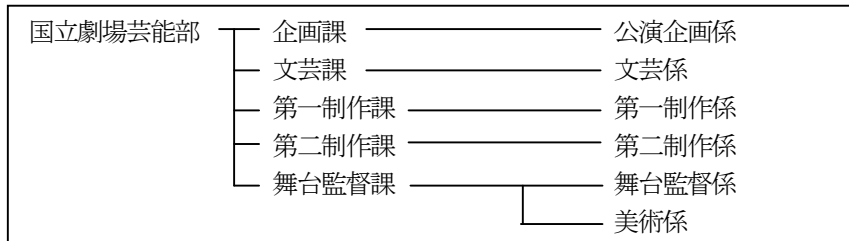


◎ 改正理由

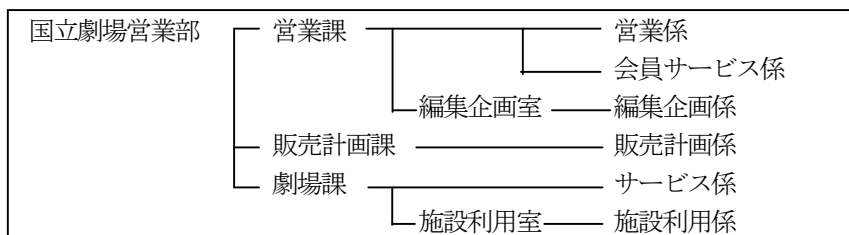
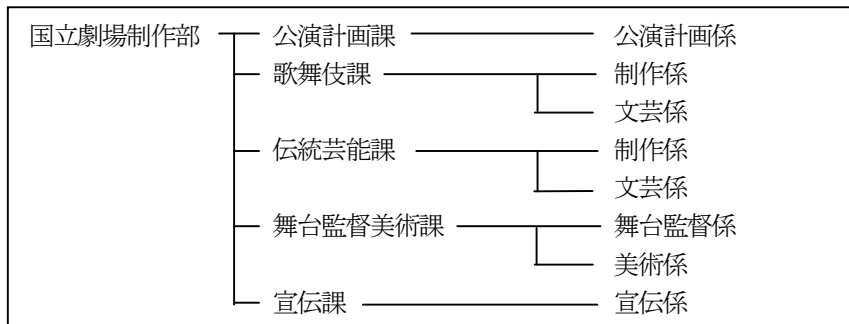
事業全般に対する問い合わせ、苦情、ご意見に総合的に対応し、方針決定・対応のスピードを向上することで、各種事業・サービスの充実と向上を総合的に継続して推進するため。

②国立劇場芸能部文芸課改組、国立劇場営業部宣伝課改組、組織名の変更

【改正前】



【改正後】



◎ 改正理由

文芸課を改組し、第一、第二制作課に各々の文芸係として配置する。歌舞伎の芝居がつくられていくプロセスを理解し、台本の執筆、補綴に役立て、また文楽、舞踊のジャンルでの復曲、復活に対応する。

公演制作及び公演宣伝の指揮命令系統を統一し、より一層効果的で機敏な公演宣伝を推進する。編集企画室を設置し、専門的見地から編集係の業務を処理するとともに、国立劇場オリジナル商品の企画・開発を行う。

また業務内容をより明確に反映させるために、組織名を変更する。

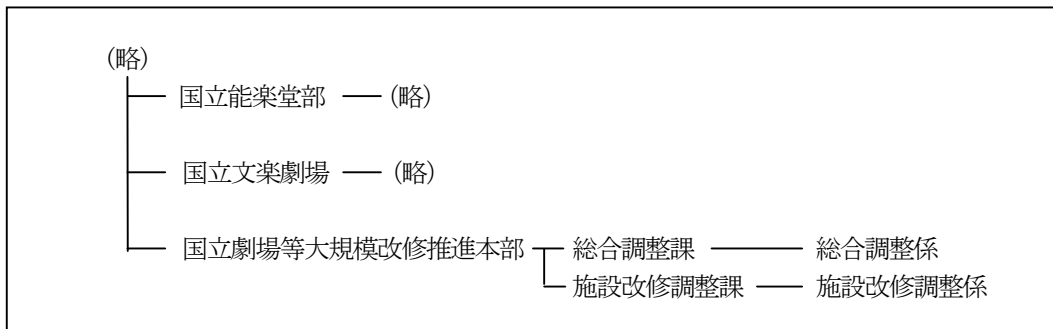
(2) 引き続き組織改正の検討を進め、26年4月に以下の組織改正を実施することとした。

① 国立劇場等大規模改修推進本部の設置

【現行】



【改正後】

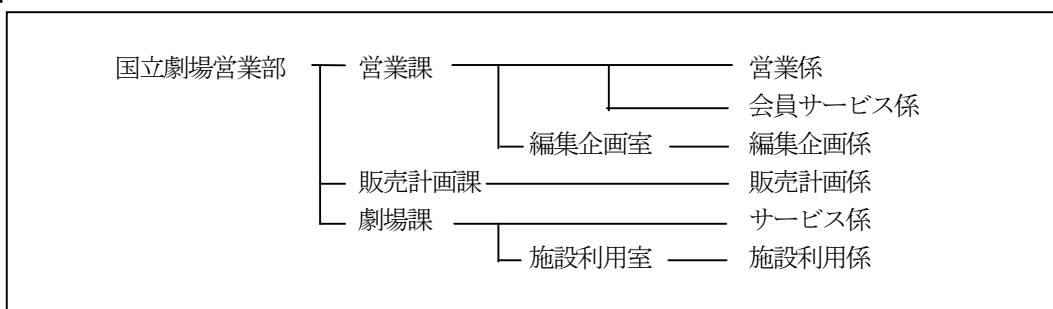


◎ 改正理由

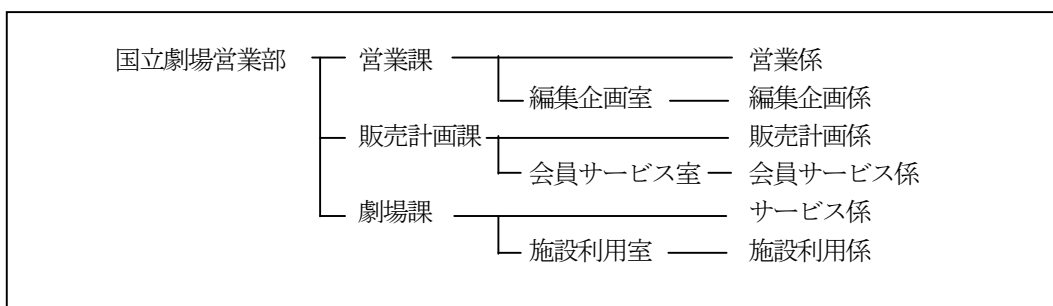
国立劇場等大規模改修プロジェクトの本部機能を担うものとする。

② 国立劇場営業部営業課及び販売計画課の改組

【現行】



【改正後】



◎ 改正理由

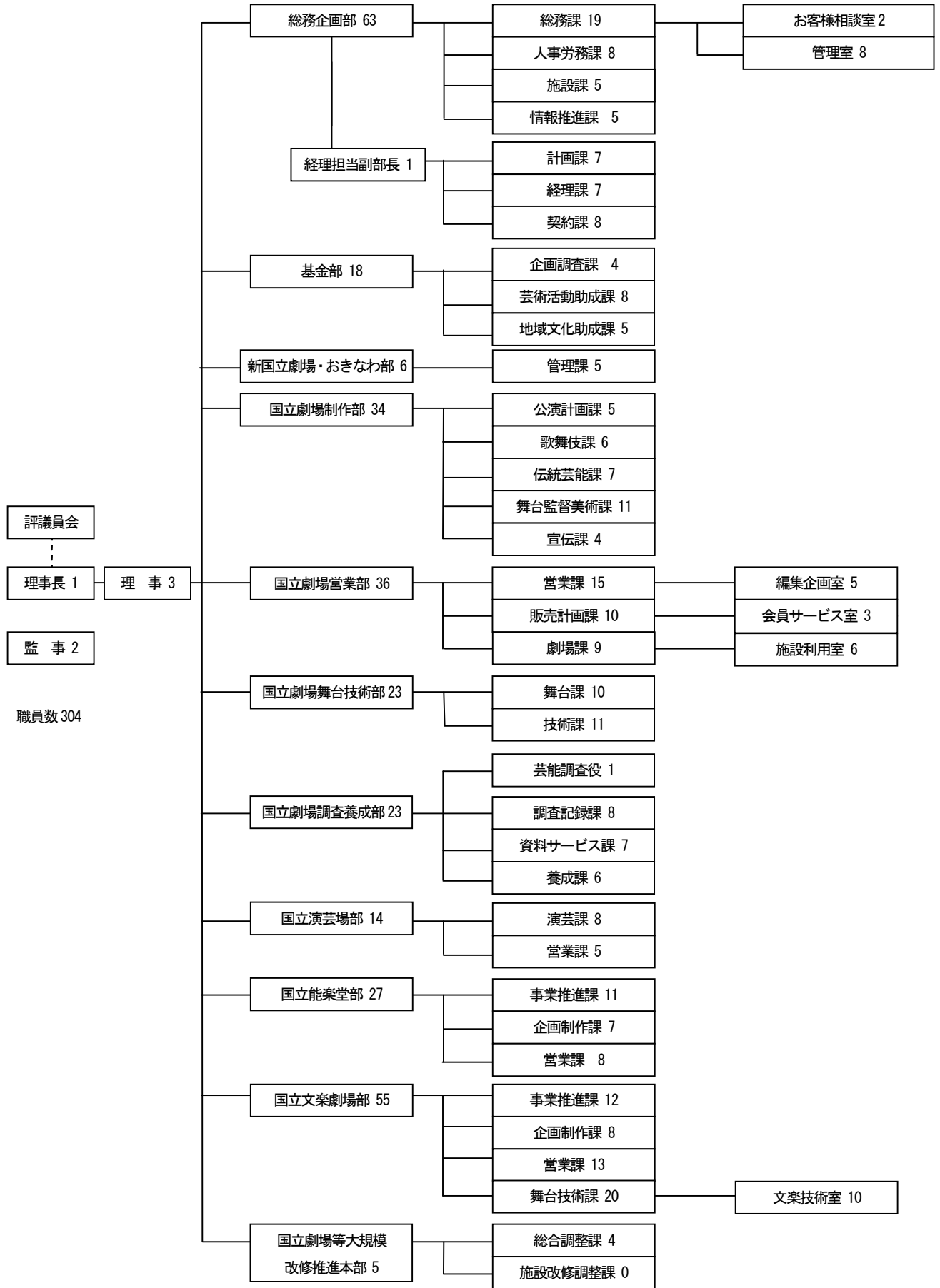
会員向けサービスをより充実させるなど積極的な会員業務を推進し、安定的な観客を確保するための体制を強化する。

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 25年4月より、事業全般に対する問い合わせ、苦情、ご意見に総合的に対応し、方針決定・対応のスピードを向上することで、各種事業・サービスの充実と向上を総合的に継続して推進するために、お客様相談室を設置した。
- ・ 25年4月より、国立劇場芸能部文芸課及び国立劇場営業部宣伝課の改組を行い、公演事業の充実を図るための体制を整え、さらに積極的な会員業務を推進し、安定的な観客を確保するための体制を整えることとした。
- ・ 26年4月より、国立劇場等大規模改修プロジェクトの本部機能を担うための推進本部を設置した。
- ・ 文楽技術室の後継者の育成については、非常勤職員（アルバイト）、嘱託と複数年に渡る採用プロセスをもつことで、本人の適性を十分に見極め、常勤職員として採用することが可能となっている。

[組織図] ※ 数字は職員数



(26年4月1日現在)

< 4 > 保有資産の有効活用

1. 実物資産の保有状況等

(1) 資産の概要と保有目的・利用状況

施設名 (数)	所在地	用途	保有目的及び利用状況
国立劇場 本館・演芸場(1)	東京都 千代田区	劇場施設	<p>伝統芸能の保存・振興を図るための拠点施設として設置され、伝統芸能の公開、伝承者の養成等の事業を安定的、継続的に実施するために必要な施設である。</p> <p>25年度の稼働率の実績は、大劇場 95.4%、本館小劇場 90.7%、演芸場 95.2%、能楽堂 88.2%、文楽劇場 84.6%、文楽劇場小ホール 76.1%、国立劇場おきなわ大劇場 86.2%、国立劇場おきなわ小劇場 80.3% である。</p>
国立能楽堂(1)	東京都 渋谷区		
国立文楽劇場(1)	大阪市 中央区		
国立劇場おきなわ (1)	沖縄県 浦添市		
新国立劇場(1)	東京都 渋谷区	劇場施設	<p>現代舞台芸術の振興・普及を図るための拠点施設として設置されたものであり、現代舞台芸術の公演、実演家の研修等の事業を安定的、継続的に実施するために必要な施設である。</p> <p>25年度の稼働率の実績は、オペラ劇場 98.6%、中劇場 95.7%、小劇場 99.1% である。</p>
新国立劇場舞台美術センター(1)	千葉県 銚子市	保管施設	<p>現代舞台芸術の公演に必要な舞台装置・衣装等を保管し、新国立劇場におけるレパトリー公演を安定的、継続的に実施するために必要な施設であり有効に活用されている。</p>
職員宿舎(8)	東京地区(7) 大阪地区(1)	職員宿舎	<p>東京・大阪に事業所を保有しており、円滑な人事異動など業務上の必要から、安定的かつ継続的に職員宿舎を確保する必要があり、養成研修生の利用も含めた適切な管理運営を図っている。なお借上げ宿舎については23年度に6戸、24年度に3戸、25年度に1戸廃止した。</p> <p>26年4月末現在、保有宿舎全64戸（うち5戸を養成研修生が利用）で入居率は60.9%である。その他、借上宿舎が1施設(1戸)あり、入居率は100%である。（東京地区0、大阪地区1）</p>

- ・ 「独立行政法人の職員宿舎の見直し計画」（平成24年4月3日行政改革実行本部決定）及び「独立行政法人の職員宿舎の見直しに関する実施計画」（平成24年12月14日行政改革担当大臣）に沿った見直しを進めている。23年度に6戸の借上げ宿舎を廃止したことに続き、24年度には東京地区の借上げ宿舎3戸、25年度には大阪地区の借上げ宿舎1戸を廃止した。引き続き、宿舎の適切な管理運営に努めるとともに、入居者の円滑な退去等に配慮しつつ、職員宿舎の削減を図る。このため、宿舎の利用状況（26年4月末時点）は、全体（保有及び借上）で61.5%の入居率となっている。
- ・ 一部の宿舎については、養成研修生への貸与を実施し、宿舎の有効活用を図っている。
- ・ 平成25年度決算において、業務の実績等の状況からサービス提供能力の低下等減損事由に該当する実物資産はない。

2. 金融資産の保有状況

① 金融資産の名称と内容、規模

- ・ 有価証券 10,009,693,444 円
- ・ 投資有価証券 57,464,788,826 円
- ・ 長期性預金 8,300,000,000 円

② 保有の必要性（事業目的を遂行する手段としての有用性・有効性）

芸術文化振興基金については、芸術文化振興基金の運用の基本的考え方を踏まえ、毎年度芸術文化振興基金運用計画を策定し、長期的・安定的な運用を行っているところである。

政府出資金見合いの資金については、「政府出資金見合いの資金及びその運用に関する基準」に従い、伝統芸能の公開事業及び現代舞台芸術の公演事業を安定的に継続するため、可能な限り長期的な運用を行うこととしている。

- ③ 資産の売却や国庫納付等を行うものとなった金融資産の有無、取組状況
該当する金融資産はない。

3. 資金運用の実績

主な資金である芸術文化振興基金の運用実績は以下のとおり。

- ① 運用益 1,713 百万円(当初計画 1,399 百万円、314 百万円の増)
② 利回り 2.59% (当初計画 2.12%)

< 5 > 内部統制の充実・強化

(1) 自己点検評価の実施、外部専門家等からの意見聴取

- ① 24 年度の業務実績に関する自己点検評価について
25 年 2 月～3 月 各公演専門委員会、事業委員会において事業に対する意見聴取を実施
25 年 3 月～4 月 各部において自己点検評価を実施
25 年 4 月～5 月 総務企画部計画課を中心に自己点検評価を取りまとめ
25 年 5 月 10 日 理事長により自己点検評価を決定
25 年 6 月 27 日 評議員会において、24 年度の業務の実績に関する評価を審議・決定
- ② 25 年度の業務の実績に関する自己点検評価について
自己点検評価は膨大な作業量となるため、毎月の業務実施状況について定期的に役員会で報告するとともに、公演事業については四半期ごとに自己点検評価を実施して、作成業務の効率化と内容の充実を図った。

(2) 外部評価委員会における検討・評価、評価結果の公表・事業への反映

- ① 評議員会の開催
第 31 回(6/27)、第 32 回(9/19)、第 33 回(10/17)、第 34 回(3/28)の 4 回開催した。
議 題 等：24 年度評価及び 24 年度決算についての審議、24 年度評価結果についての報告、25 年度計画実施状況の報告、26 年度計画についての審議、国立劇場等大規模改修基本構想案の審議等
- ② 評価委員会の開催
24 年度第 2 回(4/26)、第 3 回(6/14)、第 4 回(6/21)、25 年度第 1 回(10/31)の 4 回開催した。
議 題 等：24 年度評価の実施、24 年度評価についての審議等
- ③ 公演専門委員会、事業委員会、芸術文化振興基金運営委員会の開催
- ・ 公演専門委員会
議題等：25 年度公演状況の報告、26 年度公演計画の説明、26 年度公演計画についての意見聴取等
歌舞伎公演専門委員会 2 回開催 (6 月 19 日・3 月 20 日)
文楽公演専門委員会 (本館) 2 回開催 (6 月 12 日・3 月 19 日)
舞踊公演専門委員会 2 回開催 (6 月 19 日・3 月 24 日)
邦楽公演専門委員会 2 回開催 (6 月 21 日・3 月 28 日)
雅楽・声明公演専門委員会 2 回開催 (6 月 13 日・3 月 19 日)
民俗芸能公演専門委員会 2 回開催 (6 月 18 日・3 月 17 日)
能楽公演専門委員会 2 回開催 (1 月 31 日・3 月 3 日)
文楽公演専門委員会 (文楽劇場) 2 回開催 (5 月 23 日・2 月 28 日)
文楽劇場短期公演等専門委員会 2 回開催 (5 月 31 日・3 月 14 日)
 - ・ 事業委員会
議題等：24 年度評価結果の報告、25 年度の事業実施状況、26 年度事業計画についての意見聴取等
養成事業委員会 1 回開催 (3 月 18 日)

調査事業委員会 1回開催 (3月18日)

- ・ 芸術文化振興基金運営委員会 4回開催 (7月16日・9月11日・1月31日・3月18日)

議題等：26年度助成活動の審査の付託、25年度助成活動の決定、改善意見についての審議等

(3) 内部統制の充実・強化

1. リーダーシップを発揮できる環境の整備状況と機能状況

ア 経営方針表明の機会

「観客第一主義」を掲げる理事長の経営方針は、年頭挨拶等で全役職員に表明、周知されている(館内テレビモニターを使い、会場に参集できない職員にも周知)。また、ホームページ、公演プログラム等の挨拶文等を通し一般に対しても広く周知されている。

イ 予算・財務関係の統制

年度予算計画については、法人全体の予算をまとめた段階で理事長に内容を報告し、助言・指示を仰いだ上で、最終的には理事長を含めた役員会の承認により決定している。これにより、法人全体の視野に立った効率的な予算運用がなされている。

ウ 組織・人事関係の統制

人事計画策定や組織体制についての案件は、常に理事長、担当理事、担当部長と綿密に協議と調整を行っている。これにより、懸案事項やリスクへの迅速な対応が図られている。

エ 権限の委任

役員は、辞令により担当部が明確に分掌されている。会計機関については「独立行政法人日本芸術文化振興会会計規程実施細則」により、契約担当役、出納命令役、出納役、分任契約担当役、分任出納命令役及び分任出納役の分掌体制が採られている。また、文書専決者については「独立行政法人日本芸術文化振興会文書専決細則」に分掌が規定されている。以上の諸制度、規程により、機能的な組織統制が図られている。

オ 補佐体制

総務企画部担当理事および総務企画部総務課総務係が補佐部局となり、理事長の指示、要望を受け、内容により関係部門と連絡調整を行い、必要な場合その報告、取りまとめを行っている。

2. 組織にとって重要な情報等についての把握状況

ア 役員会

中期計画、年度計画の遂行に関わる、目標達成状況、収支状況、予算執行状況は役員会において定期的に理事長に報告され、現状把握に基づいた理事長からの指示により各部署は対策を案出し、目標の達成が図られ、その状況は随時役員会で報告されている。

イ 連絡体制

各部署の管理職から理事長への連絡体制を設けており、法人内外で支障事案が発生した場合に、即応できるようにしている。

ウ 苦情情報の把握

利用者から寄せられた要望・苦情、それに対する回答内容は、理事長へ報告の上、全職員へ館内LANによる周知を行っている。これにより、問題意識の共有と、サービスの向上が図られている。平成25年度には、対応に係る調整及び総括を行う部門として総務課に「お客様相談室」を設置し、より体制を強化した。

3. 役職員に対するミッションの周知状況及びミッションを役職員により深く浸透させる取組状況

ア 経営方針の表明、周知

上記1-アの通り、年頭挨拶等において理事長による経営方針が全職員に直接表明されている。

イ 定期的な会合

役員と全部長が集まることが可能な毎月の役員会の前に、理事長、全理事、総務企画部長と会合し対話を図っている。

ウ 理事長研修

理事長が、自ら講師となって職員研修を実施し、法人の長としての立場から対話を図っている。理事長の考えを直接伝えるとともに、質疑応答を通して職員の個々の意見も聴取している。

4. 組織全体で取り組むべき重要な課題(リスク)の把握状況

ア リスクに対する考え方

公共性が非常に高い劇場施設を運営しているため、安定した業務サービスの維持及びその向上や観客や利用者からの信頼確保を最優先事項とし、それらを阻害する要因をリスクととらえている。

イ 監事監査におけるリスクの把握

毎年度の監事監査において、各部より部が抱えているリスクを監査項目として事前に報告を得、監査において各部と対応や検討を協議することで把握を図り、部単位で整理、対応している。

理事長は監査計画立案時、実施時、意見集約時、報告時において監事と綿密に連携し、リスクの存在を把握している。

5. 組織全体で取り組むべき重要な課題（リスク）に対する対応状況

以下、法人が把握する主なリスクとその対応状況を挙げる。

ア 観客、施設利用者のレピュテーション（評判）リスク

利用者から寄せられた要望・苦情、それに対する対応について、理事長への報告から全職員への周知までの一連の流れをスキーム化し、確実な問題意識の共有を図っている。

イ 職員の専門性確保上のリスク

舞台芸術の公演や調査研究など特殊性の高い業務については、退職等により専門技能の断絶が起きるリスクが存在する。職員の専門性を継続的に確保するため、新規採用職員に対する公演研修をはじめ、各種職員研修を計画的に実施している。また、振興会全体の業務を理解させることを目的として、各職域の職員が講師となり業務内容を教示する業務研修を25年度より実施している。

ウ 自然災害等に関するリスク

地震に対する安全を確保するため、東日本大震災の経験を踏まえた実効的なマニュアルの策定を進めている。

6. 未達成項目（業務）についての未達成要因の把握・分析・対応状況

ア 役員会における業務報告

担当各部は月次又は四半期ごとに事業の実施状況を取りまとめ、役員会で報告している。これにより、年度計画の実施状況が逐次把握されている。

イ 年度計画・自己点検評価への反映

前年度評価での指摘事項を計画の未達成項目としてとらえ、当年度の年度計画に反映するとともに、自己点検評価に指摘と対応結果を併記することにより、対応状況の確実な把握に努めている。

7. 内部統制のリスクの把握状況とその対応状況

ア 法令遵守の徹底

法令遵守はリスク低減の基礎をなすものであり、法令を踏まえた内部規程を適時制定して実施基準を示している。また、関係法令、諸規程、業務方法、手順、実施基準、書式等を内部ホームページに掲載し、法令遵守の徹底を図っている。

イ 情報伝達のリスクへの対応

理事長に現場の問題が伝達されないリスクを回避するため、前記2-ウの苦情情報の把握、3-イの定期的な会合、3-ウ理事長研修など、利用者や現場職員から直接情報を聴取できるルートを保持している。

ウ 組織構造上のリスクへの対応

いわゆる「タテ割」の弊害を回避するため、部署を超えて対処が必要な案件については、臨時部長会等の招集や検討チームの設置を行い、迅速な対応を図っている。

8. 監事監査における法人の長のマネジメントに関する監査状況

ア 年間を通じての監査

監事は、月2回開催の役員会他、重要会議に出席し理事長への提言、意見交換を行っている。また、重要な決裁文書を開覧し執行状況を監査、必要に応じ役員会への聴取を行い、意見を理事長に提出している。

9. 監事監査における改善点等の法人の長、関係役員に対する報告状況

ア 監事監査における検討希望事項の提出

定期監査報告とは別に、監査の過程で生じた検討事項、提案事項を取りまとめ、理事長宛に文書で提出している。

10. 監事監査における改善事項への対応状況

ア 対応状況の取りまとめと周知

監事監査における改善事項は、各部署に検討を求め、各部署はその後の年度計画等策定に当たって反映させるなどの対応を行っている。また、各部署の対応状況を取りまとめの上、報告書の形で役職員に周知している。

11. 監事監査・内部監査の実施状況

ア 監査に係る規程の整備状況

(1) 監事監査

①独立行政法人日本芸術文化振興会監事監査要綱（平成15年10月1日 独立行政法人日本芸術文化振興会監事裁定）

◎監査に関する基本的事項の定め（第1条）

②独立行政法人日本芸術文化振興会監事監査実施基準（平成15年10月1日 独立行政法人日本芸術文化振興会監事裁定）

◎監査の手続き等に関する事項の定め（第1条）・・・監査マニュアル

③独立行政法人日本芸術文化振興会監事監査要領（平成15年10月1日 独立行政法人日本芸術文化振興会監事裁定、平成17年4月1日改正）

◎監査項目、目的、着眼点等の定め・・・監査チェックリスト

（監査に当たってはさらに詳細なチェックリストを別途作成）

(2) 内部監査

①独立行政法人日本芸術文化振興会内部監査要綱（平成15年10月1日 独立行政法人日本芸術文化振興会理事長裁定、平成21年4月1日改正）

②監査事項及び監査手順の準用（監査マニュアル）

監事監査実施基準第2、3条の規定を準用（内部監査要綱第5、6条）

③監査チェックリスト

監査要領等を参照し、その都度監査員により作成する。

イ 監査体制の整備状況

(1) 監事監査

①監事（文部科学大臣任命）：2名（専任：常勤1名・非常勤1名）

②監査の事務補助（監事監査要綱第6条）：6名（兼務：課長1名・室長1名・係長2名・主任2名）

(2) 内部監査

①監査員（内部監査要綱第4条）：役員又は職員のうちから2名以上

・1月～2月実施業務監査及び会計監査

・9名（兼務：課長1名・課長補佐1名・係長1名・主任3名・主事2名・技師補1名）

②総括及び調整等（内部監査要綱第11条）監査の実施に関する事務（監査員が行う事務を除く。）

業務監査：総務企画部長

会計監査：経理担当副部長

総括及び調整：総務企画部長

ウ 監査実績

(1) 監事監査の実績

①監事監査の概要

独法移行後（平成15年10月以降）各年度において、役員会（月2回）その他重要な会議に出席するほか、役職員から事業の報告を聴取し、重要な決裁書類等を閲覧した。また、国立劇場本館及び主要な施設において、業務の効率化を含む業務全般及び財産の状況を調査した。さらに、会計監査人から会計監査人の監査方法及びその結果について説明を受け、会計帳簿等の調査を行い、財務諸表、事業報告書及び決算報告書について検討を加え、いずれも適正であることを確認するとともに、業務の執行に関する法令遵守等の状況についても確認した。

②定期監査スケジュール、報告書、指摘事項等

○監事監査計画作成（平成25年4月25日）→ 提出先：理事長（写しを文部科学大臣へ提出）

○定期監査（5月～6月）

実地監査 8日間（8日×（監事2+補助6）=64人日）

・各部資料提出

- ・資料精査
- ・各部ヒアリング
- ・別途、補助監査による監査。報告を受ける。

会計監査人の監査報告聴取

「監事監査報告書」作成 → 財務諸表に添付 → 文部科学大臣へ

- 「監事監査における検討希望事項」(11月18日) → 提出先：理事長
監査報告書に記載すべき事項の他に、監査の過程で生じた検討事項・提案事項
についての報告書
＜指摘事項(7項目)＞
 - ・入札・契約について
 - ・スペシャリストの育成の方策と課題について
 - ・労務管理について
 - ・新規事業の実施状況(内容及び成果)について
 - ・基金部の状況(助成)について
 - ・集客について
 - ・内部統制の見直しと強化
- 「検討希望事項」の措置状況調査(報告：平成26年3月31日)
 - ・各部資料要求
 - ・必要に応じてヒアリング

③ その他の監査

- 役員会(月2回開催)等重要会議への出席。聴取、意見交換等
- 重要な書類等の回付
- 合計残高試算表(月末)の回付
- 必要に応じた臨時監査(関係役職員からの聴取等)

④ 会計監査人との連携

- 会計監査人からの監査計画の説明(平成25年11月28日)
 - 会計監査人からの監査報告(平成26年6月予定)
- ※平成15-16年度：中央青山監査法人、平成17-25年度：監査法人トーマツ

⑤ 「独立行政法人、特殊法人等監事連絡会」総会及び第9部会への参加

総務省の働きかけにより、各法人の監事の任意の参加による会議

総会・部会(振興会は第9部会に所属)年間各1回 3月11日・総会、1月30日・第9部会

(2) 内部監査の実績

① 内部監査の概要

内部監査要綱に基づき25年度も内部監査を実施した。

② 監査スケジュール、報告書、指摘事項等

＜1月～2月実施業務監査及び会計監査＞

○内部監査計画の通知：平成25年11月27日 ※同日、監事へ通知

○監査対象部門：全部署(総務企画部、基金部、新国立劇場・おきなわ部、制作部、営業部、舞台技術部、調査養成部、演芸場部、能楽堂部、文楽劇場部)

○監査項目：勤務時間の管理状況

旅行命令、旅費の状況

法人文書の管理状況

物品・役務等、調達手続きの状況

物品の管理状況

切手、はがきの管理状況

その他必要な事項

○実地監査実施：平成26年1月27日から平成26年2月19日の間の9日間

(9日×(監査総括兼業務監査所掌1名+会計監査所掌1名+監査員9名)=99人日)

- ・書類、帳簿等の実査
- ・必要に応じて担当者からヒアリング

- 内部監査報告書及び事務連絡「平成 25 年度独立行政法人日本芸術文化振興会内部監査結果に基づく事務処理の適正化及び改善を要する事項について」を通知（平成 26 年 3 月 17 日）し、事務処理の適正化と改善を図った。

（指摘事項）

- ・ 調達手続きの適正化、物品管理の適正化 等

エ 監査内容

(1) 監事監査の内容

各部に対し「監査計画」、「監査事項」及び「補助監査事項」を提示し、資料の提出と内容の聴取、実査を実施している。監査事項は毎年度見直し、継続して監査する事項、新規に監査する事項等精査を行っている。

(2) 内部監査の内容

各部に対し「内部監査計画」を提示し、計画に基づき資料の提出と内容の聴取、実査を実施している。監査事項は毎年度見直し、継続して監査する事項、新規に監査する事項等精査を行っている。

12. その他内部統制

(1) コンプライアンス体制整備（倫理行動規程の策定状況等）

①独立行政法人日本芸術文化振興会役員倫理規程（平成 15 年 10 月 1 日制定・平成 21 年 4 月 1 日改正）

- ・ 振興会職員としての自覚、倫理の保持
- ・ 利害関係者との接触の制限（金銭等の受領や供応接待等）
- ・ 贈与等報告書の提出、保存及び閲覧

役員及び管理職職員が 1 件につき 5 千円を超える報酬をうけた場合に提出。保存は 5 年間、また閲覧の請求があれば、何人に対しても閲覧させる（1 件につき 2 万円を超える部分）

②業務改善体制の整備及び取組事例

- ・ 役員研修（25 年度は理事長、調査養成部等担当理事）を行い、トップダウンによる業務への意識付けを図った。
- ・ 管理職研修を行い、管理職員にマネジメントの方法及び部下指導の方法を習得させることで、職場の成果を向上させるとともに職員のモチベーション向上を図った。
- ・ 情報セキュリティ研修を行い、情報管理に対する意識付けを図った。

③コンプライアンス体制の整備及び取組事例

- ・ 現金取扱いに関する規程を整備した。
- ・ セクシャルハラスメント防止研修や入札手続・現金取扱いについての経理業務研修等の内部研修を行い、職員全体に対して法令遵守の意識付けを図った。
- ・ 下記外部研修への参加により、当該部署の職員に対して法令遵守の意識付けを図った。

情報公開・個人情報保護制度の運用に関する研修会（総務省行政評価局）、公共工事入札契約適正化法等に関する講習会（文部科学省文教施設企画部）、環境確保条例に基づく総量削減義務と排出量取引制度管理者等講習会（東京都環境局）、平成 25 年度図書館等職員著作権実務講習会（文化庁）、平成 25 年度著作権セミナー（文化庁）

(2) 職員の積極的な貢献を促す取組事例

- ・ 勤務評価の実施

人事異動や職員の定期昇給の区分を決定するための基礎を成すものであり、勤務実績が給与へ適正に反映されることとしている。

(4) 情報開示の推進

1. 分かりやすく説明する意識の徹底

独立行政法人に対して国民の厳しい視線が向けられている現状に対応して、振興会の実施する事務事業に対する国民の理解が得られるよう、役員会等において、職員が国民に対し丁寧に分かりやすく説明する意識を引き続き持つよう徹底を図った。

2. 情報提供の迅速化

ホームページ利用者に速やかに正確な情報を提供することは、振興会の実施する事業の成否にも関わることから、

役員会等重要会議で繰り返し検討し、業務改善に努めている。特に迅速さを求められる公演情報については、担当者の直接入力と責任者の認証機能を備えた公演情報管理システムを活用し、利用者へ速やかかつ正確に情報提供を行っている。また、内部ホームページにマニュアルを掲載して職員に周知を図り、情報の誤謬等が生じないよう体制の整備を図っている。

3. 情報公開への対応

「独立行政法人等の保有する情報の公開に関する法律」に基づき、情報公開に対応している（25年度は開示請求なし）。

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 事業の実施状況について、担当各部が月次又は四半期ごとに取りまとめることにより、効率的に年間の自己点検評価を行うことができた。文部科学省独立行政法人評価委員会、振興会評価委員会等において行われる評価の結果については、公表するとともに、可能な限り事業内容の改善等に反映させた。また、公演専門委員会等において各分野の専門家から意見聴取を行い、今後の事業への反映を図った。
- ・ 養成事業委員会において、今後の養成事業に反映を図るため、通例議題の事業実施状況・事業計画に加えて、年度評価結果報告並びに中期目標期間に係る評価結果報告についても議事を含め、数年来の養成事業の状況を提示するとともに、養成事業に関して受けた評価の要点を説明し、中期的な計画の観点からも外部識者から意見聴取ができた。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・ 情報公開担当窓口における開示・不開示の判断には、最新の答申や判例の活用を行い、担当者は関連する講習会等にも積極的に参加するなど、情報公開の適切な実施に向けてより一層努める。

<6>効率化に関する目標の達成状況

<中期計画>

(1) 一般管理費等の削減

運営費交付金を充當して行う業務について、24年度予算を基準として中期目標期間中に、退職手当、特殊要因経費を除き、一般管理費などの事務的経費については15%以上、事業費についても毎事業年度につき1%以上の効率化を図る。

<実績>

1. 一般管理費

以下の数式により効率化の達成状況を計っている。

A: 平成24年度の一般管理費予算額（退職手当を除く）

※運営費交付金算定の基礎となった額

B: 当該年度の一般管理費決算額（退職手当を除く）

増減比率：(B-A) ÷ A

(単位：百万円、%)

区分	種別	25年度
基準額(A)	一般管理費	513
	人件費	537
	計	1,050
金額(B)	一般管理費	276
	人件費	617
	計	893
増減比率		△15%

2. 事業費

以下の数式により効率化の達成状況を計っている。

A: 前年度の事業費予算額(退職手当を除く)

※運営費交付金算定の基礎となった額

B: 当該年度の事業費決算額(退職手当を除く)

増減比率: $(B-A) \div A$

(単位: 百万円、%)

区分	種別	25年度
基準額(A)	事業費	6,915
	人件費	1,836
	計	8,751
金額(B)	事業費	6,537
	人件費	1,672
	計	8,209
増減比率		△6%

Ⅲ 予算

予算 p.264

- 財務状況（予算・収支計画・資金計画） p.264
- 剰余金 p.266
- 運営費交付金債務 p.266
- 積立金の状況 p. 267
- 外部資金の獲得状況 p. 267
- 短期借入金 p. 267

Ⅳ その他主務省令で定める業務運営に関する事項

その他主務省令で定める業務運営に関する事項 p.269

- 人事に関する計画 p.270
- 施設・設備に関する計画 p.272
- 運営委託（国立劇場おきなわ・新国立劇場） p.273

Ⅲ 予 算

《中期計画》

Ⅲ 予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画および資金計画

収入面に関しては、実績を勘案しつつ、国民の鑑賞機会の確保と芸術活動の独創性等に十分留意した上で劇場入場料等自己収入の増加を図ることや税制措置を活用した寄附金の確保等により、計画的な収支計画による運営を図る。

また、管理業務の効率化を進める観点から、各事業年度において、適切な効率化を見込んだ予算による運営に努める。

《方 針》

収入面に関しては、実績を勘案しつつ、外部資金等を積極的に導入することにより、計画的な収支計画による運営を図る。また、管理業務の効率化を進める観点から、各事業年度において、適切な効率化を見込んだ予算による運営を図る。

《実 績》

1. 財務状況

(1) 予算

（単位：千円）

区分	計画額	実績額	増△減
収 入			
運営費交付金	9,432,864	9,432,864	0
文化芸術振興費補助金	3,851,464	3,838,215	△13,249
施設整備費補助金（注1）	222,359	1,671,395	1,449,036
助成事業収入（注2）	1,423,355	1,747,758	324,403
公演事業収入（注3）	2,697,632	2,564,906	△132,726
研修事業収入	33,762	31,930	△1,832
調査研究事業収入	10,186	13,060	2,874
国立劇場おきなわ事業収入	2,235	2,073	△162
新国立劇場事業収入	256,765	257,535	770
受託事業収入（注4）	0	6,900	6,900
一般管理収入	24,816	10,784	△14,032
計	17,955,438	19,577,420	1,621,982
支 出			
文化芸術振興費（注5）	3,851,464	3,696,701	154,763
施設整備費（注1）	222,359	1,672,392	△1,450,033
助成事業費（注6）	1,463,603	1,325,088	138,515
公演事業費（注7）	5,527,656	5,126,937	400,719
研修事業費	399,851	360,409	39,442
調査研究事業費	715,211	652,089	63,122
国立劇場おきなわ事業費	677,399	684,736	△7,337
新国立劇場事業費（注8）	4,182,463	4,116,354	66,109
受託事業費（注4）	0	5,425	△5,425
一般管理費（注9）	915,432	992,938	△77,506
計	17,955,438	18,633,069	△677,631

主な増減理由

- （注1）平成24年度補正予算事業の繰越執行による増
- （注2）芸術文化振興基金運用収入の増
- （注3）劇場入場料の減
- （注4）受託事業の増

- (注5) 助成金の減額・要望の取下げによる支出減
(注6) 助成金の減額による支出減
(注7) 出演費・舞台費等の公演費の減、施設整備事業の翌年度への繰越による支出減
(注8) 施設整備事業の翌年度への繰越による支出減
(注9) 退職手当の増

(2) 収支計画

(単位：千円)

区 分	計画額	実績額	増△減
費用の部			
基金助成事業費(注1)	5,315,000	5,017,407	△297,593
公演事業費(注2)	5,225,000	4,925,048	△299,952
研修事業費	343,000	358,398	15,398
調査研究事業費	608,000	590,484	△17,516
国立劇場おきなわ公演等事業費	658,000	660,965	2,965
受託事業費	0	5,425	5,425
新国立劇場公演等事業費	3,876,000	3,888,461	12,461
一般管理費	876,000	929,549	53,549
減価償却費(注3)	1,234,000	1,069,578	△164,422
固定資産除却損	0	1,761	1,761
計	18,135,000	17,447,076	△687,924
収益の部			
基金助成事業収入	5,314,000	5,457,418	143,418
公演事業収入	5,226,000	5,113,716	△112,284
研修事業収入	343,000	359,384	16,384
調査研究事業収入	608,000	618,285	10,285
国立劇場おきなわ公演等事業収入	658,000	669,350	11,350
受託事業収入	0	6,900	6,900
新国立劇場公演等事業収入	3,876,000	3,962,537	86,537
一般管理収入	876,000	992,934	116,934
資産見返運営費交付金戻入(注3)	1,234,000	706,946	△527,054
資産見返寄附金戻入	0	10,152	10,152
計	18,135,000	17,897,622	△237,378
純利益	0	450,546	450,546
積立金取崩額	0	0	0
総利益	0	450,546	450,546

主な増減理由

- (注1) 基金助成事業の減
(注2) 出演料、舞台費等の公演費の減
(注3) 取得資産の減少等

(3) 資金計画

(単位：千円)

区 分	計画額	実績額	増△減
資金支出	23,110,000	52,542,874	29,432,874
業務活動による支出(注1)	16,901,000	36,762,446	19,861,446
投資活動による支出(注2)	1,054,000	9,237,436	8,183,436
財務活動による支出(注3)	0	311,499	311,499
国庫納付による支出(注4)	0	585,039	585,039
翌年度への繰越金	5,155,000	5,646,454	491,454
資金収入	23,110,000	52,542,874	29,432,874
業務活動による収入	17,733,000	38,038,970	20,305,970
運営費交付金による収入	9,433,000	9,432,864	△136
文化芸術振興費補助金による収入	3,851,000	3,838,215	△12,785

公演事業による収入	2,945,000	2,795,651	△ 149,349
受託事業による収入	0	27,069	27,069
基金運用による収入	1,398,000	1,731,564	333,564
その他の収入（注5）	106,000	20,213,607	20,107,607
投資活動による収入	222,000	9,359,743	9,137,743
施設整備費補助金による収入	222,000	1,727,595	1,505,595
その他の収入（注6）	0	7,632,148	7,632,148
財務活動による収入	0	785	785
民間出えん金受入れによる収入	0	785	785
前年度よりの繰越金	5,155,000	5,143,376	△11,624

主な増減理由

- (注1) 有価証券、投資有価証券の取得による支出増
(注2) 有価証券、投資有価証券の取得による支出増
(注3) リース債務の返済による支出
(注4) 第二期中期目標期間終了に伴う国庫納付
(注5) 有価証券の償還、投資有価証券の償還による収入増
(注6) 定期預金の払戻、投資有価証券の償還、長期性預金の払戻による収入増

2. 剰余金

(1) 損益計算の結果、25事業年度の当期純利益は450,546千円である。

(2) 利益が生じた主な理由

[収入支出決算]

① 助成事業において、462,918千円の収支差増が生じた。その主な内容は次のとおり。

(増要因)

- ・ 助成事業収入のうち基金運用収入の333,010千円の収入増
- ・ 助成事業費のうち助成金の減額による65,380千円の支出減
- ・ 助成事業費のうち業務委託費などの業務経費の67,270千円の支出減

(減要因)

- ・ 助成事業収入のうち交付決定取消等による過年度助成金返還の減による7,800千円の収入減

② 公演事業において、267,993千円の収支差増が生じた。その主な内容は次のとおり。

(増要因)

- ・ 公演事業収入のうち劇場使用料収入の25,504千円の収入増
- ・ 公演事業費のうち歌舞伎公演、文楽公演などの公演費の136,758千円の支出減
- ・ 公演事業費のうち解説書作成費などの附帯事業費の53,568千円の支出減

(減要因)

- ・ 公演事業収入のうち歌舞伎公演、文楽公演などの劇場入場料収入の131,596千円の収入減
- ・ 公演事業収入のうち解説書収入などの附帯事業収入の15,398千円の収入減

③ 新国立劇場事業において、運営費交付金を財源とする施設整備事業の翌年度への繰越などによる66,879千円の収支差増が生じた。

④ 一般管理費において、自己都合退職に伴う退職金の48,438千円の支出増が生じた

[損益計算]

- ⑤ 自己財源で取得した資産の減価償却により35,416千円の費用の増となった。
⑥ 前期未収収益より今期末収収益が減少したことにより18,811千円の収益の減となった。

3. 運営費交付金債務

(1) 26年3月31日現在における運営費交付金債務残高は301,482千円である。(単位：千円)

区分	期首残高/受入額	費用進行基準による振替額	会計基準第81第3項による収益化額	期末残高
平成25年度運営費交付金	9,432,864	9,131,382	0	301,482
計	9,432,864	9,131,382	0	301,482

(2) 期末残高のうち繰り越して執行する運営費交付金債務の主な内容は次のとおりである。

(平成 26 年度執行予定)

- ・施設改修工事 (66,408 千円)
- ・舞台設備改修工事 (135,263 千円)
- ・情報基盤整備 (24,180 千円)

4. 積立金の状況

(単位：千円)

区分	期首残高	当期増加額	当期減少額	期末残高
通則法 44 条 1 項積立金	70,803	1,311,737	1,382,540	0
前中期目標期間繰越積立金	762,943	797,501	762,943	797,501
計	833,746	2,109,238	2,145,483	797,501

※ 通則法 44 条 1 項積立金の当期増加額は前中期目標期間最終年度の未処分利益 548,794 千円及び前中期目標期間繰越積立金の使用残高 762,943 千円の振替によるものであります。当期減少額のうち、今中期目標期間の業務の財源として繰越の承認を受けた額は 797,501 千円であり、前中期目標期間繰越積立金に振替え、それを除いた 585,039 千円については国庫に納付しております。

5. 外部資金の獲得状況 (58 件、28,403 千円)

- ・新作能「紅天女」の公演制作受託収入 (1 件、6,900 千円)
- ・文化庁芸術祭主催公演等における負担金による収入 (10 件、18,646 千円)
- ・芸術文化復興支援基金への募金 (36 件、2,072 千円)
- ・芸術文化復興基金に対する民間出せん金 (11 件、785 千円)

6. 短期借入金

なし

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

21 年度より文化庁から振興会に移管された文化芸術振興費補助金による助成事業については、トップレベルの舞台芸術創造事業及び映画製作への支援として、371 団体に対し 3,613,700 千円の助成を行った。

芸術文化復興基金による助成事業においては、基金管理運用について、安全性を重視するとともに安定した収益の確保によって継続的な助成が可能となるよう資金内容及び経済情勢の正確な把握に努めた。再運用に当たっては安定した収入を確保するとともに資産の安全性を重視し、少しでも有利な運用を行えるよう多くの金融機関から情報収集を行った。その結果、基金運用収入が計画に対し 333,010 千円の増額となった。

自己財源による公演事業については、本館大小劇場の劇場入場料の実績額が予算を下回り、劇場入場料収入全体で 131,596 千円の減収となり、また解説書売上等の附帯事業収入についても 15,398 千円の減収となった。しかしながら、出演者や舞台装置等の公演内容の質を維持しつつ公演費の節減に努めたことにより、公演費や附帯事業費において 190,326 千円の支出減とし、また劇場使用料収入の 25,504 千円の収入増により、全体で 47,576 千円の収支差増となった。なお、運営費交付金等も含めた公演事業全体では、運営費交付金を財源とする施設整備事業の翌年度への繰越などによる支出減があったため、267,993 千円の収支差増となった。

また、前年度に引き続き、外部資金の獲得を推進し、新作能「紅天女」の公演制作受託収入を 6,900 千円、文化庁芸術祭主催公演、歌舞伎鑑賞教室静岡・神奈川公演、東京発・伝統 WA 感動実行委員会主催公演等の共催等収入を 18,646 千円獲得した。

施設整備費については、24 年度補正予算対象事業及び 25 年度補正予算対象事業について、当初計画から設計内容及び調達計画等を見直す必要が生じたため、翌年度繰越となった。

○ 見直し又は改善を要する点

今後はより一層の劇場入場料、施設使用料の増収を図るとともに、外部資金の獲得を積極的に進め、また、より一層、効率的な予算執行に努め、適切な財務内容の実現を図る。

【評価】

(文科省評価委員会)

- ・ 職員宿舎に関しては、平成 22 年度から年々減少している。廃止の決定がなされていない宿舎についても、状況に応じて適時方針を見直す等、対応されたい。(①)

(振興会評価委員会)

- ・ 現代舞台芸術の公演事業については、入場料収入の増収を図るとともに、採算性を考慮した公演制作費の見直しも検討を続けてほしい。オペラの収支差は、前年度に比べ大幅に改善しており評価する。今後も自主制作を基本としつつ、一部レンタル公演、共同制作などを取り入れて、収支差の改善を進めていくことが必要である。(②)

【対応】

①職員宿舎の継続的見直し

「独立行政法人の職員宿舎の見直しに関する実施計画（平成 24 年 12 月 14 日行政改革担当大臣）」において、職員宿舎の見直しに向けた措置を推進するように要請されており、これを踏まえ、職員宿舎の廃止に向けた措置を計画的に講じている。廃止の決定がなされていない宿舎については、今後の国の方針を踏まえ、必要な措置を講じる。

②現代舞台芸術の収支改善の取組

現代舞台芸術の公演事業における収支改善については、これまでも不断に見直しを行ってきている。引き続き、収支両面で改善に取り組み、支出の面においては、制作等業務の効率化やレンタル公演（25 年度にオペラ「死の都」、26 年度にオペラ「マノン・レスコー」を上演予定）の実施、共同制作の可能性の追求等によって削減に努め、一方、収入の面においては、営業・宣伝活動の一層の充実に努め、各種セット券の提供や会員・一般・団体の各販売チャンネルに応じた営業活動の展開、多面的な情報発信の強化等により入場者数と入場料収入の増加を図る。

IV その他主務省令で定める業務運営に関する事項

《中期計画の概要》

IV 短期借入金の限度額

短期借入金の限度額は、10億円。

短期借入金が想定される理由は、運営費交付金の受入の遅延が生じた場合である。

V 不要財産又は不要財産となることが見込まれる財産

不要財産又は不要財産となることが見込まれる財産の処分に関する計画はない。

ただし、これらの財産が生じた場合は、その処分等に関する計画を定めることとする。

VI 重要な財産の処分等に関する計画

重要な財産を譲渡、処分する計画はない。

VII 剰余金の使途

決算において剰余金が発生したときは、次の経費等に充てる。

- 1 助成事業の充実
- 2 公演事業の充実
- 3 伝統芸能伝承者養成事業・現代舞台芸術実演家等研修事業の充実
- 4 調査研究・資料の収集活用・公演記録の作成活用等事業の充実
- 5 研修器具、芸能資料等の購入・修理
- 6 観劇者サービス、情報提供の質的向上、老朽化対応等のための施設・設備の充実

1 人事に関する計画

(1) 方針

ア 職員の計画的、適正な配置を図るとともに、効果的な人事交流を実施する。

イ 次の取組により、事務能率の維持、増進を図る。

- ① 職員に対する実務研修等の充実により、各職員の能力開発、専門性の確保及び意識改革を行い、より効率的な業務運営を図る。
- ② 適切な労務管理の実施

(2) 人員に係る指標

常勤職員について人件費の抑制を図る。

(参考)

中期目標の期間中の人件費見込み 10,006百万円

但し、上記の額は、役員報酬並びに職員基本給、職員諸手当及び超過勤務手当に相当する範囲の費用である。

2 施設及び設備に関する計画

施設・設備の老朽化への対応、劇場利用者の安全確保及び利便性の向上等のため、各劇場等施設について長期的な視野に立った整備計画を策定し、施設・設備に関する計画に沿った整備を推進する。

国立劇場本館が開場以来50年を経過することに鑑み、国立劇場本館における事業の安定的、継続的实施のため、整備の実施計画を策定し、改修工事に着手する。

3 積立金の使途

前期中期目標の期間の最終年度において、独立行政法人通則法第44条の処理を行ってなお積立金があるときは、その額に相当する金額のうち文部科学大臣の承認を受けた金額について、次の必要な費用に充てることとする。

- (1) やむを得ない事由により前期中期目標期間中に完了しなかった業務
- (2) 芸術文化振興基金の運用収入を充てるべき業務
- (3) 次期へ繰り越した経過勘定損益影響額等に係る会計処理
- (4) 自己財源により取得した固定資産の未償却残高相当額に係る会計処理

4 その他振興会の業務の運営に関し必要な事項

- (1) 国立劇場おきなわの管理運営については、沖縄芸能・文化の独自性とその伝統を活かし、地方自治体等地域の協力を得るため、公益財団法人国立劇場おきなわ運営財団に委託して行う。

新国立劇場の管理運営についても、芸術家、芸術団体等の創意、工夫を取り入れるとともに民間等の協力を得るため、公益財団法人新国立劇場運営財団に委託して行う。

なお、委託に当たっては、経費の見直しや自己収入の確保等の方策により収支構造の改善等に計画的に取り組むとともに、契約内容の検証を行い、更に効率化を図る。

(2) 「公共サービス改革基本方針」(平成24年7月20日閣議決定)に基づき、劇場等の管理・運営等業務について、民間競争入札の実施の可否等を引き続き検討する。

《年度計画》

IV 短期借入金の限度額

運営費交付金の受入の遅延が生じた場合、短期借入金の限度額(10億円)の範囲内で借入れを行う。

V その他主務省令で定める業務運営に関する事項

1 人事に関する計画

(1) 職員の計画的、適正な配置を図るとともに、外部機関との人事交流を適切に進め、多様な人材を確保・育成する。

(2) 事務能率の維持、増進を図るため、各種研修を行い、各職員の能力開発、専門性の確保及び意識改革を行うとともに、適切な労務管理を実施する。

ア 待遇研修、国語研修等の内部研修を実施する。

イ 会計・人事・国際関係業務等の外部研修を活用する。

ウ 職員の心身の健康の保持増進を図る。

2 施設・設備に関する計画

(1) 施設・設備の老朽化への対応、劇場利用者の安全確保及び利便性の向上等のため、長期的な視野に立った整備計画を策定し、別紙4のとおり施設・設備に関する計画に沿った整備を推進する。

また、国立劇場本館が開場以来46年以上経過していることに鑑み、国立劇場本館長期整備方針検討委員会における議論を踏まえ、長期的な視野に立った改修工事計画の検討に着手する。

(2) 国立劇場の観劇環境の整備のため、劇場利用者及び外部専門家の意見等を踏まえ、振興会に設置する環境整備委員会等において施設・設備の充実、セキュリティの向上等の検討を行い、可能なものは速やかに実施する。

3 その他振興会の業務の運営に関し必要な事項

国立劇場おきなわの管理運営については、沖縄芸能・文化の独自性とその伝統を活かし、地方自治体等地元との協力を得るため、公益財団法人国立劇場おきなわ運営財団に委託して行う。

また、新国立劇場の管理運営についても、芸術家、芸術団体等の創意、工夫を取り入れるとともに民間等の協力を得るため、公益財団法人新国立劇場運営財団に委託して行う。

なお、委託に当たっては、自己収入の確保等の方策により収支構造の改善等に計画的に取り組むとともに、契約内容の検証を行い、更に効率化を図る。

1. 人事に関する計画

《実績》

1. 職員の計画的・適正な配置、適切な人事交流の実施、多様な人材の確保・育成

・ 25年度は、新規採用の一般事務職員9名、舞台技術職員6名、中途採用の58歳以上を対象(以下「高齢採用」という。)とした一般事務職員8名を採用した。また、26年度は、一般事務職員6名、舞台技術職員2名の新規採用を行うほか、高齢採用の一般事務職員1名の採用を予定している。

・ 国の機関、国立大学法人等との人事交流を実施し、多様な人材の確保によって組織の活性化を図った。

・ 国立劇場おきなわ運営財団及び新国立劇場運営財団の要請により振興会職員を派遣し、国立劇場おきなわ及び新国立劇場における円滑な委託業務の実施に資することができた。

(受入)

国の機関及び国立大学法人から出向者の受入(9人)

新国立劇場運営財団からの出向者の受入(1人)

(派遣)

国の機関への職員の派遣(3人)

国立劇場おきなわ運営財団への職員の派遣(4人)

新国立劇場運営財団への職員の派遣（14人）

2. 研修の実施による職員の能力開発、職員の専門性の確保、適切な労務管理の実施

(1) 職員研修の実施

- ・ 新規採用職員を対象とした観客サービス研修・電話マナー研修や、営業部門の職員を対象とした営業力強化研修を行い、職員の能力を向上させるとともに、顧客サービスの充実を図った。
- ・ 観客と接する機会の多い職員を対象に、クレーム対応研修を実施し、実践的かつ具体的な研修を通じてクレーム対応方法を習得させた。
- ・ 公演業務に関する研修の内容を再編し、採用後2年以内の職員を対象とし、専門的知識の習得と意識の向上を図った。併せて、新たに採用後3年以内の職員を対象とした業務研修を実施することとし、25年度は各部長が講師となり、振興会の業務全体の理解を促した。また、舞台技術部門の若手職員についても、振興会内の技術の継承に努めるとともに、舞台安全、最新技術等についての外部研修を積極的に利用した。
- ・ 若手職員への文書作成研修を実施し、振興会が作成する文書における国語標記の適正化を図った。
- ・ 全職員を対象として、振興会情報セキュリティポリシーに基づき、情報セキュリティの向上を図るため、情報セキュリティ研修を実施した。また、全職員を対象としてパソコン研修を実施し、事務作業に必要な知識、技術の習得を図った。
- ・ 施設整備研修を実施し、施設整備に関し技術的な課題、工事契約等の事務執行についての理解を深めるとともに、東日本大震災における非構造部材の破損、落下等の被害があったことをふまえ、天井脱落防止対策工事についての知識、技術の習得を図った。
- ・ 経理部門所属職員が講師となり、各課の経理業務を担当している職員に対して、予算作成・収入支出業務・契約業務等についての経理関係業務研修を実施し、振興会経理業務の適正化を図った。
- ・ その他、内部研修や外部研修の積極的な導入を行い、業務に必要な専門的知識の習得に努めた。
- ・ 文楽劇場では、特に専門性が求められる文楽技術室に勤務する非常勤も含めた若手職員について、フォローアップ研修を実施し、技術の向上を図った。

(2) 職員の専門性の確保

- ・ 職員の専門性の確保を図るため、20年度より実施している公演研修を25年度もを行い、新規採用職員に対し伝統芸能の公演制作過程の実習を行うとともに観劇レポートの提出を課題とする新人研修を実施した。
- ・ 採用2年次の職員についても能楽や舞踊、邦楽等の公演に関する事前レクチャーと観劇及びレポート作成を義務付け、加えて24年度に引き続き振興会が行う教員免許状更新講習の「伝統芸能にみる日本のこころ」を聴講させた。
- ・ 舞台技術部門の若手職員については、振興会内での教育、技術の継承に加え、外部研修も積極的に利用し、公益財団法人愛知県文化振興事業団他主催の「愛知県舞台技術者セミナー」や公益財団法人せたがや文化財団主催の「舞台技術講座」に参加し、専門性の確保に努めた。
- ・ 広い識見と高度の実務能力並びに語学力の育成を図るため、文部科学省の国際教育交流担当職員長期研修プログラム「LEAP」に参加し、米国の大学等で研修を行った。
- ・ 文楽技術室の衣裳担当においては、23年度に非常勤職員（アルバイト）、24年度に嘱託職員として勤務した者を、25年度から常勤職員として採用し、組織内での技術指導を行った。
- ・ また、文楽技術室のかしら担当及び小道具担当において24年度に非常勤職員（アルバイト）、25年度から嘱託職員として勤務した者に対して、常勤職員採用試験を実施し、2名を合格とした。26年度から常勤職員として、組織内での技術指導を行う。

(3) 適切な労務管理の実施

- ・ 心の健康に関する相談窓口は、引き続き、外部専門業者と密に連携しながら電話・メール・面談等によってプライバシーの保護に配慮し気軽に相談できる環境を整えるとともに、内部ホームページ等により周知を図った。
- ・ 24年度より医務室の医師に委嘱しているメンタルヘルスの専門医と連携し、メンタル不全者の復職支援等にあたった。

【特記事項】

文楽技術室の職員については、技術の継承の観点から継続的な採用と研修が必要であるので、計画的に非常勤職員（アルバイト）の公募を行う。

《自己点検評価》

- 良かった点・特色ある点
 - ・ 外部研修の積極的な導入を図り、業務に必要な専門知識を集中的に学ぶ機会を持った。
 - ・ 国立劇場おきなわとの積極的な人事交流のため、従前から実施している国立劇場おきなわへの舞台技術職員の派遣に加え、一般職員の派遣（調査養成課に配属）を実施することができた。
 - ・ 24年度より委嘱しているメンタルヘルスの専門医と連携し、休職者の復職支援に注力し、円滑な職場復帰を進めることができた。
- 見直し又は改善を要する点
 - ・ 25年度に実施したストレスチェックの結果を参考にして、次年度以降の労務管理を適切に行うとともに、研修内容を検討し、より効果的な研修の実施を図る。

《24年度評価への対応》

【評価】

（文科省評価委員会）

- ・ 人事研修などを活用して職員の専門性を高めるよう、さらなる配慮を求めたい。（①）

（振興会評価委員会）

- ・ 人員削減は、現時点でも限界に近く、非常勤職員や任期付職員の増加が続けば、中・長期的に知識・技術の伝承や職員の年齢構成に問題が発生する恐れがあるため、そうした事態が起こらぬよう十分留意する必要がある。（①）

【対応】

①適切な人事計画の実施・職員の専門性の確保

職員の専門性を高めるため、公演業務に関する研修や振興会内の技術の継承を継続的に実施する。

また、任期付職員採用制度は、専門性の確保、人件費の抑制及び人員配置の適正化の推進のため専門的な知識経験を有する者を、任期を定めて採用する制度として24年度から導入した。職員の専門性の確保に考慮しつつ、その効果を検証し、今後の人員配置を検討する。

2. 施設・設備に関する計画

《実績》

1. 施設整備費補助金による施設・設備の整備等

- ・ 国立劇場等天井落下防止対策補強工事 22,877千円
- ・ 国立劇場等電気設備改修工事 1,406,871千円
- ・ 国立劇場等舞台機構改修工事 173,922千円
- ・ 新国立劇場中央監視設備整備工事 67,725千円

ただし、国立劇場等天井落下防止対策補強工事、国立劇場等電気設備改修工事及び国立劇場等舞台機構改修工事については、事業の一部を翌年度に繰り越す。

2. 運営費交付金による施設・設備の整備等

- ・ 国立劇場大劇場ロビー2・3階便所和式便器改修工事 3,318千円
- ・ 国立劇場本館公演記録録音調整サブ卓 22,050千円
- ・ 国立劇場大劇場舞台機構操作盤改修工事 10,605千円
- ・ 国立劇場小劇場舞台床張替工事 5,556千円
- ・ 国立文楽劇場エントランスホール・図書閲覧室トイレ等改修工事 15,068千円
- ・ 国立劇場おきなわ大劇場床機構インバーター制御装置等更新工事 7,455千円

3. 長期的な視野に立った整備方針の検討

- ・ 大規模改修に関し必要な助言を得るため、劇場等文化施設の運営や伝統芸能に精通した学識経験者からなる「国立劇場等大規模改修懇談会」を設置した。
- ・ 国立劇場等大規模改修の基本構想案を外部有識者の意見等を踏まえて策定し、第34回評議員会（平成26年3月28日開催）において承認を得た。
- ・ 大規模改修の推進のため、26年度より国立劇場等大規模改修推進委員会及び国立劇場等大規模改修推進本部を設置することとした。

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 大劇場便所の和式便器洋式化の計画が完了し、観劇環境の向上が図られた。
- ・ 文楽劇場のエントランスホール等に残っていた和式便器の洋式化及び洗浄便座の設置により、観劇環境の向上を図ることができた。
- ・ 国立劇場等の長期的整備方針の検討については、「国立劇場等大規模改修基本構想」を策定するなど着実に推進が図られた。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・ 大規模改修の実施に向けた26年度の基本計画策定に当たっては、国立劇場等大規模改修基本構想を踏まえ、課題及び要望の具体的な内容を着実に反映する必要がある。

《24年度評価への対応》

【評価】

（振興会評価委員会）

- ・ 施設・設備計画については、国立劇場本館をはじめ各劇場の老朽化が進み不具合等が見られるが、公演等に影響が出ないようにその現状を把握した上で施設整備計画に基づき適切に整備が進められている。ただし、国立劇場本館は、開場以来50年近く経過しており、事業の安定的、継続的实施のため、具体的な整備の実施計画について検討を進める必要がある。（①）

【対応】

①国立劇場本館・演芸場整備計画の具体的な検討

国立劇場本館及び国立演芸場の改修工事については、26年度計画に「国立劇場本館・演芸場の改修について、実施に向けての基本計画を策定し、今後の基本設計及び実施設計の検討の基礎とする。基本計画は、評議員会等における外部有識者の意見を踏まえ、国立劇場等大規模改修推進委員会が中心となり策定を行う。」とし、計画的に実施する予定である。

3. 運営委託（国立劇場おきなわ・新国立劇場）

《実績》

1. 国立劇場おきなわ運営委託（公益財団法人国立劇場おきなわ運営財団）

(1) 委託契約の状況

25年4月1日付けで、25年4月1日から26年3月31日までの組踊等沖縄伝統芸能に係る業務及び劇場の管理運営に関する業務委託契約について617,897,000円を限度として締結した。委託費の確定額は617,897,000円である。

(2) 委託内容

- ① 沖縄伝統芸能等の公演
- ② 組踊（立方・地方）伝承者の養成
- ③ 沖縄伝統芸能に関して調査研究を行い、また資料を収集し、利用に供すること
- ④ 劇場施設を沖縄伝統芸能の振興又は普及を目的とする事業その他のための利用に供すること
- ⑤ 劇場施設の管理運営
- ⑥ 附帯する業務
- ⑦ 開場10周年記念行事の実施

(3) 運営に関する協議及び報告の状況

- ① 業務委託に係る規程の改正等を協議
 - ② 各四半期終了後に受託業務状況報告書を受領
 - ③ 委託期間終了後に受託業務実績報告書を受領
 - ④ 固定資産取得報告書及び不用通知書を受領
- (4) 運営委託の方針・連絡体制の整備等
- ・ 財団の業務内容が振興会の年度計画に従い効率的に実施され、かつ成果が挙がるよう、24年度に引き続き東京における職員の研修を実施した。
 - ・ 運営財団の業務が業務委託契約書に定める事業計画書及び収支計画書に沿った形で実施されていることについて、意見交換や受託業務状況報告書により、検証を行っている。また、財団の理事会、評議員会には常に振興会職員が出席するなど、連絡体制の強化に努めている。

(5) 効率化状況等

① 効率化状況等

- ・ 委託費の状況

(単位：千円)

年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度
金額	665,836	617,157	616,640	610,162	617,897
前年度比	97.7%	92.7%	99.9%	98.9%	101.3%

② 委託先における業務の効率化等

ア 効率化に関する取組

a. 情報システムの活用

財団内のネットワークシステムを活用し、関係者への迅速な連絡、スケジュール管理及び供用施設の予約状況の確認を行うことで、財団全体の情報共有を図り、業務効率を向上させる工夫を行った。

b. 事務手続きの簡素化

決裁書類については承認手続きを必要最小限にとどめるなど、事務手続きの簡素化によって処理速度の向上、業務の効率化に努めた。

c. 外部委託の推進

入札公告などは劇場敷地内に掲示するとともに、ホームページで競争入札参加に必要な公示（資格・競争参加資格有資格者一覧・入札情報を含む入札公告等）を掲載し、引き続き入札機会の拡大を図った。

d. 省エネルギー、リサイクルの推進

ペーパーレス化について、会議資料等の両面コピー及び両面印刷を実施している。

事項	区分	使用量/処理量	対前年度増減
光熱水量	電気使用量	2,355,967kwh	0.8%
	ガス使用量	31,760 m ³	70.1%
	水道使用量	4,908 m ³	△16.9%
廃棄物	一般廃棄物	3,410kg	84.3%
	産業廃棄物	0kg	△100.0%
ペーパーレス化	コピー枚数	836,156枚	27.3%
	用紙購入枚数	662,500枚	△1.9%

イ 情報開示の推進

公益財団法人国立劇場おきなわ運営財団の業務及び財務等に関する情報を開示するため、ホームページにより以下の情報を公開している。

定款、役員名簿、事業報告書、正味財産増減計算書、貸借対照表、財産目録、事業計画書、収支予算書、委託に係る事業概要、組織図、事務分掌

【特記事項】

- ・ 国立劇場おきなわ 10月民俗芸能公演「道の島々から（与論の十五夜踊）」は、台風24号接近のため、計画1回の公演を取り止めた。
- ・ 国立劇場おきなわ 10月普及公演「生徒のための組踊鑑賞教室「万歳敵討」」は、台風27号接近のため、

め、計画4回のうち2回公演を中止した。

《自己点検評価》

- 良かった点・特色ある点
 - ・ 振興会の担当役員及び担当職員が国立劇場おきなわに出向き、国立劇場おきなわ運営財団の理事会・評議員会や自主公演・養成研修等事業の状況を把握するとともに、財団職員が振興会において事業報告等を行うなど、常に振興会と財団の間で意思疎通を図った。
 - ・ また、振興会、県、財団それぞれの間で、人事交流や事業について積極的な意見交換の場が持たれた。前年度に引き続き、県文化観光戦略推進事業を実施するための協力依頼があった。
 - ・ 財団への業務委託において、主たる業務である公演事業、劇場施設の管理運営等と直接的な関係が少ないと思われる光熱水量について、振興会が供給業者と直接契約し、国立劇場おきなわでの光熱水量を管理した。
 - ・ 9月28日に名古屋市の徳川美術館において、第3回県外講演を実施した（入場者142人）。
- 見直し又は改善を要する点
 - ・ 運営委託費が削減される厳しい財政状況の下で、一般競争入札等による節減を図り、より効果的な業務の運営を図る。
 - ・ 例年に比して夏季の湿度が高く、業務の能率や観劇環境を高めるため、冷房作動時間及び範囲を拡大した結果、ガス使用量が大幅に増加した。また、大型装置を使用した史劇の上演で廃材が増え、開場10周年記念事業に関連した業務によりコピー枚数が対前年度増となった。職員への啓発活動や協力要請を行うことで、より一層の省エネルギー、リサイクルの推進を図る。

2. 新国立劇場運営委託（公益財団法人新国立劇場運営財団）

(1) 委託契約の状況

25年4月1日付けで25年4月1日から26年3月31日までの現代舞台芸術の公演等及び劇場の管理運営に関する業務委託契約について、3,778,796,000円を限度として締結した。委託費の確定額は3,778,596,000円である。

(2) 委託内容

- ① 現代舞台芸術の公演
- ② 現代舞台芸術の実演家その他関係者の研修
- ③ 現代舞台芸術に関して調査研究を行い、資料を収集し、利用に供すること
- ④ 劇場施設を現代舞台芸術の振興又は普及を目的とする事業その他のための利用に供すること
- ⑤ 劇場施設の管理運営
- ⑥ 附帯する業務

(3) 運営に関する協議及び報告の状況

- ① 業務委託契約に関する規程の改正を協議
- ② 各四半期終了後に受託業務状況報告書を受領
- ③ 委託期間終了後に受託業務実績報告書を受領
- ④ 固定資産取得報告書及び不用通知書を受領

(4) 運営委託の方針・連絡体制の整備等

運営財団の業務が業務委託契約書に定める事業計画書及び収支計画書に沿った形で実施されていることについて、定期及び随時に行う業務に関する意見交換や受託業務状況報告書により、検証を行っている。また、財団の主要な会議には常に振興会職員が出席するなど、連絡体制の強化に努めている。

(5) 効率化状況等

① 効率化状況等

- ・ 委託費の状況

(単位：千円)

年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度
金額	4,810,055	4,306,857	4,013,428	3,977,840	3,778,596
前年度比	98.6%	89.5%	93.2%	99.1%	95.0%

② 委託先における業務の効率化等

ア 効率化に関する取組

a. 情報システムの活用

- ・ 25年度で使用開始から18年目を迎えた業務支援システムについて、全面刷新を行い、平成25年8月より新システムを稼働させた。新システムの導入により大幅な事務の効率化が実現した。
- ・ 劇場内ネットワーク基盤について、平成25年8月に全面更新を行った。回線スピードのアップや、認証装置の導入による外部機器へのネットワーク開放など、先進的技術を積極的に採用することができた。
- ・ 端末パソコン、周辺機器について、入札により調達を行い、平成25年8月から使用を開始した。入札仕様の決定にあたっては、外部専門家の協力を得、最新機器に関するスペックの研究、市場の調査を行った。また、職員へのアンケート、デモ機を用いた操作感の確認などを行い、職員毎の業務に最適な機器の導入を図った。
- ・ 公式ウェブサイトについて、公募により調達を行い、平成25年7月より段階的にリニューアルを行った。最新のコンテンツ管理機能、スマートフォンなど最新デバイスへの対応、SNSへの対応、脅威防御機能、コンテンツ更新体制の構築等を盛り込み、近年進歩の著しいこの分野に十分対応できる公式ウェブサイトを導入できた。
- ・ グループウェアについて、入札により調達を行い、平成25年6月から8月にかけて段階的に移行を行った。クラウド技術を用いたシステムを採用することにより、劇場外からの接続やタブレット、スマートフォンなどの多彩なデバイスによるメール閲覧が容易に行えるようになった。これにより、スムーズな情報の伝達、共有が期待でき、業務の効率化につながった。また、パンデミックや災害時など、交通が遮断された緊急時でも、職員がメールを確認し、業務を継続できる基盤を整えることができた。
- ・ 新国立劇場内におけるITシステム全体のセキュリティレベルを高めるため、劇場内ネットワーク基盤の調達において、次世代ファイアウォールおよび最新のアンチウイルスシステムを導入した。また、端末パソコンの調達により、端末パソコン全台の入れ替えが完了し、WindowsXPから移行できた。
- ・ 現代舞台芸術情報システムについて、随時、著作権処理の済んだ公演映像を登録し、観客に最新の美しい舞台映像を提供することができた。
- ・ インターネット上の動画公開WebサービスUstreamを利用し、記者会見等各種イベントの中継を行い、内外に財団の活動をアピールすることができた。

b. 事務手続きの簡素化

- ・ 上記最新技術の導入により、事務手続きの簡素化を図った。

c. 随意契約の見直し及び外部委託の推進

外部委託のうち、委託業務15件、物品の製造、販売、工事等8件の合計23件について一般競争入札による契約を行った。このうち5件について総合評価落札方式を行っている。また、すでに過年度に一般競争入札あるいは総合評価落札方式による複数年契約を行った委託業務が22件あるので、外部委託全48件のうち、45件が一般競争入札等による契約を行ったことになる。

d. 省エネルギー、リサイクルの推進

事 項	区 分	使用量/処理量	対前年度増減
光熱水量	電気使用量	6,584,947kwh	2.6%
	ガス使用量	6,093 m ³	27.8%
	水道使用量	13,410 m ³	△7.6%
廃棄物	一般廃棄物	38,796kg	9.3%
	再利用廃棄物	37,449kg	△2.9%
	産業廃棄物	22,156kg	45.1%
ペーパーレス化	コピー枚数	1,349,007 枚	2.9%
	用紙購入枚数	3,100,500 枚	13.0%

なお、光熱水量については、地域冷熱（冷水、蒸気）が大きなウエイトを占めるが、地域冷熱の使用量の節減に努め、基本料金（契約量）の低減につなげている。地球温暖化対策計画においても、省エネルギー対策を目標以上に実施している。

イ 給与水準の適正化等

- ・ 新国立劇場運営財団の職員給与については、振興会職員給与規程に準拠した規程を整備し、適正に執行している。
- ・ 国家公務員の給与見直しに対応する振興会の措置に準じ、平成 24 年 4 月 1 日から平成 26 年 3 月 31 日までの間、臨時特例により役職員の給与を減額して支給する措置を実施している。
- ・ 民間における退職給付の実情に鑑み退職手当の引き下げを行うことを内容とする国家公務員の退職手当制度の改正に対応する振興会の措置に準じて、必要な措置を実施した。

ウ 組織機構の変更

- ・ 営業部について、24 年度に機動的かつ効率的に機能する体制を確立するために大幅な見直しを行い、自主公演の収入計画立案と管理、ボックスオフィス運営管理、緊急時観客対応の検討及び貸し劇場事業運営を担当する公演事業課、様々な団体販売や企画販売を中心とした営業活動を担当する営業課、個々の演目に伴う劇場業務の集約及び観客サービスの立案と実施、会員組織の運営や宣伝活動等を担う観客サービス課の 3 課体制とした。また、劇場支配人業務を部課長と公演事業課担当者で、お客様対応を全営業部員で対応し、情報共有してきた。この 2 年間で十分にその機能を発揮するようになってきている。
- ・ 技術部について、調整課の組織体制を見直し、平成 26 年度からは、技術部全体の庶務、取りまとめを行う調整係に加え、装置・衣裳等のデザインから製作までの進行管理等、舞台の技術面全体を総括する技術総括係を新設し、従来の楽屋係、稽古場係を楽屋・稽古場係に統合することとしている。この 3 係体制とすることで、調整課の調整機能をより充実させ、技術部全体がより有機的に機能することを目指す。
- ・ なお、平成 25 年 12 月に外部の有識者委員 5 名による研修事業委員会を設置した。実演家研修に係る事業計画、事業評価について意見を聴取し、研修事業の一層の充実を図ることとしている。

エ 情報開示の推進

- ・ 公益財団法人新国立劇場運営財団の業務及び財務等に関する情報を開示するため、ホームページにより以下の情報を公開している。
定款、役員名簿、事業報告、収支計算書、正味財産増減計算書、キャッシュ・フロー計算書、貸借対照表、財産目録、事業計画書、収支予算書、目的・事業、組織、調達情報

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ 新国立劇場総合情報システム全体の大規模な更新を行った。前年度からの準備を活かし、無事に新システムを稼働させることができた。
- ・ 調達にあたっては、事業者間の競争を促進し、より高い水準の技術を低コストで得ることを目標とし、従来、IT システム全体の一括調達であったものを、適切に分割し、新規事業者が参入しやすいようにした。これにより、結果として約 20%のコスト削減に成功した。また、調達仕様や契約の作成にあたっては、「情報システムに係る政府調達の基本指針」（平成 19 年度総務省）に準拠し、公正かつ適正コストを実現できた。
- ・ 一般競争入札等の推進により外部委託の効率化が図られた。従来随意契約であった電気の供給を一般競争入札とした。また、従来 1 社入札であったところに新規参入がある調達も増加傾向にあり、入札を継続することの有用性を示せた。引き続き、仕様や公示方法の見直しを行い、競争を活性化させたい。
- ・ 光熱水量については、地域冷熱（冷水、蒸気）が大きなウエイトを占めるが、地域冷熱の使用量の節減に努め、基本料金（契約量）の低減につなげた。25 年度のガスの使用量が前年度に比し増加したのは、楽屋食堂の茹麺機等のエネルギー源を電気からガスへ切り替えたことによるものである。また、産業廃棄物の処理量及び用紙購入枚数が前年度に比し増加したのは、大規模なオペラ公演等が続いたためである。地球温暖化対策計画においては、省エネルギー対策を目標以上に実施できた。

○ 見直し又は改善を要する点

- ・ 今後についても、継続的に業務の効率化ができるよう、IT の利用法について研究していく必要がある。特に、大規模なシステム調達には、長期の検討期間が必要であるため、将来を見据えて、長期的な計画の立案が必要である。
- ・ 開場以来継続して使用している光ファイバー等のインフラについては、老朽化が進んでおり、中長期

的な計画に基づく更新が必要である。

- ・ 一般競争入札等による効率的な外部委託を推進しているが、業務内容の変化への対応など、業務の質を担保した入札とするのは困難な場合もある。これに対応するため、企画提案型の導入など、調達方法の多様化を進めていきたい。
- ・ 省エネルギー、リサイクルの推進については、引き続き職員への啓発活動や協力要請を重ねて行う。

《24年度評価への対応》

【評価】

(文科省評価委員会)

- ・ 運営委託に関しては、継続的に効果的な運営を実施していると判断できるが、委託元として、委託先の業務実施状況の検証をさらに深め、一層の効果・効率的な運営が望まれる。(①)
- ・ 平成24年4月1日から公益財団法人に移行した新国立劇場運営財団及び国立劇場おきなわ運営財団については、公益目的が達成されているか、日本芸術文化振興会としても監視されたい。(①)

【対応】

①一層の効率的な運営・公益性の確保

24年度から公益財団法人へ移行している新国立劇場運営財団及び国立劇場おきなわ運営財団が、引き続き公益性を確保し、より効果的で効率的な運営を行っているか検証するため、理事会・評議員会のほかに定例会議への出席(国立劇場おきなわでは議事報告)、公演や研修事業の視察、固定資産の実査、予算・決算作成段階からの財務諸表のヒアリング等を行った。引き続き業務実施状況の検証を行いたい。